

プリキュアとの奇妙な  
冒険—ようこそヒーリ  
ングっど♥へ！—

アンチマターマイン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

すこやか市の一角に、自業自得の破滅を遂げた少年がいた。

そんな彼が手にした奇妙なDISCは、癒しの戦士プリキュアとの遭遇を引き起こし、彼女らの敵ビョーゲンズとの戦いにあえて

足を踏み入らせていくことになる……

このDISCをバラ撒いているのは何者か？

これは、立ち直る物語。かの少年が、さんざんな迷惑をかけながら泥の中のたうち這い上がっていく物語である。

プリキュアにヤバイ『DISC』がIN！

おおよそ、毎週日曜9：00の投稿を続けようとしています。  
…が、現状難しく、事実上の不定期投稿になると思われます。

\*\*\*\*\* 連絡事項 \*\*\*\*\*

前回の更新からほぼ三週間経過。

早いとは言えないですが、84話、投稿です。

量はそれなりにあるんですが……

もうちよつと短い間隔で投稿したいのが本音。

(2023/5/4 03:00)

\*\*\*\*\*

# 目次

『DISC』が来た | 1

花寺のどかが来た | 9

キュアグレースが来た | 17

沢泉ちゆはいる | 26

過去が顔を出す | 36

脅威を知る | 50

平光ひなたは飛び込む | 66

太陽の導きを！ | 80

集中治療中！F・Fオペレーション | 95

95

黄金の魂を！ | 108

これは首輪か？ | 126

プリキュア・ピュリファイケーション！ |

その1 | 145

プリキュア・ピュリファイケーション！ |

その2 | 162

プリキュア・ピュリファイケーション！ |

その3 | 181

プリキュア・ピュリファイケーション！ |

その4 | 192

プリキュア・ピュリファイケーション！ |

その5 | 203

プリキュア・ピュリファイケーション！ |

その6 | 223

スタンド使い狩り・スタート！ | 242

- 花寺のどかのドリーム・シアター―その  
1 ―― 259  
花寺のどかのドリーム・シアター―その  
2 ―― 272  
花寺のどかのドリーム・シアター―その  
3 ―― 288  
花寺のどかのドリーム・シアター―その  
4 ―― 301  
お願い、スターダストクルセイダース！  
―その1 ―― 313  
お願い、スターダストクルセイダース！  
―その2 ―― 325  
お願い、スターダストクルセイダース！  
ゆめポートに遊びに行こう！―その3  
441
- ―その3 ―― 337  
お願い、スターダストクルセイダース！  
―その4 ―― 351  
お願い、スターダストクルセイダース！  
―その5 ―― 365  
お願い、スターダストクルセイダース！  
―その6 ―― 380  
松葉杖をDIYしよう！ ―― 406  
ゆめポートに遊びに行こう！―その1  
421  
ゆめポートに遊びに行こう！―その2  
406

458	ゆめポートに遊びに行こう！—その4	84	決め手のひと味！おなかいっぱい大作戦
474	ゆめポートに遊びに行こう！—その5	579	—その4
492	ゆめポートに遊びに行こう！—その6	598	決め手のひと味！おなかいっぱい大作戦
506	ゆめポートに遊びに行こう！—その6	617	—その5
		640	決め手のひと味！おなかいっぱい大作戦
		640	—その6
		640	プリキュアたちのいない場所で
		654	—
		654	スカー・ティシユーはここにあり—その1
		668	スカー・ティシユーはここにあり—その2
		684	スカー・ティシユーはここにあり—その3
		534	—その1
		546	決め手のひと味！おなかいっぱい大作戦
		546	—その2
		563	決め手のひと味！おなかいっぱい大作戦
		563	—その3

スカー・ティシユールはここにあり――その	絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で――
4	その1
699	810
スカー・ティシユールはここにあり――その	絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で――
5	その2
715	827
スカー・ティシユールはここにあり――その	絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で――
6	その3
731	839
スカー・ティシユールはここにあり――その	絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で――
7	その4
745	856
スカー・ティシユールはここにあり――その	絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で――
8	その5
757	872
スカー・ティシユールはここにあり――その	絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で――
9	その6
777	886
王と王	絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で――
793	

その7 | 901  
絶対にバレルな！イップスの後ろ側で  
その8 | 919  
ちゆのお手当て・傷口消毒 | 941  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その1 | 954  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その2 | 970  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その3 | 987  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その4 | 1000  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！

—その5 | 1015  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その6 | 1029  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その7 | 1045  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その8 | 1060  
緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！  
—その9 | 1076  
トンデモないことに気づいちゃったよ！  
枯れることなきブラッド・フラワー—そ  
の1 | 1109



枯れることなきブラッド・フラワー——	その2	1124
枯れることなきブラッド・フラワー——	の3	1139
枯れることなきブラッド・フラワー——	の4	1154
枯れることなきブラッド・フラワー——	の5	1170
枯れることなきブラッド・フラワー——	の6	1185
枯れることなきブラッド・フラワー——	の7	1201
枯れることなきブラッド・フラワー——	の8	1224
枯れることなきブラッド・フラワー——	の9	1263
ごめんよ。ペギタン		1293
目覚めて、黄金の風！ジヨルノの見る夢	その1	1323
目覚めて、黄金の風！ジヨルノの見る夢	その2	1343
目覚めて、黄金の風！ジヨルノの見る夢	その3	1358



# 『DISC』が来た

公園にいたのは、まあ、いつも通りだった。

休日なんかになつたところで、やることなんかとくにない。

ひなたぼっこくらいしか楽しみがない、ほとんど老人の生活を

今日もまた続けていただけなんだ。

ただ、気になることといったら、昨日、突然部屋に落ちていた『DISC』。

それを太陽光に照らして考え込んでいただけだった。

そこに突然、意味のわからない怪物が現れるなんて、誰が考える？

中二病乙、とかいう言い回しがあつたけれど、あいにく俺には無関係だと思う。

むしろ、このとき働いていたのは正常性バイアスつてやつで。

闇の塊に『モヤ』みたいな光を浮かべた、たぶん特撮だと思われる巨体は、

結局のところダンパーみみたいな重さがあるらしく……

俺は、いとも簡単にフツ飛ばされた。空き缶みたいに！

何メートルか転がされてから、やがて樹に頬をぶつけて止まる。

しびれた頭で無意識に探した松葉杖は、片方は遠く転がり、

やがてもう片方が近所で折れ曲がっているのを見つけてることになった。

：忘れていた。自己紹介しとこう。俺は鳴滝魁（なるたき かい）。中学二年生。画数が多くて、小さい頃から大層難儀させられた。

とりあえず、両足がうまく動かない。

今蹴とばされてこうなったのではない。およそ七か月前からだ。

松葉杖二本あれば日常生活はなんとか可能だが、たつた今、台無しにされたい。首だけを起こして怪物を見る。目が合った。何か『溜めている』。

次の瞬間、衝撃を受けた。何かされたようだ。

意識が途切れるのを感じ：それでも持っていた『DISC』が、頭に刺さった。途切れた意識の中を、スゴイ映像と音の奔流が駆け巡っていった。

——『知性』という力——

——ブタの逆——

——左足のヘンな指——

懲罰房棟

DISC

ホワイトスネイク

『思い出』

『さよなら』

「…あ、目、覚めました？」

夕方の空を背景に、垢ぬけない女の子がいた。

あずき色めいたボブカットに、見覚えはとくにない。

どうやらベンチに寝かされているようだ。

まず聞くべきは。

「スンマセン、何時ツスカ…今」

「えっ、ちよつと待つて。うっ…五時半！　うわッ、着信だらけ！」

わたわたと慌てだす女の子。俺はというと、もう遅い。

今から急いでもタイムセールには到底間に合うまい。

そして、状況証拠的に、この子はわざわざじつと看ていてくれたようだ。

だから、ついでに聞く。

「あの、見ました？　バケモノ」

「あー、それなら」

「のどかー、プリキュアは内緒ラビー！」

「…あ、あ、あ、見てないですう、見てな〜い！」

…ん？

変な声が聞こえたが。幻聴か。

妙に焦っているこの子は一体。

女の子は、ごまかすように脇に置いていたものを差し出してきた。

「それより、これ」

「あ、松葉杖」

「片っぽは曲がっちゃってたんで、出来るだけ戻してみました。」

その…不自由、なんですか？ 足…」

「ちよつとばかり」

受け取って、立ち上がる。

今や自由になるのは腰から上だけだ。

足は、かろうじて曲がるので松葉杖があればなんとか歩行が成立する。

まだ運がいいケースだろう。おそらく俺には生ぬるい。

「最近、引つ越してきた人ですかね。あなた」

「えっ？ わかるんですか？」

「やっぱりか」

家に帰ろう。もはや、作り置きの手定はツブレたが…

考え込むべきことが、現在進行形で脳ミソに溢れている。

止まらなくて頭痛がするくらいだ。

「ありがとうございます。お礼に、ひとつだけ」

「いえ、そんなあ。わたし、役に立ちたくて」

「俺のことは今後放っておけ」

「え…」

固まった女の子を置いて立ち去る。可能な限り足早に。

幸い、とくに追ってくることもなく。

俺は無事、今の我が家たるワンルームに帰り着くことができた。

パイプ机と、パイプ椅子と、冷蔵庫と、布団と、ゴミ。以上。

あと、申し訳程度にクローゼットがあつて。

『DISC』はここに拾つた。

昨日の夜、ベルトでちよつと首を吊つてみて、失敗したらそこにあつた。

うまくやれば頸椎の破壊で即死できるらしいが、そうはいかず。

それでも意識がブラックアウトしていったから、それはそれで『やれる』はずだったんだが。

地面に落つちちて即座に意識が戻つて、ベルトを見たらチョン切れていて。

そして、そこに『DISC』があつた。

奇妙なのは、ベルトの切れ目はハサミで切つたようにキレイだったこと。

首吊りして、何がどうなつたらこうなるんだ？

失敗した俺は『DISC』を持って丸一日中首をかしげて：今、もつと首をヒネツている。

頭の中に入り込んでしまったらしい『DISC』から脳内に飛び出してくるのは、

どこかの誰かの強烈な記憶だ。名前は『フー・ファイターズ』。



刑務所で生まれたプランクトンは女囚と戦い、救われ、守り、そして天に昇った。お涙頂戴といえればそれまでだが、なにしろ密度が濃い。

感情をそのまま追体験させられるのはちよつとした暴力だった。

さて。そして。こんなものを持って、どうする？

『記憶』にある通り、頭から『DISC』を引つ張り出して考える。

おそらく、これは『記憶のDISC』だろう。が。

こんな腐つた男にこれを見せて、どこかの誰かは何を期待してるんだ？

更生させたいのか？ だとして、したところで『彼』は大して喜ばないと思うが。

ともあれ、こいつが邪魔をしたらしいのは確かだ。

いっそ、フリスビーみたいに投げ捨ててやっつてからリトライするか。

しかし、あのバケモノは何か。『DISC』によると、ああいった超常現象は

『スタンド能力』というらしく、『スタンドDISC』を頭にはめると使用可能。

そこにきて、バケモノについて聞かれて焦るあの女の子。

…驚いた。無差別攻撃か？ 善人ぶつたサイコ野郎だったのか。

いや。少し違う気がする…『続きは無意味』と思つたが…

(確認するのは、悪くない、か…)

あんな巨大な何かは、ひどく使いにくい『スタンド』だ。

『スタンド使い』ではない俺に視認されている以上、隠す方法なんか皆無に等しい。またどこかで使われるなら、確実に不自然な何かが起こる。顔は覚えている。放課後に探してみるのもいいだろう……。それに。

——これがあたしなの……

——さよならを言うあたしなのよ

所詮、追体験させられただけで他人事の俺にはわからない。

わからないが、あの満ち足りた『死』……

俺は、あれが……欲しくなった』

そしてそれは、今ここで死んでも手に入らない。

久しく無かった目的が生まれた。

俺は、理想の『死』を探す。

## 花寺のどかが来た

「あっ…」

すこやかか中学で、早々に再開するとは思わなかった。

あの女の子と、正面からばったり遭遇し…

「あ、あのっ」

そのまま通り過ぎて反対側に抜けた。

名札は見た。花寺のどか。クラスは隣。それだけわかれば充分。

「どったの、のどかつち」

「ちよつと、ね」

「あー、アイツ？ 関わんのは…ウーン、あんまオススメしない」

何か言ってるのがあるが、気にする必要もない。

遅かれ早かれ、わかること。

単刀直入に言うのと、俺はいじめの主犯だ。

小三から中一まで、ある特定の男をサンドバッグ替わりにし続け。

しまいには逆襲を受けてこのざまになったくだらない男。

自慢じゃあないが：足が速くて全国クラスだった。

走ればみんなが喝采を上げた。みんなが俺をチャホヤした。が、それも今や崩れ去った砂の城だ。

俺の腰に突き立てられた『果物ナイフ』は脊髄を破壊し、二度と走れない。

スポーツ特待生から誰もが蒸し返したくない恥部になった。

明るみに出た『巨悪』はたくさんの『正義』を呼んできて、

今度サンドバッグになったのは俺だった。

以前まで俺の取り巻きだった連中が、

こぞつてピンとかバットを振り上げては下ろした。

される側になって、自分のやってきたことがようやくわかった。もう遅い。

世の中には、ごめんなさいで済むことと済まないことがあって、

穢れ（けがれ）は永久に落ちない。

そして悪名は、ここ、すこやか中学にも響き渡っていたわけだ。

なので、俺に近づく者は誰もいない。いる方がおかしい。

ともあれ、こんな終わった男の話はどうでもいい。

今の興味は、あの『スタンド』の正体とその真相だけだ。

あの場の記憶からだけで判断するなら、

『花寺のどか』は少なくとも無関係ではない。

仮に本体だとして、無差別暴力が目的だとするなら…

サイコ野郎を道連れに、有意義に死ぬ方法を本格的に検討するまで。

サイコ野郎は俺だつて？ 違う。

まあ確認からだ。『そうだ』と思って見るのはやめる。

頭にDISCをはめ込み、始業式中にリピートを繰り返すこと半日。

彼女が剣道部に向かうところを遠目で見ると。

少なくとも今しばらくは目撃者が多すぎる状態が続く。

ひとりきりになる瞬間があるとすれば、やはり放課後か。

「アンタ、何の用？」

何か言ってたのが、視界に割り込みした。

そういえば女は視線に敏感とか、逆襲事件前の女友達が言っていた。

「別に何の用もない」

「なら帰れ！」

ピシッと両手で指差してアッチ行けする何か言ってたの。

どのみち、しばらくは解散しないだろう。

校門あたりでの張り込みを決め込もうとすると…

「しゃーしゃーしゃーッ」

猫だ。茶トラの猫が現れた。威嚇している！

周りに人間がいくらでもいるのに、俺だけを威嚇する。

不自然だ。ここはひとつ、裏手から再度体育館付近に…

「ふかーしゃーしゃーッ!!」

また現れた。先回りされていた。

『当たり前』だ…こいつは明らかに『花寺のどか』を守っている。

何かがあるのはほぼ100%確定だ。俺はそれを暴きたい。

だが、スタンドだとすれば、スタンドは一人一能力。

あの近距離。パワー型的な巨大ビジョンで、その能力が『動物を操る』？

ありえなくはない。が、どうにも噛み合わない感は否めない。

あれこれ考えているうちに、遠くから何か聞こえる声。

これは…昨日の幻聴か！ その方角を見ると、何か飛んでいく。

ウサギのように見えたそれと、もうひとつは…妙に胴が長い鳥。

鳥はともかく、ウサギはおかしい。

そしてあの離れ方。学校に本体がいるなら、自動操縦型か集団型…

とにかく、遠隔操作型に属する何かだ。

だが、DISCの記憶の主、フリー・ファイターズは変則的な集団型。いや、『一人歩き』型だった。あれらがそうでないとは何故言える？

ともかく、飛び立った元に何かがいるのは確か。

走って：走れないので『急いで』だが：そちらに向かおうとすると。

そう遠くない位置に、昨日の『何か』が現れた。あれは校庭か？

暴れているようで、破壊音がする。昨日と同じくだ。

目的が、むしろ自分から近づいてきてくれるとは！

逃げてくる生徒の合間を遡って、ほどなく校庭に到着。

ここまで来れば全体がよく見える。

昨日の『何か』と俺は言った。しかし姿形がだいぶ違うことに今気づく。

昨日のも植物がモチーフらしかったが、今日のは樹木がモチーフらしい。

闇の塊じみた体に『もや』のような光が行ったり来たりしているのは同じ。

同じ『種族』：そう言った方がしっくりくるようだ！

ということとは、あれは：スタンド能力の副産物か。

フリー・ファイターズも複数の分身を同時に作って動かしていた。

それと同じだと見た。

となると、副産物である以上、母体がどこかにいて、しかもあれほどのパワー。

自動操縦型でなければ、すぐ近くにいますぞ！ 本体がッ！  
そして、見つけるのはすぐだった。

少し離れた位置で、立って見ている少年がいた。

血色が異様に悪く、サソリのような尻尾を引きずった少年が。

明らかに、自分の安全を確信している振る舞いだ。

あの『何か』に自分が攻撃されると、カケラも思っちゃあいない。

その少年と、一瞬だけ目が合い：向こうはとくに気に留めなかった。

視線をそらして、退屈そうに空を見上げていただけだ。

「おい！ 『これ』はお前か？」

「……だったら、何？」

「そうか、『お前』か」

会話ができる距離：ヤツから半径10メートルくらいまで近づいたが、

そのやりとりもすぐに終わった。知りたいことは、それだけだ。

『これ』で人を害する犯人がわかった。そして今、現行犯だ。

いずれ人が死ぬだろう。いや、もう知らないところで死んでいるかも。

あとはヤツにもっと近づくだけ。

近づいて：このコブシ大のアルミと酸化鉄の塊に着火して、



顔面に押し付けてやるだけ。

『テルミット爆弾』

元々は跡形もなく消えて自殺するために自作していたブツだったが、

人知を超えた能力を持つ敵を倒すには、これくらいは持たねばと思った。

着火装置は昨晚組み込んだ。爆弾の背のボタンを押したら二秒後だ。

少なくとも摂氏2000℃！これに耐えられるのか？地球上の生物が！

そろそろと近づく。ヤツは俺に何の注意も払っていない。

そのスマシたツラにぶち込んでやるぞ『2000℃』を！

「ン……？」

しかし、そこでヤツは見た。あさつての方角を。つられてオレも見た。

ヘンな奴がいた。剣道の防具を着込んだ奴が、こつちにノロノロとやってくる。

どうやら全力で走っているらしい。

今の着火は断念するしかない。

今やったら閃光がアイツを巻き込み失明させる可能性がある。

無関係のまつとうな人間を巻き込む気はないんだ、俺は。

…向こうも俺に気が付いた。そして聞き覚えのある声だった。

「危ないから下がってください！ えつと…鳴滝くん！」

「その言葉そっくりそのまま返す！

後ろ向いて帰れ！」

## キュアグレースが来た

「危ないから下がってください！えつと…鳴滝くん！」

「その言葉そっくりそのまま返す！後ろ向いて帰れ！」

花寺のどか。今回に限って言えば明らかに無関係な彼女が何故ここに？

そしてあの格好、まさか戦う気か？

ということとは、『スタンド使いではある』？

「帰らないよ。戦う！」

だとすれば、『あれ』はむしろ彼女の敵で、俺は横から首を突っ込んだだけ。

『記憶』にある『空条徐倫』のように敵スタンドと戦っているというのなら、

俺はただ邪魔なだけ。

様子を見ざるをえない…俺はただの人間…

「こつちに来い…この…オバケツ！」

敵をおびき寄せる声にも、何やら言葉を慎重に選んでいる気配がある。

あまり知られたくないんだろうな…

果たしてオバケは走り出した。目障りな小物をプチつぶすため。

そこに彼女は、言った端から逃げ始め：逃げた先で何かロープを引っ張った。すぐにわかった。テニスのネットだ。部活で使っていたのがほとんどそのままだったらしい。

なるほど、オバケは足元を引っ掛け、思い切り出鼻をくじかれた。だが。「そんなものでどうにかなると思ってるの」

本体の少年がツマラなさそーにつぶやいたのはまったくその通りだった。

四秒程度で押し負けた彼女は反動で宙に放り出され、木の枝の中に突っ込んだ。そのまま地面に転げ落ちる。剣道の防具を着ていてよかったな。

着ていなければ、かなり悲惨なことになっただろう。

だが：どうやら彼女は、単なる無力な一般人だ。これで終わりだというのなら。

このままでは、マヌケな彼女は殺される。どうやら俺が行くしかない。

松葉杖の一步を踏み出すなり、少年が俺の動きを見とがめた。

「さつきから：何？そろそろ、邪魔」

敵スタンドが舞い戻ってきた。あの巨体で俊敏。

歩くにも事欠く俺は結局、少年にまで到達する手段がなかった。

三步進んだところで蹴転がされ、踏まれた。

襲ってきたのは強烈な重さと、致命的な何かを失ったような具体性のない感覚だっ

た。

これはあの時と同じだ。脊椎にナイフを突き立てられた、最初の瞬間と！  
胸から下が踏まれている：呼吸もできない。

だが、それですら最悪じゃあない。

だって、逆方向にねじれた俺の左手が：今、感覚のない俺の左手が：

踏まれた瞬間、確かに押し込んだ。爆弾のボタンを！

爆弾は俺の顔の真正面に落ちた。これをどうにかする方法は俺にはない。

そしてスタンドはスタンドでしか倒せない。

こいつが爆発したところで、俺を踏んづけている敵スタンドは毛ほどの影響も受けないだろう。

実体化型のスタンドだとしても、この巨体が相手では、せいぜい片足をふっ飛ばす程度。

どうやらこいつらは、代わりが効きそうな雰囲気だよな：二日で二体出ているし。

本体の少年は校舎の上に飛んで、すでに移動している。

つまりだ。

100%の犬死にだよ俺は。

「い、いや、だ…」

輝くような『死』を見たんだ。

消えていく自分が満足と共にあったんだ。

あんなものを見せられて、こんなぶざまな最期が自分だなんて嫌だ。

いや、お似合いか。かくして悪は滅びるんだ。

これが『罰』だというのなら、正しいお話しやあないか…

「……死にたく、ない」

閃光が視界を包んだ。

思ったより、どうってことはなかった。

身体から重さが消えた。どうやら、これは…ああ、終わったのか。

目を開けてみたら、青空の中に天使がいた。

「鳴滝くん、大丈夫？ううん、大丈夫なはずが…それ、何？」

語りかける天使の言葉に従って、自分の体を見る…

「な……なんじゃあこりゃあ!？」

両手と両足からタイヤが飛び出している。

いや、それだけじゃあない。よく見たら、視野がおかしい。

気が付いた。Googleをしている。いつの間に？

そもそもがおかしい。なんで俺は首を動かしている？

今さっき、あんな目にあつたのに？

「どこから出てるのそれ？どうやって？そ、それより、さっきの爆発！

爆発の前になんかガリガリ言いだして、そこから鳴滝くんが滑って、その…」

天使様は絶賛混乱中だった。それがかえって俺を冷静にした。

改めてよく見る。タイヤは、俺の…

「体内から飛び出しているツ！それも、傷から…これは、『血』だ」

認識した途端に見えた。感じた。

俺の血の中にびっしりと『いる』！

「わかつたぞ、あのD I S Cは記憶D I S Cなんかじゃあない。

スタンドD I S Cだ。そもそもF・Fに記憶D I S Cなんか、あるはずがない。

「プラントトンから変質した『一人歩き』スタンドだからだ」

「な、なな、何の話？」

「俺にもわからない。ただ少なくとも…どうも俺は、戦えるみたいだな…」

バキ折れた全身の骨は、フー・ファイターズがたつた今補った。

元通りの位置に移動した上で、可能な限り固く固まった。

神経が切れたり、幸いしなかったらしい。

足は…やはり動かないままか。ずいぶん時間が経った後だから仕方ない。

まずはタイヤとゴーグルを引っ込める。また体内の血に溶けて戻るだけ。簡単だ。そして校舎の上にいる本体の少年に、俺はサツと指を向けた。

指の先端が少し裂け、そこから血が出る。痛え。

その血は指を覆って、ピストルの銃口に変わった。『記憶』にあるF・Fの得意技だ。弾丸が飛び出す。三発。一発だとまず当たらない確信があった。

「うぐツ…」

一発命中。少年はわずかに苦痛の声を漏らしてのけぞった。

まさか向けた指が銃口に変わるなんて、誰も思うまい。

だがしくじった。即死が狙いだったのに。

威力は本物の銃と遜色ないようだ。外れた一発が校舎の外壁を深くえぐっている。

「えっ、え、ええええくくくツ!?」

「一体、何なんラビーツ!」

「こんなの聞いたコトないペエ」

「心の肉球にはキュンと来ねー、プリキュアじゃあねー!じゃあ何だよコレ!」

天使様の周りが騒がしくなった。

見ると、さっきの茶トラ猫。それと胴の長い鳥…というか、ペンギン。

どいつもこいつも人語を話し、加えて天使様のステッキからは、ウサギが顔を出して



いる。

ああ、やつぱりか。もう全部が明らかだ。

「身にまとうタイプスタンド…そういうのも、あるのか…」

そのスタンドで、あれと戦っていたんだな？花寺のどか」

「スタ…何？これはプリ…」

「のどか、プリキュアの話は内緒…アツ！グレース！プリキュアの」

「もう遅えーっ！カンペキバレちまってんじやあねえーか！

こっとなつたら巻き込まれようぜ！それしかねえ！」

「テアティーヌ様、ごめんなさいペエ」

花寺のどかと愉快などうぶつ達が盛り上がっているうちに、少年の方が先に動いた。

「ただの人間がこんな力を…いったん帰ろ。やれ、メガビョーゲン」

霞のようにかき消えた少年の最後の指示に従って、

敵スタンド…メガビョーゲンとやらが動き出した。

どうもテルミット爆弾は何の効果もなかったらしい。五体満足で飛んできた。

俺は構えたままの銃口をそちらに向け、続けざまに五発撃った。

突進は止まらない。さらに六発、七発、十一発。

結論を言おう。無意味だ！

「デカすぎる……足止めにもなりやあしない。どうする？どうやって倒す？」  
「まかせて。そのために、わたしは来たんだよ」

言うか早いのか、花寺のどかは直角30度くらいで飛び出した。砲弾みたいなスピードとパワーで。

そしてその勢い威力そっくりそのままの蹴りが、メガビョーゲンの顔面にめり込んだ。

転倒する。もちろんメガビョーゲンが、だ。

「グレース、今ラビー！」

「うん、キュアスキャン！」

彼女らが何をしているのか、俺にはわからない。

わからないが……次の行動でこう受け取った。あれは弱点のサーチだ。

「プリキュア・ヒーリングフラワー！」

ステッキから放たれた螺旋のような光が復帰できないメガビョーゲンを貫き、風穴を開けた。

恍惚とした表情を浮かべて消滅していくメガビョーゲン。

……これは本当にスタンド能力か？

スタンドの常識に照らしたとして、こいつは一人でいくつ能力を持つてるんだ？

なんかおかしい。話をじっくり聞かせてもらおうしかないだろう…

「あ……う」

危機が去った途端、気が遠くなっていく。

考えてみりや当然じゃあないか。俺は指から何を撃った？

どうしようもない。そのまま意識は闇に吞まれた。

## 沢泉ちゆはいる

わたしは花寺のどか。中学二年生。

今日からこの、すこやかか中学の生徒になります。

それだけのはずだったんだけど、それは昨日からだいぶ変わっちゃったみたい。

ラビリンたちと出会って、ビョーゲنزを知って、プリキュアになって。

まるでマンガか何かなんだけど、もっとおかしなことが増えた。

昨日助けた男の人：隣のクラスの鳴滝くんが、メガビョーゲンと戦った。

プリキュアでもないのに！

それだけなら、さつきまでのわたしと同じといえば同じ、なんだけど：

ひとつ。なんかモノスゴイ爆発を起こした。近くの窓ガラスが全部割れてた！

ふたつ。手足から車輪が生えて走った。確かに見ちゃった。『身体の中』から生えてるのを。

みつつ。指先が銃に変わった。よくわからないけど、威力も本物みたい。

よつつ。プリキュアじゃない。わたしとかラビリンたちとは関係ない。

じゃあ…いったい、何？

ひなたちゃんから聞いた、鳴滝くんの悪い噂もあって…正直、ちょっと怖くなってる。なんでも、転校してくる前はヒドいイジメツ子で、

足が動かなくなっただのも、いじめていた相手からの反撃が原因だって。

そこまでの反撃を受けてもおかしくないことを、この人はやってきたらしい。でも、だからといって。

「放っておけないよね…ここで放り出すなんて『ない』」

「のどか、無茶だペエ。重すぎるペエ」

気絶してる、自力では動けない人を放り出すなんて、イヤ。

こんなことなら、変身解くんじゃなかったー、とは思わなくもないんだけど…

ともかくわたしは、彼を担いで必死でズリズリ保健室を目指していた。

彼には不幸でしかないけど、松葉杖はもうない。

メガビョーゲンに踏まれてバラバラ。直すのは無理。

まともな形で残っていれば、昨日と同じようにあの場で介抱していれば良かったのかもしれない。

…そんなことないよね。今回は気絶した理由がわからないんだから。

どこか安全なところで寝かせてあげないと。

転校してきたばかりで、保健室の場所わかんないけど…あ、そうか。

「ペギタン、保健室を探してきて。場所わかんないから」

「いいけど、もう無理だペエ。いったん下ろすペエ」

「賛成だな。このままじゃ、のどかが先にブツ倒れちゃう」

「…そう、かな」

昨日、メガビョーゲンのところから逃げ出してきた親子のやりとりを思い出した。

まずは自分が助からなくちゃ、って。

それに、ちゅちゃんが言っていた。わたしはまだ、自分の出来る範囲をわかってないんだ、って。

ここでわたしが倒れたら、二重遭難みたいになっちゃう。

どこでもいいから、近くの教室まで行って椅子とか机の上に彼を下ろす。

今はそれだけを考えることにした。

…そこにいきなり聞こえる声！

「花寺さん、何をやっているの！」

人一人をたつた一人で担ぐなんて、私でもつらいわ」

噂をすれば影、っていうのかな。ちゅちゃんが半分無理やり肩を貸してきてくれた。助かった。足がガクガクするのをちよつと自覚し始めてたから。

「保健室よね。案内するわ」

「あ、ありがとう。ちゆちゃん」

今は二人がかり。これならちよつとくらい遠くても保健室までは行ける。正直に言つて、日が暮れるのを覚悟してた。

…ん？ あれ？

保健室に向かうつて、なんで知ってるの？

別に、この状況なら向かう先はひとつ、つてだけかも知れないんだけど。

「しゃべる猫さんにペンギンさん。それに『彼』。

聞きたいことは色々あるけど、全部、後ね」

「えー、え、え、気のせいじゃあないかなあ〜」

「ごまかしても無駄よ。校庭から引きずってくるのを見て、追つてきたの。

話もほとんど聞こえているわ」

「あう…あう」

…やつてしまった。完全に見られていたみたい。

ペギタンとニヤトランが真っ青になつてる。

ラビリンはいない。ラテを連れて先に帰つてもらつたから。

考えてみたら、何かあつても変身できないね、これ。次からやめよう。

それは置いとくけど…どうしよう〜〜ツ

保健室には、わりとすぐに着いた。考え事だらけだったせいだと思う。ペギタンとニヤトランは、観念したみたいに大人しくついてきてた。

中には誰もいない。

「先生も避難してるのかな…」

「私も陸上部のみんなに声をかけ次第、避難するつもりだったわ。

窓ガラスも割れちゃってるし、明日は休校かもしれないわね」

寝台の上に彼を下ろして、ようやく一息ついた。

後は、診察なんてやりようもないから、目を覚ますのを待つてるだけになるけど。

…熱くらいは、測っておこうかなあ

彼の額に手を置いてみる。とくに熱があるようには思わないけど、こんないい加減な

方法じゃあ…

ズギュン

…異変に気付いた。

額に何か手ごたえがある。手ごたえに軽く押し込むと、何か飛び出した。

…どうして。頭の中からCDが？



今までの中で一番、理解不能な怪現象が起こってる。

音楽プレーヤーとか、パソコンに入れるみたいなCDが、人間の頭から飛び出してきた。

とつさに手にとっちゃったけど、一体、これは何？

わからないけど、これが彼の頭の中から出てきたのなら。

これは、彼にとつての『ヒーリング・ステッキ』なのかもしれない…

もしかしたら、それどころじゃあないのかも…そつとしておこう…

注意深く元通りにCDを入れなおす。ウン、これでよし！

「彼のことは…知ってるの？花寺さん」

「えっ、う、うん…ひなたちゃんから、少し」

頭からCDが出るなんて知らなかったけど！

うん、かなりショック受けてる、わたし。

「少し、ね…私からも話した方が良さそうね」

「それって、どういう」

「彼は学校で『浮いている』わ。そして、そうなっても仕方ないと、私も思う。

関わるにしても、『わかって』関わった方がいいのよ」

本人の前だけ、いいのかな…気絶してるけどね。

でも、聞いているとわかってきた。ちゆちゃんは、当事者になりかけたんだ。

「あれは去年の県中学総体…私自身は出てないけど、応援に行ったのよね…」

そこに彼がいたわ。全国レベルのスプリンターだった頃の彼が、ね」

「彼は『速さ』で尊敬されて、大勢の人に囲まれてはいたけど。

性格にだいたい問題があるのは噂になって…先輩はこう言ったわね。『品性下劣』」

「それで、私の何を気に入ったのかは知らないけど。

大会が終わって帰る直前に、言い寄られた…『ナンパされた』ってことね。

『おれ達と遊ぼうぜ、料金は全部こっち持ちだ』…周りを取り囲んで言ってくるのよ。

怖いのは、その中に女の子も混じってたってこと。

まともな『友達』の関係じゃあ、絶対になかった」

「その場は先輩だとか先生が割って入ってくれて、無事に逃げられた。

後から知ったけど、彼の家は地元の古くからの名士で、いくつも工場とか会社を持っているの。

足の速さ以前に、家の権力からして逆らえる人間が少ないみたい。

それをいいことに、かなり好き勝手やってみたよね」

「その証拠じゃあないけど、大会の一月後、彼は刺された。

私を取り囲んでいた、取り巻きの一人に…

彼の家は犯人を訴えようとしたけど、

逆に、彼が犯人をいじめていた証拠がたくさん明るみに出た。

結局、示談で不起訴。お互いに許しましょう、が決着になったわ」

「なんで私がそんなことを知っているか、と言うとね…調べたのよ。」

三学期になって、彼がすこやかか中学に転校してきたから。

何をするかわからない奴だもの。

友達を傷つけさせるわけにはいかない…しばらく監視してたの」

「……それで。ついに今日まで何もしなかった。」

誰にも話しかけないし、誰も話しかけない。ただ『孤立』よ」

ちゆちゃんは、いい加減なことを言う子じゃない。

だから、これは本当だ。

そして、本当だというなら…彼は、『女の子の敵』だ。

多分、許せないことをたくさんやっている。

…助けられない方が良かったの？

メガビョーゲンに潰されてた方が正解だった？

違う。それとこれとは話が別だよ！

ただ：もう、今までみたいに見るのは、できない。

ひなたちゃんのあいまいな言い方のわけがわかった。

今、とくに悪い人に見えなくても、過去の経緯が悪すぎる。

そういえば、鳴滝くん自身が言ってたっけ。

俺の事は今後放っておけ、って。

「疲れたでしょう？ 今日帰った方がいいわ。

ここは私が引き受けておくから」

「……ううん、待つ。始めたのは私だから。

それに、話の通りだったら、なおさらちゅちゃんを一人にできないよ」

「そう。ありがとう。」

じゃあ、せつかくだもの。猫さんとペンギンさんを紹介してくれる？」

「うぐつ…：そ、それは二人きりの時に！」

ただ。

わかっている。彼と関わらないのは無理だって。

プリキュアじゃない謎の力の正体。

これだけはわかっておかないと、多分まずい。

それに万が一、彼が敵になったら。

ああいう力を持った人がたくさん敵に回るかもしれない。

ビョーゲンズだけでも手一杯なのに、さらにもっと敵を増やす。ありえない。

ちゆちゃんとおしゃべりしながら、わたしは熱が出そうなくらい色々考え込んでいた。

彼が目を覚めたのは、そのちよつと後のことだった。

## 過去が顔を出す

読者諸氏には少しだけ付き合っていたらどう。

鳴滝魁。この男の過去を語る。

あらかじめ言う。少なくとも今現在において、この男は血統書つきのクズだ！

すこやか市から電車で乗り換え三つ。

この近辺では人口集中地区にあたる大都市の、地元の名士の家に彼は生まれた。

生まれた時点ですでに父は57歳、母は36歳。二人の兄は15と12。

母が生みたかったのは娘だったが、そこへ期待外れにも生まれてきたのが魁だった。

父としては、後継ぎと予備に充分な子供はすでにおり、

そもそもこれ以上必要とは考えていなかった。

つまり、『女の子ではなかった』その時点ですでに彼はどうでもいい存在に成り下がっ

てしまい、

父は彼に関心を持つことなく兄二人の教育に集中。母は……彼を露骨に邪魔者とし

て扱った。

そして、兄二人にとってもまた、

彼は日常生活のうっぶんを晴らす最適なオモチヤとなつていった。

七歳にして生存の危機を自覚した魁は、なんとかして父の関心を自分に向けさせようとして

勉強を頑張り、満点のテストをたくさん作つた。

だが兄二人は飛び級レベルの秀才！

そうなるように厳正に育てた父と母には、低学年のテストなど無意味。

絶望の中、考えることをやめかかったある日。

…その日、彼は次兄をひどく怒らせていた。理由はとてつもなくささいなことだ……頭から血を流した彼は逃げていた。肉体が破壊される根源的な恐怖からだ。

そこで彼は気づいたのだ。

すでに大人同然の次兄が、子供である自分ごときの足に追いつけないことに。

天から与えられた才を認識した彼は発奮した。

朝も、昼も、夜も、『走る』その速さだけを考え続け……

地方大会への切符をもぎ取つたとき、父はようやく彼の方を向いた。

父の家ぐるみの後援を取り付けた彼は、

破竹のような勢いで全国級スプリンターへの道突つ走つていった。

——ここまでならよかつた。このままプロ選手のサクセスストーリーになれたの

だったら。

彼の心はこの時点でねじけきっていた！

誰も彼を助けなかったし関わろうともしなかったからだ！

走ることでも手に入れた有形無形の『力』は、

彼にとつてはやつと許された『暴力』のライセンスだった。

『それがあつて初めて家族と対等になれる』……彼はさらなる力を求めた。

権力を全面に押し出しし振る舞う彼を前に、

同級生はおろか校内に逆らえるものは一人もおらず……やがて、地域がそうだった。

ここに二つ目の『過ち』がある。

彼は『家』の権力を、いつしか自分の力だと勘違いした。それを指摘する人間は誰もいない。

他人をアゴで使い、弱り果てさせていく快楽は何事にも代えがたかった！

好きに与え、好きに奪う……彼は、かつて感じていた絶望と無力を忘れた。

どこに出しても恥ずかしい『クズ』の花が咲いていた。

そして、その果てに……彼は、恨みを買いきつた。

13歳。中学1年にして校内代表。県総体を勝利で飾った一か月後。

普段、財布とサンドバッグを兼ねて飼っていた少年の目が突然すわった。



この時期、彼はその少年に、家族への危害をほのめかしていた。

そして、その意味を深く考えることもなかった。報いは次の瞬間だった。

脊髄に突き立った果物ナイフは、体内で炸裂する熱い塊だった。

それが爆ぜたとき！ 全ての栄光は闇に閉ざされた。

事業のひとつを台無しにされた父は、すぐさまその少年を訴えて『損』を取り返そうとした。

だが、買いきすぎた恨みのためか……

魁が彼に対してした仕打ち、またはそれ以外の素行の証明が次から次へと提出され：鳴滝家の権力を持ってしてもこの流れは止められず、示談で手を打つことになる。

退院した魁は、二度と走れないこと。『力』の源泉を絶たれた事実には怯えながら帰宅した。

だが玄関では、家族が総出で待つていた。父が、母が、左右から歩行を支えてくれた。

「父さん、母さん、ぼくはッ……」

「気にしなくていいのよ、魁…助けてあげる」

「これから償えばいい。だから今は、肩を借りていなさい」

魁は気が付いた。どうして、あの少年に執拗に当たっていたのかを。

あの少年が陸上部に入る直前、スポーツ用品店で父母と一緒に靴を選んでいるのを見

た。

競技用のしつかりしたやつだ。始める前だったのに、何の証も立てていないのに。それがどうしても許せなかったのだろう。だから『焼いた』のだ。

ゴムの焦げ臭いにおいが今更鼻をついた。

なんて愚かなことを……彼の心を、きれいな涙が洗った。

そして、その涙も間もなく枯れ果てることになる！

なぜなら、父と母が両肩を支えて連れて行つたその先は……

『絞首台』

うわああああああああああああああああ

今度こそ彼は絶望の悲鳴を上げた。

助けとは、償いとはッ！ つまりは『これ』だ！

入口と窓とを兄二人がふさぎ、父と母は遺書の執筆を促した。

手は動いてよかつた、などと言いながら……

「こんなことのために生まれてきたのか、ぼくは！」

「助けて！ 助けてください、イヤだ、死にたくない……こんな終わりは嫌だああ！

靴をなめろと言うならなめます、一生奴隷でもいいです！

なんとしてもあなただを喜ばせてみせます！だから、だから」

その先を言い切らせることなく、父は魁の顔面を机に叩きつけ、言った。

「そうか。お前を家族でいさせてやる最後の手段までファイにすると。そう言うんだな？」

「よかろう…中卒までは面倒を見てやる。金も出す！ それ以上は何も期待するな……」

わしもお前に『何も期待しない』 最初から間違いだつたな……お前の存在が」

「二度と我が家の敷居をまたぐな。顔も見せるな。声も聴かせるな。存在を知らせるな。」

わしを喜ばせたいというのなら、お前がお前を始末するんだ……それなら、喜んで忘れてやる」

この日をもって、彼は縁を切られた。私物はすでに焼かれていた。

血を分けた親子の関係を法的に直接断ち切る方法は存在しないため、苗字こそそのままだが……

すこやか市に引越した彼は、今なお『死』だけを期待されている。

新たな生活に慣れていくにつれ、彼自身もまた『死』に傾き、受け入れつつあった……  
……彼が目覚めます。

不快な話は、ここで締めくくるとしよう。

だが、彼の頭におさまった『DISC』その由来がある『人間賛歌』の世界の法則で

は。

物語はプラスで終わらなければならない。マイナスやゼロで終わるべきではないのだ。

それは、妖精と力を合わせ戦う、可憐と癒しの勇者たちの物語でも同じはず。

彼のマイナスもまた、あがなわれて、いつかはプラス……果たして、どうなる？

今はまだ、わからない……

この出会いは運命。そして出会いは『引力』……

「あ。目が覚めた、みたい」

夢見が悪かった。久々にあの夢を見た。

俺が家を追われた日の夢だ……

それを断ち切ったのはこの声らしい。

数秒して、誰の声かもわかった。花寺のどかだ。

寝ていても仕方ないので上体を起こす。保健室か？

……いた、もう一人。目が合った。沢泉ちゆ……思わず、目をそらした。

「起きていたの？」

「いや」

「そう、まあいいわ」

向こうもこつちと話を続けたくはないらしい。

次の瞬間には花寺のどかの方を向いていた。

「もしかして、松葉杖探してるの？花寺さん」

「うん。もともと持ってた方はお化けに踏みつぶされちゃってたから」

「お化けのそんな近くまで行くなんて、無茶よ…松葉杖は、そこ。その隣の脇」

「あつた！けど一本しかないね」

「誰か使っているのかも…仕方ないか」

だが、花寺のどかに歩み寄って松葉杖を受け取った彼女は、

予想外にも手で届く距離にまで寄ってきて、それを手渡してきた。

「一本じゃあ帰れないことは知っているわ。手を貸してあげる」

「…。なんだって？」

「あなたのことは大嫌いよ。花寺さんに近づけたくもない。だから手を貸すわ」

「そりゃあ、そうか…すまない」

県総体で彼女に声をかけたのは…いや、よそう。

下品以外の何物でもない話になる。むしろそれしかない。

強いて言うなら、堅くて、しなやかな雰囲気か当時の俺を引いたんだ。

『こいつはぜひぼくのものにしたかった』。そう、『もの』だ。しょうもない。

俺はたぶん、その頃と大して変わっていない。ただ失っただけなんだから。

『ぼく』の時代が、まるで他人事のように見えた。

「杖は持ったわね。じゃあ、その反対から行くわ」

「お願いします」

脇に彼女の手が差し込まれる。

皮肉だ。こんな風になったからこそ触れられるようになるなんて。

思えば、誰かの手を借りて立つのも、入院中以来だった。

こっちに来てからは、誰の手も……

オゾ氣が背骨を突き抜けていったのはその時だった。

呼吸するノドがひっくり返った。俺の中では比喩じゃあない。

体の血が全部逆方向にめぐっていき、心臓に逆らってパンクする。

筋肉がワイヤーになった。張り詰めたワイヤーだ。あちこち切れてはピンピン跳ねる。

俺の中では、全部、比喩じゃあない！

現実を起こっている何かだ！

氣が付けば沢泉ちゆを突き飛ばし、床にひっくり返って転がっている俺がいた。

「アガ……あが、ヒグツグ」

「……そう。そこまでして人をバカにしたいんだったら、勝手に」

「待って、ちゅちゃん！なんか、変」

変。そう、変だ。苦しい。部屋から酸素が消え失せている。

息を吸っても吸っても意味がない。ただ苦しいだけ。

これは……スタンド攻撃？ F・Fの記憶を読む……該当あり『ラング・ラングラー』

！

スタンド『ジャンピング・ジャック・フラッシュ』は無重力のスタンドで、術中に陥れば周囲から空気がなくなり、やがて気圧差で穴という穴から血を吹いて死に至る。

俺はそうなりつつある！ えっ、無重力？ あ、いや『ケンゾー』？

「何、何やってるの？ 何も無い空中をガリガリかいてる……」

「これって……発作？ こんな風に担ぎ込まれた人を見たことある、けど」

「いき……ヒ、ヒ……息！」

遠くにならまともな空気があるはずだ！

ホースだ！ フー・ファイターズで俺の血からホースを作るんだ！

長さ8mもあれば……それまで俺の血はもつだろうか？

やらなきや完全に死ぬ！いや……死んでいいのか？

だが身体も頭も、この恐怖から逃れることでいつぱいだ！  
やるしかない！やるしか……

「過呼吸だペエ！ゆつくり、ゆつくり浅く息を吸うペエ！」

花寺のどかのペンギンがそんなことを言った。

ゆつくりだつて？ そんなことをしたら俺はすぐにでも死んじゃうだろうよ！

死ぬ？ 死ぬの何が怖いんだ？ 死んでも同然のくせに。

でも、欲しい死はこれじゃあない……

窒息寸前でそう考えていると、開き直った気分になった。

ゆつくり吸った。いつそ呼吸を忘れて死ぬくらいのもりで。

倒れた俺の目の前で、ペンギンが呼吸の手本を見せていた。

「スウ……ハアー、………スウ……ハアー、だペエ」

いつしか俺はペンギンの手本に合わせて息を吐き吸いしていた。

次第に、次第に落ち着いてきた……スタンド攻撃の線は、ありえない。

『ラング・ラングラー』だったら、今頃、花寺のどかも沢泉ちゆも、

攻撃された俺に影響されて宙に舞っているはず。

『ケンゾー』は同じ窒息でも苦しみの性質が違う。



こっちはF・F本人が当事者だからよくわかる。

そうなるよ……あれか。俺自身の問題というわけか？

「……ありがとう。落ち着いた」

「よく頑張ったペエ」

「やるじゃあねえーかペギタン！」

会話できるくらいに回復した頃には、三十分以上が経過。

すでに日が傾き始めていた。

花寺のどこかも、沢泉ちゆも、この場を去っていなかった。

「あなた……どういうこと？」

足が動かないだけじゃあなく、こんな発作も持っていたの？」

「わからない、俺にも……今まで経験がない」

「じゃあ、病院行こう？おかしいよ、こんなの」

「よしてくれ、今はへっちゃらだ」

今、病院にかかって診察料を払ったら、おそらく月末直前で食費が底をつく。

元の鳴滝家から振り込まれる金額は限られているのだ。

金額の範囲で生きること認められている、とも言える。

そうした現実的な理由から断らざるを得ないが、沢泉ちゆは厳然として立ちふさがつ

た。

「あなたねえ……ここで病院に行かなかったら、後で何かあった時！」

居合わせた私たちの責任になるとは考えないの？」

「そんな責任を取れるはずがない。」

そんなことを言ってくるやつの方がおかしい」

「後味が悪いって言ってるのよ。ぐだぐだ言うなら呼ぶわよ、救急車」

救急車は実家案件だった。俺は、折れた。

花寺のどかが職員室から失敬してきた傘をもう一方の杖にして、

足のことで行きつけの病院に向かう。

ついてきた二人がそのまま診察までついてきて、かなり詳細に先の出来事を先生に伝

えた。

俺はとくに頼んでもいないのに。

というか、俺は途中から下げられて、

二人が出てきたところで入れ替わりに戻る羽目になった。

先生が言うには、ストレスに由来するパニック症状が疑われるが、

専門家ではない自分ではどうしようもない。紹介状が必要なら書く……とのこと。

書いてもらったところで、その先はどのみち実家案件だ。

今日のところは断った。明日以降も同じことだろう。

二人には『異常なしだった』とだけ告げた。とくに追及もされず、二人はそのまま帰った。

そして俺はというと…

「モノが…全然ねえくな。お前んち」

「冷やかしなら帰ってくれよ」

「あの『力』について聞かせてもらうぜ。」

ペギタンの世話になったんだ。そんならしいの恩は返せよな」

ついてきたネコを、自宅に上げちまっていた。

ペット厳禁なんだけど、このアパート…

## 脅威を知る

「まず言っておく。俺の身体がまだ治りきっていない……」

手っ取り早い説明方法があるんだが、そいつが今は難しい。

今日は簡単な部分だけ。

詳しい話は明日、当事者全員の前でする……いいか？」

「いいぜ。全部わかるんなら問題ねーかな」

帰り着いてからスマホを見ると、明日は休校との通知が入っていた。

何者かが爆発物を使い、校舎のガラスが広範囲に渡って破損したとのこと。

もしかしなくても俺だった。バレたらどうなることやら。

自殺しようとは思っていたが、死に損なえばこうなるわけか。

状況をつかんだところから、本題が始まる。

「その爆発からだな……あれ、お前の『能力』か？」

「違う。わけあって自作してた爆弾が日の目を見ただけだ。

やろうと思えば、花寺のどか……あいつにも簡単に作れる」

「……なんで、そんな物騒なモンを作ってた？」

「黙秘。ただし、他人を傷つけるつもりじゃあ絶対はない」

「おい。そんな答えで納得できると」

目つきを鋭くしたニヤトランは、しかし途中で言葉を切って黙考した。

四秒程度だった。

「うんニヤ、わかった…信じるぜ。今ん所はな」

「助かる。じゃあ俺も聞く。プリキュアとは何だ？」

「イキナリ核心来たなー！」

スゲー簡単に言うぜ。ビョーゲンズと戦える戦士だ。

オレたちヒーリングアニマルが認めた人間が、

ヒーリング・ステッキを使って変身するんだぜ」

「ビョーゲンズって単語もわからない」

「これも簡単に言うぜ。オレたちのヒーリング・ガーデンを侵略して、

さらに地球も自分のものにしてしようとしてるヤツらだ」

「……………」

黙ってしまった俺。

事実だろうことはわかる。状況証拠には出会いすぎている。

マンガのような話なのは俺のスタンドDISCだって同様だ。

だが、それを差し引いても斜め上。こいつは、まるで。

「お前ら……戦隊かヨ！秘密戦隊！」

まさかロボットとか出てくんのか？これからッ！

ヒーリングマシン・レスキューだとか！」

「何言ってるんだお前。まあ秘密ではあるけどよ」

ナツかしいなああゝゝ、部屋にあったDVDプレイヤーで見てたんだよ、戦隊モノ。

もうほとんど内容は覚えてないけど。

兄さんにブツ壊されちゃったからなあゝ7歳くらいの時！

……どうでもいいだろ俺。ンなモン。絵空事は放っておけ。

「悪い。どうでもいい話をしちまったな……」

俺は、お前らを『スタンド』だと思っていた」

「そう、それだけ。なんだよ『スタンド』って」

「ええと……心持つものの精神エネルギーの具現化だそうだ」

F・Fの記憶をそのまま読んでるだけで、まだ実感のある知識じゃあない。

説明がどうしてもたどたどしくなるのは仕方ないことだろう。

第一、俺のスタンドはこのDISC由来だからな……

いきなりそこから言われてもワケがわからないだろうよ。

「『傍に立つ者』。スタンド・バイ・ミー。

だから『スタンド』って呼ぶらしいな。

こいつを身に着けた人間は、たったひとつの超能力を使えるようになるんだ。

超能力は人によって違う」

「お前のは？」

聞いている限り、ケガを治すのにそいつを使ってるっぽいけどなあ」

「正解。詳しいことは明日にしようぜ、お互い……」

今日のところは帰ってくれ。メシ作んねーと」

「いや、オレは監視だぜ。」

爆弾作った理由を黙秘されちやあなああーッ

……今日は泊めてくれよな、な？」

「……あつそ」

晩飯は、少し古くなったソーセージを焼いたやつと、

牛肉の大和煮（缶詰）になった。

肉と米しかない。唯一残ってた野菜の玉ねぎは使わなかった。

確か、ネコには猛毒だったからな……

「それで、どういう能力なの？」

「これもあらかじめ言っとくか。」

スタンド使いは他人に能力をバラさないし見せない。

スタンドは一人一能力だからな。

能力を教えることは弱点を教えることとイコールなんだ」

翌日、臨時休校になった俺は、

先日メガビョーゲンに襲われた公園で花寺のどかと待ち合わせていた。

お互い、すでに昼飯は済ませた後だ。

いちいち戻るのも面倒だし、一緒に食う筋合いは互いに無い。

平日真昼間の公園に人はまばらだったが、さらにその奥の林に入っている。

互いの距離は3メートル。これ以上は近づかない。

もつと離れたいが、これ以上離れると会話が成立しない。

「質問に答えると、俺の能力は『微生物』、プランクトンだ。

名は『フリー・ファイターズ』。

俺の血の中に能力で作ったプランクトンがびっしりいて、

そいつで色んなものを作るし、自分の治療もできる」



「プランクトン…それで指をピストルにして……」

ちよっと待って。それじゃあ弾もプランクトンで、プランクトンは血？だから倒れたの？ バンバン連発してたのが血だったから？」

「その節はマジに申し訳ない。」

身に着けたばかりの力で限度がわかっていなかった」

こいつ頭の回転が速いな。あるいは、そればかりを気にしていたのか…  
謝ったら、目つきがなんだか優しくなった。

一方で咎めるような雰囲気もある。

そして、自分で自分を抱きしめるかのように縮こまっていた。

「血を水鉄砲にするなんて！そんなヒドイこと二度としないで……」

うう、想像するだけでツライよう」

「本来の持ち主の得意技だったんだよ。」

俺もそのノリで使っちゃったんだ」

「……本来の持ち主？」

当然、いるのは花寺のどかだけではない。

ヒーリングアニマルのラビリン、ペギタン、ニヤトラン。

さらに、一見ただの犬としか見えないラテがいた。

このラテ、ヒーリングガーデンの代表者テアティーヌの実子らしい。今、横から声をつっ込んできたのは、優等生肌のラビリン。ウサギだ。

「今の言い様だと、超能力の手渡しが出来ることになるラビ。」

一人一能力と矛盾するラビ」

「そう、そこが核心だ。こう考えろ。

『能力の手渡しができる能力』がいたとしたら?」

「いたとしたら?……いる、って言ってるラビ?」

「『心を盗む能力』だ……やつの名は『ホワイトスネイク』!」

人の記憶とスタンドを、DISCにして取り出しちまえる能力だ。

こんな風にな」

俺は自分の頭から、おもむろにDISCを取り出した。

どう考えても人間の頭に入るサイズじゃあないんだ。

こんなものをつっ込んだら輪切りになっちまう。そういうサイズだ。

「ラビーーーーッ!」

「ペエーーーーッ!」

「ニヤッ!マ、マジかーッ」

ヒーリングアニマル御一行はそろって腰を抜かした。

いや、ラテは…わりとノンキしてる。

花寺のどこかも、意外なことに大して驚かなかった。

「ビビらないな、花寺のどか」

「うん。ごめんね…昨日、危うく抜きかけたんだ。

鳴滝くんが気絶してる間に」

「抜いてたら、たぶん俺は死んでたな。

バキバキの骨がまだくつつききつてなかったからな…」

「ひえっ…」

「抜かなくてありがとうって言ってるんだ。

聞きたいことはそんなことじゃあないだろ」

「う、うん」

ヒーリングアニマル達は順次立ち直り、こつちを向いている。

特にラビリンは非常に不審な目を向けている。当然だろうな。

俺は『ホワイトスネイク』と関係あります、と言ってるも同じだからな。

質問はすでに確定している。

「鳴滝魁、あなたは『ホワイトスネイク』っていうのと同じ関係ラビ？」

「直接関係はない…はずだ。」

俺には、このDISC以外にわかることは何もないんだ。

おととい、気づけばそばに落ちていた。それだけなんだよ」

「どういうことペエ？知らないのに知ってる？わけがわからないペエ」

「このDISCには、『スタンド』も『記憶』も入っていた……」

ニヤトラン、頼む。見てくれ」

「オレかよおおーッ……まあ、そうだよな。ホレッ、やんな」

「その前にだ」

その場にドカッと腰を下ろす、というより倒れこむ俺。

ここのう何も無い場所です座るとするのは、今の俺には非常に困難だ。

「な、鳴滝くんッ？」

「何してるラビーツ！」

「ラビリン、ペギタン。俺の松葉杖を預かれ。一本ずつだ。」

そして元の場所まで離れろ」

「何を言ってるペエ？」

「おそらく、DISCを差し込まれたニヤトランは少しの間苦しむ。

俺がそうだった……このままDISCを差ししたらな、

俺が何か危害を加えたようにしか見えなくなるんだよ。

だから、生殺与奪を明け渡す。信用の担保として命を渡す」

「フザけんじゃねーっツ！」

話が思い切り遮られた。ニヤトランが正面から吠えた。

ネコだから毛を逆立ててフーっツツて感じたが。

「おめーは『頼む』つつつただろ？それで充分だつてんだよ！

勝手に見損なつてんじやあねえフーっツツ」

「う…わ、わかつたよ。いいんだな？やるぞ」

「おうツ、やんな」

倒れたままの俺に寄ってきたニヤトランの頭にDISCを当てると、

ギユンと形容しがたい音を立てて、

人間より二回り以上小さい頭に吸い込まれていった。

プランクトンにも入るんだ。ネコごとき何てこともないわけだ。

ほどなく、ニヤトランが目を見開いてうなり始めた。

「おつ、おとおおおつ、こ、こいつは…」

「ニヤトラン、大丈夫ラビ？」

「やべえ、やべえよコレ…F・Fの、一生、か……」

「一生を全部見ちまつた」

情報が流れ込むのは割とすぐなのだ。それをすぐ消化できるかは別問題！

D I S C を取り出すのも忘れているニヤトランの頭から

それを引っこ抜くと、ようやく我に返った。

「ニヤトラン、何を見たペエ？誰の一生だペエ？」

「……キュンと来たぜ」

「ペエ？」

『空条徐倫』キュンと来ちまったぜ！

タフで、泥水すすっても諦めねえ！

痛えだろーによ、泣きたかっただろーによおー

プリキュアになって、オレと一緒に戦ってくれ……ればなあ〜

「8年前だよニヤトラン。見ての通りだ。今、生きているかも正直わからない」

「勝ったに決まってるんだろ。負けるかよ、根性曲がりのプッチによお〜」

「…安全、らしいことは確認できたラビ。洗脳されたみたいにも見えるケド」

その後、D I S C を順々に回していった。

ペギタンとラビリンが見ている間に、花寺のどかが俺を助け起こした。

前に立ってから俺の両腕を各所で引っ張り、立ち上がる動作そのものを助けた。

今回は、何も起こらなかった。何か違いがあるはずだが…

お礼くらいは言える。そっちが先だ。

「ありがとう」

「どういたしまして」

微笑んだ彼女は、スツと元の距離に戻った。3 mだ。

それから全員が見終わるのに、5分もかからなかった。

刺激が強いため、ラテに見せることはラビリンが強く反対したが、

スタンドの脅威を知らないヤバさの方が勝るため、最終的には折れていた。

「エルメエスさん、キュンと来たペエ」

「え、あの怖えー姐ちゃん？意外だなー」

「怖いのは仲間を想ってるからだペエ。」

一緒に戦えたら、ボクも強くなれると思うペエ」

「そうかもな。かなりスパルタだろーけどよおー」

「でもフロリダは遠すぎるペエ。ほとんど地球の裏側だペエ」

「……もう、ほとんど説明いらなくなったよな？これで」

「うん」

花寺のどかは頷いた。

それと、驚くべきことに。

スタンド『フリー・ファイターズ』はこの場の全員に適合した。

個性に合わないスタンドDISCは頭から弾かれるはずだが、全員それがない。

「それなんだけど、変だよ、このDISC」

「変だな。改めて記憶を見てもそう思う」

「最後のよおー、プッチのクソ野郎にやられた時！

F・FからDISCを外されちまつてるんだよな……

『記憶』が『スタンドDISC』に入っているおかしさに目をつむっても、

じゃあ、その後に入ってる『さよなら』の記憶は何なんだ？」

「謎だらけだペエ。まず、このDISCを魁に投げていったのは誰だペエ」

「普通に考える……なら、『ホワイトスネイク』ラビ」

「邪魔をした裏切り者の記憶を詰めてかよ？何が目的なんだ？」

「今わかることは何もないラビ。」

確かなのは、スタンドDISCが確かにここにあることだけラビ。

と、いうことは

「ビョージェンズだけじゃあなく、

スタンド使いが敵になる可能性がある、ってことかよ」

「待って、味方かもしれないよ？」



少なくとも今、鳴滝くんは味方でいてくれるよ」

かなり本格的で深刻な会議になっている。

が、花寺のどか。名は体を表しているのか？

沢泉ちゆに会っておきながら、よく味方だなんて思えるもんだ。

……だから、この距離なのか？

俺の3mにピツタリと合わせてきている……

なんだか、モヤツとした気分が襲ってきた。

が、そんなことより、この会議の方が重要だ。

「あー、それだけじゃ、すまないと、思うペエ」

「なんだよペギタン、歯切れわりイーな」

「確証はないペエ。けど、このDISC、ボクたちにも使えているペエ」

「何が言いたいラビ、ペギタ……まさか」

「ビョーゲンズがDISCを手に入れて使ってきたら！

プリキュアでも勝てるか怪しくなるペエ」

全員の絶句だけが返った。

俺もこの発想は無かった。

あのメガビョーゲンがスタンド使いだったら、

どんな恐ろしいパワーで辺りを破壊して回るといふんだ？

そうでなくても、あの顔色の悪い少年がスタンドを使うなら。

どんな悪質な方法でメガビョーゲンをけしかけてくるんだ？

たとえば、花寺のどかがスタンド『グー・グー・ドールズ』の術中に落ちたら？

そんな状態でどうやってメガビョーゲンに勝つ？

これは、とてつもなくやばい。

「ど、どーすんだよ、やべえじやあねえーかよー」

「……大切なのは、知られないことラビ。」

鳴滝魁、あなたはもうダライゼンに能力を見せてしまったラビ。

スタンドはビョーゲンズにとつても謎のはず…

そのためだけに襲われかねないラビ」

「D I S Cの秘密だけは守らなきゃならないペエ。」

とくに魁のD I S Cはまんま説明書だペエ。バレたら最後だペエ」

この数分間で俺の責任は数千倍に重くなった。

安易に挑んだ戦いで、俺の能力の片鱗がバレた。

いや、そんなことよりも。

スタンド使いの存在を知らせてしまった方が重罪だ。

俺は完全に覚えられていて、俺からDISCが抜き取られたら……  
ノウハウは全て敵行き。フリー・ファイターズも敵のもの。  
だが、それを解決する『策』は、ある……

## 平光ひなたは飛び込む

そもそも、今日を迎えるにあたってうすうす考えてはいたことだ。

さらに、DISCが全員に適應するというなら、障害は一切ないといえる。

問題は、すべて無くなる。

「覚えられているのは、俺の顔だけだ……」

DISCがそこに無ければ問題はない。そうだな？」

「えっ？それは、そうだけど……どうということ？」

目を丸くした花寺のどかが聞き返してくるが、それに構わず続ける。

どのみち、質問の答えにしかない。

頭から取り外したままのDISCを、花寺のどかに差し出す。

「DISCをプリキュアが持つていけばいい。」

俺が持つているより、はるかに安全だ」

「ええー、それは……それは、そうだけど！

鳴滝くんが、安全じゃないような……何か見落としてるのかな、わたし」

「見落としているな。だが教えない。」

知られていないからこそ有効な策があるんでね」

「…そうなの？」

首をかしげたまま引き下がる彼女。

実際のところ、何も見落としちゃあいんだがな。

考えを知られば絶対に邪魔をする。こいつらはそういう奴らだと見た。

「正直、検討もつかねー策だけだよ。

マジに大丈夫だったよ、おめー約束できんの？」

「ああ、約束する」

だから、黙って俺に騙される。

そこに関しては敵でしかない。敵をあざむくのは当然だからな。

俺は平気な顔で嘘を吐く。もともと失うものは何も持っちゃあいない。

痛くもかゆくもないな…

ややあって、差し出したDISCをニヤトランが受け取った。

そこを経由して、花寺のどかの手に渡る。

「ウソだったら…覚えてろよ？」

「ああ、覚えておく」

その時にはすでに負け犬の遠吠えだけだな、その言葉。

いや、負け猫かな…いいや、負けているのは最後まで俺だけだ。こいつらをそれに巻き込むわけにはいかないんだよ。

なんとも言えない表情でこつちを見ているラビリンにペギタン。どうやら不審に感じているらしいな…

話すことは話し終えたんだし、さっさとお暇しよう。

「……クシユン」

ラテが唐突に咳をした…犬が？

いや、そういうものか？猫のクシヤミは見たことがある…

「ラテ様！」

「ビョーゲンズだペエー！」

一斉に殺気立った反応を見せたのはヒーリングアニマル御一行。

花寺のどかも速かった。

すかさずラビリンから聴診器…フアンシーな…を受け取り、ラテにあてる。

「水のエレメントさん？…どこの？」

…遠く？温泉？…あつち？」

「ど、どの温泉ラビー！」

「……は温泉地だペエ。候補が多すぎるペエ」

ビョーゲンズが現れたことを察知したが、場所が特定しきれない。どうも、そういう話をしているようだ。

これはまずそうだ。アレを暴れるに任せていたら死人が出る。

「プリキュアに変身して突っ走るしかないんじゃないか？」

「そ…それしか方法はないラビ。」

近づけばだんだんわかってくるはず…」

「やつ…と見つけたああーッ！」

これまた唐突に突っ込んできた何かがあった。

こいつは…昨日の『何か言ってたの』だ。

こんな雑木林の真ん中に何の用なんだ？

ヒーリングアニマルたちは一斉に隠れた。

具合が悪いらしいラテには無理だったが。

「やいやい！こんなトコにのどかち連れ込んでさあーッ

アンタ何するつもり!？」

「…うへエ、メンドクせえ。」

花寺のどか、ここは引き受けるからサッサと行けよ」

「う、うん。それじゃ、ひなたちゃん。」

わたし、ラテが大変だからー！」

「クウン…」

スタタタタ！

音と土煙を立てて花寺のどかは走り去っていった。

当然、ラテを抱えてだ。

よし。DISCを持たせたまま去らせることには成功だ。

あとは瑣末ごとだ。こいつの相手はテキトーでいい。

「ラテ？あのワンちゃんのこと？」

「見ている前で具合が悪くなった。

いったん連れて帰るんだろうよ…邪魔してやるな」

「邪魔？そういうことなら、そんなことないない！

ウチ、動物病院だもん。追っかけなきや！」

「…ハア？」

直後、花寺のどかの後を追って走り出す何か言ってるの。

まずい、まずすぎる。

このタイミングで追いかけられたら、プリキュアの秘密がまず確実にバレる。

こいつは一体何なんだ？俺のことスデに忘れ去ってる？



「おいッ！お前はいったい何しに来たんだ！」

「もうアンタは後！ワンちゃんの方が大事！」

忘れてはいないらしい。足は止まった。

このまま少なくとも2、3分、足止めしなければ…

「追わなくても電話番号とかあるだろ。」

「それ使ったら？」

「あッ…昨日聞いてた。そうする」

出るわけがない。あいつは今頃プリキュアに変身しているんだからな…

スマホにしばらく耳を当てていたこいつは、

少し苛立った表情を浮かべて通話を切った。

「出ない…気づいてないじゃん」

「ショートメール出しとけば、後から電話来るよ。」

「病気なんだ。当然最初に探すのは動物病院だろ」

「そりゃそつかあ。んじゃ連絡待ちだね」

「だろうよ。じゃ、俺はこれで」

「んじゃね」

俺は去る。ヤツとは反対方向に。

しばらく歩く……

「……………えっ!？」

振り向いた。もうヤツの姿は見えない。

逃げ切ったのか? あんなことで?

こんなクソくつだからねーゴマかしで俺は逃げ切っちゃったのか?

チヨロい。チヨロすぎる…

だとしたらヤツは、想像を絶するノータリンだぞ!

……マジで? マジか……世の中は広かった。

とたんにバカらしくなった。帰りにスーパー寄ろう。

ホントは100均に行きたいが、あれはゆめポートにしかないし。

雑木林を抜け、公園にある噴水付近に出てきた。日光がまぶしい。

…本当の危機はここからだった。

俺の望んでいたものが、望んだ形で来なかった。

「進化しろ。ナノビョーゲン」

さらに振り向いたその先にいたのは、あの顔色の悪い少年。

確か、ダルイゼンとか言ったっけか…

「よせばいいのに……シャシャリ出てくるから……メンドクさ」

「お前ツ……」

「命令が出ちゃったよ。お前を連れて帰ってこい、だつてさ」

「メエガアア~~~~ビヨオ~~~~ゲン~~~~」

新たな声が出したのは俺のすぐ脇だ。

メガビョーゲン。昨日と同じタイプ！樹木がモチーフ！

フー・ファイターズの『銃弾』では有効打がまったく望めない！

対する俺は、DISCなし！丸腰！

爆弾を新たに作るヒマももらえないとは……

つまり、『詰み』だ。終わった。

だが、これは『次善』でもある。

今の俺の体のどこをホジクツたとしてもスタンドのスの字も出やしないんだ。

とはいえ連れ帰られたら、向こうの何かの特殊能力で記憶をホジられる可能性があるから、

それだけを回避すればいい。要するに……この状況を利用して、うまい具合に自殺する！

周りの人間はあつという間に逃げた。

いいね。元気な両足があつて。どいつもこいつも鍛え方がなつちやあいない……

さて、可能な限りは戦わないとな。石をいくつか拾ってポケットに詰めてある。一応、こういう可能性もあるとは踏んでいたからな。

狙うべきはメガビョーゲンだ。ダルイゼンの方がまだ有効打を望める気がするが、座り込んでるあいつが本気になったら、気絶させられて連れ去られるまで、たぶん一瞬だ。

メガビョーゲンなら行動がわかりやすい。怒らせさえすればいい。

瞬時に手首にスナップを効かせる。メガビョーゲンの頭を小石が打った。

「グツ、メガアアアーツ！」

「何それ。出し惜しみ?…ま、楽になるからいいけど」

激怒したメガビョーゲンが繰り出すムチのような一撃。

俺に逃げられるわけがなかった。ぶっ飛ばされる。

草地から石畳までが頬を擦り下ろし、やがて止まる。

松葉杖は手放さなかった。まだ、最低限、立てる。

やつが待つてさえくれればだけどな…

痛みはほとんど感じていない。気が昂っているみたいだ。

くだらない人生だけど締めは締めだからな。悪くない。

石を一個握りしめ、やつに向き直る。

「メガアア~~~~ッ」

巨大な足音を立てて迫りくる巨体。

そのまま来い。そして踏みつぶすんだ。それで全てが終わる！

煽るようにさらに石ころを投げる俺。やつは止まらない。

これは俺の望んでいたものだった。最善ではないにせよ次善だ。

さつき俺は、『望んでいた形で来なかった』と言ったな？

そいつは嘘じゃあない。だって、なぜなら…

「待った待った待った待ったあぁーッ」

「メガ?」

「……………ハア?」

『何か言ってたの』が雑木林を突っ切って、戻ってきやがったからだ。

そして木の枝やら空き缶やらをメガビョーゲンに向かって投げやがったからだ。

「離れろーッバカヤローッそこどけーッこのヤローッ」

「メ、メガッ!?メガッ、メガッ」

「バツ……バカヤローはてめーだアアアア何してやがるッ帰れ!」

「ほつといたら死んじやうじゃん!」

手持ちを投げつくした勢いで俺に駆け寄ってくる。

なんだよこれは、どうすりやいいんだ？

「お前わかかってんのか？俺は鳴滝魁だぞ？」

助けたところで誰も喜ばない、帰れ！」

「実はチョットだけそーしよーかって思ったよあたし。

でもさあー、結論！助ける！決定！」

「なんでそうなる！」

「そーしないと、きつとゴハンがマズくなるもん。

もう、他は…どうでもいいや！」

「…な、なんじゃあそりやあああー」

マジになんなんだこりやあ。理解ができない…

そんなこと言ってたって、お前が死ぬぞ？

どういう状況かわかって突っ込んできたのか？

理解しているから突っ込んできた…それでお前はどうするんだ？

「バカバカし…：…そいつからやれ。メガビョーゲン」

「メガアアア〜」

ああ、言わんこつちやあない！

そりやあ、そうなるだろうよ！俺の動きは超ノロイんだから。

邪魔者さえ潰せばいくらでも取返しがつくんだから。

「で、このオバケ、何？ウワサの怪物？」

「たぶん、それで間違いない。今からでも逃げろ。」

別に俺はそれでお前を恨んだりはしないからな」

「ヤダツつってんじゃない。アンタがよくてもあたしがよくない」

「ぐっ…聞き分けのないやつ」

一般人二人、バーサス、メガビョーゲン。

しかも一般人にハンデ付きだ。どうしてこうなった。

なんとしてもこいつを逃がさなければ。

死の恐怖を感じさえすれば、何を言う必要もなく逃げてくれるか？

そのはずだ。普通、一般人に死の覚悟なんていららないんだ。

「メガアツ！」

「ふえっ？わああツ！」

メガビョーゲンが動いた。薙ぎ払う軌道だ！

俺も彼女も、やつの軌道に入っている。

先に打たれるのは…彼女だ！

仕方ない、真後ろに回り込んでクッションになるしか…

ドン

「メツ……メガアアアアアア!!」

メガビョーゲンが突然のけぞった。

腕が燃えている……よく見ていなかったが、何かがやつを撃ち抜いた？

「えッ? 何、今の? なんかビームが、空からビーム!」

「何今の、は俺が聞きたい。見てたのか?」

その辺を転がりまわって消火しているメガビョーゲンを後目に聞く。

ビームとは何だ? ……花寺のどかが戻ってきたのか? いや、早すぎる。

それに、あいつの放った『螺旋ビーム』に敵を燃やす性質は無かった。

答えを出したのは、相変わらず座ったままのダルイゼン。

「へえ。お前もなんだ」

「何よアンタ、あの怪物、アンタのシワザ?」

「空、見てみなよ……太陽がふたつあるでしょ?」

「……えっ、ええええーッ?!」

俺も見た。太陽はひとつ。俺には見えない。

……『今の俺には見えてない』!

『今の俺には見えない太陽』!



そして暑い！春まっただ中の気温じゃあない。

異変が着実に広がりがりつつある。これは…確定だ！

「お前……スタンド使いだったのか！」

「えっナニそれ？サスガのあたしもかなりコンラン……」

## 太陽の導きを！

こいつがスタンド使いであることはわかった。

そして、そのスタンドはメガビョーゲンをのたうち回らせ、周囲をサウナと化すほどの激烈なパワーを持つことも。

「だが……なんてこった！状況はむしろ悪化している！」

「いやさ、あの。サツパリわかんナイんだけど？」

「カンタンに言つてやる！」

お前は超能力者だ！ たった今気が付いたようだけどなああー

そして、あいつらは俺たち超能力者を誘拐しに来た宇宙人だ！

つかまるなよ！ つかまったら何されるかわからないんだからな！」

これ以上の簡単な説明は難しい。

そう、もはやこいつは無関係じゃあなくなつた。

あのダルイゼンは明らかにスタンド使いを連れ去りに来ている。

目標は俺だけだった。さつきまではな！

向こうからしてみれば、ある意味『どっち』でも構わなくなつちまつたんだ。

もうダメだ。今の俺の死はこいつの死と同じだ。

F・Fの記憶にすべてを教わった俺とは違う。

こいつはハイハイすらもままならない『赤んぼ』なんだぜ…

付きっ切りで教えて戦うしかない。なのにコイツと来たら。

「……ナニそれチョコカッケイイーじゃん！」

あたしヒーロー? ワルい宇宙人をヤッツけるスーパーヒーローってことー?

イヤッハー! 夢みたい! メルへ〜ン! ファンタジ〜ツ!

「危機感! 危機感持てエー! ツ」

もうそれでいい! それでいいから戦うぞ。

俺たちはヤバイんだ。勝つしかないんだよ」

能力を自覚して最初に考えるコトがなんでソレなんだ…

でも、なんかわかってきた。こいつ目の前に集中したら、他が見えなくなるくらい。

四の五の次から次に詰め込み教育しても確実に全部忘れちゃうな、こりや。

『ひとつずつ』だ。『ひとつずつ』伝えて勝つ!

正直ビンボークジ感がスゴイんだが、スタンドだけは一級だ。

勝てないカードじゃあないはずだ。

「まず、この場だけでいい。」

俺を信用してくれ。できるだけ指示に従ってほしい」

「…ウーン。わかった。教わんなきゃダメそーだし」

「ありがとう。まず、お前の『太陽』は動かせるか？」

「ちよい待ち、やってみる……」

ム~~~~ツ　ンむ~~~~ツ

動け~~動けエエ~~~~ツ

アブラカタブラ~~~~ひらけゴマ~~~~

…ネタ切れ〜思いつかない~~~~

ムズかしい顔にムズかしい動きで両手でグルグル円を描いてるコイツ。

なんだこの怪しいダンス…ああ、動かす感覚か。そりやわからんかもな。

別にふざけてるわけじゃあないんだ…たぶん。

「違う違う、あれはお前の『手足』だ。

『手足』を動かすとき、いちいち考えるか？」

あれも、そういうフウに動かすんだ」

「あ、そう？ンム~~~~」

…ダメっほい。遠ざかったり近づけたりは出来るみたいだけど。

今の距離が近づけられる限界みたい」

まず『太陽』を直接くらわせる方法はダメ、と。

今の時点で汗だくの身体がカラカラに干からびていく温度なんだ。

どのみち、これ以上近づけようものなら、俺たち自身がまず死ぬだろう。

すでにここら一帯は真昼間の砂漠ド真ん中同然だ。

いや、火山のマグマ溜まり直上かな?どっちでもいい。

「遠ざけよう。この暑さ、俺たちが先にまいっちゃう」

「そだね……自然破壊になりそーだし」

風がふく。多少は温度がマシになるのを体感した。

作戦会議じみたやりとりができるのもここまでだ。

メガビョーゲンが火を消し止めて復活してきたからな…

「ということとは…お前は敵の攻撃を防御できない、ってことになるな!」

「ソコはビームでどうにかするし!」

「それしかないな。敵の攻撃に合わせろ!出足を潰すんだ」

「…ん?どゆこと?」

「どゆこと、って…カウンターだよ!カウンターぶち決めろ!」

「カウンター?りよーかーいッ!」

…ハア。ため息が出た。

こいつに持って回った言い回しは通用しねえ。  
もっと知的になれよ！

グチるヒマなんぞあるわけがない。ついに来た。  
狙われているのは、あいつだ。

だが振り上げた腕、振り下ろす軌道！

やや斜め右から、またも薙ぎ払う動き…こつちの方が確実に早いぞ！  
メガビョーゲン、やはり学習能力はあまりない！

太陽光なら光の速度。間に合わないものかよ！

「極上だ！やれーッ」

「オツケー、いけえええーッ！！」

あいつが何かしたのは感じ取れた。

空から降った何かが、瞬時に噴水を砕いたのを見た。

一撃が放たれたのは間違いない。

だが残念だ…どうも、はずれちまつたらしいな？

「メガビョーッゲンッ！」

「あつ、あれ？あたし、やつちやつ」

「伏せ…間に合わ！」

メガビョーゲンの腕の勢いは何ひとつさえぎられることのないまま到達。ぶっ飛ばされたあいつは俺に向かって一直線に飛んできた。

抱きとめる? 無茶言うんじゃない。足がマトモじゃあないんだぞ俺は。

宇宙遊泳でもするように地面をもつれて一転、二転、三転。

トドメに、パグンツ!とかいう軽くて形容しがたい音。

全身にシビレた痛み。顔面のそれが最もキツイ。

俺の鼻を強打してくれたのは:後頭部か、こりやあ。

「早く立てよ:敵は待っちゃあくれない!」

「ち:チョット待って。アタマがグワングワンする……」

ちなみに:わかつているよ。指図するだけの外野がどれだけうつつとおしいかなんて

!

転げたあいつを脇に押しつけ、俺は全力で横に転がる。

考えてみれば当然だよな。的から遠ざかるほど射撃が難しくなるなんてな。

『太陽』が近ければ暑さで自分がやられる。遠ければビーム攻撃が当たらない。

帯に短くてタスキに長いスタンドだ。扱うには、必殺の条件が必要ってことだ。

つまり、その場は俺が整える。でなければ勝てない!

:しめた。壊された噴水の破片がわりと近くにたくさん:こいつは俺の武器だ。

水もバタバタ散りまくってるから、まもなく水びたしだけだな。

この服はたぶんもうダメだ。当然、休日まで制服の着た切りスズメだな……スリ切れたトレーナーの穴に石を詰めまくって、転がる……そして、投げる！

松葉杖は抱えたままだぜ……投げるにしても立った方がいいんだからな。

メガビョーゲンの標的がこつちに移る。あいつがヨロヨロと立ち上がったのも見えた。

こつちに視線をくれるなり、メガビョーゲンの正面に大穴が穿たれた。

惜しい！だが警戒したメガビョーゲンが飛びすさり、様子をうかがう構えになる。

また暑くなってきた。『太陽』を近くに下ろしているのがヤツにも見えているらしい。

「あーもー！ヒドイことになってんじゃん。クラクラしてる間に……」

「おい、こつち来てるんじゃない。俺はオトリやってんだぞ」

「そんなボロボロで何言ってるの？ホラ、立って！」

ドコオン

手を出そうとしたメガビョーゲンの数歩先に、また大穴。

ビームで牽制しながら俺を助け起こすつもりか。

だが違う。俺なんか助け起こしたところでアレがいる限り何度でも転げるんだぞ？



匍匐前進の姿勢から石を投げようとしていた俺の上半体が真後ろに引つ張り上げられる。

「んしょ、つと…やつば重い〜」

「よせつて!今俺を起こしてもほとんど意味がないぞ!」

こうなつちまえば転がった方が早いし、何より…やばいんだ。

俺の脇に手を回し助け起こす、その動作がやばい!

今わかった。昨日のアレは、これが原因だ…

呼吸が意味をなさない不協和音になると同時に、

全身の筋と神経が、またピンピンに張り詰めたワイヤーに変わった。

そして、それよりも先に、またしても。俺は、助け起こしてくれた人を突き飛ばしたらしい。

顔面から落ちて感じるヌメツた何か。鼻水か、鼻血か。わからない。

そんなことがどうでもよくなるほど、俺のまわりから空気が逃げていくんだ…『薄い』

!

「痛た…、ちよつ、何すんのよー!」

…つて、あんた。どつか悪いの?」

抗議の音がすぐに心配の声に変った。

まずい。この状況で、こんな姿をこいつが見たのなら！

目の前しか見えてないこいつの前に、ケイレンする人間が投げ出されたなら！

だが息がッ うごご

「ウソ、これ…シャレになつてな…」

どつか打つたの？どつか打つたからこうなつちやつたの？

救急車！救急車呼ばないと！あたしじゃどうにもなんないッ！」

スマホを取り出すなバカ野郎おおおーoooooooooooooooooooo

叫んだつもりでも、俺の口から飛び出すのは引きつった呼気だけだ。

ほどなくして、『木に斧が叩きつけられるような音がした』

聞いたことがあるわけじゃあない。ただ、この表現以外に見つからなかった。

あいつの身体が跳んだんだ。投げ捨てられた人形みたいに。

ヨソ見してる隙に、メガビョーゲンがサッカーボールみたいに蹴ったんだよ。

手から転げたスマホだけが無事で…少し先にあつた木の幹があいつを受け止めた。

残念だよな…女の子を抱きとめるには硬すぎるんだよ、お前…

木の幹を背に尻から落ちたあいつはズルズルと仰向けにくずれ落ち、

目をカツ開いたまま泡を吹いた。泡が…『赤い』。

咳き込むように、それかゲ口吐くみたいに泡が次々に切れては沸いてる。

「……ちえつ、やりすぎてる。やっぱりお前を連れてくしかないね」  
遠くからする声はダルイゼンだ。

勝負あつたから、これから俺を引きずって帰るだけなんだ。

おしまいだ。これで俺は何もできないまま、たぶん消える。言うまでもなく、この世から。

神さまに仏さまめ。ホントにいるってんならアンタらはクソツタレのムダメシ食らいだ…

なに、無関係なヤツ巻き込んでんだよ！俺だけでなんで満足しない？

何も考えずに助けに来たあいつがバカだったとでも言いたいのかよ！

納得いかない…おかしいぞ、こんなの。

『手を差し伸べてくれた人間から死ぬ』

……こんなものがありがたくてたまるか!!

くそつ…ぶちこわしにしてやるぞ、こんな現実。

絶望が底知れないドロドロのムカつきに変わった。

どうせ自分は『終わり』なんだっていう居直りを、

ムカつきが掻きむしってこそぎ落としていくのがわかる。

ここから先はふたつにひとつだ。あいつを助けるか、巻き添えにして死んじまうか。

理性は『無理だ』と言っている。なら理性なんか必要ない。何を捨てても拾ってやるぞ。あいつの生命だけは最低限だ。

『スウ…ハァー、……………スウ…ハァー、だべエ』

…そうだ。過呼吸を収めるやり方は知っていた。

呼吸を整えろ。すべてはそこから始まる。

呼吸が巡れば力が満ちる。そうだろ、俺。

そして『過呼吸』というのなら、身体はむしろ酸素に満ち満ちているはずだな？

なら立ってやるし、戦ってやる！松葉杖は意地でも放しちやあいねえー

あいつの容態は…わからない。医者じゃあないんだからな。

だが、血を吐いて、しかもそれが『泡』。

呼吸の動きも見えない…やられているのは、たぶん『肺』！

肋骨がへし折れてぶっ刺さっちゃまったか？だとしたら、血で溺れ死ぬまであと何分だ

？

あいつを助ける方法はただひとつ。『フー・ファイターズ』のDISCのみ。

持っているのはプリキュア！ここにいるのはメガビョーゲン！

どう転んでも確実に戻ってくるはず！つまりDISCも絶対に戻る！

それまで耐える。それが最初の一手。

役立たずのヒザが笑えば腕も笑う。なんなら俺も笑ってやろうか?

「なにそれ?…そんなんで何が出来るの?」

「父さんが言っていた:『幸と不幸はプラマイゼロ』」

お前:…不幸になつてもらう、ぞ!

そこから俺は『幸』を拾うんだ:拾ってやる!」

「ハア:…勝手にすれば?」

「いいのか?それ以上近づいて:」

すでにお前は俺の射程内 ぶご!」

「うるさいよ」

俺もまた木に叩きつけられた。

瞬間移動に等しい踏み込みから、くらったのは掌底か?

胃袋にスタンピングを押されたみたいだ。焼き印な。

「どうやら『フリー・ファイターズ』があつたところで到底戦えない相手だつてことは理解した。」

ましてや、ハツタリじゃあな:」

「ゲヘッ!だがラッキーだ:…一秒も経たずにこゝ、ここまで来られた、ぞ!」

一秒でも早く治療が必要なこいつに、ちょうど手が届く位置に飛ばされた。

ヤツ：ダルイゼンがどんなつもりだろうとも、これは『幸』だ。なら、これと等量の『不幸』が今、ヤツに向かうはず！

歩み寄つてきた：隙を、ちよつとでも作つてやる。

「あつそ。じゃあこれで『運の尽き』だね、お前」

「それ以上寄るんじゃあねえーツ：寄ると：自殺するぞ。

生きてなきやあ意味がないんだろ」

「そつちこそいい加減にしたら？

ぶつ壊すよ、そこの死体」

「ぐッ……ううう」

メガビョーゲンが音を立てて寄ってくる。

何をする気かはすぐにわかった。こいつを：握りしめる気だろうよ。

そうなつたら、もう、俺はただの『無』だ。戦いは終わる。

顔に手を当てる。止まらない鼻血を握りしめ。

「くらえ『血の目つぶし』：」

「バカじゃあないの？」

ボキョ！ パキキキ

「ぶぐううああああああああああ」

右手首を取られた。手の平を握りの逆に畳まれて、断面の骨が露出した。

シオンベンが漏れる激痛が、一瞬遅れて襲ってきた。

手を放されて転がったら、ジヨボジヨボとやちちまっていた。

：ああ、俺はヒーローにはなれないな。

こんな痛みには耐えられないんだもんな：

でも無関係だ。させない。『無』だけは嫌なんだ。

「おおおー」

余裕ぶって見下ろしてるんじゃないぞッ!

振りかぶるのは右手だ。この右手が役に立つんだ。

血が出てきたぞ、タツプリとなああー

今度こそくらえ『真・血の目つぶし』……

「ぱ」

メシヤ

振りかぶった先から、ヤツの方がいなくなった。

なのに、スローモーションみたいに不思議とよく見えたんだ。

ヤツの頬にめり込んでいたのは、靴の底だ。

音を立てて転がっていく、ヤツ。

反対側で軽やかに着地したのは……

「ま……間に合った……」

DISCをくれえええーっプリキュアーっ!!」

「ニヤトラン、お願い！」

「どう見てもやべえーぜ……さっさと頭に差しなっツ！」

「一気にやるラビ、グレース！とにかくアイツを叩き返すラビ！」

「私は怪物の方をやるわ！このままじゃ、救急車も呼べない！」

「メガビョーゲンだペエ、フォンテーヌ！時間との勝負だペエ！」



## 集中治療中! F・Fオペレーション

ニヤトランが投げつけてきたDISCを即、頭に詰める。

そして血の中にスタンドを満たす。ここまでは、すぐだ。

だが、これだけじゃあ、たぶん足りないんだよな…

破壊された噴水の水が間近に迫ったのはちよūdいい。

左手をつけて『フリー・ファイターズ』の増殖を念じる…ダメか。

そんな気はしていたんだ。今の俺は『ひとり歩きのフリー・ファイターズ』じゃあない。

おそらくどこかにいただろうオリジナル（たぶん人間）から生まれた『フリー・ファイターズ』だ。

右手：見る影もなく破壊された…を水につける。今度はいけた。やはり血か!

俺の血を起点として、必要なのは『水』と『養分』、そういうわけだな?

周りの土をも水浸しにしているから、増殖の条件としては充分!

これより、ここを『苗床』とする!

「おい!! 自発呼吸してねえ!!」

早くどうにかしろー！ー！ー！ー！ー！

『フリー・ファイターズ』ッ！」

『苗床』に形成したポンプからホースを伸ばし、喉の奥に突っ込む。

あふれる血の泡を媒介して体内に浸透し、およそ五秒で足の先端から脳まで達する。

図らずも肉体の記憶を見た：平光ひなた、か。名前だけわかりやあそれでいい！

あいつだのこいつだの、イイ加減やりづらかったところだ。

プライバシーの侵害なんざやってるヒマじゃあないんだよ。

『フリー・ファイターズ』が行きわたるにつれて、わかったのはやっぱり絶望だったんだからな。

肋骨の一部が粉碎され、破片が右肺を刺突。中には血が充満して気管支にまで及んでる。

左肺もそれに圧迫されて機能不全だ。失血性ショックなんだろうな。心臓が止まりかかっている。

大腸破裂：こつちも出血がひどい。変な血だまりが体内のあつちこつちにできちまってる。

で、当然ながら酸欠だ。脳細胞の死滅が始まりつつある：

「何から……何から手をつけりやあいんだよ、クソがッ」

「心臓と呼吸だ！これがなきやあ絶対にオシマイだからよ！」

左肺をジャック、次いで心臓をジャック!

『フー・ファイターズ』を集めて人工筋肉を形成、無理やりにも機能させる。

ああ、だが邪魔だ。喉の血が邪魔なんだよ、呼吸にならねえ!

心臓を鼓動させたから巡りがよくなってもっと血が出ていつちまう!

「魁よおーッ、自己血輸血、できねーかッ?

喉の血、どこかに清潔に貯めてよ、腕の静脈から再注入すんだよ」

「それしかねえ! 吸い出せ、そして貯めるんだ『フー・ファイターズ』ッ」

同時に、だ液などの汚染を濾しとる。

胃液が混じっちゃまったのはどうしようもないから捨てるしかねえ。

あと数分以内の死はこれで回避した。だけど、ひとまずでしかない!

作った血袋を見りやあわかる。ふくらむ一方…入るより出ていく量がまだ多いんだ。

両足両腕の静脈から注入しちやあいるが、これでも足りない。

どのみちこれじゃあ、十数分後の死だ。

「……た、助けてくれよニヤトラン。どうすればいい?」

「血を止めるしかねえーだろ。間に合わせるしか…」

それと、おめー右手直せ! 失血でぶっ倒れちまうぞ!」

「え。あ、ああ……」

情けねえツ…なんて無力だ……

役立たずの足よりも役に立たないのは俺自身なのか？

泣き言タレてるヒマに死ぬ。走れ『フー・ファイターズ』！

無差別に肺とか大腸の穴をふさいでいく。

ああくそ、出口をなくした血管がふくらんでやがる！

つながなくては、直さなくては！

あああ……わからない。ちぎれちまった血管の配線がわからない！

血管の構造に興味なんか持ったことねえええええ

「助けてくれF・Fツ！教えてくれえええええ」

……記憶、記憶だ。胸をブチ抜かれたアナスイの記憶を！」

記憶を追う…大静脈か？粉砕した肋骨を巻き込んでボロクズになってんのは…

アナスイがブチ抜かれたのもその辺だ。平光ひなたも、同じ…に、見えるが！

間違えたら、たぶん死ぬ。メチャクチャにつながれたパイプはアチコチで破断するだ

ろうよ…

時間をかけても、やっぱり死ぬ。一番致命的な出血をしているのはここだ。

「あ、ああ、ああ。

う、ううううう」

絞りだせるのは意味のないうなり声だけだ。

目の前で消えるロウソク! 手の中を流れ落ちていく砂!

命が消えていく感覚が俺をもまた支配する…止める、止めるんだよ。

誰か、止めてくれよ。頼むよ…

『大切なのは! 日常の記憶の方だぜ…よく探せ!』

あたしは何をして過ごしてた? そいつを見るんだ』

…勉強している記憶を見つけた。

F・Fは人体を勉強していた。

医書をチョロまかしてきたり、『エートロ』の身体で実験したり…

『何してんだああーってめええーっ!』

『あ、エルメス。ちようどよかった…水とって、水』

『F・F、あんた…なに全身から血いシブいてんの?』

趣味ってんなら止めないけど、あんまし巻き込まれるのも、その…さあ』

『血管をつなぎ変えてみた。イケるかと思ってたところの四か所くらいダメだったけど。』

徐倫でもいいのよ。水ちようだい、水』

『わけわからねえダメージを負うな！新手のスタンド使いだと思っただろーがツてめー乾いて反省しやがれ！』

『悪かったって〜、水持ってかないで』

血管のつなぎ変え！そのものズバリの記憶じゃあないか！

…大静脈だ！大静脈で正しい…そして、付近の血管も『手本』との比較でよくわかる。  
F・Fは、ただのプランクトンで…やがて、プランクトンで傷口を埋めることを思いついた。

ただ埋めるだけで済まないケースもかなりある。

今の俺と同じ目に、F・Fは何度も遭っていた…：血管を再接続、開通。

大静脈も元通りにツギハギした。さらに表面を被膜する…問題なし。

『よし…：肺だ。砕け散った肋骨を少しずつ除去して戻す。

急ぐなよ？急ぐとそこがまた穴になる…取り除いて、確実にふさげ』

「了解だ……」

「誰と、話してんだ？……お前。大丈夫かよ」

「正確に、確実に。食い込んだ肋骨片を除去する」

肋骨片除去……完了。体内に流れちゃった破片も今、捕捉して戻した。

粉碎した骨を元通り直すのは、昨日、俺自身の身体で経験した通りのはずだ。

これは無数の『フリー・ファイターズ』それぞれに任せてしまえる。

『今の要領で大腸もできる。こっちは骨の破損もないようだ…』

腸捻転に気をつける! 必要以上に動かすな』

止血成功した右肺の血を少しずつ排出、ろ過、輸血しながら、破れた腸を修復していく。

こっちはF・Fも未経験だ。だが勉強の記憶にカンペがあつて、その状況から外れていない。

形成した糸状の塊で一直線に縫い留め、そこを軸として元通りに直していく。

問題ない…ここに關しては!

『おっと、気づいているか?』

こいつの血…白血球がメチャクチャ活発になつてのをよおー』

『気づけるのか? そんなことに…』

『気づけなきやあ、みすみす殺すことになる!』

腸からウンコが漏れ出しちまつてるんだよ、血中にタンマリと…

行きつく先は敗血性ショック…死ぬぜ』

「んなツ…『フリー・ファイターズ』ツ! 全部食っちゃまえ!」

そして、もっと増えるんだ、その養分で！」

『そうだ、それでいい！ますます強固に傷はふさがる！』

…さすがのあたしもウンコは食わねえぞ念のため。ゲロは飲んだけど』

致命的な部分はこれで解決した。あとは、死にはしないが厄介な傷を順にやる。

左足に突き刺さった木の枝に、脱臼して微妙にヒビが入った右腕。タンコブ。

それぞれ『記憶』を見ながら適切に対処する中で俺は気づく。

体内に展開する糸状の『フー・ファイターズ』…これは、空条徐倫のマネだ！

『ストーン・フリー』の糸になる能力のマネ！

猿マネと言っちゃまったらその通りなんだが……

この技で、ただのキズの詰め物どころか体内の手術すらも可能としている。

どれだけ積み重ねたんだ？どれだけ『思った』んだ？記憶が、全部を語ってる！

F・Fはそうやって、最終的には目玉の水晶体だって復元できるようになったんだ。

ただのプランクトンが増えるだけの能力で……ただのプランクトンを超えたんだ。

後ろを見た。卵のカラミたいにギザギザに切りそろえた、ショートカットの女がそこ

にはいた。

『そう、それが知性！それが思い出よ。』

思い出が勇気をくれる……あんたには、くれてやれない』



「お前のだからな、F・F。俺は、そこには行けない」

『あたしも、あんたのところには行けない。』

今のあたしは、記憶が作った鏡。誰かに伝えたかった何か。

…そのDISCはあんたのもの。あんたの勇気も、あんたのものよ。

この向こう見ず女は助かった! ……最後の仕上げに移る』

最後の仕上げ。心拍再開と、自発呼吸だ。

今は『フリー・ファイターズ』が無理やりに動かしているだけ。自発的じゃあない。

これが戻らなければ、今までのすべてが無駄ということ!

『ここまで来たあんたなら気づくはず!』

心臓が止まっちゃったのは誰だ?』

「……アナスイだ! お前は最後まで動かそうとしていた。

そして最後の最後にギリギリで成功……これは!」

『気づいたな? 空条承太郎の記憶だよ。完璧な心臓マツサージのやり方が載ってたぜ』

プッチ神父は死にかけのアナスイに空条承太郎のDISCを投げ入れていた。

アナスイの死に、承太郎のDISCを引きずらせるために…それを囿に、徐倫を引き

離すために。

その直後、最期の力でアナスイの肉体を修復しようとしたF・Fは、当然アクセスで

きたわけだ！

『自分で止めちまった自分の心臓を、自分のスタンドでマッサージして再動させる方法』に！

『フリー・ファイターズ』の人工筋肉は、もともと心臓を包むように展開している。

直接、そして最適のマッサージがこれで出来る。

『記憶』に従い心臓を驚掴み、放し、驚掴み、放し。

二十秒ほど。拍子抜けするほど簡単に鼓動が戻った。

三十秒様子見……鼓動継続、問題なし！

そして、人工呼吸の用意は必要なかった。待っていたかのように自発呼吸が再開した。

『やったな……あたしはこれで終わり。もう会うことはたぶんない』

「ま……待ってくれ、F・F！まだ俺は教わりきっちゃあ」

『あんたの勇氣はあんたのもの。さっき言っただろ！』

……空条承太郎の記憶は全部見ておけ。役には立たないかもしれないし、そっちの方がいい！

だが、DISCがここにあるってことは……最悪、ヤツがいる。ホワイトスネイクがな』  
「一体、何と戦うんだ……俺は？」

『それもあんたが決めること。戦ってもいいし、逃げたつていい…』

じゃあな。いい思い出を作れるように……あたしはここで、応援してやるぜ』

……………バシィツ!!

「うぐうつ?」

「やった! やつと反応したニャ……どうしたんだよ、魁!」

呼吸は戻ったぞ、血も止まった……こいつは助かったんだよな? なあーツ?」

ニャトラんだ。猫パンチをされたらしい。

気が付けば、俺はただぼんやりと空を眺めていたようだ。

言われるままに下を見下ろせば、横たわった平光ひなたが寝息を立てていた。

というよりも、気絶したままなんだな……あれだけの大怪我だ。

治されたところで消耗は激しいに決まっている。血だつて足りていないはず。

「……ああ、大丈夫だ。こいつは完璧に治っている。」

とはいっても、あらかたの傷を『フリー・ファイターズ』で修繕しただけだけだな」

「ハアア……ツ、一時はどうなるかと思っただぜ。」

メソメソ泣き出したと思っただら、あさつての方を見てブツブツ言いだすんだもんなあ

」

「F・Fが助けてくれた。って言ったたら、信じるか？お前…」  
すつときような顔をするニヤトラン。

いきなりオカルトな話を始める俺はアブないヤツだ…そうだよな。

だけど、ヒーリングアニマルだのプリキュアだのも、オカルトどころかマンガだもんな。

割とすぐに納得したみたたく頷いたニヤトランの後ろに、プリキュアが立った…ふたり？

青いのがいる…誰だ？見覚えはある気がする…見る目が厳しい。その目に覚えがある…

「じゃあ、そこもしつかり聞かせてもらおうかな。

戻ってきたときのあの状況。おめーの『策』とやらがウソだったと思えねえーからよ」

余計なことを気にしている余裕はもらえなかった。

キュアグレースが進み出て、目の前で変身をほどこいた。

「全部話して。納得いくように」

花寺のどかの両目が俺を凝視した。

……ごまかせない。ただ、俺はそう思った。

ここから先は、質問じゃあない。『尋問』だ。

## 黄金の魂を！

私は沢泉ちゆ。中学二年生。陸上部。

ハイジャンプをやれば負けない自信があるわ。

…そう、それだけ。ただそれだけの一般人なのよ私は。

それが、こんな目に遭うなんて……

ことは、一時間くらい前に遡るけど。

今日は学校が休校になっちゃったから、ハイジャンプの練習も出来ず。

そういうことならとウチ：旅館『沢泉』の業務をお手伝いしてただけど……

番頭の川井さんが、温泉の質がおかしいと言い出した。

私も、確におかしいと感じたから源泉まで一緒に見に行つたのよ。

そこに怪物がいた。

学校を休校に追いやつたらしい怪物が、源泉に取り付いて何かやっていた。

そしてその怪物はこつちを向くと、けがらわしい何かを吐きかけてきた！

川井さんはその直撃を受けて、今も気絶したまま……

私が背負うしかなかった。背負って、そのまま逃げるしかない。

逃げる私を追うように怪物はやってきた。

俊敏さなら私の上みたいね…でも、歩幅が違いすぎる。

歩幅が違うのに向こうは人間と大差ない挙動で迫ってくる。

到底勝ち目がなく、私は追い詰められた。

「ハア…ハアア…：…うううっ」

もう息が続かない。全身の筋肉も限界。

川井さんは別に太ってなんかいないけど、それでも50kgは確実にある。

私は消防士とかじゃあない。こんな重さを担いで全力疾走する訓練なんか、されてない。

むしろここまでよく走れたわ…：火事場の馬鹿力ってやつみたいね。

でも、それも打ち止め…：嫌よ、こんなところじゃあ終わりたくない。

あがなくなっちゃ…：どうすればいいの？

どんな決断も無駄。そう思いかけたところで、怪物が横倒しに転げた。

何かと思った。誰かが怪物を蹴りつけたみたいだった。

目で追う…：女の子だ。フリフリの服を着た、キラキラの女医さんだった。

不思議なのは、彼女にどこか既視感があること。

ピンクに輝く髪の毛の知り合いなんていないはずなのに。

さして時間も経たず、怪物が立ち上がった。しまったわね。今のうちに逃げておくべきだった…

「逃げて、ちゆち…逃げてください！」

女医さんが、何か聞き流せないことを言いかけた？

私の名前？そんなはずが…でも言う通り。戦える人がいるというなら、安心して逃げられる。

怪物が一撃を繰り出す。女医さんは逃げない、受け止める、なぜ…私がいるからじゃない！

走り出すと、背中の川井さんがうめき声を上げて目を覚ました。

「ウツ…お、お嬢さん。これは一体？」

「川井さん、よ、よかった！」

さっきの怪物が追ってきてます。走れるなら、あっちへ」

「お嬢さんはどうするんで？」

「二手に分かれましょう。どっちかが絶対に逃げ切つて、お母さんに知らせないと！」

怪物が出た、つて！あんなのが旅館まで来たら…怪我人どころじゃあ済みません」

「わ、わかったよ。お嬢さん、無事で！」

川井さんと逆方向に走る。ウチまでの最短コースは、あえて外す。



追ってきた怪物がウチまでついてきちゃうのが最悪！最悪パターン！

さっきの女医さんが戦ってくれている間に、ある程度は距離を離してしまわないと

……

「メツガアアア〜ツ！」

「きやあああああああああ」

「…あつ、グレース！人がいるラビ！殴り飛ばした先！」

逃げた先に怪物が背中中でスライディングしてきた！

巻き込まれるところだった…運が…いい！川井さんの方には行かなかつた！

あとは私が逃げ切りさえすればいい。

メキ メキメキ バキ！ グゴゴ

その不自然な音に気が付いて目をやったときには。

折れた木が私に向かってまさに倒れこもうとしていた。

あ、これは…『死ぬ』

まったく他人事みたいに、私はそう思った。

別に走馬灯なんか見なかつたわね……

グワツ バゴシャア！

破滅の音が収まって何秒か後、私は倒れているのに気付いた。

死んではいけないみたい。少し鈍い痛みがある…

でも、重さが全然ないのはどうして？

恐る恐る目を開けると、女医さんがいた。

どうなっているの？もつと注意して見る…背中よ！女医さんの背中に木が！

押し倒された私に四つん這いになって覆いかぶさっている女医さん。

「うう……あああああッ！」

痛みをこらえるような、それが気合を入れるような叫びを上げて、

背中の木を別方向に投げて押しやる女医さん。

間違いないわね。かばわれた！木に潰される私を、彼女は放っておかなかった！

でも、どれだけのダメージなの？たとえスゴイ体の持ち主だって言っても…

こんな木を丸ごと背中に受けて、無事でいられているの？

「…大丈夫？ちゅちゃん」

「あなたは……あなたは誰？どうして見覚えがあるの？

私はあなたを……『知っている』」

「グレース、動くラビ！メガビョーゲンがッ」

「メガア~~~~」

女医さんの背中越しに怪物が見えた。

巨大な足で私もろとも踏みつけようとしている!

女医さんが振り向いた時には速度が乗り切っていた。

女医さんの目の色が変わったのだけが、私には見えた。

バシィッ

跳ね除けられて地面を転がる私。そして。

ズドドオー

飛び散ってくる土砂の破片。

転がりが止まった。体を起こして目を開ける。

もう、言うまでもないわね。これは。

「あ、あ。う、う、う……」

「あら、マヌケ。この私を前にヨソ見ばかりしてるなんて…やっちゃいなさい。メガ

ビョーゲン」

「メツガビョウクゲン!」

ズドオ! バゴオ ドガッ

「か、かはッ、ああ、あ!」

連続で。連続で踏まれてる。

聞いたことがある…単純に最速でダメージを与えられるのは『踏みつけ』だって!

転がって抵抗できない相手を！一方的に！

しかも、何て言った？痛みも不利もかえりみずに助けに入ってくれた彼女が…マヌケ？

後ろで怪物に指示を出してるらしい、あのゾンビ色の女！

「グ、グレースがやられちゃうペエー！」

「加勢すんぞ！このままじゃあ全員やられちゃう！」

木々の間からふたつの何かが飛んできて怪物におどりかかる。

…あれは、しゃべる猫さんにペンギンさん！

「ウツサイわねえ。アンタらごときがなんだってのよ」

「ニャアアアアッ！」

「ペエエエーッ！」

ひとたまりもない。腕の一振りですげな飛ぶされた。

猫さんは私からはるか右手に…ペンギンさんが目の前に転がり落ちてくる。

ああ、なんてこと…すべてが繋がったわ。

見覚えがあるわけだわ。彼女は、あの女医さんはッ！

「花寺さん、どうしてッ！」

「に、逃げ……」

私は足元の石ころを握りしめた。

なんでもいい。花寺さんを解放しなければ。

起き上がったペンギンさんが、駆け寄ってくる。

敗色濃厚。顔にそう書いてあった。

「に、逃げるペエ。そんなものでどうにかなる相手じゃないペエ!」

「ええ、そうね。そうでしょうね……」

「あいつらの目的はボクたちだけだペエ、今なら逃げ切れるペエ」

「ええ、そうでしょうね……私だけなら、逃げ切れるでしょうね……」

でも、その可能性も今、ゼロになる。

少し震えた手で、私は賽を投げたのだから。

放物線を描いた石ころは、怪物の下アゴあたりに音を立ててぶつかつた。

うふふ、私つたら、何をしてるかわかつてるのかしら?

やっってしまったからふるえてきた!

「メツ、メガアアアア!」

「何してるんだペエエエエエエ!?」

「……お断りよ!」

そんなことをしたら……私は!私のことが!大嫌いになってしまう!

ここは、私のウチで……ここは、私の町！守りたいのよ私だって！

私は……戦うわ。誰にもゆずらない！」

恐ろしくてたまらない。全身に走る恐怖は隠せない。

自分を奮い立たせるために無理やりにも口に出しているこれは、それでもごまかしじゃあない。

追い詰められた捨て鉢でもない。戦ってやるわ。たった一ミリの勇氣でも！

「ハア……シラケるわねえ。地平線までフツ飛んで反省なさいな。」

「デジャバリの、ザアアアア……ツコ」

「メガビヨオオオゲン！」

ぐつ、あの構え……吐きかけてくる構え！

どうにか避けないと……ペンギンさんも一緒になくっちゃ！

ペンギンさんを抱えて脇に飛ばうとすると、猫さんが怪物の顔面に体当たりしたのが見えた。

……助かったわ。吐きかけられる黒い何かは空の彼方に飛んで行った。

「ペギタン！間違いいねえ！」

「わかつてるペエ！この人しかいないペエ！」

……違うペエ。『この人がいい』ペエ。ボクは『この人がいい』ペエ！」

腕の中にいたペンギンさんが少し離れると、かしこまったように私に向き直った。

何の話かしら。この場でするべき話なの? 私にわかるのは、この子がマジメ这件事情だけ。

「ちゆ、さん。ボクと一緒に:戦つてくれるペエ?」

「どうしたの? : : : どういうこと?」

「ボクは臆病で、泣いてばかりで、いつも自信が欲しいとばかり思つてるペエ: :

こんなボクでも: : :ちゆさんの力に、なれるペエ?」

元々、戦うつもりだった。私一人で勝つだなんて、それこそ無理。

でも、ここで答えるべきは、そんなんじやあななくつて: : :

私は知っているわ。昨日、見せてくれたじやない。

「: : : :戦うわ。私に力を貸してちょうだい。あなたの力を。」

苦しむ人に、手を差し伸べられる強さを! 私に、貸してちょうだい!

あなた、お名前は?」

「ペギタン。ペギタンだペエ」

ペンギンさん: : :ペギタンは、私にバトンのようなものを差し出した。

真っ白なそれは、さつき花寺さんが持っていたやつと同じ。

: : :なるほど、そういうことね!

「使い方を教えて」

「このボトルをセツトするペエ。まずはボクの指示通りに…」

青い光が立ち上る。

「スタート！」

「プリキュア・オペレーション！」

掲げたバトンが光を放ち、信じられない力が満ちる。

この光は清流。清らかな水の力だつて、説明されなくてもわかった。

光が糸になり形成した白衣は、今の私の使命の形！

…そうよね。強いだけじゃあ、あの怪物と変わらないもの。

私は、正しく、強くあるわ！

「交わるふたつの流れ、キュアフォンテーヌ！」

「ペエー！」

変身、完了ね。これはまた…可愛らしくなったものねえ私。

白衣の他は花寺さんと同じくフリフリのスカートで、私のは青が基調。

スカートは膝まで出てるけど、中身ギツシリだから戦つてる最中にヘンな心配はせずに済みそう。

さつきまで恐怖でガタガタいつてたのに調子いい話なんだけど…



今の私は、負ける気がしないわ。

いつまで花寺さんにのしかかっているのよ、怪物！

ギャン ドグシヤア！

ひとつ飛び、拳を叩き込む。冗談みたいな勢いと威力があった。

今の私は、たぶん：電信柱を蹴り折れるし、ブロック塀を握り潰せるでしょうね。

ヤラないわよソんなムイミなコト！

ともかく、花寺さんはこれであつさり自由になつたし！

キュアスキャンっていうので、助けるべき精霊さんの居場所もわかつた！

よろめきながらも復帰しかけた怪物の足を、起き上がった花寺さんが思い切り払う。

形勢逆転：もう、どうにもならないでしょうね。

「今だペエ、浄化するペエー！」

「ヒーリングゲージ、上昇：プリキュア！ヒーリング：ストリイームツ！」

指示通りにバトンを操作する手には、切り札を切る感覚があつて：

感覚に従つて解き放つたそれは、鉄砲水みたいになつて敵に殺到した！

水は：岩すら『うがつ』！

ギユワオオオオ ドコオ！

怪物をぶち抜いた青い光は、その向こう側で精霊さんをやさしく包み込んでいた。

「どうやら、必殺技……ってやつみたい。いえ、救うためなんだから必生技かしら？」  
「ヒューリン、グツバアアア……」

シユパアアア……ッ

怪物も、救われた幽霊みたいに消えていった。

指示を出してたゾンビ女も、いつの間にか消えていた。

……話は、これで終わりじゃあなかったのよね。

精霊さん……エレメントさんの無事を確認して、力をおすそ分けしてもらったのはいいけど、

花寺さんのワンちゃん……ヒーリングアニマルのラテの具合がそれでも悪いままで。

聞いてみたら、怪物がもう一体出てきている……公園の方に。

「そんな……ひなたちゃんとか鳴滝くんが危ない！」

「なんてこっただぜ！すでに狙われてやがったのかあーッ」

「そう考えるべきラビ。」

タイミングからして、ほとんどラビリンたちが出発した直後ラビ」

「あの話が全部聞かれてたら『詰み』だペエーッ」

「たぶん、それはないラビ。」

『能力』が狙いである場の話を聞いてたなら、こつちを追ってくるはずラビ。だって、DISCはラビリンたちが……」

…何の話をしているの？

ひなたちゃん、平光さんのことかしら？

それと、鳴滝魁？あいつが一体何の……

首を突っ込む機会を見ていたら、

何かに思い至った猫さん……ニヤトランの毛がブワツとふくれた。

「……あ、あのヤロウおおく、まさか!」

「何かわかったペエ、ニヤトラン」

「はずれてほしいぜ!この予想ははずれてほしい!」

今のままあいつがメガビョーゲンにやられちまったのなら……

あえて言うぜ……『死んだ』のなら!

守られちまうんだよ、DISCの秘密は!完ツペキに!」

「え……ど、どういうこと?……あ」

「DISCの現物はボクたちが持つてるペエ。」

知識を知ってるのは魁だけだから……

『そんなれば』ボクたちしか知らなくなるペエ」  
話の断片を捕まえるに：

もう黙っているにも飽きたわ。直球で聞く！

「よくわかつていない私が確認したいんだけど！

鳴滝魁が、自分で自分を『口封じ』しようとしていて！

そこに平光さんが巻き込まれてる！…それで、いいのね？」

「多分そうなってるペエ、ちゆ、もう一度変身するペエ」

…心ツ底、見下げ果てた男ね。

そう吐き捨てるのだけはこらえた。

角刈りトサカ頭からナスビのヘタ頭に変わっても、性根は変わらなかつたのね？

拡大自殺？無理心中？そんなことをするのなら、一人で勝手に…

駄目ね。そこから先は考えてはいけない。状況もわかつていないのに。

死だとか不幸を願うほど落ちぶれた覚えはないわ！

進んで関わりたくもないけど…平光さんのついでに助けるなら、かまわない。

正しくあるには、それが必要なものね。きつと。

「行こう。助けなきや」

「だな。もし予想通りだったら…あいつには『お手当て』が必要だかな」

「ペヘー」

「急ぐラビ」

当事者でないとはいえ、花寺さんは助けることを即答したし：

ヒーリンググアニマルのみんなは、なんか保護的みたいだし。

ま、そうよね。弱った後の姿しか知らないのなら、むしろ当然か。

私だって行くわ。平光さんは絶対助けるとして：

あいつの死体も見たくはないもの。

プリキュアの姿で全力疾走すると、公園までもすぐだったわね。

そして、最悪の事態だったことも即座に理解した。

破壊された噴水、その先で、血の泡を吐いて動かなくなっている誰か…平光さん。

そのすぐそばには、さっきのと似た怪物と、

服と皮膚とがスタボロになった鳴滝魁がいて。

鳴滝魁の右手を、今…：…さっきのゾンビ女の仲間とおぼしき少年が、へし折った。

指がもげかかっている断面なんて初めて見た。

肉と皮でプランプランとぶら下がってる…

花寺さんが、無言で飛び出した。

ひとつ飛びで、少年の顔面に、蹴り。

顔面に足跡が思い切りついた少年は地面を転がりながら吹っ飛んでいき、

その間の数秒間で役割分担。私は、怪物を引き受ける。

どうもダメージを受けているらしい怪物を殴り飛ばし、花寺さんに目をやると……

「ううう……あああああ！」

ふううツ、うおおおあああああああああああ！」

「何だ、こいつの、パワーツ……昨日の今日で」

怒りとも嘆きともつかないような叫びと共に拳を叩きつけまくっていた。

私も似たような気分よ。だからこそ冷静に決めてやるわ。

救急車！それ以外に私ができることはないし、

怪物どもがいちやあ救急車は来られない！

その後、苦戦する要素はゼロだった。語る必要もないくらい。

ゾンビ少年も追っ返されたみたいね。

助けたエレメントさんには少し待ってもらうことにして、

救急車を呼ぼうと平光さんに駆け寄ると……

吐いてた血も収まり、普通に寝息を立てていた。なぜ？

「全部話して。納得いくように」

変身を解いた花寺さんが、有無を言わせない雰囲気で鳴滝魁に詰め寄った。

これは…またしばらく、黙って見ているしかないわね。

平光さんをかばって戦っているようには見えただけ。

場合によっては、絶対に許せない。

これは首輪か？

「これだけは最初に言わせろ。こいつが起きる前でなくつちやあならないからな」  
もう俺には逃げる気も抵抗する気もない。

少なくとも、こいつらをダメくらかしたことは明るみに出ちまったようだ。

ここで逃亡を選んだなら、その先にはそれこそ無意味な死しかない。

平光ひなたを射程外に出しちまう。F・Fの苦勞が完全にパーってことだ。

じゃあ、かついで逃げるか？バカだろ、それ：誘拐犯になるだけで、即座に鎮圧で終了だな。

「俺は、こいつをプリキュアに推薦する。

こいつは、俺の『前科』を知っていたくせに、何も考えず助けに入ってきた。

ヒーローとしては充分だと思う」

「覚えてはおくぜ」

ニヤトランが答えた。

ペギタンは、すでにパートナーを見つけていた。

見覚えがあるはずだった。沢泉ちゆだったんだからな。



さつきまでの二十分弱の間に決まったらしいな。

だから、プリキユア候補が必要なのは、あとはコイツだけなんだが……  
大して食いつかれもせずに脇にやられた。

「だけどよ、わかつてるよな？」

今のおめーから、そいつを聞き入れる理由も信用もねえーってことをよ  
「そう……だな」

「それがイヤなら、こつから先でツマンネー嘘つくんじゃあねえーぞ。

黙秘も拒否も一切許さねー。いいよな！」

「……わかった。好きに聞きゃあいい」

「じゃあ、聞くね。わたし達と別れてから何があつたの？」

順番に話して」

場の仕切りが花寺のどかに移った。

年貢の納め時つてやつだな……そんなフウに思いながら話した。

まず、この平光ひなたを適当に追い払ったこと。

着信履歴があるから、これは花寺のどかにもすぐわかった。

追い払った直後にビョーゲズのダルイゼンが現れ、

メガビョーゲンをけしかけられたこと。

そして俺はその状況を『次善』だと判断し、適当なところで死のうとしたこと。だがそれを果たす前に平光ひなたが戻ってきて、助けに入ってしまったこと。

俺としては、道連れを作るなんてまっぴらごめんなので、逃がすために戦おうとしたこと。

そうしたら、平光ひなたがスタンド使いであることが発覚した…

『太陽』のスタンドがメガビョーゲンと渡り合える破壊力を持つていたため、撃退する方向に舵を切ったが、最終的に俺が足を引く張る形になり、

例の発作を起こした俺を助けようとしたばかりに、平光ひなたが重傷を負ったこと。

事ここに至ってはフリー・ファイターズのDISCなしに救助は不能と判断し、

そこを以てこの場の死だけは絶対に許されなくなったこと。

プリキユアである花寺のどかが戻ってくるまでダライゼンに食い下がろうとしたこと。

「そして、花寺のどか…お前が来た！DISCも戻ってきた…」

それを使って、かろうじて平光ひなたの治療に成功した。以上、だ」

「待てよ。F・Fが助けてくれたってのはどうしたよ」

ニヤトランの突っ込みが入る。

オカルトを入れたらややこしい話になるだけだぞ？

だが黙秘も拒否も許さないと言われた。なら話そう。

どう取るかなんて、知るか。

「……平光ひなたの容態は、まもなく死ぬような状態だった。

ほとんど絶望のその場しのぎを続けていたら、F・Fが頭の中に話しかけてきた。

付きっ切りでアドバイスをもらって、必死でついていってたら……平光ひなたは助かった。

それだけだ。それだけの、俺から見た事実だ！証明なんかできないね！」

「そこはオレも証言するぜ。メソメソ泣いてたと思ったら、ウツロな目でブツブツ言いだしてよ。

そこからだぜ。コイツの容態が見る見る良くなっていったのはよおー」

すぴー。ベンチの上から寝息が答えた。

今更だが場所は移ってる。さっきの現場からかなり離れた位置のベンチにだ。

あんなところに長時間留まったら事情聴取待たなすだつてんでな……これ、沢泉ちゆの提案な。

戦闘中の泥まみれについては解決した。『フー・ファイターズ』でヨゴレを強力に分解だ！

ホンツトに幸いなことに、平光ひなたの服が破けたりとかはしていないかった。

それは『幸』だが：引き換えの『不幸』が、今かな…？

とにかく俺は、平光ひなたを脇に置いてベンチに座らされ、

周囲をヒーリングアニマル：改め、プリキュア御一行に取り囲まれているのだ。

……話は続く。

「…うん、わかった。納得できないけど、わかった。

『次善』って何？ どうして死のうとなんてしたの？」

「有効な反撃手段を用意できた上で、ダルイゼンなりメガビョーゲンなりを撃退する。

そこまできかなくとも逃げ切る。これが『最善』だ。これはわかるよな」

「うん」

「有効な反撃手段がなかったら負ける。

そこでDISCも持っていたらほぼ確実に調べられて、暴かれて取られる。

これは『最悪』のパターンだ。今日の話し合いで可能性が出てきた『最悪』がこれだな？」

「うん……」

目を細めた花寺のどかは、フウ、と不快げな溜息を漏らした。

「だからDISCを渡した。これで『最悪』は無くなる。

それでもDISCの情報は俺自身が知っている。

捕まった俺が拷問だとか洗脳に屈しちまったら同じことで、『最悪』の次に悪い！

逆を言えば、俺さえいなけりゃあそれでいい。

俺が情報ごとこの世から消えれば、襲ってきたビョーゲンズはただバカを見るだけ！

フリー・ファイターズはプリキュアが持っているから実質何も失わない。『次善』だら  
？」

「何も、失わない……って……鳴滝くんの生命が無くなるじゃない」

「俺だって無意味に死ぬつもりはないね。俺にとってはそれこそが『最悪』なんだから  
な。

生命ある限り……『最善』の目を引き続ける限り、俺は囮として機能できる。

ま……理想だな、これは！」

「わかんないよ。あなたは、何がしたいの？」

何がしたいの、か。

答えることをためらった。俺は明らかに、こいつと相容れない。だから、だましました。  
だがもう、バレている。さっきの反応は明らかに、俺の答えを事前に予測していた。  
つまり結局、正直に話す以外ない。

くそ、ヒトをハダカにムクみたいだなマネしやがって……

だが正当な報復だ。答えてやるよ！そんなに聞きたいんなら！

「意味のある『死』がほしい！」

この足が役立たずになった日から、俺は死んだも同然だ。

でも、DISCには希望があった。F・Fは納得して死んだんだよ…

俺も納得したい。死ぬことに、俺が信じられる価値がほしい」

「あなた…最低ね」

横から話をぶった斬ったのは、ほとんど黙って話を聞いていた沢泉ちゆだった。

俺は元々最低だ。わかりきったことをワザワザ言うこともないだろう？

いや、ただの罵倒か。そうだな、それは有りだ。

せいぜいウサを晴らすんだな。お前にはその資格がある…存分にキズをつけていけ。

「実家の権力の次は、プリキュアの力に頼るつもり？」

「……。なんでそうなるんだ？」

「さっきの話、自分の都合しか見てないじゃないの。最初から最後まで！」

なんで花寺さんが、あなたなんかの生命をしよい込まなきやあいけないの？

なにが意味のある『死』よ。後始末は全部、私たち持ちじゃない…冗談じゃあないわ

！

「後始末なんかまったく必要ないだろ。」

クソ野郎が一人死んだ。それでおしまいだ……みんな喜ぶ」

「それはゲスの考えよ！一緒にしないで！」

「そうだよ。ゲスとつるむなよ。すこ中のホープ」

「ぐツ……この！」

「……ラビリンから！ラビリンからひと言、言っておくラビー！」

さらにラビリンが飛び込んできて、話をぶった斬りにかかった。

俺としちゃあ、もうここで決定的な決裂、さようならでもいいんだがな。

疲れるだろ、こんなやつを相手にしてさ……

「まず、あなたの言う『最善』も『次善』も、ラビリンたちにとっては『論外』ラビ。

無防備な仲間を助けられないで、しかもそれを好都合に思うなんて……ビョーゲンズ以下ラビ。

そんなの、もうプリキュアでもないし、ヒーリング・アニマルでもないラビ」

「結果さえ正しければ、お前たちは正しいさ。つまらないことにこだわると負けるぜ」

「うう……完全にヘソ曲げてるラビ」

「もう、これ以上は……頭を冷やして出直すべきだ。ペエ。」

でも、魁。ボクは魁に死んでほしくなんかない。ペエ」

安い文句だな。どうせおためごかしなんだろ。

心底うざったくて、そちらを見てペギタンの顔を見ると。

：出かけた言葉が、喉の奥に引っ込んでいった。

こいつは、過呼吸の俺に辛抱強く付き合ってたんだ。

というか、ラビリンとラテ以外の全員がそうだ。

その他、面倒をかけること多々：病院とか、よく付き合ってくれたもんだよ。

おまけに今日、俺と平光ひなたを助けたのは誰だ、って話だ。

そして俺自身それをアテにして、最後にはみつともなく助けを求めて叫んだよな？

そのくせに今の物言いは……結果の正しさを見るんなら、この場で一番間違ってるの

は誰だよ？

イライラが一気に冷却していった。代わりにいたたまれなくなった。

死んでいればこんなこと、考えずに済んだのに。

俺はうつむいて黙ることになった。二十秒くらいの気まずい沈黙。

「俺には、わからない……でも、今。

俺がお前らを侮辱しちまったことだけはわかったよ。

そこは、悪かった。すまなかった」

「……今はそれでいいわ。私はね」

沢泉ちゆが、まず応えた。



お前が気まずそうにする必要がどこにあるんだ。

おずおずと、花寺のどかが進み出る。

「わたしもそれでいい、けど…ひとつだけ聞かせて」

うなずき、促す。

少なくとも、俺みたいに決裂を望んでるやつは誰もいないみたいだな…

「どうして、ひなたちゃんを助けたの？」

「巻き添えにしたくなかったからだ。」

俺の巻き添えになろうものなら、それは最悪よりもひどい『無』だ。

俺は、生まれてきたこと自体が間違이었다ことになる…それだけだ」

「それだけ…そっか。わかった。」

鳴滝くん、ありがとう！」

「ん……はあ？」

「鳴滝くんのおかげで、わたしの友達が助かったんだよ」

「あ、あー。…そりゃ、どうも」

そもそも、俺がいなきやあ、平光ひなただつてケガもしなかつたと思うんだがね。

そこの所をどう思っているのか、花寺のどか……

満面の笑みは本気か、それとも芝居か。

こいつはたぶん、必要であれば嘘をつく奴だと思っただし、善性に基づいて。俺とは違う。

ま、むやみにつついて話を蒸し返す必要はないな。

「友達を助けてくれた人が死ぬなんて、わたしは悲しいよ。

だから、今回みたいなことはもうやめて。

ビョーゲンズが現れたら、わたしを呼んで。ね？」

キレーにシメにかかりやがったこいつ。

そしてもう、俺にこいつを拒絶する術はない。

死んだら迷惑だと明言して縛ってきやがってる。

『誰の迷惑にもならない』理屈が消滅した。

ああ、もう…俺の自由になる生命じゃあないのか。釈然としない。

「……………わかった」

その後、すぐにスマホの番号を交換された。

電話帳の登録者74人目だな。

もつとも、他の連中と連絡を取ったのは、去年の退院直後が最後だから、

事実上、ただのメモリの肥やしだな…他の73人。

確かなのは、この花寺のどかは、かつての他の連中みたいにアゴで使えないってこと

だ。

俺はもう、お願いして慈悲にすぎる立場でしかない……弱いよなあ、俺。今更すぎる。花寺のどか。お前は好きに与えて、好きに奪える。俺からな。かつての俺のように。

俺から取れるものなんか何も無いはずなんだが、まさか生命を握られるとは。嘘はずいぶん高くついたな。

憂鬱だった。こいつは俺を悪いようにはしないだろう。そうは思っても、だ。

ようこそ、首輪付きの俺。いや、久しぶり、かな？

腰を下ろしているラテに妙に親近感が湧いた。向こうは不審な目を向けてきたがな

！  
 ここですよやく、平光ひなたが目を覚ました。

「ン……うう……ン……あ、あれっ？怪物は？」

「正義の味方が倒してくれたよ！通りすがりのな！」

「えっ、何それ？なんで起こしてくんないかなあ……ツ」

ガバツと起きだして迫ってくる。

いきなりやかましいやつ！今まで寝てて良かったよホントに。

「ひなたちゃん！体は大丈夫なの？」

「あ、のどかつち。体って……あ、そういえばあかし、怪物に……う、ううッ！」

花寺のどかの言葉をきっかけに思い出したようだ。自分がどういふ状態にあつたかを。

目の色が恐怖一色になって、自分の体のあちこちを探っている。

「そ、そうだよ。あたし死んだじゃん。ゼツタイ助からなかったじゃん！ノドに血がつつかえて、頭が真っ白になっていったの覚えてるよ？」

つてことは、あたし……ユーレイ？ゾンビ？えええッ？」

「生きてるつての！俺の能力は『治療』だ！

怪物が追つ払われたからギリギリ間に合つた。わかつた？」

微生物うんぬんをここで言い出しても絶対理解されねえ。

とにかくとにかく単純化しないと話が進まないのはわかりきっていた。

ウソさえつかなきやあそれでいいだろ。

「えつ、てえつことはあ……命の恩人じゃん！」

「こつちに寄るな！オレがどういふヤツか、忘れたのか？」

「悪いウワサはスツゴイ聞いてたから警戒はしてたけどさ。

アンタ結局何もしてないし……今は恩人でいいと思うな。

あつ、のどかつちストーリーキングしてたっけ？」

よし、そこは無視する。

話があちこちに飛び火されたら、たまらん。

「それでも、必要以上に寄るのはやめとけ。

鼻つまみものと関わると周りから冷たくされるぞ」

「……ン？」

「鼻つまんで首をかしげるな！

ああ……もういい！今は正義の味方の話を聞いとけ！」

誰かこいつに辞書を買ってやれ！読まないだろうけど！

それより正義の味方だ。二人の方を見る。

二人ともキョトンとしている。話を振られると思っていなかったらしい。

「おい……もう無関係じゃあないぞ、こいつ。

俺と同じスタンド使いだということは、俺と同じように狙われる！

守れるやつがいるとしたら、プリキュアだけだ。

秘密にしたまま守り切るのは、かなり厳しいと思うんだが……どうよ？

『友達』の花寺のどかさん？」

「ちよつ、あなた、何を勝手に」

「……うん、そうだね。危ないよね」

戸惑いをすぐに収めた花寺のどかは、平光ひなたに歩み寄っていき、

いきなりその額に手をかぶせた。

「な、何?のどかつち、いきなり…ハンドパワー?」

「たしか、この辺で…つかんだ!」

そして、平光ひなたの額から取り出したのはDISC。

やつぱりか。俺と同じだ…生まれついでスタンド使いじゃあない。

「ええええ…何それ!あたしの頭から、それ何?」

ブルーレイにしては大きいし…手品?」

「花寺さん、なんなの、それ…」

「これで二枚目。もう、偶然なんかじゃあないよね。

誰かがスタンド能力をばらまいてる!」

「ホワイトスネイク…か?」

「神父さん本人か、DISCをたくさん持つてる誰か、かな…」

でも、目的は何?スタンド能力で、その人は何をさせようとしてるの?

……うぐう!」

バチーン

話しながら、花寺のどかは自分の頭にそのDISCを押し込んだ。

その全体が頭の中に納まったように見えた次の瞬間、花寺のどかはその場にずっこけ



何これ？何これ？万国ビックリ動物！

カワイイーリーーツ、スゴーリーイ！」

目もあてられないほどの大騒ぎをしやがって話の腰が盛大にへし折れた。

沢泉ちゆが、ここでモノスゴく頼りになったおかげでなんとか進んだけどな。

「平光さん！話が進まないでしょう？騒いでいいけど後にして」

「…ゴメンナサイ」

ここでプリキュアなんかに変身したらどう騒がれるかわかったもんじゃあなく、変身して、常人を圧倒するパワーでビョーゲンズと戦えることだけを説明して、日が傾いてきたのでお開きになった。

たぶん、あいつの中のビョーゲンズの認識は侵略宇宙人のまま変わってない。

大差ないっちゃあそうだろうけど。

帰途につく。ニヤトランは、今日は花寺のどかの家に帰った。

俺はというと…まだ仕事があるんだな、これが。

「ぶーぶー、イイじゃん変身くらい見してくれたってえー」

「お前がハシヤギすぎるからだ！楽しみは後に取っとけ」

「ハアー、しよーがないかあ。で、アンタどうすんの？」

今日一日は、離れすぎたらあたしが死ぬ、って言ってたけど…」



「50mだ！50mまでは、お前の体に俺の能力が及ぶ！

安全をとって、お前の家から30mくらいの距離でジツとしてるよ。

あんまウロウロすんなよ」

「ジツとしてるって、ドコで？知り合いでもいんの？」

「そんなとこだ。気にしないでもいい」

「ありがとね。いつか恩は返すからさあー」

生命があつた、という意味では助けられたのはむしろ俺になるんだがなあ。

ありがたいかはまた別だ。明日もきつと苦悩する。とはいえ恩は恩なんだ。

その分の感謝は今日一日の、フー・ファイターズ付きっ切りの看護で返そう。

F・Fは徐倫が遠く離れても、ふさいだ傷に問題が起こらない制御を知っていた。

だが俺は使い始めたばかり、しかもF・Fの方法論がそのまま通じるとは限らない。

その意味でも、これはいつか必ず経験する必要があることだ。

花寺のどかの下についてた今となってはな。

平光ひなたの家のかなり離れた位置で別れた俺は、ほどなく適当な空き地を発見。

フー・ファイターズを足から展開、ドリルを作って土砂を掘り上げ土中に埋まった。

どうせもう台無し of 服だから土まみれになっても何も惜しくないね。

あとは鼻と口からシュノーケルを作って伸ばし、明日の日の出を待つだけだ。

腹が減った……。一日くらい抜いても死にはしないけど。

それにしても土つてのは思ってたより冷たい。

死んで感じる世界はこれか……。やっぱり、死ななくてよかった、かな？

治療に集中だ。万が一、いきなり能力が解除されても死なないように、

大静脈の破損部へ重点的に、全身から細胞をかき集めてきて固めていく……

全部終わったのは、たぶん深夜一時頃。俺自身もまた、泥のように眠った。

「……ブボボアガガオゲエエエ……ッ!!」

翌日、ブ男とホウキ頭に立ちションベンひっかけられる夢を見て飛び起きた。

何バカ笑いしてんのお前ら！ユメにモンクいつてもしよーがねーけど！

# プリキュア・ピュリフィケーション!—その1

「おはよ、タツキー」

ア然とした。

というより、俺に言われていると思わず、周りをキョロキョロしちまった。

学校の廊下で声をかけてきたのは平光ひなた。

「……お、おう」

思わずキョドツた返事を返した俺は悪くない。

よくそこまで気安くなれるもんだな、昨日の今日で。

…そうだよ、俺は恩人だったな…居心地が悪い、心臓に生ぬるいミミズがのたくつて  
るみたいだ。

ああそうだ、昔の俺ならどうしたっけ。ああ、エラソーに無視したっけな。

そのくせアイサツしねーザコ野郎はナンクセつけてシメて…参考になるか、こんな  
もん。

「おはよう。鳴滝くん」

「……おはよう」

後ろから続いて花寺のどかが来て、気が進まなさそうに沢泉ちゆも来た。

「……ああ……おはよう」

返すものは返して、とつとと撤退を決め込んだ俺。

何考えてんだアイツら。周り中人、人、人だらけだろーがッ

俺と関わりと、どういうウワサになるかわからないんだぞ！

それをちよつとでも考え……ないだろうやつが明らかに一人。

あとの二人は引きずられたただけだな。

一人は、このままじゃ孤立させるかも、って判断してイヤイヤ貧乏クジ引いたわけだ。

残った一人は……実際のところ、どういうつもりなんだか。一番わからない。

やわらかい笑顔のウソのなさ。俺にはそれがうさんくさくさく思えてしまうんだ。

きつと、穢れた人間のひがみなんだろうな……

物思いにフケツてる場合じゃあないだろう。まずはやめさせることだ！

教室まで来てショートメールを打つ。

俺を気にするやつなんか誰もいないから文面を覗かれる心配なんか……

あつ、ウロンな目で見てるヤツが何人かいる。さっきの目撃者だろうか？

あのカメラぶら下げたジョニー・デップくずれのダセエヤツ……あいつは！

名前なんだっけ……とにかく、知りたがりの煙たがられ野郎だ！

…いや、オレほどじゃあねーけどさ

チクシヨオメンドくせえ！これ以上大ごとになる前に止めねえと。

『必要以上に俺に関わらないようにしてください。』

すでに何人かが俺を胡乱な目で見ており、

あなた方が同類視されるかもしれないかもしれません。そうなる前に。』

始業直前あたりで回答がきた。

『わかりました。打ち合わせは放課後に校外でしましょう。』

ちゅちゃんから伝言です。卑屈な態度をとった方が疑われるそうです。

ひなたちゃんも楽しみにしてます。』

…ああ、わかる。わかるさ。オドオドしてるヤツとか格好のマトだもんない！

まさか俺がそうなるとは思わなかったよなあー。誰のせいだよ？…ほぼ俺のせい。

フー・ファイターズのDISCがある以上、向こうも俺に関わらざるを得ない。

DISCだけ取り上げて死なせた方が得だろうけど、

個人的な信条から俺を死なせたくないんだと……

考えてみれば、俺はあいつらをダシに『気持ちのイイ』死を遂げようとしたわけだし。

あつちが被害者で迷惑しかしてない。

今、生きていて不始末のケツをぬぐってもらった俺が憂鬱に思うのは…バカにした話

だな、これ。

生き延びて恥をかくのは……、一種の罰つてとこか。

オレのモノログなんざどうでもいいんだ、飛べ！放課後に！

「よかつた、ここは閉まってなくて！」

「よく考えなくても当然よね。噴水が壊されるなんて怪事件があつたんだもの」

「…アハハ、もしかしなくてもあたブツ」

「余計なこと言わないで、どうなつても知らないわよ」

「ムグ、ムグ〜！」

放課後、公園近くの展望台に遅れてやってきた俺は三人の後ろ姿を見つけた。それと犬一匹。

沢泉ちゆが今言っている通り、公園自体は今閉鎖されてしまっている。

学校に引き続き、噴水が、何者かにより破壊された。

こっちは、何をどうやって破壊したのかすらも理解できないだろう。

スタンドは、スタンド使い以外には見えないし聞こえないんだからな…

今、すこやか市全体がものものしい雰囲気にも包まれつつある感があるな。

温泉街だろ、ここ？ダメージでかいよな…

「遅れた、すまない」

「あ、タツキー、おうっす」

「大丈夫だよ。急ぎたくても急げないもんね」

「…さっそく始めましょう。もうすぐ日が傾くわ」

放課後すぐ駆け付けたとしても、そんな時間になる。周りに人はほぼいない。

平日ならそんなもんだ。沢泉ちゆは、おそらく部活を抜けてきてる。

待ち合わせる相手が俺ということもあるが…ピリピリするのも仕方ないな。

で、調整したのは花寺のどかだな、当然…

こいつは偽善者だとしても、とてつもなく気合が入った偽善者だ。

支払った労力に値する以上のことを、俺はやる必要がある。

「平光ひなた」

「昨日から思ったけどさあー、ナニそのフルネーム呼び！

教師？センコーキどり？」

「…最終的なチェックを今した。身体は問題ない。

俺が能力を解除しても問題ない状態まで持ち直したな」

「ン…ありがとー！」

「血が足りてないと思うから、しばらくは運動を避けて回復を待つんだな…

これで本題に移れるな。まずはこのD I S Cを『見て』もらおう」

D I S Cを取り出しても問題ない状態でなくっちゃ出来ないことだ。

射程外に外れたフー・ファイターズは『休眠状態』になるだけだったが、

D I S Cを外してどうなるかは正直わからないからな。

最悪、根こそぎ消えて、瞬間、平光ひなたは血を吐いて死ぬんだ。

それだけは避けられたようだ。

D I S Cを外した…フー・ファイターズが感知できなくなる。

それをまずは、沢泉ちゆに手渡す。特に嫌がられることもなかった。

「こうしろってことね」

ためらいなくD I S Cを額に運び、頭蓋の中に吸い取った。

タダモノじゃあないな、こいつも。プリキュアなんてモノになるわけだよ。

顔をゆがめて、ふらつき、地面に手をつく…花寺のどかに事前に聞いてたな、これは。

こうなると予想していたような対応をしているのを見ていてわかる。

「なるほどね、イヤでもわかったわ。スタンドのことが。」

スタンドをばらまいてるっていうのは…あいつね、『ホワイトスネイク』！」

「確認したい。今、平光ひなたの体内にあるフー・ファイターズ…お前、認識できるか？」



「……認識できるわね。動かすことも可能よ。」

そう、あなたの体内にもびっしりいる…

恐ろしい…おぞましいわ!あなたがこんな力を手にしていたことがツ

「ちっ…ちゅちー!なんでそんなこと」

「でも、こうしてみてもわかることもある!

あなたは、平光さんを操り人形にはしなかった…助けるためだけに使ったのは嘘じゃない。  
あない。

それに免じて…あなたを信用するわ」

「操り、人形?…なにそれ」

「後でお前も見ると、平光ひなた。」

そして、昨日がどれだけやばかったのかを理解しろ」

ある意味、ここからこそが本題だ。

昨日まで、俺自身までもが存在を認識していなかったもの。

「沢泉ちゆ。F・Fの最期を探るんだ。そこに『空条承太郎』の記憶がある」

「……あったわ。正直、頭がどうにかなりそうね。」

吸血鬼だの幽霊だの、顔を変えて潜んだ殺人鬼だの……どういいう人生送ってるのよこの人!?

再会した友達が亀に取り憑い…イイカゲンにしてちようだいッ!!

これ知って私にどうしろっていうの!？」

「いや、昨日な…F・Fがそれだけは知っておけって言うから。

俺だつて途方に暮れたよ正直!土の中で…」

「情報が多すぎる…今、何がどーこーって反応するのは無理よ。

パス。平光さんにパス。これ以上聞かないで!」

「その前に花寺のどか、な。まだ知らねーから!」

キレ散らかした沢泉ちゆからDISCを受け取り、

もの欲しそーな平光ひなたをスルーして花寺のどかに手渡す。

無言でDISCを頭に入れた彼女は、数秒して脳ミソから湯気を吐いた。

顔がトロけるチーズみたいになつてる。

「ぐへえぐへえ、何これぐへえ」

「ぐへえー、つてお前…いや、わかるけど」

「プリキュアとかビョーゲンズとか、結構スゴイことに巻き込まれたと思つてたけど…

それすらカスむよ、この人の人生…ムチャクチャすぎるよ」

あつ、でも『星の王子さま』好きなんだね。わたしも好きだよ『星の王子さま』」

「だよなあー、ヒーローではあるが、マネしたくはないっつーか…ムリに共通点探すな。

それと…出てきていーぞ、ラビリン、ペギタンにニヤトラン。いるんだろ？」  
藪の中から、気が進まなさそーにペギタンから出てきた。

続いて、ラビリンにニヤトラン。ラテは最初からいる。

…わかってんのか？ お前も見らんぞ？ 他人事みてーに草ムラ転げんな！

「見ろっっていうペエ？」

「むしろ一番見るべきだろお前ら。この超常現象どもー！」

「うわーキズつくなーおい…見るよ。元からそのつもりだぜ」

死んだ目で半笑いの花寺のどかが、これまた無言でニヤトランの額にDISCを刺した。

猫のアゴが外れるのを初めて見た。

「なんだよコレ。広すぎねーか、世の中…」

『猫草』ってなんだよ？ 何がどーなったらあんな生き物ができんだよ」

「な、なんかスゴく見たくないラビ。でも、見たいよーな気も…」

「ペンギンは一体どうなってるペエ」

幸い、ウサギについては小学校の頃に飼育当番で抱っこしただけが接点だった。

ペンギンについてはかなりあった。海洋冒険家と博士の肩書もあって、

水族館で講演したこともあったし、南米最南端のペンギンコロニーを訪ねて和んだこ

ともあった。

どつちにせよ、ビックリ生物はいなかった。よかつたなお前ら。だがなラテ。お前はある意味例外だ。

D I S C を刺されたラテの反応は…意外にも好印象。

「ワウ？」

目がパチパチと瞬きしては輝いている。

花寺のどかが例の聴診器を取り出し、聞くと。

『イギーさん、カツコイイラテ』

「…だつて」

「マジか……」

『コーヒーガム、食べてみたいラテ』

「ダメだよ、それはダメ」

「アレは不良ラビーンツ！」

「ま、まあ、命をかけて友達を救った生き様はイイよな！

ラテ様もお目が高いってことでココはひとつ！」

ニユーヨーク野良犬界の帝王だもんな、アレ。

ううむ、当然の成り行きなのか、これ…あんま納得できん。



目をギラギラ光らせて奇声を上げた。

ビビッた花寺のどかが尻餅をついた。

「何これ、何これ、何これエエエーッ

お母さんのためにエジプトまで旅、打倒吸血鬼D I O？

リーゼントにーちゃんと一緒に町の平和を守る戦い？

アメリカの、無実の罪でハメられた徐倫ちゃんを守って戦う？

F・Fも徐倫ちゃんのために戦う！

スゴイ、スゴイ、スゴイイーッ

こんなの、どんなマンガやドラマでも見られない！

こんなスゴイ体験！サイッコロー！

えっ、岸部露伴？マンガ家？知らない…チエックしよーッと！

「お前ええー、…どこまで危機感ねえんだよ」

俺も地べたにずり落ちた。

あ、いちいち助け起こさなくていいからな、花寺のどか。

松葉杖あるんだから立てる、立てるって。

「楽しんでるところ悪いんだけど…そこの鳴滝魁の言う通りよ。

それはたぶん、この世界で現実に起こったことよ。

これがたちの悪い作り物だっていうのはありえないわ。現代の人間には無理!

「というか、あなたのスタンドらしきものを私は見たわよ、サウジアラビアの砂漠で!」  
「ちゅちゅー、そんなトコに旅行したの?」

「DISCの! 承太郎さんの記憶よ!」

卑怯者、腐れ男のステイラー・ダンのちよつと後!

ほら、ラクダで砂漠を突っ切るところ!」

この場で気づいてないのお前だけじゃあねーかな。平光ひなた。

しばらく記憶を探ったのだろう、神妙な顔で黙った後。

梅干しが突然口の中に溢れかえったみたいな顔をしてから苦情をタレた。

「……ヒドすぎない?」

あのアラビアデブのスタンドがあたしに?

石投げつけられたダメで終わっちゃったじゃん、あいつ!」

「問題はそこじゃあなくってだなあ!」

そのスタンドを取り出して、お前にくれたのは誰だつてことになる?」

「……………ホワイトスネイク? しかないよね」

「その目的がわからない。わからないが、お前に何かさせようとしてるんだ。

無意味に与えてサヨウナラなんて、そんなわけがない!」

「どゆこと？」

「スタンドを知らないビョーゲンズだって、俺とかお前を捕まえて調べようとしている。それとは別に、正体も目的もわからない敵が、この町にもうひとついると言っているんだ。」

善良な目的で動いているとは思えないね！

警戒して備えなきやあ、どうされるかわからない！」

無意味に怖がらせるつもりもないが、言っておかなきゃあならないな。

遠からず自力でたどり着きはするだろう。でもそれじゃあ遅いんだ。

「この際だから言っておく。」

F・Fが徐倫との闘いでやった攻撃を一通り思い出せ。

さつき沢泉ちゆが言った『操り人形』：昨日も、今も、お前はいつでもそうなった。

俺がその気になりさえすればな」

言われて、少し考えたヤツの目の色が恐怖で染まった。

自分の体を食い破るか、内側から浸食してゾンビに仕立て上げるものが

体内に居座っていたことを、ようやく認識したようだった。

腰を抜かして転げた彼女は、自分の体のあちこちをまさぐったかと思うと、

ノドに手をつ突っ込んで何かを必死で吐き出そうとする。



「ひなたちゃん、落ち着いて！」

鳴滝くんは、そんなつもりがないから言ってるんだよ！」

「今はお前のスタンドだ！消えろと念じれば消える。

怖ければ、消せ。どのみち問題ない」

左右を花寺のどか、沢泉ちゆに支えられ、ひざの上にニヤトランが乗った彼女は少し深めに息をして呼吸を落ち着かせると、頭からDISCを取り出して俺に差し出した。

受け取り、俺の中にDISCを戻す。

って、消せよ、お前…まあいいや、あとは自然死して体外に出ていくだけだ。

「今の怖さを忘れないでくれ。

スタンド使いと戦うとき、それを忘れたら死ぬんだと思う。

俺も、死を甘く見たから昨日みたいなことになった。お前を巻き込んだ」

「別に…あたしが勝手に突っ込んだだけじゃん？」

はあ、なんかへこんじゃったなあー。

ありがと、二人とも。それとニヤトラン。カワイイ、やさしー」

力なく笑う平光ひなたを横目に、俺はそのまま帰途についた。

すっかり空気を悪くしたからな…頃合いだろう。

花寺のどかが、軽くパタパタと手を振っていた。

これから共闘する。変なところで仲がこじれるようなことをするわけにはいかない。だが、仲良くすることは手段であって目的じゃあない。

必要なことを、必要なだけ言う…そのためで充分！

以前の俺だつたらきつと、モノでつって、テキトーにおだてて、所々で権力をチラつかせて…

でも、あの三人は誰も、その方法じゃあなびかないだろうよ。

ま、今は絶対にやりようがないし、そういう方向を目指す気はさらっさらでない。最悪にぶざまな焼き直しになるだろうからな。

そもそも、近づくと穢れる。あいつらがな。

こういう、今の力がない俺の手探りを、良い変化として受け入れようと思うしかない一方で、

かつての力をなつかしむ心が、やっぱりどうしてもどこかにはあつて…

翌朝、俺はそこに付け込まれた。

「進化しなさい、ナノビョーゲン」

「ぐッ…お、お前は」

「シンドイーネよ。初めまして…これからアンタのご主人様になる女よ。」

の。  
こんな割に合わない使い方、したくないけど…これもキンググビョーゲン様のためだも

さあ、暴れなさいな。チョットは役に立ってもらおうわ」

## プリキキュア・ピュリファイケーション！―その2

みんなと展望台に集まった日の夜。

お夕飯を食べて、宿題に手をつけ始めたところで、ちゅちゃんから電話がきた。

「花寺さん？悪いわね、こんな時間に」

「ううん、いいよ。後から疑問が出てきちゃった？今日の話」

「ええ。結論から言うけど……あのDISCの記憶、根本的におかしいわ」

「…スピードワゴン財団、のこと？」

「話が早いわね。そう、関連団体の類は全滅よ。」

検索をかけても電話帳あさっても、どこにもない」

ちゅちゃんは、あの後、スピードワゴン財団っていう巨大財団の名前を

今まで生きてきて一度も聞いたことがないのをまず疑問に思ったみたい。

結果は、その通り。わたしもたった今確認してみてる。

スマホはふさがってるから、地理の授業で使う地図帳を見て…

杜王町なんてところ、宮城県にない。

承太郎さんは、ここで観察したヒトデの論文で博士になった。それなのに。

「グリーン・ドルフィン・ストリート刑務所、これもかなりガンバツて探したんだけどね。ないわね! 少なくとも私が理解できる範囲では! しばらく英語見たくないかも…」

「F・Fさんの思い出の場所、それ自体が最初っから無い。ってことだよね。」

でも、あの記憶がみんなデタラメの作りものだなんて、わたし考えたくないよ」

だとしたらわたしたち、マンガか何かを真に受けて動き回ってるアブない人になっちゃおう。

「ここまで来てオチがそれだったら、さすがにわたしも泣いちやうよ?」

鳴滝くんなんか、もうコレ以上なくらいに恥ずかしいよ。

また死にたいとか言い出してもサスガに責められないよ、これだと!

「それは私も同じだし、仮にそうだとしても」

スタンドなんていう超能力が現実にあるのは変わらない。

今、F・Fさんと承太郎さんの記憶をウソ呼ばわりしても話が進まなくなるだけね」

「うん……」

「私もね、ウソだと決めつけて電話したわけじゃあないわ。ただ、あのDISC…」

まるで、私たちとちよつとだけ違う別の世界からやってきたみたいに思えるのよ。

そうだとして、できることは何もないけど…この異常な状況。

プツチ神父は、もしかしたら『勝った』のかも知れないわ」

「『勝った』？それって…」

あまり気分よく聞けそうな話じゃあないよね。

つまり、徐倫さんたちがみんな負けて再起不能にされたっていうことだから。

承太郎さんの、記憶DISCを抜き取られる直前の最後の想いまで無にされた。

どうしようもなくなったその瞬間でさえ、理屈抜きでただ守りたいだけだった想いが。

お父さんが、娘を守りたかった。それだけの、痛いほどの想いを…

この仮定は、そういうこと。

「『天国に行く方法』そんなセリフをあつ男は口走っていたわね。

それがうまくいったのか、いかなかったのか…」

その方法の結果として、私たちの世界にやってきてしまったとしたら？」

「神父さん、だけがいるの？」

「そう、そしてスタンドを広められるのはホワイトスネイクだけ。

この場だけ見れば辻褄は合ってしまうわ。

…仮定に仮定を重ねてる時点で話にならないけど、そういう考え方もあるってこと。

ただ、やっぱりスタンド能力をバラまいてる誰かがいるんなら、

そいつは『敵』だと思えばいいね」

『天国に行く方法』は、あの承太郎さんが危険だと判断して一切記録をとらず、

文字通り墓の下まで持っていくつもりだった『儀式』の手順…

吸血鬼のDIOが、より高みに上った『何か』になるための方法。

それら全部はわたしたちが共有してしまった。

一語一句がすぐに出るわけじゃあないけど、おおよそは覚えてしまっている…

DIO本人の影も形もないんだから実行なんて無理だけどね。

だから心配なさそうだけど、ちゅちゃんのお説通なら…それもかなり怪しい。

「スタンドを使う人、早いうちに探して味方につけないと…ね」

「私たちがやるしかないでしょうね。鳴滝…くんは他人の説得を任せるのは、たぶん最

悪よ。

あつ、私が信用すると言った言葉に二言はないわよ？単純に評判が悪すぎるの」

「ちゅちゃん。わたしたちの中に…ひなたちゃん、入ってる？」

「入っていないわ。あの子を戦わせるわけにはいかないでしょう？」

あのスタンドじゃあ、よほど普段から気をつけていないと敵の攻撃を防げないもの」

正論だと思う。ひなたちゃんをバカにするわけじゃ絶対ないけど、

そういう警戒から一番遠い子だと思うし。

メガビョーゲンと素で戦えるレベルの破壊力を持つてるスタンドなのに、

手足もなくて自分の真上にしか出せない：防御なんかムリ。アンバランスだよね。

「それは、そうだけど……わたしたち、スタンド見えないよ？」

説得したとしても、その……裏切られていきなり攻撃されたら、抵抗できないかも」

「そこよ。そこが難しいのよ。」

私たち自身がスタンドを手に入れなきゃあ、ね」

「前途多難だね。でも、くじけないよ！」

「そうね。向かうべき所はちよつとでも見えたし……」

まずは、スタンドをゆずってもらおう方向を考えてみましょうか。

あつても災難に巻き込まれるだけだものね。ホントに」

ビョーゲンズがいる以上、これは確かにホント。

だから、ひなたちゃんと鳴滝くんの守り方を考えなくちゃいけない。

増えれば増えるほど立ち行かなくなるから、ビョーゲンズに狙われる人間は常に減らすべき。

後ろめたい思いを抱える必要はなさそうだけど、けっこう難問かな……

それに、スタンドDISCをゆずってもらったところで、適合しないと意味ないし。

承太郎さんの最強のスタンド、スター・プラチナのDISCがあるならほしいけど、適合しそうなのはちゅちゃんくらいだし。わたしに近距離パワー型は向かない気が



するよ！

「わたしたち二人でかあ。いつか手が回らなくなるような…」

「鳴滝くんにも手伝わせるわよ。ウワサ集めくらいだったら問題ないでしょうし。」

何より！ 評判の悪さに甘んじてるあいつのせいで私は部活を休むことになったのよ？

今後こんなことを繰り返すわけにはいかないわ。

他人と関わって、ちよつとでもマシに思ってもらわないと困るの！」

「その辺は、ひなたちゃんが助けになりそうだよね」

「正直、平光さんに担当してほしいわね。」

『あの類の危害』は簡単に許せるものじゃあないわよ。

だからこそ、次にヘンな気を起こした瞬間、私が殴る。

平光さんだけに押し付ける気はさらさらないわ」

これも問題ないわけじゃあないんだよね。

評判が悪い鳴滝くんが探りを入れてる時点で、

『あいつがお前のことを探りまわってるぞ、隠れる！』になるかもしれないし…

そこを仮にひなたちゃんが補助したとしても、ダメージを受けるのはひなたちゃんだ。

言うのも考えるのもやだけど…

『悪い男にダメされてるバカ女』の図になっちゃうかも。

そうなったら、鳴滝くんの言ってる通りに、

ひなたちゃんか道連れでツマはじきになっちゃう。

どのみち、わたしとちゅちゃんか根回しして助けなきやあダメってこと。

あとは…鳴滝くんに男友達をなんとしても作ってもらおうよ。男女比オカシーもん  
ドー考えても！

「それじゃあ、次はいつ集まる？…全員で」

「明後日かなあ。ひなたちゃんにも話を消化する時間があるかもだし」

「明後日ね。連絡、まかせちゃって悪いわね」

「ううん、むしろウレシイよ。中心になれて！」

じゃあ、また明日。ランニングのときに」

ちなみに、明日は土曜日で、明後日が日曜日ね。

それにしてから入学してから今日で三日。スツゴイ密度が濃かったなあー。

コレに一年とか二年続いたら身が持たないよ正直…

せめて杜王町くらいの忙しさでオネガイします！

忘れないうちに連絡だけは済ませて、そのまま宿題。

あとはお風呂に入ってグッスリ寝た。疲れきつちやつてるよー。

翌朝、そんな疲れもフツ飛ぶ知らせが来た。

鳴滝くんから…単なる返信かと思っただけど、ここで見て正解だった。

そうでなかったら、わたしは……

『おれびようげんずにされたころせ』

「……ラビリン！そんなコトあるのッ!？」

「よくは知らないラビ。でも、増やせたところで不思議じゃあないし……

心がよどんでる人間だったら、やりやすいのかもしれないラビ」

「イタズラだったらブツ殺す……けど、なんてこった！

ホントだとしたら考えられる限り最悪だぜ」

ペギタンはちゆちやんの家にいる。

だから、ちゆちゃんも一緒にすぐに呼ぶ。

これはもう最悪だ。とにかく、ひなたちゃんを守る。

そのために、ひなたちゃん家を待ち合わせ場所に、ジャージ姿ですぐ家を飛び出した。ものすごく慌ただしく出て行ったから、お父さんもお母さんも怪訝な顔したけど、

グズグズしてるこの一瞬が危ないんだもん！

ランニングの前で良かったよ。ギリギリ言い訳がつく。

ラテを連れ出してるのはヘンだけど、そこらへんを考えるのは後。

ひなたちゃんの家はそこまで遠くないけど、急いでいるところも遠く感じるんだね。直前あたりで、ちゅちゃんがこつちを見つけた。

「花寺さん、さっきの知らせだけどー！」

「ホントだよ。こんなしようなもないウソつく人じゃあないでしょ？」

「ビョーゲンズにされきる前に、最後の力で送ってきてくれたんだと思う」

「…なんてこと。もう、償わせる機会はなくなってしまったの？」

「まだそうと決まってるじゃないよ。プリキュアの力で助けられるかも！」

もし、わたしが…敵、だったら！ここで真っ先に狙うのはひなたちゃん！

ビョーゲンズにされたっていうなら、鳴滝くんはいつか必ずここに来ると思う」

「ああ、いた、のどかつち、ちゅちゅ」

そこに、眠そうな目をこすって出てきたジャージ姿のひなたちゃん。

来る途中に電話して、みんなでランニングに出るってことにして家を出てもらったんだ。

あつ、お姉さんが手をふってくれてる…ウレシイけど今は困るなあ。

「チョット小走りして離れよう。離れすぎちゃいけないけどね」

「ウチが、タッキーにコーゲキされるって、ナンデ？」

「寝ぼけないで！ホントに大変なのよ！

メールはちゃんと読んだの？」

「電話で起こしてせかして出てきてもらったから、たぶんまだだよ！

お願い、すぐに読んで！」

いぶかしげな顔をしてスマホを眺めるひなたちゃんが目つきが、次第に変わる。

昨日、あれだけ怖がったんだもんね。すぐに危機感を持つてくれたみたい。

「あたし……このままじゃ、死ぬ、の？」

「鳴滝くんがビョーゲンズになって、ひなたちゃんを狙ってくるのなら。

わたしがビョーゲンズの立場になって考えたら……ひなたちゃんを見逃す理由がない

よ。

意識だけ残したまま体を丸ごと乗っ取って、ビョーゲンズの本拠地に連れ去ると思

う。

もしかしたら、F・FのDISCがある今、それすら必要なくって……

いきなり止めを刺される、かも」

「なに、それ……昨日の今日じゃん！なんでそんなことに……」

「泣くのも不満も後で付き合おう。今は助かりましょう。平光さん」  
色々と言いたいことを飲み込んでくれたみたい。

うつむいて黙ったひなたちゃんと、改めてこれからの動きを打ち合わせようと思った矢先。

ラテがせき込んだ：始まつちやつた！すぐに聴診器を当てる。

『地面の下で水のエレメントさんが泣いてるラテ』

地面の下の水。そんなもの、下水道しかない。

ちゆちゃんもペギタンも、ラビリンもニャトランも：ひなたちゃんも一瞬で理解したみたい。

鳴滝くんの知らせは、これで確実に本当だつて！

「下水道：『フー・ファイターズ』の独壇場じゃない！」

「周りの汚水が全部プランクトンにされるペエ!？」

まつすぐ突っ込んでいったら、たとえばプリキュアだつて勝てるとは思えないペエ」  
「だ、だけどラビー！ほつておいたら汚染がドンドン広がるラビー！」

下水道は町中を走ってるから、すこやか市の地下がみんなやられちゃうラビー！」

「もう、こうなつたらあととは引きこもってるだけでいいんだね、鳴滝くん……」

ビョーゲンズの汚染と『フー・ファイターズ』とが町中に広がって、

手に負えなくなったら『終わり』」

「くそーッ！何がどーなつても攻めるしかねえーってコトじゃあねーかよおーッ！」  
スタンド使いらしい戦い方をするなあ…

承太郎さんの記憶と照らしながら、わたしはそんなことを思った。

そしてわたしは、これをひっくり返さなきゃあいけないんだ。

「でも、まだよかつた。これはホントの最悪じゃあない」

「どういうことなの、花寺さん？」

「そーだよ！勝ち目がないのに逃げたら終わりつて、最悪すぎんじゃん！」

「ホントの最悪は！」

鳴滝くんがそのまんまビョーゲンズの本拠地に連れ帰られて、二度と戻つてこないことだよ！

DISCの中身も全部知られて、スタンドもいよいよに使われる！

そうなつたら、いるかもしれない神父さんと手を組まれることだつてありえるんだよ？」

「…なるほどね。それに比べたら確かにマシね。

今ここで倒してしまえばどうにかなるんだもの」

「あつ…そつか、つまりたつた今DISC使つてんだモンね」

なんか、らしくないくらい頭が回るなあ、わたし。

F・Fさんと、承太郎さんの記憶を見たせいなんだろうな、きつと。戦いの思考…敵の立場になって考えること。

F・Fさんの刑務所での『思い出』と、承太郎さんの『遺産』…

ありがとうございました！

「だったらあー、今すぐブチのめさないとねえー」

「その通りよ。でも、何か方法があるの？平光さん」

「ほらさあ、いるじゃん！考えてみればさ、あいつのスタンド…ここにー」

得意げな顔をして、自分の鳩尾のあたりをポンポンと叩くひなたちゃん。

消せて言われてたのに、消してなかったんだ。あんなに怖がったのに…

「……あッ！」

「気づいた？ひらめいた？のどかつち、ちゅちー」

「スタンドのダメージは本体のダメージ！」

F・Fも分体に大ダメージを受けたとき、本体側も痛みを認識したわ！

「でも、どうするの？今ここにいるスタンド使いはひなたちゃんだけで…

『太陽』じゃあ、それをやるにはキツイけど」

「ビョーゲンズなんでしょ？ビョーゲンズはプリキュアで浄化するんですよ？」



「…できるラビ。ボトルの力を使って、注いでやれば浄化できるラビ」

「スタンドを浄化するということは、本体が浄化されるってことだペエ。

そんなことになったら、ビョーゲンズになってる魁は…」

「ぜってー飛び出してくるぜええー、引っ込んでる場合じゃあねえーニヤツ！」

…すごい。決定的な一手が、まさかのひなたちゃんから出た。

(スツゴイ失礼なモノ言いだけ)

さつき、わたしは、『わたしがひっくり返さなきゃあいけない』って思った。

とんでもない思い上がりだったね。『わたしたち』なんだ。

みんなの力があれば、このピンチだって乗り越えられるよ！

「そこで、あたしからニヤトランにお願いがあります」

「ん……おう、言ってみな」

かしこまって向き直るひなたちゃんに、エツヘンと胸を張って対するニヤトラン。何をお願いするのか、もうみんなわかってる。

誰も口をはさまない。当人同士だけ…これはきつと、大切に神聖なことだから。

「あたしを、プリキュアにしてください」

「意味は、わかって言ってるんだよな？」

「わかってるし！もう逃げられないと思うし、逃げないよ。」

ここで勝たなきゃ、パパもお兄もお姉も危ないんだもん。

みんなが、昨日のあたしみたいになって死んじやうつていうなら、戦わないで逃げの方がよっぽど怖いじゃん。

だったら…あたしから行くよ。お願い、みんなを守らせて！」

「ウン…じゃ、オレからもお願いだぜ」

「なに？」

「アイツを、魁を助けてやってくんねーか？」

悪いヤツかもしれないけど、今のアイツに必要なのは、きつとお手当てだからよ。

見捨てちまうには、ちっと早すぎるんだよな」

「オツケー。つていうか、元からそのつもりだったし！」

「よっしや、決まりだな！やるか、相棒！」

「オツス！」

ヒーリング・ステッキを受け取ったひなたちゃん。

黄の光が天を突き、ボトルをセットして変わったその姿の名前は……

「溶け合うふたつの光、キュアスパークル！」

「ニャア！」

黄色一色だね。わたしたちと比べて袖がなかったり、スカートが短かったりしてるの

は

なんともひなたちゃんらしいと言うか…ヒヨコさんとかアヒルさんみたい。

「スツ……」

「おう、ひなた。カンゲキしたか?」

「スツゴーイツ! カツワイーイ!」

それに、この全身からわいてくるパワー、勇氣!

ウン、負けない! みんな守ってみせるぞー!」

「スパークルだ。変身中はそー呼ぶからな! 覚えとけよー」

「…見てる場合じゃあないわ。花寺さん」

「あ、そうだ。変身しよ」

ラビリン、ペギタン、ニャトラン。

ここで、ついに全員のパートナーが決まって、三人のプリキュアがそろった。

変身のタイミングが遅れてチョットシマリが悪かったのはご愛嬌で!

「もう、たぶんこの時点で魁は不快感に襲われてるペエ!

プリキュアは、ビョーゲンズの汚染に対抗するパワーだペエ」

「じゃあ、ここで一気に、ひなたちゃんに力を注げば…」

「いつせーので力を込めるわ!」

「いつせーのオ、せえーっ！」

ヒーリング・ステッキを通じてボトルの力をひなたちゃんに集中する。

桃、青、黄の光が揃ってあたり一面を照らす：

あ、今、ひなたちゃん家の近所の空き地にいます。

周り中家だからだからかなりメーワクだよねコレ。ゴメンナサーイ！

でも、ご近所の人たちが苦情を言いに来る前に、

近くにあったマンホールから汚水が吹き上がった。

ゴボ ドババアアア〜〜〜っ

全然良くない、汚い！

異変を感じ取った人たちが一斉に逃げていく。

：仕方ないよ！ひなたちゃん家を離れたら、万一直接殴り込まれた場合助けに行けな

いだもん！

「ここで戦うしかない、つてことだね。：ね？鳴滝くん」

「おっおおおおおおおおお」

がぼっ!?!ガバッ!?!げべべエエーっ!!」

振り向いた先にいた彼は、とても見るに堪えなかつた。

ビョーゲンズの肌色に変色した彼は、うずくまったままひたすら口から汚水を吐き戻

していた。

というか、下水を泳いでわたしたちに接近してたっばいね、これ。

ひどい、いろんな意味で…鼻つまみたい!

ひなたちや…スパークルはその辺、ゼンゼン隠さず言っちゃった!

「うわツ、クサツ……エンガチョー!!」

近づきたくないだけどー!どうやって戦うの?」

「ぶざまな姿になったものね。鳴滝魁」

唯一うろたえなかつたフォンテーヌが、一步踏み出て言い放った。

せき込むのをようやくやめた鳴滝くんは、ゆつくりと立ち上がった。

松葉杖がないのに。自力で立てないはずだったでしょ?

「そんなに……そんなに早く死にてえのか?」

復讐は遅くゆつくりなほど甘いつてのによおおろろ」

「復讐?それはむしろ私のセリフなだけど?」

脳ミソまで病原菌に成り果てちゃったかしら?

どうなの、鳴滝魁」

「ダーティ・ウオーターだツ!

俺のことを呼ぶならそう呼べ!

人間の名前なんかもういらねえええ」

『汚水』……得意げな顔して、人間の名前捨てるまでして名乗るのが『汚水』……あんまりだよ。

「プリキュアアアア……オレは人間をやめたぜええーっっっ!!」

## プリキュア・ピュリフィケーション!—その3

とにかく、鳴滝くんは隠れて戦おうとした。

隠れたまま、どうしようもない状態になるまで待とうとしたのは確かみたい。

承太郎さんの戦闘経験から教わるには……つまり、それが弱点だよね!

正面からの戦いは、やりたくないを見たよ!

「はああッ!」

「うわっ、のどかっち、イキナリ?」

飛び出して、蹴り。

ビョーゲンズになっちやってるなら、説得なんてたぶん効かないし、

ここで逃げられたら、次に出てきてくれるとは限らない。

いったん、気絶させちゃう以外にない!

「ゴアイサツだな、キュアグレース!」

何も言わずに蹴ってくるのか、とんでもないヤツだぜ。

偽善者のマネも飽きちまったかあー?」

…ダメージになってない。受け流された。

蹴りを受けた勢いのままバック転二回転、受け身。

「スゴイ反射神経……もことから、そうだったの？」

それ以前に、どうして足が動くの？」

「わかつて聞いてんだろ？」

もとからフー・ファイターズなら、やろうと思えばできたことだぜ。

役立たずの足を吸い枯らしてフー・ファイターズに置き換えた！

そこをさらにビョーゲンズで強化すればよおろく」

さっきわたしがやったような飛び蹴りが、言葉の終わりと一緒に来た。

この威力……プリキュアと比較しても、負けないどころか勝ってる！

防御したけど両足が地面にめり込んだ。背中もブロック塀にぶつかって

カケラがあたりに飛び散ってる。

「こんな芸当だつて朝飯前なんだよなあ」

「……足。吸い枯らした、つて……」

大切な、足、だつたんでしょ？……今、動かなくなつたつて……

いつかまた、動けるようになったかもしれない！……なのに、どうして？」

「そんなツマラナイものにしがみつくのはアホのすることだぜグレースウウ

あの足が動かないせいで俺はヒトの慈悲にすがらなきやあいけなくなつた……



そして俺にくれる慈悲なんか宇宙のドコにもねーってことは俺自身がよオオーく知っていた!

だがそれも終わりだ。俺は人間を超越した! てめーのようになあぁー

ああ、なんかわかってきた。

まず、このひとは、人がキラインなじやあない。

人がキライだったら、DISCのこともひなたちゃんのことも

『知ったことか』でオシマイだもん。

そこまではわかってた。それに、少なくとも自分が以前悪いことをしたとは思ってるみたい。

なのに……そう、だからこそ。人から離れていこうとした。

つまり、このひとは自分自身が大嫌いなんだ。

そして、そんな自分を通して見たみんなが怖いんだ。

今まで取られてきた態度とかウソだとか、そういうののワケがやっと見えてきた。

それにしてもずいぶんスッキリした顔……キライン自分が終わったの? ビョーゲンズになつて…

だとしたら、おかしいよ! そんなの。

「グレイエエ〜スウウ、愛しのグツレエエ〜スウウウ〜」

うとましかつたぜ、てめえーがよおお

てめーがゴリツパな言葉を吐いて世話を焼いてくれるたび、俺はみじめになった！  
お前らは……毒の花だ！

俺を踏み台に咲き誇って、弱っていく俺なんかには気づくこともねえ！」

「ツ……そんなつもりじゃあ！」

「グレース！グレースは全然悪くなんかないラビ……」

「それでいい！それでいいんだよグレエエー……」

お前は正義！俺は悪だああ……ぞんぶんに踏みにじれよキヒハハハハハハハハ  
弱いヤツを踏みにじるのって楽しいイイイ……だろおお……

それが正義の特権ってもんだぜ……

たつた今から俺の番だけどなああ……

……来る！

間に合わない……気がそぞろになっちゃってた！

このままじゃあ叩きのめされるだけになっちゃう。

あつ、誰か割り込……フォンテーヌ！

間に入ってきたフォンテーヌが、振り下ろされた拳を受け止めてた。

「グレース……いつの言うことに耳を貸さないで！」

「…ああつ、ひつでええ〜ええ!」

さすがは清く正しいフォンテーヌさまでいらつしやいますなあー  
ヨゴしてえ……ヨゴしてえぞそのツラあ!」

「恥ずかしい自分語りをしに来たの? 鳴滝魁…ウンザリね…」

いいでしょう、聞いてあげるわ。態度を改めて出直せばの話だけど」

「ダーティ・ウォーター! 俺を呼ぶならそう呼べと言ったはずだぜ!

そしてチゲエーよ! こいつは儀式さ……」

あわれでみじめな鳴滝魁を捨てちまうための、だ」

「……あつ、そう。なら永遠に捨てさせないわ。他ならぬ私が許さない」

「キヒヒヒヒてめえーの許可なんざいらねえええ

脳ミソから! モツまで! グジグジグジュに溶かして喰つてやるぜ…体内から!」

フォンテーヌの顔面を狙って反対側の拳が来る。

速い、けど受けられない速度じゃあない。プリキュアなら。

すでに構えていたフォンテーヌは真つ向から拳を打ち合わせた。

激突! けど、そこで聞こえてくる音は想像とは全然違つた!

ボグ ドグチア

「なッ……!」



俺は生まれたときからどーでも良かったんだからなあー

大兄さまと小兄さまでもうたくさんだつてさ……

今もあいつらはただ待つているぜ！俺が死ぬのをよ」

「…そんなこと、あるはずがないわ！

ご両親の愛情が、あなたにはわからなかつただけじゃあないの？」

「お幸せな!!お幸せなフォンテエエエエエツヌウウウウ!!」

おまえにはおまえには永久にわからないイイイイイイイイイ

否定された瞬間に信じられない憎しみと怒りと嘆きが形を持って実体化した。

汚水から人を象つたドロドロが立ち上がった…四体！

そのうち二体がフォンテーヌの脇をとらえて、その先にある…

いつの間にか形成した、首吊りのロープに押し込もうとしてる！

あまりのことに呆気にとられたフォンテーヌは抵抗できてない。

「首をつらせてやる首を同じようにつらせてやる

同じように同じように同じようにイイイイイイイイイ

「フォンテーヌ！逃げるペエーッ！」

でも、わたしが黙つて見ていない！

横合いに飛んだわたしは、地面をすべつて…人形を全部破壊。フォンテーヌごと吹つ

飛ばす。

『ダーティ・ウォーター』本人には飛び退って直前で回避されちゃったけど。

「邪魔、を……したってことは……覚悟を決めたかグレエース！」

ひ・と・と・ご・ろ・しになる覚悟をよおおー」

「ううん。そんな覚悟はしないよ、ダーティ・ウォーター」

「ああん？……おおッ、呼ぶ気になったかよその名で！ヒヒ」

「別に。あなたと鳴滝くんは全然別人だから。当然だよ！」

「……ハア？」

わかった。ハッキリとわかったよ。

『こいつ』は鳴滝くんじゃあない。

たった三日の付き合いだけど、これはわかるよ。

鳴滝くんは確かに、わたしたちを都合よく操ろうとはしてた。

けど、わたしたちが決して被害者にならないように頑張ってた。

可能な限り、泥をかぶるのは自分だけで話を終わらせようとしてたよね。

元々、わたしたちと関わりを持つとしたのも、

メガビョーゲンとプリキュア、それとDISCがあったから。

それが無ければ、きっと、ずっと黙って過ごしてて……

今日も、わたしとは関係ない毎日を生きていたはず。

そこに来て今、目の前にいる『こいつ』はどうなの?…全然かみ合わないよね。

つらい気持ちをわかってほしいって思ったとして、こんなやり方は絶対にしない。

答えはひとつ。乗り移ったビョージェンズが、鳴滝くん的身も心ももてあそんでいるってこと。

もしかしたら、本心の中の悪い心だけが表に出てるのかもしれない。

さっきの激怒か悲鳴がウソやお芝居だとはとても思えなかつたし……

でも、どっちみち同じことだよ。悪い姿だけを見られるなんて、わたし耐えられない!

「鳴滝くん…恥ずかしくて泣きたいよね、きつと」

「何言ってるんだてめえ。都合のイイお花畑でも見てんのか?」

「頑張つて。悪い気持ちに負けないで。」

今、わたしたちが助けるから」

「グアア…ツ、吐きツ、気がするぜ!」

偽善も、お花畑も、ここまで来るとよおおー」

「『ダーティ・ウオーター』あなたを倒します!」

倒して、鳴滝くんを取り戻してみせるよ!」

宣戦布告。わたし、戦うって決めてるよ！

ビョーゲンズとは、最初からそのつもり。何も変わらない。誰かの大切なものを踏みにじって、

自分たちだけに都合いいように汚染するっていうのなら！

「いいねえ、その威勢！」

ただ、惜しいなあ……それだけじゃあ勝てない！

だってお前らはもう詰んでるんだぜ？」

……軽く扱うわけにはいかないことを言われた。

すぐに考える。わたしたちは今、どういう状態にある？

周りは汚水だらけで、さっきわたしはフォンテーヌごと汚泥人形を蹴り飛ばして……

「……ううッ!？」

「気づいたなあ……ッ泥まみれのイイ景色だぜ……」

フー・ファイターズはッ！ちよつと顔面にぶつかかっただけで！

体内に侵入して首を切り飛ばせる！思い出したかあ……?」

「グレース、土よ……土を巻き上げて乾か……」

「間に合うかよウスノロどもがああ……」

「脳ミソを乗っ取って肉人形にしてやるぜえええ」



わ…わかる！今、プリキュアの力が必死で侵入を防御してるのが！でも、これだけ全身にかぶってしまったから…もう、持たない。

こんな、こんな終わりなんて…あきらめちゃダメ、何か方法は？

あつ、防御が、解けっ…

終わりの瞬間は……来ない？

「ど、どういうこと？全身の泥がッ！一気に、乾いて…？」

「あ…『熱い』！」

それにこの、耐えていられねえ忌まわしいパワーは…

ああ、そうかよ、そうだよなあチキシヨオ！」

空を見た。

太陽が…『ふたっ』！

片方は近い。神々しい輝きを放つ太陽が、そこにある！

物陰から、そつと顔を出したのはスパークル。

「や…やつと首ツツコメた！」

あたしのスタンド、『太陽』の威力、どーよ！」

「ビョーゲンズの手でスタンドが強くなる、ってんならよおー

プリキュアの力でも同じこと、ってワケよ。イイぜ！スパークル！」

## プリキキュア・ピュリファイケーション！―その4

あたし、平光ひなた。中二！

……に、なったばかりで、なんかめっちゃスゴイコトに巻き込まれちゃった！

あたし、スタンド使い…超能力者にされてたらしくって。

で、それとは無関係にビョーキンズ（だっけ？）とかいう怪物が暴れまわってて！  
怪物の親ダマがスタンド使いを狙ってるらしくって…

で、あたしよりも先に、同じスタンド使いのタツキーが洗脳されちゃったみたい。  
対抗できるのはプリキキュアっていうヒーローだけで。

体を治療してもらってたカンケーで、あたしの中にスタンドを出されてたから、  
プリキキュアになって、中に残ってたヤツを浄化しておびき出すのに成功！

（スタンド関係の話はD I S Cから流し込まれたせいかな、ケツコー覚えてんだよねメズ  
ラシク）

……成功したのはいいんだけど…アイツめっちゃ強くて首ツツコメない!!

しよーがないじゃん！イキナリのどかっちから殴ったり蹴ったり始めんだもん！

話聞いてたダケでもガンバツたって思ってたほしーかも！

(アイツの足が動くのナンデかワカンなくなっちったけど、そーいうモンだと思いうことにした)

でも、なんか…思ってた以上に…ムツカつくくく!

何よこいつ!メンドー見てもらうたびにミジメだったとか…

そんな目でのどかつちを見てるアンタの方がドー考えてもオカシイ!

弱いヤツを踏みにじるのが楽しーとか、当たり前前に悪いヤツでしょ?

なんでのどかつちとちゆちーがイツシヨにされなきやあいけないの?

そんなフウにムカついてたけど、その後の話でなんかわかつてきた気がする。

アイツは、そういうことをされてきたっほいね。それも、パパとかママに。

あたしはさあー、好きだから。パパも、お兄もお姉も…

だからアイツの言う通り、お前には永遠にわからない、つて言われたらワカンナイ。

でも、だからわかるよ。そんなこと、想像なんかゼツタイしたくないって!

そんな想像もしたくない。パパとかママだったら、グレちやうのもチョットわかる。

だけど、あたしがしてあげられるのは、たぶんこれだけ。

「止めなきや。アイツおかしいもん」

「だぜ。止めてやんななきやな!」

で、のどかつちとちゆち…イケナイんだっけコレ?

グレースとフォンテーヌがバッチイ泥まみれにされて、泥に襲われてるところでピンと来て『太陽』を出した。

乾いたらヤバイって、F・Fがシッコイくらい何度も思ってたし！

そしたらドンピシャ！泥はフー・ファイターズで、パラッパラに乾いて消えてくじゃん！

しかもあたしの『太陽』、前に出した時よりも絶好調！

これもプリキュアのパワーみたい。

アイツは、あの元気ハツラツの『太陽』をムカついた顔でニラんで、それからあたしを見た。

…グレースが言うには『アイツ』じゃあなくて『ダーティ・ウォーター』だけど。

「よくもまあ…恩をアダで返してくれるもんだな！」

ええ？平光ひなた」

「スパークルだよ！プリキュアを元の名前で呼んじやあイケナイんだって！」

「そうかよスパークル！だが俺はお前を知っている…」

「ご立派なスタンドとパワーを持ったところで、頭脳はドがつくマヌケってことをよおー」

「じゃあ〜アンタ、マヌケ以下ってことじゃん。フー・ファイターズ乾いてくよ？」

「イカシた減らず口じゃあねえーか、誰に習ったよ？」

ああそうだが、乾いていくなあ…

だが、人間の皮と肉で守られてる俺自身は別に平気だよなあ。その辺考えた？」

考えてませーん。モンクあんの？」

でもま、効果大じゃん。これでマンホールの中とかからの攻撃はできないんだから。

あとは直接叩きに行けば…

「ま、待つニヤーツ、スパークル！」

アイツ、てめー自身の人間の体を人質にとったままだぜ？」

だあぁーーツ!?! 出足からつまづいちった！

そーだ殴ったらダメなんだった！

「じゃ、じゃあどーすんのニヤトラン？」

「キュア・スキヤンだぜ。アレがもしメガビョーゲンだったとしたら、

エレメントさんの代わりに『魂』が捕まってるんだと思うからよ」

「んむ、よくわかんないけど了解！」

そのキュアスキヤンってのはどーやって…」

「ホゥラすぐ回りが見えなくなる！」

いつの間にかすぐ横にダーティ・ウォーター。

振り下ろされたパンチを避けることもできず、あたし自身が地面にめり込んだ。  
ヤバイ……マウントとられた!

「そういうトコだぞ、スパークル!

てめーおととい死にかけたのも忘れちまったか?」

「あ、ご、ごめん」

「謝ってる場合かよー! ツ、脱出しねーと!」

「逃がすかよド低能。さあ乗っ取ってやる……この距離なら『太陽』も関係ねえんだぜ。

お前の体内にいるヤツにも手伝わせてやる」

押さえつけられて動けずにいると、なんか『ゴツプ』とか音が聞こえた。

ちよ、ちよつと待ってチョット待て! なに頬つペタふくらましてんの?

……まさかまさかまさかまさか!! ギャー……! ツ

「プニ・シールド!」

「ぐぼああツ!」

口から汚い泥をまき散らかしたダーティ・ウォーターがブツ飛んでいく。

けつこー飛び散ってきたやつも、今張られたバリアーに防がれて消えてった。

このバリアー、肉球の模様がなんかカワイイ……って、そんな場合じゃないよサスガに。

「ニヤトラン、今のって?」

「プニ・シールドだ。敵の攻撃を防いだり、シールド張るときにふっ飛ばしたりできるぜ。」

「…や、や、ヤバかった…ステッキがヤツの方を向いてなかったら今ので終わってた。アイツがプニ・シールドを知らなかったから助かった!」

「……じよ、冗談じゃあないんだけどお〜」

組みつかれたらゲロを吐きかけられて、それで脳ミソ乗っ取られちゃう。ホラーにもホドがあんでしょ!ウケねーよコンナの!

ガクガクブルブルしてたら、グレースとフォンテーヌが近くに着地した。

「大丈夫?スパークル」

「一人で挑んじゃダメよ!」

「…うん、もうやんない」

『太陽』の効果大なんだから、逆にあたしがやられたらダメだ。

やられた途端にさっきのマンホール攻撃が復活しちゃう…

そーなったら、乗っ取られたあたしが元に戻る望みもたぶん消える。

バラバラに動くのはマズイ。

あたし自身にはわからなくても、『記憶』が教えてくれてる。

もしかしなくてもスゴイヒトたちだよ、F・Fも、承太郎さんも。

「隠し玉があつたか。正解だぜ！」

鳴滝魁なんか信用できねえから、裏切りに備えておくのは大正解だぜ！

なあ、ニヤトランよおー、ペギタンよおー」

「るせえー！ツッ！勝手に見損なつてんじやあねえーツッて言つただろーがよ！」

「ボクは信じるペエ。魁はビョーゲンズに負けないペエ」

「心にもねえーこと言つてんじやあねえーよクソがッ

何が信じるだ！ビョーゲンズは力だ、力とは支配だ！

信じていいのは支配による屈服だけだ……てめえらにはそれすらも許さん。

グレースだけは！鳴滝魁を屈服させたキュアグレースだけは！

消さなければおさまらないんだからなあー！ツッ」

うん？ええと……

チカラで押さえつけた人しか信用できないって言つてる……みたい。

……何それ？

回リクドク言葉並べてるクセに、言いたいことがそれ？

「そんな考え！寂しいじゃん！」

「お前らは寂しくねえよ？」

俺がぞんぶんに遊んだ後でへドロに変えて混ぜてやるんだからよお



そこでお前らは勝手にやってる。俺は関係ない」

「そう、あなたは寂しいのね。鳴滝魁」

…ちゅちゅ?…あ、フォンテーヌ。

冷めたみたいなしやべり方で、フォンテーヌが前に出た。

でも、口調と目つきが合っていない。

だって、目つきが哀れんでるんだもん。

「…ハア?なんだって?」

「ペギタンが信じている気持ちすらも受け取れないあなたが欲しいのは、

なんでも思い通りになるお人形だけなのね。寂しいわ。可哀想よ」

「……黙れよ」

「だから権力を振り回したの?」

権力で人をお人形にしたかったから。お人形を周りで踊らせたかったから。

よくわかったわ。あなた、寂しさをごまかしたかったのね。

誰一人、信じようともしないくせに」

「…黙れ」

フォンテーヌはダーティ・ウオーターを相手にしなかった。

話しかけてる相手は…タツキだ。



これってアレだよ、職人技!……は、なんかチガウ

とにかく、突っ込んできた勢いを思いっきり利用してた!

「わからないわよ。言わなくちゃあわからないの。」

キュア・スキャン!

「……やっぱり、メガビョーゲンだペエ!

人間の体をスッポリ覆って同化してる…

そして、心臓に『魂』を捕まえてるペエ」

「そこに、ヒーリング・ストリームを打ち込めばいいのね?

わかったわ。やってみせる」

キュア・スキャンって、ああやるんだね。

スツ転ばせてから流れ作業で終わってんじゃない。

ま、次はきつとあたしの番だし?

…と、そんなことを言ってる場合じゃあなかった。

アイツが、起き上がる!

「てめえだ…フォンテーヌ……」

予定変更だ、てめえだ…てめえからヘッドロに変えて殺す!

「何よ、いい加減ね。グレースはどうしたの?」

「グレースは鳴滝魁の後始末！」

だが、てめえはこのダーティ・ウオーターが鳴滝魁の意思をもつて殺す。簡単に言つてやるとだな：俺を怒らせたな？それだけだフォンテーヌ」

「そう。来なさい：ただ、思い知ることになるわ」

「何をだよ、フォンテーヌ」

「一人じゃないつてことをよ」

グレースが、フォンテーヌの隣に進み出た。

あたしも、たった今、グレースの隣に飛んで着地した。

「地球をお手当て、ヒーリングつどプリキユア！」

さあ、ここからはクライマックス！

見逃しちゃあダメだよ！

## プリキュア・ピュリフィケーション!—その5

我ながら卑劣なことをしたわね。

知ったばかりのプニ・シールドであいつを吹き飛ばしながら、

私、沢泉ちゆは自分のやっていることにちよつと眉をひそめてしまう。

これで、あいつ…ダーティ・ウォーターから『逃げる』という選択は消えた。

なんとしても私を『消し』に来るでしょうね。

ただし、しばらくの間は。

数でも場所でも態勢でも不利なことを、確実にあいつは自覚しているわ!

マンホールから離れないのがその証拠よ。逃げられる位置をキープしている。

私たちにとつての敗北は、あいつに逃げられ、手の届かない場所に行かれること。

おびき出すのに使った浄化攻撃だって、すこやか市を出るほどまでに離れられたら

通じるかどうかもわからないのよ。

そうなったら潜伏したまま汚染をひたすら広げるでしょうね…たぶん負けるわね。

だから挑発した。逃げの一手が打てないほどに怒らせた。

…とはいえ、ね。本心もあるわよ?

さつき、泥人形に両脇を押さえられて泥の縄に首を突っ込まれそうになったとき……これは、あいつが本当にされたこと。両親に本当にされたことだつて理解してしまつた。

肩を貸されていきなり呼吸困難になつた理由もここにあるというわけね。

残りの泥人形二体は大兄さまと小兄さまとやら……少なくとも黙つて見ていたのは確実。

ああ……まともな家庭じゃあなかつたのね、そもそも。

そりや怒るわよ。そんなことあるはずないなんて言われたら。

でもね。病院の先生は、あなたをとても心配していたわ。

病院に付き添つたとき、私と花寺さんに何て言つたと思う？

『可能な範囲でいいんで。これからもあの子を気にかけてやってくれ』

こんなことを言われたら、怒りだけをぶつけるわけにはいかないわ！

そして、もつと腹が立つわ！あなたは、すぐ近くにいる味方に気づこうともしない！

だからね、思うのよ。あなたには口クでもない奴らばかりしか見えなかつたようだけ

ど……

真心で接しようとした人は必ずいたつて。

それに気づいていたのなら、もうちよつとマシな出会いだつたんじゃあないかしら？

というか…今からでもそうしなさい！イジケてるくらいなら！

「さあ、行くわよ！」

「でも、どうするの？フォンテーヌ…うかつに攻撃できないよ？」

「プニ・シールドよ。取り囲んで押しくらまんジュウするの」

「あッ、それならキズつけずに済みそう！」

「めつちやイイじゃん！それで行こ！」

「おめでたいフォンテーヌ！生きたまま溶かされるテメーの姿が楽しみだぜ！」

さすがに待たなかったわね。向こうから殴りかかって来たわ。

同時に後ろのマンホールから泥の塊が顔を出して、こつちに泥を連射してくる。

言うまでもなくフー・ファイターズね。すぐ『太陽』で乾くけど、無視できる威力でもない。

そういえば見えてるわね『太陽』。プリキュアの力が入ってるからかしら？

気にするのは後よ！泥弾は単なるけん制！本命はあいつ自身で来る！

…やっぱり！グレースとスパークルが左右に散ったところに、私に向かって直線で来た。

でも、殴つてくるとも思えない…さっきの話を聞いているなら、

この動きは進んで取り囲まれに来るようなもの。腑に落ちないわ。

すると、ここに来るのは：飛び道具！しかもパンチの効いたヤツ。  
「俺の右手をくらえ」

「…んなツ!?!」

ポバツ ドギユウ

とは思ったけど、腕から先が飛んでくるとか誰も思わないわよ！

ロケットみたいに突っ込んできた右腕を辛うじて弾く。

草むらに突っ込んでゴロゴロ転がっていく腕。私は何を見せられてるのかしら。

よろめいてしまったところに、蹴り。来る！

「無ツ…駄ア!」

「うぐうツ」

人間のパワーじゃあないわ。プリキュア並みか、それ以上…

そう例えるのはシヤクだから、吸血鬼ってことにしてやるわ。

実際、DISCの情報にある吸血鬼と、今の私がほぼ同等じゃあないかしらね。

でも私のこれは、人を不幸にする力なんかじゃあない。

あーもう、蹴転がされてる間に右腕が再生されてるわ。

あと何発でもアレが来るっていうわけ？

「どれ！俺のパワー！俺のスピード！」



思いつきり試させてもらおうかな!

てめでだフォンテーヌウウ!」

「来る、つて…言うなら。受けて立つわ」

構える。直後、打ちかかってきた!

地に足をつけて踏ん張った拳のラツシユ!

もう、これはアレね?あの男をリスベクトしたかったの?

ならもう仕方ないわ、付き合ってあげる!

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アア—」

……オホン。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ!」

別に遊びじゃあないわよ?

承太郎さんの記憶には、拳の打ち方狙い方までキツチリ書いてある。

スター・プラチナほどじゃあないけど、プリキュアの力でなら多少は再現可能だわ。

掛け声は、その…形から入ることにしたのよ私も!ちよっとハズかしいわ

今打ち合ってる限り、パワーでは負ける。けど、スピードは僅差でこっちが上。

こっちの方が精密に動ける。ビョーゲンズになりたての向こうは力を持て余してる

ようね。

…もつとも。

「無駄だアア〜ツ！」

「ぐううツ…！」

そんなことを考えたのは当然、打ち負けてしまった後なのだけれど。

あつちは全身が人質だもの。カウンターを仕掛ければ心臓まで打ち抜きかねない。

ホント汚いわねえーコイツ！ いろんな意味で！

「フォンテーヌ…このーツ」

脇に回ってたスパークルが仕掛けた。

反対側のグレースが、それを見て息を合わせて飛ぶ。

正直、ちよつと軽率とは思うけど…ありがたいわね。

態勢を立て直して私も入ろうとすると。

「させねえよ？」

ダーティ・ウオーターが右手をスパークルに、左手をグレースに向けた。

拳か？と身構えた二人だったけど、その予想はだいたい外れた。

両手の指先すべてが銃口が変わってる。あれはF・F弾！

ドヒャ ドヒャ ギュン！

「わああ〜ツマシンガン!!」

「これじゃ近寄れないよ」

ろくすっぽ狙いもつけずに撃ちまくってるけど、物量がひどすぎる。

コンクリート塀に穴があく威力が雨あられと降り注いで、周りの家とかひどい有様。ついでのように、着弾した場所がビョーゲンズに汚染されていつてる。

「やめさせないと、ここもアイツの庭になっちゃうペエ」

「ペギタン…どうやら、それだけじゃあないようよ」

「ペエ?」

「ふたりとも、私の方に追い詰められてる」

撃ちまくられる弾に追い立てられた二人…とくにグレースは周りの被害が見えていられず、

積極的に空地から道路の真ん中に寄りつつある。

スパークルは、単純に余裕がなさそう。

初めての変身でのつけからこれだもの。無理もないわ。

それよりも…狙いがわかってきたわね。

「どういうことだペエ?」

「さっきまでのあいつと私たち、位置が入れ替わったわ。」

つまり、私たちのそばにマンホールがある…どうやら、これが切り札ね」

「…まさか！じゃあ逃げるペエ」

「いいえ、ここが勝負所よペギタン。私は覚悟を決めたわ。

このまま持久戦してたら、あいつの人間の体が助からなくなる」

「………………。ちよつとでも遅れたら、フォンテーヌが、みんなが」

「私があなたに借りているものを忘れたの？」

苦しむ人に手を差し伸べられる強さ、今使わなくてどうするのよ」

「ペエ…………。わかったペエ。ボクも命を賭けるペエ！」

命を賭けるなんて、軽々しく言う言葉じゃあないわ。

でも、そこまでやって、やっと勝てる世界があることを知ってしまった。

負けたら終わりなんかも。後悔はひとつも残さない！

正面から殴りに行く。苦し紛れそのもののように。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「無駄だつってんだろおおー！」

無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄だアアー！ツ！」

「あなた活舌悪くてウダウダとしか聞こえないのよ！」

「ほつとけクソがツ」

オラオラと無駄無駄のラツシユの隙間。

不意打ち気味の右手ロケットにフツ飛ばされた。

飛ばされる先は、やっぱりあそこしかない!

落っこちて体を転げた先のマンホールから、泥の塊がゴバツと飛び出した。

全身にまとわりつかれるまでであったという間…当然だけど気分は最悪よ!

「フォンテーヌ!」

『『太陽』!モット強く!モット強く照らさないと!』

「ダメだスパークル!それ以上はヤバイ!逃げ遅れた人とか動物が死ぬぜ!

ヒーリングアニマルとして許可できねえ!」

「ンじゃあどーすりやいいのよおおー!」

「答え…どーしよもねえー!」

「キヒツ!キヒヒヒヒツ!わかったかよノータリン!」

「侵入してきた…ううッ」

トラウマもののね、これは…涙が出てきた…あとで覚えてなさい。

「案の定、あいつはわざわざ目の前までやってきた。」

「黙って見てるワケないじゃん…って、足!」

「足が、いつの間にツ…固まッ!」

「黙って見ちゃあいねーよ、俺だつてなあー」

ま、見てなつて。次はおめーらの番だからよ」

グレースもスパークルも、いつの間にか足元を這い出してきた泥に固められてる。

：読み通りよ。ホントに申し訳ないんだけど。もうちよつと我慢して。

私にとつては本格的に試練だわ。冗談じゃあない：

「気分はどうだフォンテーヌ？」

これから全身を穢し尽くされる気分はよお〜」

「ううツ…ううう」

「命乞いをしろ！ みつともなく泣きわめいて俺のクツをなめろ！

そのお高くトマツたツラをゲドゲドの恐怖に歪めろ！」

メシヤ ガスツ ドボア

ひどいことするわね…：這いつくばらせて首とか顔を踏みつけるなんて。

したくもない経験だったわねえ。この『ツケ』はどこにつけておこうかしら？

お魚の活け造りってこんな心境なのかしらね。

自分に起こったことがモノスゴすぎて口をパクパクするしかないというか。

けど、ペギタンは着々と準備中なのに…：気づく様子が全然ない。

私の体内に侵入するだけ侵入して、あとはお留守。

あ、いけない。笑いが漏れちゃう。

「ふふつ…つく、ふふふふ…」

「ふ、フォンテーヌ? どーしちゃったのさー!」

「キ…キヒ! キヒハハハハハハ!」

折れた! ついに折れたぜヒイハハハー…ツ!

臓物から血管にまで侵入されて、精神が崩壊しちまったようだなあ

「ツ、どうして! どうしてこんなひどいことをするの!」

…まずいわね。二人にまで誤解されてる。

敵をあざむくには味方からって言葉もあるし、少し見守る。

というより、ここで種明かししたらホントにオシマイよ。

「教えてやるぜ! この世では、幸と不幸はプラマイゼロ!

こいつが不幸になったぶんだけ俺が楽しめる!」

「そんな…おかしいよ。絶対におかしいよ!」

そんな考え…認めない! 許さない! 絶対に!」

「文句は父さんに言ってくれよ。こいつは大いにタメになる教えだった…」

「もーイヤーンツ!!」

なんなのアンタの家! アタマおかしくなるーツ!?

それが、それがホントなら…アンタが最悪に不幸じゃん!!」

「そうだよ不幸だよ！だからあいつらもヘドロの海に沈めてやる…

俺にだけ通し字をよこさなかった父さんも、

俺が女じゃなかったから邪魔者扱いした母さんも、

俺をゴミ扱いした大兄さまも、ヒマを見ては俺を殴った小兄さまも…

みんな等しくドロドロに溶かして下水に流してやる！

その時やつと！鳴滝魁は幸せになるんだ！

もう俺は、あきらめなくていい！そのための力を俺は得た！」

一瞬、場が静かになった。

あなた、足が動かなくなつてからうつむき続けた今日までは何だったのよ。

人を踏みにじった先にあるのが何か、あなた自身が身をもつて知ったんでしよう？

私としてはそう言いたいけど、元から返事を期待されてないし。

グレースもグレースで、言葉が見つからないみたいだし。

そして、スパークルは…少しして、目から雫がぼろぼろと落ち始めた。

「なん、だよ…なんで泣くんだよ」

「わかんない。あたし全然わかんない。

ただ、さあ…痛いよ。苦しいよ。胸が苦しい…

あたし、大好きだもん…パパも、お兄も、お姉も…



だから、だからさあ……アンタの話が、苦しいよおツ……ツライよおツ  
そんな幸せ……あたし、ヤダよおお」

しやくり上げる声だけが、今、この全てになった。

ただ、茫然とスパークルを見ているあいつは…

ダーティ・ウォーターじゃあない。鳴滝魁ね。

邪悪だけを表に現した顔は消えて、ただ人間の顔で立ち尽くしてる。

どうしていいのかわからない、っていう顔で。

お膳立てが整ったわね。予想外もいいところよ。

「……準備、できた。ペエ」

「ええ、始めましょう。今が最高の時よ」

下っ腹に力を入れて、一気に天へ解き放つ!

さつき覚えた感覚を、さらに強めるように体の内外へ巡り廻らせる。

青い光が満ちていく。全身を包む泥ごと染めて。

これが、プリキュアの底力よ!

「う、う、うア!?!なにをしてやがるフォンテーヌ!?!」

イカレちまつてたはずじゃあねえのかよおおおおお」

「お疲れ様ね、ダーティ・ウォーター。」

わざわざ逃げ場のない場所に入り込んできてくれて、ありがとう！」

「てめえ、最初から…てめえの体をあえて差し出して！」

ハメヤがつつたつていうのか？この俺をツ！」

「あなたは三流の悪党みたいね。手に取るようにお見通しだったわよ」

「ち、チキシヨオオ！離れねーと…」

急いで切り離そうとしてるけど、ノロイわ。

『太陽』があつても問題ないほどの泥を一気に出してるものだから、

いきなり切り離すなんてどう考えても無理よねえ？

そしてさらに、プリキュアは私一人じゃあない。

「グレース！スパークル！」

「うん！」

「今、助けたげる！グスツ…」

ボトルを通じて、三人で一齐に浄化の力を流し込む。

周りみんな泥しかないから狙う必要すらないわね。

「ぐああああチキシヨオオオオオオオオ」

「こんなあああああ」

「オオオオンなああアアアア」





うわあ、シャレにならないわ…身長50mくらいかしら？

家を簡単に踏みつぶすみたいな大巨人が出来上がった。

アレって、F・Fが最初の頃に使った分身のマネみたいね。

スタンド能力は使えなくなっても、

メガビョーゲンとして支配下にあるものは使い放題、か。

これは勝てないわね。私も、グレースも…

シュパッ ドボ ドボオ！

「ひiiiiiiiiいギイイイイイiiiiiiiiい!?

『太陽』<sup>サン</sup>ンンンンンンンーンツ!?

「たーまやー!つと来たモンだぜ!なあスパークル?」

「ただでデカいと入れ食いじゃん?当てホーダイ当てホーダイ!」

まあ、スパークルの『太陽』だけは別だったわね。

デカすぎるから、変なところに着弾したら大変なレーザーも

メガビョーゲンに向かって水平発射できちゃってる。

おまけにデカすぎるせいで『太陽』から受ける熱で全身が大変なことに…

あつ、崩壊が始まった。一分も持たなかったわね。

目の前に落ちてきたわね。ボタッ!と。

「……お次は？」

「ヒ、ヒイイイ！ヒイイイイ！？」

「あつ逃げた！」

「追うわよ！」

あいつ……最後の最後に！よりもよつて下水に逃げるなんて……

メガビョーゲンはメガビョーゲン。

今追わないと、手に負えなくなつてから再戦を挑まれる危険は変わらない。

形はどうあれ、今回の件でその辺はよくわかつたしね。

「ちよつと待つて。鳴滝くんの体！」

「……そうね。体自体は浄化できてるみたいだけど、それだけにまずいわね」

グレースの言いたいことはすぐにわかつた。

つまり、汚水まみれの、両手もげたケガ人が意識なく放置されてるのね。

このままにしておくだけで、戻つてくる頃には死んでいかねないわ。

かといつて、私たちにはどうにも……どうしたらいいの？

「おい……あたしを助け！」

数秒間立ち尽くした私たちに声をかけてきた何かは……DISC！

DISCから聞こえてくる声を、私は……私たちは知っている！

「し…しゃべった…その声って」

「え、F・F!…かよ」

「どうなってるラビ」

「あんたらにわからないものはあたしにもわからない。

さつき、なんか『あつたかい』光が流れ込んだらどろ？」

その時に何か起こったんじやあないかと思う」

話し込んでる場合じやあないわ。気にはなるけど。

そう切り出すよりも先に、DISC:F・Fの方から切り出してくれた。

『魂』のない肉体は放っておくとすぐに死ぬ。

これは空条承太郎の実例でわかっていることだぜ…

だから、あたしが『魂』を代行する。

その間に、損傷しまくった肉体も可能な限り直してみる。

だから、DISCをこの体に入れたのなら…

あんたらは行け! 『魂』を逃がすな!

「わかった。お願い!」

グレースの即答は、みんなの即答よ。

今ここで頼れる誰かがいるのなら、これ以上のことはないわ。

さあ、捕まえにいかないと！総仕上げよ！



## プリキュア・ピュリフィケーション!—その6

助けてくれ!

…誰が助けるっていうんだ、俺を？

もはやスタンドすら失った俺は下水の中をただ逃げるしかない。

ビョーゲンズとして蓄えた力も、カップ麺できるよりも早く消された。

そしてこんな有様になっても、俺のご主人様とやらは!

ビョーゲンズのシンドイーネはドコにも姿を現さねーーツ

こんなバカなことがあるか! なのために俺をメガビョーゲンにしたんだよ?

情報をカケラも取らずにプリキュアにただけしかけるのに使いやがった!

クソツ…だが、まだ負けじゃあねえ!

俺がビョーゲンズである以上、地下に潜って汚染を広げさえすれば!

当初の予定通り、追うことすらも不可能な奥深くにまで行きつけば…

あのプリキュアどもも町ごと食らってやれるぜ。

業腹だが! 今はただ逃げきってお楽しみタイムを待つてやるぜ。

なにしろここは下水道の真つただ中…歩道すらもねえんだ。

こんな汚い中におキレイなアイツらが追ってこれるわけがねえ。

『俺だけの世界』だ！ここは俺だけの王国よ。誰も入りたがらねえ王国：

ここに一人で続ける限り、俺は『無敵』！

ズバ…ズバババ…：

こんな場所だ、ネズミとかもいるよなあー

原型を留めない死体の方がたくさんあるだろーけど…

おつ、明るく…遠くに明かりがあるのか？

さつきマンホールを打ち上げ花火みてーにブチ上げちまったからなあ。

業者がメンテナンスし始めたか…チョツカイかけるようなヒマはねえんだぜ。

ズババ　ズバババ…：

いや、この音。近しい大きい…下水の合流地点に近づいたか。

こうなつてからすぐにある程度は把握したが…焦つてんなヤツパリ。

あんなひどい敗北をすりゃあ、逃げるのに慌てるのも当然かな。

だが忘れんな！この焦りと恐怖…後日まとめてノシをつけて返す。

そのためにも今は逃げ切つてやる…

ズバ！　ズババババ！

なんだ？色が…太陽光とか電球じゃあねエ？

汚水の中にいて、こんなに色がわかる…

この色：『白』…ではない！色が交じり合ってるんだ。

混じる元の色は：『桃』：『青』：『黄』…

『桃』『青』『黄』

ズバババババ バツシャアアア

「なツ……なアんだってええええええええええ!!」

汚水の渦を蹴散らしながら！走ってくる！ヤツらはツ!!

後ろを振り向く、『桃』『青』『黄』!

「だあああー！ツ、エンガチョーツ!

エエンガチョーツ！うわああ〜ん最悪ツ」

「そんなにイヤなら上に戻ってなさい!」

「それもイヤ!っていうかもう一緒にゃんコンナに汚れたら!」

「逃がさないよ。絶対に逃がせない!」

ぜツ……絶望だ!

「プリキュアツ!!バカなツ!!」

今の俺に戦える力はねえ。

だからさっさと逃げたのに、こんな距離まで…近寄られたら!

泥の体でバラけて逃げるか？

それができたのはF・FのDISCがあったからだよ！

もう俺はただのメガビョーゲンだ。それも弱小の。

ここを切り抜ける手段は…もう、ない。

「な、なんでだッ…どうしてだ!？」

なんだってこんなキツタネ工場所にまで追ってきやがるんだ？

何のとくがあるんだよ？」

『あなたを助けるため』よ！それ以外の何だっというの!」

「させねえぞ。消えたくねえ！

俺は…見下ろすんだ！腐ったドロに溶けて沈むてめえらを、

俺がただ一人見下ろせば…全ての『幸』は俺のものなんだ。

てめえらに何の資格があつて阻むんだああー！

その顔を汚染して乗っ取ってやる！

ビョーゲズなんだぞ？できねえはずがねえ！

できなければ終わりだ。俺は浄化される、消される。

こいつらは同じだ。小兄さまと同じだ。

理屈もなく、気分だけで俺を消しに来やがった！

…避けた。避けやがったか！バカが！

フォンテーヌ、てめえの真後ろのグレースが無防備なままだぜ…

「勝った！乗っ取って今度はてめえの体を人質に」

「学習しないヤツラビ。自分のことだけでいっぱいはいっぱいラビ？」

「なん…」

「プニ・シールド！」

ギョオン メシヤ！

し…しまった…三度目じゃあねえか。

俺は、弾き飛ばされることすらなかった。

避けたフォンテーヌは要するに今の俺の真後ろにいて。

そして、俺の『右腕』をとって脇に手を通し…

反対側から、グレースも同じことをした…!!

これは…これは！『父さん』！『母さん』！

わかっついてやっつたんだな？

俺が！苦しむと！わかっついて！

死ね、てめえら、死ねえええ!!

うわああああああああああああああああ

「大丈夫。怖くないよ。誰もあなたを傷ついたりしない」

「スパークル、今よ！」

「ラジャツ！……って、どーすんの？」

「必殺技だぜ、スパークル！……うんニヤ、助けんだから必殺つてのはヘンだけだよ」

「キメ技つてやつ？」

「うわっめっちゃヤバイ。コーフンしてきた！」

「助けてやろうぜ！オレたちだよ」

「うん！」

「エレメント・チャージ！」

離れない、動かない。

思い出すのは無力だけだ。

俺は、遺書なんか書きたくない。

ただ、助けてほしかった。

取返しのつかないことをした俺の居場所があると思えば、

きつとやり直してみせた。俺は、俺はただ……

「プリキュアツ！ヒーリンググウウゥ、フラーツシユ！」

俺は、むかえてほしかったんだ。

もう、遅いのかな…望む資格は、ないんだよなあ…

黄金の光条が押し寄せ、貫く。貫かれたと思ったら、包まれていた。隣には、捕らえていたはずの水のエレメントがいた。

気が付いた。『ダーティ・ウオーター』が剥がれ落ちたんだ。

今の俺は…魂、か……実体がない。

「やつりい！よくわかんないけど、タツキーもつかめてるみたい！」

「早く戻ろうよ。体に魂を戻さなきゃ」

実感もない…正気に返ってみれば、状況についていけないというか…

『ダーティ・ウオーター』として見聞きしたものは全部覚えている。

覚えてはいても、されたことについていけない。

どうして、俺を助けるだなんて決断したんだ？

どうして、自分の体に侵入されてまで俺の無事にこだわったんだ？

どうして、泣いたんだ？

咀嚼できない。それぞれが大きすぎて雲みたいにつかめない。

ただひとつ、理解できるのは…

「ヴ…ア…アアア…俺、は…俺…おれ」

「待つて、みんな！」

「浄化しきれないペエ」

下の下水流を見る。泥の塊が、口らしき穴をパクパクさせて、音を漏らしていた。何なのか、言われないでもわかる。『ダーティ・ウォーター』：

「そこまでして拒絶すんのかよ！

そこまでして浄化されたくねえーのかよ！

仕方ねえ。スパークル、もう一発：」

「オツケー、今度こそ」

違う。

理屈じゃあない。逆に今度は実感としてわかった。

俺は、俺に向かって踏み出した。

妙な感覚だ。幽霊になれば、動かない足が動くだなんてな。

そして、俺に手を突き込む。生暖かい。

人間の内臓に手をつ突っ込んだのなら、こんな感じなんだろう。

すぐさま、後ろからフォンテーヌが肩を掴んできた。

「ちよっ…何やってんの！ 私たちの苦勞を無にする気!？」

「こいつは、俺なんだ」

「それはメガビョーゲンよ！



取りつかれてたあなたに責任なんか問わないわ。だから」  
「間違いないんだよ。こいつの怒りは俺の怒りだった。」

お前らに浴びせたひどい言葉も、みんな俺の本心だった」  
まだ、心も理性も追いついてきていない。

ただ、義務感で動いているような感覚が俺にはあつた。

強いて言うのなら…裏切りたくない。

何も整理できない言葉を、ただ羅列していく。

「だから、今のこいつの絶望も、俺自身の絶望だ。」

俺は、俺を連れていかなくちやあいけない。

今ここで、俺がこいつを棄てていったなら……

俺、は…あいつらと同じになるんだよ！

お前らがしてくれたことの前で…俺が今、そうしちまつたなら！  
きつと、俺には死んだも同然の明日しかなくなる…何より」

崩れていく泥の塊を、腕の中にかき抱く。

きたねえ、悪臭のする、見たくもないもの…だからこそ。

「俺がこいつの痛みを感じてやらないで、誰が感じてやるんだ？」

俺が泣いてやらないで、次は誰を泣かせる気なんだ？

…面倒見なきやあ、ダメなんじゃあねーかな。

そんなことも出来ないでいたから、こいつはひたすら同情を買おうとしたんだ  
よく考えなくても、どのみち自分が可愛いだけか。  
なにしろ、こいつは俺なんだからな。

「もちろん、こいつみたいなのはバカはやらない。

実行に移すのはバカのやることだからな。

ただ、俺のすぐ後ろにいることくらいは認めてもいい、かと思う…んだけど」  
確たる信念もロジックもない。

取引にもならない。ただ一方的に願望を並べているだけだ。

普通に考えれば聞く価値すらもない。まさしく慈悲にすぎる図だった。

しかも自分可愛さのために。救いようがないな。

それでも、しないよりよっぽどマシだ。

俺は、気合を入れて偽善を働く。少なくとも今は。

フォンテーヌが、掴んだ手を離した。

「…あつ、消えるよ? 『ダーティ・ウォーター』が消える」

「消えてく…どして? ニャトラン?」

「逆だな。さっきの逆…自分から浄化を受け入れてる…」

魁のヤツに、さっき浴びせたスパークルのオーラが残っちゃあいるけどよ」  
泥が急速に縮んでいく。

蒸発するように体積が消えていく。

「お、おい、消えるなッ！」

なんのために今、俺がかばってんだよ」

「……『交差するふたつの影』、だ！」

俺とお前は、それでいい……忘れるなよ。

どこにいようと……お前のそばに、俺はいるぞ」

残ったのは、言葉だけだった。

『ダーティ・ウォーター』は何もせず、ただ消えた。

俺をもう一度乗っ取ることだって、今にして思えばできたはずだった。

わかることは、ただそれだけ……

俺は、俺自身から影を継いだ。

「ハイッ！おせえぞ！」

あと十分も経ってたら体が死んでたぜ」

「F・Fさん、まずい状態なの？」

「右手は復元した。足も一か月くらいかければなんとか元には戻る…見た目は大丈夫。左手はムリだからイチから作るとして…今はとにかく血が足りない。

血が材料のF・F弾をあまりにも撃ちまくりすぎた」

戻ってきた俺は、日の光の下でも幽霊のままだ。

目の前で、しゃべってる俺自身の肉体と対面する破目になっている。

なんでも、解放されたはいいが魂がない俺の体で、

F・Fが留守を守ってくれているらしい。

治療も並行してやってくれたらしいが、そっちの方で致命的なことが起こっていた。

…このままだと死ぬみたいだなあ俺。キリはいいかもしれない。

だが、そうだと『ダーティ・ウォーター』がちよつと浮かばれない。

決着後すぐに俺が消えちまったら世話ねえぞ！

思い悩んでいたら、グレースが一步進み出た。

「血が足りない…のなら、わたしの血は使える？」

「そいつを頼む気だった。造血幹細胞はさすがのあたしも手に余るからね…

あ、マニキュア…じゃなくて、メロキュア…なんだっけ？…ドラキュラ…違う」

「プリキュアよ」

「あー、そうそう、プリキュア…そのカッコをまずやめろ。

今のあんた達は『人間以外』の生き物かもしれない。そんな血は使えない」

二秒くらいの間を空けて、みんな変身を解いた。

おい、いいのか？そんな当然のように血を差し出して。

嬉しいとか感動とかを通り越して怖くなってくる。

俺は、なんにも返せないんだぞ？

：関係ないだよな、こいつらには。なんてこった。

F・F式の血液検査の結果、輸血して問題ないのは花寺のどか、ただ一人。

聞き入れた彼女は足を延ばしてその場に座り、F・Fの管を左腕静脈に受け入れた。

そういえばジャージ姿…どれだけ慌てて出て来たんだろうな、朝。

しかも今は汚水まみれ。頭が上がらないどころか地面にめり込みそうだ。

「500mlあれば十分だ。あとはフー・ファイターズでまかなう。

血を失うあんたの方も、同じように補うぜ」

「はいッ、お願いしますー！」

ほどなくして、俺は目を覚ますことになる。

F・Fが主導権を放した瞬間に、俺の霊は吸い込まれていったらしい。

生き物の体からは、魂が簡単に出ていかないように出来ているようだ。

もつとも、そんな知識が役立つ場面には二度と出会いたくないけどな。まず、俺がやったことは土下座だった。他にどうしろと？

「ごめんなさい。そして、ありがとうございます。」

言うべきことがあまりにも多すぎて言葉が見つからない」

いいよ、そんな。

そう言いかけた花寺のどかを遮って、前に出たのはペギタンだった。

「良くないペエ。魁が、元に戻ったのはよかったペエ。」

でも…魁は、ちゆに許せないことをしたペエ」

顔を地面につけたまま、黙って聞く。

身に覚えがありすぎた。言っていることはもつともだし、

こいつに言われるなら、恨まれるなら仕方がない。

「魁は、助けようとしたちゆを…踏んづけたペエ、蹴ったペエ！」

あれが本心から出た行動だったのなら、なおさら許せないペエ！

……だから！」

言葉が途切れた。なんだと思つて顔を上げかける。

まもなく、脳天にペンギンが降ってきた。

後頭部を蹴りつけられて、顔が地面に叩きつけられた。

さすがは空を飛ぶペンギンだった。威力はけっこうバカにならない。

周囲がいつせいに身構えるのを気配で感じた。

「これは、友達がキズつけられたボクの方だペエ。

ボクは！これで、許すペエ」

「…ありがとう。ペギタン」

正直、これではぬるいと思う。

だけど、こいつが喜んで人を殴れるわけがない。

それをあえてやったのは何故か。

俺の考えは『うぬぼれ』かもしれない。

でも、自然と出た思いに自然と出た言葉なんだから仕方がない。

少し鼻をぐずらせながら痛み之余韻に浸っていたら。

…勘違いされたのか？

拳をならす仕草をしながら、沢泉ちゆが来た。

「なら、当事者の私が黙っているわけにはいかないわねえ？」

「…う、ううッ？」

多くは語るまい。引っぱたかれたのは、五発！

右の頬と左の頬を、俺は交互に差し出すことになった。

「メガビョーゲンにされていた分だけ、情状酌量で差し引くわ。」

「その上で……」

「これは顔を踏まれた分！」

「これは頭を踏まれた分！」

「鼻を蹴とばされた分！」

「体の中に入られた分！耳からだったからコレで済ませてあげるわ！」

「ワガママ言つて部活を休まされた分！」

「立つのを手伝おうとしたのに突き飛ばされた分！」

…は、不可抗力だからやめるわ。以上ね」

こいつ本気で引っぱたいてきやがった。

イイ音がご近所中に響き渡ってないだろうなあ？

「こ…今回と関係ないのも混じってるんだが？」

「まとめて清算よ。ホラ、ツケの領収書」

取り出したメモになんか書いてると思つたら…

さっきの全部が、それぞれビンタ一発、計五発でメてあつた。

お前も結構ノリノリだな。そんなところをリスペクトするとは…

だが、彼女は、まとめて清算、と言つた。



今日までのことをまとめて清算…許すと言ってくれたわけだが。

「なあ、これ」

「再発行はしないわよ。ちゃんと取っておいてね」

それは、そうだよな。当然だろ。

気落ちしてはならない。その資格はない。

…だが、もう今だ。今しかない。

「沢泉ちゆ」

「その清算はできないわ。鳴滝魁」

言おうとしたことは、言う前からびしゃりと締め付けられた。

「それは、抱えるべきよ。あなたも、私も。」

「安易に手放している問題じゃあないわ」

「…その通りだ」

「ええ。これからのあなたを信じるわ。裏切らないでね」

その後は、別に領収書を切る者はおらず。

避難していた人が戻りつつあったので解散することになった。

とはいえ、全員、汚水まみれではいかんともしがたく…ラテは除く。

俺がマンホールに落ちこちて、皆で助けたというカバーストーリーを用意の上で、

平光家にヘルプを求めることになった。傷がないのは不自然なんで、右腕にケガを演出の上で。

居合わせた、平光ひなたの兄は俺を知っていたらしく、一瞬身構えてはきたが：

見ての通りの状態ではあまりにも危険だと、その場で全員の病院を手配してくれた。

そして、すごい剣幕での説教が飛んだ。

「汚いっていうのは、それだけで危険なんだ…」

下水道はね…専門家が、専門の備えをして入らないと簡単に死ぬ場所なんだよ。

一歩間違えれば！家族みんなを悲しませるところだったんだよ!？」

事実、それをさせたのは俺だ。

ここでも俺は土下座をし、頭を上げることができなかった。

それに対し、言われたことは、顔を上げなさい、の一言だけだった。

『ダーティ・ウォーター』が勝たなくて、本当に良かったと思うしかない。

その後、病院にかかるまで、可能な限りの汚れは落としておこうということになり、女子三人は平光家のお風呂へ。俺は、車のガレージへ。ジュースの移動販売用の車らしい。

「手伝うよ。無理だろう、歩けない上にケガ人じゃあ」

内心どう思っているかはともかく、ひなた兄は傷をいたわりながらかなり念入りに

洗ってくれた。

本職の獣医はさすがと言うべきだろう。

「落ちませんね…:におい」

「そりゃあ落ちないよ。ものがものだからね。」

毎日毎日、丁寧に洗っていくしかないんじゃないかな

…気の長い話だなあ。

実際、そうするしかないんだろうよ。

石鹸でにおいをごまかしながら、完全に落ちるその日まで。

## スタンド使い狩り・スタート！

あたしはF・F。『さよならを言ったはずのあたし』。

こんな風に自我を持ってふるまえるはずなんて本当はなかった。

昨日まで、あたしはただの『情報』だったんだからな…

本に書いてある記録がどれほど詳しくかろーと、そこから人間は甦らない。

それと同じで、今、あたしがあたしであることなんて、ありえなかつたはずなんだ。

「やっぱり、何かあつたんだな。」

あんたたち『プリキユア』の力が、DISCの何かを変質させた…

すでにあたしも、あんたたちの同類かもしれない」

「あんたたちつて、ボクらのことだべエ？」

「そーだなあ、ヒーリングアニマル！」

あの『お手当て』の力とやらが今のあたしを作つたんなら、そういうことになると思  
う」

今、どこで何をしてるかって？

風呂を上がってノンビリしてんだよ。旅館『沢泉』で！

「ムフッフツ、グビツグビツ……」

「プハアア~~~~フルーツ牛乳ウメエ」

「ちよ、ちよつと……F・F?」

もうチョットおしとやかに飲めない?

花寺さんは大丈夫?」

「やめてやれつてばよ! ひなたが窒息しちゃう!

……というか、オレも死ぬ。笑い死ぬ」

タタミの床で、ひなたがうずくまって左右に転がってる。

笑い転げてるみてーだな、どうも……何がツボ?

『あのー、F・Fさん……その飲み方はやめてほしいかも。』

風呂あがりのオジサンがジョッキでビールを一気飲みしてるみたい!』

「ええ〜、何がオカシいんだよ。ウマイものをキモチよく飲む!」

他に大事なことなんてある?

でもシャバつてサイコ〜だなあ〜、あたし、扉の中しか知ら」

口を無理やりふさがれた。

主導権をブン取られたんだ。

静かにキレんのな、こいつ。

「それ以上やるんなら、もう体貸さない」

「……………はい」

ん？ワケわかんないって？

だろうな…順を追って説明してやるよ。

まず、昨日の騒ぎで全員ドブくさくなくなっちゃった。

で、夜になって改めて洗いなおしたけど、それでも足りなかった。

そこんとこ、ちゆの母親が心配したんだと。

悪臭が落ちないのは女子として致命的だってんでな…

昨晚のうちに全員に声がかかった。

今のあたし本来の持ち主、鳴滝魁も、この流れじゃあさすがに放置されなかったって

わけ！

下水に落っこちた当の本人だからね…

魁本人は、さつき、ちゆ母に連れられて別室に案内されていった。

『水族館』でも男子監房と女子監房はシツカリ分かれてたから、

これ自体は別に不自然でもなんでもないけど、あいつはそうは思わなかったらしい。

……ま、それは今どうでもいいや。

問題は、今日する予定だった会議がこのままじゃあ出来ないってことで。

そこで、鳴滝魁は思いついた。DISCのあたしを、のどかに託すことをだ。

今や人格を持つているあたしであれば話し合いもできるし、情報もみんな押さえてい  
る。

すると、のどかの方から持ち掛けてきたんだ。せつかくなら温泉を経験してみない  
かってな。

で、途中から体を借りたけど、ドーもチョツピリハシヤギすぎたみたいだ。OK、反  
省するぜ…

「悪かったよ。」

あたしの生まれ故郷は『水族館』の湿原だし、

育ちもずっと監獄だ…：ちよつと楽しみすぎちまったな」

「うん。生きてるって感じ!」

わたしも、つい最近までは体が不自由だったから…

F・Fさんの気持ち、わかるよ」

「のどかっち…：ヨコから見るとヒトリゴト言ってるアブナイ人だあ。

イツモののどかっちとワイルドなのどかっちが交互にシャベツてる!」

「仕方ないわね。口はひとつしかないんだし」

ふーむ、そういう問題もあるか。

いわゆるヤク中っていう連中も見たことがある。

のどかがそう思われちまつたら、ヘタすると監獄行きもあるかなあー  
よしわかった。簡単だぜ。口がひとつしかないっていうんなら。

「口を増やすぜ。耳から」

ギャー……ギャー……

この世のものとは思えねー悲鳴を全員にあげられた。

オオゲサだなー、新しい口を作って耳から出しただけじゃあねえーか。

駆け込んできたホテルマン？どもに、

「ゴキブリです！ゴキブリが出たんです！とゴマかしたちゆは、

部屋のドアをピシヤリと閉めると、ヒタイに血管の浮き出した笑顔でコツチを見た。

「せめて！見えないトコロに！してちようだいッ!!」

「わ、わかった…クチのナカとかどう？見えない？モンダイある？」

「さ、先が思いやられるよおー、…大丈夫かな、鳴滝くん。これで」

その後、ポジションの問題からのどかが二、三度息苦しくなるのを改善してから、

ようやく今日の本題に入った。あたし個人は別にこのままダラダラでイイ気もする

けど…

冗談だって。仕事はする。自分から死に行くバカになる気はないからね。



「さてと。昨日の一件……魁のヤツがダメージを受けはしたが!

トータルでは『大勝』だ。ビョーゲンズが手の内をさらしただけで終わったな」  
「大勝、つて……左手、完全になくなっちゃったんだよ?」

「フー・ファイターズのDISCさえあれば、そこは取返しがつく。

あたしも増えたんだ。魁が寝ている間も四六時中治療に専念できるんだぜ」

安請負いでもなんでもない。

時間はかかるけど、できる。

でなければ、徐倫もエルメエスも、みすみす死なせることになっていったんだ。

出来なければならなかったんだぜ、あたしは。

「ビョーゲンズは何をしてきたんだペエ?」

「シンドイーネとかいうやつだ。顔色悪い女だったぜ……

後ろからいきなりナノビョーゲンとやらを撃ち込んできてね。

そのまま蝕むように乗っ取られた。フー・ファイターズじゃあ防げなかった」

「シンドイーネは何か言っていたラビ?」

「割りに合わないからやりたくないけど、キングビョーゲンの命令じゃあ仕方ない。

……だったかな。というか、魁がとにかく好みじゃあなかったらしい。

心底イヤそうにメガビョーゲン化させてから、即座に姿をくらませちまつた。

なんにも情報をとっていかなかったし、作戦を授けもしなかった。

頭のいいやつだとは思えない：敵としてはやりやすい部類だろうね」

とはいっても、あなどってかかれるわけもない。

パワーもスピードも、ほぼ間違いなくあたしを圧倒しているからな。

プリキュアつてのに変身できるこいつらはともかく、

今の魁とあたしじゃあどうにもならないな。戦いになった時点で負け。

「待って、F・Fさん」

「ん？」

「まるで経験していたみたいに話しているけど、

あなたが『生まれた』のは、鳴滝くんの体が浄化された時でしょう？

時系列がおかしい、と、思うのだけれど」

「肉体の記憶を読んだ。

脳が完全に破壊されていない限り、それができることは：あんたも知ってるはずよ」

質問から答えを受けたちゆは、真顔で少し黙った。

そして、ためらいがちに続けてくる。

「あなた…あいつの過去を、全部知ったっていうの？」

「ン？知りたいのか？」

「ツ、冗談じゃあないわ。過去を無理やり覗くなんて…その。卑劣よ」

一瞬、カツとなってからトーンダウンしていく。

あたしのことを卑劣と言ってるようなものだからかな？

お人よしだな…そして、行儀がいい。合ってるよな、これ？

「結論から言う。必要などころしか知っていない。

今日、この会議をするにあたって必要などころだけをね。

『思いつ』は『勇気が生まれる場所』なんだ。

他人に好き放題踏み込まれたら…あたしだって許せない」

全員、ばつの悪そうな顔をした。

あたし、なんかヘンなこと言ったか？

…あ、みんな知ってるぞ、あたしの過去。こいつら。

DISCで全部ノゾキ見されちゃった後じゃあねえるか。

「ゴメン、F・F！サイテーだったねあたし」

「オイオイ、なんだよ…ひなた」

「アンタのDISCを初めて読んだとき、あたしね…

『楽しい！』『面白い！』としか受け取らなかったじゃん。

悩んで、苦しんで、戦ってたアンタをマンガ扱いしたんだよ、あたし」

「あつあー、…イイんだよ、気にすんなって！」

少なくともこうなつちまう前まではタダの本みたいなモンだったんだし。

あと、たぶんあたしも似たり寄つたりだと思ふ。あんたと…

マジになるなよ。身が持たねーぞ」

見てる限り、徐倫をバカにするようなヤツらじゃあないしな。

知られたところで、そこを侮辱されない限りは許してやるぜ。

「ありがと、F・F。やさしー」

「そうか？もつとホメてもいいんだぜ」

ヤイヤイ騒ぐコイツは、あたしよりもだいぶ頭が軽いぜ！

それだけでもけつこー仲良くやれる気がする。

日常生活だとほぼツツコまれる側だったからなあーあたし。

ここじやあそうはいかねえからな！

「…：まず、わたしもごめん。気分いいわけないもん。過去を読まれるなんて」

「そうね。さつきも言ったけど、卑劣よ。ごめんなさい」

「ごめんなさいラビ。ラビリンにも知られたくないことたくさんあるラビ」

「ボクもだペエ。ゴメンナサイペエ」

「記憶全部が他人に知られるとか、怖エーよなあ…：ごめんなさいだぜ」

「やめろやめろ。ゴメンナサイの連呼やめろー」

慣れねえーよなあー、こーいうの…もつと凶太くていいんだよ。

14のガキどもだろあんたたち。あたしは2ヶタいつてないけど…

徐倫がここにいたら、エルメエスだったら、こいつらに何て言うやら…

楽しそうだけど、もう届かない想像だよな。

しみみりはあたしのキャラじゃあないんだぜ。

「本題に、戻るね…これは、わかるかな？」

ダーティ・ウオーターは何を目指していたの？」

「…その質問はいいな。スゴくい…」

答える前に、なんでそれを聞こうと思った？」

「『全部を泥に沈める』としか言ってなかったから。」

ビョーゲンズのために戦うとは思えない言い草だと思つて…

それなら、何か独自に目指す先があるつて、そう思つたの」

のどかが気付いたのは、まさにあたしがこの場に託されてきた話そのものだ。

ビョーゲンズにされた張本人が、これだけは伝えなければならぬと

DISCを手放してでもあたしをここに送つた理由。

「みんな、『矢』のことは覚えているか？」

空条承太郎が一時期追っていた『矢』のことだ」

「スタンド使いを作る、っていうやつ？」

『弓』の方、ゼンゼン意味ないじゃんアレ」

「……『矢』の原理はスピードワゴン財団が追っていた。

『矢』の材料は、宇宙から飛来した隕石であり……

宇宙のどこから生きたままやってきた『ウイルス』だって話、わかるか？」

全員、少し考えこんだ。言われるままに記憶を追って……

ウイルスという単語に、やはり全員等しく反応した。

当然そうなるよな。プリキュアの敵は、誰だ？

そう、ビョーゲンズ。地球を病気で蝕もうとしているヤツらだ。

例のウイルスは、生き物に感染すると、そのほとんどを蝕み殺し……

生き残ったわずかな者が、ご褒美のように新たな力を得る。

それがスタンド能力！

「ビョーゲンズなら、そのウイルスを使えると思ったラビ？」

「半分正しいな。ダーティ・ウォーターは力をつけて、

自分でそのウイルスと同じものを作ろうとしていたんだ。

そして、今度はジャン・ピエール・ポルナレフを思い出せ」

「ン…ホウキ頭のオッサン? トイレの人だよね?」

「やめてやれよ、ひなた…アンマリにもヒドすぎるぜソレ」

「承太郎と最後に話した内容な。見ているはずだぜ」

2004年。

承太郎はイタリア系ギャング団パッショーネのボスと秘密裏の会談を持っていた。

場所は日本。ボスは日本人の『汐華初流乃』しおほな はるのを名乗ってホテルの一室に現れ…

そこで、幽霊になった戦友、ジャン・ピエール・ポルナレフと再会した。

亀に取りついてまでこの世にしがみついていた彼が承太郎に伝えた事実とは。

そこまで最初にたどり着いたのは、やはりというか…ちゆだった。

「……『レクイエム』」

「そう、『レクイエム』…」

スタンドを生み出した『矢』すらも支配するに至ったスタンドは、

この世のすべての生き物の精神を支配する『レクイエム』になる。

ダーティ・ウォーターは本気だった」

「わたしたちが…あそこで、取り逃がして、たら」

「うまくいったかはわからない。だが少なくとも…」

やつらビョーゲンズは『病魔』そのもの。

ウイルスだったら、ある意味で人間よりもはるかに専門家だよな」  
ピクリとも動かなくなつた場。外の鳥の声だけが聞こえている。

当然つてやつだな。最悪に近い未来予想が積み重ねられたんだから。

「つまり……つまり、こういうことだペエ？」

ビョーゲンズに、スタンドを生み出すウイルスを研究されたら。

うまくいってしまつたら……行きつく先は」

「ビョーゲンズが地球の生き物の精神を支配しちゃう……オレも、ひなたも」

「そうなつたら、戦うことを思いつくことすらできないラビ。おしまいラビ」

「……た……対策は？」

「そうさせないために、わたしたちに何ができるの？」

立ち直りが早いのはのどか、だな。

戦う『眼』が強い……ちよつとだけ徐倫に似てる。

聞いている限り、こいつが中心になつて皆を束ねているような……

あの魁だつて、こいつの引力に引き込まれてきただけなのかも。

無意味な考えだよな。運命だとかなんとか言つても、決めるのは『知性』だ。

あたしは、こいつらの力にもなりたい。『思い出』と『知性』がそう決めた。

「『スタンド使い狩り』だ」



「……へ？」

「とにかくビョーゲンズにはサンプルを渡せない。

サンプルからウイルスの作用を逆算されるかもしれないんだからな。

だから、先に見つけてスタンドを取り上げるしかない。

そして、DISCをバラまいてるヤツを必ず倒すんだ」

「滅茶苦茶…でもないのね。

こうなったら、やるしかないようね」

その後も風呂呂に出たり入ったりしながら、話を繰り返して作戦を練った。

スタンド使いは、基本的にDISCを取り上げてただの一般人にする。

取り上げたら死ぬような、やむをえない事情持ちはDISCを持たせたまま守る。

そうしなければプリキユアはプリキユアではいられない。

守りたい思いがあるからプリキユアだとか…あたしもプリキユアかあー？

夕方になって、ようやく魁と合流できた。

のどかに手渡されて、DISCが頭の中に戻る。

あたしの本体がこいつに戻ったわけだな。

「どうしてたの、鳴滝くん」

「……えらく疲れた。詳しくは聞かないでくれ」

怪訝な顔ののどかを置いてラテを軽く撫で、

足早にその場を立ち去っていく魁。

…松葉杖だから、やっぱりだいぶ遅えな。

「で、どうしたよ」

「…俺な、知ってると思ってたんだ。」

沢泉ちゆの母親だから、俺があいつにしたことはすでに知っているって。

謝ったんだよ。それ前提で…」

「……、で?..」

「知らなかった。知っていたのは俺の足が動かなくなった経緯だけだった。」

洗いざらい吐かされた。あの頃の俺の人間関係まで」

「……愁傷サン、お疲れサン」

「そこまで聞きまくって、最後に『聞かなかったことにする』って言われた…」

なあF・F、どう受け取りやあいなんだ?..これ」

「あたしに聞くな!..」

話足らずでマジでわからねえ。

自分で話してるんだからいいや、ってコトで、

そこだけ肉体の記憶を読ませてもらった。

言うには……

『好きだとか、惚れただとか、思い返してみればそんな気持ちは無かった。

ただ汚して台無しにしたかった。どうしてそう思ったのか、今でもわからない。

俺は愚か者です。その果てがこのぎまで、当然の報いです。ただ、ごめんなさい』

『母としては許せないわ。実際に傷つけられていたら、あなたをどうしていたか……

でも、うちの子は、許さないと決めた上で今日あなたを呼ぶことを選んだんでしよう？

それに免じて、今は黙って見ています。今回のことは聞かなかったことにします』

あー、要するに……ちゆが黙っていると決めたところに

全速力で突っ込んだしまった尻ぬぐい、全部向こうさんにやってもらってんじゃねーか。

むしろ出来すぎなくらいの温情措置じゃない？

余裕のないアコイツ……オロオロしまくってよおー

しばらくはこうやって、泥にまみれ続けるのかもな……

それに、あいつらを巻き込むなよ？

恩知らずになりたくねーならな！

## 花寺のどかのドリーム・シアター—その1

もしかして、日ごろの行いが悪いのかしら？私：

目の前で得意になってるアホ…敬意をもつて扱う理由がカケラも見当たらないヤツ  
の

頭が痛くなる話を聞かされ続ければ、そうも思うわよ。

「わかってくれたかな？ 沢泉ちゆさんよおおーッケケケ

夢の中はオレのもの！ここでは誰もオレに逆らえねええーッ」

コスプレっていうのかしら？

死神のカッコでプカプカ浮いてるこの男の名前はやじま矢間さまのすけ佐馬助。

去年までクラスメートだったから知っているわ。

あまり好かれている人間ではないわね。

何か悪いことをしたわけじゃあないけど、下品な冗談がすぎるヤツだったわ。

それこそ、男の子同士でさえもちよつと引かれるレベルで、ね。

関わらない限りは無害だから、大して気にもしてなかったけど…

スタンドを得てこうなってしまった、と。本性見たり、というわけね。

…ああ、明らかにスタンド使いなのよ、こいつ。

今、私がいるこの場所も、異次元空間というか、異界というか…

具体的には言わないわ。ただ、ひたすらいかかがわしいとだけ。

もう、見るだけでオトコに対する不信感が極まってくる。

弟がいる身だと、これは…あの子もこんなことを考えてるのかしら？…げんなりする。

「あなた、いつからこんなことを…いつたい、何人に？」

「知りてーかあ？ヒヒヒヒ、まあいいや。」

一か月前だ！一か月前に、神様がオレにくれた。パワーがこれだけ。

神様は言ったぜ！好きに楽しめと！

なら楽しまねー方がバチ当たりだよなあ…『4人』だけ！

『4人』をオモチャにしたが、誰一人としてオレのことを覚えちゃあいねえー

夢の中だもんなあー当然だよなあー、そしてお前が『5人目』になる！

サイコーだぜ！家から動かさずやりたい放題、天国だ！

まあ、これが必要なことはみんな聞いたわけだけど。

こいつの能力は、眠った人間を、自分が支配する夢の世界に引きずり込むこと。

こいつ自身は自宅から動かず私を攻撃してきていること。

遠く離れた私をここに引き込めたことから、射程はものすごく長く…

目当ての人間が寝ている場所さえわかれば攻撃の対象にできることもわかる。どうやって私の部屋の場所を知ったのよこいつ…そこは置いといて。

そして、この夢の世界を覚えていられる人間は誰もいないこと。

…これは、もう…仕方ないわね。このまま犠牲者を増やすくらいだったら。

「今すぐやめなさい。こんなバカなこと…」

「やめるわけねえーだろーがよオオーッ」

「これが最後よ。今すぐやめなさい。でないと…後悔するわよ」

「後悔？ やってみろよ…今からッお前にできることはッ！ 泣き声を上げるだけ」

「スタートッ！」

「プリキュア、オペレーション！」

ボツゴオ メキ メシヤ

変身は一瞬。間髪入れずに振り抜く拳が、こいつの顔面にめり込んだ。

これほどまでに近寄ってくれば、もうすでにいい練習台でしかないわ。

「ゲツ…ゲビツ？ な、なんツ…」

「そうね。私にできることといったら、泣き声を上げるだけよね…」

ただし、あなただよ矢間佐馬助。あなたの泣き声よ。準備はいいかしら？」

「ひ、ヒイツ…こんなはず！」

まず、ここに来た時点でペギタンがいた。

一緒に寝ていたから一緒に引き込まれたのはほぼ確定で、

となると、プリキュアの力も、変身の手段も一緒に引き込まれている。

そして、エレメントさんを：『魂』を捕まえることができるプリキュアなら、スタンドを殴れる。

なぜならスタンドは魂に近いものだから。

本物の幽霊を知っている承太郎さんの知識が、すべての確信を後押ししてくれたわ。

そうでなければ、絶望していたかも：ね！

「さあ、泣いてもらうわ。4人分の絶望の涙をね」

「こんな理不尽があつ：」

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

拳の一発一発が、えぐり、こそぐ。

デタラメなパンチなんか撃つたりしない。

手本とする拳のラツシュは、全てが狙いすました必殺の一撃なんだから。

ラスト、とっておきの！

「オラアアーーーーッ！」



「ドビゲエエエエ〜〜〜ッ!？」

ボロ雑巾になった死神が、夢の世界の壁をぶち破って消えた。

一緒に、夢の世界もボロボロと綻んで消えていく。

「…問題は。夢から覚めた私がこれを覚えているか? つてことだけど。

再起不能にはさせてもらったわ。

私たちが裁くしかないんでしょう? 誰にも見えないし聞こえないのなら…」

「ちゆは、間違ったことはしていないペエ。これしかなかったペエ」

「ありがとう。ペギタン」

「……で!俺が叩き起こされたわけだな…深夜3時に!」

「何度だって謝るわよ、それは…でも、仕方ないでしょう?」

夜中に単独行動できる人間が、現実的にあなたしかいないのよ」

結論。覚えていたわ、夢から覚めても。

敵スタンドを倒したからか、プリキュアだったからか…それはわからないけど。

覚えているなら、やることはひとつ。DISCの回収よ。

あの男は同級生で、至って普通に家族もいる身だった。

スタンドを再起不能なまでにボコボコにされた以上、あの男も同じように吹っ飛んでいて…

家族がそれに気づかないわけがない。

放つておいたら病院に運び込まれて手出しできなくなる。一刻の猶予もなかった。

だけど、私は出られない。100%確実に家族その他に気づかれるもの。

深夜3時に外出する言い訳なんて、用意できるわけないわよ！

花寺さんも平光さんもそれは同じで…動けるのはただ一人。家族が同居していない鳴滝くんのみ。

私は迷わず電話をかけた。ちゃんと全員の番号を交換しておいて本当によかった。

フー・ファイターズで足にローラーを出して現場に急行した彼は、

矢間佐馬助が救急車に運び込まれる寸前ギリギリでDISCの回収に成功してくれたわ。

猫に扮したF・Fがやってくれたのが実際のところみたいだけど。

そして今は朝7時…私のランニングに付き合ってくれる名目で、みんな公園に集まった。

「わたしが知らない間に、大変なことになってたんだね」

「てか、襲われた『4人』の中に、まさかさあ…」

「もう、それは考えない方がいいわ平光さん。

覚えていないことはむしろ幸いとしか言えないもの。

落とし前はつけさせた…これについては二度と考えないようにしましょう」

「…：…うん」

どう考えても不幸にしかならないものね、この追及…追う方法もないし。

気まづくなる中、鳴滝くんはみんなの真ん中にDISCを放り出した。

「まず、このDISCだけだな…俺が持つのは絶対にダメだ。

理由は言わないでもわかるはずだよな？」

全員、沈黙。肯定の沈黙よ。

そんなことをしたら疑心暗鬼からの破滅だわ。

これは、『完全犯罪』を可能にする道具だつて証明されてるんだもの。

というか、今回は運が良かったとしか言えないわよ。

今回、私が勝てた理由は…敵が私たちをなめてかかりすぎたこと。

敵にスタンドの知識が根本的になかったこと…自分だけが特別だと勘違いしていたこと…にある。

もし、敵側にそれがなく、もつとずるく、用心深く仕掛けられていたら…

鳴滝くんは、それができる立ち位置にいる。みんな、それを知っている。

「そして、捨てちまうのも無し…だ！」

ビョーゲンズに回収されるとか、考えたくもねえッ」

『あたしとしては、ホワイトスネイクの手元に戻っちまうのもまずいと思う。

どうあつても、あたしたちの手元で有効活用するしかないね…』

「つて…やっぱしホワイトスネイクだったの？DISCバラまいてんの」

『あたしが肉体の記憶を読んだ。間違いない…プッチの姿はなかったけどね』

鳴滝くんの喉から響くF・Fの声に、平光さんは少しの間考え込んで…

鳴滝くんの真正面にまで唐突に歩み寄った。

目を丸くして、同じだけ下がる鳴滝くん。

「な、なんだよ？」

「読んで。あたしの記憶。」

ホワイトスネイクが、あたしにDISCを入れたっていうなら…

何されてるかかわかんないじゃん。

あたし自身覚えてないつてのが、怖くてさあ」

目を少しそらして聞いていた鳴滝くんは、

自分のDISCを取り出して差し出す。

花寺さんが間に立って、平光さんのDISCを取り出し…

入れ替わりに、F・Fを取めた。

少し待つ。ほんの数秒が長いわね。

「……どう？F・F」

『六日前、遊びからの帰宅中に不自然な記憶の空白があるな…』

そして……こ、こいつは……

ゆめポートに来たとき、シヨッピングモールを破壊する、だと…!?』

「え。なに…それ」

『前後につながりはない。ただそれだけが記憶に書いてある…』

何か、暗示のようなものをかけられているのか?』

とても穏やかとは言えない状況になってきた。

何かピンときたらしい花寺さんが、また平光さんの額に手を当てる。

F・FのDISCを取り出し、続いて…もう一枚、DISCを取り出した。

なぜ、もう一枚のDISCがあるの?

もう一枚ということは、これは記憶DISC?

…その一枚を脇に置き、花寺さんはF・FのDISCだけを平光さんに戻す。

それからまた数秒。

『…消えたぞ。さっきの暗示らしきものだけが消えた!』

ど、どうしてわかったんだよ?のどか…」

「ホワイトスネイクは、記憶とスタンドをDISCにして取り出す能力だから…  
そういうことをやるのなら、記憶DISCを書き換えるか、また別のDISCを入れるか。」

そのどつちかだと思つて…試してみる価値はあるな、つて」

二枚目のDISCを取り出したとき、平光さんは植物人間にはならなかった。

よつて、答えは後者…というわけね。

承太郎さんが実際にやられた、幻を見せて溶かす能力の線もあるかとは思うけど…  
どうも、これで正解のようね。

でも、その冴えを気にしてる場合じゃあなさそう。

「…アハハ、なに?つまり、アレ?」

あたしに『太陽』渡してさあ、やらせたかったのは…」

『人殺しだ。ホワイトスネイクは、あんたに人殺しをさせようとしたんだ』  
平光さんの瞳が曇った。

というより、ものすごい速度で光が塗りつぶされていく瞬間を見た。

「…ふざけるなよ。つまりは…俺もか。俺もなんだよなF・F!おいッ!」

『わからねえつて!調べもしねーうちからじゃあ…』

「なら、さっさと調べろよ！爆弾つかんで自殺しに行ったのも、

俺が俺自身の意思だと思ひ込まれていた、だけ…なのかよ？

今の俺は俺なのかよ!?都合よく使われる人形じゃあねえーんだろうなッ!」

『調べてやるって言ってるんだろ。黙れ!』

ヒステリックに騒ぎ出す鳴滝くんが場を持つていく。

いきなり、何？あなた自身の問題には、まだなっていないでしょう？

調べもしないうちに怒鳴りだす意味がどこにあるっていうの？

「……悪かったよ。戦うしかないんだよな。」

事実がどうあれ、スタンド能力自体は戦える武器だ。

ホワイトスネイクには、俺が後悔させてやるさ…」

…なんで、すんなり鎮火するの？

そんなだったら、最初から怒らないでよ。

寝不足だからって、情緒不安定すぎるんじゃない？

寝不足については私が悪いんだけど。

「ひなたちゃん、鳴滝くん。」

最悪の事態は避けられたよ?…よかったよかった。ね?」

花寺さんの穏やかな微笑みが、ささくれた場を収めてくれた。

ダメね、私も…余裕がないわね。二人は、もつとそうでしように…

正論で正すんじゃないやなくて、ただ聞いてあげる態度も必要みたい。

「ごめんね。のどかつち…みんなも。」

そーだよ、ヒドイことにはならず済んだし！

むしろザマーミロじゃんホワイトスネイク！」

『あたしも悪かった。言い方がド直球すぎたらしいな…』

ココロのキビってやつには気を付けてるつもりなんだけどね』

平光さんの目の色もひとまずは元通り。

一安心というには…しばらく、様子を見てあげないとね。

自分の知らないところで人殺しにされかかったなんて、

シヨックを受けないわけがないもの。

「…話、戻すぞ」

「何の話…あつ、ロクデナシのスタンドDISCの話だよな」

「正直、使いたくないラビ」

「ボクはもつとだペエ、ホントに最低の人間だったペエ」

「そう、だからこそ選り好みはさせない…」

「もつと最低の人間の手に渡るのが最悪なんだからな」



この場の本題は、あくまであのスタンド使いのDISC。

私だって使いたい気分にはなれないけど、

また一方でとてつもなく強力なスタンドだということもわかる。

ビョーゲンズの方を見ても、ホワイトスネイクの方を見ても、

使えるものは使わなきゃ、危うすぎるものね。

鳴滝くんを除いた全員で、DISCを頭に差しては次に回す。

私には適合しなかった。DISCから弾き飛ばされるって、妙な感覚ね。

そうやって、最終的には……

「あなたにしか適合しなかったわね…花寺さん」

「……うん」

このスタンドは、たぶんDEATH13。

吸血鬼DIOの手先だったということだけはわかっていても、

承太郎さんの記憶には直接存在しないスタンド。

赤ちゃんが本体で、アラブで襲ってきた『だろろう』という状況証拠があるだけ…

力そのものに罪はないはずよ。花寺さんなら、きつとうまくやるわ。

## 花寺のどかのドリーム・シアター——その2

はつきりいって第一印象は最悪だよ。

わたし、花寺のどかに適応したスタンドDISCは、

ちゅちゃんに乱暴しようとしたひどい人のものだった。

『スタンド能力は無意識の才能』…汐華初流乃さんはそう言って、

承太郎さんもそれに同意した。その人の心の在り方や願いが、

スタンドの像レジョンや能力に表れる、って……

そして、スタンドDISCには相性があつて、

合わない人間にはそのスタンドを使うことができない。

なら、これが適合したわたしは……

授業中も、そんなことばかりずっと考えて。

「おーい、のどかつち」

「……えっ？ な、な何？ ひなたちゃん」

帰り道も、考えるのをやめられなかったら。

ひなたちゃんがいつの間にか真正面に立っていた。

「あたしの本体、アラビアデブ！…あ、元の本体ね」

「ん、んん？あ、あの」

「のどかつち、ずつと落ち込んでたからさあー」。

でも原因、あのDISCくらいいしかないと思つて…

ともかく、あたしデブじゃあないじゃん！ゼンゼン！

石投げられただけでヤラレちゃうワケないし、あたし！」

腕をワタワタ振り回しながらまくし立ててくるひなたちゃん。

そつか。見てわかるほどに落ち込んだんじやつてたんだ。わたし。

迷惑かけないように元気を装うのは得意なつもりだったんだけどなあ。

…そんなことないね。バレバレだったもん。

お母さんにも、お父さんにも。そして今、ひなたちゃんにも。

そんなわたしは、らしいのかな？らしくないのかな？

「花寺さん。何を悩んでいるのかはわかるつもりよ。

ここにいてみんな知ってるわ。F・FのDISCを読んだんだもの。

そう、F・FのDISCはあなたにも適合しているでしょう？

私たちは、一緒よ」

横を歩いていたちゅちゃんも来た。

F・Fはなんだか特殊みたいだから、ちよつと違う気もするけど。でも、ふたりとも、あつたかい。

いたわつてくれてるのが、すつごくわかる。

「あー、その、なんだ。余計なことかもしんねーけど。

仮にお前に：：おぞましい『悪』の心があつたとしても。

ちゃんと手綱を握つていれば、それでいい：：と思う。

間違えないよ、お前は：：たぶん」

前でカツンカツン松葉杖をついていた鳴滝くんも、

こつちを振り向いて、言つた。

：：ちよつと買いかぶりすぎじゃないかなあー。

わたしの中の『悪』、意識したことなんかなかつたけど。

「：：わたし、ね。小さいとき、お母さんにすつごく迷惑かけたんだ」

先を促すみたいに、みんなうなずく。

道路の真ん中で立ち止まっちゃうんで、みんなで脇に避けた。

「病院から出られなかつたわたしに、お母さんはいつもついててくれたけど。

それでも、ずつとわたしのそばにいるわけにはいかなかった：：

わたしはそれがつらくつて、お母さんを勝手に追いかけて。追いかけた先で倒れて：：

あれも…『悪』だったのかな。自分のことしか考えない『悪』

「そんなワケないよ！」

ママに会いたいって気持ちが悪なワケない！」

「花寺さん、それはおかしいわ。」

子供が持つていて当たり前の気持ちじゃないの、それは「

ふたりの言ってくれてることは正しいと思う。」

でも、あの後しばらくして、お母さんがどれだけ苦労したのかを

お父さんから伝えられた。責めたりはしないけど、知っておきなさいって。

…情けなかったなあ。何もしてあげられないわたしが。

今は、そのぶんまで色々してあげたいんだ。

受け入れてくれた『ありがとう』を返したい。

「……花寺」

「ん？」

「お前は、他人に暴力をふるってスッキリしたことはあるか？」

抵抗できない人間を一方的に傷つけて、楽しいと思ったことはあるのか？」

少し遅れた、鳴滝くんの声だけが、だいぶ冷たかった。

答えられるわけがなかった。

「お前の目の前にいる男が『それ』なんだよ。

お前とは『違う』んだ。お前は『違う』」

返せる言葉が浮かんでこない。

けど、はつきりとわかった。

わたしはまだ、『それ』を選んでない。

選んだ人は、引き返せないところに行ってしまったんだ。

…でも、そんなこと、ない。

聞きとがめたちゆちやんが、彼に詰め寄った。

「ちよつと。鳴滝くん」

「なんだよ」

「言つたはずよ。これからのあなたを信じるって。

そんなことをえらそうに言わないで！」

『違う』けど、今はわたしたちのそばにいるよ。

鳴滝くんは、それを選んだんでしょ？…なりゆきかもしれないけど。

面食らった顔つていうのかな。ちよつとうろたえた鳴滝くんは、

わかった、とだけ返して、一人で先に歩き出した。

まだまだ先は長そう。わたしたちも目的を果たさないと。

三人で、その後ろをゆっくりゆっくりと歩いて追う。

DEATH13が人を夢の世界に引き込むために必要なのは、

その人が寝ているおおよその場所。鳴滝くんはその実験台になると言った。

今回に限らず、スタンドに関わることでは最初に鳴滝くんが向かうことは

全員の話し合いで決まった。例えば『サーフィス』みたいな、

体の自由を奪うタイプのスタンドにつかまった場合、

女の子が『女の子』であるというだけで、どういう目に遭わされるか。

今回の件も含めて、噛んで含めるみたいに説得されて、わたしたちも呑んだ。

男は、『男』であるというだけで、例外なくその手のクズの素質を持っている。だって。

「到着………」

住宅街から外れて、そろそろ畑だらけになるあたりで足が止まった。

わたしの家より少し小さいくらい敷地に建ってるアパートだった。

二階建てで……6部屋かな？家族みんなで入居するような広さじゃあなさそう。

「どれどれ……突撃となりの晩ごはん！」

「上がんなコラ。ろくなモンねえし、食わすメシもねえつての！」

「何がトナリなんだよ、だいいち……」

「にひッ」

ひなたちゃんも冗談だったみたいで、止められたらすぐに止まって笑ってる。そういうえばニヤトランは、ここで泊まったんだっただっけ。

「入口入ってすぐにキッチンと風呂、トイレ。」

奥に一部屋とクローゼット。それとロフトな。

俺はその一部屋で寝起きしてメシ食ってる。

それと、大体10時には寝ちまつてる…これで十分だろ」

「うん、大丈夫だと思う」

「えっ、早すぎない？ テレビとかは？ スマホいじったりは？」

「ねーよんなモン。スマホもデータ容量ねえーからほぼ使えねーし」

「なんで耐えられんのソレで？」

「どーでもいいーだろがッ。無きやそれまでで、それだけだろうよ！」

そこから先は、とくに何も無い。

強いて言えば、ひなたちゃんに質問を重ねられた鳴滝くんが

ちよつとヘソを曲げちやつたくらい。

生活に踏み込まれたのがイヤだったみたい。

ひなたちゃんもすぐに謝って、それで終わり。



さてと、もう寝るだけになったよ。

ラテも寝かしつけたし、ラビリンとはこれから一緒に行くんだもん。

「準備、いいかな。ラビリン」

「バッチリラビ」

「それじゃあ…DEATH13!」

心の中にある、違う自分を動かす。

説明の難しいこの感覚を使うと、『どこか』への道が唐突に開けた。

気が付けば、わたしはその中にいる。

一面の草むらと花畑、それと森。お日様に照らされた、抜けるような青空。

「ふわぁー、これが夢の世界?」

「ラ、ラビーンツ!のどかが死神になってるラビ!」

ラビリンが飛んでのけぞった。

自分の姿を見ようと思つて鏡を探したら、手元にすぐ出た。

なるほどだよ。死神そのもの…仮面をかぶった黒マントに巨大な鎌だった。

これがDEATH13の像…マントの中身は空っぽみたい。

首と肩と両手だけがある、そういうデザインのスタンドなんだね。

「ええと、夢はなんでも思い通り…のはず、だから」  
像を、わたしの姿に変える。

紅茶に砂糖を混ぜるよりも簡単だった。

一軒家を望んだら、次の瞬間には丸太組みの家が現れていた。

これは…スゴく、ワクワクする！

「ラビリンもやってみて。夢だけど、思い通りになるよ」

「ラビー…」

ラビリンが何か考え込み始めると、一軒家の周りがきらびやかな森に変わった。

優しい光に包まれた、においまでもが暖かい世界。

「これって、もしかして…」

『『ヒーリング・ガーデン』ラビ。のどかに見せてあげたかったラビ』

これが、ラビリンたちが守りたいものなんだ。

わたしたちが守るべきものなんだ。

ビョーゲンズには渡せない。これを見ればわかるよ。

地球さんの輝きが、きつとここにあるんだね。

ラテをここに呼んであげたい。

離れなくちやいけなかった故郷の景色が、ちよつとでも慰めになるのなら。

でも、その前にやる必要がある。この能力を、わたしはまだ把握していない。

「それじゃあ、鳴滝くん呼ぼつか」

「ラビ。遊びじゃないラビ。仕方ないラビ」

ラビリンは彼のこと、嫌っているわけではないけど、あまりいい感情も持っていない。たい。

ある意味、わたしも一緒。気難しくてメンドくさいヒトだし。

それに過去の経緯も、正直まだ怖い…けど、それを怖がってるのはあの人も一緒だし、だからこそ悪い心を持って襲ってくる『人間』と戦うときは、きつと一番頼れる。

帰りに見たあの場所を思い浮かべて…魂をつかむ感覚が、あった！

必要なのは、場所と、名前と、眠っているその人！

椅子の上に実体化させると、眠ったままの彼が現れる。そしてその瞬間に理解した。今、わたしはこの人を、あっさりと死なせることができるって。

ここにあるむき出しの魂を、わたしは今、握りしめているんだ。ラビリンも同じ。

引き込んだ時点で、99%殺しは終わっている…DEATH13の名にウソはなかった。

「のどか、どうしたラビっ？」

「……これ、とんでもなく怖い力だつて、わかっちゃつて」

「のどかは怖くないラビ。大丈夫ラビ」

わたしは、人を傷つけるなんて、うれしくもなんともない。そんなの悲しいだけ。そこから外になって、絶対に出るもんか。

「う………花寺？……ここは？」

「……ようこそ、夢の世界へ！」

努めてニツコリと笑つた。彼はこの能力を知つてここに来た。不安にさせたら、いけないもん。

「……あ。DEATH13か。うまくいったんだな。」

しかしパジャマで引き込まれるのかよ……どうにかなんない？」  
「夢の中は思い通りだよ？試してみて」

さっきのラビリンと同じように考え込む仕事。

パジャマはすぐに学校の制服に変わった。

あ、わたしも制服だよ。ガクセーはガクセーらしく、だよね。

「よし……じゃあ早速やるか、実験。」

まず言つとくがビビるなよ、必要だからやるんだからな」

言うか早い、彼は千枚通しを持ち出した。

そして、それで自分の右腕をプスツと突いた。ちよつと血が出る。

…あの、見せられる方の身になってほしいかも……

ひなたちゃんとは別の意味で回りが見えてないよ、この人。

「自分の痛みで起きることは…できないみたいだ。」

花寺、俺を起こすことはできるか？」

試してはみる。捕らえた魂を手放せば起きるのかな？

というわけで放す。消える鳴滝くん。

こつちから向こうの様子がわかるわけもなくつて。

ちよつと待つてから、もう一度引き込んだ。

「起きなかった…みたい？」

「花寺？ここは、一体？」

「……忘れてるラビ？」

「…あつ、DEATH13！思い出した、傷は？」

傷を確認。ついたまま。

ということとは、ここでのダメージは現実にも跳ね返るということ。ますます怖いよ。

この様子だと、起きすことは出来ていない。

眠らせることと起きすこと、どちらもできないと考えていいみたい。

「次の実験だ」

「えっ、オセロ？」

「お前は白、俺は黒な」

「ええー…、いいけど」

出てきたオセロの盤面にコマを置こうとしたら、

その瞬間に盤面すべてが真っ黒なコマで埋め尽くされた。

「えー…？ ヒドイよ！」

「白にしてみろ。俺は黒にする」

「…：…：そういうこと？」

「そういうこと」

「どういうことラビ？」

盤面はせめぎ合い…には、ならなかった。

わたしの白いコマは、絶対にひっくり返らなかった。

念じ疲れたらしい鳴滝くんは、そのままラビリンに同じ勝負を持ち掛ける。

どっちもコマを持つことなく、ひたすら盤をにらんでる。

盤上のコマは、突然白にすり替わったり、宙を舞って黒にひっくり返ったりしている。

「ぬううううう」

「ラビーツ……」

…何コレ？どういうゲームだっけコレ？

最終的に、顔を真っ赤にしたラビリンが押し切って白の勝ち。

くたびれた顔をした鳴滝くんは、実験の結論で締めくくる。

「まず、夢の世界のマスターは花寺だ。花寺がすべてに優先される。

それ以外の魂同士で『夢争い』すると…気合い合戦になるな、単純に」

「フンツ、気合が足りてないラビ」

「オセロにならないのはわかった…ウン」

わたしは紅茶を出して、鳴滝くんはコーヒーを出す。

それを交換して飲む…うちのコーヒーじゃない。

味覚の経験を、こうやって伝え合えるみたい。これは楽しい。

なら、味覚に限らず、いろんな経験を共有できるのかな。

怖いばかりじゃあないのかも。この能力。

「今、出来そうなことはこのくらいか…お開きにしようぜ。

明日は、あいつらも入れよう。俺に異常が起こらなければ、けどな」

「うん。じゃあね、また明日」

「ああ」

怖い能力だけど、付き合い方はあるかもしれない。

こうやって実験していけば、それも順番にわかっていくはず。

ちよつと芽生えた希望を胸に、わたしはみんなの魂を手放す…

「……………。アレツ？」

「おい…なんだよ。嫌な予感しかしねえ……んだが」

「みんなを返せない。どうして？」

自分で言つて、その数秒後に気が付いた。

今まで、わたしは『起きて』スタンドを操つていたことに。

ラビリンを抱いてベッドに入ったまま、今までのことをやっていた。

変な話になるけど、現実世界を見ながら、同時に夢の世界を見て動いてたの。

それがいつの間にか、夢の世界だけになつて…

スタンドを使つていたのは、現実世界のわたし。

「ご、ごめん。寝ちやつた…わたし、寝ちやつたみたい」

「寝ると…その、どうなるよ？」

「わたしもね？夢の世界にいる魂のひとつになっちゃう。みたい」

「出られる…ラビ？」

「わかんない…………」



あとのことはあんまり覚えてない。

夢を使ってあの手この手で脱出しようとしたけど、  
夢は結局、どこまでいつても夢で……

最終的にわたしはベッドから落っこちた。  
よかった！目が覚めてホントによかった！

## 花寺のどかのドリーム・シアター——その3

「これで全員揃ったわね？」

「ああ、俺で最後だろ」

昨日の後、結局、鳴滝くんは異常は見られなかった。

だから今日は、ちゅちゃん、ひなたちゃんに、ペギタン、ニヤトランも一緒だよ。

ラテは今回も見送り。実験が全部終わって、誰も異常がないことを確認してからって決めた。

今回は、ちゅちゃん、ひなたちゃんの順に入れて、最後に鳴滝くんを入れてる。

寝てる時当然。パジャマだからね。女の子同士はともかく、男の子はダメ！

わたしは見ちゃってるから不公平かもだけど、だからってワザワザ見せる気なんかないもん。

別に恥ずかしいカツコはしてないけど…見せるものじゃない。

男の子の入場は、女の子がみんな着替え終わってからだよ！

「んでー、実験ってなに？」

「最初はね、この場の全員で前回の実験から…」

「前回の実験?…えー、イタイじゃんそんなの!」

「平光、お前な。遊びじゃあねえーんだぞ」

「とはいえ、気は進まないわね…嫌なものね、自傷行為なんて」

「どうやらそうらしい、ということはおわかったけど、全員がそうか、も確認するべき。

これも鳴滝くんの提案だった。内容を確認したちゆちゃんも、その通りね、ということ。

千枚通しを出して、全員、自分の右腕にプスッ!痛ーい!トーゼンだけど

「みんなバンソーコーは貼ってきたよな?」

血がパジャマにつくと厄介だぞ…家族に何事かと思われるだろうからな」

「抜かりはないわよ。血の汚れは落とすのも大変だしね」

「……あッ、忘れた!うああーッおキニだったのに!」

治んないかなあーツ夢の中は思い通りなんでしょ?」

「だとしても治すなよ?今知らなきやあならないことだぞ、これは」

昨日と同じように、みんなをいったん放して、また夢の世界に連れてくる。

結果は昨日と同じ。ちゃんと傷がついている。

これで、ほぼはつきりとわかった。夢の世界に來た生き物は、みんな同じ条件だって。

そして、昨日、わたしと鳴滝くんに降りかかった『事故』は、思いもよらない成果を

くれている。

「のどかつちが寝ちやったら、ここがホントに全部夢になるんだっけ？」

「うん。大騒ぎしてるうちにちよつとケガしてたはずなんだけど、それもなくなつて」

「俺も、その間にひとつ自分で傷を増やしておいたんだがな…傷は、なし、だ」

新しく増やした傷の少し右を指さす鳴滝くん。

これも考えてみれば意外でもなんでもないんだよね。

わたしが寝ちやつたのなら、スタン্ডであるDEATH13も寝てしまふ。

あとは、DEATH13が作った夢世界があるだけで、そこは単なるただの夢。

現実世界に夢の中のダメージを持ち込むのはDEATH13の能力なんだから、

いくら傷ついてもダメージを受けても、現実世界には何の関係もない。

でも、DEATH13の夢世界の中にいることはいるから、

今日また夢世界に入ったときにはその記憶を思い出すし、本体であるわたしは必ず全

部覚えてる。

鳴滝くんは夢の中のことをみんな忘れていたけど…

それを、覚えてたままでいさせることはできるか？

今日、一番大切な実験が、それ。

「夢の中を覚えていられるのなら…作戦会議はみんなここで出来るわね」

「オマケにジュースもお菓子も食べホーダイ！」

夢の中だもん、どんだけゼータクしてもお金かからないし太らないとか…めっちゃ夢ッ！」

ケーキとかパフェとかマカロンとか、たくさん出してはバクバク食べて、ひなたちゃんが目キラッキラ輝かせてる。

昨日の紅茶とコーヒーの実験の話を書かせた時から、こういうことやる気だったみたい…

「ほどほどにした方がいいペエ。」

「これだけリアルな経験だと、体の方が実際に『食べた』って誤解するかもしれないペエ」

「でも実際には食べてないんでしょー？」

「平光…聞け。」

目隠しされた人間の腕にだな、ただの鉄棒を当てるんだ。とくに何もしてないやつな。

だが、目隠しされた人間には催眠術をかけるんだよ。

『真つ赤に焼けた鉄の棒を当ててやるぞ』ってな。どうなると思う？」

「え。なんもならないでしょ？なるはずないじゃん」

「真つ赤な火ぶくれができるらしい。人間の思い込みつてやつはそれほどの威力がある  
そうだ…」

もし、これが本当なら…デブ一直線だぞ、お前」

「……マジ？」

「さーな、大ボラかも知れねーよ？」

前の学校で仲間だったヤツらに聞いた話だし…

ただ、気にしておく価値はあるかもなあー」

「……そーする、ウン」

「みんなで食べようよ。これ、どこのケーキ？」

「あ、これはねー、商店街入ってすぐのトコ。」

あそこ、あたしが生まれる前からあつてさあー」

しばらく雑談に花が咲いちやつた。

でも、昨日と同じ失敗は繰り返さないよ。

今のわたしは、ベッドに入らず、窓の前で月を見上げて立っているの！

いくらなんでもこの状態で寝ちやうはずがないよ！

「…で。夢の中を覚えていられば、の続きなんだがな。

思うに、ここで訓練できるだろ。戦いの」

「訓練…『有り』ね、それは。

花寺さんが寝てしまえば、ダメージを引きずることもないわ。理想的じゃない」

差し出されたマカロンにやっと手を出した鳴滝くんの提案に、ちゅちやんがうなずく。

プリキュアも、スタンドも、人目があるところじゃあ戦いの練習なんかできない。それも、もしかしたらこのDEATH13でどうにかなるかもしれない。

うん、いいね…まだみんな、戦いに巻き込まれたばかりで、  
(承太郎さんとF・Fの記憶の助けはあるけど) どうしても攻め手がぎこちなくなつた。

夢の中で練習できれば、補えるかも。

「アレだよね、『精神と時の部屋』?」

ひなたちゃんやんが、有名なマンガに例えて言った。

言いたいことはわかるよ。目指すところはそうなるだろうし。

わたしも、体調が多少マシになってきた時期に再放送を見てたからね。

一般常識程度には覚えてるんだ。ドラゴンボール。

ちゅちやんもうなずいてる。弟のとうじくんがいるもんね。たぶん一緒に見てる。

だけど、まさかの反応が、この場のたった一人の男の子から帰ってきた。  
(ペギタンとニャトランもいるけど)

「精神と、時の…なんだって？

なんかオカルトか？」

「『精神と時の部屋』だよ、タツキー。ドラゴンボールの！」

「ドラゴンボール？ああ、それは…知ってる。まともに見てねーけど」

みんな、なんともいえない沈黙に包まれちゃった。

そ、そうだよ。ありえない話じゃあないよ。

夢中になれるマンガとか、他にいろいろあるもん。

ええーつと…妖怪ウオッチとか！

「あ、あなた…何見てたの？小さいとき…」

「ん？…戦隊モノのDVDとかは見てたな…」

スプリンター目指してからは、ほとんど見てない。

テレビ自体ほとんど…縁がなかったし」

「そう…そうね。ありえることよね」

ちよつと突っ込んで聞いてみたちゅちゃんも、すぐに引き下がった。

あんまりイイことなさそうな心配してるし。



…元いじめっ子だよな？みんなに溶け込んでいける話題もなくて、  
どうやってそんな怖い人たちの中心に立ってたの？

実家の権力があるって言っても、仲間意識が持てないんじゃないじゃあ限度があると思うけど。

「ムムム……よし！」

「なに？平光さん」

「ちゅちゅー、孫悟空やって！あたしフリーザー！」

「……な、なにを言っているの？」

「知らないってんなら教えてやろーじゃん！」

夢の中なんだしさあーッ、『完全再現』できない？」

「そんなことをイキナリ言われたって!？」

DEATH13をなんだと思ってるの!？」

これほど怖いスタンドも、ひなたちゃんにかければVRゲームだよ？

…その後、結局、ちゅちゃんも折れて孫悟空をやりました。

なんというか、ヘタにウマく演技をしようとしてるだけに…すごく、痛々しいです。  
必死さとう口覚えが顔に浮かんで、常にわたしの方をチラチラ見てくるんです。

ひなたちゃんは……単にノリと勢いだけです。

つまり、単なるゴッコ遊びでした。ナメック星でエネルギー波が飛び交うゴッコ遊び！

あ、ナメック星作ったの、わたしです。

鳴滝くんは、マカロンをつまみながら、終始首をかしげていました。

「これ。覚えたままにしておくようにするね。明日、確認しよう？」

「沢泉が……それで、いいのか？」

「……いいのかな」

「たまにはハメ外すのもいいんじゃないかねーの？」

ひなた、スッゲー楽しそうだしよ」

「ひなたが良くて、ちゆが後でへこみそうラビ」

バカヤロー……！！！！

あつ、決着がついた。

そこはハッキリ覚えてたんだね、ちゆちゃん……

背後からだまし撃ちしようとしたフリーザは、悟空に返り討ちにされました。

「……自己嫌悪がモノスゴイんだけど。

得たものは大きかったわね、昨日の夢」

翌朝、ランニングの名目で公園に集まったわたしたちの真ん中で、ちゅちやんだけがドンヨリ沈み込んでた。

そうもしていられないって、ちゅちやん自身が思ってたか、

自分の頬を自分の両手でパンと鳴らして、すぐに姿勢を正したけどね。

「夢の世界で、DEATH13による危害と自傷行為以外のダメージは現実に残らない。

そうでなければ、昨日のアレで私も平光さんも全身スタボロよね」

「あたし絶好調！腕のキズ以外は、だけど」

「やっちゃったんだね、パジャマ」

「うん…」

それで、今こうしていることからわかるように。

みんな、夢の中のことをはっきりと覚えていた。

今回、必要な実験を済ませてから、わたしは意図的に寝た。

ラビリンだけを夢の中に残して、起きるまで夢の中で一緒。

そこでのことを、起きた後のラビリンはしっかりと覚えていた。

覚えておかせる、忘れる…を、DEATH13が個々に決められるみたい。

これだけわかれば、もう怖くない。

「なら、できるね。夢の中での訓練」

「ええ。これは最高よ。実戦経験を常に積んでいけるわ。」

今日からか、明日からか…さっそく、始めましょう?」

「そうだね…明日からで。寝る時間を揃えて、一緒に始めよつか」

そのまま、夜の十一時開始で話がまとまる。

ひなたちゃんがちよつと不満そうにしたけど、

「訓練の方が大事だよ。あたしだって死にたくないし！」

でも、たまには息抜きしよーねッ」

って、ひなたちゃんの方から言ってきた。

うん。夢の中だけとは言わず、現実でももつとみんなと遊びたいよ。

そのためにも、ある程度安心できるくらい強くなっておかないと。

集会はお開き…学校へ行って、慣れてきた日常を過ごす。

これも、わたしたちが守りたい風景だよ。

そして…夜。

そろそろ寝ようと思ってトイレに立ったわたしは、

お母さんとお父さんの内緒話を聞いてしまった。

ホントに偶然。ダイニングに残ってたお父さんとお母さんの気配から、声をたまたま耳に捕まえてしまっただけ。

「そっか…ダメだったか」

「帰れない日が出るんじゃないわ。

のどかは、昔よりずっと具合はよくなった…でも、まだ安心はしきれない。

万が一のとき、そばにいてあげられないんじゃないわ、ね」

「収入面はぼくに任せてもいいんだよ？」

「楽ではないけど、ぼくだってプロなんだから」

「それもダメ。あなただけに押し付けたりなんてしないわ。

「楽ではないなんて、今に始まったことじゃあないでしょう？」

「…お母さんが、お勤めの面接に行つて、落ちた。原因は、わたし。

身体が弱いわたしを、お母さんがまだ守ろうとしてくれているから。

ずっと、苦を強いちやつてるんだよなあ。わたし。

もちろん、わたしは悪くない。誰も悪くなんかない。

わたしは好きで弱く生まれたんじゃないわ、そこに責任なんか取れるわけない。

ただ、何もできない事実だけは噛みしめるしかなくって…

今のわたしにできることはなんだろう？

お母さんとお父さんの、誇れる子でいること。支えてあげること…

中学二年はまだまだ子供だった。現実では心構えくらいしか、できることはない。

「……『現実』では」

でも『夢』なら？

今日一晩の夢だけでも、素敵な時間を作ってあげられるなら？

かなえられない夢が、『夢の中』だけでもかなうなら？

わたしだって、行きたかった。

お母さんとお父さんと、海に、映画に、遊園地に。

わたしは、決めた。

お母さんとお父さんと、わたし自身のためだけに。

今日は、わたしの『夢』を使う。

## 花寺のどかのドリーム・シアター—その4

「じゃあ、お母さんとお父さんを呼ぶから。」

ラビリン…：ホントに隠れてるの？夢だから別にいい気もするんだけど」

「いい夢を見せてあげたいんだったら、覚えてなきやあ意味がないラビ。」

「だったら、ラビリンが見られるのはマズいラビ」

「そっか。ラビリンがホントにいることがバレたら、

プリキュアのことまでバレかねないもんね…わかった。ラテは任せて」

足元でラテが、アン！と返事すると、ラビリンは物陰に隠れていく。

ここはわたしの家…：DEATH13で再現した、夢の中のわたしの家だけど。

わたしも当然DEATH13の姿はしてない。今は小さい頃のわたしの姿。

9歳くらいの頃をイメージして作ったわたし。

本来のその頃のわたしは、大きくなれずに死ぬ危険をようやく脱したあたりのはず。

あまりにも弱すぎて、病院の外になんかとても出られなかった頃。

そんなわたしのそばに、お母さんとお父さんはいてくれたんだ。

少しでも具合が悪くなれば、そうでなくても、わたしが寂しくて泣いたりすれば、

ちよつと遅くなったって、必ず来てくれたんだ。

それは、今でもほとんど変わっていない。

少なくとも、お母さんのお仕事に暗く影を落としてる。

楽じゃあないのは今に始まったことじゃあない、って、お母さんは言った。

せめて、夢で癒したい。楽しい気持ちを持ってほしい。

だから、わたしはDEATH13にすぎた。

今日も窓際に立ちながら、お母さんとお父さんが眠ったことを感じ取る。

さすがに同じ家で暮らしていれば、スタン드의能力ですぐにでも探知できた。

数km単位の射程を持つ、果てしなく薄い幻影。それが現実世界のDEATH13。

それが、寝ている人の魂をつかんで夢の世界に瞬間移動する。

顔と名前を見知った人間が眠っていれば、その魂だけを感じ取り、つかめる。

それ以外には何もできない代わり、現実世界のDEATH13を探知、攻撃できる存在はない。

条件がそろえば無敵に近くなる系統のスタンドなんだよね。

ずるがしこい人がこれでわたしたちに敵対したら、たぶん何もできずに全滅する。

当然、わたしも同じことができるんだ。

目の前のソファに寝そべって出てきたお母さんとお父さんを見て、気を引き締めた。



「まず、いつもの服に着せ替えて、と…」

何を着て何をはいてるか、だいたいわかる。

お洗濯だつて手伝えるようになったもんね。

イメージさえできれば、着せ替えはプリキュアの変身よりも一瞬で終わる。

目を覚ます…さあ、ここからが本番だよ。

「あれ？こんなところで寝てた？」

「……のどか？だ、大丈夫なの？」

いぶかしげにするお父さんと、わたしに気づいて駆け寄ってくるお母さん。

お父さんも、お母さんを目で追った先にいたわたしに気づいて、同じように寄ってくる。

「のどか。病院に…病院はどうしたんだ？」

体は大丈夫なのか？」

そう、ここは夢。

夢の中そのままの対応をするお母さんとお父さんは正しいの。

ましてや、わたしは9歳のわたし。

それを見たふたりがどう反応するかなんて、わたしはよく知っていたはずなのに。

ちよつと目頭が熱くなつちやつたけど、そんな場合じゃあない。

「……やだなあー、何言ってるの？」

今日はみんなで遊びに行く日でしょ？」

「えっ？そ、そうなの？」

なんて言ったつけぼくは？」

「ゆ・う・え・ん・ち。」

わたしの、はじめての遊園地だよ！」

だから、わたしも夢なんだ。夢のままにふるまうよ。

こういう反応も想定済み。寝ボケ同然なみんなの姿をすで見てるもん。

遊園地も、お母さんお父さんから何度か話を聞いて知っている。

日本で、というか世界的にとっても有名な遊園地！

それを聞かされて、お母さんお父さんが思い浮かべたイメージを、

あとはわたしが拾うだけ。

風景が塗りつぶされる。わたしの家から：一瞬で遊園地に！

わたしは見たことないよ、テレビでしか！

「……え、えッ？」

「のどか、これ……ええッ？」

「行く、お母さん、お父さん」

少し間をおいて、たぶん夢だと割り切ったお母さんとお父さんは、笑顔で歩き始めた。左右からわたしの手をつないで。

足元には、ラテも一緒についてきている。

ここってペット入れたっけ？そんなことは気にしない。だって夢だもん。

最初に行ったのはカリブ海賊のゴンドラ！

コワイところあるんだねここ！お父さんが止めてきた通り、ラテを置いてつてよかったです。

落っこちるみたいなのがあるアトラクションじゃあラテを抱えるのも無理だしね…

当然、ジェットコースターもラテは無理！

初めて乗るジェットコースターだったけど、思ったより怖くなかった。

けっこうノンキな乗り物だったなと思って、

ドームの中にある別のジェットコースターにも挑戦したけど、

こっちはキツイ！プリキュア経験してなかったら悲鳴上げちゃってたかも。

お父さんもお母さんも、ここ以外のジェットコースターをいくつか知ってるみたいで、

良ければいつか行こうね、って言ってくれたけど……

最近、いろんな遊園地が閉まってるし。実際に一緒に行ける時はあるかなあ？

それよりもラテだよ。ラテお断りのところばっかりに行ったもんだから、ラテがガツカリ顔になりかけちゃってるよ。

だから今度は、『小さな世界』をめぐるボートに乗った。

ボートでゆっくりめぐるだけだから、これならラテも平気。

お母さんがそう言ってくれて、抱えるのはお父さん。

ラテも素直に抱えられてくれて、一緒に岸のお人形さんたちに見入ってる。

その中に、こっそりラビリンが混じってたの、わたし見逃してないよ。

気づかれないようについてきながら、ラビリンなりに楽しんでくれてるみたい。

ウレシイな。次は、ちゅちゅちゃんにひなたちゃんで行こうね。

こっそり隠れて楽しむなんて、遊園地じゃあ違うと思うから。

でも、東京湾がけっこう遠いなあ。中学生だと日帰りは苦しいかも。

それと、鳴滝くんを仲間外れはダメだけど：誘っても来ない気がするなあ

わたしだったら：男三人に、女一人がわたしだったら：うん、行かないなあ。

DEATH13の前の本体のことを知った今じゃあ、よっぽど仲良くないと無理。

うーん、性別の違いが思った以上にキツイ：今考えるのはやめた。

そんなこんなで、そこから先はラテも入れるところをお父さん、お母さんと相談して、

みんな一緒に笑った。楽しんだ。人ごみの中で、はぐれないように手をつないで。

それと、ちょっとしてわかった。

ここは、お父さんとお母さんが一緒に行ったときの記憶だ。

看板の年号を見ればすぐにわかることだったね。

人ごみは、そのまんまふたりの記憶の再現だったみたい。そこに今、わたしはいる。胸にチクツときた。思い出は、『勇気が生まれる場所』…

今、わたしは…結果として、勝手に土足で踏み込んでる。

閉園前のパレードを待ちながら、そんなことを考えていたわたしを。

「のどか、どうしたんだい？どこか痛いのかい？」

お父さんが、心配そうにのぞき込んできた。

お母さんも、こつちをじつと見てる。

…謝るわけには、いかないよ。だって今のわたしは、夢だから。

夢は醒めるまで夢でなくっちゃあいけない。

「…お父さん、お母さん。ありがとう」

「いきなり何よ。かしこまっちゃって」

「わたしと、いつも一緒にいてくれて、ありがとう。」

つらいことだつて多くつて、わたしだけ見てるわけにはいかないのに」

お母さんは、お父さんと顔を見合わせて…

お互いにうなずくと、次にこう言った。

「わたし達こそありがとう、のどか。」

こんなステキな夢を見せてくれて」

「……………!?!」

ありえない。ふたりにスタンドのことなんか、わかるわけない。

どうしてわかったの…スタンドがわかるのがスタンドだけというなら、

つまり、お父さんもお母さんも、すでに『こちら側』？

「なに怯えちゃってるのよ。そんなビックリしなくてもいいじゃない」

「どうしてそう思ったの？」

「空の色。お花の配置。人の雰囲気……なんとなくよね。」

のどかのお絵かきとか、お手紙とか。

ずっと見てきたわたし達だからわかるのよ」

一瞬だけ、ごまかそうと思った。

でも思い直す。もう、それができる段階は過ぎている。

もう…仕方ない。この夢は、忘れてもらうしかない。

だから、もう偽らない。事情も、気持ちも。

「お母さん、お父さん。」

……ごめんね。わたし、ふたりの思い出を勝手に使ったよ。

遊園地に、行ったことなかったから」

「どうして謝るの？」

「どうやってかはわからないけど……」

「のどかは、わたし達を楽しませてくれようとしたんでしよう？」

「思い出は……土足で踏み込んだじゃあいけない場所だつて……」

「それしか方法がなくて……わたしが、弱かったから。」

「やっぱり、弱く生まれたのがダメだった、のかな？」

「そんなふうに思わないで！」

「にこやかな顔から、まじめな顔にサツと変わった。」

「そんなふうに思われるくらいだったら、恨まれた方がマシよ。」

「どうして弱く産んだんだ、つて。それなら、わたし達が受け止められる。」

「わたしは、あなたのお母さんなんだから」

「……できないよ。そんなの」

「そんなのどかの優しさに、ぼくらは十分救われているんだ。」

「……いや、そうじゃあない。のどかがいてくれること、それだけでもう十分なんだよ。」

「確かにこんな風に遊びたかったよぼくも。でも、それに負けない思い出がある」

「のどか。ありがとう、わたし達と一緒にいてくれて」

……そっか。わかっちゃった。

ここには最初から、わたしの望みしかなかったんだ。

弱いわたしの思い出をこそ、お母さんとお父さんは大切にしてくれている。

なら、ここからは。

「お母さん、お父さん。聞いてくれる？わたしの…わがまま」

「うん」

「言ってみて」

「もつと、一緒に遊ぼう！」

海も、山も、行きたかったの！

夢の中はなんでもありなんだよ！」

「……ん、んー。のどか？もう起きてたらビ？」

「うん。朝日…見てたんだ」



わたしは、最後まで起きて続けた。

夢の世界からお母さんとお父さんを見送るまで。

見送ってしまったら、ついさっきまでのことでも、もうふたりとも覚えていない。

夢を使う能力の情報は…残せない。最悪、わたしたちの事情に巻き込まれちゃう。

「のどか。泣いてるラビっ？」

だから、昨日はただの夢。

わたしの未練を埋めようと、スタンド能力まで使ったとしても、

目が醒めたのならただの夢。

「ラビリン」

「…ラビ？」

「もう、必要なとき以外は…絶対に、DEATH13は使わない。

こんなことをしていたら…：わたしが夢におぼれちゃう」

「のどかが、そう思うんなら…きつと、それが正しいラビ」

アン！

起き出してきたラテが、わたしの足元にすり寄ってきた。

わかるよ。はげましてくれてるのが。

一時間も泣いたんだもん。もう十分だよね。

今はさよなら、わたしの未練。

また別の形で出会っちゃうかもしれないけど。

「おはよう、のどか。早いね」

「おはよう、お父さん、お母さん。」

ちよつと寝つきが悪くって」

「そう？実はわたしもなのよね…」

なんか、スゴイ夢を見てたようなの…」

「……そうなの？」

「ああ、ぼくもだよ。」

小さい頃なのどかの夢だったかな？

よくわからないけど、楽しかったかな」

「そっか。わたしも見たよ。楽しい夢」

# お願い、スターダストクルセイダース!—その1

イキナリだけど夢の中だよ!

今日から、のどかつちにちゅちー、ラビリンにペギタンにニヤトラン。

それとタツキー、F・Fと一緒に毎晩戦いのトレーニングやるんだ。

ドラゴンボールごっこで盛り上がったのもあって、めっちゃテンション上がるけど、必要な時以外DEATH13を使わないって、のどかつちが話してくれた事情も覚えてる。

ここでマジメにやらないで、本番であたしたちが負けちゃうなんてイヤだし。

ちよつと気をひきしめてくからねー!

今は、ヒーリング・ガーデンをマネした大自然の中で会議やつてる。

「で、何すんの?木の人形ボコボコ殴んの?」

「殴り方の練習っていうのなら、それも有りだけど…」

今の私達に必要なのは、立ち回りの練習でしょうね」

「立ち回り?」

「そうねえ…作戦って言うてもいいのかしら?」

野球だとかサッカーでもそうだと思うけど、

試合で勝つにはそれなりの作戦があると思うのよ」

「…ウン、それならわかる」

「こればかりは実戦でしか身に着けられないわ。

DEATH13の夢の中なら、相手を用意はできるはずだけど…

鳴滝くん。何か考えがありそうだったわね？」

「……。それなんだが、な」

あれ、なんだか歯切れワルイ反応。

作戦とか考えるの、アンタが一番好きそーじやん。

なんかいつつも細かいコトばっか考えてるしさあー。

ま、あたしより頭はいいんだろーから、その辺はまかせるけど。

「花寺。昨晚の話を聞いた以上、俺は許可を求める必要がある……

見方によっては、死人を人形扱いするって言えちまう」

「え？死人？人形扱い？…ゾンビ作んの？」

夢の中で？なんで？」

「そのゾンビが、俺達の欲しいものを持っている…！」

「とりあえず…言ってみてくれないかな」

「空条承太郎の記憶を元に、承太郎を始めとしたエジプト行きของทีมを再現する。俺達はそれと戦う……ほぼ確実に負けるだろうよ。だが、戦いは確実に学べる」  
「なるほどね。言いたいことはわかったわ。」

ある意味で、あのDIOがやったことと同じというわけね」  
聞いたちゆちーは瞬間で理解して即答した。

ええと。つまり…一番スゲー頃の承太郎さんチームと戦って腕試し？

倒そうと思つたら、あたしたち全員で少なくともDIO並みやなきやあダメ。  
ゼツタイムリじゃん、今勝つの。

で、これがDIOと同じ…たぶん、悪いことをしてるって言いたいんだ。

それはなんでかな…ウーーン

「ジョセフさんから聞いてるね。承太郎さん…旅の始まりの頃に。」

DIOは吸血鬼になりたての頃に、騎士の墓を暴いてゾンビを作った、って」

「黒騎士ブラフオード、それと、殺戮のエリート、タルカス…ね。」

歴史に名を残した英雄を、自分に都合のいいように蘇らせて利用したのね」

「…あ、言ってること、わかった。」

確かにやってることイッショだね。目的ゼンゼンチガうけど」

どうせ夢なんだから、そうされて悲しんだり怒ったりするヒトは

最初からいない？ ようには見えるけど…

あ、そんなことないじゃん。考えまで再現するんだったら。

考えを再現しなかったら最初っから意味ないし！

「俺は…それを押してでもやるべきだと思う。」

手段を選んでいられる状況じゃあない。

実害がないなら、やるべきだ」

「魁の言うことはわかるペエ。でも…」

見て、感じて、考えもする相手だったら…モノ扱いはダメだと思うペエ」

「たかが夢って言っちゃまえばそれまでだけどよお。」

どうせやんなら、気分よくやりてーよな」

「割り切れるんなら、それが一番いい…面倒もないしね。」

ただ、あたしの見るところ…：あんならの強きは、そこにはない気がする」

タツキーの他は、みんなノリ気じゃあない返事。

ペギタンも、ニヤトランも、F・Fも。

あ、そうそう。F・Fだけど、今は体を作って一緒に話してるよ。

ブツチにやられて死んじゃう前の、エートロって人の体で。

夢の中くらいはこーやって自由にしたかったみたい。

「プリキュアとして…あまり、いいとは思えないラビ」

「……同感、だけど。私は鳴滝くん…、一票、よ。」

私達は、すぐに強くならなくっちゃあいけなくて…

そのための他の方法が、今の私にはわからないわ。賛成よ」

…あたしもなんか言わなきゃあいけないっぽい？

まーいいや。思ったこと、そのまんま言う。

「えつと……反対！」

夢だからって、勝手に生み出してモノ扱いは反対！

生き物をモノ扱いはダメだって、パパもお兄も言ってたし」

「…意見は出そろったみたいだ。花寺、判断を頼む」

何この学級会。

タツキーがシメに入って、のどかちちがうなずく。

「そうだね…わたしも反対。」

夢で作ったっていつても、自分で感じて考える人たちを作っておいて、

わたしたちのためだけに都合よく操っていいわけないって思うから。

でも、逆を言うとは問題はそこだけ」

「……何か、思いついたラビ？」

「操るのがいけないのなら、操らなければいいんだよ。

むしろ、もっと自由に動いてもらうの。それぞれの意思で！

だからね、頼んでみようよ。みんなで」

のどかつちの言ってること、考えて追ってみると。

承太郎さんチームを蘇らせはするけど、無理強いとかはしないで頼んでみる？

「のどかつち。それ…めっちゃイイじゃん！」

「グッド。いい落としどころだな、のどか」

「もともと、自由に考えて動いてもらわなきゃあ意味がないペエ」

「ハナツからそうするしかなかったかもだよなあ〜」

「最高ね。後ろめたい思いをせずにすむわ」

照れ笑いしてるのどかつち、カワイイ！

みんなにホメられて真っ赤になっちゃってる！

いいモノ見せてもらいました。にひッ！

「そうと決まったなら…花寺。説得には俺が行く。

言い出しつぺだからな、俺は」

「承太郎チームの実体化はあたしがやるよ。」

DISCを直接見たのはあたしだし、今となっちゃああたし自身がDISCだから



な」

みんなが下がって、F・Fが祈るみたいにうつむいて目を閉じる。ぼんやりと霧とか影みたいなものが現れては重なった。

それを見続けていたら、そこに、いつの間にかいた。

学ラン番長つてゆーヤツ?の、承太郎さん。

線がホツソクつてめっちゃイケメンだけど神経質っぽくてあんましタイプじゃあない  
…花京院さん。

とくにシブくはないワイルドでナイスなじつちちゃんは、ジョセフさん。

ちよつとヘンなパンチパーマみたいな髪をバンドナでまとめてる、

プロレスラーみたいなマツチヨ占い師、アヴドウルさん。

で、あのホーキというか柱みたいな変チクリンな頭はどー見てもポルナレフ…さん。

記憶で一度は見てるけど…全員勢ぞろいして並ぶと…デケーー!

あつ、イギーもいるじゃん!ボストンテリア!

みんなして光景に一瞬見入っちゃったけど、ボンヤリしてても始まらない。

言つてた通り、タツキーが前に出て、深く頭を下げた。

「ぶしつけですが…俺達に、あなた方の戦いを教えてください。

俺から差し出せるものであれば、なんでも差し出します」

五人が目を見合わせる。ワケわかないみたい。

F・F、事情を知らない状態で『作った』っぽいね。

ま、みんな揃ってた頃を再現するんだったら、知ってる方がオカシイし？

「いきなり……んだ、てめーは？」

新手のスタンド使いか？」

つて、つまり……完全再現したんなら、殺気立ってて当たり前じゃん!?

ポルナレフさんの手から銀の剣が浮かびだしてシナツてる!?

あれって……銀シルバー・チャリオッツの戦車。

ヤバイ。ヤバイよ。剣を抜かれるだけでこんなに怖いのか？

それを手で軽くさえぎって、承太郎さんが前に出てきた。

「よそを当たりな……オレ達はヒマじゃあねえんだぜ」

「まあ待て承太郎。この状況、普通じゃあない。

話くらいはしてやってもいいかもしれないぞ」

「ええ、ジョースターさん。敵ではないようです。

この男も、後ろにいる少女たちも……」

「なんでそー言い切れんだよ、花京院」

「少なくとも見えている限り、全員射程内だぞ、ぼく達の……」

DI Oの手先だとしたら、あえて攻撃を受けてから戦える能力か、  
そうでなければ…むぎむぎやられに来たバカになるな」

「ま、コイツに負ける気はしねーぜ、オレも…」

「って、少女？あツ、ホントだ…惜しい、チヨット歳が足りてねえ！

シヨンベンくせーガキだとは言わねーけどよおー」

カッチーン

「何それ、ムツカつくー！ホーキ頭のくせに！」

「にやツ…ニヤニををくくくン!?」

ホーキ頭ア？このオレのクールな髪型を指さして、ホーキ頭だとオク？」

「ホーキ頭じゃん！このホーキ！トイレ！ペンキ！」

「て、テメー！鼻ツマンで泣かしちやるぜ！このクソガキ！」

「アツカン、ベーーッだ！」

「そこまでだポルナレフ。きみもな」

アヴドウルさんが、あたしとポルナレフの間に割り込んできた。

…正直、助かったかも？流れでケンカ買っちゃったし。

「だが、今ので疑わざるをえなくなつた。

ポルナレフが『トイレ』だと知っているということとは！」

「……ああ、限られるなアヴドウル。

ポルナレフの……オホン！オホホオ〜ン！オホン……『ベンキ』を知っているのは「オ、オロロオ〜ン！ひどすぎる！」

言ってることはわかるけど、てめーらなあ〜」

ごめん、吹いた。

というか、向こうでニヤトランも吹いてる。

ペギタンとラビリンももらい笑いしかかっている。

唇を同じようにヘンに歪めたのどかちが前に出てきて、言った。

「はい。知ってます。

あなたたちをここに呼び出したのは、わたしです」

「さっさと帰しな。痛い目にあう前にな……」

続けようとしていたのどかちちに、承太郎さんがおっかない声を被せた。

さすがのあたしでもわかつちやう。事情をみんな知ってるんだもん。

次に何を言うかなんて、わかりきっている。

「わたしの知っているあなたはD I Oを倒しました。

承太郎さんのお母さんも、無事に回復していまッ……!？」

「次はねえぜ。おめーの世迷言を聞かされるヒマもねえ」

でも、この反応だって予想しとくべきだった。

お母さんの命がかかってるんだ。

よくわからないことを言っているヤツの頭を、星の白金で握りしめるくらいは、やる。

…わかる。理解できる。でも許せるかって言われたら!

でも、ここで太陽を解き放つたら…ここで話し合いは終わっちゃう。

アラビアデブのスタンドを持つあたしを見てどう思うかなんて、わかんない!

「その子を放せ、承太郎! まずは話を聞いてやろう!

クソくだらないウソツパチだと決めつけるのは、その後でいいじやろう!」

「…やれやれだぜ!」

ジョセフさんが強く止めてくれたおかげで、のどかちは承太郎さんから解放された。

かなりヤバかったと思う。あたしもそうだけど、同じようにスタンドを使うタツキも

攻撃に出る寸前だったみたいだし。

たぶん、ホントにそれをやったら一瞬でやられちゃったと思う。二人とも。

ちゅちゅも変身しようとしてたみたいだけど、それこそ何分持つかなあ?

「さーとー!

我々に何をお望みなかな？お嬢さん方！」

単なる夢のジョセフ・ジョースターさんは、

それでもカンタンに思い通りになんか、ゼツタイなりそうになかった。

ここから、ガッツリ話し合わなきやあいケナイんだよね……

戦う前から強敵すぎない？ズルイ……

## お願い、スターダストクルセイダース!—その2

「なるほど。まあ…わかったわい。

ファンタジーすぎる経験だったら、イヤというほどしとるからな…わしも」

ジョセフ・ジョースターは一応は納得してうなずいてくれた。

その経験は、この俺…鳴滝魁も知っている。断片的にだけだな。承太郎の記憶が元だからな…

もちろん、それは人生で飛行機が四回も墜落したことではないし、

透明な赤ちゃんと珍道中を繰り広げたことでもない。

事情の説明を黙って聞いていた五人と一匹だが、案の定…複雑な顔をされまくっている。

プリキュアとビョーゲンズの話をされた俺自身を振り返っても、順当だと思うよ。

「とはいってもよおージョースターさん。

いや、オレもお嬢ちゃんたちをウソつき呼ばわりはしたくねーけどよ。

ゴルドラックかつーの!」

「わしだってなあ? 『柱の男』どもと『エイジャの赤石』をめぐる戦いをしとったんじや

ぞ？

もし、わしら波紋戦士が負けとつたら…人類の歴史はマジで終わつとつたかもしれん。

ほら、カートウーンじやる？バカな話はありえるんじや！」

「そもそもぼくら自体、超能力者一行の吸血鬼退治じゃあないか…

それを考えれば、笑って片付けるのは無理だ」

「しかも、彼女らのうち三名がスタンド使い！

おまけに一人の能力が、われわれがアラブで倒した太陽<sup>サン</sup>だとは…

これはわれわれにとつても、プツチ神父とやらが影にまぎれてうごめいている証！」

「それ以前に…オレたちが夢で作られたコピーだど？

何が起こつても現実とは関係ないだど？やれやれだ…」

結局、説明したのは花寺だった。

困った反応をされてはいるが、その辺は想定済みだったようで、

ひとまずは前向きに受け取ってもらえただけ安心しているようだ。

話の流れでもわかると思うが、俺達もスタンドを見せている。

やはりというか、平光の太陽<sup>サン</sup>を見るなり驚き戸惑っていたな。

俺は、どうもF・Fが俺のスタンドの実体化したビジョンだと受け取られているくさ



い。

ともあれ…動かぬ現物があればこそ、

『心を盗む能力』…ホワイトスネイクの話もすぐに納得され、

DISCの話も、それをバラまいている何物かの問題も理解してもらえた。

「にしても、2020年だとオ?55歳じゃあねーかオレ!

ナイスミドルになってんだろオーなあ〜〜

『矢』とやらの話を持ってきたのはオレなんだろ?

承太郎の記憶を持つてゐるってんなら見たよな?ウソじゃあね〜なら教えてくれよ!

「す、す…透き通るような美男ぶりだったわ!」

「そ、そうそう!天にも昇るみたいなカツコよさだったよ!」

「そーかそーか!ヤツパリなあ〜〜」

お嬢ちゃんみてーなベツピンさんにはイイ男の価値もわかるってもんだぜ」

みんなが返事に困った中でドモリながら答えた沢泉は冷や汗と苦笑いを浮かべてい

る。

便乗した花寺も当然、同じような顔をするしかない。

文字通り『透き通つてゐる』し『天に昇つてゐる』んだからな!承太郎が最後に見たポル

ナレフは…:

「だいいち、それは2004年のことで、55歳でナイスミドルかなんぞ確かめようがない。」

「だからこそ、よおしく許せねえことって、あるよなあー」

「おい、てめえ。さつき何でも差し出すって言ったよな？」

「こつち来てツラ貸せや」

「……う、オ、オレ？」

「ウム。こつちに來なさい、鳴滝クン！」

「イヤな予感以外何もない招きだが、応じるしかない。」

「ジョセフにまで一緒になられるとな。」

「松葉杖をついてなるべく早く寄ると、ポルナレフに肩をドンとやられた。」

「突き飛ばされた先にはジョセフがいて、同じようにドンとやられた。」

「その先にはポルナレフがいて、同じようにドンと、先にはジョセフ、ドンと、ポルナレフ……」

「ドン　ドン　ドン」

「スッテーン」

「ボコ　バシツ　ガスッ！　ガスッ！　ガスッ！　ガスッ！」

「な、な、何をッ!?!」

「うるせーッこのド腐れハーレム野郎オオーッ

女の子ハベらせて薄幸の美少年きどりかテメー……ッ」

「そんなつもりはッ……グハッ!」

「事情がどーだろーと実態がそーじやろがッ!!」

こんなお嬢さん方に囲まれて、んな腐った目をしとるのがなおのこと気に食わん!

ユルせん!ぶちのめすべき野郎じやあー……ッ」

「転がれオラッ!ゴロゴロ転がりやがれッ」

転がされてドツキ回される俺!

半身不随に対する仕打ちかよコレが!?

とは思うものの……気を使って殴る蹴るしてるのがわかつたりする。

加減のない暴力のダメージというのはよくわかつている。

ちよつと前までは、俺自身がそれをやる立場だったからな。

受ける側にもなって、よりよく理解した。

なんか俺……殴られることに思いやりを感じることはすっかりになってないか?

んな趣味はねえ!断じてねえ……ッ

あッ、平光が動いた!助けてくれ。

「やめてよ……なんでイキナリイジメンの!」

「ひっこんでな……じゃれてるだけだぜ。バカバカしい」

「イジメじゃん、こんなの！」

「だとしても、女に助けられる男は屈辱モンだぜ……黙って見てな」

「ダメなんない！」

……俺は、両人差し指を銃口に変えて、ポルナレフとジョセフに突き付けた。

そうだよな。当然だ……あいつらに、暴力への『慣れ』なんか、あるはずがない。

マジに受け取ったあいつらがまとめて突っ込んできたら、この場は終わってしまう。

平光が承太郎を強行突破しようとする前に、俺が打ち切らせるしかなかった。

「これ以上は、俺も抵抗します」

「……チッ」

「フンッ、しよーがない！この辺にしといてやるわい」

解放された俺のところへ平光がすっ飛んできた。

次いで花寺と、沢泉も。

もつとも、沢泉だけは察してた気配があつたな……

体育会系の男子と接点があるからだろうよ。

「だいじよぶ？タツキー」

「大丈夫だ……いや、ホントに大丈夫。」

マジにあれはジャレてただけだ…そりやチョットは痛えーけど。

チヨイと不良の男子にはよくあることな」

「やっぱりイタイんじゃない」

「まずは立ちましよう?ほら、手をとって」

「悪い…」

平光と沢泉の手をとって引き起こしてもらい、

直立したところで花寺に松葉杖を片方ずつ差し込まれる。

普通に背中に手を回すことができれば、もつと楽なだけだな、お互いに。

一連のやり取りを見届けてから、花京院が来た。

「第三者のぼくからも言っておこう。

きみたちのそれが、やさしさから出る行動だというのはわかる。

だが、きみたちの周りが見る目は、やはりポルナレフのそれになるだろうな…

日常生活の中でそういう介入をすれば、よけいにこじれるぞ」

「うん…わかります。最近悩んでいます。どうしようかって」

「カーチャンかよおめーはッ!」

それは、そいつがためー自身で悩むべきことだぜ!

でなきやあ、せめてためーのカーチャンに泣きつけて話だろうがよ」

泣きつけるカーチャンは俺にはいない。

が、いちいちごもつとも。全面的にポルナレフの言う通り。

花寺を悩ませている俺が完全にダメだ。

俺は、俺が改善するべき問題をほぼ一方的に背負わせている状態にある。

もう、勝手にやっているなどと受け取ることとはできない。

俺に対して支払われた血と汗と涙は、そっくりそのまま俺の命だ。

なら、この命をこいつらのために使うのが筋だし、今、俺は…それを嫌とは思わない。

だが実際はこれで、有り体に言って無様だ。

だから、こうやって平光がかばおうとする。

「カーチャン、つて…タツキーは」

「平光さん、だったね」

「…なにさ」

『『かわいそう』呼ばわりされて喜ぶ男がいるものか…！』

いたとしたら、そいつは男じゃあない。

そんな甘ったれを、ぼくは男とは認めない…」

そして花京院にもかばわれてしまった。

おかげで俺は、甘ったれじゃあない男として振る舞えるのだから。

「……。そうなの?」

「少なくとも……俺は、『かわいそう』とは言われたくない」

「そうなんだ。ごめん」

「なら、私達におんぶに抱っこはやめなさいね。しつかりしてもらおうよ」

「頼るところは頼ってね。ウレシイんだよ。頼られるって」

俺は、こいつらがしてくれただけの男になれるのだろうか?

なるのだ。ならねばならない!

俺が情けなく下らない男であることは、今やこいつらに対する侮辱そのものなんだ。

…やはり、男が必要だ。ペギタンとニヤトランではなく、同じ立場で戦える男が。

さもなければ俺は、そう遠くないうちに甘ったれに成り果てる。こいつらの優しさに溺れる。

だがこの考えは…果ての見えない恐ろしい戦いに、無関係な誰かを進んで巻き込むということ!

まずは、他人を頼りにする思考そのものを許さないことからだろうよ。

説明からして結局、花寺に丸々頼った俺は、今度こそ頭を深く下げなおした。

「では、改めて…頼みます」

「うむ、言ってみなさい」

「俺達に戦いを教えてください。万が一にでも負けるわけにはいかないんです」  
「きみにとつての負けとは何だね？」

「……………」

彼女らが、敵の攻撃で取り返せない不幸に落ちること……です。

今の俺には……他には何も、ありません」

「ふむ……、お嬢さん方は？」

「大好きなみんなや町が、壊されて元に戻らないこと……です。

ビョーゲンズが『レクイエム』になって全部を壊すのなら、わたしは全部を守りたい」  
「花寺さんと同じよ。生まれ育った町と景色。そこに暮らすみんな。

何ひとつとして好きにはさせないわ。ビョーゲンズにも、ホワイトスネイクにも」

「あたしも、ただ守りたいだけ。壊されるなんて許さないし！」

「テアティーヌ様とラテ様、ヒーリングガーデン、それとみんなを守るラビー！」

「ボクも、そのために戦いに来たんだペエ。…コワイ、けど」

「負けねえーぜ、ビョーゲンズにも、性悪な人間どもにもよおーッ」

口をはさめていなかったラベリン、ペギタン、ニヤトランも加わって、

決意表明みたいになってしまったのを聞いたジョセフは、

腕を組んで踏ん反り返り、ニマツと笑った。



「ウム、いいじゃろ！」

ミツチリ教えてやろうじゃあないか！

皆もそれでいいな？」

「わたしは元よりそのつもりですよ。ジョースターさん。

有望な若者が教えを請うているんです」

「気は進まねえーなあー、だが…やるか」

「教えるというよりも、体で覚えてもらおうことになりましたが…ね？承太郎」

「やれやれだぜ」

アヴドウルは早くも構えを取り、ポルナレフはため息をつく。

花京院に話を振られた承太郎は、のっそり前に進み出て、ゆっくりこちらに向かってくる。

このまま進めば、俺の真正面に、だ。

「どのみち、やることは同じってことだ……」

こいつらの言ってることが本当でも、はたまたくだらねー茶番をこいた大ウソだとしても…

本当なら、手加減はいらねえ。オレ達から多くを学ぶってんならな。

ウソなら、手加減はいらねえ。全員ブチのめしてカイロに戻るだけだ。

「…ところで、俺はせつかちでな  
オラア!!」

顔面に拳がめり込んだ瞬間を、俺は認識できなかつた。

## お願い、スターダストクルセイダース!—その3

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

私達が我に返る瞬間には、拳の鈍い連打音が打楽器みたいに鳴り響いていた。

鳴滝くんがラツシユをくらっている!無敵のスター・プラチナのラツシユを!

平和なヒーリング・ガーデンに似つかわしくない音、音、音…

へ…変身よ!グズグズしていたら…

「イキナリ何すんだよ、このーッ!!」

「よせーッ!ツひなたアアーッ!?!」

平光さん何やってるの!?

変身もせずに突っ込んでいくバカをやる普通!?

変身を終えて割り込む直前で、彼女の頬を鉄拳が打ち抜いた。

打撃音というよりも、風船の破裂音がした。

「…バカか」

承太郎さ…空条承太郎が冷淡に吐き捨てると、

脇に一撃入れて宙に叩き上げ、鳴滝くんとまとめた。

中華鍋でチャーハンでも炒めてるみたいな手際だった。

「おろかな…戦いが『いつせーの』で始まるとでも思ったのか？」

「いや、イイ子じゃ…イイ子なんじゃよ。」

何も考えずに助けに入つとる…探しても見つからんわい。あんな子

「できれば…わかつてほしかつたですな、ジョースターさん。」

今すでに戦う場面だったということを…

「…クソツ、見てらんねーぜ」

誰か何か言っていたように聞こえているヒマもなかった。

変身した私は、拳の中に割り込む…なんてマネはしない。脇をつく！

「オラァー！」

「うツ………！」

刺した拳は即座に迎え撃たれた。当然だけど気づかれてたわね。

そうなると思つてたから、差し込んだ直後に一步引いていた。

反撃にきてくれた…目的は達したわ。二人への攻撃は止めた！

つまり。空条承太郎は私が受け持った。

守りに入れば即死。攻めるしかない。

今の私ができる限りの、全力のラツシユを！

可能な限り死角に回りながらッ!

「オラオラオラオラオラオラあぁーッ!」

「やれやれ、こども露骨にマネされるとはな…」

仕方がねえ。嫌ってほど教えてやる。本家大本ってやつをな」

承太郎はこつちを向かず、スター・プラチナだけが来る。

顔に不思議なくまどりを施した、古代の格闘家。

そんな像ウイジョンが躍りかかってきた。

打ち合ったら命がいくつあっても足りないわ。

でも、留まるしかないわね。二人がこの場を引くまでは。

二人の様子もわかりやあしなない…振り向く暇なんてないんだから。

両足を地に踏みしめる。無理にでも殴る。

「オラぁーッ!オラオラオラぁーッ!」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

違いすぎるッ…!一発殴る間に五発は飛んでくる。

パワーだけでいうならこつちに分がある。

でも、『パワー×スピード』で攻撃力が決まるとしたら…

スター・プラチナの攻撃力は、少なくとも今の私の優に三倍。でも、彼の強さの本質はこんなものではなく…

「オラアーツ!!」

ガシッ パキョ!

「ぐッ? うぐうううううう」

「ペエエーーツ!? フォンテーヌ! 指をッ!」

「敵の前で不用意に拳をほどけばそうなる…覚えときな。」

次は、切断するぜ」

やられた、一瞬で。

右手の小指と薬指を、つかまれてへし折られた。

痛みがッ…感じたことのない痛みが遅れてやってくる!

陸上部だから、何度か手とか足を痛めたりはした。

そんな生易しいものじゃあない。肉体が欠損すれば、これ以上?

「そして、こつちもわかつてきたぜ。」

そのプリキュアとやら…『衝撃』だとか『刺突』にはめっぽう強いが、

『圧迫』には弱いらしいな…なら、倒し方はできている。

スター・プラチナの指先で、1cm単位でツマんでむしれば済む話ってことだ」

なんておそろしいことを考えつくの…!?

私達自身が気づいてもらいなかつた弱点を、一度打ち合っただけで!

これが、空条承太郎。敵として立ちふさがらるなら、これほどまでに…

恐怖で固まってる場合じゃあないのよ! 私は何をしに来たの?

「フォンテーヌ、いったん退くペエ!」

「退かないわ!」

1cm単位でむしつてくるというのなら、

致命傷になる部分ばかりを狙わざるをえないもの!

耐えきつて、本体を叩く…勝ち筋はそれだけよ」

それに、この場合は1対1じゃあないってことも忘れちゃあいけないわ。

今は至近距離で戦ってるから外野がちよっかいを出してこないけど、

退けばそれはなくなる。全員が私を狙ってくるかも。

そういうえば…グレースは?

「…:…チツ」

承太郎が飛びのいた。一瞬遅れて、桃色の光が来る!

地面に着弾、炸裂。吹っ飛ばされた。私と、後ろの二人もろとも。

その後からグレースが飛んできて、そばに着地した。

「グレース？これは？」

「ごめんね、これしかなかった！」

元来た方向へ構えをとるグレースは、明らかにダメージを受けていた。

そう、今まで私が承太郎と1対1で戦っていたということは…

当然、グレースは1対4！5かもしれない！

現に遅れて追ってきたのは、花京院とジョセフ・ジョースター。

そのすぐ後ろにアヴドウルとポルナレフもいる。

「なかなか…大したものですね。彼女…」

わたしにマジシャンズ・レッドを使わせなかった」

「守りに入らず逆に突っ込んでくるとはのオー、1対4の状況で…」

なるほど、大筋で私と同じことをやったみたいね。

至近距離で戦って同士討ちを恐れさせ、隙をつけて光弾を放った…

言うのは簡単だけど、1対4よ？歴戦のスタンド使いが4人！

しかもその中にはシルバー・チャリオッツがいる。

承太郎のスター・プラチナですらスピードで敵うか怪しいほどのスタンドが。

今までこの子は、私以上におそろしい目に遭っていた！

「グレース、あなた…」



「今は、負けないことだけ考えよう?」

「…え、ええ」

そこへ、黄色い光が立ち上り、キュアスパークルが隣に並ぶ。

でも…見ていられない有様ね。

右手でお腹を押さえて、左腕は上がらない様子。

口と鼻からは少しだけ血が垂れてる…

変身前に受けたダメージは、プリキュアに引き継がれてしまう。

これはおそらく、現実でも同じね。

「スパークル!」

「……エへへ、ドジツちった…ケホツ。

やっぱダメだねえー、考えるより前に動いちゃう…

行くよ。勝つしかないっしょ?」

「うん。負けたら終わる。そんな戦いに、わたしたちは行くんだもん」

「甘えた心じゃあ、何もつかめないわ」

プリキュア三人は立った。立って戦える。

それはいいんだけど、あと一人…

「ぐ、が、が、が……」

『おい…おい魁ッ！』

起きろッ！頭を動かせ！ハイッ！』

鼻が陥没して血を垂れ流し。

右腕左腕、左足がヘンな風によじれて

コンパクトに折りたたまれたままうわ言を漏らす鳴滝くん。

松葉杖はもちろん粉みじん。破片がちよつと見つかるくらい。

「かばって戦うしかないわね…」

「うん…無理もないよ」

ここままで、もしかしたら待っていてくれたのかもしれない。

このやり取りが終わった瞬間、緑の光弾が殺到してきた。

鳴滝くんに向かって！

ドバァア

「プニ・シールドッ！」

「ラビー！」

「ペェー！」

グレースと私とでプニ・シールドを展開し防ぐ。

…知っている。これは花京院典明のエメラルド・スプラッシュ。

「なんてことすんの!?!もう戦えないじゃん!」

「弱点を狙うのは当然のこと。足手まといを利用しない手はないな…」

間断なく撃ち込まれ続ける破壊エネルギーは私達を釘付けにして動かさない。

動いたら、鳴滝くんがやられる…現実だったら死ぬでしょうね。

それを思ったら動くわけにはいかない。まずいわ…敵が散開する。

こつちが動けない中、敵だけがフォーメーションを作ってしまう。

打開するべく動いたのは、スパークルだった。

「ぐッ、エレメント、チャージ!」

「ひな…ニャア!」

「プリキュア・ヒーリンググウウ…フラーツッシュユ!!」

ギユワワ ゴバオオ

プニ・シールドの裏側から転び出たスパークルは、花京院を狙い撃った。

必殺技ともいえるこの攻撃はとても無視できるものじゃあないわ。

ビョーゲンズを浄化するための技とはいえ、

大きなエネルギーと、人間を気絶させるに十分な威力を持ち合わせているはず。

花京院はハイエロファント・グリーンの手を近場の木に伸ばし、跳んで回避…

それだけでは終わらない。スパークルは同時に太陽をも展開している。

降り注ぐレーザーが花京院のいた場所を追って吹き飛ばしていく。

エメラルド・スプラッシュは完全に止んだわ！

転げたスパークルは身体の傷をかばいながらも立ち上がる。

「だ、大丈夫？」

「だいじょぶ！あたし、アイツ受け持つから！」

あのブーメラン頭！メロンオバケ！」

「それ…しかないよね」

勝つには、もうそれしかない。

鳴滝くんが弱点になってしまっている以上、三人一緒であたるわけにはいかない。

それぞれが最低一人を倒して数の有利を作るしかないわ。

出来る出来ないじゃあない。やるしかないのよ。

「次にお前さんは、じゃあ仕切り直しよ、と言うう！」

「じゃあ仕切り直しよ……ハッ！」

「ペエーッ!?!」

ジョセフ・ジョースター!?

私の次の言葉を寸分たがわず当ててきた？

「そして次のセリフは！」

それがなんだっていうのよ。こんなことで動揺なんかしてあげないわ!……じゃ」

「それがなんだっていうのよ。こんなことで動揺なんかしてあげないわ!」

「……………なッ……………ッ!?」

「なッ……………なんだアアアアアペエエエッ!?」

「何よ、何なのよ……だからって何よ?」

「ペースに乗せられるわけにはいかないわ。」

「早く接近して混戦に持ち込まないと……」

「……………に、げろ」

「……………え?気が付いたのね、鳴滝く……」

「逃げろ!そこから跳べーーーーッ」

「すでに何かされている!」

「ここでもう四の五の聞くのはやめにして跳んだ。」

「けど、もう遅かった。跳べない……」

「足元からみつく何かに、そこでやっと気が付いた。」

「な、ナニコレー!?!」

「紫の、いぼら?」

「ハーミット・パープル……足、が。動けないわ」

「何よこんなの！引きちぎっちゃえば…」

「もう遅い。詰みだな、きみたちの！」

アヴドウルがマジシャンズ・レッドを出している。あんな距離から何を？

いや、知っているわね。クロスファイヤー・ハリケーン・スペシャルを。

炎うずまく紋章の嵐を叩きつける必殺技を。

でも、それだったら足が動かないでも対抗できるわ。

私が、プリキュア・ヒーリング・ストリームを正面からぶつければいいんだもの。

炎対水、試してみるのも悪くないわ。

でも…いっこうに撃つ様子がない。なぜ？

いいえ、まさか…地面が、光っ…

「もう、撃った後…!?!」

「チツ！チツ！チツ！」

YES I DID!

ドツゴオオ〜ン

クロスファイヤー・ハリケーン・スペシャルは地中から噴火みたいに炸裂した。

これは…タイガーバームガードンでポルナレフがやられた手と同じ…

気づくべきだったわ…ぬかったわね…

密集していた私達はまとめて空に吹っ飛ばされ、プリキュアのエネルギー切れ。変身が勝手に解けて、三者三様に地面に落ちこちた。

遅れてもう一人：鳴滝くんも音を立てて叩きつけられる。

って、燃えてるじゃない!?! 私達はプリキュアだったから助かったの？

「熱ッ、あ、ああ、熱ッづウ」

転がって消そうとしているけど消えない。

スタンドを使って消そうにも、炎はF・Fの天敵よ。

これじゃあ何もできないわ！

身体を起こして助けに向かおうとするけど、ダメージが大きすぎて動けない…

どうすればいいのか焦燥感だけが大きくなっていったのを、ポルナレフが終わらせ  
た。

騎士甲冑の剣閃が走って、鳴滝くんにまとわりついた炎だけを切り落とす。

非現実的に細い体躯もあって、ガイコツみたいな印象のスタンドよね。

…私も、ここでノンキに構えすぎた。

「つつ………た、助かッ」

「助かった、とでも？」

「ボケも休み休みに言いな、カス野郎」

戦いは終わっていない。

鳴滝くんを踏みつけ、剣を突き付けたポルナレフが、そう言っている。  
いえ、終わっていないんじゃない？ 『負けた』のよ、私達は。



## お願い、スターダストクルセイダース!—その4

負けた後はあつという間だった。

いや、『こうなる』と考えているべきだった!

だが俺たちは…俺は、あんなにも輝かしい彼らだから、

そんなことは絶対にしない!と無邪気にも信じていたんだろう。

違う、無邪気ではない。甘えだったんだ。それ以外の何なんだ?

「花京院、ジヨースターさん」

名だけ呼んで、ポルナレフはスタンドを抜き放った。

シルバー・チャリオッツは近場の木、三本を十字架の彫刻に仕立て上げ…

平光と沢泉が、紫のいばらに引きずられ、そこに吊るされた。

わずか三秒足らずの早業だった。

「なッ……何を!?!」

「動くなよ、花寺さん。」

きみはすでに、わがハイエロフロント・グリーンの術中に落ちている…

わかるだろう? ほら、口の中に」

承太郎の記憶を持っていながら、何を言っているのかわからない花寺じゃあない。

反射的に開けてしまった口からは：緑色に輝く頭がアイサツしていた。

そうだ、こいつは女医の体内に入り込んで操るなんてマネをやっていた：

いくらDIOの部下だった時期とはいえ：足りていなかったんだ。想像がツ

「ヤクに言っておくー！

きみは夢を消そうと思っただろう？

先にきみの頭がはじけ飛ぶぞ……

おっと、こう考えたね？夢の中では他人からのダメージは受けないと。

だが、ぼくらはきみの意思で自由に動いている：自傷行為ということさ。

納得いかなければ、試してみるんだな……

明日：起きるのが遅いんで、起こしに来たお母さんとお父さんの顔を想像したいのな

ら……ね」

「……!?……どうして……?」

花寺は、自らの足で十字架の元に歩いていき、自ら紫のいばらに手をかけ。

なんの抵抗もせず ゆっくりと吊るされていった。

言うまでもない。ハイエロフロント・グリーンに四肢をいのように使われている。

「なっ……何をするラビーンッ!!」

「何をだとお？ 教えてやろうってんだよ。

負けたらどうなるのか、ってな…

てめーらも吊るされちまいな！ ホレッツ！」

ポルナレフの周囲がキラツと光った。

それしか感知できなかった。

「ラビッツ!？」

「ペエー…ッ?？」

「ニ、イヤアツ!？」

抗議したラビリンと、沢泉と平光を助けようとしていたペギタン、ニヤトラン。

三匹が何かに打ち据えられてまとめて宙に放り出され、やはり紫のいばらに縛られる。

三本の十字架からはかなり離れた位置だ…プリキュアへの変身は封じられている！

「待て。待ってくれよ…何をやる気なんだよ。お前ら」

「ああん？ 同じ質問二度してんじやあねーぜ。

ま…てめーの期待通りじゃねえーのおー？」

「できるはずがないッ！」

叫んだ。こいつの言っていることはおかしい。

「あんたがそんなことするはずがないッ！

妹をレイプされて殺されたあんたが！

クソ野郎と同じになるはずがないッ!!」

ドボオ

無言の蹴りが俺の腹にめり込んだ。

さっきのようなジャレ蹴りではない。臓物が潰れるようだった。

ガツ　ゴシヤア

同じような蹴りが連続で叩き込まれる。

胃液を吐き散らしながらヤツの顔を見た。ただ『憤怒』だ。

ヤツはこつちに目を合わせない。腹だけを見て、ひたすらそこを蹴りつける。

それ以外に何も読み取れない：ただ言えるのは『おかしい』の四文字だけ。

観察するんだ：この場を切り抜けるために。

が、この場面の終わりもすぐに来た。

シユババツ　ボゴオ

レーザーの嵐がポルナレフに降り注いだからだ。

うち一発は俺に至近弾。あおられて吹っ飛ばされる。

当のポルナレフは飛びのき、難なく躲していく。



噛み殺したような唸り声を上げた平光は、もはや太陽サを引つ込めるしかなかった。絶望と憎しみにゆがんだ顔。誰のせいでもなかった？

ポルナレフが歩み寄る。十字架三本に向かつて歩み寄る。

その背から飛び出した銀の甲冑は、手に持つ剣をしならせた。

「夢の中ならダメージはなかったことになるらしいが！

心そのものが壊れちまったらどうなるのか？

実験してやるぜ：黙って見とれや、ボウズ」

わずかな音だった。風そのものが切られたようだった。

無数にしまった剣の行き先は、平光、沢泉、花寺。

一瞬遅れて、全員、髪が一気にほどけた。

平光のツテールも、沢泉のおさげも、根本のゴムを切られた。

それだけではない。髪自体もいくらか切られて宙を舞っている…

花寺の、花の髪留めも粉々に壊された。

……わかった。嫌というほどわかった。

こいつらは……本気だ！裏切りやがって、ハハハツ！

この場を…俺一人が、ひっくり返さなければならぬ。

さもなければ。そんな想像をしたのなら、俺は死んだも同然だ。

そしてそれが現実になるといふのなら……

「そんな現実、認めてたまるか……」

「あつ、そう……で、テメーに何ができんの?」

俺はクラウチングスタートでヤツに突っ込んだ。

半身不随をかなぐり捨てた突撃は、さすがにヤツの意表をつけた。

シヨルダータツクルそのままの勢いで、向かいにあった木に思いきり叩きつけてやる。

根本からへし折れて倒れていく木。ポルナレフも、踏みとどまることはできなかつた。

俺もタダじやあすまない。強すぎる踏み出しで両足ともカカトが潰れ、右肩は粉碎! その他、数えきれないほどの細かな骨折と脱臼、筋断裂、出血が至る所で起こった。

だがそんなことは承知!今の俺はプリキユア以上でなければならぬ!

「ぐふツ……やつと、本気を出したってわけか?テメー」

おしやべりなんかには付き合えないね。

こうなった以上、最速でこいつらを八つ裂きにするしかないんだ。

今、俺は、あのダーティ・ウォーターと同じ状態にある。

あいつが使った肉体強化を全て使っている状態!

あいつにはビョーゲンズの力があつたし、人間の肉体はそもそも捨てる前提があつた。

当然、俺は違う！

要するに。一挙一投足ごとに、俺の体はブツ壊れていく！

骨も筋肉も神経もズタズタに寸断されていくが、そこはフー・ファイターズがある。

片っ端からひたすら作ってはつなぎ変えていくだけだ。

そのあたりの蓄積は、F・Fがすでに持っていた。

「魁！体組織の修復は全部こっちで持つてやる…」

おまえは、ただとにかく早く倒せ！」

「F・F、頼む！」

「ようやく面白くなつたぜ。花京院！手エ出すなよ！

オレのシルバー・チャリオッツで仕留めるからよ」

正面から付き合つて勝てる相手じゃあないのはとづくに理解してる。

このパワーを持ったところでスピードではカメとウマほどの差があるんだからな。

右側に急激な方向転換をして回り込み、F・F弾で牽制。

そんなもの一瞬で切り払われるだけ。だからこそその牽制つてやつだ。

少しでも有利な位置から攻撃さえできればそれでいい。



「俺の左腕をくらえ」

ブツ ブチブチ ドバツ ボヒユウ!

用意していた左腕を、ヤツに向かって撃ち出す。

原理はバネ式のオモチャだ。バネはF・Fで作れるし、そいつを間接に作ればいい。この質量が無視できないことは、キュアフォンテーヌが教えてくれている。

「ぬうう、なんてオゾマシーマネしやがる!」

案の定、ポルナレフは飛んできた左手をはじき飛ばした。

よし、このまま突っ込む!

バツク転から近所の大木を蹴りつけ、一直線。

「その程度で……ひるむとでも思ったのか? マヌケッ!」

シルバー・チャリオッツの突きが当然待ち構えた。

そんなことはわかってる。避けず、むしろ当たりに行く。

まずは残った右手を貫かせ! 続いて左胸を貫通させる!

ガツチリ噛みこんだ。手骨と肋骨で!

「てめッ……テコの原理で……これが狙いかッ!」

左肺を血が満たし始めたが、そこはF・Fを全面的にアテにして。

やるべきは……折ってやることだ! この剣……バキ折ってやる!

両足は正面からヤツにまたがった。逃れることはできないだろうよ！

力を入れて、骨と骨とで支点と力点を操り、一気にへし折ろうとした…が。  
「ぬるいぜ。鉄をもスラスラ切り裂くチャリオッツが…」

てめーごときの骨にてこずる理由はねえぜ！」

スカツ！

肋骨沿いに、剣はあっさりと抜けていった。

右手もついでに4分割されてロースカツのスライスみたいになった。

血はしぶかない。F・Fが即座に止めた。だが左肺はもうダメだ。右手も。

「チエック・メイト。ときたもんだ…」

覚悟はいいか？モズの早煮えになる覚悟だがよ」

「……それは、お、れの、セリフ、だ！」

「なんだと？苦しまぎれかよ、見苦しいぜ！

…いや、まさか……花京院!？」

切り離れた左手は、すでに密かに花京院の元に向かっている。

50mまでは俺の制御が及ぶのだから、こうして指先だけで自走することもできる。

昔の仲間に見せてもらった映画でこんなのがあったよなあー。どうでもいい。

ジャン・クロード・バンダムも、ジョニー・デップも、ニコラス・ケイジも、

あいつから教わったんだっけ?…まずい、『時間切れ』が近い!

そんなくらい知ってなきや恥かくぞとか言つて、雑誌を押し付けていきやがって。

ゴミ箱じゃあねえーんだぞ…あいつも、結局は俺から離れた。変わりやしない。なんにも…

「魁、おい…魁!!」

F・Fが感覚系に無理やり侵入、背筋にオゾ気が走つて正気に返る。

そうだ、ここが正念場だ。花京院さえ倒せば、花寺が自由になる!

夢を解除、全ては終わる…飛び出した、攻撃を!

「マジシャンズ・レッド」

ボスン ブシユワ

左手の反応が消えた。というか、俺からでもよく見えた。

花京院を狙った左手は飛び出した瞬間に炎の怪鳥に捉えられ、瞬く間に消し炭と化したのだ。

「ま、イイ線はイツとつたよ?

じゃがなあ、わしをあざむくにはちと足らんなあー」

「しかしこの戦法!

まるでジョースターさんに聞いた屍生人<sup>ゾンビ</sup>じゃあないか…

「屍生人<sup>ゾンビ</sup>じゃね完ペキに！」

おそらく、微生物を操る能力の延長で脳細胞の作用を操つとるんじやろうな。

それで肉体のリミッターを解除し、破壊されていく肉体の痛みを脳内麻薬で消しとる

！

でなけりやあこんなムチャクチャはできんわい」

見抜いていたのはジョセフ・ジョースター。

おまけのように、俺：：とか、ダーティ・ウォーターの仕組みも暴かれている。

「じゃがな、それはダメなんじゃ。

勇氣とは、恐怖を克服しわが物とすること！

そして恐怖とは、痛みを知ることから始まる：

痛みがわからんヤツに、勇氣などありはせんのだよ。

わが祖父の師の言葉を借りるなら：ノミと同類よ」

：なら俺は、どうすればよかったというんだ？

いや、そんなことは、いい！

ノミだいうなら、ノミらしく勝つてやるまでだ。

過程や方法なんか、どうだっていい！

三人と三匹が、それで助かるって言うのならな!

F・FはDISCだから、俺に引つ張られなきやあそれでいい!

花京院への攻撃が失敗したというのなら、最後の切り札はこの俺だあーーーーツ

「ま、待てツ!何をする気?」

正気に戻れ!あんた自殺をするつもり!?」

止めるなよF・F。俺は誇り高い気持ちでいっばいだ:

信じるもののために戦うことが、こんなにも幸せで満たされるなんて。

そう、殉教だ!これこそが殉教だ。晴れ渡る心だ!

この心臓をせき止め破裂させ!血しぶきでジョースターどもの体内に侵入!

回避なんかさせねえーーーーツ扇風機を作つてまき散らすんだからなあーーーーツ

そしてそのまま首を飛ばす。終わりだ!

「俺は!俺は『役に立つ』んだ!」

俺は、俺の価値を!証明してやるぞオオオオーーーーツ

勝つた!フー・ファイターズ!!」

……たぶん、察しはついているんだろう?

俺は、過剰分泌した脳内麻薬の多幸感で自滅した。

自分で自分の胸を破壊して、血がこぼれ切り、そのまま息絶えた。

大して血は飛び散らなかつた。今だからわかる。足りるわけがない。

こんな風に他人事みたいに考えていられるのも、ちよつとして復活したからだ。

草むらの上で目を見開くと、花寺が、沢泉が、平光が。

ラビリンが、ペギタンが、ニヤトランが。

なんともいえない顔で俺を見下ろしていた……

## お願い、スターダストクルセイダース!—その5

「ゲヒッ!見ろよ!

オレ、は…役に立…フヒ、フヒハ。ケヒッ」

ゴボツ ゴボボツ ドチア

わたしたちは見た。見ていることしかできなかつた。

追い詰められた鳴滝くんが、全身から血を噴きながら戦い…

自分の足をつぶし、胸で剣を止め、切り離れた腕を操って裏をかき。

それでもかなわず…最後には、心臓を爆発させて仰向けにくずれ落ちる姿を。

この世のものとは思えないひどい笑顔だった。

右目と左目が反対方向に裏返って、アゴは外れたままになって舌が飛び出して…

「Oh、My…なんてことじゃ。この、バカヤロウめ…」

「同じじゃあないか、これでは…D I Oの、狂信者と…」

それでいいと思っているのか?きさまは」

立ち尽くすジョセフ・ジョースターとアヴドウル。

それをさせたのは一体誰なの?…なんなの?その他人事みたいな言い草。

ハーミット・パープルがゆるみ、みんな十字架からその足元に落っこちた。

『あの方にだけは見捨てられたくない』か…」

「承太郎？」

「いや…ンドウールとか言ったな。」

おめーの目を切り裂いたあのスタンド使いがな…

自害した時にそんなことを言っていただけだ」

「わかる、な…ぼくも同じだったんだ。」

肉の芽だけのせいじゃあない。

すぎるものがない、弱かったぼくは…どのみち、D I Oに心酔しただろう…！

…その彼も、それと同じだと？」

「さあな。だがひとつ言えそうなのは…

そのこのそいつが、すがられる側の迷惑を考えてねーってことだけだな」

「……同感だ。」

花寺さん。ハイエロファント・グリーンはすでに解除した。

戦いは終わった。きみたちの負けでな。

まずは、彼を起こして…」

言いたいことは山ほどある。でも、このままグズグズしていたら、



鳴滝くんが『自分は死んだ』と思い込んでしまいかねない。

記憶が現実世界に持ち込まれるのなら、現実世界の鳴滝くんもまた死んじゃう。まずはキズをさつと治す。見ていられないよ…嫌だよ。

わたしは涙まみれになっていた。

こんなにつらいんだ…何もできずに見ているのって。

無力って、こんなにつらいんだ…っ

ううん、これ自体は知っている。わたしの治らない体を前に

悩み続けるお母さんにお父さん、先生たちを見ていたときの気持ちと同じ。

でも、今はプリキユアになっている。戦えるはずだったのに!

なのに、力が足りなくなっただけで見ているしかなくなる、このさらにひどい無力!

鳴滝くんも、吊るされたわたしたちに同じものを見たのかな?

だから、あんな捨てバチな戦いをやったの?

『生きること捨てちゃった戦い』をッ!

夢だから、終わってしまえば元通り…って、考えたのもあるかもしれない。

わたし一人を解放できればみんな無事に終わるのは事実だったと思うよ?

そこまで先回りして考えても、こんなものってない。

だからといって、わたしに何ができたの?

わたしが弱いのがいけないの？

ちゆちゃんを見る。

ぺたんと座り込んだまま、顔を両手で押さえてフウフウ息を漏らしてる。

その手から雫が伝って、足元を濡らしてる……

その先の、ひなたちゃんを見る。

涙とか鼻水とかマミレのまま呆然としていたひなたちゃんは、

突然スツクと立ち上がった。歩いていく。進む先には、ポルナレフ。

太陽サンが浮かんた。異様なほどに静かな太陽……

「………………。来な。」

てめーのスタンドの、最強の一撃だよ……」

ポルナレフは姿勢だけで向き直る。

ひなたちゃんは寄る。一步、二歩、三歩……

同じように、少しずつ近づくと太陽が、きらめく。

「ひなたちゃんッ！」

駆け出したわたしは、ひなたちゃんの背中にすがりついた。

「のどかつち……どいてよ。それじゃ戦えない」

「悪い夢だよ。これは悪い夢で！」

「覚めたらみんな終わる夢なの!」

「どいてよ。だったら、もつとこのままじゃあ終われないでしょ」

「終わってよ!」

ひなたちゃんの中に全力で抱きつく。

この先には絶対に進ませない。進ませたくない!

「終わってよ!こんな夢は終わってよ!」

ひなたちゃんも、こんな怖い顔をしてる夢なんか!

わたしはッ!いつものひなたちゃんがいいの:

おひさまみたいなの、元気な笑顔のひなたちゃんがいいの!

嫌だよ:こんなの、嫌だよッ」

もう理屈もなんにもない。

だいいち、わたしだって、ひなたちゃんと出会ってからせいぜい一週間。

知ったつもりになるには短すぎて:

でも、わたしの大好きな笑顔のひなたちゃんが消えていく!

壊しちゃういけないものが壊れちゃう!

ただそれだけを止めたいの。それだけが絶対にイヤ!

わがままでわたしは泣いた。泣きじやくった。

用事で出かけちゃうお母さんを引き止めていた小さいわたしみたいに、  
必死で首に背中にまわりついた。

「……私も、嫌よ」

「ちゆ、ちー？」

ちゆちゃんの声が、すぐ前からした。

ひなたちゃんの前に立ちふさがって、両手を広げてた。

「あなたが人を撃ち殺すところ、なんかッ……見たくもないわ。」

平光さ………ひなたッ!!

もう戻れないところになって、絶対に行かせないわ!」

三人が、そのまま固まった。

わたしとちゆちゃんは、ただ止めたいから動かない。

ひなたちゃんが動こうものなら、全力で止めるだけ。

どれだけそうしていたのか……わたしには、数分にも数十分にも思えたけれど。

ひなたちゃんが、ひざを折って座り込んだ。

「ひなたちゃ……」

「……ふ、うう。うううう……ッ!」

う”あ”あ”あ”あ”———ッ!!」

逆にひなたちゃんの抱きマクラにされたわたしは、

少しして、同じようにひなたちゃんを抱きしめて、泣いた。

もう、周りなんかどうでもよかった。

ちゅちゃん腕が、それをさらに外側から包んでくれていた。

「…止めおつたな。復讐心を止めおつた！」

壊れてはならんものを『治す』…

傷つき欠けた心に寄り添い、『癒す』…

わしらには到底マネできん強さじゃ」

「そして、その傷をつけたのは他ならぬわたし達！」

正直、胸クソ悪さでいっぱいですよ。ジョースターさん」

「……やれやれ、だ。じゃあ、必要なのは野郎の教育だけだな」

「……………。クツ、クツッおお……チクシヨウツ!!」

「バツカヤロ……なんでわからねえんだ」

「それを教えるんだ、ポルナレフ。」

「もつとも、ぼくらの役目じゃあないかもしれないが」

少しして、わたしたちはやつと落ち着いた。

ラビリン、ペギタン、ニヤトランが飛んでくる。

「それじゃあ、ちゅちゃんは最初から気づいてたの？」

「最初からじゃあないわ。髪を切られたところで確信しただけ。

もし、本当に『その気』だったとしたら……その。

もつと切るところがたくさんあるでしょう？」

「……そっか。服、無事ですんでんだもんね、あたしたち」

「ポルナレフの……うんニヤ、あいつらの目的は」

「いきなり気絶しちやつた魁の本気を見ることだったんだペエ」

「ヒドイ話ラビ。そりゃ、戦いを教えてって言ったのはコツチだけ……」

わたしたちが立ち上がったあたりを見計らってたんだと思う。

ジョセフ・ジョースター……ジョセフさんがこっちに来た。

「あー、そろそろ……いいかの？お嬢さん方……」

やつた方がいいじやろ？反省会」

ものすごく気まずそうに挙動不審な感じでやつてきたのを見て、

多少はわたしの敵意も飛んだ。完全に、とはいかないけど。

でも、これじゃあいけない。ラビリンの言うとおり、頼んだのはわたしたちなんだから。

わたしたちはみんなで焚き火を囲んだ：あ、みんなじゃあないね。

ポルナレフさんは離れたところにいるよ。混じる気になれないみたい。

それと鳴滝くんは、ジョセフさんの希望でいったん夢の外に出しちゃってる。

ちゃんと生きてて異常なしってことは、そこで確認できた：DEATH13だね。

「まず、お嬢さん方のポロ負けでこそ終わつとるがな。

わしとしては、現時点ではお嬢さん方には問題ないと思つとる！

というか、勝たれたら逆に完全アウトじゃよわしら。

ベトナムを戦い抜いたベテランが新兵のヒヨツ子どもに蹴散らされるみたいなもの

じゃ！

ギャグじゃろ、それ？」

「…は、はあ」

「MVPは花寺さん、アンタじゃッ！」

わしらのうち4人をたつた一人で拘束し、一時的とはいえ場を支配した：

あれで、圧倒的不利をかなり押し返したんじゃぞ？

攻撃をためらつてたポルナレフに張り付いたのがさらに高得点じゃ。

ま、たぶん…必死だっただけじゃろうけど。そういう直感が生死を分けるぞ」  
そう、必死だっただけ。

ポルナレフさんに突っ込んでいった理由は、現実的にあの人しか狙えなかったから。他のアウドウルさん、ジョセフさん、花京院さんはそろって遠距離攻撃できるから、一人でも自由になられたらそこでわたしはオシマイ。

だったらもう、武器が剣だから近づくのが一番楽なポルナレフさんを盾にするしかない。

そこに賭けるしかなかった。攻撃をためらってたかどうかなんて、わかんない。

「もちろん、沢泉さん、平光さんも大したモンじゃ。」

わが孫、承太郎と格闘で張り合い、花京院を遠距離戦で退けた…

まともに戦い始めて一週間でこれじゃろ？

いくらプリキュアのパワーがスゴかろうと、これは誇ってイイんじゃないぞ？」

「ホメてくれんのは、ウレシーけどき……実戦で、負けちったら」

「これから強くなるんじゃない？」

お前さんたちはイヤってほど味わつたろう！『無力』の恐ろしさをな…

アレを現実にはないため、これから色々策を練るんじゃない。

戦いは力じゃあない。ハートよ、ハート！



折れちまわない限り、考え続ける限り、活路は開けるんじゃない。

そして、その辺について、わしはお前さんたちをまったく心配しとらん！  
ただ一人を除いて、じゃがな」

「…鳴滝くん、ね。どうしてかしら？」

ここからがどうも本題だよな。

察して、ちゅちゃん先をうながした。

「お嬢さん方の戦いにはあつて、あのボウヤには無いものが答えじゃ。

そいつは後で本人を交えて言うとして…ここでお嬢さん方に聞こう。

お嬢さん方にとつて、あのボウヤは何じゃ？どう思つとる？」

うーん。困ったこと聞くなあ。

スタンダードISCがある以上、切り捨てるなんてありえない。

それをわかつて聞いているんだよね？」

「…ちよつと、困った友達で、一緒に戦う仲間です。」

その…面倒くさい人だけど、がんばってほしいなって」

「腐れ縁ね。それと、運命共同体。この戦いが終わるまでは…ね。」

それと…私たちは、あいつにとつての最後のチャンスだと思つているわ。

見捨てたら、もう立ち直れないでしょうね…そんなことにはしたくないわ」

「命の恩人だよ！あたしを助けるのに、めっちゃ必死になってくれた：

なんかイロイロ複雑っぽいけど、それだけは単純にウレシイんだ。そんだけ」  
言うだけ言ってみたら、わたしが一番冷めた回答だった。

経緯を考えたなら自然ではあるんだけど：

「…って、あのときのタツキ、ヤバかったのにゼンゼンF・F使ってなかった。

なんで石コロなんかで戦ってたの？F・Fでもつとやれたじゃない」

「あつ…、そつか。ひなたちゃんだけ知らなかったんだ」

話す必要ないことだと思って、承太郎さん達への事情説明でも

鳴滝くんの自殺未遂、というか『口封じ』未遂については黙ってた。

ひなたちゃんには、単に話す機会がないまま今日まで来ちゃってたね。

本人が言ったことを中心にして、わかる限りの背景を含めてきちんと説明する…

「……ハア？意味のある『死』？ワケわかんない！

死んだらなんにもならないじゃん！

全部なくなるじゃん！あたしも、みんなも、明日も…

そこから助けてくれたのに、なんで？」

ホントに死にかけてたひなたちゃんだからこそ、言葉が重い。

ジョセフさんが、顔を抑えて首を振った。

「……………ハア~~~~ツメンドくせ〜ヤツツ!

話が見えてきちまったわい!」

「どゆこと?」

「今、お前さんが言ったことに答えがみんな並んどるよ!

わかりたかつたら、答えはお前さんたち自身で見出すべきじゃな。

で!本題はここからじゃ!」

続けてジョセフさんが言うには。

戦いの間の言動だけを見ても:鳴滝くんは、力へのひどいコンプレックスにまみれてる。

育った家庭環境がろくなものじゃあないだろうことはこの時点で丸見えで、

だからこそ、わたしたちの手には余る。

おかしい家庭、つていうのは、すでにダーティ・ウォーターからたつぷり聞かされてるし。

そして、この『弱さ』はいつか致命傷となつてわたしたちに降りかかる。

もしかしたら、今日みたいな形で。

「単純に考えるならな、まともな家族がいりやあい!」

問題が多かろうと、あとは時間が癒してくれるじやろ。

こんくらい歳のなら、まだ取り返しはつく！

…で、お前さんたち、なつてやれる？」

みんなで顔を見合わせた。沈黙。

「ま、無理じゃな！トーゼンじゃよ。」

人生短し恋せよオトメ！…だったかの？

好きでもねー男に連れ添つてやるほど、お嬢さん方の青春は軽くないんじや」

「それでさっきの質問だったのね…」

「そこで、まだしも現実的な提案があるー！」

ジヨセフさんはさらに続けた。

なんだかんだ言つても、鳴滝くんはわたしたちを助けるために命を賭けてくれた。

スタンド能力がない状況で、ひなたちゃんを守つて戦い、ついに生還させた。

そこには確かな『愛』の片鱗があつて、誰かから受け継いだもののはずだつて。

そのルーツを見つけられれば、家族に負けないくらいの強い芯になるはずだ、つて。

「ビョーゲンズとやらにホワイトスネイクとやら。」

こいつらがいつ襲つてくるかもわからん状況じやあ他人は巻き込めんよなあー？

そんな中になるが、これなら『手伝い』でなんとかなるかもしれないぞ」

簡単じゃあないと思う。

でも、目標もなくウロウロしてるより、ずっといいよね。  
ニヤトランは言ってたよね。『お手当て』が必要だつて。

わたしは、ずっと『お手当て』されてきた。だから、今度はわたしの番。  
その中にきつと、鳴滝くんも入っているんだよ。

ちよつと、頑張ってみようかな。

「ウム、よし。いいじゃろ！」

ボウヤをここに入れてくれ」

……にしても、ボウヤつて。ヒドイ！

## お願い、スターダストクルセイダース！―その6

顔を覗き込まれる俺は、ちょっととして、負けた事実だけを鮮明に思い出した。

…こんなツラをしている場合なのか、お前ら。

「目が覚めたのね。鳴滝くん」

「……。大丈夫なのか？」

大丈夫だったのか？お前ら…」

「おかげさまでね」

沢泉の答えと様子を見るに、何もされなかったようだ。

平光、花寺と視線を移す…物憂げな顔はしているが、絶望とか憎しみは感じられない。ただ、かなりの不満を感じる。というより、表情に出して隠す気がないのか？

兄二人との付き合いから、危険な不満や怒りの兆候はわかるのだ。

程度の差こそあれ、ラビリン、ペギタン、ニヤトランも似たような顔をしている…

「あなたが…死んで…からだけどね。向こうから勝利宣言が出て解放されたのよ。

今は反省会をしているところね」

この説明を聞かされれば俺も理解した。

ヤツらの脅しは『フリ』だったということ。

つまり、なんだ。ヤツらの目的はむしろ俺だったということ。

あまりにもふがいない脱落をした俺に、敗者復活の機会を与えただけだったのだ。

溜息がもれた。

「大体わかった。…ぶざまだな」

思わず漏れた言葉だし、いつわらざる本音だったそれに、

沢泉の顔が一瞬で険しくなった。

「誰がぶざまなのよ」

「違う、お前じゃあない! 『お前ら』でもない…俺だ。俺のことだよ」

「あなたの、何がぶざまなの?」

「何が、つて……」

戦いが始まる瞬間にぶちのめされてノビただろ。

そのまま立てずにいる間、お前らはとっ捕まって髪を切られた。

やっと立った俺は戦っても完全な犬死にだった。

……ぶざま以外の、何だつていうんだ」

表情を変えないまま、沢泉がぐいと近づく。

思わず下がる。尻を引きずって。さっさと立ってりやよかった。

ある種なつかしい恐怖を感じたんだ。

距離が少しだけ詰まって、沢泉も止まる。

「…今、引つ叩こうかと思つたわ。あなたを…」

でも、それはダメ。言わなきやあわからない。

あなたにそう言ったのは私だものね？

だから、言葉を尽くすわ」

…：…やっぱり殴る気だったのか。

じゃあ、この後、何を言われるんだらう？

何を言つて『殴る』と引き換えるんだ？

違う、こいつはそんなことをする奴じゃあない。

ダーティ・ウオーターの時に十分わかつたはずだらう。

両方の思考がせめぎ合う。前者の方がわずかに勝っている。

「こつちを見て。鳴滝くん。

…：…こつちを見なさい！鳴滝魁ッ！」

落ちていた視線を戻す。戻さざるを得なかつた。

昔は何とも思わなかつたはずだ。だが、ひさしぶりにこうなると…

ああ、自覚した。俺は、すぐく落ち込んでいるらしい。



でも、次の言葉は。覚悟のまったく逆側だった。

「私は、あなたに！『ありがとう』って言いたかったのよ！

まずそれを言いたかったの！」

混乱した。怒っているのに、言葉がまったく逆側だ。

「あんな、ボロ切れみたいになってまで私達を守ろうとしてくれた…

あなたの本気は嫌ってほど伝わったわ。だから、『ありがとう』なのよ」

「……………」

「なのに、それを…『ぶざま』？…ふざけないでッ!!

守ってもらった私達はどうなるの？

…ええ、あなたの言うことだってわかるわ。

最初に叩きのめされて、後はあなたが弱点になってしまったのは事実よ。

でもね、それを言うなら！逆に！あなたを奇襲から守れなかった落ち度が私達にもあ

るのよ？

一人だけプリキュアじゃあないあなたをッ！

フー・ファイターズは治療ができるスタンド…

真っ先に狙われることなんて、わかりきっていたわ！」

初めて見た怒り…いや、そうじゃあない。

平光の兄が、下水道に入り込んだ俺達を怒鳴ったのと同じ眼だ。同じ眼が今、俺だけに向いている……それが初めてなんだ。

「それに……私達が吊るされた後よ。仮に私があなただったら！」

プリキュアになれなくて、フリー・ファイターズで戦うのが私だったなら！

あなたよりうまく戦えたなんて、とても思えないわ……

ああするしかないって判断したあなたの決断の重さも、わかるなんて言えない！

私は痛かっただけよ。つらかっただけよ！当たり前でしょう？

言いたいことは多いけど！そりゃあ文句はたくさんあるけど！

もう……あなたは他人じゃあないのよ？それが、あんな姿になって……嫌なのよ。痛い  
の。

あなたも、私達を見て……そう思ってくれたのよね？」

うなずく。同じかどうかはわからない。

でも、あの先の絶望を見たくないと思っただのは確かだったから。

沢泉を見る。平光を見る。花寺を見る……

傷つく姿は……想像するのも、嫌だな。

「だから、ね。

今回のあなたを『ぶざま』と言う人がいるのなら、許さないわ。

たとえあなたが許しても、私が許さない。

そして…あえて言うわ。あんな戦い方、二度とやらないで。

あんなことをされて死なれたら、どのみち、私達は立ち直れないわ。

約束して。今ここで」

「……、お前は、あんな」

「無関係なことを持ち出さないで。

私は約束してと言っているの。あんな戦い方を二度としない、つて」

「……………ああ。はい。約束します。

もう、あんな戦い方はしません」

「忘れないでね。…ありがとう」

軽くパンツと手を鳴らし。

ハイ、お説教終わりッ!と皆の側に振り向き離れる沢泉。

言いかけた俺の質問…

『お前は、あんなことがあってなお、俺にそんな言葉が言えるのか?』

それはすべてを口に出す前に伝わり、無関係と一刀両断された。

今の俺は…これからのあなた、か…

『信じられている』。胸の奥で、ストーンと落ちる音がした。

だが俺は、今の約束を守ることができているのか？

本当にそうせざるをえなくなった状況の中で……

確かなことは、どのみち俺は強くなければならないということ。

強くなれば、自動的に守られる約束なんだからな。

…花寺が来た。平光も。

松葉杖を使い、ようやく立つ。

「ちゅちー、めっちゃママ！」

よかったね、タツキー」

「ちよっ……冗談じゃあないわ！いくらなんでもそれはやめて！」

沢泉は本気で嫌がった。たぶん鳥ハダが立ってるだろうよ。

なんてコメントしづらいことを言いやがるんだノツケから！

でも…そうか。今のはママがすることらしいな……

そう思ったら、安心を感じたんだ。

キモい。自分を客観視すると途方もなくキモい。

でも仕方ないだろ。俺の母親、鳴滝リンドウはきつと、母であつて母じゃあない。

今、感じてるみたいない安心をくれたことなんか、一度もなかった…

とにかく、これは胸の中に詰めたまま墓の下まで持つていく。断じて表には出さん！

出した日には！俺は自爆して死ぬだろう…！キモツ！超キモツ！！

「どうしたの？頭ブンブン振って」

「ななな何でもない。な何だよ花寺」

「どーせロクでもないこと考えてたラビ」

「ほっとけ。…で？」

「わたしとも、約束しよう？…ううん、みんなで。

『生きてることを大切にする』って。

お互いに約束するの。イヤ、かな？」

「なんでか…聞いても？」

「うん」

花寺は言う。

今回は、俺が生命を犠牲にして立ち向かう立場になってしまったが、  
本当の闘いで、花寺が、沢泉が、平光がそうならないとも限らない。

「そんな時にね、『誓い』があれば生きてくると思うんだ。

絶対に死なない、生きるんだって、心に決めていれば。

きつと、動きが違ってくるよ！あきらめない動きになるの！

…あきらめちゃったら、終わりだから！」

なんというのか、まぶしいヤツだよな。妬ましいくらいに。

体が弱くて病院から動けなかったっていう過去がそう言わせるのか？

：言っていることはわかる。俺は、自分の生存を早々にあきらめたからな。

こいつが言っているのは明らかにそれだ。

遠まわしに非難されていると言えなくもない：が、もう俺の命は粗末じゃあない。

血と汗と涙がそれを許さない。そう再確認したばかりだっただろ。

花寺が、沢泉が、平光が差し出す手に、手の平を重ねない理由は、ない。

「わたし、花寺のどかは『生きてることを大切にします』」

「私、沢泉ちゆは『生きてることを大切にします』」

「あたし、平光ひなたは『生きてることを大切にします』！」

「：俺、鳴滝魁は、『生きてることを大切にします』」

「ラビリンも、大切にするラビ」

「ボクもだペエ。みんなが大切だペエ」

「仲間外れはナシだぜーッ、オレもな！」

「あたしも乗った。一回死んだ身だけどきあーッ、それだけにね：なんか嬉しい」

「アン、アンッ！」

全員の手が重なった。

F・Fもわざわざ『エートロ』になって混じってきた。

今の俺と同じタイムイングで夢に入ってきたらしいラテも、  
重なる手の下で盛んに跳ね回っていた。

くさい言い方になっちまうことを許してほしい。

俺はこのとき、神聖なつながりが出来たことを感じた。

『ヒーリングつどプリキュア』って言ってたっけな…

それが、俺を含めて、今！成立したのを実感した。

「…ぼく達の入り込む余地はなかったな」

「や〜ツてらんねーわいッ！」

言いたいこと、ほぼ全ツ部先に言われちゃった！

面目丸つぶれってヤツじゃー！」

「やれやれだぜ…タバコが切れちゃった」

「そーいやーさ、タツキー」

一分くらい続いていた余韻を破ったのは平光だった。

「うん？」

「犬死に、つてさ。どーゆー意味？」

なんかイヤな言葉にしか聞こえないんだけど」

何の話をしてるのかわからなかったが、そうか。俺から出た言葉だ。

沢泉を怒らせたときに、確かにそんなことを言った。

「……怒るなよ？」

明らかにお前の前で言っているいい言葉じゃあなかった。

ラテもいたのなら、なおさらな」

「うん」

「なんの役にも立たない、無駄な死に方……って意味だな。

なんでそれが犬なのかは俺も知らない」

ぶわっ。そんな音が聞こえそうなほどに、平光から嫌悪感が吹き出した。

ノーテンキな目つきが憤りにすり替わっている。

こうなるのは全然不思議じゃあない。こいつの性格と、家とを知っているのなら。

「何それ。最低……」



あたし、その言葉、大っ嫌い。

二度と使わないで」

「悪かった……」

予想以上にダメージがでかい。

大体いつもバカみたいに笑ってるこいつがこんな顔をするとな…

「アウン…」

「うぐツ…」

さらに、足元で当たり前のように聞いていたラテ。

こいつは幼い犬のヒーリング・アニマルで…当然のように人語が通じている。

こんな言葉を聞かされたのなら、ダメージを受けても当然かもしれない。

「ラテ…お前はな、違う…お前がいなきやあ、ビョーゲンズの出現がわからないんだろ？」

お前にしか出来ないことで役に立っているんなら」

「タツキー！」

俺なりのフォローは、目を鋭くした平光に無理やり遮られた。

「役に立つとか立たないとか、どーでもいいでしょ！」

ただラテがいてくれるだけで、他になんにもいらないうじやん！

タツキーは、役に立つからあたしを助けたの？」

言葉ひとつで、こうもなるのか。

今日は、嫌なことを問われる日らしいな…

黙って首を横にふる。あの時の俺に、そんな判断は働いていない。

ただ、個人的な痛みだとかかゆみがあっただけ…

「たぶんね、それと同じ！」

それでいいじゃん」

「………らしいぞ、ラテ。」

お前は、ただのお前でいいんだよ」

平光の手を借りてその場に座り込み、ラテを撫でる。

…あれ?なんかサイズが…:違う、ような?

ガールルルルルルルルルルルルルルルル

ガブツ

「うゴわアアーッ!?」

「あつ、イギー…:どして?」

ラテを脇にのけて、いつの間にかそこにいたポストンテリアが俺の手を噛んだ。

耐えかねてひっくり返った俺の顔面に、さらに飛びかかる追撃。

バリッ バリッ! バリッ バリッ ブチ ブチイ!

「うぐええッ、髪が!」

「わわわ、ラテいじめてるって思われた?

タツキー謝って、早く謝って!」

「謝るって何を?ぐええッ」

ラテを落ち込ませたことくらいしか思い当たるフシがなかった俺は、

その後必死こいてイギーとラテに謝ったものの、結局最後までやられた。

何をやられたって?髪ムシリから顔面に屁までのフルコースだよ!ポルナレフコー

ス!

「さて、ボウヤ。お前さんはもうわかったじやろ。

さっきの戦いで、お嬢さん方にはあつて、お前さんに無かつたものは何じや?」

「生きる意志だとか、見通し…です。

俺は生き残る可能性をみんなのつけから捨てた」

「おおむね正解じゃな。」

そこについては、さつき克服したしの？」

イギーから救出してくれたのは、ジョセフとアヴドウルだった。

コーヒーガムで誘導されたイギーは、

今は脇の方でコーヒーガムをクツチャクツチャ食っている…箱ごと。

ラテも一本だけおすそ分けをもらったらしい。

というか、箱をとられたアヴドウルからねだっていた…イギーの近くでウレシそうに食ってる。

そして俺達は、改めて反省会の続きというわけだ。

「もっと言えば、お前さんにならないものは希望じゃよ。」

希望のない戦いは見ている味方を絶望させる……

悲壮なツラして電話かけまくってる倒産寸前の社長みたいなモンよ！

どんなにガンバツたつて、そんなんじや社員は一人も残らんわい！

最後のチャンスさえファイにしちまうんじや！」

「自分をだます、そこまでする覚悟が必要…？」

「ゼンゼン違うわい。信じるんじや。」

信じて、ただ尽くすんじやよ。使命だとか思いにのオー

お嬢さん方には、それができとる!だから心配いらんのじゃ。

ピンチの中に一瞬の勝機を見出すには、それこそが必要なんじゃない」

「……信じることで、動きが変わる。ですか?」

「それだな」

横から花京院。黙っているのにそろそろ飽きた雰囲気だった。

「その平光さんを助け出したときの戦いに、たぶんそれはすでにある…」

スタンドすらない状態で持ちこたえるには、どんな変化も見逃せなかつたはずだ。

そして、治療するにはきみ自身の生存が必要不可欠。

助けると決めたものの前で、きみは何が何でも生きて勝つ決意があつたんじゃない

か?」

「はい。生きて勝ち、治療を終えるのは絶対でした…間違いありません」

何を言いたいのか?つまりは、俺はすでに感覚としてそれを理解しているということ。

实例をすでに潜り抜け、後は応用あるのみということか。

それを肯定するように、花京院は深くうなずいてくれた。

「なら…もう大丈夫だ。きみは、彼女たちと肩を並べて戦えるだろう。」

あとは立ち回りの問題だな。使ったら死ぬ切り札なんか、ばかげてる…」

「そうじやのオー、もうちつとマシンにはできんのか？」

動かない下半身を単純に動かすだけでもかなり違うと思うんじやが」

「出来ません…顔が割れた状態で下半身は動かせない。」

そんなことをしたら、全国レベルのスプリンターとして父さんに呼び戻されることになる」

フー・ファイターズを使って、元の水準まで足を動かせるようにするぶんには楽勝だ。だが、それを公衆の面前でやろうものなら、俺の商品価値が復活する。

ちよつと前までだったら喜んだだろうな…だが、今の俺にとつてそれは死だ。

プリキユアはみんなすこやかか市民なんだからな。俺の実家は針詰市はりつめ…遠い！

ビョーゲンズの拉致にたった一人で立ち向かう羽目に陥っちまうだろうよ。

ホワイトスネイク関係者についても大差ない。

「それじゃよ、それ。」

「気づかんのか？お手本が近くに三人もおるぞ？」

「……う？どういふことですか」

「わからんヤツじやな。てめーも変身しろと言つとるんじや！

フー・ファイターズなら出来るじやろ？水さえあれば！」

…その発想はなかった。

目がぼちくり。瞬きの音が聞こえるようだった。

「それ、めっちゃイイ！」

いっしょにヒーローやろうよタツキー！」

「そっか、わたしたちだつて正体が隠せてるからやれるんだもん」

「現実的な方法としては『仮面』かしらね？」

マジかよ。既定路線になりつつある…

実際、頭ごなしに否定するには惜しい方法なのが憎い。

「そうじゃな、外付けで『仮面』じゃ！」

思うに、てめーの肉体に無茶な改造なんざ、する必要ねーんじやよ。

外付けでパワードスーツ作れば同じことよ」

ダーティ・ウォーターになるんじやあなくつて、

ダーティ・ウォーターを纏う、か……

「それが、出来るんなら…」

フル稼働しても、ブツ壊れていくのは『スーツ』だ。

俺は壊れない！」

「スタンドであるあたし自身から言う！」

夢を壊すようだけど…無理ね。全部外付けじゃあスタンドパワーが足りない。

でも、人間と同じ動きができる程度ならなんとかなる。

一定時間、正体を隠して戦う…までなら、水さえ確保できればやれる」というか、F・F自身にとうの昔から蓄積があるな。

本体から離れた位置に人間大の分体を作り、

エルメエスと互角に渡り合った実績が、しつかりと。

とくに水中はF・Fの独壇場だ。俺にも、たぶん同じこと。

たとえパワーが人間程度に落ちようとも、

敵前で松葉杖をつけてオタオタやってるよりはるかにマシ！

「戦える…戦える、ぞ…：現実的になってきた」

「そりやあよかつたわい。研究と練習はしつかりやつとくんじやぞ？」

これをものにできれば、俺の戦いは『泥』から『石』に変わる！

これが希望か。そうなんだな？

思い違いでもいい…俺に、また走っていく先ができたのに、変わりはないんだから。



長い夢も、そろそろ終わりに入りつつある。

今は互いに質疑応答し、持っている情報を発展させようとしている…

それもまた、終わりの頃合いだ。

「花寺さん。きみは幼少から病弱で、いつ死んでもおかしくなかったという。

しかもその原因は医者から見ても一切不明だと!」

「…はい」

「それはもしや…スタンドが害になっていたのでは?」

すでにスタンドに目覚めていて、最近克服したのではないかな?」

「ホリイさんと同じ。そう言いたいんですよね? アウドウルさん」

「うむ…わたし自身も、実際に何度か遭っているのではな」

「可能性は低いと思います。

今使っているDEATH13は、DISCですから。

いくらホワイトスネイクでも、複数のスタンドを一人に詰められるかどうか…

それに、わたし自身、そんなことはあつてほしくない。

お母さんとお父さんが、巻き込まれちゃう…引きずられて、スタンド使いになつ

ちやつたら…」

「たしかに…可能性は低いようだ。

スタンドが発現したのなら、ご両親がすでにそうか、きみに引きずられるのが道理！  
時間が経ちすぎているのに、とくに不思議な力もないというのならな。

だが…であるのなら、なおのこと！きみの病気は探っていくべきだろう…  
何かにつながっている気がする。断言はできないが…」

確かに似ていた。花寺から聞く病状は、

空条ホリイに表れたスタンド害にかなりの部分がそっくりだった。

取り殺されはしないものの、長期間肉体を蝕み続ける例もあるらしい。

だからといって結びつけるのは早計だが、完全に排除するべきでもない…

警戒するべき要素が、またひとつ増えてしまった。

「さて…もう、いいじやろ。」

わしらは、わしらの旅路に戻るとするよ」

「はい。ありがとうございます」

立ち上がるジョセフに続く皆。

その巨大な影たちの風下に立って、花寺は深く頭を下げた。

当然、俺達もだ。平光でさえ空気を読んでいる。

「花寺さん。わしらが視界から消えたのを見届けたなら…」

夢は終わりじゃ。夢ごと、わしらを消しなさい。

そして、二度と同じことをするんじやあない」

「……………えっ?」

「お前さんは立派な子じゃ。

わしらを支配したくないと考え、自由意志をよこして呼び出してくれた…

だが、それだけにじや。お前さんは、あのDIOすらもやらなかったことをやつとる。

『死者の完全なる蘇生』じやよ」

「ツ……………!」

最後まで、意表をつくことを言わなきやあ気がすまないらしいな。この爺さん。

花寺が、目に見えておびえた気配を出す。

「夢におぼれたくないんじやろ? なら、やめとけ…

いつか、誰かと避けがたい『別れ』を迎えた時…

この力は、確実にお前さんの枷かせになるぞ。

夢に行けば会えちまえるんじやからなあーツ

だが夢なんじや。わかっつとるじやろ?

寝て見る夢にうずもれるなんぞ、生きてるとは言えんよ」

「はいッ……………めんなさい」

「次にお前さんは、生きてるって感じ！と言うー！」

唐突で勝手な予言をくらった花寺は、

しかし、満面の笑みでそれに応えた。

「……生きてるって感じ！」

巨大ジジイの巨大な手の平が、花寺の背中をバシンと叩いた。

面食らってヨタつく花寺に、ジジイはニンマリ笑って歯グキを見せた。

「オウよ、生きなさい！思う存分じゃ！」

意味のある『死』が欲しいとかぬかしとるボウヤがいたが！

そんなもん、存分に生き切った後にしかねーわいッ！」

思いっきり当てコスってきやがって。

って、待てよ。なんで知ってる？誰だ、しゃべったの。

横にらみで見ていると、俺にも近づく影があった。

…ポルナレフだ。なぜ？

「ボウズ、あのお嬢ちゃんたちを悲しませてみる。

地獄の果てだろーと、てめーを追って串刺しにするぜ」

「…そんなことには、しない。約束する」

「おめーにはガッツがあったな。それに免じて信じてやるか…」

でかくなったら、一杯おごるぜ。てめーもおごれよ」

あんたは串刺しになんかしに來ない。

でかくなつた俺の姿なんか、あんたは見ない。

あんたは、時間が止まつた人間なんだ。

目の奥がツンとなつた。知つている承太郎の記憶とダブツたのかもしれない。

「ところでよボウズ、これだけは聞かせろや」

「な、何を…?」

「本命ダレよ?」

オレの見たところ! 平光の嬢ちゃんを見る目が違つてるよーに見えたがツ!

沢泉の嬢ちゃんにも心が動いたんじやあねーのおー?

あんなアツツイお説教されちまつたらよおーーツ」

「やめろポルナレフ。酔つ払いの絡みじやあないんだぞ…」

「イテ! テ! テ!」

しんみりした俺がバカだった。

後ろ首の皮をネコみたいに引つ張られて、ポルナレフは花京院に連行されていく。

その、ほんのわずかな間に、花京院も言い残していった。

「きみは出会えた。おそらくはぼくと同じように…」

後悔は、ないようにしてくれよ」

その孤独からDIOに一度は屈した彼の言葉だった。

「花京院さん！あんたは、DIOに……」

「勝つたんだろう？わかってるよ。」

わかっていても、油断なんかしない……ぼくの宿敵だ」

「……ああ……」

それ以上、何も続けることはできなかった。

紛らわすように回りを見る。

沢泉は承太郎に挨拶しているようだった。

何事かを言った沢泉に、承太郎は、やれやれだぜ、とだけ返している。

F・Fもそこにいる。すでに何か伝え終わったようで、

沢泉の横でただ黙って見ているが……

平光は、イギーとラテを両腕に抱っこして、

バラバラにほどけた髪でギヤハギヤハ笑ってた。

「では、今度こそさよならだが！

最後に、占い師たるわたしが、きみたちの未来の暗示を見てやろう」

俺は、タロットカードを一枚引いた。

『吊られた男』 『正位置』

## 松葉杖をDIYしよう！

「おい……F・F。あと、どれくらいかかるんだ？」

「あと十五分……訂正。二十分かかるなこれは……」

すでに作った場所にも水を回さなきゃあいけないし」

「それが大きくなればなるほど……『乾く』」

「ますます水が必要になって、こんな蛇口じゃあ補いきれなくなっていくのか？」

「ダメだこりや……話にならない。」

メガビョーゲンとかスタンド使いが出るたび、三十分かけて『変身』……

ナンセンスってやつね」

昨日の夢のあと……翌日の夕方が今だ。

俺とF・Fはさっそく『変身』の練習にかかった。

やると決めたのなら、一日も早く使えるべきだ。

意気込んで放課後を待ち帰宅したはいいもの……

ご覧の通りだ。あまり順調とは言えないな。

そうそう。今のF・Fは俺の体内に声帯を作り、喉の奥から勝手にしゃべっている。



『エートロ』の姿をとれるのは『夢』の中だけな。念のため。

話を戻そう…まず俺達は、ウチの水道蛇口に向かい、試した。

これだったら、少し探せば町中ならどこにでもあるからな。

しかし、ダメ…今の会話の通り!

フー・ファイターズはひたすらに増殖できるが、増殖した全てが水を必要とする。

体外に展開すればするほど、必要な水量がタテ×ヨコ×高さで増えていく。

『変身』している最中にもガンガン乾いていくわけだ。

さらに言うと、完全な真水だと育ちが悪い。

養分がないと急成長させられない。蛇口からの『変身』はこの二重苦だ。

結論をいえば…非現実的! やってられるかコンナモノ!

「もつと言えば、『変身』後にこそ水がいる…」

どっかに貯めて持つておかないと、あっという間にボソボソ崩れるぜ」

「ぬぐぐツ…やつかいな。」

だが、そういうことなら…

水と養分がたくさんあるところで、

素早く『変身』した方がロスがないっつーんなら!」

「風呂ッ!」

ドジャーーーツ

『『白だし』!』

コポツ コポ コポ

「沈むぜツ!」

ドツボボオオオーッ

.....

な…何やってるんだろう、俺?

ジャージ姿のまま、俺はシヨツパイ風呂に首まで沈んでいる…

「あツ、イイ…グツド!」

これならかなり早いぜ!超スムーズ!」

「……そりやあよかった」

「ただ、ちつと塩が濃すぎるな!

あんまり濃すぎるとそれはそれで繁殖できないから、もう少し薄味が好みね…

コンソメとかよくない?どお?牛脂沈めてみる?」

「注文多いな!」

目論見通り、『変身』はできた。計算通りだ!

そういうことになっておいてくれ…頼む。

今の俺は、湿原でエルメースと戦ったF・Fの分体を纏っている。

元の身長163cmから2mくらいにまでなっている。

着ぐるみがデカくて、動かす感覚が難しいな…慣れるしかない。

しかも、ただの着ぐるみじゃあない。

俺の歩行をサポートするパワードスーツだからな…

歩くたび、不自然に締め付けられてメチャクチャ痛い!

歩くだけでこれだぞ? 走ったらどうなるんだ?

調整を重ねる…

日が地平線に消えかかる頃、今のところの最適解と思えるものにたどり着いた。

スーツ部分はほとんど歩行補助の筋肉だけとなり、

他はフルフェイスのマスクに背中の水タンク、

それを全身に行き渡らせるためのポンプと配管。

ただ正体を隠せて、人並に走れるだけのもの。

防御力はほぼゼロだが、締め付けの痛みもゼロだ。

俺の意思で動く…F・Fも動かせる。

「歩けるな…歩ける…歩ける」

「歩くだけじゃあない、だろ?」

まもなく日も落ちる…行こうぜ、試運転」

そうだ。長時間の走行に耐えるのが最低条件だ。

自分に言い聞かせて玄関から外に出る。

目的地はすでに決めている。

ウチからさらに街はずれに向かえば、畑の先に川があり…

沿っていけば、人の踏み入らない、半分『山』の雑木林に行き当たる。

そしてそこには、俺のまた別の目的があるのだ。

道路に出る。『歩く』から『走る』にシフト…

俺の感覚はほぼそのまま持ち込めるが、手足の長さが違う。タンクのせいで重心も違

う。

フォームは完全じゃあない。やっぱり練習はいる。

でも、俺は。

「……………走っ、てる……………走ってる、んだ」

「そう、あんたは『走っている』…」

ま！走ったら？満足するまでね…」

乾いたアスファルトにしみ込んでいく、にわか雨のような感情だった。

一滴、二滴は無意味でも、後からそれが無数に続いた。

とにかく俺は夢中になった。足が地を蹴り『推進』する感覚に。

それを重ね、重ねて世界が流れる…速くなる!

マスク越しでもわかる。向かい風が俺を抱く。

久しぶりに会った古い知人だと思った。

だが俺は、その手を振り払っていく!それが駆ける者の礼儀だから!

全速力…やはりというか、『本来の俺』よりだいたい遅い。

だが、それはすでに来た道だ。どうとでもしてみせる…『動く』のなら。

「F・F。頼みがある」

「ン?」

「マスクを開けてくれ。」

風を感じたいんだ。心地良い『風』を……」

「…悪いけど。」

あんたが一番わかっているはずよ」

「……。だよな。悪い…忘れろ」

そのためのスーツ。そのためのマスク。

敵に慎むべき行動だった。そんなことはわかっていた。

俺は、開けない。ただ、わからなかったただけなんだ。

足の速さに、俺は『力』しか求めていなかったはずだ。

家に居場所を作るため、他人を振り回し従わせるためだけの『力』：

今の俺には、もはやどっちも意味がない。

手放したくはなかった…が、今改めて、あれを望むか？

今、ここを投げ出してまで…戻りたいか？

NO、だ。YESはひとつもない！

なら俺は、なんで今泣いている？

悔いとか悲しみじゃあないものが、目の奥からあふれている…

「…生きてる、って感じ…？」

口について出たのは、花寺が何度か口走ったそれ。

間違いないやあない。俺にとつて走ることは生きる術すべだったものな。

でも、たぶん。それだけで片付けられないものが、ここにはあったんだ。

「ついたな…この辺でいいんだろ？止まれって」

F・Fに言われ、足を止める。

さすがに雑木林を全速力で突っ切るのは無理だった。

この奥に目的がある…倒木だ。

それもある程度乾燥したやつがいい。

以前から存在だけは知っていたんだ。

自殺のため、テルミット爆弾を自作していた頃に、

迷惑がかわからない自殺場所を物色して徘徊していた時期があった。その時だ。

発見から一月程度経過したが！まだあまり痛んではないはず。

「じゃあ作るか。松葉杖……」

「あたしが採寸する。あんたは削り出して形を作るのよ」

「OK。ノコギリとグラインダーを『作って』削り出す」

「木くずで水分を奪われるのはわかりきってる！

まずは持ち運び可能に加工して川まで持っていく！」

「ご存じ、松葉杖だ。」

さすがに俺も学習した。戦闘になれば基本、松葉杖は折られると。

今のところ例外はたったひとつ。平光を助けた時のダルイゼン戦だけだ。

(あと、ダーティ・ウォーターにされた時はそもそも持つてなかった。

戦闘終了後の足は、平光がすぐ近くの自宅から持つてきた傘二本な！)

こんなことを四度も五度も繰り返したら、金も立場もあつたもんじゃあない。

今後は『変身』で走れるようになるにしても、奇襲をくらえば同じこと。

なので、自作することにした。成功すれば、今後も続けるだろう。

ガシツ ガシツ ガシツ

ギツギツギツ：

シヤツ、シヤツ、シヤツ：

ガリ ガリ： ビシツ！

…： 困難をきわめた。大変な重労働だ。破片もヤバイ。

ある程度まで削れば、後はフー・ファイターズによる浸食で形を整えられるが、それ以前の段階で成形失敗が2回、ボキツと折ってしまったのが1回。

大きな材木を線に沿ってまっすぐ切るだけでも一大事業なんだよマジに。

なんとか成功した最初の二本は、なのに要求してる強度に満たなかった。これじゃあ使えない。

構造を見直し、また作る：スタンド能力なんてズルをフル稼働しても、現状一本あたり30分。

ただの手作業だったら、一日潰してやっと一本かもしれん。

日々励んでいる木工職人さんのスゴさと苦勞を身に染みて理解した。

そういやさつき、グラインダーを作るとか抜かしちまったがな：

木を削れる高速回転のヤスリとか、フー・ファイターズにできるわけねーだろ、ボゲツ

！



という結論に早々に達し、歯とか骨の応用で作れる普通のヤスリに変更している。仮にグラインダーを實現できていたところで、使いこなせていたかどうか…

正直、助けを呼びたい。けど、あいつらをここに？

…無理。いろんな意味で。だいいち、来させて何させる気だよ？

「あと、音が立つのがヤバイ。引き寄せられるのが『敵』かもしれない…

場所は変えてやるべきよ。毎回ね」

「その辺はいくつか見繕っている…今朝も話したよな。

しかし、慣れもあるけど、思った以上に時間がかかるな…

九時を回ったら切り上げよう。メシも食うし、『夢』には遅刻できない」

「1セット完品が作ればバンザイってトコだな、これは。

確か『水族館』の刑務作業にもあったけどなあ、木工…あたしはやってない」

「承太郎が何度も道具の自作やってる。無人島とかで。

でも、松葉杖が欲しくなったことは一度もないんだよなあー

するにしても、折ったり削ったりのカンタンな加工だけだし…」

「ムダのなさは参考になるけどね」

だから、俺が重ねるしかない。経験を重ねるしか…

考えるまでもない、当然のこと。

こんなコトをやつてる日が来るとはなあ。ワケがわからん。

「承太郎と言え、だけどな」

「ン？」

「お前と沢泉、最後に承太郎と何を話してたんだ？昨日……」

「んー、ま、いいや。隠す必要もないか」

ちよつとだけ迷つたF・Fは、わりとアツケラカンと話し出した。

「あたしはね？」

『あんたの娘は最高だ』つて、そう言つてただけ！

あたしに『生きる』ことをくれた。『思い出』をくれた。

たとえ、ただの影だとわかつていても……感謝したかっただけよ。

あたしは、ついに会えなかつたんだ。本人にね」

「……会えたと、思うのか？その……徐倫は。承太郎に」

「会えた。絶対に会えた。そこだけは自信をもつて言う！」

根拠なんか必要ない。徐倫だからな。

エルメエスがいる。エンポリオがいる。ウエザーもいるんだ。

やれるよ、あたしがいなくても……アナスイもいるしな」

F・Fは、カケラほどの疑いもなく言い切る。

言っている『目つき』が言葉からわかった。

F・Fの記憶の中にある徐倫を追う…なんてことは、もうしない。

彼女がヒーリング・アニマル?として人格を取り戻した以上、

一方的に記憶を探るのは出歯亀野郎のすることだ。

承太郎の記憶だけが共有財になっている。暗黙の了解だな。

というよりも、俺自身がこりこりだった。

他人を傷つけ力で押さえ、力を失った瞬間に全員が傷つけ返してきた。

押さえていた以上の力で…あの焼き直しは二度とごめんだ。

そんなことをしてくるあいつらを想像しただけで気が滅入ってくる。慎重にもなる  
さ。

傷つけないのは俺自身のためだ。あいつらみたくキレイにはなれない。

もう俺は生きると決めていて、それはあいつらの差し伸べてくれた手だけにかかって  
いる。

F・Fだって同じことだ。むしろ、ある意味最初に出会ったからこそもつと重要かも  
しれない。

「んで、ちゆか?」

ちゆはな…『あなたみたいな大人になりたいわ』だと。

不良時代の非行には山ほど文句あるけど、つてつけ足したがな。本人を前に言つて、願をかけたかつたらしいね」

「そりやあまた。頼もしいこつた」

あんまり嬉しくない声で返してしまつた。

いや、頼もしいと思うよ？ ホントに。

ただ、承太郎は自らの行動で相手の非をわからせる人だつた。

相手をとがめたり非難したりするんじゃない、

そいつの過ちが招いた災いから、むしろ自分の身を敷いて守る男だ。

傷だらけになりながら、それを『やれやれだぜ』の一言で済ませてきた男なんだ。

それは……嫌だな。カッコいいかもしれないが。

「手エ止まつてんぞ」

「悪い」

ヤスリでヘンな所を削つちまうよりはマシだつた。

手が止まつてて、運がよかつたかもな。

ほどなくして九時を回る。あつという間だ……ヘトヘトでもある。

「なんとか使えそーなのがーセット、か」

「先は長いねえー、こりや……」

「このやり方はダメだ。手作業じゃあなく大量生産できないと…

俺が精魂尽き果てる。戦いに、日ごろの疲れで負けちまう」

「なら、『工作機械』を作るしかない。

部品を全自動で作る『工作機械』……

松葉杖は、部品の組み合わせで構成するんだ」

「そうだな…材木からキレイに一本削りだすとか、バカなことを考えたもんだ…

どうあがいても俺が職人になるしかないよな、これ。

認めるよ。木工を甘く見た。見下していた」

『『工作機械』でさあー、同じこと繰り返すなよ?』

「まずは本だな。明日、図書室を当たるよ。

それでもなけりや図書館だ」

「どうかさ。あいつらに相談したら?」

「…最悪、そうする」

来たときと、同じように走って復路に行く。

ほとんど畑と道路ばかりだから、人に会うことがなくていい。

その辺、ちゃんと考えて決めたからな…これはホントに計算通り。

今度もマスクを外したくなるが、自重。

やがて家に帰りつき、風呂場で変身を解く。

膝から崩れ落ちて尻もちをついたのは当然の帰結だった。

歩けないんだよ、俺は。

今までは、シンデレラにかかった魔法にすぎない。

男の俺には死ぬほど気色の悪い例えになるが：

魔法のドレスが剥がれ落ちれば、残っているのはただのボロ。そういうことだ。

いや、少しだけ違っているな。俺のは、魔法じゃあなく、本物だった。

それを汚して、ボロにしたのは俺なんだ。繕うこともできやしない、台無しボロ。

さつきまで感じていた風を思い出して、みじめさに俺は泣いた。

F・FのDISCは、すでに外している。

『痛みを感じる』『泣いてやる』のはダーティ・ウォーターとの約束だ。

だから、この場ですべて済みます。

『夢』に持ち込まないために……

# ゆめポートに遊びに行こう!—その1

「ぶははははははッ!?

『白だし』、『白だし』って!アツハハハハハ!

タツキー、煮物?スープ?

時短レシピかッ!?イヒヒヒヒ!

「ひなた、笑つちやダメよ?

遊びじゃっ…ないんだから…クッ」

悪いけど笑つちやった。

イヤイヤイヤ、笑うとかムリっしょコレ?

止めてきてるちゆちーだって半笑いだし、

のどかつちも笑いかけた口をガンバって閉じて宙見上げてるよ?

「ああ…クソ、だから嫌だったんだよッ」

「あたしはコンソメの方が好みだがな」

「うるせーよF・F!」

夢の中に来たとたん、タツキーがカシコマツた顔で報告とか言い出すから

なんだと思ったら、変身を試してみた話だった。

で、フツの蛇口からだど水が足りなくて変身できないから、お風呂に水張ってやってみたって話！

養分がいるから、『白だし』を混ぜて！

お好みでコンソメでもいいーよまである！

あ、ダメツ、こらえらんない！

バンツ バンツ バンツ

「机まで叩くことかよ、チキシヨオ…」

「ま、まあ成功ってことでいいのよね？」

「う…うん、うん。変身に2分だったら、なんとかなるよね！」

そうそう、机！

今日の夢には、お姉のワゴン持ってきたよ！

ジュースの移動販売のヤツ！モチロンみんな分出してるよ、ジュース！  
座って飲むための机とイスもってわけ。

「今後は水の確保が課題になるな……」

養分は固形コンソメ持ち歩くとして。

…おい平光」



「ククク、ゴメンもうダイジョーブ」

「でも、蛇口じゃあダメなんだったら…どうするの？」

まあ、大丈夫なのかな？

お風呂だって普通の家なら必ずあるんだし…」

のどかつちがそう言ったら、タツキーが頭を抱えた。

「どうしたの？」

「人様の、家に…忍び込んで…」

風呂に、コンソメ溶かせと？さらに…そこに潜れと？

俺に…それを、やれと？」

「……なによ、その…変質者」

ちゆちー、ミのケもヨダっ！

聞かされたのどかつちも、チョットニラむみたいに動きを止めたと思ったら…

「……………フギッ」

ノドの奥からそんな声、というか音を出して、

手で顔おおって机に伏せた。肩と背中がピクピクふるえてる。

そのまんま動けなくなっちゃったみたい。右に左に体ユスツてる。

ちゆちーも半笑いがヒドイ顔になってる！

てゆるかムリ！あたしもムリ！想像しちった！

笑いコミアゲてトマンない！

バンツ バンツ！ バンツ！

「変ツ態!!」

めつちやハイレベルな変態じゃんアハハハハハハ!!」

「他人事だと思いやがつてく、クソがツ」

……あつ、へソ曲げそー。

そろそろヤメよーとガンバリだすと、

ちゆちーも自分の顔をパンパン叩いて気を取り直した。

「ごめんなさい。あなたは真面目に話しているんだものね」

「いいけどよ、別に…」

「でも、すこやか市に限るなら心配いらないかもしれないわ。

養分のある、まとまった水があればいいのよね？」

「ま、そうなるな」

「あるじゃない、たくさん。

うちでも大量に出てるわよ！捨てるほど！

捨てなきゃあ立ち行かないわ！」

「……『排水』!温泉のか?」

「正解よ」

あつ、なるほど!

ちゆちーのウチは温泉旅館で、この町、温泉宿だらけ!

観光に来たお客さんもみんなお風呂に入ってくわけで。

ほとんど毎日、アカたつぷりの排水が出てる!

あるんだよ、ソーメンみたいなのがウゴメしてるドブ!

フツはバツチイだけけど、フー・ファイターズにとっては『養分』だね。

…あたしはヤダなあゝゝゝツ

「いけるぞ、魁。」

大量の養分が川からとめどなく送られるってんなら…

潜る必要もないかもしれない」

「助かる。手段選べないつつつてもな…」

ドブ川に潜るのはカンベンしてほしい」

「でも、どっちみち原材料『垢』のスーツだペエ」

「垢で出来た変身ヒーローかよ…攻めすぎじゃね?」

「『垢抜けない』ヒーローになりそーだな。」

まず、俺にヒーローは……」

ブツ!!

えっ、誰か吹いた？

…ちゅちー!?!

さっきののどかつちと入れ代わりになるみたいに、

ちゅちーが机に伏せて肩をふるわせた。

どゆこと？

「ちゅちゃん?」

『『垢』で出来てて、『垢抜けない』って……クツクツ

ちよつと、やめてちょうだい…クツ!

あなた、そんな冗談言う性格だったの？

ここはマジメな場なんだから、マジメにツ…くふふふツッ!」

アツハツハツハツハツハツ

もうこらえきれないって感じで自重投げ捨てて爆笑するちゅちー。

クチ半開きでポカーンとしてるタツキー。

のどかつちとあたしも同じよーなモンね。

「…思い出したペエ」

「ナンか知ってんのかペギタン?」

「チョット前だけど、

ちゆが寝つくまで思い出し笑いしてたことがあったペエ」

「何を…思い出してたの?」

「肉の芽がとれて『にくめない』ヤツになったポルナレフ:

というかジョセフのギャグだペエ」

「……………あー」

全員、察した。わかった。

そして今のも聞こえてみたい。

ちゆちーの笑いが一段ハゲシくなった。

「よーするに…笑いのツボ、メチャクチャ浅いラビ?」

「たぶん、ダジャレに弱いんだペエ」

「まあ…なんだ。コイツがそれで幸せなら。

俺はそれでいいや……」

ウン、幸せダネ! ヨロコンでくれてシアワセ!」

ジュースをズズスーツと飲みながら、死ぬほど投げやりなタツキーでした。

あたし? あたしは…試さずにはいられないっしょ。コンナの見せられたらさく。

「ちゅちー」

「…な、な、何かしら？ひなた」

「このイス、引いてもイーッスか？」

「……プッ！」

アハッハッハッハッハッハッハッハ

「そのー、ちゅちゃん？」

「の、のどかも？」

「あ、あの囲い、カツコイーよね！」

「プフッ!？」

アハ、アハ、アーツハッハハッハハ

「ウサギがサギに遭ったラビー！」

「そのサギ、サギ師だったペエー！」

「イサギよくねえーヤツだぜえー！」

ハヒ、ハヒ、ヒイイーッ　クククク

ハイ、ダジャレ大会になりました。

ちゅちー笑いっぱなし耐久レース！

選手五名、接戦となっております！

「あのよおー…アレ、何が楽しいの？」

「サツパリわかんねえーよ、あたし」

「俺もわからん。ラテ、わかる？」

「アン！」

「そ、それで。何の話をしてたかしら？」

「みんなフツ飛んじやったわ…」

「温泉の排水でフー・ファイターズの変身な。明日の朝にでもさっそく調べるよ。」

「商店街裏のドブ川でサンプルを取る。出来るかどうかはそれでわかると思う」

「ン、思い出した…そうね。それでいいと思うわ」

「ノリ悪いなあータツキー。入ってくりやよかったのに。」

「落ち着くの見計らってセキバライしながら話を戻してきた。」

「さっき、ああは言っただけ…」

「ウチの場合は自前の浄化槽でなるべくキレイにしてから放流してるからね。」

私が生まれるずっと前から動いてるヤツらしいけど……

ウチの近所じゃあ、期待するような養分はないかもしれないわね」

「ふーん、環境に配慮してんのな……結構なことだ」

「結構なことなのよ。この辺のホテルとか旅館は大体そうじゃあないかしら？」

むしろ、日帰り浴場の周りの方が狙い目かもね。

あそこは源泉かけ流しのあふれたやつがそのまま外に出てるはずよ。

あつ、古い方よ？ 脱衣所だけの方ね」

「その情報、助かる……すると、足湯もいけるか？」

「場所によると思うわ。駅前ならやれそうだけど、変身なんてしたら目立つわね」

ちゅちー、さすが旅館沢泉の看板娘さんだあ。

めつちや詳しい。やっぱり継ぐと思ってるのかなあ？

思ってるんだろーな……スゴいなあ。

あ、日帰り浴場はわかるよ？ 古い方は……最後に行ったのいつかなあー

オジイチャンオバアチャンたちダラケなんだよねー

「俺の話はこのくらいでいいか？ 次行こう、次」

「あ、ハーイ。あたし、いい？」

手を上げる。



まずあたしの提案から始まる予定だったんだよね、あたしの中では!

「明日、土曜だけどき。みんな空いてる?」

「わたしは大丈夫」

「問題ないわ」

「俺は無理だ。しなきやあmazui買い物がある」

みんなふたつ返事ってヤツ。

ただし、タツキーはソツコー断ってくれちった方だけど。

「買い物?何買うの?」

「服だよ!ダルイゼンとダーティ・ウォーター!」

あいつらのせいで普段着が全滅してる!

制服とジャージだけで暮らしてんだよ、今。

制服が無事なのは奇跡だったな…」

「あつ……」

そーだった。

ダルイゼン…つまり、あたしを助けてくれたときに着てた

トレーナーとGパンはズタボロだったし、

ダーティ・ウォーターのときは下水まみれでアウト!

着るモノないから病院用のパジャマに着替えてウチ帰ってたじゃん！  
てゆーか、あたしたちからしてジャージをおニューにしてるもん。

気に入ってたけど、アレを着続けるのはムリ！

「でも、そーゆーコトならむしろ好都合じゃん！

行こうよ、ゆめポート！」

「ん？ゆめポート？…お前」

「確認しなきゃあダメツしよ？」

DISCの『命令』がちやんと消えてんのか。

これからずつと避けるワケにはいかないし！

だいいち、あたしがめっちゃヤダ！」

覚えてる？ホワイトスネイクがあたしの頭に差してつたヤツ！

『ゆめポートに来たとき、シヨツピングモールを破壊する』

っていう命令DISC！

ゆめポートでお買い物できないとか、ヒドイと思わない？

こんなの、終わっててもらわなきゃあ困るんだよね。

だから、みんながいる中で確認するよ！

みんないれば、最悪あたしを止めてくれるし。

「……思った以上にマトモな提案で驚いてる」

「ひどッ!」

「そういうことなら賛成するよ。服もそこで買えるしな」

「ン、良き良き。のどかつちとちゅちーもオツケー?」

「うん。楽しみだなあ〜」

「わかつたわ。やるべきことをやったら、羽根を伸ばしましょう?」

「まず、やることを詰める。話はそれからだろうよ」

「じゃあ、『やり方』はわたしが考えてみるね。」

「こーいうのも訓練かな、って」

「いいわね。今回はのどかの番よ」

のどかつちが考え始める。

最低でも、あたしにシヨツピングモールを壊させちやあいけない。

それだけを考えるなら太陽のDISCを取り外すだけで十分だけど、

これだと『命令』が消えてるのか確認するには不十分。

現実的に壊せる力をスタンドでわざわざ与えてるからには、

それが『命令』発動のカギになってる可能性がある。

となると、同じ意味でプリキュアも危険だ。

そこでニヤトランがツツコンだ。

「待てよのどか。それだけはねえーぜ！」

ヒーリング・アニマルと心をひとつにしねーと

プリキュアにはなれねえーんだぜ！

操られて変身できるもんかよ！」

「……ゆめポートにビョーゲンズが出たら？」

変身した直後に『命令』が発動したら？

ニヤトランは止められるかな？」

「うぐツ…無理やり変身を解くのも出来るけどよ」

「状況を理解するまでに、どれだけ建物がブツ壊されるだろうな？」

リスキーだぜ…俺は、花寺の言うとおりでと思う」

「…違いねえ」

「まだあるぜ。『心をひとつにしないと』変身できないってんなら、だからこそヤバイ。

お前もDISSCの支配下になってる可能性があるだろ…ニヤトラン」

「ヘリクツな気がすつけど…ありえなくもねえーか」

のどかつちはそのまま続ける。

だから、やるべきことは、プリキュアに変身できない状態を保ったまま、

太陽のDISCを外してゆめポートに行くこと。

そして、ゆめポートについたら、タツキーに立ち会ってもらって、そこでDISCを入れ直す。

『命令』を即座に止められる力を持ったスタンド使いはタツキーだけだから。

『命令』が発動しちやったら、フー・ファイターズで肺の空気を追い出して酸欠で気絶。うええくくくヤダなああーッ、ヤリタクない!

『命令』が…発動しなかつたら。どう判断するの?」

「安全。そう思っていると思うな。」

『すぐ止められるから不可能だ』っていう判断で、

『命令』が発動しない線もあるけど……

それならそれで、ひなたちゃんのをそばにずっといるだけだよ」

「のどかつち、やつさしー、ウレシーー!」

背中から抱きついて頬ズリしちゃう!

感じるんだよね。昨日の夢のアレで、あたしたちの距離が一段近くなったの。

あたしのこと、本気で思っ止めてくれた…のどかつち、ちゅちー。

あのとき、止めに来たふたりに、あたしはムカついたのに。

ふたりにもそれはわかっただろうのに、それでも止めてくれた。

あたしが、進んで人をキズつけるところを見たくないから、つて。後から思い出すたび、あつたかくなる……!

こーなること見越してやったってゆるんなら、仕事人だよねえーポルポル。…アレ?なんかチガウ?

あ、ポルポルつてのは、ポルナレフのこと!いちおー念のため。

「俺も、それでいいと思う」

また落ち着くのを待ってたタツキーが、ためらい気味に言った。「ただし、立ち会うのは俺じゃあない。

俺である必要がない……

なら、俺がいることは避けるべきだ」

「…だとして、じゃあフー・ファイターズを使うのは?

消去法で私かしら?」

「ああ、頼みたい」

F・FのDISCはこの場のみんなに適合するね。

それを、ちゅちーに使ってほしいみたい。

……ン?

「タツキーさ、もしかして。来ないって言ってる?」

「いや、行くよ。ただ、な……」

世間一般的に、俺の評判は『悪人』で『クソ野郎』なんだよ。

お前もよく知ってるだろ、平光。しかも、事実だ……

だから、近くにいるだけでお前らも俺と一緒にされる。絶対に。

それが嫌なんだよ……悪いか？」

「……ふーん」

つまり、いっしょに動きたくない、と。

うーんメンドクサイ。

アンタさあー、いっつもいっつもイヤな未来ばっか考えてんじやん。

だから死にたくなんてなるんじやあないの？

でもまた一方で、アンタなりのやさしさだっつてわかる部分もあつて。

そう思ったら、ムゲにするのもなあー。

「んじやさ、『一個』だけ買い物付き合つてよ。

他は口出さないからさあー」

「……それで、いいのなら。」

エラソーなこと言ってるのはわかってる……悪い」

「いーつて」「トよ」

アレツ？ワリと素直？ま、いいや。

ドラゴンボールもそーだけど、知らないってんなら教えてあげよう。

楽しかったら、死のうだなんてきつと思わない。

命の恩人が自殺願望持ちとか、あんまりじゃん！

…でも、元いじめっ子かあ。それもシャレにならないやつ。

あたしには…わかんないなあ……ムカつくヤツは、そりやーいるけどさあー。

ホント、メンドくさいねアンタ。ダイジョブ、見捨てないよ！

「それで、鳴滝くんはどうするの？」

また、スタンドをわたしたちに預けることになるけど…

危ない目にあつたりしない？」

そう聞くのどかっちの表情はかなりマジメだった。

そーいやー、一回ダメされた後なんだよね、のどかっち。

「少なくとも、スタンド使いに襲われる可能性はほとんどゼロだな。

ゆめポート行きバス停で、30分待つてから追っかけるだけだからな。

開けた場所で、人も車もメチャクチャ通る。おおっぴらに仕掛けるのはかなり厳しい

ぞ。

ハングドマン  
吊られた男みたいなのに狙われたらヤバイけど、そこまで言ったら何もできねーし」



「ビョーゲンズは?前も、一人になったとたんやられたんでしょ?」

「あいつらも、ある程度は人目を気にしてる。」

でなけりや、すでに通学路の俺を平然と襲ってるはずだ。

俺んちへの襲撃も、備えてはきたが…今のところ、ないしな。

あのシンドイーネ以外は……

これは平光にも同じことが言える!」

つい忘れそーになるけど、あたしもタツキーと同じ立場なんだよね。

ヘンな能力を持った人間としてビョーゲンズに狙われてるって。

あたしはプリキュアになったから、自分で自分を守るけどさ。

でも確かに通学路とか寝てる間を狙われたら、めっちゃヤバイ。

…いやいやいや、ソレを毎日毎日やられたら生活できねーじゃん!

出来るなら、やらない理由はない…のに、されてないなら、そーゆーコトなんだ。

用心しとく必要はあるかー、くらいなワケね!

「……うん。納得できたよ。」

鳴滝くんの言葉に納得できた。信じるよ!」

のどかつちも、ちよつと考えてから首を深くタテにふった。

それからニツコリ笑った。

「それと、今回は俺一人にはならない。

平光がプリキュアになれない状態を作るんだったら、

ニヤトランも一緒に残ればいいんだからな」

「おー、そつか。そだな」

ニヤトランもアツサリ了解。

うん、ニヤトランもタツキーのことキライじゃないみたいだし。

世話が焼けるぜ、だって！

それに、もしかしたらプリキュアになるのかも、ってチョット思ってた、って。

誰にもキュンと来なかつたら、コイツを『育てる』しかないのかもな、って。

ま、ナイショだけど！みんなにはダメツてろよって言われたし！

「話はまとまったわね。じゃあ、後は明日のお楽しみってことで！

ここからは訓練の時間よ。昨日の反省から改めて方針を立てましょう？」

ちゅちーが仕切りに入って、この話もおしまい。

今までのパターンからして、なんかある気もするけど！

せつかく遊びに行くんなら、楽しみにしなくっちゃソンソン！

## ゆめポートに遊びに行こう!—その2

目が覚めたら、夢の中だった。

何を言ってるんだかわからないと思うが、とにかくその通りだった。

花寺がいる。制服じゃあない、普段着だ。

初遭遇の時に来たスカートの赤だった。

彼女はこつちを指さして、すつとんきような声を上げた。

「寝てた!」

「……ハア?」

わからん。何を言っているんだ?

「待ち合わせの時間に来てないから、

まさかと思ってDEATH13使ったの」

「……………アツ!?!」

し、しまった。

ここは『夢』だ!

昨日の『夢』で約束してただろ!

今日、土曜日！待ち合わせは12時！

「い……今何時？」

「12時10分。でもよかった。無事だったね」

「すまん…マジにすまん。すぐに起きねーと。」

とはいっても、どうすれば…：自分じゃあ起きられないぞ」

「今、ひなたちゃんが怒って走ってったよ。」

寝てたって伝えたらすぐに…

そっちについたら、絶対起きるよ」

「…うへエ」

「あと、ちゅちちゃんが電話かけてる。」

音に気づければ起きると思うけど…」

「望み薄だな。たぶん気づかない」

F・Fも出てきた。

こいつ自身はただのスタンドだから睡眠不要なんだが。

『夢』についてくる都合上、俺についてくる形で眠ってる。

要するに、こいつも寝てる。俺を起こすなんてできない。

「疲れてたの？わたしも最近疲れ気味だけど」

「変身の実験で遅くまで色々やってたからな。

歩いたり走ったりをな…ま、無理もないね」

「そっか。待ち合わせが決まったのも昨日の夢だもんね…

用意なんか、できないよね…

わたしたちは待つてるから、ひなたちゃんと一緒に来てね」

理解を示してくれたのは助かった。

沢泉もたぶん、同じ判断をしてくれるだろ。

面白い顔はしないにせよ。ただ、願わくば…

「平光に伝わってる? 今の話…」

「伝えてないよ。」

電話したら足止まっちゃうから」

「……観念するか」

「しようがないよね」

理解は示しても、同情するつもりはないらしい。

そっけない花寺だった。

ちよつとして、俺は『夢』から叩き出された。

「起きろー……ツツツツ!!!」

『夢』の意識が一瞬で現実に切り替わる。

コマ落として目の前の花寺が自室の天井に変わり、  
テレポートでもさせられた気分だった。

ドアがブツ叩かれている！

ドン ドツ ドン！

「スグに起きろー！ー！ーッ

起きて出てこオーいッ!!」

「で、出てくー！出てくからサワグなー！

「1分以内！」

「できねエエーよ!?!」

足動かねーんだもん！10分くれーッ」

「…信じらんない！寝坊でスツポカすとか！」

幸い、その後はフツに待っててくれた。

今ある中で唯一マトモな外出に耐えうる服…

つまり制服に着替えて急ぎ飛び出す。

あとは、財布…全財産が入った…と、スマホ。

当然、松葉杖もすでにある。これがなきやあ歩けん！

「マジにスミマセンでした」

「ホントだよ、もーッ！」

……つて、なんか木くずクサクくない？部屋……」

「なんでもない。」

…アレだ。リフォーム直後に入ったからな、ここ！

新しいんだよ木材が…急ごう」

「ふーん？」

「のどかどちゆが待つてんぜ。」

なるべく急いでこーぜ。ひなた、魁よおー」

ニヤトランの急かしに便乗して出発すると、

憤慨した平光がすぐに追い越してきた。

当然、私服だな。

俺とは違い、奇跡的に破れずに済んだジャンパーと、シャツにスカートだ。

そのぶん身体がこっぴどくやられたわけだがな。

「アンタ、こーゆー約束事はシツカリしてるヤツだつて

思ってたんだケド？ちよつと見損なつたかも！」

「そう言つてやるなよ、ひなた。」

遅くまで練習してただげ、こいつ…変身の」

俺の喉からF・Fがフォローに入る。

腹話術状態だ。傍から見たら独り言に等しいのでは？

「あッ、そっか。」

そういや、色々アツクカタツてたじゃん昨日！

遅くまで変身の練習ガンバって、

タツキー、エライ！スゴイ！」

「…遅くまでヒーローゴッコやってる痛いヤツ。

って言われてる気分になってきたんだが」

「当たらずも遠からずじゃあないの？」

そして、この平光の悪意ゼロ発言。

理解してくれたのはいいが、俺のダメージはさらに深まった。

歯にキヌ着せてくれよ、F・F…

「ゴッコじゃないじゃん、マジメじゃん。」

タツキーはマジメに変身してるんでしょ？

変身できる場所とか考えてたじゃん、昨日だってさあーッ

日帰り浴場で試してみんだよね？変身」



「変身変身連呼すんのやめような?頼むから!」

わかんねーだろ、誰の目があるか!」

言われてから、やっちった、とばかりに目をそらして

自身の唇をペロリとナメる平光。ごまかされんからな俺は。

ま、強くは言うまい。そもそもこの状況は俺が悪いんだからな。

少し前を歩く平光は、首だけをこっちに向けていた。

「ゴメン、秘密だったね」

「お前のも秘密だろ、平光。」

どっちもバレるわけにはいかない。理由はわかるよな?」

「うん。巻き込まれる人が増えちゃうから。」

シヤベツちやいそうだったら怒ってくんない?

ホラ、あたしウツカリ多いからさあー」

「できる限り、な?」

花寺と沢泉もそうだけど、いつでも止めてやれるワケじゃあないからな。

自分でシツカリしろよ?とくに:」

この先を言うのはためらった。

だけど、最悪を考えるとな:

「とくに？」

「とくに…お前の兄貴、だ！」

ちよつとしたことで異変に気付いちまうかも知れねーんだぞ」

言われた平光の瞳がわずかに陰った。

俺にはない弱点だな。突かれなくなかったよな。

「…それはヤダ」

「姉貴もいるんだったな。昨日のジューズの…」

その、なんだ。大事なら、がんばれ」

「うん…」

平光が前を見た。ただ歩くだけになる。

大概、シミツタレたクチしか聞けない男だよな、俺。

お前みたいにはなれない。違いすぎる。

そんな素質があつたとしても、とうの昔に死んでいる。

俺自身が殺したんだからな。間違いない。

「お前の兄貴さ…いいよな」

「…いいよっしょっしょ」

あたしの自慢のお兄だよ」

しばらく沈黙が続いたが、

気まずくなる前に、平光がまたこつちを見た。

「あのさ。聞いてもいいのかな、コレ……」

「…言ってみ」

「『通し字』って何？」

…なんでそんな面倒くさいことに限って覚えてるんだよ、お前。

恨むぜ、ダーティ・ウオーター。

「お前さ、織田信長、知ってる？」

「知ってるよ！サスガにバカにすぎ！」

アレでしょ？ウツケ！」

「……信長の親父の名前は信秀のふひでだ。

で、弟の名前は信勝のふかつで…息子の名前は信忠のふただ。共通点は？」

「ノブ！」

「そう、ノブだな。一族で名前に同じ漢字を受け継ぎ続けるのが通し字とおしじだ」

「…タツキーは？」

「『景かけ』な。親父が景勝かけかつで、上の兄が景継かけつぐ、下の兄が景弼かけすけ。」

俺は魁かい。俺だけ『景』がない。それだけ」

「それってさ……やっぱいいや。ありがとね」

「ま……あれだ。戦国武将みたいな名前の一族なんだよ」

質問を自身で打ち切って、それ以上は聞いてこなかった平光。

意外だったか……助かったな。

心中でホツと息をついていると、平光がまた別の顔を浮かべていた。

……百面相。落着きがないヤツ。

「あ、もひとつ。『垢抜けない』ってさ、どーゆー意味？」

「ん？……ああ。」

『田舎くさい』とか『なんとなくダサイ』とか、そういう意味だな」

「へー。んじやあさあータツキー、『垢抜けない』んだね」

「素直にダサイと言え！言うんなら！」

遠まわしがかえってムカつくぞ、それ」

「遠まわしなコトバ使ってるのタツキーじゃん」

「……あいつらが『垢』『垢』言うから、つい」

「アレで笑うのちゆちーだけだよ。たぶん」

「安心しろ。笑かすつもりねーから」

うん。やっぱりお前みたいにはなれない。

クツソくだらないバカ話を繰り返しているうちに、  
やがて大通りに出た。向こう側に見えた花寺と沢泉に、おーい!と駆け寄っていく平  
光。

当たり前だが、沢泉も私服な。肩を出した上着にロングスカート。

「お待たせー」

「ひなたちゃん、鳴滝くんから事情は聞いた?」

「聞いたよ。忙しかったんでしょ昨日」

「大丈夫そうね。普通に話しながら来てたし…」

行きましょう。向こうにつく頃には1時よ」

「行く行こー、オナカすいちゃった!」

…あ、恐れてた。パターンか?

黙ってても沢泉が言うけど…言うべきか?

「じゃ、ちゆちー。DISCとって」

「えっ?」

そうね。私も取る練習しておかないとね…

ええと…こうかしら?」

よかった…忘れていなかった。

さすがにこれは忘れなかった!

ニンマリ笑って進み出る平光の額に、

沢泉が探るように手を這わせる。

まわりに人がいないのは確認済みだ。

そりゃあちよつとはいるが：こつちを見るヤツはいない。

「あつた。それじゃあ、預かるわね」

「お願い、ちゆちー」

沢泉の手にあるのは太陽のDISCサンだな、当然。

取り出す意志があれば自分で取れるし、

取り出させる意志があれば人に取らせることもできる。

気絶してる場合は好き勝手に取れちまうようだな…

こういう性質も、ちゃんと押さえておかないとな。

さて、俺もだ。

「じゃ、F・F。また後でな」

「うん。30分後にキツチリ来な」

声帯を引っ込めて待機状態になったのを確認。

自分の手でDISCを取り出すと、

それを見ていた花寺が寄ってきた。

…手渡す。

「借りるね。借りるだけだよ？」

取りに来てね…約束」

あの裏切りを水に流す機会ってことらしい。

甘いヤツとも思えるが…そんなことは決してない。

次はもう許さない。俺にはそう言っているように見えた。

……………怖い。

なんでだ。なんでそんなフウに思うんだ？

こいつはただ笑顔で見守ってくれてるだけで！

そんなことはとくにわかってる…

おとといの沢泉みたいに怒りを向けてきてるわけでもないのに、

どうして、こども隔りを感じる？

わからないのは俺自身だった。

「と、取りに行くよ。すぐに！」

無きやあ死にかねないんだからな。

…約束します。取りに行きます……………」

「……。うん……」

バスが来た。

DISCを渡したのなら、追うのは30分後だ。

気持ちはどうあれ、もう裏切るつもりなんかない。最初からだ。

沢泉と平光が不審な顔をしまってる。

何食わぬ顔で見送ろう。ややこしいのはごめんだ。

「じゃあ、沢泉……頼むな。F・Fのこと」

「頼まれたわ」

三人を見送る。

30分後まで乗りもしないのにベンチに座るわけにはいかない。

少し離れた位置の、石の花壇に腰掛けた。

チューリップの林の中にニャトランが来る。

「……で。昨日何やってたんだ？ 実際よおー」

「なんの話？」

「木くずクサイ部屋のワケだよ！」

話せよ。オレはおめーを信じてんだぜ。

おめーもおレを信じろってんだ」



これでNOとか言ったら関係はご破算だった。

なかなかズルいやつ…単に、俺の扱い方を覚えられたのかな？

荒っぽい口調のわりに、じつとそういうの観察してるヤツなんだよな。

思えば、ずいぶんと懐に入られてる。

経緯も含めて、俺に一番近い存在かもしれないヤツだった。ペギタンもほぼ同率な。

もつとも…二匹?…ふたりとも正式なパートナーを得てからは少し疎遠気味ではある。

「…松葉杖。自作してた」

「木彫りでかよ? 気合入ってんなあー」

「戦いになったら折れる。そのたび買ってたら金がいくらあつても足りないんでな…」

あ、スタンド使って作ってるから、多少はラクしてるぞ。多少は」

「カネの問題か…切実だなあー。ひなたも小遣いでアタマ抱えてんぜ」

「平光も? 何に困ってるっていうんだ?」

「新しい服とかアクセとか小物だとか欲しーのにカネ足んねーんだとよ」

「聞いて損したんだが」

「買ってやったら? ヨロコブぜ!」

「断る。俺にもヤツにも、そんな筋合いはない。

そもそも、こちらメシ食うだけで手一杯なんだよ」

その金すらも今日なくなるがな！

衣食住とは言うが、今回は衣と食が金銭的に両立不能！

衣がなけりやあ社会生活は不可能だから、こつちが優先だ。

当然だが飢え死になんかするつもりはない。我に秘策あり、だ。

最悪、自販機下の小銭をフー・ファイターズで漁りまわる…が、

こいつは本当の本当に最後の手段になる。フツに軽犯罪だし。

先週の俺の望み通り、死んでたら悩まずに済んだろうがな、こんなこと。

今は違うんだから、暗い明日を迎え撃たなくつちやあな。

「そーだな。おめー自炊だもんな。

あの時はゴチソーサマだぜ」

「このオカズドロボーネコめ！」

「オイオイ、まー、そー言うなって。次は何か持つてくからよ」

「…ちよつと期待しとく…:…:と言いたい、やめとけ。やめてくれ」

カツオブシ持つてこい。アレと醤油でメシは成立する。

いや、てめーで食つちまうかネコだと。

というか、どこから持ってくる気だよ。平光家しかないよな？

イヤだぞ、空き巣の罪カブるの。

しゃべっている間に返事が180度回転していた。

「とにかく、松葉杖の件：みんなには黙っててくれよ。」

放課後に材木切り出して松葉杖作ってくれとか、頼めるわけないだろ」

「どーにかできるアテあんの？相談した方が早道かも知れねーぜ？」

「F・Fと相談しながら進めてる。まずは俺とF・Fだけでやってみるよ」

「そーいうことならわかったぜ。F・Fがバラしたときはあきらめろよ？」

「今のところ、黙っててくれるつもりみたいだな…」

そろそろ、あいつらのバスもゆめポートに到着しているな。

今頃、何しやべってんだろーな、F・F……

## ゆめポートに遊びに行こう！―その3

「ちゅちゃん、準備はいい？」

「ひなたの体内のフー・ファイターズは…動くわ。

いつでもオーケーよ」

私、沢泉ちゅは受け取った直後、すでにDISCは入れている。

バスの中で操作確認もしたから大丈夫よね。

F・F本人からもコッソリとアドバイスもらってたし。

存在も感じているわ。ひなたの体内に何ヶ所かまとまって固まった『コロニー』がある。

のどかも同じね。鳴滝くんに輸血したときに血の代わりをしたやつが、同じようにある。

もう、ふたりとも何とも思わないのかしらね。

その気になりさえすれば、何もできずに操り人形よ？

……まあ、わかっているのよ。私も。

今、あいつが私達を裏切って生きていけないはずがないってこと。

逆に私達も、同じように試されているわね。

「のどかつち、お願い」

「うん」

ゆめポートのバス停からだいぶ距離をとった私達は、

絶対に確かめるべき実験を、今、開始した。

私は、さらに少し離れてプリキュアに変身する。

これは私の提案ね。最初から『命令』を邪魔するとわかっている相手が

すぐそばにいるのなら、真つ先に排除される可能性がある。

そうなったら、ひなたは友達殺しになってしまうわ。

のどかも当然、同じこと。

ひなたの額にDISCを差し込んだ瞬間に飛びのいて、

プリキュアに変身して身構えたのは、のどかよ。

立ち尽くすひなたの周辺に何も起こらず、1秒、2秒、3秒……

「…やったーダイジョブツぽい！」

はしやぐひなたの背後に回り込むように近づいたグレースは、

額にサツと手を当て、DISCを引っこ抜く。

さすが、慣れてるだけに早いわね。

「うッひゃあ！速すぎて目で追っかけられないじゃん。

やっぱスゴイよね、プリキュアってきあー」

「抵抗、なし……」

もし、『判断して発動する』としても、

それはわたしたちを想定してない、ってこと！」

「そして、ひなたの判断で『可能になり次第』っていうのも無いわ。

もしそうなら、自分の足で無理にでもここに来て破壊してるはず。

昨日の時点ですでに可能性は潰れてるわね」

「えっとー、ツマリ？」

私とのどかは、そろって変身を解いた。

手にあるDISCをまたひなたの額に差し込みながら、

のどかは柔らかに微笑んだ。

「ハイ、もう大丈夫だよ。

お変わりありませんか？ひなたちゃん」

「……やッ……ヤッタアアア……ッッッ!!」

「買い物できるぞー……ッ、できるぞー……ッッッ!!」

「はしやぎすぎよ、ひなた！」

「ちょっと人目を気にしてほしいわ」

そうは言いつつ、笑っちゃう私がいるわね。

ひなたはこういう子なのよ。

ちよつとどうかと思うトコロも事実だけどね…

そのくらいなら、私とのどかが補うわ。

鳴滝くんもそうかしら?ここにいたら文句タレてるでしょうね、ひなたに。

「んじゃ、後はニヤトランとタツキー待ちだね。

オシャベリしてる間に来るっしょ」

「それなんだがな。

今ここで話しておきたいことがある!」

ひなたのノンキな声に、私の喉の奥が返事をした。

…大丈夫、わかっているわ! F・Fの声帯よ。

わかっけていても驚くわね…

「F・F…なにかあったの?」

居住まいを正して、のどかは真剣な目を向けてくる。

私の中にあるF・Fにね。

「ラビリンとペギタンも混じってほしい。

場合によっては命がヤバイ話なんだ……魁のなのどかの雰囲気が変わった。

『怒気』って言うのかしら？

一瞬だけメラッと立ち上った何かが見えたわ。

口調も静かに激しくなっていく。

「……それって、さっきの……」

後ろめたい顔と、関係あるの？

また何か、危ないことがあるのに隠してるの？」

「あいつはあんたを裏切っちゃあいないよ、のどか。

後ろめたいのは内心の問題で、あいつは今

生きるために行動している……それは保証する」

「……。じゃあ、何？ヤバイ話って……」

F・Fの説得で沈静化したのどか。安心したのは私もよ。

あれだけ。あれだけの骨を折って助けたのに、

それをすぐに平然と台無しにするようなことを？

だったら、ツバを吐きかけられるのと何も変わらないものね。

気を取り直して、F・Fは続ける。



「あいつの一日の摂取カロリーだ…」

基礎代謝量より少し多いくらいしかない」

「基礎代謝…：それなら知ってる。」

人間が、ただ生きてるだけで必要な一日のカロリー量、だっけ」

あら、ひなたも知っていたわ。それもそうか。

この中で、一番普通の女の子してる子だもの。

スイーツが好きなら、体重の悩みは尽きないわ。

それはともかく。

「そのカロリーが…：足りてないっていうのね？」

一日の運動量に対して」

「そういうこと。あんたらのような育ち盛りの子供がとるべき量には到底足りない。

ましてや、ガチのスタンドバトルの中ではね…」

「でも、なんで？ダイエツト？」

タツキー太ってないじゃん！むしろチョットコケ気味」

「ド直球で言う。単純に金がない。」

これは『肉体の記憶』を読んだから確かだ。

宿主の命に係わることだからね。遠慮はしなかったわ。

そして間もなく、その金も尽きる！」

お金。すぐに理解したわ。

あいつは、ろくでなしの家族に……

おそらくは、家族とは名ばかりのものに、追放されてここに来た。

「アレツ？じゃあさ、服買ってる場合なの？タツキーさあ……」

「服が全滅してる。そして服はファー・ファイターズで代わりを作るのは難しい。

だから魁は服を買って、メシを諦めることにした」

「……そツ……そ、つか。暮らせないもんね、服ナシじゃあ」

ひなたが気にすることも、もつともよね。

でも、F・Fの回答にはうなずくしかないわ。

着ぐるみめいたスーツですら維持に多量の水がいるのに、

それが薄手の生地なんかになっちゃったら……再現できても、保てない。

「F・F。鳴滝くん聞いたとして、ね？」

話してくれるのかな？事情……」

「話さないだろうね。

あいつはあんたらに迷惑をかけるのを嫌ってるし、

『かわいいそう』と思われたらもつとみじめになるだけだからな」

「……………。わかった。聞かない」

うつむいたのどかは、顔を上げると決断した。

「それがあんたの選択だな。のどか。」

あたしは最悪、全部を吐くつもりで来た」

「わたしね、すでに『かわいそう』って思っちゃってる。

それが鳴滝くんを傷つけるって、もう知ってるんだから…

ダーティ・ウォーターが言ってたんだ。

俺を踏み台にして、弱ってることに気づきもしない、って。

だからね…待つよ。大丈夫になるまで」

「…………フウウウウ、気が長いね。あんたも」

「ただし、命が危険にならない間だけ！

危険になったらお手当てするよ？仲間だもん」

「ありがとよ。それを期待してたんだ」

F・Fの声は私の中からしてるから、

表情なんかわかりようがないんだけど。

自然と笑顔が頭に浮かぶわね。エートロさんの。

あのヒトも誘拐犯だったつけ…なんとなくでやっちゃった、っていう。

わからないわね、人間って。

当然、エートロさんとF・Fは別人だから、同じ顔でも顔つきがまるで別人だけだね。

「それで…ボクたちは何をすればいいペエ？」

「あんたらが介入する口実がほしい！」

…いや、実際のところ、ヤバイことはあいつ自身が一番わかっているのよ。

手持ちの食糧がなくなったあたりで、フォー・ファイターズを使って

何かをやるつもりみたいなんだけど……」

「それって、犯罪とかじゃあないラビ？」

「そうだとしても最後の手段だろうね、ラビリン。」

さつきも言ったが、あいつはあんたらに迷惑をかけたくないんだ。

あんたらに飛び火するようなことは意地でも避けると思う」

「…ラビ。わかったラビ。信じるラビ」

「うん。ちつと横にそれたけど。」

重要なのはあんたよ、ペギタン。それとニヤトランだ」

「ペエ？」

F・Fが説明していく。

今の鳴滝くんにとって、一番素直におしゃべりできるのはペギタンとニャトラン。

今までの経緯で信頼したのもあるし、何より人間関係のしがらみがない。

もともとヒーリング・ガーデンの住人で、プリキユア同士としか関係ないんだから当然ね。

さらに。より重要なのが、性別、男ということ。

夕飯の後にいきなり訪ねてきても、

多少のおしゃべりくらいなら受け入れるだろうってF・Fは踏んだ。

「つまり…ボクとニャトランで、しょっちゅう遊びに行くってコトだペエ?」

「最悪、入れなくたって構わない。あたしと連絡が取れりゃあいんだ…」

そこで、まともにメシが食べていないと判断した時点で…：あんたらが動く!」  
「動くのはいいけどさ…どうすんの?」

あたしもあんましお金ないよ。おやつラーメンくらいならなんとかなるケド」  
切実な問題がひなたから飛んできたわね。

ひなたが言わなければ私が言ったし、私が言わなければのどかが言ったでしょうね。

「私が…、一日三個のおやつラーメンだけで。

ハイジャンプの練習をこなせるかって言われたら…無理よ。

そんな状態で戦いなんてやったら、途中で倒れかねないわ」

「それに、長続きしない。わたしたち中学生が自由にできるお金で、一人一人を支えきるなんて……」

やめよう。これはわたしたちみんなが不幸になる道だよ」

悩んで頭をひねったところで、なんの答えも出やしないわ。

子供の無力がそこにある。だから大人が必要なのに、

まだ見たことのない、見たくもないあつちの大人はまるで当てにならない。できない。

恐ろしいわ。しかるべき大人に身も心も支えてもらえない子供なんて。

代わりをやるのが、なぜか私達。どういうことなのよ。でも、四の五の言わないわ。

「誰か、大人を引き込むしかないわね」

私がやつと絞り出した言葉は結局それ。

ジョセフさんにも指摘されていたもの。手に負えないって。

提案できる候補は一人。鳴滝くんの足を見てるお医者さん。

具合をいつも見てるんだから、栄養不足を家族に伝えても不自然じゃあない。

離れて暮らす子供が危機に陥っている。助けないっていうのは道義上、ないわ。

「……で、そこでウダウダ言うんなら、子供を捨てたも同じだわ。警察よ」

「おー、良さそーじゃん。ちゅちゅー」

警察ケーサーツつてのが特にいい……いーかげんムカツイてんだよ、あたし」

「この状態まで持ち込んだなら、たぶん『勝てる』わ。」

子供を捨てて裁判騒ぎになるなんて、商売人として致命的のはずよ。

おぼあちゃんも言っていたもの。信用を失った旅館はおしまいだって。

大事おおごとにするくらいなら、ちよつと多めのお金を振り込むようにして決着させる……と思うの。

それで黙っているなら安いもの。そう判断すると思うわ」

「そうなれば目的達成、だよね」

付け足してうなずいてくれるのどか。

嬉しいけど……なんで、こんな生々しいこと考えなくつちやあいけないの？

場違いに巨大な問題を抱えて私達の前に現れたあいつのせいよね。

そして、捨てられない。DISCとプリキユアで結ばれた運命共同体なもの。

いいえ。それ以前に。自力で立つことも難しい人間を私は見捨てるかしら？

…NO、よ！私の手が届くのなら！私は、そういう人間のつもりだわ！

ハア……頭痛いわ。

「そうなれば、ね……」

話は一旦終わりかな、と思っていたのだけれど。

F・Fが、不穏な口調で切り出した。

「ひとつだけ言わせろ。その時、相手から見た魁を考えるんだ……あたしにはこう見えるぜ。」

『見逃してやった小僧が生意気にもカネをタカツてきた』つてな。

元々、死ぬのを待ってた小僧に対して……相手は、どうすると思う?」

信じられないことを言ってきたわね。

のどかも、ひなたも口ごもった。もちろん、私もよ。

ラビリンも、ペギタンも……ラテまで、凍ったみたいに立ち尽くしていたわ。

「あたしの、最悪の予想を言う。ホントに最悪の場合だぞ?」

まず、話し合いのためと称して実家に呼びつける。

来ないのなら、『助けを求めてきたのに来なかった』で黙殺だな……

で、来たのなら……魁は、実家までたどりつけない。途中で『事故死』するからな。

あとはどうとでも片付けちまえばいい……死人に口なし、つてやつ」

事故死。白々しい単語ねえ。

「そんなの……ヤクザじゃない……」

「わかつてる限りでステにロクデナシなんだ。」

ヤクザとつるんでるのも想定した方がいい……あたしが思うにね」



もう、考えうる限り全ての悪徳が集まりつつある勢いね。

想定するのはわかったけど、こう…現実味がないわ。

でも、私は知っている。『みかじめ料』を求めてやってくるヤクザは現実だって。

おばあちゃんから聞いている。みんなで力を合わせて、すこやか市から叩き出したんだって。

この町は、昔から結束が強い。

「鳴滝くんが表に出ちゃあいけない。そう言ってるって思っている?」

「ああ。一見関係のない第三者からやりたい。

できれば、このすこやか市で社会的な信用を得ている大人を間に立てたいな…

道理さえ通っていれば、妙なことはされないとと思う。危害を加えるメリットがないからね」

…気を取り直したのどかが、F・Fに確認する。

「一見関係のない第三者。最初に出た候補は、やっぱりというか、私のおばあちゃんだった。

決して小さくはない、古くからある旅館の主よ。町の顔の一人だって、私も思ってる。

でも、駄目ね。おばあちゃんは、本当に何ひとつ関わりがないわ。鳴滝くんと。

せいぜい先週、お風呂に入りに来たときにすれ違っただくらいじゃあないかしら?」

理由がなさすぎて必然性ゼロよ。

それしか方法がないっていうのなら、最悪拝み倒すけどね、私が。

「ん、ンーーーーーッ！」

「ひなた？」

唐突に背伸びしながらうなり声を上げ始めるひなた。

手とか背中とか固まってたみたい、左右に体をひねってる。

それが終わると、目つきをキリッとさせて肩を叩いてきた。私と、のどかの。

「ヒートアップしすぎー！いったん離れよ！」

アソビに来たんだよあたしたち！」

「そ、そうなの？」

DISCの命令が解けてるか確認しに来たんじゃあなかったの？

っていうのは、突っ込むだけ野暮ね。もう。

「そうだね。鳴滝くんがうまく乗り切ってくれば、必要のない話し合いだもんね」

「…そうね。DISCの命令は解けていたわ。遊びましょう？」

のどかが乗ったのに、私も乗った。

額にシワ寄せて腕組んでニラみ合ってもダメよね！

「それでいいぜ。あたし抜きでも話し合えるトコまで進んでたしね。」

さて、ボチボチ見えるだろ！あたしの本体の松葉杖がね…」

「…あ、来たラビ」

「後ろの方に乗ってるペエ」

みんなで戻ると、止まったバスが乗客を吐き出し始めていた。

その最後あたりで、松葉杖がスツと出てきた。

…それとナス頭。

## ゆめポートに遊びに行こう！―その4

大変だった。

肉体的にじゃあない。ちよつと混んではいえ、俺が座る余裕だつてあつたしな。それでも十分程度の旅路が体感5倍に引き伸ばされた理由は、ずばりニヤトランだ。何が言いたいのかつて？

興味持たれたんだよチビっ子に！

バスの中ではヌイグルミのマネさせて抱えてたから、視線が痛いなの……

そして、近寄つてきてサワろーとしたチビっ子から割と必死で防衛して今に至る。

サワんな、ヒトにアゲるモンだぞコレは！

そう言つても引き下がってくれない物分かりの悪いチビっ子は退かず、

攻防は親御さんの参戦まで続く羽目になった。

そつちにネダりなさい、オレなんかじゃあなくつて！

謝られたんで、なんか買つてあげて、とだけ返しといた。

「あんがとね」

で、今ようやく渡せたわけだな。本来の持ち主に。

人目があるから、ヌイグルミのマネさせたままだな。

「おかえりー、ニャトラン」

「ヌイグルミの名前を呼ぶな、ヒト前で!」

「イイじゃん、ヌイグルミはメデるモンっしょ?」

ウリ、ウリウリ…カワイイ、あつたかーい!」

「やめてやれ。マジメに」

沢泉からDISCも回収し、その場はいったん離れた。

昼飯に同席しないことは、向こうも最初から承知だ。

俺が向かうはシヨッピングモール内の百均。

おやつラーメン4個セットを買って、近場ですぐさまバリバリ食らう。全部だ!

これで、あいつらの前でみつともなく腹を鳴らすことはない……

乾燥状態のまま食らったおやつラーメンは、

しばらくするとノドの乾きを連れてくるってのは常識だが。

その渴望を持って、俺はついでに水場を探す。

言わずもがな、変身に使えるような場所目当てだ。

海鮮料理屋の入口にある生簀…アクセス可能。風呂桶ほどもあるから全身キツチリ

沈めるぜ。

表のボードを見る限り、毎日すぐその漁港から生きてままの鮮魚が来るらしい……変身に必要な養分だけを見るんなら最有力候補だな。

あとは、屋上（たぶん施設されてる）にある貯水槽と、

シヨツピングモール外になるが……道路ひとつ隔てた先にある、ゆめポート唯一の足湯だろ？

さらに、ちょっとばかし遠いが、最悪……海にダイブしてもいい。

F・Fは汽水湖出身のプランクトンだったから、よほどでなければ塩水とも付き合えるわけだ。

海水でなら、概算5分で変身可能との見込み。俺はシユノーケルを出して潜ればいい。

逆に、イケそうだけど使いようがないのがスーパー銭湯。

シヨツピングモールのすぐ隣で、源泉もすこやか温泉と同じっていう、

かなり侮れないトコ（沢泉談）なんだが……

建物の奥深くじゃあ、とっさのアクセスは不可能だよな。

垣根を越えて露天風呂に突っ込めばいい？そんなコト言うヤツは正気じゃあないね。

ヒトゴトだと思いやがって……他に方法がないときは、そうさせてもらうがな。

モールのド真ん中にある噴水も養分不足だ……フー・ファイターズをこっさり這わせて

確認した。

そうやってモール内の地図とにらめっこしながら動き回ること三十分、スマホにメールが来た。花寺からだ。

入り口のクレープ屋に集合か。どうやらそこで食ってたようだ。あいつらはな。

「おー、来た来た。思ったより遅い…ドコ行ってたの?」

「水、探してた」

「水…そつか、へんし…ケホツ。SPA銭あるじゃん」

花寺と沢泉から注いだ視線が、平光の失言を食い止めてくれたようだ。

このふたりは安心なんだよ。俺よりも思慮深いからな。口を出す必要すらない。

「スーパ―銭湯のこと?ダメね…奥まで行くのに時間がかかるわ」

「必要になるの、とっさのことだもんね。たぶん」

「ま、大丈夫だっただけ言っとく。最有力候補はすでにここから見えてるぜ」

「えっ?…ああ、アレ。気をつけなさいね?」

「十分に気をつける」

とくに沢泉は、一聞いて十、とは言わないまでも三わかる、

体育会系頭脳派とも言うべきヤツなんで、目的がはっきりした話ならマジに早い。

家が旅館で、その看板娘つてのが大きいんだろ。育ちがいいよな…

体育会系とはいっても、いい意味だ。俺は悪い意味の塊だった。

…気を抜くなよ俺。こんなところで辛気臭いツラをさらすな。

「それで、どこ行く?」

「服行くよ、服! タツキーの」

「……俺エ?」

なんだよ。マの又けた声返しちまったじゃあねーか。

「一ヶ所付き合うって言ったっしょ?」

「言ったけど」

おい……最悪だぞ、この流れ。

財布の中身がバレかねない。

「たぶんタツキーさ、着せ替え人形にされるのイヤだよな?」

一着だけ選ばせてくれれば、それでイイから!」

「……。それでいいなら」

「それでイーよ。行く!」

……これって、もしかしてアレか?

最初にムチャクチャな条件をドーンと叩きつけて、

後から妥協したように見せかけて要求を吞ませるっていう……



イヤイヤないない。んな知恵、働かせないからコイツ!

でもヘンなトコで勤が鋭いからな。油断できない。

それよりもだ。

「なんで俺の服選ぶの?」

「んー?」

普段さ、男モノの服を選ぶのってお兄のときくらいだし!

目えツケてても、お兄には似合わないなあーってあきらめるヤツ多いんだ。

だからそーゆーの選びたい」

「……ジャケツトをお願いします。季節は春と秋で。可能な限り安く。

限度額は三千……三千五百円。これ以上は無理。

なるべくインナーつきがいい。冬もできるだけでそれで頑張りたい」

「ふんふん……アンタの考えてるコトさ、わかったよ。

探してるのは冬モノ? オフシーズンの処分品狙い?

ただ、その金額でインナーつきはキツイかもしれない……オツケー、探そつか」

「ひなたちゃん、すごい……」

「モチはモチ屋っていうのかしら」

……いや。頭は悪くないんだよコイツ。

集中力にムラがあるだけだ。興味さえあればガツつくし、

なんか集中すると他を見ねー、というか忘れる…それがヤバイってだけでな。

オシヤレ関係は常に関心の中で、小遣いとニラメツコしていつも悩み続けてるわけだな。

男モノを見てるとは思わなかったけど、そりやあ見るか。家族だもんな…普通は。

先頭に平光、間に沢泉、その後ろに俺、最後尾に花寺でエスカレーターに踏み込み、2Fに行く。

そこから、対面への渡り廊下近くまで来れば、男モノの服屋。そのうち一軒だ。

全体的にあまり安くはない。が、目当てのオフシーズンものはちゃんとあるようだった。

靴も扱ってる…スポーツ用のヤツもある。ゴム臭えな、クソ…用は無い。

「この店だとココだね。大体ココ固まってる!」

「俺もアサるか…欲しいのは一着だけじゃあないし」

「鳴滝くん、まずこれを羽織ってみて。サイズ感わかっておかないと選べないわ」

協力して素早く済ますべきだ。

店員のオバちゃんは別に俺を知らないようで、なんか生暖かい視線を投げかけてるだけだが、

全員がそうとは限らないんだからな……

沢泉が後ろから差し出してきたジャンパーに腕を通す。

見立ては正しかったようで、すんなり違和感なくいけた。

俺の身長はあまり高くない…沢泉よりちよつと高い程度で、

いやしくもちよつと前までアスリートの端ツクレのクレ。やせている。

沢泉としても、自分の延長で選ぶことができたのだと見える。

「じゃあ、この辺は最初から除外だね…大きすぎたりしたら合わせにくいし」

「ヤバイ…思った以上に絞られちった。かなり売れちやつた後っぽい？」

こうしていると、嫌でも思い出すものがあつた。

俺を刺すしかなかったアイツが…陸上に入る前に、両親とシューズを選んでいた風景だ。

あれを激しく憎んだ俺だけど、もしかしたら今、アイツと同じ景色の中にいるのかな？

…立ち去りたくなってきた。選んでもらつた服が燃やされる幻を見る前に、だ。

ジャンパーを脱いでオバちゃんに渡しつつ、ボトムス回りを探す。

チノパンはこれから向けだ。高い…やはり処分品からGパンでも見繕うか。

半ズボンも、値段次第では考慮に含めていいんだが……そこで気が付いた。

視線、ふたつ。こつちに降ってきている。

むろんのこと、花寺でも、沢泉でも、平光でもない。

元を追う…ひとり見えた。なんとかわかった。隣のクラスの女子だ。

つまり、俺を除いた三人のクラスメート…

「タツキー、コレとかドーよ」

「悪い、イキナリ腹が下った…トイレ行く。選んどいてくれ」

「ええっ？大丈夫なの？ついていこっか？」

「大丈夫だって、花寺…俺だってガキじゃあない」

松葉杖を素早く繰って進む。

三人の視線を振り切った位置に出て、あのふたりを探す…いた。

どつちも女子だ。名前は知らない。

片方はボーイッシュな強気味のヤツ。もう片方は、ややふくよかな温和なヤツ。

どちらにも言えることだが、俺を見る目は…冷たいようだな。

人差し指でチョイチョイと招いてやると、意を決してボーイッシュの方から来た。

少し離れた位置に誘導する。人気のないところは当然避けつつ、な。

「どうする気だ？…魁」

「どうもしない。言い分を聞いておきたい…」

来るべきものがついに来た。そんなところだろ」

喉の奥の耳打ちに、ボソボソと答える。

できれば避けたかった。でも実際、時間の問題ではあったんだ。

そそくさと逃げるわけにはいかない…

そんなことをしたら、俺もあいつらもダメージを受ける。

「……………何の、用で?」

「…どういうつもり?」

「たぶん。あいつらの近くにいることが、どういうつもり…か、だよな?」

最大限、真面目に答えるつもりだ。答えられる範囲のことならな。

煙に巻いたりしたらどうなるかなんて、わかりきっている。

「ひなたに近づいて…前の学校みたいなことでもする気?」

「あいつを…傷物にしようとしてる、と。そう思ってるわけだな」

流れている噂はまちまちだ。

俺が沢泉に対して起こした事件は広く知れ渡ってはいない。

おそらく、噂が知れて最もダメージを受けるのが当事者の沢泉だからだ。

関係者内で箝口令が敷かれて、それっきりになっていると思われる。

だが、あれの背景にある不純異性交遊については…

真偽定かならぬ…だが、チョロチョロと耳に入ってくる。

…で、事実だ。グウの音も出ない。

だがそれを、こんなところで吹聴して何の意味がある？

誰も幸せにならず、ダメージだけが残るぞ…事実確認されても、俺はスツトボケる。

「そんな事実はない。今までもこれからもな」

「信じられると思ってるの？」

その足、動かなくなっただだって…自業自得なんでしょ？」

「ああ。だが、それとこれとは話が違う」

「違うないよ。何も違うない……」

あんたがどんなクズだろうと、あたしは知らない。知ったことじゃあないよ…

許せないのは、あんたみたいなのが…ひなたに、大好きな友達に近寄ってきたつてこ

とー！」

「…そうだな」

返す言葉もないってやつだ。

そんなことはわかってる。ずーっとわかってきたつもりだ。

だが、ヌルかったんだよなあ。こうやって言葉にして聞かされるとハッキリわかる。

刺さるんだ。真心だから、なおのこと。

本気で思いやるからこそその怒りが、こいつにはあるんだよ。

今となつては、目を見ればわかる気がするんだ。本物を見てきたからかな？  
平光。お前の友達さ……いいよな。

俺みたいなの、何するかわからない犯罪者同然のヤツ相手に、

正面からタンカ切ってきたぞ。お前のために。

「そうだな？……あんたナメてんの？開き直ってんの？」

楽しいでしょうねえ、又イグルミひとつで機嫌とつたフリしてさ！」

…見てたのか。バスの中から追われてたと考えるべきか？

悪いニヤトラン。巻き込まってしまった。

俺がお前を平光に渡す姿が、こいつらにはどれほど醜悪に映つただろう？

お前は、どれほどおぞましい物体に見えたんだらうな？

「あの子は、ちょっとヌケてるから…騙されちゃうかもしれない。」

あたしだって、そんなトコを笑っちゃったコトもある…だからこそ許さない。

あんたみたいなの…」

「みなちゃん。その辺でいいと思う。怒らせる必要ないでしょ？」

温和な方が止めに入った。もちろん、俺に味方してるわけじゃあない。

「私たちがお願いしたいのはひとつだけ。」

ひなたちゃんに近づかないください。

ひなたちゃんよ、ひなたちゃんと親しい全ての人に：

それさえ守られるなら、私はあなたに干渉しないから」

ハハハ。内心で乾いた笑いが漏れた。

お前な、それは『全部捨てろ』って言ってるんだよ。

そりゃあ、俺の事情なんか知る由もないし、考える必要もないだろうけど！

「……誠意をもって答えるよ。」

できない相談だ……！」

「どうして？」

「『蜘蛛の糸』って知ってるか？芥川龍之介の……」

俺はカンダタで、あいつらは糸。それだけ」

「……あんた、バカにしてんの？」

信じられないよな。当然だ。

それこそが俺の積み重ねてきたものだ。クソの山だ。

俺はクソ山の王様で、そこからすらも転げ落ちたんだ。

「言い分はわかったけど。」

でもね、正直言って……カケラほどの信用もできない。



今日はこれで引き下がります。

でも、今後もし、ひなたちゃんが傷つくことになったら。

私たちがそうなると判断したのなら!

…私は、いつでも警察を呼ぶ。とだけ言っておきます」

「わかった…覚えておくよ」

去る二人を見送ることなく、俺も踵を返す。

行先はトイレだ。もう何分経ったかもわかりやあしながな。

戻ってはいけない。それだけは確信していた。

「で、どうすんの?…魁」

「警察には…かなわないよなあ」

フードコートの前を通りかかる。

北中きたちゆうとかの連中もいるくさいな…

俺と年頃の変わらない奴らが、大挙してテーブルを囲ってる。

「……か、魁。なんで、こんなことになったペエ」

なんで追ってきてるんだよ、お前。

左手でムンズと掴み、小脇に無理やり抱える。

「お前な。今すぐ戻れ。」

それで、何も見なかったことにしろ」

「イヤだペエ。今の魁を一人にできないペエ」

「一人って…F・Fいるぞ、一応？」

まあ、いいや。

俺も、どういう心境の変化かな。

ペギタンを抱えたまま、当初の予定通りトイレに入った。

運よく無人だ。個室もフルオープン…最深部の一個にこもる。

フタをしたままの便座に、俺は座り込んだ。

ペギタンは…なんといいのか、モチモチだ。

ニヤトランはフカフカだったが、抱え心地はいささかも劣らない。

「ペエ…わかるペエ。あのヒト達の反応は正しいペエ。」

友達のそばにサメが来たりしたら…怖がって当然だペエ。

でも、ボクは…」

「ありがとう、ペギタン。」

でもな…こうなって、むしろ良かったとも思うんだよ」

「どういふことだペエ？」

「さっきの、さ…フードコート、見たる？」

前の学校じゃあ、俺もあんなフウにテーブルを皆で囲んでたんだよ…  
いじめられっ子に、一方的に金を出させて、な？

俺達は、ビタ一文支払わずにガツガツ食いまくったもんさ」

「……ペエ？いきなり放さないでほしいペエ」

腕の中のペギタンを、俺は放した。

怪訝な顔をしたヤツは、目の前に浮いている。

いいもんだよな。暖かいのって。でも仕方ない。

俺は、その肌の暖かさすらも自分で穢しちまったんだからな。

「お前もな…俺から離れろ、な？」

よく再確認できたよ。俺の魂は穢れている…

しかも、好んでそうなったんだ。

近くにいたら、『うつる』ぞ？」

「何を言い出すんだペエ？」

みんなと協力して戦っていくのはどうなるペエ？」

「心配ないよ。ちゃんとやる……ただし、一人の『兵士』として。

俺に『仲間』の資格はないよ。ただ立ち位置が変わるだけ、な」

「ペエ……」

「穢れが『うつれ』ば、あいつらも同じ苦しみを負わされる。

何の罪もないのにな……そいつをわかるんだよ、ペギタン」

「……。それでも、ボクは」

ドン ドン ドンッ！

ドアを猛烈にノックされた。

やばい、話し込みすぎたか？

「なんだアア……こいつ？」

周り、ガラガラのはずだぞ？

なんでノックしてくるんだ？」

そんなことはなかった。F・Fがすぐさま教えてくれる。

だとなると、こいつは……不審なヤツだ！

スタンド使いか？ノックして開けさせることに、なにか意味があるのか？

だが幸い、開ける必要などない。俺と、F・Fにとってはな。

「ペギタン」

「ペエ」

「合図と同時に出て、先に戻ってろ」

「ペエー！」

ドン! ドン! ドン!

「スンマセン、今出ます」

俺が出るのは今からだが、フー・ファイターズはすでに出ている。

トイレには必然、養分がいくらか溶けた水が常にあるからなあ

そして地面からの照り返しでわかった。マツチヨの男!

肌の色がメチャクチャ悪い……ビョーゲンズ! 手加減無用!

スマホ: 『トイレびょうげんず』花寺たちに一斉送信…そして、やる!

ガチャ キュイイ…

「よし! 進化しろ、ナノビョーゲくわあああああああああ!!??」

## ゆめポートに遊びに行こう！―その5

「ケツ・ケツがああああ！グワーーーーッ!?」

クリーンヒット!

だが、さすがに一撃必殺は無理だったか…

俺がやった攻撃はごくごく単純。

床を経由して広げたフー・ファイターズを全ての大便器に連結。

吸い上げた養分をヤツの背後、足元に集中させ…槍を作ってぶち上げた!

ビョーゲンズ相手だったら何の容赦もしないぞ俺は。

隣が『流し忘れ』だったのがさらにいい。威力も硬さも割り増しだ。

槍には『返し』もつけている。新鮮なキュウリについてるイボ粒みたいな数をな……

引っこ抜くだけで地獄の苦しみを味わうだろう。

「逃げるぞ、魁。ヤツがマヌケなステップを踏んでるうちにな」

「了解だな……このままだと、ヤバイ」

もともと倒せるとは思っちゃあいない。

あそこまで経験しておいてその考えじゃあオメデタすぎるってもんだ。

この場を逃げ切るための仕込みでしかなく、そして当初の想定より余裕がない。

俺に向かつて飛ばそうとした『ナノビョーゲン』が、どこに飛んで行ったかが見えた。手洗い場の『鏡』! どんよりした暗闇の霧に覆われつつあるッ

松葉杖を突いてる場合ではなく、一時的にフー・ファイターズで

足との連絡を回復。出口付近まで素早く出て、また松葉杖をスタンバイ。

「ま、待たんかアア〜ッ

このグアイワルが! せっかく! デミビョーゲンに戻してやろーとしたのにッ!

ただの人間では『出来損ない』になるだけだが!

お前のようなチカラを持つ逸材ならば……

うごおおおおおケツがああああ

付き合つてられるかよ。トイレを襲う変態ヤローめ!

しかし新情報だ: 人間にナノビョーゲンを取り憑かせると、

デミビョーゲンとやらになるらしい: そして、それは俺のことだった。

コイツかどうかは知らないが、ダーティ・ウォーター事件はすっかり観測されていて、どうやら俺のようなスタンド使いを、そうやって活かすことにしたようだな……  
恐るべきは、俺の人相が完全に共有されちまつてること。

トイレなんか、公共施設で、かつ単独行動にならざるを得ない場所だ。

出入りを不審視されづらく、襲撃にはうってつけ。

マジに遺憾だが、この一点に限って言えば：

花寺についてきてもらうのが大正解だったわけだな。

「鳴滝くん！」

「タツキー、ビョーゲ…んむツ!？」

「大丈夫なの？」

噂をすれば影だ。全速力で来たな、お前ら。

そりゃあそうだ。こんなところでメガビョーゲンが出れば人死にが出かねん。

固有名詞を口に出しかけた平光は、やはり沢泉に顔面をつかまれていた。

花寺の腕の中にはラテ、だ。まもなく気づくな。

周りの一般人が、なんだ？って感じで見る…

言葉に出すのは危険。スマホを取り出し、『ものかげ へんしん』…一斉送信だ。

すぐに察した沢泉がすでに取り出したスマホを、花寺、平光が覗き込み。

数瞬して、真っ先に平光が動いた。すぐそばの身障者用トイレに突っ込んでいく。

沢泉はそれを止めようとして間に合わず、

花寺と一緒に閉じてしまった自動ドアをドンドン叩いている。

…俺も今気づいた。ダメじゃあねえーか平光。



衆人環視の中で『個室』のトイレに入っただけで、出てきたときにはプリキュアなんだぜ？

ゼンゼン隠れてねエーよ正体！

たぶん、ニヤトランにツッコまれて気づいたんだろう。

開いた自動ドアから、コメカミをポリポリかいて平光が出てきた。間に合わねーなコレ。

揺れと破壊音が始まった。メガビョーゲンが出てくる…出来ることはこれだけだ。

「うツ…うワああアアアア!!」

大声をあげて逃げる。俺が率先して逃げるんだ！

異常な状況で思考停止した周囲に、俺の悲鳴を伝染させれば！

「え？わ…わあああー…」

「何これ、地震？」

「ちよつと、ヤバイ、出ないと…」

「逃げろーツ！」

「出てくたさい、建物から出てーツ！崩れますッ！」

よし、やった！

全体が一気に避難の流れで染まったぞ…

続く破壊音。周りの人間は一目散に逃げるだけ。

こうなつちまえば、変身するスキなんざどうとでもなるだろうよ！

あとは、俺に必要な『水』だ。

階段まで行きついたところで、ひととき大きな崩落音が耳についた。潰れたトイレから巨大な影が這い出し、モールの中庭に降り立った。

「メツガビョオ〜〜ゲエーーン！」

掃除夫みたいなカツコしてんのは……トイレだったせいだろーな。

右手にキユツ<sup>名</sup>ボン<sup>前</sup>キユツ<sup>知</sup>ボン<sup>ら</sup>。左手に柄付きタワシを構えてやがる。変身を終えたプリキュア達は、ビミヨーな顔をしつつだが。

さっそく散開しつつ立ち向かっていた。ヤツの攻撃には死んでも当たりたくないだろう。

プリキュアとメガビョーゲン、双方に申し訳ない気持ちで沸いた。

俺がトイレで襲われたばかりに……

今後、二度と同じことは繰り返せない。今回はまだいいだろう。

が、次があつて……ナノビョーゲンが、なんかの間違いで便器なんぞに着弾しちまつたなら！

考えたくもねえぞ、おい。ポルナレフ病は断じて予防せねば。

それはそれとして俺は急ぐ。今考えるコトじゃあないからな。

階段を下りれば、目的地はすぐそこだ。

足を踏み出す直前に、F・Fが呼び止めた。

「魁。アレのケツに刺さったフリー・ファイターズは消すぞ。

サンプルを持ち帰られることにつながる」

「おつ、そうだな……消すなら今くらいが限界か」

「もつとも、ただ消すんじゃあ芸がない。」

あいつらの戦いに参加されても困るしね……よし。

回転して『らせん状』に切り裂きながら脱出する!」

スタンド、フリー・ファイターズは、俺とF・Fで共有されている。

射程距離もともに同じで、50m以内なら、

俺にもF・Fがやっていることを感じ取れるのだ。

そいつが望ましいかはまた別だがな!

「えげつねえ……うへエ、モガキまくってる」

「脱出完了、みんな消したぜ。急ごう」

F・Fの攻撃中、もちろん俺も遊んじやあいない。

体内から構造を確認……奴らビョーゲンズも、ヒーリング・アニマルと同じく

多分に概念的な存在みたいだが、やはり同じように生物に準拠もしているようだ。要するに：現時点では奴らより非力と言わざるをえないフー・ファイターズだが！体内に入り込みさえすれば有効打が望めるということだな？

致命傷につながる急所も、どうやら人間と同じと見た：しめた。かなり強力な情報だぞ。

しかし、体内にも奴らの『汚染力』が強烈に働いているのも確認できた。

普通の物体じゃあ、おそらくアレで瞬く間に腐れて消えちまうんだろう。

今回の『槍』も、ヒーリング・アニマルと化したF・Fだから、やっと通った。そのようだ。

『お手当て』の力なしにはどうしようもないってことだな。少なくとも俺達には。

以前、俺があっさり汚染されきつちまった理由も、そこにあるわけだ。

ラビリン、ペギタンにニヤトランの言っていたことが、今や実感として理解できるぜ。

：気を取り直す。変身しなれば。

したところで、出来るのは囮役と、けん制の攻撃くらいだろうがな。

だが俺達は直後、どうしようもない問題に直面する。

「…魁。ヤバくない？これ」

「人が途切れねえ」

例の海鮮料理店は、今下りてきた階段から見て、モール出口への道中に位置していた。つまり避難する人間のうち何割かは確実にここを通ってくる。

抜かったなんてもんじゃあねえ。常に人目だらけじゃあねえか!

俺は、メガビョーゲンの出現で人が避難して、無人状態になるって想定してたんだ。なんつーバカ丸出し。平光のことをまったく笑えない俺だった。

「クソがツ!次行くぞ、次!」

「戦闘が激しくなってるな…:こうなると屋上もマズイ。」

『露天風呂』しかないと思う」

「なんてこつただよ…:チキシヨオ」

ゴオオオ…:ズウウウン

ピシッ ピキ!

F・Fの言を裏付けるように、大音響と地鳴りが近場のガラスにヒビを入れた。いきなり最後の手段だけになるとか。

これも日ごろの行いが悪いせいか…:まさしく、だな。

俺以上に悪い奴なんぞ、そうそういやしないんだ。

やるしかねえならやってやる。心を決めたなら外を指す。

目指した矢先に、また会うとは思っていなかったがな。

避難する人間の中に逆走してきたヤツがいた。ふたり。

ボーイツシュと、温和…だ。

「何やってんだ、お前ら。逆だぞツ!？」

「あんたこそ…ひなたはどうしたのよ？」

「私たち、ひなたちゃんを探しに戻ってきたの。」

「一緒にいなかったの？」

なんてこつただよ…チキシヨオ。

心の中で同じセリフを繰り返す羽目になった。

死ぬかもしれない場所に戻ってくるとか、バカなのか？

…ああ、バカなんだな。あいつの友達で、あいつらの同類なんだ。

そう考えたなら、こうなるのはむしろ必然!

俺の見通しが甘かったってコトでしかない!

どうやって止める? どうやって引き返させる?

ここでしくじれば、こいつらは戦場に突っ込んでいつちまうぞ。

こいつらが潰されて、血のシミになっちまったなら。

…ズキッ

痛みが走ったと思った。



「出ない、な。壊れたりはしてないらしいな」

「やっぱり…」

「壊れてないからって、何を安心できるのよ。」

もしかしたら、『出られなく』なってるってことじゃあないの?」

ズドドドオオオ ン!

パキ! パキイン バシ! グワシヤア

「ひっ!」

「嫌あ!」

ガラスが割れた!近いぞクソがッ!?

中庭なんて狭い場所で、あれだけ巨体の敵をコントロールしきるのは

そりゃあ難しいだろうよ!…マジにまずい。

「これまでだ…逃げるしかない。」

いたら死ぬような場所に、あいつらが留まるはずないだろ」

すぐみ上がったふたりに畳みかけていく。嘘はまったくない。

俺自身、ここを一刻も早く離れないと無駄死にしかねない状況だ。

ふたりも理解している。現実になった恐怖が目の中に降ってきたのが見えるぜ。

腰が引けている…そのまま、引いていけ!



「それに！お前の言う通りに『出られない』としてもだ。

それこそ出来ることが何もねえぞ。

今やれることは、この場から逃げ切って！

一刻も早く専門家を呼ぶことだ：そっちの方が、よっぽど『ため』になる」  
理を尽くしていく。お前らがここにいることは間違っていて。

引いて別の手段をとった方がよっぽど正しい。

恐怖の先に進んでも間違いないのなら、引かない理由なんかはないはずだろ。

だから帰れ。誰も攻めるヤツなどいない。いるのなら、そいつがおかしい。

俺は必死だ。心の中でまでブツブツと説得をタレていた。

黙って聞いていたふたりだったが、やがて、ボーイツシュの方がうつむいた。  
そして。

「…ありがとう」

パァン！

ヤツは自分で自分の顔を、思い切り平手で打った。

顔を上げて、キリッとした目で俺を見た。

「あんたのおかげで、見栄を張れそう」

「何、言ってるんだ……？」

「…たぶん、あんたにはわかんないだろうけどね」

そして聞かされた。理解させられた。

俺は、押しではいけないツボを押し込んだのだ。

『正しさ』が、かえって『バカ』への道に背中を押しつらしい。

「あんたの言ってることさ、正しいよ。」

だけどさ…何も出来ないから、どっかの誰かにまかせろだとか。

「そんなの納得したくない」

「……………」

「ひとつでも、出来ることがあるかもしれないんだつたら…」

「あたし、行くよ。友達だもん」

温和も、『バカ』に呼応した。

恐怖がより深かったように見えたのに、だ。

「私も、行くよ。ひなたちゃん、誰か助けようとしてるのかも…」

「周り見ないで、頑張っちゃってそうだし。」

「私も、助けてあげられるんだつたら…」

「気づけば、周りに誰もいない。」

そんな中をふたりは歩き出した。より奥に。

見栄を張れそう、だって？

張ったからどうなるっていうんだ？

恐怖が消えてなくなるっても？

いや、ちよつとはわかる。気がする。

ある種の事がらは死ぬことよりも恐ろしい。

そういう目に何度か遭ってるんだよ、俺だって。

理性で無理だとわかっていたとしても、戦うしか選べないことがある。

でも…違うな。うぬぼれだ。俺は生命を大事だなんて思ってたんだから。

死だけを望む人間に恐怖などない。ジョセフが言っていたように『ノミと同類』なん

だろう。

今だって、いわば借り物になっちまったから大事にしてるに過ぎないし…

ともあれ、確かなことは、ひとつ。

俺は失敗した。

監視カメラの有無だけを素早く確認した俺は、指先をF・F弾の銃口に変え。

去っていくふたりの背に、ピタリと照準を合わせた。

「ああ、わからないな。俺にはわからない」

## ゆめポートに遊びに行こう！―その6

「お……オレ、の。」

オレのケツにブツ刺してくれた小僧は……どこだ？」

初対面のビョーゲンズは、筋肉の塊みたいな男。

中庭に降り立ったわたしたちの前に現れるなりそう聞いてきた。

ダルイゼンやシンドイーネがそうだったみたいに、

この男もサソリみたいな尻尾が生えてるんだけど……

その下に、なんか余計な棒が一本生えてる。

竹ボウキの柄みたいなのが。

……気づかなかったことにしたいなあ……正直。

高いトコから見下ろしてるから、イヤでも見える。

「ビョーゲンズのグアイワル、ラビ。」

でもなんか様子がヘンラビ」

「わかってるけど……様子ヘンなのは」

「何よアンタ。今回のお題はシモなの？」

「好きでやるかアア—ツこんなコト!？」

顔が引きつってるフォンテーヌを置いて、

スパークルは平常運転してる。お笑い番組アツカイ!

「だって…えつと。怪物だってトイレ掃除じゃん」

「事故だ事故!」

あの小僧が大人しくやられていれば、

今頃キサマらの敵はヤツだったわ!」

「それで逆にヤラれてんじやあ世話ねえーぜ。

スパークル! やつちまおうぜ」

「オツケー、退場!」

「来るのか? いい度胸だ…」

…おとおお無理いいいいいい!!??

おがあああああああああ

…えつと、グアイワルって言ったっけ?

スパークル相手に構えたのはいいんだけど。

その直後に、一人で天を仰いでわけのわからないステップを踏んで…

崩れ落ちてゴロゴロ転がり…お尻に手を当てたまま、中庭の茂みに落っこちていっ

た。

「……何ラビ？」

「…なんだろーね？」

「知りたくもないわ。片づけましょうサツサと！」

「ペエー！」

投げやりに吐き捨てたフォンテーヌの構えが開戦の合図になった。

(中庭に出る前にいくらか打ち合ってたけどね)

グアイワルの方を見たまま呆気にとられてたメガビョーゲンも向き直ってくる。

それにしても…トイレのキュッポ<sup>ラ</sup>ンキュッポ<sup>ン</sup>と、

柄つきタワシが武器なんだよね。メガビョーゲンの。

しかもなんか水がしたたってる…ウワア、やだなあ。

でも、そんなことよりも。

「フォンテーヌ、スパークル。まだ人が逃げ切つてない。

吹っ飛ばすような攻撃はやめておこう！」

「了解よ」

「りよーかーい！」

…こうなつてわかるけどさ、太陽<sup>サン</sup>つてめっちゃ使にくい」

建物が入り組んだ場所とか、どこに人がいるかわからない場合だと巻き込む危険が大きすぎるんだよね、太陽<sup>サン</sup>。

そのぶん、状況がかち合えばプリキュア以上にモノスゴイ破壊力なんだろうけどね。他ならぬひなたちゃん自身、すごく警戒してくれてる。

「グレース、スパークル、左右から動きを押しさえて」

「動き止めのん?もしかして、オラオラ?」

うなずいたフォンテーヌが飛ぶ。

そのまま飛び掛かるつもりじゃあなくって、ポジション確保のため。

今、わたしたちの中で一番『殴り方』をしっかり覚えてるのはフォンテーヌになる。

成り行きみたいなものだけど、オラオラも承太郎さん直伝になっちゃったし。

一歩遅れだけど、わたしとスパークルも練習してるよ。昨日もやった。

「メツガアアアアア」

メガビョーゲンが、背中に背負った洗剤ボトルからビームを撃ってくる。

着弾したら、そこがビョーゲンズに汚染されちゃう。

汚染すればするほど強くなるのがビョーゲンズ。

そうわかってるなら、みすみす見逃したくもないけど…今やるべきは、違う。

わたしとスパークルは、回避と一緒に左右からひとつ飛びで距離を詰めた。

「メガツ!? ビョーゲエエーローン!」

驚いたようだけど、すぐ次の攻撃に転じてきたメガビョーゲン。

左右の手で持つてる武器を振り回す。わたしとスパークルの方、別々に。

飛沫がたくさん飛んでくる。

「ギャーーツ、バツチイ!

「こんなばつかじやんあたしたち!」

「ゴ丁寧に、飛び散ってる『水』でも汚染してるみたいね」

「でも、なにも脅威じゃあないよね。」

やることはなにも変わらない」

承太郎さんたちと戦っておいてよかった。

あのプレッシャーを経験したのなら、今更こんなの、そよ風だよ。

だからって油断はできない。あれは、わたしたちを殺せるパワーを持っている。

一歩間違えば、待っているのは無力の絶望!

懐に突っ込んでキュッポ<sup>ッ</sup>ン<sup>ッ</sup>キ<sup>ッ</sup>ュ<sup>ッ</sup>ッ<sup>ッ</sup>ポ<sup>ッ</sup>ンを払いのけたわたしは、

地面を転げてメガビョーゲンの裏手に回り、膝裏に蹴りを一撃。

反対側からはスパークルがメガビョーゲンの右ヒジに

両足で踏みつけるみたいにして蹴りつけた。柄つきタワシを取り落とす。



「バランスが崩れた。今ラビ」

「キュア・スキャン！」

ヒーリング・ステッキをかざして、診<sup>み</sup>る。

ヒト型のメガビョーゲン：その、首のちよつと下あたり。

エレメントさんが捕まっているのがはつきりとわかった。

「光のエレメントさんラビ！」

「待つてね。すぐ助けてあげるから」

そしてフォンテーヌが降ってきた。

さっきまでグアイワルがいたあたりから飛び降りてきたみたい。

あっちもあっちでキュア・スキャンしてたらしく、

首の下をキツチリ避けて、腰のあたりに落着する寸前から。

拳打のラッシュを繰り返した。

「オラオラオラオラ：あつ」

バコ ドコ バコア :ピヨオオ〜ン

決まるか、と思っただけだ。

フォンテーヌでも失敗するんだあ。

何発か当たったくらいで、フォンテーヌの方が飛ばされてしまった。

自分が殴った反動を、思ったように制御できなかったみたい。まずいよ。敵のダメージが浅い。復帰してくる。

「メガアアアローツ！」

体勢をくずしたフォンテーヌに飛び掛かっていく。

踏みつぶす気みたい。わたしたちが黙って見てるわけないよ。

スパークルと一緒にヒーリング・ステッキをかざし、そろって光弾を飛ばした。ちなみにこれ、名前つけたよ。プニ・シヨットつて。名前ないとやりにくくて。狙いが空中だったら誰かが巻き添えになる心配もない。

「メッ!?」

背後から二発のプニ・シヨットを受けたメガビョーゲンは、フォンテーヌに振り下ろそうとしたキュッポ<sup>ッ</sup>ン<sup>ッ</sup>キ<sup>ッ</sup>ッ<sup>ッ</sup>ポ<sup>ッ</sup>ン<sup>ッ</sup>を手放して、もつれるみたいに落っこち：やっちゃった！

ドゴオオ！ズウウウン

一階の店に頭から突っ込んで入ってる！誰かがいたら、死んじやうよ！

走って行って中を見る。瓦礫をいくつか押しつける。

血のおいとかは、ない。人の声も聞こえてこない。大丈夫みたい。

周りを見回しても人の気配はなし：こっちの方は避難が終わってよかった。

「メツガ……」

「させない!」

動いたら困るよ。殴り飛ばして元きた方向へ押し出す。

力は強くしすぎない。建物を巻き込んで崩落させたら目も当てられないもん。でも、それが災いした。

飛び出した先を追撃しようと思ったら、すでに体勢を立て直されていた。

うかつだよ。今まで、さつきコケた以外だと、ダメージをほとんど与えてなかった!

「メガビヨローゲエエーン!」

「きやあああッ!」

「グレース!? ヤバイよ!」

ガシ ギユオ! ガツ ガツツ …ドグシャア!

驚つかみにされて、手首で放り投げられた。

地面にほぼ水平に投げられたわたしは、地面を何度か跳ねてガラスに叩きつけられた。

割れなくてよかった、とか痛みに耐えながら思ったけど、そんな場合じゃあなく。

メガビヨローゲンが、今度はわたしを踏み潰しに飛んできた。

「…つつ、プニ・シールド!」



「メガoooooooooo!!」

ヒュッ ボツゴア

二階から飛んだらしいスパークルの蹴りが、メガビョーゲンの顔面を捉えた。わたしのこと、踏みつけようと片足を上げていたから、つんのめってたたたらを踏んでる。

そこに、跳んできたフォンテーヌが正面から立った。

小指から順に、見せつけるように拳を握って。

「覚悟はいいかしら?返事は聞いていないけど」

「メッ、ガ…!?!」

オラオラオラオラオラオラオラオラ…

拳打のラツシユがメガビョーゲンを刺す。今度こそ練習してきた体勢で。

スネを打たれまくって転げるメガビョーゲンへ、まめに位置を変えながら拳の嵐は止まらない。

スネから腰へ、腰から脇へ。打撃の波紋が間断なく刻まれる。

「オラアアoooooooooo!!」

メシッ ドグシヤア!

とどめの一撃は顔面だった。

どこかに吹っ飛ばすみたいなのはしない。フォンテーヌだもん。

メガビョーゲンが叩きつけられた先は地面で、もううめき声も出てない。

「今よ、グレース！」

「ありがとう！…エレメント・チャージ！」

「ヒーリング・ゲージ、上昇ラビー！」

残りの力が多いとは言えないけど、ふたりがいれば安心して出し尽くせるよ。

高まる力、高まる勇氣。思いのままに。助けるために！

「プリキュアツ、ヒーリンググウウ、フラワアアーツ！！」

ゴツ ギユワアア パアアアア…ン

放った桃色の光はメガビョーゲンの喉元少し下に吸い込まれ、撃ちぬく。

そして助け出す手となって、囚われたエレメントさんを包み込んだ。

蝕む先を失ったメガビョーゲンは、もう存在を維持できない。

「ヒーリン、グツバアアア…イ…」

シユパアアアア…ツ フワツ…

わたしたちプリキュアは、苦痛を与えることなく彼らを『消せる』。

ううん…役目を終えたから消えてるだけ、かな。

病気になるのは、体が戦ってる反応そのものだったはずだから。

詭弁かもしれないけど、言えることはこれだけ。

「お大事に」

「ラビ!」

『平光の友達二人確保。気絶のためモール外で見張ってます』

エレメントさんを見送ってから、すぐにメールを確認すると。

わたしたちに一斉送信で、こんな文面が来てた。

…不謹慎だけど、みんななくてよかったよ。

エレメントさん、男子トイレの鏡にいたんだもん。そこにね、聴診器持ってたね。

『お加減いかがですか?』なんて言ってるの目撃されちゃったら…

おヨメいけない。というかアブナイ人すぎる。

ちゆちゃんと言った。

私達のアタマの方がよっぽどオカゲンイカガね、これは。

…言う通りだよ。言う通りすぎる。男子トイレ抜きにしてもそうだよね。まあ、置いておこう。その辺はこれから考えるところとして。

「友達？あたしの…誰？」

すぐに電話をかけるひなたちゃん。

やっぱり考えるより行動の子だよな…今はそうしない理由もないけど。

「タツキー、今どこ？」

……今、目が覚めた？んじゃ、代わってよ…

え、こつち来い？…いいけど。うん、じゃあ後で」

いぶかしげに電話を切ると、不満そうな顔をした。

「まどろっこしいなあー。電話で代わってくれりゃあ済むつしよ？」

「ひなた。今まで何をやってたか、友達にどう説明するつもり？」

「そりゃー、プリキュアになってメガビョーゲンと戦…」

「言えるかー、こんなの！」

ああ、鳴滝くん正解。

すぐ電話を代わったら間違いなくヘンなコトになってたねコレ。

ちゆちゃんならともかく、ひなたちゃんはマズイ。

道中でカバーストーリーを相談しながら正門に向かう。



裏門に逃げようとしたけど、途中で怪物が裏門側に来たから諦めて正門に回ろうとした。

これで通すことになったら、正門の先に鳴滝くんが見えた。

「まずは、無事でよかった…な」

……なんかよそよそしい。また何かあったの？

単に、プリキュアとスタンド使い仲間の部外者が近くにいるから？

それに構わずか、ひなたちゃんがまずは聞いた。

「タツキーさ、なんでそんなに魚クサイの？」

「海鮮料理屋の台車使ったからだよ。まずは後ろのふたりに…」

「ひなた！無事？」

「ひなたちゃん！」

駆け寄ってきたふたりのことはわたしも知ってる。

クラスメートで、ひなたちゃんの友達…

間接的にだけど、わたしとちゅちゅちゃんの友達でもあるってこと。

ちよつと、ぽつちやりしてる方がりなちゃん、

ボーイッシュっていうのかな？カツコイイ方がみなちゃん。

「りなちー、みなちー。来てんだ…」

って、魚クサツ!?どったのソレ?」

「そんなのどーでもいいから。ケガはない?」

「どこかぶついたりしなかった? 転んだりとかは?」

「…んふツ、ダイジョブだよ。」

ふたりとも、やさしー。ウレシー!」

ふたりとも、臭いが結構ヒドイことになってるけど。

ひなたちゃんは無事で頭がいつぱいみたいで、心配だらけの顔で詰め寄ってる。

そんなふたりに、ひなたちゃんの頬っぺたが綻んでふやけた。

そこからは、わたしたちも交えてカバーストリーを語っていく。

ひなたちゃんは相槌しか打たなかった。巻き込みたくないよね。

ちよつとずつ質問を入れながら聞いていたふたりだったけど、

説明が終わったのを確認してから…みなちゃんが、ひなたちゃんに聞いた。

「ひなた、あんたさ」

「なに?」

「どうして、あいつと一緒にいるの?」

今は一人、離れて正門から外を見てる鳴滝くんを、

みなちゃんはアゴで指した。

…あつ、なんかわかった。話が見えた気がするよ。

ただ、今はおかしなコトにならないように気を張つとかないと。

ちゅちゃんも身構えた雰囲気がある。顔にも態度にも出していないけど…

ひなたちゃんだけが自然体だった。

「んー、命の恩人だからだよ?」

「恩人?何があつたの?」

「それなら、私からも説明できるわね。」

助かったのを見ているからね…のどかも、そうよね」

「えっ、うん」

ちゅちゃんのカバー、すごい。内容はこう…

自然公園で、ひなたちゃんと鳴滝くんが怪物を相手に

必死で防戦してるところに、ちゅちゃんとわたしも通りかかってしまった。

そこに、よくわからない誰かが出てきて怪物を撃退してくれた…って。

「プリキュア…とかなんとか聞こえたけど、それ以上はわからないわ。」

とにかく、私たちは助かったのよ」

「それでね、その時、ひなたちゃん気絶してたから…

わたしたちが通りかかるまで、鳴滝くんが守って戦ってくれてたみたい。」

「どうやって、とかはわかんないけど。そうじゃないと説明できないの」  
「…うん、そーゆるーコトなんだけど。アタマいっぱいよく覚えてないや」

ちゅちゃん、上手い。

これで今後、ひなたちゃんがプリキュアって口走っても、

そんな単語を知ってるっていう保険まで出来た。

どのみちビョーゲンズの現れる場所にはプリキュアがいなくっちゃあいけないんだもん。

遅かれ早かれ、町のうわさになるのが避けられないなら…先に、便利に使っちゃうんだ。

「それって、ウワサの怪物……」

ううん、わかった。信じる」

「私たちも助けてもらった、ってことだもんね。今日……」

「魚くさくなっちゃったけどね。だからこそ事実、かあ」

何か言いかけたみなちゃんは、でもそれを途中でやめて、

信じる、と言いついてくれた。りなちゃんは、言葉で確信を深めてくれた。

今日はこのまま帰ることにしたらしい。

ふたりはわたしたちに背を向けて、鳴滝くんの横まで歩いていって、言う。

「お礼、言っておくね。ありがとう」

「…早く帰って、洗うんだな、服…かなりひどいぞ」

「そうするね。ありがとう」

目をそむけたまま言葉だけ返した鳴滝くんに構わず、ふたりはそのままバス停に向かった。

ショッピングモールは緊急で休業になった。だよーねー。

巨大な怪物が出て暴れたんだもん。目撃者多数だからウソ扱いは無理。

あ、破壊の跡とかは大丈夫だよ。

ビョーゲンズによる破壊であれば、プリキュアがそのビョーゲンズを倒しさえすれば、

直後にキレイに元に戻るのを何度も見てる。クレイジー・ダイヤモンドみたいに直る

の。

でも、エレメントさんが蝕まれきって『死んでしまう』とダメらしい。そんなことはさせない。

とにかく、そういうことなんで。わたしたちは、海沿いの倉庫がたくさんあるあたりに出てきた。

仕事以外で用がある人はあんまりいないから内緒話もできるだろうって、ちゆちゃんに案内してもらったんだ。結構開けてるしね。スタンド使いの奇襲もないと思う。

「そんじゃ、改めて。ありがと、タツキー」

「ありがとじゃあない…俺は失敗している。

つげなくていい傷をつける羽目になっちまってるんだぞ」

「……キズ？どゆこと？」

鳴滝くんは、ボソボソ気味に順を追って説明した。

まず、あのふたりはひなたちゃんを心配して後をつけていたこと。

おそらくは、バスの中でたまたま見つけた鳴滝くんを目で追っているうちに待ち合わせているわたしたちを発見したのだろうということ。

その後、途中で気づいた鳴滝くんが確認のため近づいたところ、

ひなたちゃんに近づくな、と強く伝えられたこと。過去の行いを恐れられ嫌われているから…

そしてメガビョーゲンの出現。すでに避難していたらどうふたりは、

ひなたちゃんに電話をしたけれど通じず、危険な目に遭っているかもと考えてシヨツピングモール内に助けに戻ってきてしまった。

そこに、変身のために隣のスーパー銭湯に向かおうとした鳴滝くんが通りかかり、外にまた避難するように説得したけど、失敗。かえって奥に進む決意を固めさせてしまった…

「どうしようもなくなった俺は、ふたりの腰あたりをF・F弾で撃ち、

体内で一気に増殖…肺の空気を追い出して気絶させた。

そのまま筋肉を操って外まで歩かせようとしたけど、生きたままじゃあ難しすぎた。

それで、海鮮料理屋の台車に積んで外に出た…わかるか?」

「わかるか?…なにが?」

「全部、俺の身から出たサビ…俺がやってきた悪いことへのツケ、だ。

不信心を持って追跡されたのも、俺の説得をまるきり無視されたのもな。

だから撃たなきゃあいけなくなつた…

早速、問題になつちまつてるだろ。結局」

「…アンタさ。そんなことしか言えないの?」

やっぱり、さつきわたしが察した通りだった。

ここまでこじれるものなのかな、自分を嫌いになっちゃった人って…重症だね。でも、これだけでも進歩だよ。ちゃんと話してくれてるんだから。

F・Fがいつも一緒なおかけもあるだろうけどね。

ちよつと前のあなただつたら、ウソついてごまかしたと思うな。

こうやって、ひなたちゃんが怒る隙間もくれなかつたはず。

「あたしが『ありがとう』って言って!

りなちーもみなちーも『ありがとう』って言ったつしよ?

そんだけじゃん。それでいいじゃん!」

「……………そうか?かもな。」

なら、今の俺の『気分』はそれで片付けるよ」

「でしよ?…ん?『気分』?」

「『気分』じゃあなくて、『問題』があるって言いたいよね?」

ちゆちゃんが引き継ぐように聞く。

そうなんだよね。感情だけの問題だつたら絶対に言わないよ、この人。

だからいっつも口を開けばアワレっぼくなるんだよ…きつと。



「およそ14万円、だ」

「…。なんですって?」

「針詰市にも大きなシヨツピングモールがあつてな。  
はりつめし

そこで飲み食ひしたり、服だつて買つてる。

俺を刺したあいつから、金を巻き上げてな…その総額だよ」

「ちよつ…シヤレになんない…あたしのお年玉、何年分…?」

「…それで?」

先を促す。

…まともな感覚なら、友達付き合ひやめるね。

そんなひどいことをする人となんて。

でも、わたしたちにはそれができない。わかつて言つてるはず。

「俺は、な?」

アスリートとして結果を出し始めてからは、父さんに金をねだることもできた。

結果を出す人間には、金に糸目をつけない人だからな…

他人から金を奪ふ必要なんかありやしない。

俺達は…俺は、面白いだけだったんだ。あいつや、その他の弱い何人かが…

いたぶられて弱り果てていく姿を、いつも笑つて見てたんだ。

今日、ここにきて思い出すことは…そんなことばかりだったよ」

「……納得ね。私が知っていたあなたの姿よ」

「お前らがまともな人間なら、俺は化け物だ。」

日の光をあびて笑いあう資格のない生き物なんだよ。しかも進んでそうなったんだ。

今後は、俺を『兵隊』…いや、『駒』として扱え。それ以外を俺は望まない」

……F・Fが口をはさむ気配がない。

必要ないって思ってるね。

ラビリンたちも、物陰から見守ってる。ラテも、じつと見上げてる。

少しして、最初に口を開いたのは、深いため息をついたちゆちやんだった。

「はアア…：…メンドくさいわねえー、あなた」

「『駒』にそん…」

「黙りなさい。何を言ってるのかわかってるの？」

あなたは私たちに、同じところまで落ちろと言っているのよ？

かつてのあなたと…お断りだわ。誰がやるもんですか」

「うぐツ…」

「どう考えても逆よ。あなたがここまで登ってらっしゃい。

言っておくけれど待たないわ。どんどん登っていくわよ…

つらいでしょうけど、苦勞しなさい。今までさんざん落ちたんだから」

「……できると、思うのか?本気で?」

「やるか、やらないか。アスリートの本気は『ただそれだけ』よ。

そうでしょう?元・全国レベルのスプリンターさん?

やってみない?それとも、意気地なしのまま腐っていたい?」

やつぱり、ちゅちゃんはすごい。

鳴滝くんの後ろめたい気配が、みんな戸惑いに変わっちゃった。

そうはいっても、どうすればいいんだ?って言いたげ。

そこに、今度はひなたちゃんが。

「…鳴滝くん、さあ。いい?」

「う……ああ」

「その、ヒトをイジメたときの思い出ってさあ……いい思い出?

思い出すと、いい気分になんの?」

聞かれた鳴滝くんは、うつむいたまま黙って。

奥歯をかみしめたみたくない顔のまま、やつと答えた。

「最低だ。どうしようもなく『汚い』…」

でも、だからって何なんだ。何も変わりやあしないだろ」

「そっか。なら…タツキーでいいじゃん。

や、正直さあーちよつとスグに受け止めらんない、ビツクリすぎて！

また後でイロイロ言い出すかもしれないけど、その時はゴメンね」

「謝る必要、どこにあんだよ」

わたしも、やつと何か言えそう。

今のやりとりで、糸口ができたよ。

「鳴滝くん、『汚い』って言ったよね。

思い出したら、やっぱり…痛い？ 苦しい？」

「だからって何だって話だけどな…」

小さくうなずく鳴滝くんは、ただどわたしの望む答えをくれてる。

「なら、ね…：…化け物なんかじゃあないよ。

だって、あなたは痛みを感じてる。

きつと、今感じてるのは、化け物から人に戻った痛みなんだよ」

「…だからって、あいつらが俺を許すとも？」

「許さないよ。わたしだったら絶対に許さない」

即答だよ。事情にもよるかもしれないけど…

ただ楽しいなんていう理由で、わたしからそんなお金を取り上げるのなら。

「十四万円とか、お父さんとかお母さんの財布に頼らないとどうしようもないもん。でもね、『だからって』何もしないっていうのは違うと思う」  
本当に言いたいことは、ここから。

難しいことはなんにもないの。ただ、言葉にするだけなら。

「『汚い』のなら、『きれい』にしようよ。

『大嫌い』なら、『大好き』になろうよ。

過ぎちゃった昔はどうしようもなくったって、今はできるよ。だって生きてる。

始めようよ、『大好きな自分』を。いじけてるより、よっほどいいよ」

届いたかな、わたしの言葉。わたしもやってるんだよ？

みんなにお手当てされるわたしから、みんなをお手当てするわたしになるの。

「……厳しいな」

「厳しいよね。でも、負けないの」

「もう……今更……恥も外聞も、あるもんか……」

俺に、取り繕う体裁は、ない、か」

…届いたみたい。全部届いたかはわからないけど。

少なくとも、前を向く気にはなってくれたみたい。

ブツブツつぶやいてるけど、おびえた目はどこかに行っちゃった。

「わかった。…いや、まだよくわからない…けどな。

出来ることを、まず考えてみる」

「うん。『駒』とかナシ。わたしもヤダよ」

背を向けて、バス停に向かって松葉杖を突き始める鳴滝くん。

もう帰ることにしてみたみたい。わたしたちもそうするしかないけどね。

「あッ、チョット待ってタツキー！

買ったのインナー付きジャケツト！

オバちゃんが廃棄寸前のヤツ出してくれたんだ！

3600円！予算オーバーだけど100円は出すからさあー」

「…マジか？

いや、3600円でいい、むしろ安い…」

ひなたちゃんが追っかけていって、わたしたちも続いた。

…まあ、平和な方だったかなあ？今日は…

「つて、ナンだよコレ。テルテルボーズ？

もちつと、なんとかならなかった？」

「ならない。だから残ってたんでしょ？」

それでも一番マシなやつ…ステッカーだけなんだから大目に見てくんない？」

「うへエ……」

# 決め手のひと味！おなかいっぱい大作戦―その1

「そういえばだけど…あなた結局、『命令』DISCは入っていたの？」

『夢』の中、訓練開始前のミーティングで、思い出したことを訪ねてみる私。

ゆめポートに行ってから今日で四日経つ。

あれはひなたのDISC無効化確認が目的だったわけだけど、

DISCが発見された時、ギヤーギヤー騒いだのがいたわよね？

今更だけど思い出したわ…聞かせてもらおうかしら、鳴滝くん。

「…なかった。F・Fにも確認してもらった」

なんなのよ。今の不自然な間は。

三白眼が伏せたのがよく見えたわよ。追及した方がいいのかしら？

「間違いないね。肉体の記憶を読んでまで確認したんだ。

DISCの存在に気が付く前後、数時間までね……

不自然な記憶の空白もなかった」

私の表情に気づいたみたいね、F・F。

まあ、F・Fがそう言うなら、聞くべきじゃあないわね。



本当に何も問題ないか、でなければ、突っ込んで聞いてもいいことがないか…  
『命令』DISCがなかったことは本当みたい。

「もつと言うと、スタンドDISCだって差されてすらいなかったのよ。」

「気が付けば、こいつの足元に放置されてただけ…」

「メガビョーゲンと初遭遇した時だな。DISCの『記憶』に気が付いたのは」

「あら、まだ聞いてないわね…ひなたもそうみたい。」

「知ってるのは、のどかと、ラビリン、ペギタン、ニヤトラン、か。」

「新学期前日の話、だよな? 気絶しちゃってたときの」

「それな。メガビョーゲンに吹っ飛ばされたとき、」

「たまたまDISCが頭に刺さった。」

「そのまま入ってくる情報量に吞まれて気絶しちゃった…んだと思う」

「わたしにとつても、プリキュア初仕事だったんだ。あの日」

「それでのどかつちも気にしてたんだ、始業式の前、タツキーのこと」

「学校でのメガビョーゲン襲撃が初めての出会いじゃあなかったのね。」

「私はあの日、もう鳴滝くんへの警戒を解きつつあつて気にしてなかった。」

「私自身がプリキュアとスタンドの事情に巻き込まれていなければ、」

「今頃もう嫌な過去として整理し終わって、他人扱いだったでしょうけど。」

そっちの方がよかったかしら?…これは愚かな考えね。

仮にそうなら、のどかとひなたはただのクラスメートで、

ヒーリングアニマルのみんなは他人よ。

それに、もしかしたら。彼がいることも、いずれはプラスかもしれないわ。

…いや、正直ドーかと思うわ!

女三人に男一人!フケツよ!でもドーシヨもナイの!

「ン?どつたの、ちゆちー。ヘンな顔して首フツてるケド」

「なんでもないわ。それより、そうなるとホワイトスネイクの目的が見えないわね。

『命令』もせず、スタンドDISCを近くに置いておくだけ。

それつきり気づかれなければ、使ってすらもらえないわよ」

「ソレだよソレ。そもそも目的がなんだってんだよ」

ニヤトランが、私自身疑問だった部分に突っ込んできた。

ことの本质が未だ見えないのが恐怖よね。

「ひなたにシヨッピングモールを壊させることとよおー、

夢の世界でヤリタイ放題しようとした名前覚えたくもねークソヤローだろ?

オレにや繋がりがわかんねエーぞ?」

「どつちも悪いことラジ。」

そんなことばかりさせようとするなら、止めなきやいけないラビ」  
ぶつちやけたわねえラビリン。

それはそうなのよね。それがプリキュアよ。

でも、ペギタンはさらに悩んでいるわ。

いつかはわからなきやあいけない所だものね。

「ペエ。悪いこと…悪いことをさせるのが目的ペエ?」

「目的。手段じゃあなく目的か?」

…悪いこと、それ自体が目的ってことか。ペギタン」

「共通してるのは、それだけペエ。」

あとは、すこやか市で起こったこと…だペエ」

鳴滝くんもそれに乗って考え始める。何か、思いついたみたい。

私が聞く前に、ひなたが聞いた。

「なんかわかったの?」

「わかんねーけどな。ちよつと思っただけだ」

「言ってみて。材料はいくらあっても困らないよ」

「そう言うなら……」

その、な…いじめだとか、悪いことをやる集まりっていうのはな。

悪いことに手を染めてること自体が一体感で：裏切れない繋がりになるんだよ。

『みんなやってる』つつーか、『同じ穴のムジナ』つつーか：

もし、抜け出したり、イイ子ぶったりしたら、

次はそいつが叩きのめされる番だ。裏切者だからな：

これ、多分な：半グレ集団とか暴力団でも同じことだぜ。俺は、そう思う」

：スゴイ説得力ね。さすがは当事者よ。

これは、プラスね。彼以外に、悪人の思考回路を持つてる人間はここにいないもの。

ただ、それも：悪の一言で片づけていいのかしら？危険な気がするわ。

「つまり、さあ：タツキー。」

あたし、悪いヤツらに引き込まれようとしたの？」

「：かもしれない、がな。」

だとしてもオジャンになったってワケだ。

もう終わってた話だな：お前が『命令』DISCに感づいた時点で」

「：……そっか。あたし、スゴイ？名探偵？」

「スゴイスゴイ。現代のシャーロック・ホームズ」

「でしょー？……って、何なのさ、その棒読み」

「ホームズは知ってるんだな」

「名前だけは。って、バカにしてんの?」

「別に。ネタバラシくらいいたいかな?」

「って、ずいぶんくだけたわよね。ひなた相手には。」

まあ、おしやべり大好きな子だし。慣れもするかもね。

ひなたの向こう見ずを心配してくれてる様子もあるし…

好ましい変化と受け取ろうかしら。

のどかも、いたって気楽に横から話に乗った。

「鳴滝くんって、もしかして文学少年?」

星の王子さま、元から知ってたみたいだったし」

「んなことはない。低学年の頃に図書室に居座ってただけで。」

児童文学だよ、児童文学。それもスプリンター目指すまでの話な」

ハイ、脱線、脱線。俺が悪かったな。

両手で周りみんなを抑えるみたいな仕草で言いながら、鳴滝くんは続ける。

「さつき言ったことにな。すこやか市だけで起こってるって条件を加える。」

すると…ヤクザ者のすこやか市侵略、っていう筋書きはできなくもない」

「…笑えないわね、それは」

おばあちゃん達の苦勞が無になるような話、捨て置けないわ。

ただ、話の運びがあまりにも安易ね。

その筋書きに持つていく材料が少なすぎる。

わかつて言ってるんだと思うけど。

やっぱりというか、F・Fがすぐに突っ込んだ。

「へいへい、魁。そりゃあ」

「わかつてる。プッチ神父のキャラじゃあない。

ただ、後ろ盾だとか隠れ蓑としては、ありえることだろ。

F・F。お前の世界と、俺達の世界が別物だっというんなら…

ここに来たプッチ神父はどうするっというんだ？

家だとか、戸籍だとかよおくくッ」

なるほど。言う通りではあるわね。

確かに、まっとうな機関は頼れないわ。

首から上だけ右往左往させてるひなたが、迷った末にこっちに聞いてくる。

「あのさ、わかつてそーなちゆちー。どゆこと？」

「そうね……ある日、なんの脈絡もなく突然現れた人間ってことよ」

「つ、つまりい？」

「お母さんもお父さんも、生まれ故郷すらもその人にはないんだよ。」

だって、その人はよく似た別の世界で生まれたんだもん。

この世界の生まれじゃあないの。そんな人が家なんか、持つてるはずない」  
のどかが途中から私の説明を引き継いでくれた。

考え込んだひなたは、やっと得心がいったらしく、ぼそつとつぶやく。

「なんかさ……さびしいね。それ。」

そこまでしてさ、なんで別の世界になんか来んの?」

「……さあ?なんでだろうーな?」

わかっているのは、今確かにこの町にいるホワイトスネイクと。

この町の人間を傷つけようとした最低でも2枚のDISCだけだ」

極論、敵がプツチ神父かどうかすら定かじゃあないのよね。

ホワイトスネイクとDISCの両方が揃っているのなら、

限りなく黒ではあるけれど。

「そうね……黒幕の後ろ盾がヤクザっていうのはありえることとして。

大切なのは、私達は敵を知り、敵には気づかれないことよね」

「それだ。敵に知られたら、身内を狙われたら、最悪……言いたくねえけど……

東方仗助になっちまうぞ。目の前でじいさんを殺された仗助にな」

ああ、沈んじやったわ。のどかも、ひなたも。

あなた、もう少し言い方を……とは思っても、言ってることもわかるのよ。私自身、そうなるわけにはいかないわ。

そんなことになったら……折れてしまうかも。

「……どうやら、ラビリンの番ラビ」

出し抜けに進み出たのはラビリン。ちよつとビックリね。

でも、聞けばそれなりに納得できた。もしかしたら、最適解かしら。

「どのみち、学校にいる間はどかに引ッ付いていられないラビ。」

だったら、町中をこつそり回って人間たちのウワサ話を集めるのがいいラビ」

「おつ、アリじやあねえーかラビリン！」

人間たちからずつと隠れて動きまわるしかねーオレたちなんだからよおー

身元バレもクソもねーってヤツだよなあーッ」

「それならボクにも出来るペエ。ちゆやみんなを危険にさらさずに済むペエ」

「単独行動はやめろよ！」

ラビリンの話聞いて張り切りだしたニヤトランとペギタンに、

鳴滝くんが素ッ頓狂に必死な声を上げた。

「お前らが死んだって同じことなんだぞ」

冷静になったつもりなんでしょうね。声がうわずったままだけど。



あなた、この中で一番女々しいわね。ちよつと笑つちやうわ。

のどかとひなたも、少しビツクリした後で、口が半笑いになつてる。

同じように驚いて動きを止めたラビリンも、

ふんぞり返つて自信タツプリに答えた。

「言われるまでもないラビ。」

ちやんとみんなで動くラビ。

だいいち、ラビリンにはラテ様のお世話があるラビ。

ウワサ集めにかかりつきりは出来ないラビ」

「大丈夫だペエ。怖くないようにするペエ。」

危なくなる前に逃げるペエ。

…ペエ? ラテ様も? 魁、使うペエ」

一緒に答えたペギタンは、足元に来たラテに気づくと聴診器を取り出して、  
鳴滝くんに渡した。私も使うのよ? 清潔に使つてよね。

まあ、私にも聞こえるんだけどね。近づきさえすれば。みんな寄つてきた。

『ラテも、お散歩中にお話を集めるラテ』

「……自動追跡型スタンドとかに引つかかるなよ。命あつての物種だぞ」  
さすがにラテ相手に強く出るのは諦めたみたいね。

聴診器を返しながら小さく首を横に振る鳴滝くんの

正面に出たのはニヤトランよ。

「な、なんだよ」

「魁、ありがとな。心配してくれてよ」

「別に…俺の、勝手な都合を押し付けてるだけだろ」

「オレも勝手にアリガトーなだけだぜ。もらっとけって」

「…そーする」

「タツキー、テレてる。カワイー」

「うるせえ黙れ。遊びじゃねえーんだぞ。」

さっさと始めんぞ訓練」

見ててわかるわ。あなた本ツ当、感謝に慣れてないわねえー。

素直に受け取った方がよっぽど気分がいいのに。

そうやって、多少は好意に慣れなさい。ひなたはいい練習台だわ。

もちろん私でもいいし、のどかでもいいわ。

「そうね、始めましょうか。」

特に私はしつかりしないと。巨大な敵に空中で拳打ラツシュよ。

のどかも、そろそろ動く大目標でやる？

ひなたは太陽<sup>サン</sup>での狙撃練習：鳴滝くんは避難者救出訓練よね。

前回はありがたかったわ。変身も、むしろそのために活用してほしいのよ……」  
さてと。

おととい、密かにF・Fに聞いたけど。

確か今晚だったわよね？鳴滝家の米ビツが空になる日は……

ここに至るまで、焦った様子がまったくくはないのは気になるけれど。

明日から頼んだわよ。ペギタン、ニヤトラン。

## 決め手のひと味！おなかいっぱい大作戦―その2

「あ、そうそう。」

明日、仗助さん億泰さん康一さん…に見立てた敵と戦ってみるって話だけれど。

まず最初、あなた一人で戦ってもらうわね。

私達はしばらく見てるだけ」

「…な、なんで？」

「スタンド使いには、まずあなたが向かう。

作戦通りにやるっていうのもあるけれど。

さっきの物言い…東方仗助になるぞ、って。

モノスゴく失礼よ。私だったら傷つくわ。

そういうの、許すべきじゃあないと思うから。

それに、一番傷つくのはあなたの品性よ。

だから、あなたが最初に仗助さんに触れなさい」

……ああ、クソ。

ボコボコ確定じゃあねーかよ。

面倒なことになった：ちやんとやるよ。しよーがねーもん。  
逆らえなくなつたもんだ。

そんなことを考えながら教室で弁当をつついでる。

これだけは明日からも変わらず食べる、教員と同じ日替わり弁当：  
普通は取れないが、俺の場合は身障者の一人暮らしつてことで特例。

代金は実家から引き落としだからな。問題ない。

唐揚げにチリソース：デザートにイチゴ、か。悪くはない。

全体的に味が薄めなのはマイナスだがな。

とか思うんだが、味が気になりだしたのはここ一週間くらいのこと。

それより前は、食つてること自体ろくすつぽ覚えてなかつた。

：死んでるって感じ？まあそうなんだろう。

家での自炊にはわりと必死になつたんだけどな。

どんなに呆けた人間でも、度が過ぎた空腹の前では我に返るんだよ。

あのときはお徳用ピーナツをひつたくるように買ってきてゴリゴリ食つた。  
料理なんかできなかつたからな：こつち来たてだと。

そんな経緯もあつて、調べものには抵抗がない。

食い終わったら席を立ち、図書室に向かう。

ここのところ連日だ。目当ての本は『工作機械』…

そのものズバリのやつはほとんどないが、

文字通り工作用の機械の使い方を書いているやつなら結構ある。

それと、工場に關係する本をあざれば、いける手応えはあるな…

「きみは…興味があるのかな？ 工作に」

「松葉杖。前、折ってしまったので…」

自分で作れたら安いかな、程度の思いつきです」

「なら、3Dプリンターとか、どうだね。」

「設計図を作れば、後は全自動らしいよ」

「ありがとうございます。親にねだってみます」

後ろから声をかけてきてる痩せたメガネのオッサンは、隣のクラスの担任だ。

つまりは、花寺、沢泉、平光の担任。円山まるやま、とか言ったつけか？

それがいきなり近くに現れるようになったのは…

警戒されている。明らかにだ。

俺の背景を知らないはずがない立場の人間だ。

沢泉に対してやったことも知られているだろうよ。

未遂だがほとんど性犯罪者だからな、当然か。

今後、一生こうなんだろうな。俺…：しかるべき報いつてやつだ。

げんなりする資格もなし。ただ肅々と受け入れるだけだな。

それとも…：土下座でもした方がいいのかな？人の顔を見るたびに。

「顔が硬いねえ。きみは」

「見ていて面白い顔でもないでしょう。失礼します」

こうして探りを入れられるのだって、まったく当然のこと。

さつさと去るの一手だ。ボロを出したらヤバイんだ。

本は借りていこうかと思つたが、早く立ち去るのが優先！

あまり成果があつたとは言えないな…

教室に戻る途中、ボーイツシュと温和を見かけた。

軽く手を振ってきたので会釈だけ返した。

放課後。何もせず家に直行。外が明るい。これ自体はいつものことだが。

…さて、ついに来ちまったな。カネなしメシなしタイムが。俺が高校生だったら良かったんだがな。バイトできるから。

いや、できないか。誰も俺を雇わないかも…

実際、どれだけ知られてるんだ俺？

こつちを見るなり身構える大人がそれなりにいることまではわかつてるけど。

どうあれ、今の俺は13歳。俺を働かせたヤツは児童労働でしょつぴかれるわけだ。

新聞配達ならやれる場合があるらしいが、それも両親が国に許可を取ってくれればの話。

そんな協力、望めるはずがない。そもそも、この足でどうするっていうんだ。

ずっと色々考えてはきたが、真つ当に金を稼ぐことは不可能との結論はどうにもならず、だった。

金がなければメシは買えない。メシがなければいずれ人は死ぬ。

つまり、金なしにメシを手に入れるアテがなければならぬわけだが…

前も言ったな。我に秘策あり、だ。

「……で、どうする気？」

「メシのことを言ってるんだよな」

「当然。前にも言ったけど、栄養が欠乏している…」



「こんなんじゃあ、あんたの左手はいつまでたつても元に戻せない」

「それなんだが…そこらへんも、お前の力を借りることになるな」

「まあ、黙って見てる…けど、生きる死ぬの問題になったら、

あたしは勝手にスマホを使う。あんたのね」

「今日まで俺が考えてきたのは、それをさせないためなんだぜ」

F・Fも、今日までしつこいくらいに聞いてきてる。

栄養が足りない。メシが足りない。どうする気なんだ…

百も承知だよ。今、死ぬ気はないんだから。

「もう一度言っておく！」

魁。あたしはあんたを『エートロ』にするつもりはない。

死んだなら、その肉体は腐るに任せる。

それをあいつらに見せることになる」

「…やめろよ、んな悪趣味なコト」

「させるなど言ってるのよ。あんたはわかっているはず」

「わかってる」

さすがの俺にもわかる。すでに関わりすぎた。

勝手に罪悪感を感じられて数か月単位で引きずられるだろう。

そういう人種に生まれて、そういう文化で育ってきた奴らなんだ。無駄な消耗をさせるわけには…いかないな。

家に鞆を置いて、畑ばかりの方角に向かう。目的地は河原。

「承太郎さん、こんなトコでネズミ追跡したのな」

『『ラット』か？水にクツ落とすなよ』

「落とすも何も、入らない。」

用があるのは、川沿いに堆積した土なんぞでな」

「じゃあーダニ注意だな。ベッドにつくとメンドクせえぞ」

『『水族館』での経験？』

「まあね。経験というか伝聞だけど…」

それより、堆積した土？」

「ナイル川の氾濫はんらんがエジプト文明を作った。

数十万人とか、数百万人の食い扶持をまかなう巨大な恵みだぜ…

そこまではいかなくともよおーッ

俺一人養うくらいなら余裕の栄養が、ここにはあるはずだよなあー」

「…まさか、てめーッ!?!」

「フリー・ファイターズッ!」

F・Fのひきつった声を俺は思いっきり無視し、

足元の土に右手を向けてF・F弾を撃ち込む。

そのまさかだぜ。『灌漑かんがい農法』ッ!!

もちろん、植物なんかすぐに育つわけがない。

だが、あるじゃあないか：栄養があれば、すぐにでも育つ生物がな!

それがたとえスタンドであったとしても、実体化型のスタンドであるならば!

「よし、『囲った』!」

この1m四方の、人間向けの栄養素全てを抽出して固める!」

土の中からムリムリと押し出されてくるチューブのカラシじみたドロドロが、

俺の目当ての『栄養』だ。

あえて繁殖に使わず、ひたすら凝縮して固めた『栄養』。

もちろん、フリー・ファイターズだ。水生微生物の塊!

「……食うのか?それをよおくくくッ」

「当然だろ。この過程で土の中の微生物だの何だのを根こそぎ殺してる…

食わない方がよっぽどバチあたりだぜ、すでに」

「ゲエエーッなんてこった!」

てめーのスタンドを食うバカがいるとは……

思いもしなかったぜ。こんな目に遭う日が来るなんて」  
「トニオさんをバカだと？」

味はともかく、栄養では負けずにやってみるぜ」

「勝手にしろよ、もオオ~~~~ツツ……」

元が生き物だからこそ、完全栄養食になるんだぜ。

炭水化物もアミノ酸もビタミンもカルシウムも、すべてここから摂ってみせる。  
俺だつてフリー・ファイターズをかなり扱ってきたんだ。

こういうことも、わかるようになってきた……！

出来て当然と思うこと。それこそがスタンドを扱うコツだもんな。

このままブロック状に固めて、それを3つくらい作って持ち帰ってやるぜ。  
ホクホクで次の作業にかかろうとすると、草ムラから覚えのない声が出た。

「や、やめてください。ヒーリングアニマルさん」

「……………。ハア？」

「そんなことをしたら、みんながここで暮らせなくなってしまう」

「……………き、気のせい？」

「違うみたいね。この、リングに手足が生えたみたいなのヤツは……」

スタンド？ でもないようだし……オイてめえ、何者だ？」

「いや待て、F・F。まさか…:エレメント、さん?」

俺の手の甲から銃口を生やしてきたF・Fをなだめつつ、その半透明な存在をながめる。

DISCの知識だけならば、俺はこいつをスタンドだと判断しただろうが…  
それだけではないことを、俺もF・Fも知っている。ましてや俺は経験者だ。

ダーティ・ウォーターが捕らえていたのは俺だけではなく、  
水のエレメントさんもだったんだからな。

F・Fの言う通り、そいつは、手足の生えた、つぶらな瞳のリンゴだった。

「はい。実りのエレメントです。」

お願いします。こんなことはやめてください。

みんなの恵みを根こそぎ持っていくなんて」

「……ま、マジか」

エレメントさんに止められるとは…:ここで強行するのは簡単だ。

だが、こいつの言う通りだとして。

ここで『みんな』…:生き物全てのことだな…:が暮らせなくなるというのなら、

俺はビョーゲンズの同類に成り下がるわけで。

ヒーリングアニマル、そしてプリキュアの目的と真つ向から反することになる…:んだ

な。

今のところ、あいつらの助けになるために生きてるっていうのに、進んで敵対行為を働いたなら、とどのつまりは遠回りの自殺。アホだ。「ああ、チキシヨオ。のっけから頓挫した…」

悪かったよ。やめるよ…『栄養』も返すよ。

殺しちゃった生き物は返せねえ。それだけは……すまない」

「よかった……なにか、お困りですか？」

エレメントさん相手に見栄を張っても無意味だと思った。

たくさんいる中でピンポイントでこいつがビョーゲンズに攻撃されて、プリキュアに助けられる可能性は、ほぼ無視していいだろうしな。

なので、素直に相談する。

「俺は……見ての通り、人間なんだがな。

人間の仕組みの中で、メシが食えなくなっちゃってる。

このままじゃあいずれ死ぬ…けどな。

人間の決まり事を破ることはしたくない。

だから、こんなことをしようとしたんだが……

何か、代わる方法はあるか？」

「あっちのイチゴ農園が、今年は豊作です。

事情を説明すれば、きつと分けてくれます」  
話にならん。

相談しておいてエラそうなことに、俺の顔は歪んでいたことだろう。  
イチゴか。弁当のやつ、ウマかったが…

「悪いけど、その手は無理だ。

俺は嫌われ者の人間なんだ…人間は頼れない!」

「死にそうなのを見捨てられるほどですか?」

「……いや、全員がそうじゃあない。

でも、頼ることがどう考えても迷惑になる。

人間を頼らない方法をくれ……!」

「ワタシだって迷惑ですよ?」

「うッ……」

……強烈な一撃をもらった。油断しきった脇腹に、だ。

そりゃあ当然だ。人間に限った話じゃあないよな。

ペギタンだって、ニヤトランだって、迷惑してるに決まってる…!

俺はもう、さっさと立ち去りたくなった。

だけどな…『中立』…いや、『好意的』なこいつとすら

まともに話をまとめられないんだったら、俺はもう何もできやしない。  
踏みとどまる……よし。

もう慣れつこだろ。きつい言葉なんて。

「な、なら。俺が、何かお前に利益を提供できないか？」

その代わりに、エレメントさんに迷惑がかからない方法を」

「ごめんなさい。言い方が悪かったです。

生き物は、絶対に迷惑をかけています。生きてる限り…

でも、そこにはたくさんの『ありがとう』があるんですよ？

あなたも、『ありがとう』を返せばいいんです。

あなたは、きつと頼るべきです」

「……なら、頼らせてください。エレメントさん…お願いします。

もし、あいつらを頼ろうものなら、ほとんど確実に『幸せ』を脅かすんだ。

俺が近くにいるだけで、すでに迷惑があふれ出してるのに…

だから、人間の仕組みの外側で食いつなぐしか、俺には、ない！」

松葉杖を手放し、ほとんど倒れるままに土に手をつけて頭を下げる。

また、汚れちまうが…洗えばいいんだよ、洗えば。



どうせ俺の差し出せるものは、下げる頭くらいのものだ。

あとは体だ。労働力…なんでもやってやるさ。

俺の行動にビビッたしぐさを見せたエレメントさんだが、

笑顔で返したものは拒絶じゃあなかった。

「はい、頼られました」

そこからは、しつかりと相談に乗ってもらった。

結論としては、俺が当初やろうとしたようなことは、

ほぼどこであろうとエレメントさんの迷惑になる。

唯一迷惑になりにくいのが、常に水と恵みが巡っている海だった。

それでも比較的でしかなく、最後の手段にしておくべきだ、との見解を授かった。

そして質疑応答の中で、エレメントさんが関わりにくい状況を知ることができた。

すなわち、エレメントさんはほとんど人間に密着しないこと。

つまり、出たての『残飯』や『老廃物』にエレメントさんはまず存在しない。

そこから栄養素を搾り取る分には…少なくとも、人間一人分程度なら…

エレメントさんとは、ぶつからない!

そして『老廃物』については…すでに、俺は知っている!

「ありがとうございます。これなら、やれる!」

「どういたしまして。」

困ったら、他のエレメントさんにも相談してみてください。  
あなたの中のヒーリングアニマルさんも」

俺は、喜び勇んで行ったともさ。

日帰り浴場に。古い方な。

そこでコソコソ隠れて、同じように栄養分を抽出した。

極端な話、人間をゆでたダシ汁だからな。

わずかながら有用な栄養分も溶け込んでいる。

メインとなる大量の『老廃物』と合わせて、

三十分ほど抽出を頑張った結果…

一食に相当するブロックを、辛うじて一個作成できたのだ。

抽出開始時の排出口の汚れ具合から見ると、

これは…毎日とまではいわないまでも、二日に一個の作成は可能と見た！

同じことができる場所を、もう一か所見いだせたなら…

俺はもう、完全な自活が可能だ。金銭も、今後いちいち破損するだろう服だとか松葉杖に回せるようになる。やったぞ。

想定通り、エレメントさんの苦情もない。極上だ。

……ん？ 原材料が何かわかってるの？

俺はな、過程や方法なんか求めちゃあいねーんだよ。

ただ栄養素が足りるといふ結果さえあればいいんだ。

宇宙飛行士だってためーのシヨンベン飲んでんだよ！濾過したやつ！

……ずいぶん前に読んだ本に書いてあった、と思う。

……とか、考えてたんだがな。

俺はまた、かけがえないことを学んだよ。

人間、やせ我慢でどうにかするにも限度があるってことをな…

あえて語らない。死ぬような目に遭ったとだけ。

だって、絶対に気分悪くなるぜ、語ったら。

……わかった、簡単にだけ言う。

ドブを食ったに等しいものだった。

俺は吐いたが、他に何もないので無理やり飲み込んだ。

それだけだ。それ以上聞くな。マジにやばいんだ。

「明日から…毎日さ。食うのコレ？」

「…無理だ。いずれ発狂して死ぬ。」

グウブツ…『残飯』だ。やっぱり『残飯』しか…ゴボツ

ケイレンする喉と胃をねじ伏せ続けること1時間。

ペギタンが来た。F・Fがニユツと伸びてドアを開けてくれた。

「ペエツ!? いったいどうしたんだペエーツ!？」

「お前、こそ、こんな時間に…グフツ」

「どうでもいいペエ。何があつたペエー!」

「…みつともねーとこ、見せちまつたなあ。」

もう、食えねえ。しばらく食いたくねえ。ゲブツ

ウソはついてない。ウソはな。

食べ過ぎだと解釈したペギタンは、首をかしげながら、

ビックリしたペエ、とだけ言い残して今日は帰った。

俺か？俺は、そのまま動けず寝ちまつたよ。

大丈夫。『夢』の俺は健康だ。『夢』は何でもありなんだからな。

## 決め手のひと味!おなかいっぱい大作戦—その3

結論から言うと、やっぱりアツサリボコられた。

物陰からF・F弾を撃ち込もうとした俺は、

気が付けば『ツルンツ』の文字を踏みつけており、

滑ってコケたところを康一に接近されて

A c t 3・F R E E Z Eであっけなく地面に沈んだ。

仗助に触れるうんぬん以前に、康一人にやられちゃった。

そして、慌てて参戦してきたプリキュアたちの姿を認めた仗助は、

動けない俺をキツチリとドララララとボコツて再起不能にしていたわけだ。

：当然だが、本人じゃあない。

承太郎の記憶を元に復元したイミテーションだ。

だが本人をしつかり再現してもいない。

それをやったら、ジョセフの言うところの『死者の復活』になっちゃまうからな。

だから、花寺は何度かの練習を経てこうやることにした。

俺達を、『矢』を持つ『明確な敵』と設定して。

敵に対する『戦闘』だけを再現したマシーンを作ったんだ。

これはこれでおどましい。人を人とも思わない行為と言えるかもしれない。そう思った上で、花寺は割り切った。

「クレイジー・ダイヤモンド。あなたは誰よりも優しい力！

ザ・ハンド：無敵の右手は、最後まで誰の生命も奪わなかった。

エコーズ。大切な人たちと町を、ついに守り切った『音』！

……お願いします。わたしたちに戦いを教えてください」

罪滅ぼしになんかならないって、花寺自身が思ってるんだろうな。

それでも、他の誰にも任せず、花寺自らが作った。

俺達は負けたら死ぬ戦いの中にいる。取れる手はすべて打たざるを得ない。

だから、これは私達みんながやることなのよ。沢泉はそう言っただけで、全員が頷いている。

そもそも言い出しっぺは俺なんだし、全責任の半分は俺によこしてくれていい。

そうやって出来たのは、仗助ロボ。億泰ロボ。康一口ボ。

ラバー素材と、ボルトとかナットで出来たみたいな姿のそいつらを

今回の舞台、杜王町に放り込んで戦いは始まった。

…で、早々に脱落した俺をよそに戦いは続いたわけだが。

わかってはいたが、プリキュアたちの敗北だ。

気絶させられた俺に見ていられるはずもなく、今、こうやって反省会を始めている。

仗助たち行きつけの喫茶店、カフェ・ドウ・マゴでだ。

当然、仗助ロボたちはいない。戦闘終了後に全員で

『ありがとうございました!』と頭を下げてから消している。

ちなみに、消され際にみんなケガを治された。クレイジー・ダイヤモンドで。

「あー。なんだ…その。」

昨日の、東方仗助への暴言は…悪かった。反省する」

何も配慮する必要がありやしない仗助ロボにああされたら、俺も謝るしかないな。

聞いた沢泉は、うなずいてから自身も頭を下げてきた。

「私こそ、悪かったわ。」

私のやったことは、ただ負ける原因を作っただけよ。

これは『夢』だけど、実戦だったら『死ぬ』と言ってるのも同じ仕打ちよね。

他にやり方はいくらでもあつたはずよ…ごめんなさい」

…調子が狂う。

俺が悪かつたって言ってるし、でなきやあお前もこんなことしなかつただろ。

そりゃあ不満には思つたけどよおー。

でも、こんなやり取りを引きずる方が互いに面倒くさいに違いない。

「わかった。この件はこれで終わりということだ」  
「ええ、お願い」

余計な話を締めくくった後で話すのは結局、沢泉。  
すっかり訓練の司会進行と化している。

すこ中のホープで、ガチのアスリートだからな。

人選としては当然つてとこだな…

今回の戦いの経緯は、こうだ。

まず、俺が一瞬で鎮圧された。

距離をとっていたプリキュアたちは間に合わなかった。

それでも数としては3対3。単純なパワーならプリキュア側が上だ。

なので、真っ先に億泰ロボを全力で潰そうとしたが…

そこにきて康一口ボがひたすらイヤラシイ妨害を繰り返してきた。

スパークルの着地点に尻尾文字『ポヨヨオオ〜ン』を置いて、

あらぬ方角にふっ飛ばしたりだとか。

億泰ロボの正面を迂回して突っ込んだフォンテーヌの足元に

尻尾文字『スツテン』を置いて、突っ込む先をショーウインドウに変えたりとか。

そんなことをやっているうちに、フォンテーヌのすぐ傍にいきなり康一口ボが現れ



た。

億泰ロボのザ・ハンドで、削り取った空間が閉じる『引き寄せ』で瞬間移動してきたのだ。

瞬時に Act 3・FREEZEを叩き込まれたフォンテーヌはアスファルトに全身をめり込ませたまま指一本も動かせなくなり、助けに入ろうとしたグレースが

逆に仗助ロボと億泰ロボの挟み撃ちに遭ってボロボロにされ、あえなく変身解除。

一人残ったスパークルは進退窮まり、多少は反撃するも叶わず。太陽<sup>サン</sup>? 使えるわきやあねーだろ、街のド真ん中で!

これにて全員戦闘不能。敗北確定。

「振り返ると…今回、一番恐ろしかったのは康一さんだわ。」

億泰さんに攻撃するところまでいっても、すぐに引き離されたもの」

「それを言うなら、仗助さんだってスゴかったよ。」

わたしにピッタリ張り付いて、逃がしてくれないんだもん。」

今回の戦いで、『なおす』力は全然使ってない…スタンドの地力だけでこれだよ?」

「あたしはみんなコワイ。フクロ叩きじゃん最終的に!」

今回の花寺は、前回のエジプト行きチーム戦とは逆の立ち位置になったようだ。

「仗助にマークされたまま動けなくなり、そのまま挽回できなかつた。当然ながら、仗助のいた場所は俺のいた場所だ。」

「人質に等しい状態だっただろうよ。誰かひとりには仗助に向かわざるを得なかつたんだ。」

「こつちは前回とまったく同じ状態だなあー俺。」

「今回に限っては責任は薄いけど、足を引つ張つたには変わらない。」

「もちつと、どうにかならねーかなあ。」

「口には出さん。沢泉を怒らせることがわかりきつてる。」

「たつた今決着した話を舌の根も乾かねえうちに蒸し返すんだからな。」

「とか思つてたら、本人が言つた。おい。」

「やつぱり、4対3で戦うべきだったわね。」

「鳴滝くんを先に行かせるにしても、すぐ戦える位置に私達がいないと」

「今回みたいに『瞬殺』されて、どうにもならなくなるかもしれないわ」

「死んじやつたら、おしまい…そんなことはさせないよね」

「そんな時は助けてくれ。」

「ま…俺のスタンドはフー・ファイターズだからな。」

「即死しない限りはなんとかなるだろうよ」

「手とか足とかなくしちゃうのもヤダかんね。

それ以上不自由になったらさあー、一人暮らしとかムリじゃん!」

「たぶん…その辺も…」

…待て。

待て俺。口走る前に考えろ!

俺が、言おうとしたのは…

『大丈夫じゃあねーかなあ。』

今、俺、左手ないんだぜ?皮だけ緊急でこさえたF・Fの塊…

最悪、頭と臓器が生き残ってりやなんとかなるだろ』

知ってるだろ。俺がよくても、こいつらは良くないんだ。

沢泉にあれだけ怒られて、まだそんなセリフをぬかすのか?

「どったの?」

「…その辺も…その通りだ。」

F・Fがいるから、だましましはやれるけどな」

…よし、乗り切った。

三人と四匹がそれぞれにヘンな顔をしているが!

ただドモツた程度だ。それで通せる。

F・Fには察されたくさいけどな。そっちは仕方ねえ。

「その意味じゃあ、お前らよりはずっと取返しがつく。」

一人暮らしたからな。ごまかす相手が誰もいないぜ…

そういうことだから、ひとまずは命だけ助けてくれれば十分だ。

お前からこそそういう目に遭うなよ。F・Fの貸し出しとか、無理だぞ」

「パパとか、お兄とお姉に、なんて言えばいいのかな…」

そんなコトになつたらさあー」

「F・Fで代わりを作って、俺みたいに時間をかけて治すとしてだ。」

50m以内に張り付き続けることになるな、一か月以上…」

「ストーカーじゃん」

「イヤならんケガすんな。そーゆーこつた」

空気も戻った。期待した通りの反応だ。助かるぜ平光。

だけど、俺はこいつみたいにはなれないのはわかつてる。

わかつたつもりで気安く軽口を叩いてたら、いつか地雷を踏むかも…

用心しなければ。こいつは、俺の最大の後ろ盾なんだ。

今の俺は、皆の助けになるためにあるんだと思ってる。

それを、誰にも望まれなくするわけにはいかないだろ？

進んで死にたいとはもう思わないからな。だからこそ身を守らないとな。

「ン?」

「なんでもない、こつち見んな」

オホン、と沢泉が咳払いをした。

「…まあ、そうね。」

スタンド使いが相手だったら、やっぱりあなたにまず行ってもらうしかないわ。こんなこと言いたくないけど…本当に嫌だけど。

そういうことになって一番取返しがつくのは、F・Fと一緒にあなただものね。でもね、忘れないで。あなたが痛くなくても、私が痛いわ」

「……。ああ、わかってる」

思いとどまってよかったよ。さっきの言葉。

というか…やっぱり、感づかれてたくさい?

花寺も身を乗り出してきた。

「鳴滝くん。わたしが死んだり、大怪我をしないように…守ってくれるよね?」

「ま、そーだな。力の及ぶ限りだけど…」

「ありがとう。わたしも守るよ。」

また血が足りなくなったら、わたしから輸血するよね?

だから…わたしを守ってくれるように、鳴滝くん自身を守ってほしいな」  
ああ…そりゃあそうなるだろうよ。

血液型の関係で、俺に輸血できるのは花寺だけなんだから。

俺が多量に出血すれば、花寺が穴埋めするしかないんだもんな。

こりゃあうかつにダメージ負えねーよ。なんつー論法だ。

しかも、これだと…逆に俺が花寺の輸血パックになるケースもありえるわけで、  
だつたらなおのこと粗末に扱えないこの体だな…：メシ食わねーと。

「それじゃあ、先頭に立たせた鳴滝くんの守り方は今後の課題ね。

一人での戦いは論外ってことよ…」

話を戻すわ。仗助さんたちの戦い方は、やつぱりチームワークよね」

「うん。でも、別にあらかじめフォーメーションとか決めてるわけじゃあなくて。

億泰さん、たぶん思ってるままに動いてたよね？」

「それよ。康一さんは、それをわかって完璧に合わせてきてる感じだったわ…」

億泰さんのスタンドプレーを抑えないで、そこに連携できるのよ。

お互いのクセとか考えを隅から隅まで知ってるからこそその動きよね…」

「仗助さんは、それを邪魔させないためにわたしを逃がさなかったのかな。

だとしたら、すごいよ…：信頼だけで作戦が出来ちゃってる」

言っている通りに話は戻る。戦いの反省会にだ。

億泰は、仗助たちチームの中では最も考えが浅いだろう人間になるが、その直感と感情で動く気質にピタリと合わせられる仲間がいることで、爆発力だけを發揮していたのが今回の戦いだった…

以前、平光は軽はずみな行動を非難されている。花京院にだ。

だがそれも、クセを読み切れる仲間のフォロワーがあるなら長所だけを残せるかも…  
短所を潰すのではなく長所を伸ばし掛け合わせる。

そんな手ごたえを得た、有意義な訓練ではあった。

で、翌日の夕方だ。

俺はまた、フー・ファイターズを固めた栄養ブロックをこさえて帰ってきた。

今度は商店街裏のドブ川でやった。

こつちには水のエレメントさんがいたが、ちゃんと許可はとったぞ。

一か所で何度もやるな。最低でも二週間空ける。取っついていいのは指定した8つのポイントだけ。

(どれも温泉の排水が合流してくるポイントで、ソーメンみたいなのがなびいてた) 条件を守っている限りなら、まあ許容できる……という回答だった。

これなら、日帰り浴場と併せれば毎日一個作る分には困らない。

完全な自活が可能になったと言えるだろう……食べるもんならな!

「どうする気? 食えねエーんだよな?」

「要は栄養が行きわたればいいんだよな……だから、こうする」

落ちてたビニール袋をよく洗う。もちろんフー・ファイターズでな。

ちよつとくらしいの汚れや病原菌なら食い尽くして消しちまえる。

そうやってキレイになった中に、栄養ブロックを砕いて入れる。

そこに、水道水を注ぐ。いっぱいになるまでな。

「……あ、わかった」

俺自身の腕からフー・ファイターズのチューブを生成。

直接、静脈の中から伸ばしたそれをビニール袋に突き刺せば完成だ。

「血管から食えばいい。どんなにマズかろうが、これでクリアだ」

もちろん、ただの点滴じゃあない。



静脈の中からやってきたフリー・ファイターズが、

ビニール袋の中の栄養素を直接持つて体内に帰っていくんだからな。ありえないくらい多い量の点滴になるが、だから問題ない。

30分もあれば『食い終わる』ことができる。

…だが、F・Fから見ると、あまり賛成はできないらしい。

「まあ…緊急用の手段としてはオーケーよ、魁。」

よく工夫してるんじゃないの…?

昼飯は学校でマトモに食うんだから、いいのかもな」

「何か問題が?」

「消化器官を使わないのが気になっただけ。」

使わないとひたすら弱っていくらしいからね…

それとあんた。空腹感はどうすんの?」

「水」

点滴片手にコップに注ぎ、グビグビ飲んでいくタダの水。

栄養が取れているのなら、空腹感に対してはごまかしでかまわないはずだ。

腹さえ膨れればそれでオッケー!

水道代は実家持ちだ。このくらいはタカらせる!

「オーマイガッ。

『水族館』でこんな晩メシ出されたら暴動モンだぜ…

徐倫のブチ込まれた懲罰房棟並みかもな」

「なら、メシの思い出よこしてくれよ、お前の。

じつくり味わうからなあー」

「言つててムナしくなんないの、それ？」

「…言うなよ」

言われてマジにむなしくなった。

氣力を失つて、引きつばなしの布団に寝転がる。

そろそろ干したいな…明後日が土曜日だ。それまでお預け。

宿題もやりたくねえ。明日、学校で間に合わす。

そのまま寝ちまおうとしたところで、ニヤトランが来た。

なんだ…？昨日のペギタンといい…

「別に何の用でもねえーよ？

ただ遊びに来ただけだぜ」

「なら帰ってくれ。俺は眠い…」

「オイオイ、七時半じゃあねーかよ」

無理に追い返すのも気が引けたので、起きることにした。

ここに来た目的を、それとなく探ってもいいしな。

「昨日の『夢』だよ。反省会だよ…」

「おめー何か言いかけてやめたよな?」

「…:…:なんの話?」

「ひなたとか、みんなに言えねーつつーんならよ。

オレが聞かせ。吐いちまえよ」

「やっぱり、全員に感づかれていたらしい。

感づくんなら、そこでやめた事情も感づいてくれよ。

「俺な…:スタンドが、フリー・ファイターズだろ?」

「脳ミソと臓器さえ無事だったら、

他はみんなブツ壊されても大丈夫なんじゃあないかって。

ふと、そう思っちゃまっただけな」

「うげえ…:カンベンしてくれよ。

そりゃあ言わなくて正解だったぜ」

「だろ?」

別に答える必要もないんだよな、俺も。

スットボければよかつただろうによ。

聞かされてニコニコしてるとは限らないんだぜ。

それでも、なんでだろうな…言っちゃまった。

偉そうに。俺はこいつを試しているのかもしれない…

「そんなコトになつたら、だけどなー。

オレはきつと悲しいぜ…

無事な方がいいに決まつてんじゃあねえーか」

「そりゃあ、なあ…」

「頼れよ。んなコトになる前によ…」

前にも言つたよな？ 信じろよな、オレを！」

ニヤトランは結局、九時過ぎまで居座つて帰つた。

目的はわからないままだし、大して追及もしなかつた。

それから宿題をやつて寝た。

# 決め手のひと味!おなかいっぱい大作戦—その4

「まっ……間に合ったあ~~~~」

4時間目、トイレがめっちゃピンチだったケド

ダッシュでなんとかいけた。アブなかつたなあ〜もオ〜

…なによ。アイドルだつて行くじゃんトイレ!

ガッコ行つてればこんなコトの一回とか二回、

無いとは言わせないんだからね!

さ、ゴハンゴハン。お弁当!

教室戻つて、のどかつちとちゆちーと一緒に中庭GO!

つて、隣のクラスを通りかかったトコで気づいたんだ。

なんかヒイてる感じの集団がいるつてことにだけど。

そんなたくさんはいないよ?まばらに七人くらい?

七人が見てる先をたどつてみると…

ガツガツ ガツツ ムグツツ… ガツガツガ…

…ナニやってんの。

めっちゃ必死なイキオイでお弁当ガッツイてるタツキーがいた。

目がスワツてるってゆーのかなあ〜ッ

黒目がお弁当からピクリとも動かないまんまで、

割りばしで食べ物カキコミまくってんの。

っていうか、センセーのお弁当と一緒にゃんタツキーの。

キョーミあるなあ。どれどれ、オカズは？…野菜炒めしかワカンナイじゃん。

他はとつくの昔にのみ込んだ後みたい…

4時間目終わって、あたしがトイレ行って戻ってくるまでの間に？必死すぎない？

ウーン、事件のニオイカギツケちゃったぞ。あたしシャーロキアンだし！

…え〜と？昨日はニヤトランが様子を見てさ？

『F・Fから合図は出てねーぜ』って言った…

でも、こうも言ってた。『メシを食った形跡がねえ。ニオイが全然しねえ』って。

ニヤトラン、ネコだし！あたしたちより、よっぽど鼻スルドいし！

そのニヤトランが言うのなら、タツキーはゴハンを食べてないってこと。

つまり……………どゆこと？って感じ。

ゴハン食べてないのにダイジョーブ？ワケわかんない。

ま、みんなとは昨日の『夢』で話し合ってるけどさ。まだ『動かない』って決めたけ

ど。

でも、どー見てもハラペコじゃん、今のタツキーさあく。

本人から聞いちゃうよ。現行犯!キンキュータイホ!

…つて、待った待ったあーっちゃんと言つて反省するコだよ、あたし!

軽はずみに動くなつてカツキョン(※花京院)に言われたじゃん。

ココであたしがツツコンなら、あたしがへんな目で見られてタツキーめつちやメーワク。

だから…:あつた!イケる方法!あたしサエテる!

『タツキー、そんなにオナカペコペコなの?』

スタンド会話だよ。あたしもタツキーもスタンド使いなんだから、イケる!

相手を意識さえ出来てれば、一瞬で言葉がゼンブ伝わるテレパシー!

てゆーか、なんで今までみんな使わなかつたんだろ。こんなベソリなの。

使う理由なかつた?なら今使うし。

「グツ、ゴホツ、ゴツホツ!?グフツ…」

あ、ヤバ。セキ込んじつた。タツキーが。

めつちやビックリしたみたい。

その辺に寄つかかかって待つ。

『い、今思い出した…：そういうや出来たなこんなコト。』

『ビビらすなよメシ中に』

『ゴメン。ソコまでビツクリすると思わなかった…』

それよりさあー、タツキー、飢えちやつてる？ケツシヨクジドー？』

『……ンなこたあーない。野菜炒めがウマすぎるのが悪いんだよ。』

その、あれだ。大好物なんだよ、このオイスターソース風味ツ』

『…ふーん？』

『帰った帰った。不自然に立ち止まってたら怪しまれるぞ。』

スタンド会話つつてもよおおー』

『わかった。んじゃね』

『おう、んじゃ』

言われた通り、あたしの教室に引き返す。

…ウーン。一瞬で言葉がゼンブ伝わると、わかっちゃうねえーハツキリ。

不自然にダメツた。なんかゴマカしてるよゼツタイ！

でも楽しいイイーなあースタンド会話！早速う、のどかっちにも！

「ふ、ふわあぁーツ!?!」

「のどかか？どうしたの一体？」



「今、声。声!頭の中に…ひなたちゃんのに!」

「どうしたってというのよ?」

私には聞こえないわ!……………あつ」

…:メツチャクチャ怒られました。ちゅちーに。

だよねー。頭オカシーヒト疑惑が出ちゃう。

そーいや、ちゅちーだけ仲間ハズレになっっちゃうんだったよ今は。

そのヘンも入れて…:ゴメンナサーイ!

でも、のどかつちの反応カワイかったー。めつちや収穫!

で、夜。『夢』!

「なんか態度が不自然だったペエ」

ペギタンからの報告をみんなで聞いている。

今ここにタツキーはいないよ。イミないもん、いたら。

タツキーの問題が解決するまでは、

こーやってヒミツの集まり持つことにしてるんだ。  
あたしたちだけ30分早く集まってるワケ!

「おとといみたいに、具合悪くしてる感じじゃあなかったペエ。

ただ…なんか、落ち込んでるように見えたペエ」

「ペギタン、食器はどうだったの？」

「食べてるのなら、きつと使ってるよね？」

「使った形跡、なしだペエ。

「食べ終わってすぐに片づけただけかもしれないけど…

キッチンから何のにおいもしてないのがおかしいペエ」

「明日はゴミ箱も見るべきね。

「そこに何もなかったら…何か異常な手段を使ってるってことよ」

「そーいやオドロキなんだけど、タツキーのウチ、電子レンジないらしい。

「キッチンコンロと炊飯ジャーだけ。不便すぎない？」

「まーそれはおいといて。あたしも昼の話するよ！」

「カクカクシカジカ…なんなんだろうーねコレ？マンガとかで見かけるけどさあー

「…決まりね。何かおかしいことをしているわ」

「ちゅちゅー、どゆこと?」

ちゅちーよりも先に、うなずいてたのどかっちが答えてくれた。

「鳴滝くん、周りをいつも気にしてるよね？」

前だって、まゆちゃんのみなちやんが見てることにたった一人気づいてた」

「ウン…わかる」

「そんな鳴滝くんが、我を忘れるほど食べ物にがつついてる。

引いちやつてる周りの人たちに気が付かないくらいに。

ひなたちゃんの言う通り、食べてないってことだよ」

そう。そー思うよあたしだって。

でも、だったらわかんないじゃん。

「なんでF・Fは合図くれないの？」

「そんなヤバイことになってんのに」

「単純に考えりやあよおー、『食えてる』ってコトなんだけだな」

「おとといは『もう食えねえ』って言ってたペエ。

『しばらく食いたくねえ』とも言ってたペエ…」

「…ロクなモノ食べてない、ってことラビ？」

「筋は通るわね。だとすると、問題は…」

「何を食べてるか？ってことだよね」

…ゴメン、あたしわかんないマンマ!

「あのさ、タツキーは食べてないからガッツイたんてしよ?

でも食べてる?あたしわかんないんだけど?」

「断言はできないけれど、推理はできるわ。」

まず、おとといは『食べた』。ペギタンの言ってる通りね…

だけどそれは、食べられたものじゃあない『何か』よ。

食べたら具合を悪くするような『何か』

「『何か』って…ナニ?」

「そうね。お金がなくても手に入って、しかも誰の迷惑にもならないもの…よね」

ちゅちーの言ってることを、あたしなりに考えてみる。

どっちにもぶつからない食べ物…ウーン

「山で木の実とかキノコ取ってくるとか?」

「私が鳴滝くんなら、それはやらないわ。」

地主が出てきたら大変なことになるもの」

「じゃあ……ウグツ…」

次に想像したもので…あたし、思いつきりイヤな顔しちった。

だとしたらサイテーじゃん、最悪じゃん!

「何を想像したの? たぶん、私と同じよ…言ってみて」

「…ざ、『残飯』。生ゴミ!」

「そうなるわよね…彼のスタンドはフリー・ファイターズ。

表に出されたゴミ袋とかゴミ箱から、食べられる部分だけを

取り出して固めることは…出来なくもないでしょうね。すこやか市は旅館だらけ。

フードロスをかき集められるんだったら、それで食べていくことは…可能、よ。

「私自身よく知っているわ。たった一日でも食べ残しがどれだけ出るか」

「そんなこと言ってもさあー、それ、もう! ゴミじゃん!」

「考えただけで吐きそー! ヴォエー!」

何日たってるかもわかんない、ゴミとメチャクチャに混じりあつた食べ物集めんの?

出来たとして、食べんのソレ!?

「でしょうね。それを固めたとして…どんな味になると思う?」

「たぶん、ゲロマズ!」

「そんなのを食べた魁は、だからノビちやつたペエ?」

「そして、食べるのをあきらめたわ。

「そうよ、考えてみれば口から食べなくなつたっていいのよ。

フリー・ファイターズは本体の血の中にあるんだもの。」

あとは適切に分解して栄養だけを血の中に取り込む方法さえあれば……  
「食わずに食べていける。そういうことだよな」

…わかった。ちゅちーの言いたいコト、わかった。

フー・ファイターズを胃袋にして、栄養だけを血に入れる。そーゆーこと。

これならゲロマズでもカンケーない。口から食べないんだもん。

「でも、それじゃあお腹になんにも入らないじゃん」

「だからガッツイタ。ドコまでいっても体は正直だと思っぜ、ひなた。

F・FがSOSを出さねーのも矛盾してねえ。なんせ栄養は足りてんだかんな」  
「体は問題なく生きていける。そういうことラビ」

「ここまでの話が全て正しいとして、それを始めたのは昨日ね。

そして、おそらく今日もよ。…落ち込みもするわよ。

空腹を水飲んでごまかしたとしても…むなしただけだわ」

ちゅちースゴイ。あたしよりずっとシャーロキアン！

推理で全部アバいちゃったじゃん！シビレる！アコガれる！

「だけど、どーすんの？カワイソーだよ、タツキー」

「ひなた、禁句よ。彼が一番言われたくない言葉でしょう、それは？」

「あッ……ごめん。でもさあ〜」

「ひなたちゃんと同じ気持ちだよ。わたしも、ちゅちゃんも。みんなも。耐えられるはずないよ、そんな生活…」

「もう、動く前提で行きましよう。」

明日、鳴滝くんの行動を追跡して…『現行犯』を押さえるわ。

そうまでなれば、抵抗したりごまかしたりしないはずよ。

もし、予想が外れてたのなら…その時はその時で考えましよう?」

「…予想の確認までにしよう。それ以上は、まだだよ」

ちゅちーの案で決まりだと思っただけど、のどかちゅが微妙に反対したのは意外。

ニヤトランが、のどかちゅに乗っかったのも意外。

「オレ、のどかに賛成だぜ」

「どーして?のどかちゅ、ニヤトラン」

のどかちゅとニヤトランが顔を見合わせて、

ニヤトランがうなずいたのを見たのどかちゅが説明を始める。

「わたしは…待ちたいな。わたしたちを信じて、頼ってくれるのを。」

F・Fが合図を出さないうちは…

鳴滝くんを信じるのが、わたしたちのやることだと思っ」

ウンウン、つてシミジミ首をタテに振りながらニヤトランが続けた。

「アイツがガンバツてんのってよおー。

オレたちに迷惑かけたくねーからなんだぜ？

だからよ…そのガンバリ、踏みにじりたくなくつてよ。

好きにやらせてやってくんねーかな？アイツが納得するまでは」

「……そうね。少し、せつかちだったわ。

みんなで待つてあげましょう。いつでも動けるようにだけしておいて、ね」

ちゅちーがやさしく笑ったトコで、30分経った。

のどかっちにしかワカンナイけどさ。起きてんの、のどかっちだけだし。

今日の相談はここで終わって…

…で、次の日。土曜日！ガッコ休み！

でも、あたしたちにはハズせない用事があるよ！

『魁に、おいしいご飯、たくさん食べてほしいラテ』

ラテに聴診器を当てたあたしたちは、そろつてうなずき合った。



すぐにドーコーするワケじゃあないけどね。証拠はつかんじやうよ!まず、のどかっちの家に集合してる…タツキーんちに一番近いんだよね。あたしんちも似たよーなモンだけど。3分くらい違う。ちゅちーのウチからはめっちゃ遠いよ。

んで。まず、ニヤトランに探つてもらつてんの。

ホントはラビリンとペギタンにも行つてほしーんだけど、ビョーゲンズが出たとき詰むじゃん、そんなコトしたら。つて、のどかっちが言つてた。そーでした。

あたしたちは、のどかっちの家を出発して、まず商店街へ。

商店街裏のドブ川あたりに民宿とか旅館があるからね。

ゴミ箱とかの様子を見ていけば、手掛かりあるかも…

つて、ちゅちーが言つてた。ううー、存在感出すかんね、あたしも!

とゆーわけで、おしやべり!

顔見知りのオジサンとかオバサンとか、いっぱいいるもん。

ウチ動物病院だから。常連さんもフツーにいるんだよ!

「変わったこと?」

変わったことだらけじゃあないか、最近…

噴水が壊されたり、下水が吹き上がったたり。

平和が戻ってほしいよ」

…そりゃそーだわ。

ビョーゲンズがらみの話がかまると決まってるんじやん。  
てゆーかゴメンナサイ、噴水はあたしの仕業です。

へこまずに続けるよー。ドンドンいっちゃう。

「よくは知らないんだけど…」

昔、騒ぎを起こした悪いヤツの子供が

最近、この町に越してきたとか聞いたわよ。

札付きのワルだつて…」

…：…タツキー？

親が悪いヤツつてゆーウワサは初耳かなあ。

カンケーないかも。次。

「ウチの旦那がへんなことボヤイてたわ。

『生まれてるわけがねーんだよ、あいつ』とか、

『母親が死んだ後でどーやって生まれんだよ』とか…

酔っぱらつてゲロ吐きながらだけど」

生まれてるわけがないアイツ?どゆこと?

「お母さんが死んだ後で生まれる?……えッ?

忘れちゃっていいかあ。ヨッパライだし。次。

「ああ、ひなたちゃんじゃあないか。

昨日、ゴミ箱が荒らされてね…

ウチ、串焼きを店先で食べてもらってるだろ。

「そのゴミ箱をやられたんだ」

………これじゃん!?

もつと、もつと詳しく!

「でも、なんか変でなあ?」

タレでベタベタのはずなのに、袋の中が妙にキレイなんだよ。

まさか、タレをすすっていったわけじゃああるまいし」

んふふ、ケツテーテキな情報ツカんじやったよ、あたし!

そこでニヤトランが戻ってきた。

あたしのスマホ渡してたからね。ちゅちーが今の場所を連絡してくれてた。

パズワードは教えたよ。信じてるよニヤトラン。ノゾクなんてスケベしないよね?

ちよつと離れた場所でいったん休憩。

「戻ってきたってことは…動いたのね？」

「おう、布団干し終わってからすぐに出たぜ…こっち向かってるぜ」

「つてことは。もう証拠を押さえたも同然ラビ」

「ただ、な。たぶん、F・Fとしゃべってんだろーけどよ…」

日帰り浴場に向かうみてーだぜ？」

…アレ？風向きがヘンになってきた？

コツチに来てて日帰り浴場だったら古い方だし。

古い方はホントにお風呂しかないし。ナニするつてゆーの？

「おやつ、沢泉さんのお嬢さん…おはようございます」

「お、おはようございます。須垣屋さん」

後ろからイキナリ声かけられて、ラビリンペギタンニヤトランがササツと逃げた。

バレてないよね？大丈夫そう…このオジイサンは、えーつと…民宿の人だ。

ちゅちーに話しかけてきたのも、同業で顔合わせてるから、かな？

「どうしましたか、こんなところで」

「いえ。友達とお散歩中なんです」

「そうでしたか。てつきり、ウワサを聞いてきたものかと…」

「ウワサ？」

「『垢嘗』<sup>あかなめ</sup>が現れたんですよ。妖怪、垢嘗<sup>あかなめ</sup>が」

「妖怪?」

ちゆちー、オウム返しするだけになっちゃってる。

それ言ったらあたしたちもナンもしゃべれてないけどさ。

「ああ、知りませんか…文字通り、垢を嘗める妖怪なんですけど。

お風呂にはつきものの妖怪ですよ。

私などは小さい頃から、お客様の風呂に垢嘗を呼ぶなどシツケられましてねえ」

「そ、その垢嘗が、ここに?」

「ええ。いえ、私どもの風呂ではありませんよオオ、このドブ川の話です…

あそこの溝から、向かいの若宮さん、三枝さんのところの排水が

川に出てきているのですが…わかりますかな?」

「……………えッ?」

指をさされた先を見してみる。

『旅籠・わかみや』『ホテル サエグサ』って看板がだいぶ先にある…

知ってるよ、ソーメンみたいのがウゴメクドブだつて…

でも、そこには何もなかった。ただのドブになった。

誰か、掃除した後?

「おととい、ですかな…突然、キレイになりました。」

確認してみても、掃除の業者を呼んだわけでもない。

ではアレは何だ、ということになりまして…これはもう妖怪の仕業ではないかと」

「…他にも、こんなことが？」

「あつたんですよ。星さんが管理なさってる…日帰り浴場ですよ。」

「こちらもおととい、の朝、ですな…排水溝が、これまた突然キレイになってしまったと」

「……………」

「そりゃあ、やってももらえたらとてもウレシイことですが。」

イタズラにしては、ツライだけでなんの得もありません…

得をするとしたら、それこそ垢嘗くらいのもものでは？」

それでは、私めも掃除に精を出すとします。

垢嘗に出てこられては、評判も落ちてしまいますからな。

ンー、フツフ……

とか言つて帰つていくオジイサンを、あたしたちは無言で見送つた。

そして、生垣から這い出してきたラビリンペギタンニヤトラン、それとラテと。

あたしたちみんな、あつちこつち顔を見合わせて。

「垢が養分…」

「垢ぬけない…」

誰が何を言ったのかわかんないけど、みんな似たようなことを言って。

それから、それから…

ゾバツと。

肌の毛穴全部がゾバツと来た。

みんなの足のつま先から頭のテツペンまで…トリ肌がツツパシツてつた!

「よ…」

「ヨツ…!!?」

「妖怪だあああああ——————ツツツ!!??」

## 決め手のひと味！おなかいつぱい大作戦―その5

いるはずのないやつがいる。

脇道からいきなり走ってきたのは、見間違ひようもなく平光だ。

偶然来たようじゃあないツ、目が最初からこつちを見ている！

バカな…昨日のたったあれだけのやりとりから真相にたどりついた？あいつが？  
いや、金に困っていることはすでに知られてるだろ。

今着てるこのジャケツト、見つけたのは誰だよ？

そこに来て、昨日のメシガツツき…不覚以外の何モンでもなかったなアレは…

だいぶ短絡的ではあるが…答えにたどり着いても不思議じゃあない。

……ごまかそう。決定的な情報はそろっていないはずだ。

まずは話を聞いて、かわし方を考えるのはそれから…

立ち止まって考えてると、目の前にヤツが止まった。

「……おう」

「タツキー、ついてきなよ」

「どいこ？」



「パスタおごったげる。

駅の近くにイトコあるから!

…あんま安くないケド」

「そんな筋合いはないぞ、お互いに」

「ある。ツベコ言わない」

なんだ? 妙にカリカリしている…腕をつかむな!

クソ、足が動かかねーと抵抗できねえ。

重心が松葉杖にあるから、せいぜいイヤがる動きくらいしか。

転げてジタバタすれば最大限ジャマできるだろうが…

そんなマネするのか? 天下の往来で?

『魁、ここは従え。得しかない提案だろ!』

昼飯はマトモなのが食えるんだぞ?』

「…わ、わかった。引つ張ンなよ、自分で歩く」

「ン!」

結局、F・Fの言うことに従った。

断固たる拒絶を叩きつけてでも退けるべきだったようにも思う。

俺とつながりがあること自体がマイナスなんだからな。

ここは『夢』じゃあなくって現実なんだよ。だが、おそらく！こいつには善意しかない！

そこに罵声を投げつけようもんなら、確実に傷つく。

結局のところ、当たり障りのないように退けるしかないわけだが…

マトモなの食ってないせいか、頭が、回らん…

「どうしたってんだよ、いきなり…」

「どうした、って、コッチのセリフなんだけど！

生ゴミまでならまだワカルよ？ワカリたくないけどギリギリワカル…

でもさ、『垢』はないっしょ？」

「……ッ!？」

苦し紛れに聞いた質問の答えは、突っつかれたくない弱点のド真ん中だった。

全部ばれている。それ以外の何物でもない。どうやってかは知らないが。

…昨日の夕飯、今日の朝飯とも一応食ってる。

腹に何も入れないと、メシに遭遇したとき我を忘れる問題に直面したからな。

そこでもう、最終手段一步手前の残飯漁りに走った。

人がいない隙を見計らってフー・ファイターズの塊をゴミ箱やゴミ袋に派遣し、

回収してきた食べられる有機物を固めに固めて栄養ブロックを作成。それを食った。

『垢』よりは断然マシな味だった。だが、悲しくなる味なのもまた事実だったな…

「なんで、生ゴミとか『垢』食ってるって考えた?」

「ちゅちーの名推理!それと聞き込み!」

ゴミ箱が荒らされてるウワサと、妖怪アカナメのウワサだよ!」

なんてこった、沢泉か。あいつも先週の買物に付き合ってる。

当然、俺に金がないこともある程度は知っていて…

そこから先の断片的な情報から、ほとんど真相にたどり着いちまったのか?

承太郎リスペクトしすぎだろ、あいつ!

で、それを裏付ける聞き込みをやってたんだな?

こうなると、花寺がいけないことはありえない。すでに全員の知るところか。

「今、お前ひとり?」

「……あッ。またやっちゃった…」

確認程度に聞いたんだが、平光の怒気が一気に引つ込んだ。

キョロキョロ周りを見回し始める。

「…いたんだな?」

「みんないたよ、さつきまで。」

カツとなつちやつて、あたしだけ来ちゃった、みたい」

「とうか、なんで俺がここに来るって知ってたんだ、お前  
自分で口に出してから気が付いた。

解答は、せいぜいふたつだ。

昨日、おととい、三日前と、俺と直接会話していて、

推理の材料を渡したに違いないヤツ。

で、ここにいるのは平光…なら。

「ニヤトランか。俺を監視してたな？」

「…あ、あたしが行かせたんだよ？」

ニヤトランのせいじゃあないしッ！」

平光のジャンパーのフードがモゾツと動く。

そこから顔を出したニヤトランが、俺の肩に飛び移った。

ただのネコを装うつもりらしい。耳元でささやいてくる。

「ワリい…友達ヅラしたスパイだったぜ、オレ」

「いや、いいよ…ばれるよな、考えてみりゃあ。

食器もなければ料理したにおいもないんだからな…

ネコのお前には、確実にばれる」

「ガンバツてんの、伝わってんだぜ。」

できればよ、おめーの気が済むまでやらしてやりたかったな」

「……………」

深く、息をついた。

なんというか、力が抜けた。

頑張る意味がなくなっちまった。氷が解けるみたいに消えた。

ドロドロの無念が湧くかと思つたが、そんなことはなかつたな。

『あなたは、きつと頼るべきです』

エレメントさんの言葉が、頭の中にこだました。

今がその時だとしてもいいのか？

…もういいや。俺は観念した。

「平光」

「うん?」

「みんなの所に案内してくれ。」

これは、みんなで話したい」

「…そっか。うん、オッケー。」

でも、ゴハン先食べよ。ツライっしょ?」

「じゃあ…なるべく早く、食って出る」

「チャンと味わえ！オゴるんだからさあー。」

食レポ期待するかんね」

「そーいやさつき言ってたな、あんま安くないとか。ボソツと。パスタとも言っていた。たぶん千円前後だ。」

「返すべき金額だな…だがいきなり金を渡すのも角が立ちそう。」

「まあ、後で聞こう。本人に直接。今はただ食わせてもらう。」

「ただ、ひとりで突っ走ってここに来てるんだよな、こいつ。」

「ほぼ間違いない、花寺と沢泉が気を揉んでるはずだが……」

「噂をすればと言うべきか。俺のと平光のスマホがほとんど同時に鳴り出した。」

「沢泉……？」

「のどかつちだ」

「通話。互いの相手が出る。」

「返す声もそのままそろった。ビョーゲンズだ。」

現場に急行した。恐るべきことに、ウチの近所だ。

三日前、実りのエレメントさんに教えを乞うた、あの河原だ。

ここまで来ると、メガビョーゲンもぼつちり見えている。

また植物か：どうやら、シダにナノビョーゲンを取り憑かせたらしいな？

花のエレメントさん：ではないだろう。まさか、『あのエレメントさん』か？

「じゃあ、タツキー。ここに下ろしてくから」

「悪い。俺もすぐに合流する。ここならすぐ変身できるはずだしな」

「うん。グレースとフォンテーヌは：もう戦ってるね。んじゃー!」

現場に急行、と簡単に言ったが。俺の足じゃあどうにもならない。

以前、DEATH13のときは足からローラーを出したが、あれは消耗が激しいんだ。

すり減るローラーに血を常に回すからな。できるだけやりたくない。

そこで、『夢』の中で何度か訓練を終えているやり方がすでにある。

まあ：単純だ。プリキュアに変身した誰かの肩に、

米俵みたいに担がれて現場入りするだけだからな。

ちなみに顔は後ろ向きな。逆だとヤバイ。

商店街で変身したヒーリングっどプリキュア一行は、

数分と経たずにダッシュで到着し、俺もまた運ばれてここに来たわけだ。

さて：今回の場合、すでに周りに人がいないようだな。

となると、やることはひとつ。どこかで待っているラテの護衛だな。

当たり前だが、プリキュアがいつでも助けに入れる範囲に彼女はいる。

俺もあえてその範囲にすることで、奇襲で誘拐されるのを防げるつてのもある。

変身したところでただ走るだけしかできない今の俺だが、

ラテを抱いて走って逃げるぶんにはちよつとしたもののはずだぜ。

ぶつちやけ、ダルイゼンとか相手だと誤差みたいなもんだろうが。

その誤差でも天と地の差だろ。さっさと変身しろ俺。

下ろされたのは橋のそば。橋ゲタに沿って河原への通路があるので、そこに行く。

水深は、真ん中まで行けばそこそ深い川だ。問題なく変身できるぜ…

服やら靴やは、着けたまま。脱いじまったら変身解けば変質者！

靴が完全に水につかり、やがて膝に達したあたりで松葉杖を河原に放り出す。

ちよつとばかり冷たいが、しようがねえ。

バシヤアア…ン

立てない俺は水の中に倒れこむしかない。

あとちよつと泳いで川の中央まで行つて、完全に潜ればいい。

この川はそこそそ栄養があるからな。



2分…とは言わずとも、3分あれば変身できる計算だ。

キキイイイーーーーッ

ギヤルルルルッ…

プリキュアたちが戦ってる場所は、少し遠め…

ここだと、メツガビョーゲエーン、とかいう声がちよっぴり聞こえるくらいだ。

巻き込まれる一般人の身になれば、十分に身の危険を感じる距離だな。

橋の近くで、急ブレーキを踏んだ音がした。そうもなるよな。

引き返すなり進むなりするんだな。ここが一番危ねえぞ…

「よし、F・F。手順開始…」

『待て、待てよ…』

「なんだよ。変身しねーと溺れちまうぞ俺」

『できない…いや、できはするが！』

クソ、厄介なことになった…』

「何を…?」

『気づけよ、マヌケ！』

もうすでに聞こえてんだぞ！

お前にも！音がッ！』

「…ハア？」

間の抜けた声で聞き返すと同時。

水に踏み入った何かに、俺の全身が水上に引つ張り上げられた。

「ンなツ、え……？」

「やめないかッ、こんな、バカなこと!!」

男だ。おっさんだ。声と手からわかりはするが。

後ろから羽交い絞めにされて、陸上に引きずられていく俺！

「いや、あのツ。俺、やんなきやいけないことが」

「そんなことを言われてこの手を放すと思うのかい？」

嫌だね……ついてきてもらうよ！」

………あッ、わかった。アハ体験！

入水自殺と思われてるよ俺！

というか、それ以外の何モンでもないわ。冷静に考えたら！

言い逃れする？どーやって？

「ちよつと着衣水泳に挑戦しただけじゃあないですか。ヤダなあー」

「今ここで、きみを信用することは不可能だよ。来なさい」

ですよねー。俺があんただってそう言うだろうよ！

なんだよ着衣水泳って。バカじゃねえの俺？

こうなつたら…やむをえん、最終手段だ。

当て身をくらわさせて気絶してもらおう。

来た…陸上に。足がつくようになった今…

ガシ グイツ

姿勢を変えられた。松葉杖を拾っていくためか？

それはわからないが、変わった後の姿勢が…俺にとつての致命傷だった。

肩を貸されて背中を支えられた。まあ…そうするよなあー

全身の筋肉と血管がピンピンに張ったワイヤーと化し、

空気が一斉に周囲から消えた。こうなつちまったら蠟人形と大差ない。

なんだよこれ。最低だ！

クハアゝツ…

ゼヒツ、ゼヒツ…ヒイイツ グツ

「なツ……どうしたんだい、いきなり!？」

痙攣、呼吸がツ？救急車!……ここで呼ぶのはまずいな。

いったんウチに連れて帰るしかないか…急ごう」

そこから先。呼吸が収まるまではロクな思考ができなかった。

ペギタン式を必死に思い浮かべて息を整える以外に出来ることなどない。それでも、だ。驚くべきことに、今回の俺は十分足らずで復帰できた。

思えば一回、無理やりに立ち上がったこともあったな。

救急車を呼ばれるギリギリのところまで復活し、事情を説明できた。

「すると…なんだい？」

きみは、肩を貸されると…過呼吸になる体質だつていうのかい？

足が動かないのに、しかも？」

「はい。何がどうあれ、事実としてそうなんです…

ご迷惑をおかけしました」

冷静になって周りを見回すと、嫌な予感しかしなかった。

俺を助けに入ってきたメガネのインテリっぽいオッサンの仕事と、その奥さんだろうミディアムロングの女性のやわらかな振る舞い。

さつきまで、二人がかりで濡れネズミの俺の水気をふき取っていた…  
両方ともに、既視感がある。

それどころか、顔の作りもなんだが…あと、髪質?

だが、今それは重要じゃあない。考えるべきは、さつきとここを立ち去る手段。  
ふき取られるのに、つい身を任せてしまったけど…あいつらは今も戦ってるだろ。

『魁。言つとくけど、あつちはもう決着ついてるから。』

あんたがダメになってる間にスマホで連絡とつたからね』

「マジか……クソ」

『そーいうことだから、もう…世話になつとけ。』

たぶん、悪いようにはならない』

落ち着けるわけないだろ。こちらら自殺を止められた立場になつちまつてんだぞ?

最悪、実家に通報案件だ。面倒めんどうごとにしかならねえ。

「あなた…うちの子を知ってる?」

花寺のどか、つていうんだけど」

「…!!」

予感があつただけに、かえってポーカーフェイスもできなかつた。

納得しかないんだよ。その顔、その仕草、その雰囲気。

沢泉の母さんと対面したときも、未来の沢泉だろうなーとか思ったつけ。でも、平光の兄貴はかなり違ったんだよなあ、平光と…

ちなみに俺は母親似だ。誰も喜ばねーけど。

「やっぱりか…そんな気はしてたんだ。

きみのような子は、そう何人もないだろうしね」

どんな口を聞こうが、墓穴を掘る気しかない。

口ごもるといふより、沈黙し続けるだけになつてゐる。

そんな俺に対し、花寺父の目つきは鋭くなつた。

「そうなるよ、ぼくはますます…きみを許せないな。

のどかは…きみを助けたはずだ。下水道に落つこちたきみをだ。

なんだつてそれを台無しにする？」

「わたしね…驚いたわ。それに、恐ろしかったわ。

帰つてきて、イヤなおいをさせたままのどかに事情を説明されたときよ。

のどかは、ね…病弱だったの。いつ死んでもおかしくなかつたくらいに。

そんなのどかが、下水道に踏み込んでいった…

もし、そこで具合がまた悪くなつたら…そこで死んだかもしれないのよ？」

カバーストーリーだな、うん。

だが、事實は当たらずも遠からずなんだ。

なんの弁解も、俺にはできやしない。

ただ申し訳なく、視線を伏せるだけだった。

花寺にもだ。この様子だと、説明をするときにどんな反応に遭ったか。

沢泉も同じことだ。平光は、俺も一部見ているがな。

椅子から立つにもワンステップいるんで、両膝に手をついて頭を下げた。

土下座男だな、俺は。

「ごめんささい」

「…その一言で、済ませられると思うのかい？」

「それでも、差し出せるのは俺の首だけです」

「それは一人前の男のセリフだよ」

首以前に、言葉が一撃で切り捨てられた。

どうすりやあいんだよ。

出まかせやゴマカシでここを抜け出すことは、出来そうにない。

「自分から捨てようとした首を、人に差し出そうとなんかするんじゃない？」

そんなんじゃない、もつと許せないだろう？」

か、考える…花寺と、この人たちを侮辱するような考えを退けて、

納得してもらえない答えを示さなくっちゃあならない……!

侮辱するような考えの逆を言うか?

…馬鹿が。それこそが安易な侮辱だろ!

俺が許されるために差し出すもの。それがさっぱりわからない。

『もうしません』で済むはずがないんだよ。そこに納得できる根拠がある!

解なし。解なし。解なし…首が、右往左往するだけだ。

「…まいったな。責めてるわけじゃあないんだが。

でも…そうだな。

ぼくの望む答えを答えろ、と受け取ってしまったんだな。きみは」

「……。はい」

「そうか。悪かった…じゃあ、質問を変えるよ。

きみは、何から逃れたいんだ? 命を捨ててまで」

あああ…俺にはわからん。

少なくとも今回は自殺じゃあない。

それだけに、何を言っても出まかせになっちゃまうぞ。

ダメじゃねーか、何をどう考えても…助けてくれ、F・Fツ!

F・Fは何も言っちゃあくれなかつた。



「考えないでいいのよ。思ったままを言ってみて」

思ったままア?

『何を言っても出まかせになっちまう!』

こんなクソナメた回答ができるかアアア~~~~ツツツ  
「うツ、ううツ?…ううう~~~~ツツ!」

なんの役にも立たないうめき声だけが漏れ出しちまった。  
止めた。だが遅い。ふたりとも怪訝な顔をしてんだぞ?

「ぼくらは、きみが何を言っても責めないよ。約束する。

だから、言ってみなさい」

俺の持つ答えは、なし。

なしは、自殺しようとした事実矛盾する。ありえない。

答えがなしは、答えられない! 答ええないは、答えがない!

出まかせ、なし。ゴマカシ、なし。

…考えろ。別の側面からだ。

スタンドとかプリキュアの事情に、この人たちは巻き込めない。  
たぶん、花寺の命そのものっていうくらいに大切なはずだぞ。

何を言っても出まかせなら、せめてその所を守るウソを作れ!

今の俺が、死ぬに足る理由は、なんだ？

「……………もう、お金がありません」

「…。なんだって？」

思いつくものは、これしかなかった。



土手に体の半分が埋もれたメガビョーゲンの頭上に、  
フォンテーヌが飛んだ。すでにエネルギーをため切っている！

「プリキュア…ヒーリング、ストリイイーームツ！」

シユゴバ ボツゴオア

狙いすました水流の光線がド真ん中を撃ち貫いていき、

助け出す手が変わったそれは、実りのエレメントさんを解放していた。

メガビョーゲンは、それでおしまい。光が変わって消えていく。

パアアアーーーーーッ…

「ヒーリン…グツバアア…イ…」

「お大事に」

「ペエー！」

フォンテーヌが着地と同時につぶやくと、もうそこには何もなかった。

少し離れて高みの見物を決め込んでいたシンドイーネが地団駄を踏んでる。

「なによ、なによなによ！」

そのバカげた強さは何？ドコでズルしてんのよ！

キイーーーーーッ

言うだけ言って瞬間移動で消えた。

もしかしたら、侮れないかもしれないなあ。

確かにわたしたちは、『ドコか』で『ズル』をして強くなってるんだし。

普通の人間よりも6時間以上は余分に使えてるんだよね、一日を。

変身を解いたちゆちやんが駆け寄ってきた。わたしも解く。

少し遅れて、スパークルも解いた。

「やったわね。実戦に通用したわ、のどか」

「うん。ガンバツてよかった」

仗助さんのロボットと戦ったのが、上達のきっかけかなあ。

クレイジー・ダイヤモンドと向かい合って、拳を合わせて理解できた気がする。

承太郎さん、思い出を使わせてくれて、ありがとうございます！

「……んむー、あたしイイトコなかったかも」

でも、ひなたちゃんはずっとヘコンでる。

今は、主に太陽<sup>サン</sup>を使って、狙いすました一発で撃つのを練習してて…

止まった目標にならんとか当たるようにはなってきたけど、

今回は4発撃って、全部が外れちゃってる。動かされると途端に苦しいみたい。

威力はだいぶ落ちるけど、プニ・シヨットの方が使いやすいかも。

エレメントさんに当たったらマズイって意味では、強い威力も欠点だしね。

「千里の道も一歩からよ、ひなた。

もともと乱射して数でカバーするスタンドじゃない。

狙うのが難しくって当然だわ：地道に、やっていきましよう?」

「それにね、強くて怖いレーザーが空から飛んでくるの、

メガビョーゲンはスツゴク動きにくくなるみたいだよ?」

「おどかすだけでも意味があつたと思うな」

「アツハハー、結局、途中からフツの殴り合いになつちつたケドね…

ありがと、ちゅちー、のどかっち」

言ってる通り、4発撃つたあたりでメガビョーゲンに狙われちゃって、

スパークルはそこから防戦一方になつちやつただけだ。

そこにわたしとちゅちちゃんが後ろと脇から割り込んでいけたんだよね。

反省会は、今はこの辺にして。

駆け寄ってきたラテと合流してから、ラビリンに聴診器を手渡される。

みんなと見つめる泥と草むらの中には、さっきの実りのエレメントさん。

「エレメントさん、お加減いかがですか?」

「ありがとうございます、プリキユアさん。ワタシは大丈夫です。

お礼に、これを持っていってください」

そう言って、わたしの手の中に納まったのは一本のボトル。

ヒーリング・ステッキの中央にはめ込まれてるやつと同じで、色違い。

「み、実りのボトルラビ!」

「うわ、カワイー!キレー!ナニコレ!スゴイモンなの?」

「おー、スゲーぜ、ひなた!

めつたに見られるモンじゃあねえーかな」

「ヒーリング・ステッキの真ん中についてるアレと同じモノだペエ。

グレースには花のボトル。フォンテーヌには水のボトル。

スパークルには光のボトルがついてるんだペエ」

「ということは…プリキュアの力の源みたいなものかしら?」

「いいの?そんな貴重なものを…」

詳しく聞くと、ちよつと恐縮しちゃうね。

もしかしたら、これがあればプリキュアに変身できるのかな?

とか思うと、気楽に受け取れるものじゃあないように思うけど…

実りのエレメントさんは、それでもウンウンとうなずいてくれた。

「いいんです。

おなががすいてもガンバツてる人間さんとヒーリングアニマルさんがいましたから」

「…えっ？わたしたち以外に……？」

「人間の仕組みの中でご飯を食べられない人間さんだそうです。

でも、人間の決まりを破りたくないって言っていました。

お友達の『幸せ』を脅かしたくないって……

だから、わたしたちから土地の恵みを取り上げようとしていましたけど。

やめてください、って言ったら、助けを求められたんです」

「……………」

「つらいのに、誰かのためにガンバって、正しいことをしようとしてる人間さんを見たら

…

ワタシも、誰かの力になりたいって思ったんです。だから、受け取ってください」

ひとりしかない。ひとりしかないよ明らかに。

ううん、正確にはふたりだよねコレ！

ちゅちゅんが、ストレートに聞きに行った。

「もしかして、『垢』とか『生ゴミ』を食べる方法を教えたりしなかったかしら？」

「…はい。そういうものにはエレメントさんが居つきにくいですから。」

そこを狙えばエレメントさんに迷惑はかからないって、教えました」

……ハイッ、確定！



「なるほどよおー。つながったぜ、ゼンブツ!」

「生ゴミ以外にも食べるアテあったみたいラビ」

「土地の恵み…フー・ファイターズで栄養分を搾り取ろうとしたペエ?

エレメントさんも止めるはずだペエ」

みんなでお互いに顔を見合わせあうのを繰り返してから、ちよつとして。

ちゅちゃん、軽く目を細めておだやかに微笑んだ。

「聞かなかったことにしましょう?これは…」

「え?ちゅちー、どして?」

「あいつがエレメントさんに相談したのは、内緒話よ。」

私達の耳に入っちゃうなんて、思ってもみないから打ち明けたんだと思うのよ。

秘密にしたかったことをさんざん暴いて、さらに内緒の相談まで知られちゃったら…

私があいつなら、きつとイヤだわ。裏切られたみたいと思うかもしれないわ」

あつ、さつきわたしがちゅちゃんを止めた理由と似てる…かな?

ひなたちちゃんが走り出したのに、ちゅちゃんも続こうとしたんだよね。

わたしも走ろうと思っただけ、思い直して止めた。

ニヤトランの話の思い出したからね。鳴滝くんが誰のために頑張ってるのか、つて。

そこに、わたしたち全員が止めに入ったら…こう思うかも、つて思ったの。

『努力を無にされた』って。

そう思ったら、わたしは止まらなきやあいけなかつた。

そして、ただ止まるだけじゃあ『口だけ』だから……ちゅちゅんを止めた。

ひなたちゃん……鳴滝くんが受け入れてくれるならそれでいいし、

反発されたら、わたしが味方に立ってお手当てする。そう考えたの。

「ん……わかつた。ナイショにしと」。

……あ、そういえば。何やってんのタツキー？

スグにコツチ来れんじやあなかつたっけ？」

納得してくれたひなたちゃんが、思い出してスマホを取り出した。

言われてみれば……わたしも取り出す。ちゅちゅんも。

着信あり……メールだ……『件名：FF』!?

そこへさらに、たった今来た。新着。古いほうから順に読む……

『入水自殺と思われて拘束された。』

肩を貸されて発作中。車の中にいる』

『持ち物から花寺という単語を確認。』

花寺の父の可能性大』

『家に着。表札が花寺。花寺の父ほぼ確定。まもなく屋内』

「おお、もう……」

ちゆちやんが、額に手を当ててうなだれた。

何があつたのか、手にとるようになつたよ……

お父さん、まさかそんなトコに通りかかるなんて。

松葉杖ついてる人が川の中に入っていく姿なんか見たら……

そりやあ止めるよ。お父さんだつたら!

「タツキーつてさあ……もしかして、ダメンス?」

「ダメなんかじゃあないよ。」

ダメなんかじゃあない、けど……残念感スゴイ」

「気づかなかつた私達も悪いわよ。」

ヒトが通りがかつた時点でアウトじゃない、川で変身つて!」

考えるのは後にすることにした。

自殺未遂でつかまつた鳴滝くんが、あまりにもピンチすぎるから。

エレメントさんへのお礼もそこそこに、わたしたちみんなウチまで突つ走つた。

『こっちは片付きました。今すぐ向かいます』

みんなしてウチに帰り着いて、最初に顔を合わせたのは鳴滝くんだった。玄関をカギで開けて入ったら、廊下に飛び出してきたのに鉢合わせた。

口をへの字に曲げて、床にポトポトこぼしているのは…涙？

「ど、どうしたの？なんで泣いてるの？」

「…そ、そこどいてくれ。トイレ行きたい…その、アレだよ。」

あんまり出来立てで、アツタカすぎちまったもんだから、舌を…

今のなし、今のなし！舌なんだが、そう、舌なんだ！

イテエーからトイレ行く、どいてくれ！」

わたしたちを押しつけるみたいに間をすり抜けてトイレに入り、

ガチャツとカギをかけられた。まさか追えないよ。

松葉杖とは思えない速さで引つ込んじやった。

「なに？支離滅裂よ」

「ナンデ舌噛んでトイレ行くの？」

困惑していると、奥からお父さんが来た。

「ああ、おかえり。みんなも一緒かい？」

いや、スゴク立って込んでるんだけど…彼のことは、知ってるんだね？」  
みんなうなずいて、食卓に通される。

そこにはお母さんがいて、食べかけのオムライスがあった。

一口か、二口くらいしか手をつけられてないみたい。

「何があつたの？お母さん…」

「あつ、のどか…色々あつただけどね。

お腹が空いてるみたいだったし、彼のぶんもお昼を作ったのよ。

せつかくだから、一緒に食べようと思つて…

でも、食べ始めたら、いきなり泣き出しちゃつて」

また、みんなで顔を見合わせる。

今まであつたこと、そして今を照らし合わせて考えると…

「そっか。オイシかつたんだね、タツキ」

「無理もないわね。泣いても仕方ないわ」

ひなたちゃんも、ちゆちゃんも。わたしと同じ結論みたい。

最近のヒドイ食生活から、おいしくてあつたかいご飯の落差はもちろんあるけど。

誰かが作ってくれるご飯は、鳴滝くんにとってどれだけぶりなのかなつて。

ううん、そもそも、鳴滝くんの家は…ひどい家族だったんだから。

最悪、一緒にご飯を食べることもなかったのかも…

「…：…知っているんだね？彼の事情を」

「ええ…全てじゃあないと思いますけれど」

お父さんの質問に、またみんなうなずく。

どこまで答えていいかは、用心しなきゃあいけないね。

「難しい話は後にしましょうよ。」

みんなもお腹空いてるでしょう？

作るわ、今すぐ！チョット待っててね」

「あ、いえ！そこまで」

「ちゅちゅん、一緒に食べよう？ひなたちゃんも」

「ウン、ゴチになります！」

いつも三人で食事してるから、新しく席を持ってこないといけない。

ひなたちゃんも席の移動その他を手伝ってくれて、

ちゅちゅんはお母さんの周りを手伝ってくれた。

だけどね。途中でちよつとトイレに近寄ってみたの。あんまり長いから。

するとね…すすり泣きが聞こえてきた。

わたしとひなたちゃんので、どうしようか迷ってたら…

後ろから来たお父さんに、そっと止められた。

「落ち着くまで、待ってあげよう。」

恥をかかせるもんじゃあない…」

まあ…結果として、お父さんの気遣いはある意味無駄だった。

それからだいたい二十分して、やっと落ち着いて出てきた鳴滝くん、

みんなで声をかけたんだよね。全然おかしくもない言葉を…

「おかえり、タツキー」

「あなたの分、温めなおしてあるわよ。」

電子レンジだけどね…それは許してほしいわね」

「食べよ?お腹すいちゃった」

「アン!アン!」

ラテも、足元にまわりついて迎えにいったところで。

鳴滝くん、ピタリと止まって、うつむいて…

また、ポタポタと、落ちるしずくが止まらなくなっちゃったんだ。

「えええ…ッなんで泣くの!」

あたし、またなんかやっちゃった?」

「もう、話が進まないじゃないの……いいから、こっち来なさい」  
ちゆちゃんとひなたちゃんに引つ張られながら、

しやくりあげるみたいな声で彼が言うには。

「悪い……なんか、もう………腹いっぱいだ」

……そつか。そうだよね。

『おかえり』なんて言ってくれる人、いなかったよね。

わたしには、当たり前すぎるから……一瞬、わからなかったよ。

今は、その気持ち……味わってほしいな。好きなだけ。

「うん。ゆっくり食べよう？」

一気に食べたなら、お腹壊しちゃうもんね」

そこから、無言で食べるのを見守る感じになっちゃった。

みんな、フツーにおしゃべりしながら食べてるんだけど、

そこに反応したり、参加したりする余裕がまだない感じ。

『夢』の中でなら、一緒にお菓子とか食べてるんだけどね。

……あ、そつか。『現実』だね、ここ。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さま。お口に合ったかしら？」



「…これ以上のものは、ありませんッ……」

「そう。うれしいわ」

食べ終わったら、落ち着いた。本題に戻るときが来たってこと。

お父さんから改めて聞かされる。鳴滝くんが何をしようとしていたか。

…フツ—の人には、自殺以外のなんでもないよね。当然。

わたしたちは、なるべく落ち着いて話を聞くしかできない。

で、お父さんの話が終わったら、今度は鳴滝くんの番で…

「……ごめんなさい。ズレた話をしますけど…聞いてください」

そう前置きした彼は、堰を切ったみたいに話しました。

「俺は…あいつから…俺を刺したヤツから、14万円を巻き上げた。

どうしようもない金額を次々ふっかけて、親から金を盗むように仕向けました。

あいつの心身を踏みにじって、楽しんでたんだと思つてましたけど…

それだけじゃあなかった。今にして思えば……

俺は、きっと壊したかったんだ。壊したかったのは、家。…家庭。

陸上部に入る子供に、上等なシューズを選んでくれる

父さんや母さんがいる『家庭』

それを、たまたま見ちまったばかりに、俺は…

そのシユーズを取り上げて、焼いたんです。目の前で  
いったん区切った言葉は、まだ続く。

歯止めが効かずに、しゃべらずにはいられないみたいを感じる。  
わたしたちは、じつと聞いている。お父さんも、お母さんも。

「焼け焦げて燃え尽きていくシユーズを見て、俺は…

胸が、胸がすく思いだったんだ！

世の中の不正を正してやってる気分だった！

与えられるに値しないものを、俺が奪ってやるんだって本気で思った！」

鳴滝くんは、まだ片付けられていない、オムライスのお皿を両手でつかんだ。

「花寺、の母さん」

「はい」

「俺が、焼いたのは…

俺が、壊そうとしたのは……

『これ』だったんですね」

「…そうね」

今度はうつむかなかった。視線だけが、下に行った。

オムライスのお皿に、自分の顔でも映ってるみたいに。

その先にいる誰かを見ているみたいに。

「……………ごめんなさい」

「鳴滝くん?」

「困るよな。みんなに言っても……悪い」

お父さんが、彼の背中にポンと手を置いてあげた。

「今のきみなら、過ちを正せるはずだよ。」

きみは『これ』を、誰かに向けてあげられる人になるんだ」

「それが、できることなら」

「出来る、出来ないじゃあない。やりたいか、やりたくないかだよ。」

きみは、どっちだい?」

「……………やりたいです。やる方が、ずっといい」

「よく言ったね。じゃあ、邪魔な問題を片付けようか。」

「死んでる場合じゃあないだろう?」

そこからは、一気に話が進んでいったなあ。

当然、スタンドとかプリキュアの話はできないから、

鳴滝くんはお金の無さを自殺の原因に位置付けて話をしてた。

わたしたちに命を助けられはしたけど、金銭面の迷惑だけは

かけるわけにはいかず、だけど不仲な実家も頼れない。

残飯をあさって食いつないだが、それもすぐに町のウワサになって、

バレるのも時間の問題：もう死ぬしかないと判断した、って。

それを聞いたお父さんは、まず下水道に落ちた日に払った病院の

診察料について確認。それすらも実家に請求できてないのを知ると、

それを責めることなく、お母さん以外のみんなを連れてひなたちゃんの家に向かっ

た。

ちようど、ひなたちゃんのお父さんがいたのは運がよかったかも。

髪の毛もヒゲも、スゴく濃いヒトだった。

お父さんはさつそく事情を明かすと、ひなたちゃんのお兄さんが

鳴滝くんの支払いを立て替えたことにできないかかって相談に入った。

そうすれば、立て替えた金額をいつまでも払ってくれないってことで、

鳴滝くんの実家に直接請求する名分ができるからだつて。

そして、そこに鳴滝くんの苦しい生活事情をとがめる一文を含める。

『一か月の生活費がこんな金額じゃあ、何度同じことを繰り返されるかわかったものじゃあない。最低でもこれだけは出してあげろ』

…つてね。

もし今回無視されたら、来月にもつと厳しい調子の手紙を送ろう。

そう、お父さんは提案して。

「よろしい。私も一肌脱ぎましよう」

ひなたちゃんのお父さんは、そのまま賛成してくれた。

自殺未遂の事件を聞かされたときから、邪険にするつもりはなかったみたい。

鳴滝くん自身には、いい感情を持ってないみたいけど…

今を乗り切るための間に合わせつてことで、一万円を貸してくれたとき、

「うちの子に触つたら地獄に叩き落とすのでそのつもりで」

つて言つて鳴滝くんを怖がらせて、すぐひなたちゃんに怒られてた。

ともかく、方針は決まつて、その日のうちに手紙がポストに入れられた。

手紙の送り主は、ひなたちゃんのお父さん。

わたしたちはほとんど何もできなかったけど…

ほぼF・Fと相談した通りのやり方になったのは、大人のスゴさだよな。

…で、自殺未遂なんてことをしちやつた鳴滝くんを、少なくとも今日一日は返せない。返してすぐに自殺なんてされたらたまったものじゃあない。

つてことで、ちようど空き部屋になつてるところを使つて

泊まらせることにしたんだけど、鳴滝くん本人がものすごい勢いで反発した。

「言わせてもらいますッ、あんたは正気じゃあないぞッ!!」

俺がやってきた悪いことには、

『そのテのヤツ』だつて含まれてるつて言つただろ!？」

「そうか、そうだつたなあ……」

じゃあ、今夜はぼくも、きみの部屋に泊まるよ。監視だ」

「なんでそうなるんだ？」

俺を家に帰せばそれで済む話だつてのに!」

「ぼくの安眠のためだよ。こう見えて気が小さいんでね…」

あ、そうか。じゃあお風呂も監視しないと。ついていくよ」

『お疲れ様』

『花寺……っ、疲れた』

今は夜の9時。鳴滝くんもわたしも、お風呂に入った後。

部屋ごしに、スタンド会話でやりとりしてる。

結局、鳴滝くんはお父さんをどうにもできなかつた。

今も、同じ部屋でテレビとか見てるはず。

『マヌケなミスひとつで……なんでこうなつた?』

『よかつたよ。死んだりするより、ずっといいよ。』

鳴滝くんのお金の問題も解決できたし、ね?』

『そう願いたいな……ああ、布団、干しっぱなしだ……』

『それで帰りがかつたの?』

『まあ理由のひとつではあるな……』

声が途切れたんで、手元のスマホに集中する。

こつちもこつちで、ちゅちゃん、ひなたちゃんから

メッセージが何度も来てる。返信、返信……と。

『花寺』

『なあに?』

『ごめんなさい』

また声が聞こえてきたと思つたら、しおらしい態度だった。

でも、萎縮してゐるわけじゃあなくなつて。

むしろ伸び伸びとした感じがあるかな…?

『…いきなり、どうしたの?』

『スタンドについて明かしたあの日な。』

真面目に心配してくれてたお前を、俺は平気な顔でだましたよな?

思えば、ちゃんと謝つていなかった…

だから、お前が怖かつたんだと思う。

こんな形で、礼儀がなつちやあいないけど…ごめんなさい』

今日は、ごめんなさいの日だったみたいだね。

運がいいのか、悪いのか、わかんないけど。

ちよつとしたきつかけで、たくさんの荷物を下ろすことができたんだ。

わざわざ、それを積みなおすことも…ないよね。

『うん…いいよ。わたし、あなたを許したよ。』



それと……』

「ラビリン?」

「ラビ?」

「鳴滝くんが謝ってるよ。」

ほら、ひなたちゃんが大ケガしたとき…

あの日、だましてごめんなさい、って」

「……もう、二度とするんじゃないラビ。」

そう言っというてほしいラビ」

『もう二度とするな、って。ラビリンが』

『……おう、わかった』

『おやすみ』

『……おやすみ。じゃあ、夢で』

そのまましばらく、夜が更ける。

やがて、わたしは窓の前に立つ。

月を見上げて、DEATH13を展開した。

長い今日が終わって、いつもの『夢』が始まる……

一緒にお手当てしよう。みんなを守るの。

## プリキキュアたちのいない場所で

これは、主人公たちのいないところでの話。

ゆえに、誰でもない視点から語られることを承知いただきたい。

場所は花寺家……すでに日が暮れ、夕食も済んだ後で。

花寺のどかの父、花寺たけしは表に出て、

スマートフォンで電話をかけていた。平光家に、だ。

「あの後、すぐに振り込まれてきたらしいですね」

「もう聞いておいでですか。一万円、返しに来ましたよ」

「ハハハ、ウチにも直接お礼を言いに来ました。」

手紙に返事はおありで？」

「ありましたよ。紋切型の返答ですがね……」

「ご迷惑をおかけしました、としか書いていませんでしたな」

花寺たけしは、やはり、と思った。

本人から聞いたうえで、娘からも聞いたのだ。

本人が言うには、役立たずには居場所がない家。

どんな手を使っても勝利する気風の家で、

だからこそ全国レベルの走者であるうちはどんな我儘も許容され、足が動かなくなれば用済みとなった。

娘が言うには、どうやらまともな人間がいない家。

彼の、肩を貸されて背を支えられると過呼吸になる体質は、

家族からされた仕打ちが原因だと娘は考えている……

だから、聞く。不審に思っていたのだ。

すなわち。鳴滝家とはまともな家なのか？

「平光さん。鳴滝家っていうのはなんなのか、ご存じなんですか？」

「知っているといえば知っていますが……どういう意味で？」

「彼がやったことが、おそろしい非行だったのは確かですがね……」

遠く離れた町にまでそれが知れ渡って、大人にまで警戒されている……

異常ですよ、この状況は？殺人事件でも起こしたみたいな扱いだ……

……鳴滝という家自体に、悪名がない限りはありません」

「ふむ……おっしゃる通りです。」

かくいう私も警戒しとるんですよ。

今、あなたは殺人事件とおっしゃった……それに近いものです」

「…どういふことですか？」

唾を飲み込んで聞き返す花寺たけし。

そんな人間に、娘は関わってしまったのか？

いや、まず最後まで聞かなければなるまい……と。

「すこ中の近くに駄菓子屋がありますな。『村雨』むらさめという家です…

もつとも、10年前に閉店していますから、ご存じないでしょうが」

「その、村雨さんが？」

「娘さんを亡くしています。利発で元気なお嬢さんでした。」

村雨さんには唯一残っていた家族だったんですが…

お孫さんも、生まれてすぐ事故で亡くなってしまいましたし」

「…続けてください」

オホン、という咳払いが通話で聞こえた。

「初音さん、というんですがね。」

12年前ですな…鳴滝家に家政婦として雇われていたようなんです。

それ以上のことはわかりませんが…ある日、『怒って鳴滝家に抗議に行った』

「それは一体？」

「わかりません…彼女のお友達から、わずかな証言が得られただけでして。」

そして、『血まみれに叩きのめされて帰ってきた』

「なんですかそれは!? 大事件じゃあないかッ!？」

「正確には、鳴滝家に行った帰りに、通り魔に遭遇したという話ですが…

彼女自身は何も言わないまま入院して、1年後に病死しました」

「病死?」

「傷から感染症を次々に併発して、

傷がふさがつても体力が落ち込み切つて、助からなかったそうです」

傷がふさがつたのに体力が戻らない。

その単語の連なりは、なぜか花寺たけしの脳裏に響くものがあつた。

が、今は重要ではないと思つた。本題に戻る。

「つまり…確たる証拠はないにせよ、手引きをしたと疑われている、と?」

「そういうことになります。

あの事件を知る地元人なら、みんな警戒してますよ…

うちも、ひなた以外はみんな知ってます。

その一族の子供が、突然転校してきたわけですな。

調べればすぐにわかる悪名つきで」

「……なんてことだ。ぼくだって、知っていたら娘を近づけなかつた。

しかし…12年前じゃあ、1歳だ。彼は、犯人になりようがない!

親の罪が子に崇っている?それもそれで、おかしい……

ぼく自身、彼を助けたことを恥じたくはない。娘は、気高いことをしたはずだ」

「同感です。ウワサほどの悪タレではないようですしな…ま、様子を見ましょう!

それはそれとして、娘に手を出したら地獄を見せてやりますが」

「…そうですね。ハハハッ、そうしましょう!」

後は、平和な雑談になる……ここは、ここまで。

場所は変わる。人間の世界ですらない。

地平線の彼方まで、穢れきった大気と大地、澱んだ海原が続く…

『彼ら』と、『彼らと戦う者たち』は、この土地の名を知っている。

ビョーゲン・キングダムという名を!

とはいえ、実際のところ…この土地に住まう者は多くない。

宿敵であるヒーリング・アニマルとの闘いで、『彼ら』ビョージェンズの大半は討ち取られてしまっているからだ。

ヒーリング・ガーデンの女王テアティーヌは、それほどまでに強かった。

しかし、大量の犠牲を強いられたのはヒーリング・ガーデンも同じこと。

今は互いに痛み分けだが：戦況は、ビョージェンズ有利の形で推移しており、

彼らビョージェンズの間、人間界進出を邪魔できるものは、ほぼいなかった。

「プリキュアを除いて、だけどね」

「クウ~~~~ツ、いまいいわ、あいつらー！」

三人のビョージェンズが、一か所の岩場にまばらに散ってぼやいている。

それぞれが勝手にふるまっている。コミュニケーションをとる気があるかは怪しい。

岩に寝転がる少年はダルイゼン。

高いところでガツガツ地面を踏み鳴らしているのがシンドイーネだ。

どちらも人間界にてプリキュアと遭遇。負け越している。

「いやーそんな連中よりも！」

ナゾの力を使う人間どもの方が脅威だぞ！

このグアイワルの意表をついて、卑怯な一撃をくれよった：

…アガ、アイタタタタ…ケツがああ…」

そこに脇から異を唱えたのは、岩場にベッドを置いてウツブセにシヤクトリムシのような動きをしている筋肉ダルマ、グアイワルだった。現存する幹部級のビョーゲンズは、この三名のみ。

組織力は、ほぼ皆無と言っている。だからこそプリキュアは戦えている。

ヒーリング・ガーデンは、人間界をギリギリのところまで守り抜いたと言えた。

「あらア……バツツツツツカじゃないの？」

あんなゴミほどの役にも立たないデミビョーゲンに、

デミビョーゲンにすらなっていない人間にしてやられるなんて」

「やかましい！ だいいち、ナゾの力の持ち主を確保するのは

キングビョーゲンの命令だろうが！」

指示をないがしろにして帰ってきたお前に言われたくないわ！」

「さまをつけなさいよダルマヤロウ。」

アタシは一目見てわかつたんですウウー……ッ！

あのデミビョーゲンはクズ！ ゴミ！ ゴミ以下！ ゴミ以下の以下！

キングビョーゲンさまの目を汚すゴミ以下の以下の以下には、

捨てゴマでも上等のVIPなんですウウウー……ッ！

「手伝ってやれば、勝てたかもしれないのに」



始まった口喧嘩に、心底バカにしたような野次を投げたダルイゼンは、わざとらしく、あーあ、と言ったのけた。

「なによエラツソーに！見てただけのブンザイで：

アンタがクダラナイ任務をしくじったせいで、

アタシに尻ぬぐいさせてんじやない、ザツケンじやないわよ」

「あの力を持ったヤツがプリキュアになっちゃったけど？

なりたてで倒せなかったのは誰の責任？オレじやあないね」

「アンタがさらって来れなかったんでしょうがそもそも！！」

『やめよ』

三者の争いが激化しようとしたところに、空からかかる声。

シンドイーネが激しく反応して見上げると、

暗黒の空に浮かび上がる、邪悪な煙のような顔。

「あああツツキングビョーゲンさまアツ!!」

黄色い声を上げるシンドイーネに、

尻に鞭打って姿勢を正そうとするグアイワル。

ダルイゼンは横になったまま動かない。

気にすることなく、空の顔は続けた。

『プリキュアは脅威にならぬ。

プリキュアが現れるということは、

まともに戦えるヒーリング・アニマルがいないことの証明。

それよりも…人間どもに現れた、不可解な超能力の証明が先決だ』

「ハイッ、ハイッ、そーですよねキングビョーゲンさまアー!?!

さっすがですウウーッ

『そう思うのであれば、あのデミビョーゲンを

連れ帰ってくるべきだったな。シンドイーネよ』

「ウツ……」

「言われてやんの」

「黙んなさい、このー!」

また争いが起こりそうになるも、主が目の前である。

先にシンドイーネが自粛して、ダルイゼンも特に何もしなかった。

『まあ、よい。

我にはわかる。あの能力は、ヒーリング・アニマルどもの仕業ではない。

であれば、人間界に突然現れた何かであろう。

そして、それが我がらがデミビョーゲンとして手中に出来るものならば…

むしろ、我らにとっての力となるものよ………ダルイゼン』

「何か？」

『しばらくは人間界を蝕まずともよい。

代わりに、同じような能力者を探すのだ。プリキュアの周辺には限らぬ。

発見次第、我に報告せよ。最低ひとり、間違いない手に入れるために……』

「……了解」

『シンドイーネとグアイワルは、今まで通りに蝕み続けよ。

ただし、能力者を発見したならば……最優先で連れ帰るのだ。

プリキュアと、その仲間は……もはや敵とみなしてよい。倒せ』

「ははッ！」

「かしこまりましたわッ、キングビョーゲンさま」

発言を終えた空の顔は、出てきた時のように

ただの煙のようになり、やがて何もなかったかのように消えた。

いつものことであり、ここに気にする者は誰もいない。

互いに見下しあう三人衆は、王の命令の元に動くだけだ……

「先生。バイタルは安定しました」

「やつとか…なんとか持つてくれたか」

また、場所は変わる。人間界は日本の、病院だ。

すこやか市からはだいたい離れる、都心近くの総合病院である。

こと、機器、設備に関しては最新鋭を誇っており、

他ではどうにもならない難病を抱える患者の命を、今日もまたつないでいた。

その中の一床に、『奇妙な患者』を抱えている。

「なんなんですか、これは……」

原因がないのに、症状だけがあるとしか言えません。

本来なら回復する状況なのに、意識不明で弱っていくままなんて」

「ああ…わからない。」

だからこそ、ぼくに回ってきたはずなんだ。彼は…」

「同じような症状を、見てらしたんでしたっけ。先生は」

「うん。あの子は、なんとか持ち直してくれた。」

中学校に通って、友達ができたって手紙をくれたよ。

……何もできなかったんだけどな。ぼくは。

何ひとつできないままに、原因不明のままあの子は回復したんだ」

先生と呼ばれた男は、デスクの角を握りしめた。

夜の病棟で、デスクを叩くわけにはいかなかったからだ。

「ぼくは……同じ無念を舐めるために、ここに居るわけじゃあないッ……！」

今度こそ、尻尾をつかんでみせなければ……！」

「でも、何もわからないじゃあないですか。

患者が何者かすらも、我々にはわからないんですよね？」

先生と呼ばれた男よりも、スタッフは幾分未熟のようだった。

だが、そんな不安を口に出してしまうのも仕方がないような事情を、

『奇妙な患者』は持っていた……

「伊豆半島中部の山中に、裸で倒れているのを発見された金髪の青年……

日本人とヨーロッパ系白人のハーフ。年齢は24〜5。

戸籍をどれだけ当たっても見つからず、DNAを見るしかなかった、か」

「DNA鑑定の結果、母親らしき日本人は見つかった……

しかし、年齢から逆算する生まれ年には、その母親はすでに死んでいた。

…怪談じゃあないんですよ？どういふことなんでしょうか」

「……わからない。彼女には一人娘しかいなかった。父親のわからない『娘』…

その娘だつて、育児放棄のせいで4歳で死んでいるが…

認知しない子を作ったとして、死後3年後に出産される子供なんて、いるはずがないッ。

何が、どうなっているのか……」

ふたりとも知っていた。カルテに使われている『汐華』しおほなの名は仮名だ。

あらゆる手を尽くして得た成果らしいものは、現状ただひとつ、それなのだ。

母親とおぼしき人間の名、『汐華せいら』しかわかっていない。

まさか、娘の名前『汐華はるの』を使うわけにもいかず、苗字だけが書いてある。

「確かなのは…彼には、家も、身寄りも、何も無いということだけだな…

あの子には、まだ支えてくれる家族がいたんだ…金銭面でも、精神面でも！

彼には、それすらない！

亡くなるうものなら、誰にも見送られずに無縁仏になつてしまう…」

「やりきれませんね…あれほどの美男子。

女の子の方が放つておかないに決まつてるのに。それが、誰にも」

「彼には、生きていい目を見てもらいたいね。」

それが、ぼくの願いだ。いや、誓いだな……」  
病棟の夜は更けていく。

ここはある意味で、スタンド使いやプリキュア達に  
いささかも劣らない戦士たちの戦場なのだ……

## スカー・テイシユーはここにあり—その1

「まず謝らせてくれ。改めて、だ」

『夢』の中。カフェ・ドウ・マゴ。

俺は四人と四匹に、座ったままだが頭を下げた。

あれからの展開は早かったんだ。

平光父の、鳴滝家への問い合わせからわずか3日で

指定の金額が俺の口座に振り込まれるに至った。

事前に1万円を借りていたのもあって、すでに俺は

『垢』だの『生ゴミ』だのからすでに逃げ出している。

「特に、花寺……」

お前の父さんな、普通だったら……

俺の事情なんか知ったところで、首を突っ込んでなんか来ないはずだぞ。

俺とお前だったら、お前の方が明らかに大事なんだからな。そうだろ？」

うなずいた花寺を見て、先を続ける。

みんな、口をはさまずに黙って聞いてくれていた。



「それが、ああなったのは…俺が、目の前で『自殺』したからだ。

そして、お前がそうしたように、お前の父さんも俺を助けた。

言い換えるなら…俺は、俺の命を人質にとって脅迫したわけだな。

お前が独占して当然のものを、俺によこせと言ったんだ」

みじめな気分や悲しみ以外で出る涙なんか、初めてだった。

…いや、あの日、退院して家に帰り着いたとき、

それらしいものが流れたことはあつたけど…今回は、本物だ。

それだけに、許すべきじゃあない。あれは俺のものじゃあない。

「わざとじゃあねえ。バカと偶然が積み重なった結果がアレだったとは言ってもな…

後から考えるに、どう考えても俺のやったことは卑劣だった…すまん」

「うん。それで、鳴滝くんはどうしたいの？」

「この埋め合わせは必ずする。どういう形になるかはわからないがな。

これは返すべきものだ」

静かになる。言葉を発するものが誰もいない、無人の喫茶店。

ややあつて、花寺は了承の返事をくれた。

「…うん、わかった。わたしはそれでいいよ」

借金のまま利子だけが積み重なって、さらに借金してる有様だがな、俺。

だがもう、それは今は考えない。いい加減疲れたぜ。辛気臭いこと考えんのか！  
というか、現金なモンで。

あのオムライスは、食っただけで『苦い』ものとか『苦しい』思いの大部分を消して  
いた。

たぶん一時的に、だろうけどな。だがこの流れに乗るべきだ。

ウジウジ無駄な消耗を繰り返して、みんなを困らせるくらいならな。

抜かりはない…作り方はこの3日で覚えた。

これからはひとりでオムライス食いまくりだ。F・Fもいるけど。

「ともかく…今後、何か問題を抱えたのなら。

まずは、相談…させてもらっても、いいのか？

もちろん断つていいぞ。俺の責任を負わされる筋合いはないんだからな」

「断らないって。お互いサマじゃん」

「そうね。あなたのせいでいわれのない苦勞を負わされるのはごめんだわ。

だからこそ、相談してほしいわね。

ひとりで抱え込んで問題を大きくするより、ずっとマシよ」

即答する平光に、少し考えて言葉を選んだ沢泉。

沢泉からは、すでに聞いている。

俺が金銭的な危機に陥っていたことは、ゆめポートの時点で感づいており……最悪、沢泉の祖母ばあさんを頼る予定だったと。

：いやいやいや。無理筋だと思うんだが、接点がなさすぎて。

それに、お前は知らないだろうが：

お前の母さん、俺に対していい感情を持ちようがないぞ。

だが俺は、そんな無理筋を通させる覚悟をこいつにさせていた。

俺がバカな独り相撲をやってるうちに：

ああ、こつちでもだ。俺は俺の命を人質にとつてたわけだ。

せざるをえなかつたんだ。誇り高いヤツだからな。

：ハイ、ここまで。無駄な消耗なし！

もう二度と繰り返さん。こつちもいざれ埋め合わせる。それでいいだろ！

前回といい、ゆめポートといい：ヒトにグチを吐き出してばっかりだ。

もう、俺の醜態に俺自身がガマンできん。なんとしてもカツコつけるぞ。

「まず、俺の『変身』が事実上、使い物にならない件について」

「……そうねえ」

ハアア……と、沢泉がヘキエキしたツラでため息をついた。

人目のあるところで二分間、半身不随の男が全身を水につける。

それがどれほど困難か、前回の事件で証明されきつちまったんだからな。

「はつきり言うわ。他に方法がないのなら、今はあきらめるべきね。」

「悩むべきことは、他にもたくさんあるんだし」

「短い夢だったなあ〜、魁」

「F・F、お前な…沢泉が言うんならともかく」

「実際、無理でしょ…人目を避けようと思うのなら、

マジでコンソメ片手に人家の風呂に忍び込むしかなくなる」

「ソコで原点回帰かヨ！」

そこに戻ってくるとは思わなかったよ。マジに。

「入水自殺がイヤならヘンタイになるしかねえのか、俺は？」

「あ、コンソメはいらなかった…」

前回の事件で作ったろ、栄養ブロック。『垢』の！

あれを代わりに使えば問題ないわね」

「問題しかねえ」

「タツキー、マジ、アカナメじゃん？ソレ」

「うるせえ。ンなこと言ってるど食わずぞ、てめーに！」

「おぞましーコト言ってるラビ。ヘンタイラビ」

「自殺はともかく、ヘンタイは誰が助けてくれるペエ？」

「ケーサツだぜ、ソツコーでタイホだぜえー」

各々、勝手なコトばかり言つて取拾がつかなくなりかけたのを、

花寺がきつちりシメた。お前がリーダーだよな、やつぱり。

「マジメに言うよ？」

それ、やつて人に見つかつたら…居場所なくなるよ。この町に…

問題外、検討する価値もない…で、いいと思うな」

グウの音も出ねえ。そもそもイヤだけどな俺だつて。

そこへさらに、沢泉のトドメが加わつた。

「もつと言えば、鳴滝くん。

あなたを助けてくれた大人、全員の顔がつぶれるわね。思いつきり…

私も、『なし』だと思つて。あきらめましょう」

「…マジか。始まる前に全てが終わつたぞ…チキシヨオ」

この結論だと、アドバイスくれたジョセフの面目も丸つぶれなんだがな？

俺自身、正直面白くない。当初は乗り気じゃあなかつたとはいえ…

今までの労力が無駄だつたと言われるのは…ああ、面白くない。

だが、まったく言う通りで、それを覆すだけの材料を持たない俺だつた。

しようがない。しばらくは水面下で、迷惑をかけない範囲で研究していくか。  
F・Fもイヤとは言わないだろ。

「……ン？」

もしかしてさ、くやしい？ムカツく？」

「ンなこたあーない」

「変身の練習、ガンバツてしてたじゃん。

実は、さあー。あたしも…始まる前に終わっちゃったんだよねー」

…何が？

全員の動きが止まって、平光を見た。

いや、ニヤトランだけは例外みたいだ。

腕組んで、ウンウンとうなずいてる。

「あたしさ、投稿してみたかったんだ。動画…」

自撮りで歌ってみたり、踊ってみたりとかさあー」

「練習に付き合ってたんだぜー、オレも」

「……止めるしかないんだけど？」

今、やろうって言うのなら…」

鼻白んだ様子の沢泉が、それでも身を乗り出した。

俺も同じように思うし、花寺も同意見のようだった。

で、それは平光自身も同じだったらしく。

手をパタパタ振って苦笑いしていた。

「さすがのあたしもワカッタって！」

ウチがみんな危なくなっちゃうかもしないし！

投稿する前に思い付いたんだ、プツチ神父にコレ見られたら、って」

そう、こいつはホワイトスネイクに命令DISCを差し込まれていた。

それも、遠からずゆめポートに行くのを見越した上でのものだろうヤツをだ。

今はまだ、たまたま行く用事がないのが続いていると考えると不自然じゃあないが…

いずれ、不審に思うときがやってくる。

そこへ、本人が動画配信なんかしてみろ。寝た子を起こすマネになる。

「あの。根本的な質問オツケー？」

「ン？」

「動画投稿ってなんのこと？」

F・Fは基礎から理解できてなかった。

彼女が元々生きてた2011年当時でも動画投稿サイトくらいあっただろうが、

『水族館』だとアクセスできる環境がなかったらしいな。

順当かもしれない。脱獄に利用されそうなモノを備えておく理由もないからな。「タツキーさあ。教えてあげよーよ、ジヨージキくらい…」

そんなん知んないのヤバイっしょ」

「テレビもねえ、新聞もねえ。そんな俺にどうしろと?」

『『水族館』の方がまだマシだよな、おまえんち!』

「だろーよ。メシ、フロ、ネルしかねーもん。あとは宿題と、図書室の本!」

「図書室といえ、だけど…TVガイドないの?」

ウエザーがTVガイドマニアなんで、たまに見してもらってただけど」

「図書室にTVガイド?それ、めっちゃイイ!よくない?」

「ねえーよ…ん?」

死ぬほどくだらん話に脱線しつつあったが、

沢泉が沈痛な面持ちで首を左右させているのを見て、

一人、二人と、みんな自然にそちらを向いた。

「ちゆ、どうしたペエ?」

「ペギタン…いいえ、大したことじゃあないわ。本当に。

ただ、その…動画を見られたら、って言ったじゃない。プツチ神父に…」

「それが、どうしたんだペエ?」



「…なんて、ヒドイ絵面なのかしら、って……」

「……………」

肌の浅黒い、神父服を着た壮年の偉丈夫がパソコンで動画投稿サイトを見てる。

女子中学生の歌とかダンスを。あのツラで。

親指のツメとか噛んでそうだよな、あいつ。

「……ひでえな」

「引くね」

「ないわー……」

「って、ま、まあ！ソんなコトがあつたから！」

なんともいえない無残な想像を打ち切るためか、平光が無理に明るい声を出した。

ある意味、異常事態だな。

「あたしのデビュ―動画もオクラ入り！」

「そんだけ！そんだけのハナシ！」

「…あ、そーいや、ちよつち気になるコトあつたっけ」

「気になること？なんだそれは。」

「全員、積極的に話に乗った。妙なくらい熱心に。」

「この際、内容はなんでもよかつたんだろう。」

「自分で動画撮んのに、イロイロ見てたんだよ参考としてさ。オベンキョーね？」

見る方に夢中になって一週間くらいツブレちったけど……

そのなかに再生数37とか、そんなのあつてさ……だいぶ前に投稿されたヤツなんだけど」

「ほとんど見てもらえてない動画、っていうことでいいのね？」

「ウン、そー。そのヒトのやつね、それより前の動画も似たようなモンだったんだけど……

おとといくらいに投稿したのが、イキナリ20000再生だったんだ」

「ふわあー、一気に増えたね。大ブレイクしちゃったの？」

「……チガうんだよねー。むしろ『炎上』？」

確かに、気にはなるな。

俺は動画投稿サイトに関心を持ったことはほぼないんだが、

そんな俺にだつて理解はできる。

投稿して数か月経つても再生数3ケタも行かないとなると、

マジに箸にも棒にも引つかからないヤツだろう。

その評判が定着しきつちまったヤツのはずだ。

「『炎上』？なんだそりゃ」

「そうね……見る人を怒らせたり、極端にバカみたいな内容の動画で、

悪い意味で注目集めちゃってる状態のこと…で、わかるかしら？F・F？」  
「…あー、要するに。『さらし者』？」

「ええ。そういう言い換えもアリよ。」

それで、ひなた…: どういう『炎上』なの？」

わが意を得たり、といわんばかりのドヤ顔を一瞬してから、平光は続ける。

「んーと、アレ…: 犯罪予告。」

つつつても、何したいのかゼンゼンわかんない。

『アタシを無視してきたヤツらに復讐するんだー』みたいなコト、

ムズカシー言葉で言い続けてただけ」

「コメントはどうだったの？」

「んー、まともに受け取ってもらえてなかった。」

言い方がウケるー、とか、頭ワルそー、とか、低学歴ー、とか」

…: ないよりマシなかもな、そんな注目のされ方でも。

本当につらいのは、いないものとして扱われることだ。

形はどうあれ『見られてる』なら、まだ張り切っていけるんだよ。経験上。

口には出さない。また脱線しそうだし、グチにしかならん。

沢泉は、やはりか…: という感じの顔をしてるし、花寺はシヨボくれている。

「ヒマなヤツらラビ。」

ヒトをバカにするためだけに集まってるラビ?」

「そーいうの、イヤになるペエ」

「だよなあー。」

人間で、いいヤツも多いんだけどよ。

キツツイよなあー。悪いヤツ見ちまうとよ…」

「クウン……」

花寺のそれを代弁するように不快感をあらわにするラビリンに、落ち込むペギタンを気遣いながら同意するニヤトラン。

ラテが足首に身を摺り寄せてきたことに気づいた花寺は、少し笑顔になつてから、平光にさらに聞いた。

「ひなたちゃん。ちよつとでもいいよ。」

その人、『何をする』つて言つてた?

どういう犯罪?」

「……………『盗み』、だと思ふ。ドロボー。」

起きたら、動画のアドレス送るね。

つて、タツキー見らないじゃん」

「俺は気にすんな。あとで二人から聞きやあ十分だろ」

話を聞いてる限り、なんとも判別がつかん。

バカが何も考えずに出まかせをぬかしてるだけか、

それともバカなりに何か実行するつもりなのか？

だが、『炎上』という形でも注目されてるってんなら、

何か真に迫るものがあるってことだろう…ただのバカの可能性は低い。

ということとは、突き抜けたバカか、ガチの犯罪計画か。

どちらであつても、俺たちには関わりがない。

そんなものを追いかけてる余裕なんぞ、俺たちには最初からないんだからな…

そいつが、スタンド使いである場合を除けば。

願わくば、ちよつとの間くらいはゆっくりしたいもんだな。

F・Fが言うには、やっとまともに左手を修復し始めたところらしい…

## スカー・テイシユーはここにゐる——その2

『…何度でエ、も。繰り返すけど。

あんた達、にイ、あたしを…止められる機会はアいくらでも、あつた。

た、た、たかが30分程度の…じ、時間がそこまで惜しかったばツ…かり…に、

あんた達、のオ…うち、何人か、はア、もつとオ大きなものを失うことにイ…なる。ど、どーせ…バカ、にするか、相手にしないつてのはア…計算済み、だけど。

もう、あんた達にイあたしを止めることは、できない。そのオ、証明、を！

あんた達は、す、すウ…座つてエ、見ている。すぐにイわかる、ことに、なる』  
真つ暗な画面に声だけの動画。

ナンのための動画なんだかつて感じだけどぎ。

だいたい数分の動画を、昼休み、ゴハン食べ終わった後の中庭で、  
今みんまで見てたつてワケ！

朝にアドレス送つたけどぎ、見るヒマなんかないからさあー。

最近はみんまで朝早く起きてランニングしてるし！…タツキー以外。

「ひなたちゃん。この人…ずっと、姿隠して動画取つてたの？」

「んーん。んなことないけど？」

「前回も、前々回も、顔出しでやってたよ」

「なのに、今更姿を隠して配信？」

「気になるわね…何があつたのかしら。」

「…吃音があるみたいだけど。ずっと、こうだったの？」

「キツオン？ええつと？……………」

「考え込んでしまったのを、すぐちゅちゅが解説してくれた。」

「どもつて、普通に話せない病気のことよ」

「…うん。ゲームの実況やってたんだけどさ。ずっとこんな感じ」

「実況？ゲームを、どうするの？」

「ポケットモンスターとか、でいいのかな…」

「遊びながらオシャベリすんの。ゲームね。」

「ポケモンじゃあなくて、もっとよくワカンナイ、レトロなヤツだった」

「うーん、つて、ちゅちゅも、のどかちゅも腕を組んで考え込む。」

「あたしはさんざんやった後だけど、でもやっぱりやっちゃう。」

「ひなた。どうして『盗み』だって思ったの？」

「…んんんんんんんんんん、あのね。」

動画見てる人に何かしようたって、

それがドコのダレかなんてワカンナイじゃん。

だから、やるんなら『みんなが困ること』だって思つて。

銀行強盗してさ、金庫の中身全部空っぽにしたら

お金下ろせなくなつて困るじゃん？そーゆうことすんのかなつて」

コレでもスツゴイ時間かけて考えたんだよ、言い出しつぺだし！

承太郎さんだったらどーゆうーふうを考えるかなーとか、

あたしなりに追っかけるんだけど…こんくらいしか、できない！

…途中で、ヤシの実ジュースとかチャイイとかドネルケバブとか思い出しちゃつて

さ、

あたしの旅行計画立てはじめちゃったケド！お金ゼンゼン足んないや…

「銀行強盗…は、ともかく、だけど。」

『みんなが困ること』は、ありえる筋ね。

もし、動画が特定の誰かに向けたものじゃあないのなら…

攻撃の相手は不特定多数。それしかないわ」

ちゆちーがうなずいてくれたのには思わずガッツポーズ。

タマにはヤルんだよーあたしだつて！



でも、そのあとにのどかつちが言い出したことはワカンナイ。

「うん、それで…ある意味、肝心の問題だけど。

たぶんこの人、すこやか市に来るよね？」

「……なんで？」

そ、そりゃあ、遠くで事件起こされてもナンもデキないけどさあーあたしたち！

でも、なんですすこやか市に来るって言いきれんのさ？

あたしがコンランしてる間に、ちゅちーが先にわかちやつたみたい。

「『スタンド使いはひかれ合う』…ということね」

「うん」

「の、のどかつち。言葉はわかるんだよ、あたしも？

でも、くわしく！」

のどかつちは、ひとつずつシツカリと話してくれた。

まず、あたしとタツキーが出会ってる。始業式翌日の臨時休校で。

それより前だと、知ってるだけの他人だったのに。

あたしもタツキーも知らなかっただけで…あのとときステに、

フー・ファイターズと太陽サンが出会ってたってこと。

「あつ…チガウ。始業式でステに会ってるよ、あたし！」

のどかっち付け回してたタツキー追っ払ったよ?」  
「じゃあ、ますます決まりだよ。」

『この世界』でも、スタンド使いは出会ってこと」  
それから、同じようにDEATH13が現れて。

DISCはのどかっちのものになって、のどかっちがスタンド使いになった。  
ちゅちーを狙ったのはヘンタイヤローの計画通りだったのかもしれないけど、  
あたしとのどかっちが、直前でちゅちーの友達になってたのは『偶然』。

DEATH13のDISCを没収しに行けたタツキーが仲間だったのも『偶然』。  
「そして今、ひなたが存在を気にしだした動画投稿者がいる…のね?」  
「考えすぎかもしれないよ?」

でも、仗助さんが『アンジェロ』と出会っちゃったのも、  
たまたまコンビニ強盗の野次馬に入っちゃったからなんだよ?」

『この出会いは運命』そういうこともあるかもしれないの」  
「……めっちゃ、ゾツとすんだけど。」

毎日、どこかで顔合わせてる誰かがスタンド使いつてこと?」

怖いよ、のどかっち!ちゅちー!」

そーいえば、そーだよ。」

承太郎さんの人生って、スタープラチナが身についてからずっと！

スタンド使いを追ったり、追われたり、誰か助けたり！

ホワイトスネイクにDISC抜かれるまで、そればっかだったじゃん！

それがすべてってワケじゃあないけどさあ

あたしが泣きそーな声出したからか、ちゅちゅものどかつちも、

チヨツピリ空気を飲み込むみたいにして、フワツと笑ってくれた。

「悪いことばかりじゃあないわよ、ひなた。

来ると言うのなら、迎え撃てばいいんだし：

ホワイトスネイクも、いずれ私たちの前に現れるってことでもあるわ。

のどかのことを考えると、私もいずれスタンド使いになるのよね。たぶん

「そうだよ。イイコトだって絶対あるよ！

ほら、仗助さんと億泰さんは、楽しい学校生活送ってたみたいだよ？

トニオさんとか、露伴さんみたいな人にも出会えてるし。

宇宙人さんもいたでしょ？ 康一さんなんか、恋人できちやつてるよ！

……………ウン。

トニオさんの話が出たら、そんなりとしか言えないよねえーツ

思わずついつい、よだれズビツ！

「そっか…そだよね？」

承太郎さんでさえ、ついニヤけちやう究極イタリア料理！めっちゃ食べたいッ  
露伴ちゃんも性格アレだけど漫画スゲーし！」

「いつも思うけど、現金よね。あなた…いえ、私もそーは思うけど」  
「うん、うん。モノスゴいウマみのイカスミスパ。」

『記憶』を思い返すだけで幸せになっちゃうよお〜〜」  
「承太郎さん、ゴチです！」

のどかっちアリガトー！めっちゃ幸せ！

幸せの繰り返し…経験したーい！

思い出だけでもスゴすぎだけど、マジに会いたーい！

「でも恋人つてのは…キツすぎない？由花子サン。」

やー、本人が幸せなら言うコトないんだけどさあ」

「目が覚めるような美人ではあるけれど。」

でも、誘拐なんて…、一度でもされた時点で、私なら却下だわ」

「仗助さんからの又聞きだから、それ以上わかんないけど。」

「評判悪いから、思い通りに『教育』しようとしたんだっけ？」

…気まずい空気になっちゃった。

みんなで顔を見合わせる。

それに近いヤツがすぐそばにいるし！約一名！

誘拐どころか、むしろ拾ってきたポチだけど！

犬種はジャーマンシェパードとか、その辺！

「……私たちは、そうならないようにしましょう。」

そうする資格があるとしたら、それこそ『恋人』くらいのものでしょうか？

「いや、ないわね。ないわ…ダメよ。ヒトとして……」

「なんていうか…『お姉さん』みたいになっちゃってるよね、わたしたち」

「やめてよ、のどか。ホントに」

「ニヤトランも言ってたけどさ。世話焼けるよね…マジで」

「言わないであげようね。こういうこと…」

迷惑かけてるってわかって、それでも頼るしかない気持ち。

わたしにも、わかるよ」

だってよ、タツキー。シツカリして！

みんなに大事にされてることくらい、わかってるっしょ？

モット楽しめばいいのに。生きてんだからさあーッ

「まあ、それは置いといて……」

ひかれ合うのは、スタンド使いに限った話じゃあないかもしれないわね。  
スタンド使いに宇宙人がいるっていうのなら…」

「もしかして…宇宙人の、プリキュア？」

ふわあく、ワクワクするね！」

「それ、めっちゃイイ！会いたい！」

でも、だつたらあく、ロボットのプリキュアとか、どーよ？」

「どーよ、つて…さすがに無理じゃあないかしら？」

「夢が広がっちゃうね。」

ネコさんのプリキュアとか、クマさんのプリキュアとか」

「のどかつちく、それ、サイコー！カワイー！」

盛り上がってる間にチャイムが鳴りだして、

全員ダツシュで教室に戻ったのはナイショ。

あわててバタバタ走るちゅちーも、カワイイ！

「今できるのは、待つことだけね。」

スタンド使いじゃあないのなら、酷だけど…もう、それまでよ。

どこで何が起こるのかもわからないのに身構えるなんて、できないわ。

だからね…あの人がスタンド使いだと仮定して…すこやか市に来るものだと思って。

何をしようとしているのか、少しでも読み解くことが重要だと思うわ」

帰り際、ちゅちゅがそう言ってたから。

ウチに帰ってきたあたしは、引き続きスマホで調査することにしたのだ！

って言っても、あの人の過去の動画をさかのぼって見るだけなんだけどね。

ニヤトランと一緒に。

「ひなたー、こーゆーので人気になったらよおー。」

やっぱしアイドルとかヒーローみたいになれんの？」

「そだね。これでおカネ稼いでるヒトもいるし！」

有名になってたくさんの人に、面白いー、とか、カワイー、とか

言ってもらえんの見てるよ…あたしも！とか、やっぱ思っちゃうなー」

ぼやくみたいに言っていると、腕の中のニヤトランがあたしを見上げてきた。

「みんなに見てもらいたかったよなー、動画。」

きつとウケるぜ、ひなただからよ」

「…ふん、そっかな？」

ありがと。カワイー、ウレシー」

ニヤトランのノドをゴロゴロしながらスマホをさわる。

…ホントに、ニヤトランの言う通りだったらめっちゃウレシイんだけどね。

あたし、やってる最中は夢中になれるんだけどさ。

チヨットしてから、他のスゴイのと比べちゃってさ…悲しくなることばっかなんだよね。

小さい頃から、お兄もお姉もホメてくれるけど、あたしよりずっとスゴくって。

しかもオツチヨコチヨイだから、バカみたいな失敗ばっかしてさあー。

ハツキリわかんだよ？『ガンバリ』しかホメてもらえないのがさ。

だから、なんにも続かない。あたしは、あたしだけの『特別』がなんにもない。

でも、プリキュアになった。スタンド使いになった。

夢にも思わなかったんだ、ヒーローになるなんて。

今こそ何か変えられるんじゃないかって思っちゃう！

のどかっちとちゅちーに。ニヤトランとラビリンとペギタンに。

ラテに…F・Fと、タツキーに。めっちゃスゴイあたしを見てほしい。



だから、まずはこの事件？アバいちやうかんね。

よーし、動画、スタート……

出てきたのは、あたしとニヤトランが前にもチヨット見た、女の人。

アイサツをちゃんと聞いてると、会社員の人みたい。25歳とかその辺？髪型がショートサイドカットなんだけど……

ソバカスが悪目立ちしちやつてて、美人とはチヨット言えない感じ。残念。メガネとかかけると印象変わりそーなんだけどさ……

んで、ゲーム実況開始。なんだけど……前はすぐに見んのやめちつた。

「まず、なんのゲームなんだよ。コレ？」

ロボットが戦ってるのはワカンだけだよ……」

「ソー、チヨット待って、説明書き……」

『このオ、チップ……ダメ。わかつ、た、と、思……ます。』

同じイところ、グルグル、まわる、から。

間に、ウエ、イトを……』

……グウ、すぴー

「オイッ、ひなた！ひなたってばよー！」

「……………アッ。寝ちつた!？」

「しつかりしろよなー。オレだつてガンバツてんだぜ」  
「んなコト言つたつてさあー」

授業中みたく催眠術じゃん、コレ？

聞いているだけで眠気がー!?

ニヤトランは、そんなあたしに結構マジになつて言つてきた。

「ひなた！コイツだつてよおおー、きつとガンバツて撮つたんだぜ？

オレたちがガンバツたみてーに！

ツマンネーつてのはしよーがねーかもしんねーけど。

目的もあんだからよ。一度はシツカリ見てやろーぜ」

「……そーだね。見よう」

ソレ言われちやうとヨワイ。

そーだよ。あたしだつてガンバツて撮つた動画で、

途中で寝たりされたらと思つたらムカツくし！

想像してチョット、あたし自身キズついちつた…

こーなつたら、こつからがあたしの本気！

テレパシーでも催眠術でも、かかつてこーい！

………ヨツシャ！寝ずに最後まで見た！

「なんとかか。なんとかかオレにもわかったぜ。

ロボットに作戦を教えてよおー、

敵と戦うのを見てるダケのゲームみてーだ」

「……う、ウン。そーそー、そんな感じ！」

「ホントにワカッてるのかー？ ひなたよおー」

「わかつてるし！ 次行こ、次！」

そーやって動画をたどってつてると、なんとなくわかつてきた。

や、ゲームのことはワカンないよ正直。

何やってんのか、何やらせてんのかも、サッパリ。

あたしにわかるのは……この人がこのゲーム、大好きだつてこと。

見てるヒト置いてけぼりでシャベツてるけどさ、

ドモリながらも、ジマンげで楽しそーなの。

これ、あたしには……ないんだよなあー。

そこに興味が出てきたら、あんましツラくなくなってきた。

ワカンナイなりに見る……

ロボットに必殺のフォーメーションやらせる、つてトコまで来たんだけど、

上から目線のイヤーなヤツがシツコく書き込んでてジヤマ！

アレのパクリだとか劣化だとか、聞いてないから！

『動画主のやり方でいいじゃん』、ってコメントしといた。

30再生くらいしかされてないのに、こんなのにベツタリ貼りつかれてたとか。ちよつとヒサンすぎない？

で、必殺技…なにになに？ 『ジグザグに逃げて、みんなを撃つ』？

これ、スゴイの。敵ロボットに、みんなイツセーにドカーン！って。

やり方は、もひとつ過去の動画…

「……………あれ？」

「どーしたんだよ、なんかヘンだな」

「動画が、ない…？」

前に戻る、で見てきたヤツに戻っていくと、それも消えてる。

動画主が、上げた動画を自分で消してるとってコト？

チョット待ってよ、まだ見てないトコあるのに！

『犯罪予告』の一個前の動画は消えてなかった。

動画主が見るかはワカンナイけど、ダメ元でコメント！

『消さないで、まだ見たい』

それが、伝わったのか伝わってないのかは知らないけど。

それから三十分後くらいに動画は消えて、動画主のページも消えた。

## スカー・テイシユーはここにあり――その3

「つぶやきまで消えちつてんの！」

「これ……なんか、あるよね？」

『夢』の中。今日も、杜王町のカフェ・ドウ・マゴ。

杜王町とは言ったけど、あくまで『夢』で再現しただけで。

形兆さんが眠ってる霊園の向こうにヒーリングガーデンが『置いて』あったりもするから、

リアルな夢でも現実感があまりなくなってきた今日この頃ね。

そんなことはどうでもいいわ。『夢』に入るなり、ひなたがまくし立ててきた。

昼休みに話した、例の動画投稿者が、すべての動画……聞いている限り、アカウントを消したって。

そして、『つぶやき』まで消した……足跡を消しに来てるっていうの？

「一番おめでたい考えを言うんならだ。

身内にとがめられて犯罪予告もろとも消した。

……ってのもあるんだろーがな」

「そうだといいよね」

鳴滝くんの言葉に、のどかはシユンとなってるわね。

ふたりとも、カケラもそうだとは思ってないわ。もちろん、私も。

「スタンド使いはひかれ合う…わ。」

決行の日が近い、と受け取るべきでしょうね。

このスピード感からして…下手をすれば、明日か、明後日かもね」

「それなんだけどな、図書館で…ここ一週間の新聞を当たってみた。」

不審な事件…今回は『盗み』に絞って探したんだがな……」

「え？……あ、ありがとう。大変だったんじゃない？」

「…こんくらいはするよ。命がけだろ俺だって。」

ホントならゆめポートの本館行くべきなんだろうが、

無理なんで近所で済ませた…あんまり期待すんな」

確かに。スタンド使いだったら、不審な事件を起こす可能性はあるわね……

ひなたがそうだったみたいに、DISCで与えられたスタンドなら、

使い方を把握するところからまず始めなくっちゃあいけないわ。

スタンドという概念を理解していかないのなら、ますますそうよ。

それにしても、気合の入ったこと始めたわねえ。いきなり……

「まず、殺人を伴ったやつは除いた。

予告なんかしたんだ。その前に復讐始めるとか、帳尻合わねえマネはないだろ」

「殺人ありも、あつたのね？」

「ああ。都内のATM強盗。死者一名。犯人は四人組。

重機で物理的にATMを持ち出そうとしたバカヤロウどもだ。

犠牲になったのは、たまたま居合わせちまったオッサンな。

ただ、目撃しちまったからやられた……それ以上の理由なんてない『殺し』だな」

「見たよ。それ、ニュースで……ひどいよね」

のどかが紅茶のカップをギョツと握って、内側の水面を覗いてる。

それを見てた鳴滝くんは、アイステイーをグイツとあおった。

お茶請けのシフォンケーキはみんな手付かずのままね。ひなたまで。

「オッサンの冥福は祈るとして、犯人は全員逮捕されてる。

仮に、これが動画のヤツに関係があるとして、

犯罪の予行練習だったとしたら……ヤツのスタンドは、人間を操る類だ。

アクア・ネットワークスかヘヴンズ・ドアーか。はたまたホワイトスネイク本人か。

恋人で脅迫してやらせるってのも有りかな？」

「ヘヴンズ・ドアー？ 露伴ちゃんヤラれちゃってたつてコト？ プッチに！」



鳴滝くんが挙げた単語のひとつに、ひなたが目の色を変えた。

承太郎さんの記憶の中に、当然、岸部露伴さんはいるわ。

ふてぶてしいひねくれ者の漫画家さんだけど、

吉良吉影の事件では誰よりも活発に探りまわっていたのよ。

他ならぬ自分自身のために正義を行った：尊敬すべき、承太郎さんの仲間。

それがやられたってことなら：杉本鈴美さんが命と引き換えに救った命が消えたと  
ていうのなら。

私だって、のどかだって同じ顔をするわよ。

もつとも鳴滝くんは、そんなつもりで言ったんじゃないわね。どう見ても。

「例だよ例！例えばの話！そーいうタイプのスタンドかもって話！

だいいち、プッチの持つてるD I S C全部ワカるワケねーだろ。

どれだけの人間からスタンドと心を奪い取ってきたかわからねえ野郎なんだぞ」

「あッ……だよね。ゴメン」

「ま、調べてみるのはアリか：F・F。岸」

「岸部露伴なら、まず確実に無事ね。2011年頭に読み切り出して…

承太郎本人が読んでるぜ。『水族館』にいるプッチがチョツカイかける時間なんかない」

待つてみたいに一氣に説明したわね。F・F…  
聞かれることがわかってたわね。あなた。

「そ、そっか。良き良き」

「良きだな。話戻すぞ」

「承太郎辞典かよ！あたし…いいけど」

「ついでにさ、その読み切り読ましてくんない？F・Fうー」

「話戻すつつってんだろコラ」

苦笑いしながらたじろぐひなた。

調子戻ったわね。じゃ、私が戻しましょうか。

「人間を操る能力で、ATM強盗事件を起こしたとして…」

そうなる的口ぶりがおかしいわよね。

そこまでするヤツなら、犯罪予告の時点でもっと悪ぶってるはずだわ」

「ならフェイク…フェイントかって考えも出てくるが。」

だとして、誰に向かってやってんだ？

例の動画投稿者は俺たちを知らないし、知りようがない。

さらに、さつきも言ったが…犯罪予告と帳尻が合わねえ。

どう見ても、このATM事件…俺たちに関わりがある線は薄いぜ」

最初に『除いた』って言ったのにずいぶん食いついちゃったわ。

納得してみると、悪かったわね。話の腰を折ってしまったわ…

そう思ったんだけどね。のどかはちよつと違つたみたい。ラビリンも。

「大体、賛成。だけど、ひとつだけ…違ふと思う」

「ラビ！大切なコト忘れてもらつちやあ困るラビ！」

「…そうだペエ。大事なコトが確かに抜けてるペエ」

「……………オウ。言いてーコトわかつたぜ。オレもよおー」

「アン！アン！」

えつ、ペギタン？ニヤトラン？ラテまで？

ヒーリングアニマルのみんなが、そろつて？

……………『ヒーリングアニマルのみんなが』!?

「ま、まさか…ありえるわね？」

「大切な？お前らみんながわかつて、俺がわから……………あッ」

「盲点でもなんでもねえ。最初っから見えてる問題だったな」

「ど…どつたの？どゆこと？」

話についていけなかつたひなたに、のどかが教えた。

私にとつても、考えすらしなかつたのがちよつと恥ずかしいわ。

プリキュアとして!

「ひなたちゃん、わたしね……」

動画を投稿した人が『すでにビョーゲンズにされてる』可能性、あると思う」

「……えつ。……ええエエ~~~~~~~~ツツツツ!!」

大声を出して驚くひなた。

……でもあなた。それ、ノリでしょ?

案の定、大声を出すだけ出してから、アゴに手を当ててウーンと考えだしたわね。

イイ傾向よ……ウン。丸投げはやめなさいね?

「えエエ~~~~ツとチヨツト待つて。」

あのヒトがビョーゲンズにされてるってことはあ……

ダルイゼンとかから、あたしたちのことも……聞いている? 聞くってコト?」

「うん。それでね、わたしが言いたいのはそれだけだよ。」

向こうがわたしたちを『知らない』って前提は、危ないよって言いたかったの」

「……ど、どゆこと?」

ええつと、ATM事件やらせた真犯人があこのヒトで、

しかもビョーゲンズで、ヘヴンズ・ドアーだったら……めっちゃヤバくない?」

「大丈夫。それ、ないから」

ひなたを安心させようとするみたいに、

のどかは微笑んでから、テーブルに肘をついた右手をフリフリ。

「そんなことになってたら、犯罪予告なんてする意味ないよ？」

わたしたちが見つけるかだつてわからない犯罪予告なんかするくらいなら、

『人を操るスタンド』で、適当に選んだ人たちを次々使つて、ね？

わたしたちを24時間狙わせるだけでいいんだもん。耐えられないと思うよ？

「……やらない理由、ないよね？ビョーゲンズなら」

「うええええ〜ツホラーすぎるじゃんソレ!？」

とてつもなくえぐい想像ね!?!怖いわよ私も!?

鳴滝くんまでこわばつてるじゃないの。

F・Fは軽くうなずいただけけど…：ひなたの反応が正常だと思うわ、ここは。

ヒーリングアニマルのみんなは…：言うまでもないわね。全身の毛が総立ちよ。

「でも、のどかつちの言つてるコト、わかった!」

確かに予告するイミないねソレだと!めっちゃ無敵だし…」

「だからね。『ATM事件は無関係』…：今はそれでいいと思うな。

本題は、ここからだよね?…：鳴滝くん?」

「……………お、オウよ」

アイステイーをガブ飲みして気を取り直した鳴滝くんが、咳払いをしてから改めて話を再開ね。

私もホットコーヒーをひと口……

学生向けで安いわりに小じやれてて、お茶とコーヒーもいいのよね。

カフェ・ドウ・マゴ……私たちの温泉街にも欲しいくらいだわ。

「四日前だな……横須賀の音楽スタジオで『盗み』があつた。

スピーカーだのアンプだのの機材がごっそり消えたそうだ」

「それに……何か、不思議があつたのかしら？」

「三日前。東京、多摩の新興住宅地で不審な騒音騒ぎがあつた。

苦情を受けて警察が駆け付けたが、そこには何もなかったそうだ。

騒ぎ自体は本物らしい。三十人以上が体調不良で病院に運ばれてる……

ガラスが割れそうな爆音だった、って話だ」

「……この二件はつながっている。そう言いたいわけね？」

「警察でもそう考えてるらしいな。

だが、大量の機材を一瞬で撤収した方法がわからない。

事件は起こってるのに人間の形跡がない……犯人もわかりようがないってことだ」

なるほど。奇妙な事件だわ。

音楽スタジオのことはよく知らないけど…

大量の機材を一気に盗み出す方法があった、まではいいわよ。

遠く多摩まで持っていくのも、トラックでもあればいいでしょうね。

でも、設営を済ませたそれを一瞬で片づけてどこかに持っていく？

無理よ。複数人がかかればやれるかもだけど、目撃者くらいは絶対に出るわよね。

幽霊みたいに忽然と消えるなんて、ありえない。

考え込んで、最初に口を開いたのはラビリンだったわ。

「スピーカーなら、わかるラビ…」

そーゆー機械をみんなまとめてメガビョーゲンにしたのなら、

動かすことはできるラビ！」

「でも、ラテ様がクシャミしてないペエ」

「ウーン…」

機械が消えたのは、スタンド能力の方で考えた方がいーかも知んねーぜ？」

だとしたら、どういうスタンド？

物の重さや大きさを、一瞬で消してしまえるスタンド。

そして、すぐにでもそれを戻せるスタンドってことだわ。

…あつたわね。心当たりが。

承太郎さんにとっては、知識しかないスタンドになるわ。

「エニグマ……かしら？」

「エニグマ、ええつと……承太郎さん戦ってるっけ？」

「戦ってないよ。戦ったのは、仗助さんと康一さん。」

あと、噴上さんだよ。バイクの人！」

「ン……あー！オンナのコ三人カコツてたアイツ！」

「そうそう、女の子三人……」

……あー、いたわね。そんなヒト。

ただ、こんなトコで思い出すコトじゃあなかつたわねえ。

言わんこつちやない、だわ。視線が集中しちやつたじやない。

この場唯一の人間の男の子に、よ。

「……なんだよ」

「気にしないでいいわよ。あなたに囲われた覚えはないわ」

「わかってる」

ンもう、気まらずい雰囲気に……私は因縁ありなのよ？

こういう話になられたら、和やかにとはもういかないわ。

あなた、大人の判断はできる男よね？すぐにでも空気を戻しなさい。



視線で訴えていると、軽くため息をつかれた。

「…そーだな、あれだ。エニグマなら…謎の答えには、なるな。

巨大なスピーカーだろうが精密機器だろうが、

紙にして持ち歩けば重さもほぼゼロだ…

本人自身も紙にできるから、運賃もゼロにできるかもしれない」

…ま、いいでしょう。これからも平和でいたいわね？

ここまですつと、しよーもない、つて顔で紅茶グビグビ飲んでたF・Fも、

軌道修正に乗ってきたわ。

「電気も紙にできるぜ。それでシユレッダーも動かしたんだろ？」

つまり、完全に謎は解けるってわけだが…

そんなこと言うなら、もひとつ話が単純になるスタンドがいると思うのよ」

「F・F…それって！」

私が考えている間に、のどかが気づいた。

前から思うけど、発想力ならのどかの方が上よね。

見習いたいって思ってるのよ。

その意味なら、ひなただって私より上かも…

「そう。『電気』のスタンドがいるぜ。」

クソ重てえ機械を、みんな『電気』に変えて持ち運べるヤツが……  
レッド・ホット・チリ・ペツパー、っていうんだけどよおおーッ  
こいつがビョージェンズになってたら死ぬほどやばいと思わない？」  
のどかに続いて、全員が凍っていくわね。

電気の手で一瞬でどこまでも行けて、

しかも無尽蔵に電気を自分のパワーにできるあのスタンドが、ビョージェンズに？  
ペギタンが悲鳴を上げたわ。正直、私も上げたい。

「そ、そんなの！日本中が一瞬でビョージェンズだべエ!？」

「か…勝てるのか？」

たとえば、原子力発電所を丸ごと食ったビョージェンズに…!？」

いくらプリキュアアツつてもツ…!？」

「ニヤーッ!?ゾウとアリのケンカになっちまうじゃあねえーかッ!？」

「めつつちやヤバイじゃん。てゆるか無理じゃん？」

「どうすればいいラビ〜ッ!？」

みんながうろたえてる中で、のどかもやつぱりオロオロしてたけど。

紅茶を飲み始めたんで『飲んでる場合!?!』って言いそうになっちやつたけれど。

紅茶を飲み干したら、落ち着いたみたい。腹を決めたみたいに言ってくれたわ。

「そうだとしたら。最高のチャンスだね」

「のどか、どういうことラビ？」

「スピーカーを盗むなんて『情けないコト』をやってるうちに倒せるんだよ？」

みんなが今言つたみたいなのに、本人が気づいてない証明だよ。

もし、レッド・ホット・チリ・ペッパーで正しいのなら…

むしろ、倒すなら今しかないってこと！」

…そ、そうよ。言う通りだわ。

自分の力に気づかれる前に倒せたのなら。

最悪の事態を、芽が出る前に摘み取れることになるわね。

みんなも、目に見えて安心していった。

ホントは気を引き締めるところだって思うんだけどね。

「ま、こいつは最悪の予想かもしれないし、

それすら超えたことが起こるかもしれない……

プツチ神父がどんなスタンドDISCを持つてるかなんてわからないんだからな。

でも今は、チリ・ペッパー。それがエニグマに備えて待つのがいい。

何も起こらなかったら『バァー……カ!!』って笑えばいいでしょ」

「…ま、だよな。俺が見た事件とつながりが無ければそれまでだし。」

それ以前に、動画配信者がスタンド使いでもビョーゲンズでも無けりやあ、バンザイつてとこだな……」

実際、他にどうしようもないのが弱いところよね。

なら、今日のところは訓練で、精いっぱい備えるまでよ。

チリ・ペツパーみたいな強敵を想定しておくことは、決して無駄じゃあないわ。

承太郎さんが仗助さんから聞いていた話を元に、

あちこちの電線やコンセントから次々出てきて攻撃してくる

チリ・ペツパーに反撃する訓練をみんなややって、

なんとか対応できるようになったところで『夢』が終わって。

翌日放課後に、覚悟していた予兆を迎えたわ。

『雷のエレメントさんが泣いてるラテ……！』

## スカー・ティシューはここにある—その4

『雷のエレメントさんが泣いてるラテ…!』

放課後、公園でたむろってたあたしたちだったけど。

あの人がスタンド使いでビョーゲンズだったら、

スグになんかしてくるかもってことで、固まって待つコトにしたんだけど。

来なきゃあいいなって内心思ってたんだけどさあー。

「あー、来ちゃったよ……ビョーゲンズ」

「問題は、これがただのビョーゲンズかっていうことよ。

もし、最悪の予想通りだったとしたら」

「最初に何をしてくるのか……盗んだのはスピーカーだよ。

そして多摩の事件でやったこと……鳴滝くん」

あたしたちの座ってるベンチから離れて鉄棒に寄つかかっていたタツキーが、

のどかつちの視線にこたえて指パツチン。すぐに耳が聞こえなくなる。

フー・ファイターズで耳に空気の層いくつも作って鼓膜をガードするんだって。

骨伝導……ホネを伝わる音は止められないから、気休めって言ってたっけ。

あたしたちだけじゃあないよ。ラビリンにもペギタンにもニヤトランにも。もちろんラテにだってやるんだってさ。

大音量の中にワンちゃんを放置するとか、ボーリヨクだもんね。

トーゼン、回りの音がゼンゼン聞こえなくつちやあ話ができないんだケド！

そこは、F・Fが解決済みってワケ！

『ここからは、あたしが中継する！』

あんたらはフツーに話しゃあいい…あたしが拾って、直接鼓膜に届けるぜ。

魁を中心に50m以内が射程距離だ。それを忘れるな』

ホントはタツキー、ちゅちーにDISC渡しちやつてさ、

スタンド会話で済ませればいいじゃんって考えてたらしーけど。

そんなコトしたら自分で自分を守れないじゃないって、

即ちちゅちーにダメ出してもらってこーなったの。

「じゃあ、聞くね。」

ラテ、どつち？」

のどかつちが、ラテを抱え込みながら聞いている。

弱り気味の前足で指してんのは…商店街…の、ハシツこ？

「足湯かな？おつきいヤツ」

「お祭りで運営委員のテントが出る場所よね。

ほとんどビール飲み場だけど…

機材を広げる場所も、電源も十分にあるわ」

「そのへんは、わたし、わかんないなあ。

でも、合つてそうだね。行こう」

「オツケー、んじや、ニヤトラン。へんし」

「オイひなた、ソイツはまだだぜツ！」

今回はギリギリまで変身しねーで近づくんדרろ？」

「……あツ、ごめん」

そーだった。

もし、最悪の予想の通り…

ビョーゲンズが、レッド・ホット・チリ・ペッパーを使つてるんなら。

チリ・ペッパーに足止めされて、本体が遠くに逃げちやつたらめっちゃヤバイ！

遠隔操作であたしたちとガツツリ渡り合いながら、

本人はビョーゲンズとして汚染を広げまくっちゃやうから、そのうち勝てなくなる。

本体が見つかるまで、あたしたちは見つかったちやあダメなんだ。

変身したら、光でバレるかしんない！





「ラッ…ビィィ…ッ!?」

「ペッ…!!」

「ニ〃 イイツ…?!?!」

シャレになんない、めっちゃ爆音!!

のどかっちが悲鳴を上げた。ヒーリングアニマルのみんなも!

あたしだって似たよーなモンだよ。

F・Fが耳センしてんのに、お腹の中身がひっかき回されるみたい!

「こんな、ひどい音なんて…どういふ神経なのツ?」

「みんな、ラテが!」

のどかっちの声にみんなが振り向いて、駆け寄る。

ラテが、ぐったりしてノビてる…のどかっちの腕の中で、動かない。

みんな、手を伸ばしてラテをなでる。あたしも。

「…:…なんてことしやがんだ、ド畜生」

「止めるわよ、一刻も早くよ」

周りを見てみる…見なきゃあよかった、かも。

道行くオジサンとか、おバアちゃんとか、みんな倒れて耳をふさいでる。

耳をふさいでもどうしようもない音に襲われて、震えてるしかないんだ。

あッ、知ってるコがいる。ビツキーだよ。ウエルシユ・コーギー。

ウチの常連さん。あたしと同一年のオジイチャン犬が……

泡を吹いて、ひっくり返つちやつてるじゃん。生きては、いるみたいだけど……

ちよつと歩くだけで、そんなのが次々に見えてくる。

ロシアンブルーのタマキちゃんが、倒れて空中をパタパタひつかいてる。

あそこにいるのは、ポメラニアンのチャコくん……柱に噛みついたままグルグル暴れまわってる。

チワワのシーザーちゃん、セントバーナードのジョン、三毛猫のウタちゃん……

みんな、みんな苦しんでる。

「ヒドイ、ヒドイよッ……こんなのアリ？」

「ないよ。こんなの……止めよう？」

「……ウン」

あんまりにも音がヒドすぎて、ドコから響いてんのかもハッキリわかんないけど。

あたしたちは、最初にラテに聞いたもんね。そっちに向かつて、ずっと歩く。

……アタマ痛くなってきた。耐えらんない！

でも、あたしたちは耳センをしてコレなんだ。

そうじゃあない他のみんなは、もつとヒドイ……死にそうな思いしてるよね？

行かなくちや。あたしたちが止めなくちや。

「だけどき、この曲…」

「ひなたちゃん？」

「はつきし言つて『古い』よ？」

めつちや前のアイドルの歌、だと思ふ」

「平光…悪い。今は付き合つてられない。

ラテがヤバすぎる」

「……ごめん」

タツキーだけじゃあなくつて、ちゅちーにも同じような顔をされた。

当たり前じゃん。ラテがヤバイ、より大切なことなんて、今あるワケないよ。

どーして、あたしつてこーなのかなあ。

集中できなくて、ヘンなトコに目移りしちゃつてさあ。

「ひなたよおー」

「ニャトラン？」

「後でいっしょに悩もーぜ。今はビョーゲンスをブチのめす！」

「…うんッ」

強いよね、ニャトラン。

そーだよ、ヘコんでたってダメだかんね。気合い入れて行こー!

でも、さっきの疑問。フシギと頭を離れなかったんだよね。

なんで、こんな曲を流してるんだらう?

よく聞いてみたら、歌ってる。そこはフザケてないみたい。

このひとがしたいことは、なんなんだろ?

『見えたぜ……前方120m!』

ここらで変身して、一気にスピーカーを叩くべきだ。

こいつを放っておくと、プリキュアでもマズイと思う』

考えてる間に、F・Fが教えてくれた。

行く先で、黒い箱みたいなの……スピーカーが山みたいに積まれてるのを。

ここまできてやつとわかった感じ。ゼツタイ、あそこから音がしてる。

そして、その後ろの人影……ツノ生えてるじゃん! ビョーゲンス!

「スタート!」

「プリキュア、オペレーションッ!」

全員、変身だよ!

ここからが本番だね……

「スパークル、今こそ太陽の出番よ。」

「ここからなら届くでしょう？ スピーカー、みんなやつちやつて」

「エエツ？ 誰か巻き込んだりしない？」

「あのビョーゲンズのすぐそばには、誰もいないわ…」

「踊ってるのかしら？…とにかく、動きでわかるわよ。」

「ド真ん中を狙って、吹き飛ばしちゃうだけでも意味があるわ」

「ん、そんなら…りよーかい！」

「あたしだってたくさん練習してんだよ？」

「動かない相手を撃つんだったら問題ないない！」

「俺はラテを預かった。」

「後から追うよ…スピーカー、頼むぜ」

「グレースからラテを渡されたタツキーにも頼まれる。」

「さー、イツキにヤツちやうぞ！」

「右腕をまつすぐ伸ばして、人差し指が照準…狙って狙って、いけッ！」

「太陽ッ!!」

「あたしの頭上に出て巨大になっていった太陽からレーザー三本。」

「一本はド真ん中。あとの二本はビミョーに左右ずらす。」

「練習なら、これで大体当たった…よっしや、大当たり！」

爆発して、スピーカーがみんな倒れた！

「やったよ！みんな」

「突っ込むわ！」

「立ち直るヒマなんか、あげない！」

みんなでダツシユ。プリキュアだったら100m、1秒くらいでイケちゃう。

そろって踏み込み、せーので飛んで：みんな、撃つ！

「プニ・シヨット!!」

さすがのあたしにもわかるよ！

みんな、これでヤツツケて！一気に浄化するツモリだったって！

ここまでやってわざわざプニ・シヨットにしたのは、

デミビョーゲンだったら人間の身体だから。

プリキュアのパワーで殴ったり蹴ったりしたら壊れちゃうから！

：でも、あたしは。あたしだけじゃあなくって、みんなだけ。

どっか甘く見てたのかなあ？

それか、これで『倒せてくれ』って願望が出ちやったかなあ？

気が付いたら、みんなバラバラな方向にブツ飛ばされてた。

「そ、そんな…」

「わたし、たち」

「なにを…されたのよ？」

倒れこんだあたしたちの前に、ビョーゲンズが立った。

やっと、まともに姿が見えた感じ。

やっぱり女の人。顔は、ソバカス…あのヒトだよ、ゼツタイに。

曲がったツノに、サソリみたいな尻尾は、ビョーゲンズだからだよね？

アイドルみたいなカワイイステージ衣装なんだけど、ドクドクしい色で台無し。

片手に、マイクまで握ってる……

「あん、たらに、は…見えない。聞こえエ、ない！わから、ない！」

プリーキュウ、ア…あんたら、スロー！止まってエ、見え、る！」

「あなたはッ……？」

『スカー・ティシュー』…あ、新し、い…あ、あ、あたしイ、の…名！」

体を起こしたのどかつちへの答え。

同じだ、タツキーと…新しい名前って言った。

すぐ聞く。聞かずにいらんない。

「おねーさんの、人間の名前は？」

ドボオ

「うぐええ…ッ！」

グワシヤアアン

いきなり出てきた何かに、ミゾオチに指突つ込まれた。

そのまんま振り抜かれて、後ろの建物のガラス戸をブチ破つちやつた。

痛い…だけじゃあない。シビれる…

首だけ起こしたら、見えた。バチバチ電気を放つてるハゲガツパ！

最初からわかつてた、最悪の予想。レッド・ホット・チリ・ペツパー！！

のどかっちとちゅちーもわかつたみたい。

あたしたち、プニ・シヨットを撃つ前に体の向きを変えられたんだ。

あたしたち同士を撃つように変えられた！メツチャクチャな速さで！

「ニンゲン、名前、エ！」

もオ、いら、ない！必、要！ない！

あん、た…だ。あ、たしイのオオ…歌！止めエ、た、の！」

「なんで…こんなコトすんのッ!？」

歌だったら、フツに聞いてもらえばいいじゃん！

配信すれば、誰か聞いてくれんじゃない！

なんで、みんなを苦しめてんの？」



「聞く、ウーニンゲン、なん、か…いら、ない！」

ニンゲン、聞かれ、るウ…と、ツマ、る！ドモる！

歌い、たいイ、のに…歌ア、え、ない！

ニン、ゲン、邪魔！消え、ちまえ！」

…なに、言ってるの？

あたし、ゼンゼンわかんない。

ヒトカラしたいダケ？

ニヤトランが、ヒーリングステッキから怒り出した。

「バカヤロー…ツッ!!」

「…ネ、コ? 生、首？」

ヒイイ、リン。アニマ、ル？」

「人間だけじゃあねえーだろツ

見えねーのかよ、犬とか猫がヒックリ返って泡吹いてるのがよおー…ツ」

「……そ、れが? どオ、した！」

カミツ、くかつ、くかつ…シヨンベン、タレ! ーる、しか!

能の、ねー! 害獣…が! ーくた、ばれ…くった、ばれ!」

……もつと、ワケわかんないこと、言われた。

なんなの。その言いぐさ。ラテをあんなに痛めつけといて。みんなを、死にそうな目にあわせといて。

「…アンタ。ラテの…みんなの、何を知ってるの？」

なんで、みんなが害獣だったの？

なんで、こんな目にあわされなくっちゃあいけないの？アンタに!!!」  
涙が出てきた。ウチの常連のみんなが…そうじゃあないみんなも。

さっきのアレでどんな苦しい思いをしたのかって考えたら。

苦しんでたみんなの姿を思い出しちったらさあー。

ツラくって、胸が痛い、トーゼンじゃない？

そんなこともわかんないの、アンタ!!

「アンタにいったい何したの？みんなが!!」

「あた、しを笑ツツ、ツた!!」

あた、しを！笑ツて、る！どい、つも！こいつ、も！」

「ンなワケないじゃん！」

知ってもいないアンタを、なんでみんなが笑えんの？」

「あア、ンた、も！あた、しを！笑ツて、る!!」

消えち、まえ！消え、ちいまえ！」

「…なんで? どーしてそーなの?」

いつ、あたしがそんなコトしたの?

違うよ、めっちゃ怒ってんだよ、あたし!

言い返そうとしたら、グレースとフォンテーヌがあたしのそばに立った。

「スパークル! こいつは『スカー・ティシュー』。」

「ビョーゲンズよ、忘れないで!」

「フォンテーヌ? …どゆこと?」

「取りついたビョーゲンズが、このヒトの悪い心だけを…」

病んだ心だけを大きくしてるんだよ。鳴滝くんのとくと同じ!

わたしたちが、お手当てするの!」

「グレース…:うんッ」

そーだった。

『ダーティ・ウォーター』だったタツキーだって、

みんなに心配かけたくないって思ったり、あたし心配してくれたりしてんじやん。

だったら、おねーさんも…これが全部なワケ、ない。

なら、あたしは…何をしてあげられるかな?

「病ん、だ…? あ、たしィ、が?」

ウツ、呼ばアワリ、すん…な！

都合オ、イイとき、だけエ！?

行け、チリッ、ペ!! パアッ!!」

ギユバ!!

ギャン バシイイツ

来たッ、チリ・ペツパーが！

速い…けど、それよりも早く。

グレースとフォンテーヌが、プニ・シールドで防いで、弾き飛ばした！

練習の成果じゃん。来るのがわかってれば、やれる！

みんなそろえば、怖くないよ！

「地球をお手当て、ヒーリングつどプリキュア！」

## スカー・ティシューはここにある—その5

「なア…に、が！ヒー、リン！グッ！ど、よ!？」

バガにイ、し、した、その…ツラ！

チヨン…チヨン斬つてエ、コロ、コツ、コ、転がしイ、て、やる！」  
聞くに堪えないコト言われちやつてるよ。

少しだけど、わたしも動画、見てるんだ。フォンテーヌもね。

ちよつとキツそうで、悲愴な感じの顔してたりしたけど、

ゲームを遊んでる最中はホツコリした雰囲気もあつたんだよ。

それを、あんな顔にしちゃうなんて…

「ビョーゲンズ…許せない！」

「助けてあげるラビー！」

「うん、行くよ！」

とは言ったものの、うかつに切り込めないんだよね。

今のわたしたちが、スピードでレッド・ホット・チリ・ペッパーに勝つのは無理。

『夢』の中で仗助さんロボと打ち合った感覚だと…

クレイジー・ダイヤモンドのパンチより二回りくらい遅いんだよ、わたしたち。パワーは互角なだけどね。

もつとも、ね。わたしたちプリキュアは本体そのものがカツチカチに強化されてるから、

防御力だつたらずつと上だよ。だけどそれは、ビョーゲンズも同じなの…有利になれない。

つまり、勝ちを引つ張り出すにはスタンドの差を生かすしかないんだけど…戦いでまともに使えるスタンドは、スパークルの太陽<sup>サン</sup>だけ。

プリキュアの力だけで、チリ・ペツパーをいなすしかないよね。

そして、ビョーゲンズを相手に長期戦は…『ない』。

汚染を広げられるのをただ待つことになっちゃう。負けに行くのと同じ！

「みんな、固まって戦おう！」

わたしが近づいて殴るから、フォンテーヌはわたしを守って！

スパークルは、プニ・シヨットか太陽<sup>サン</sup>でチリ・ペツパーを邪魔して」

「わかったわ」

「ジャマ、だね。りよーかい」

三人で駆ける。即座にチリ・ペツパーが来た。

スパークルが狙いをつけるヒマもなく、わたしにまつしぐら。

予想通りだよ！ 本体を狙われたら当然だよな？

「プニ・シールドツ！」

ギユン！

ズバ ドオオ…ン

フォンテーヌが開いたバリアに守られて、チリ・ペツパーがまたのけぞる。

スカー・ティシューも、のけぞって持ってたマイクを取り落とした。

プリキュアさえも超えるようなパワーで殴ってきたけど、

それだけに防がれた反動が本体に思いつきり跳ね返ってる。

「ンなツ……にイツ…!？」

「やっぱりね…あなた」

「戦い慣れて、ない！」

そりゃあ、そうだよな…戦いになる相手なんか、いたはずないもん」

もしかしたら、ビョーゲンズにされる前に抵抗したかもしれないけど…

そのくらいしか、思いつけないよ。

あなたにとって致命的なのは、その戦闘経験のなさ。

搦め手なんか、考えついて使うところまで、いけるはずない！

逆に：そうなる前に決めないと、まずい！

仮に、本体がこのヒトじゃあなくて、元の音石明だったとしたら：

正直、勝てる要素がないよ!? 育っちゃう前に倒すの！

「どんなにパワーとスピードがスゴかったって！」

「本体のあなたが、使いこなせなければッ！」

「ヤラせないかんねーッ!!」

スパークルが、今度こそプニ・シヨットで狙い撃った。

三発。スパークルは練習を続けるうちに、必ず三発撃つようになった。

一発は狙った場所を、あとの二発はほんのわずかにずらす。

これなら、動いてる相手でも一発はかすめるようになった。

消耗も三倍だから、いつもやるのは気を付けなきゃ、だけど：

チリ・ペツパーは避ける必要を感じたみたいで、跳んだ。

跳んだなら、スカー・ティシユーを守るものは、なにもない！

「行くよ、フォンテーヌ！」

「ええ！」

「あたしはチリ・ペツパー！」

あとはせいぜい10 m程度の距離。



プリキュアにとっては、踏み込みひとつの間合いだね。

スパークルが、もつと撃つ。チリ・ペツパーの着地地点に。

体勢が崩れてて、今度は避けることもできない。

黄色の光弾が直撃。本体のスカー・ティシューも、吹っ飛ばされて転げる。

これで、逃げることもできなくなった。

「一気に決めるラビー！」

「うん。エレメント・チャージ！」

「くツ…来ん、な！来、るんじゃ…：う、ううう…くツ!？」

かわいそうだけど、倒すしかないよ。

…ううん。かわいそうなのは、ビョーゲンズに利用されてるヒトだけ。

ヒトの心を踏みにじって蝕むビョーゲンズは、どう考えても許せない。

そうでなくても、蝕んだ先をただ苦しめて、いずれは死なせるだけなのに。

『てめーさえよければいいという…』

もはやこの地球上に生きてていい生物じゃあないな、こいつは…』

承太郎さんが、『ラット』に向けて言ってた言葉が頭の中に聞こえてくる。

わたしも同じ思い…だから倒す。それ以上でも以下でもないよ！

プリキュア・ヒーリング・フラワーで終わらせる。

「プリキュアアツ！ヒーリング…」

「おおっと、待ったアア〜ツッ！

待たないと後悔するぞ？プリキュアアツ」

「…えツ!?!」

割り込んできた声を、わたしは覚えていた。

振り向いて、さらにはつきりわかった。ビョーゲンズの、グアイワル。

そして、嫌でも理解した。何をしたいのか。

「ぐ、グレー…う、グッ」

つかまつてる。…鳴滝くん、だね。

片足首を掴まれて、宙づりにされてる。

一瞬わからなかったのは、顔が腫れ上がったから。

血も出てる…どう見ても、殴られた後だよ。連続で。

「なツ、なんてこと…」

「立場はわかったようだな？

話を聞く気になったようで、何より」

シュバ！ ドツゴオオ

「ぐおわあああああツ!?!」

でも、グアイワルが何か言い終わる前に、

スパークルがプニ・シヨットを放った。

もろともに吹っ飛ばされる鳴滝くん：

「ス、スパークル!? 何してるのよッ!？」

「カツキョン式お助け法！」

こーやってポルポル助けたんでしょッ!？」

そのまま一気に駆け寄って、鳴滝くんを背負い上げて戻ってきた。

カツキョン、つて：花京院さんのこと？

エンペラー  
皇帝の攻撃からポルナレフさんを逃がすために、

エメラルドスプラッシュで、あえてポルナレフさんの方を撃った話をしてみたい。

承太郎さんは当事者じゃあなくて、ふたりから聞いただけだったけど。

「これでもーダイジョーブ…」

「……バカが！話を最後まで聞かんとは！

そいつは死んだぞ。おまえのせいだな、プリキュア！」

大してダメージにはなってなかったみたい。

グアイワルは背中をさすりながら身を起こすと、いまいましてに言ってきた。

「…え、何それ？何言つて」

すでに、何かされていた？

疑問符を頭上に出しているスパークルの、その背にいる鳴滝くんを見る。

…また、嫌でもわかつちやったよ。

「スパークル、お尻よ！…血がツ」

「えっ、あたし？…ンなツ?!」

「違うペエ！魁のだペエ！」

血が止まらないペエ、手がもう血まみれだペエ！」

「……え、なんか、ナマあツ…」

スパークルが、片手だけ外して、自分の目で確認する。

黒みがかつたような、紅いぬらついた液体がしたたつてるのを、見てしまった。

「……えっ、……えっ?」

「そいつのケツには！こいつが刺さっていたんだがなアア?」

グアイワルの手にあったのは、引きちぎられた鉄パイプみたいなもの。

たぶん、机の脚。鋭くなってる先端からは、やっぱり紅い液体がしたたつてる。

「あの時のお返しに、深く深く差し込んでやったぞ。根本までな?」

踏んづけて、限界まで突っ込んでやった……

そいつは、すでに…血袋ということだな！

フタが外れれば流血死という寸法よ。それを説明してやろうとしたのに……  
引っこ抜けてしまっってはしょうがない！この、バカが！」

「う……………ウソ」

「…チ、チキシヨオー…ッ!!」

スパークル、氣イしっかり持て!!

最短で片づけて、お手当て間に合わせるぜツ」

ニヤトランが必死で呼びかけてるけど、

スパークルは手を見下ろしたまま、動かなくなっちゃった。

「何度でも言ってるやろう。おまえのせいだぞ、バカが！」

このオレの、キングビョーゲンへの手土産を台無しにしおつて…

後はまかせろ。やってしまえ、スカー・ティシュー!!

プリキュアどもを片づけたあかつきには、

オレがキングビョーゲンに取りなしてやろう！」

言うだけ言って、勝手に消えたグアイワル。

…これだけ時間を与えちゃって、立ち直ってないわけがない。

スカー・ティシューは、離れた位置から改めてチリ・ペツパーを構えていた。

「…ウル、セ、エ！」

どー、せ！ク、チだけ！ヤロー、よ……あ、あアああんた！

手、柄、は！てめー、で！持って、くウ、ツモ……リイの、く……せエ、に！

ゼン、ブ……消、えろ！消えエ、ちイ、まえ！」

こつちも構える。ニヤトランの言う通り、全速力で片づけるしかないもん。

……あれ？でも……なんでかな？

そんな、死が迫っているような気は……あまり、しないよ？わたし……

スパークルは、立ち直れてないけど。

フォンテーヌを見ると……わたしと、同じ？

そう思っていると、頭の中……鼓膜に、直接、声がきた。

「あー、こちらF・F。魁はダメージを負っちゃあいるが。

見た目ほどヒドくはない……ぶっちゃけ死んだフリ！

流れてる血も、七割方はあたしがこさえた偽モノだ。

ケツに刺されたときも、致命的な臓器はみんな脇に寄せて避けた。問題なし！

折を見て逃げるから、気にせず戦え。あと、ラテは無事。以上！オーバー！」

「すまん。もう少し死んだフリを続けるんで、その辺の物陰におろしてくれ」

鳴滝くんも話しかけてきてる。F・Fと同じやり方で。

当然、スパークルにも聞こえてて。

ちよつとの間、立ち尽くしたスパークルは、鳴滝くんを脇に抱えると…

「オイ、あのよおー。…スパークル？」

「よ、よかった…ケド、ムツツツカツクウウウ〜ツツ…

ザケンナー!!」

遠くまで投げ転がした。ボーリングみたいに!

…ああ、悶絶しちやつてるよ鳴滝くん。

でも、たぶん、これ…ひなたちゃんに戻ってから落ち込むよね?

考えとこう、フオロー。

腹いせだけど、遠くに逃がす意味だと間違つてない対処だし…

やさしく持ち運ぶのなんて、スカー・ティシューが待つてくれない。

チリ・ペッパーが動いた。

「プニ・シールドツ! 何度やつても同じだわ」

「ペエー!」

さつきと同じように、弾かれてのけぞるチリ・ペッパー。

本体がのけぞるのも、さつきと同じ…学習してない?

「サツサとケリつけよーよ、ニヤトラン!

シヨットシヨットシヨット!」

「おーよ、チリ・ペツパーさえ動かなけりやあよおー

オレたちの勝ちつてコトだぜえー」

プニ・シヨットで撃たれて、ジグザグに下がっていくチリ・ペツパー。

避けるだけで反撃せず下がっていくのは、追い込んでるように見えるけど。

『学習しない動き』で、わたしたちと戦ってるの？

あんなムズかしそうな、頭を使うゲームを好んでやってたのに？

敵を追い詰める道は開いてる。だから、そこを通っていくけど。

「今よ、グレース。本体までガラ空きよー」

「…おかしいよ。なんで、こんなに楽なの？」

「……グレース？」

違和感がふくらんで止まらなくなってる。

このまま進んで、敵を倒せるわたしの姿が…見えてこないの。

途中で、絶対、何かある！

わたしよりも先に、その違和感の形をハッキリととらえたのは、ニヤトランだった。

「…ひ、ひな…：スパークル。

だけじゃあねえ！みんなだ！！

ヤベエよ、下がれッ！！」



「ニャトラン?ど…どして?」

「ジグザグだツ!ジグザグに逃げてるトコを

追っちまってるぞ、オレたちツ!」

「…ゲームの!」

言われたスパークルも何かに気づいた、そのときにはもう遅かった。

遠くから打ちすえる何かに、みんな一斉に襲われたんだから。

ズバ! パアアアアアン

バリ バリツ バチツバチツ バチツ!

「きやあああああああツ!」

間に合った。プニ・シールドが!

でも、間に合ったのは、わたしとスパークルだけ。

わたしとスパークルは、打たれて防ぎきれず吹っ飛ばされるだけですんだ。

近所の家に入ったんで菜園とスプリンクラーを壊しちゃったけど、それだけ。

間に合わなかったフォンテーヌの悲鳴は…途切れない!

「ああああツ、ギイああああああツ…」

「ペエー…ツ!?!ペ…ペ、ペ、ペ」

バリツ バチツ バチ バチ バチ ジュツ…

わかったよ。何をされたのか。

チリ・ペツパーは電線を持ってたんだ。

引きちぎった電線を十何本も束ねたやつを、ムチみたいにして叩きつけてきた。格闘にもならないような間合いから、網みたいに！

そこから一緒に、大量の電気も放出してきていた……

直接、電線に打たれちゃったフォンテーヌは、そのまま絡めとられてる！

絡めとられたまま、高圧電流を流され続けているの！

こんなの、プリキユアでもいつまで耐えられるの？

「蒸し、焼、き……にーしー、てーや……る！」

その、キ、キ、キレイ、な……カオ！と、ノド……

タダレ、ろ！……焼け！タダレ、ろ！」

「ツ……太陽!!」

シュバ シュババツ

ドコオ ズド ドオ……

スパークルの太陽が、電線に通じてる電柱にレーザーを降らせて破壊した。

電力供給が止まった電線は、ただの頑丈なヒモに成り果てるんだけど。

フォンテーヌが、荒い呼吸のまま動かない。ダメージが大きすぎるみたい。

でも、うかつに助けにもいけない。

わたしたち全員がああの攻撃に囚われたら…おしまいだよ！

『グレース、あたし…電柱、みんな倒すよ。』

それなら、チリ・ペツパーは防げるじゃん』

スタンド会話で、スパークルが相談に来た。

話したいことが一瞬で伝わるのは、いいね。

こんなときに、口に出して作戦会議なんて無理だもん。

『…ダメ。それはダメ。』

それを狙ったら、本当の最悪になっちゃう』

『ホントの、最悪？』

『スカー・ティシューに逃げられることだよ。』

逃げることを決意されちゃったら、わたしたちの負け。

全力で逃げに回られたら、たぶん、止められない。

手に負えないほど強くなってから、戻ってこれちゃうだけ。

スカー・ティシューは、チリ・ペツパーな上にビョーゲンスなんだよ？』

『じゃあ、どーすんのさ？』

『スカー・ティシューに…チリ・ペツパーに、勝たせる』

『…エエツ？どゆコト？…』

チリ・ペツパーは逃がせない。

ビョーゲンズは、もつと逃がせない。

どつちも逃がさないことですか、わたしたちは勝てない。

……ツライね。でも、やるの！

## スカー・ティシューはここにある—その6

グレースが走った。スカー・ティシューに向かって。

攻撃しようとしてんの？フォンテーヌがマズイじゃん！

「スパークル、援護しようぜ！」

さつきまでみてーにチリ・ペツパーを撃つんだよ。

んで、スキを見てフォンテーヌ助けよーぜ」

「…あ、そつか。そのためか！」

アタマイインだよねニヤトラン。

いっつも、周りをじつと観察してくれてんの。

そのたびに、あたしダメだなんて思っっちゃうこともあるけど…

今は、ソレどころじゃない！

プニ・ショット、構え：動いたね、チリ・ペツパー！

電線をヒツツカンでんなら、それでさつきみたいにやってくるってこと。

だったら、やるコトひとつじゃん。

狙い撃ち、三発！

ドギョー！ ドヒヤ ドヒヤ

ドコオ

……避けられた、のは、わかったけど。

地面に直撃した音だけで、スカ・ティシユーはヘツチャラだからわかったけど。

チリ・ペツパーがいないよ。どこに？

「フ、フォンテーヌッ!?」

グレースがこつち見た。というか、フォンテーヌの方？

あたしも見た……つるし上げられちゃってる、電線にツ!?

考えるよりも前に撃った。直接助けに行くのはムリ。

カツキョン式救出法しかないよ!

と、思ったら、目の前に……ッ

「チリ・ペツパーッ……!?!」

ヒュバツ……

パパ パアン

「うぐッ……!?!」

殴られた。たぶん、三発くらい。

顔とノドとお腹を一瞬でやられたっほい。

そうわかったと同時に近くの塀に背中を打ち付けた。

思わず閉じちやつた目をこじ開けたら、今度はグレースの脇に！

コツチ見てちやダメだよグレース!?

「スパークルまで!…う、ううツ!」

ギリギリ気づいたけど、もう遅かった。

回し蹴りで顔面をやられて、ヨソの家の窓に突っ込んでいったグレース。

割れたガラス窓のワクに背中中で引つかかかっている状態…

「い、い、イ…言った、は、ずウ、だ！」

あア、ンた!らア、スロー!

正、面…ダ、メ!なら!ワキ、殴ウ、る…だけ!」

スカー・ティシューはその場から一步も動いてない。

チリ・ペツパーがそのすぐそばに控えている。いつの間に。

…そっか。カタチは違うけど、同じコトされたんだ。

みんなで一緒に狙い撃つたとき、同士討ちにされちやつたのと。

あつちは電気の速さ…雷の速さ!

電気の出入り口さえあれば、あたしたち三人同時にでも相手できちやうんだ。

それに、あいつが気づいちゃつたみたい。

「あたア、し…が、使、い！こな、せ…な、い、だ、とオ…？」

違う、ね！使、い…こな、す！必、要、ねー！ぞ！

あアン、たら！みた、いな…ノ口、マ、あい、あエイ…相手！な…ら！

そ、の、ツラ…ア！顔、面…剥いで、や、る。キザ！ンで…や、る！」

…なんで、そんなに顔にこだわるの？ソバカスのせい？

聞いてみよう。タツキーのときだつて、フオンテーヌのお説教でマジキレしてさ。

そつからの流れで勝てたんだし。それに…

「カオにさ…なんか、恨みでもあんの？」

「オイ、スパークル！ケンカ売るみてーなコト言つてどーすんだよ？」

「そーだよ、ケンカだよ！ケンカしてんじゃん、今！」

ケンカ仲直りするのにさ、話聞かなかつたら…ワカンナイっしょ？」

「仲直りつて、オメー…うんニヤ、まかせるぜ！」

オレは相棒だかんな！…来るぜツ？」

「プニ・シールドッ！」

ギョオン メシヤ！

頭上から来た瞬間、あたしたちは叩き返した。

電気の入入り口からしかやつてこられないってんなら。



そーゆーのがほとんどない場所で待ち受けてやれば防げるってこと！  
扉にめり込んだあたしは、頭上の電線にだけ気を付けてればいいんだ。  
のけぞったスカー・ティシューだけど、すぐ身構えなおしてる。

あっちもだんだん慣れてきてる…時間かけたらヤバイね。

「聞いてんじゃん。カオに、なんか恨みあんの？」

「うるツ…せエエ。カ、オ…だけ、で！」

生まれ、た、時！か…ら！トク！し…か、して、ね…え、クセ！に！

バガ、に…し、てエ。バガにイ、し、てエ!？」

「ヒドイこと、言われたの？」

だったら、ヒドイのはそいつじゃん！

みんなを巻き込む必要ないっしょ？」

「ドイツ、もーコイ、ツも！だツツツ、ハアア!？」

バチ ドグシヨア

「うううツ!？」

電線から、電線の束だけが飛び出してきた！

来る方向はわかってるからプニ・シールドで防げたけど、

コレじゃ、反撃もなにもナイツて！

堀もコワレちゃったし。

「ぞオのツ…ガアオ、で！ア！イ…ドウ、ル、どうが！

わら、わ、ワラアツ、ア、ア…わらわ、せるウ、な、ツデー！

アアン、ダラ！は、いづも、い、づウも、いづウもオオ!?」

来る、何度もツ!?

このままココにいたら、シールドが負けちゃう。

つて、ニヤトランがコソツと教えてくれたんで…逃げる！

トーゼンだけど追ってきた。電線がずっと頭上にあるから、逃げられっこない。

グレースには止められてたけど、電線切っちゃうしかないっしょ…コレ！

「太陽」

シユババツ ボツ ゴバ！

電線を丸ごとレーザーで焼き切った。

これで、あたしの前後の電柱の間だけなら…安全！

で、あそこまで怒ってんなら。もつとあたしを、狙うよね？

おびき寄せなきや。グレースと、フォンテーヌが立ち直るまで。

…でも、あいつ…ううん、あのヒト。

まるで、泣いてるみたい…もつと、聞こう。

そーしなきやいけない気がする…!!

「アイドル?…なりたいの?」

それを、笑われたってコト?カオのせいでは?

「ワッラッ、ツ、でんだろオ、が!ア、ンダもオオオオ!」

「笑つてないよ!なんでそーなんのツ!」

「手エ、出せな、い…と、思ッ…てン…な!」

だがア、ら!ナメ!た…クチイ、を!

オオ、まちウイ…ガ!イ…だ!クソ…ガキ!!」

「……えッ?」

思わず、見上げた。切れた電線はそのまんま。

だけど…電柱が、どんどんヨドンだ気に呑み込まれだした。

「や、ヤベエ…」

「ニヤトラン?」

「ビョーゲンズの汚染を始めやがった…!」

やつぱりじやあねえーか…始めたら、あつという間に広がってやがる」

電柱から、電線に伝わって、周りの家も、電灯も、みんな汚染されだした。

トンでもなく早い。見てるだけでわかっちゃう!

ダーティ・ウィーターは下水道を汚染しまくってた。

それと同じことを、チリ・ペッパのスカー・ティシューがやるんなら!

ペギタンが言ってた。日本中がビョーゲンズだって。オオゲサじやあないよコレ。

「ウー・シャアツツ、ハアツ!」

「う、ウソツ!」

ヒュオツツ… ゴツ!

「え、ううツツツ…!」

ドシャ ドツ ド… ドグチア!

チリ・ペッパが来た? 届くはずなのにツ!?

届くはずない位置から出てきて、さっきの倍くらいのパワーで、顔を殴ってきた…!

ふっ飛ばされたあたしは地面をバウンドしまくって、

近くに止まった車の前のガラスを破って突っ込んだ。

…確か、カンタンには割れないよーに作ってるハズなんだよね、車の窓ガラス。

お姉が言ってたし、あたしも叩いたコトあんだよ?

それを破るイキオイで殴られるなんて…ムチャクチャじゃん。

「な、なん、で…?」

「見たぜ、スパークル」

「なに、をさ？」

「ビョーゲンズに汚染されたトコロからチリ・ペツパーが出てきた。

どうも…電気の通り道扱いできるみてーだな」

「…なにそれ？」

んじやさ、このままほついたら」

「チリ・ペツパーが電力を持ったまんま、ドコにでも出放題になっちゃう！

んなコトになったらよおおー、勝てんのか？オレたち」

マジで時間かけらんなくなってきた。

最初っからワカツてたコトではあるけど！

ビョーゲンズとして汚染広げられちったら、どこかであたしたちはオシマイ。

頭から車に突っ込んで、おシリから外に出てるなんて…

こんなマヌケなカツコ、続けてらんない！

脱出しようとして腰にチカラをグツと入れてたら…

チリ・ペツパーが出た。中の運転席から！

「あだ、しい…を、氣イ、の、毒！にイ…思、う、のな…ら！

代われ！その…カオ…をオ、よこ、せ！」

「…で、できるワケないじゃん！」

「ワガツ、て、言ッて、ンだ、よ…ボゲ！  
でき、ね、エ！なら！…そ、そオ、の…

ふ、不平、等！な…ツラ、焼く！焼いて、やる。タダレ、ろ！」  
「つて、ちよツ…!？」

ギユイ… ボゴオ！

顔面つかまれて、何されるかと思つたら。

座席に頭を突つ込まされた。空いた穴に首がめり込まされてるみたい。

ヤバイ…身動き取れないツ、で、『焼く』つて？

なんか漏れてる音がする…しかも、この、鼻をツクニオイ。

……………まさかッ!?

「シ、ガー…ラ、イ、タア、く、くウ…くれ、て！や、る」

ジジ、ジ… パチャ

…ドツツツ グオオン!!

正直、この時のコト、あたしほとんど覚えてない。

思い出したくもないんだもん！

地獄みたいな火に焼かれて、半狂乱でもがき苦しんでただけ。

助けてくれたのは、ちゅち…フォンテーヌだった。

「オラオラオラオラオラオラオラオラ」

「オラオラオラオラオラオラオラオラ」

燃えてる車をブン殴りまくってバラバラにして、

火の中からあたしをつかんで、離れた場所に飛んだ。

そこにまた、燃え上がった車が投げ飛ばされてきたけど、

それはグレースのプニ・シヨットが撃ち落としたみたい。

「ち、ちゅちゅ、のどかつち…」

「ごめんね。ありがとう、スパークル。」

一人で引き付けてくれてたから、持ち直せたよ。わたしたち」

プリキュアの名前で呼ぶ余裕もなくなってたあたしを、

グレースがそっと抱きしめてくれて。

フォンテーヌは、ケムリがくすぶったままの拳を構えて、

スカー・ティシューに向けてた。

「不平等な顔…ですって？」

「あなた、本気で言っているの？」

「当、然ン、よ…こ、の！」

生まれ、た、とき！から…全部、もって…る、クソ！ども、が！」

「そんなものだけでやっていけるほど、世の中は安くないでしょう？」

私たちなんかより、あなたの方がよっぽど知っているはずよ！

アイドルになりたい？…ステキじゃない。

あなたは、そのために…全力で戦ってきたって、言える？」

「た、たカカ、タカ…た、戦ッ、テ！

たタタ戦ッタ、あだ、しい、が！

きッキッ、キッ、キ…キッ、吃、音！だけ！だけ！結果、だ、け！」

「……………そう」

噛み殺したみたいな、切れ切れの声を聞き届けたフォンテーヌは、

挙げた拳をスツと下ろす。

目つきもやさしくなった。戦いをいったん、やめそうなくらいに。

でも、終わらない。

「あなたは、全力で戦って…負けたのね。

負けて、傷を負った…あなたを、尊敬するわ。

それほどまでに戦い続けて、逃げなかつたあなたを。

私には、そこまでできる自信はないもの。

あなたの『傷』は、恥なんかじゃあないわ！」



「…ッ!? な…に、をーバ、カにッ…すん、じゃ!!」

「あなたの恥はッ！」

「いいかしら? あなたの『恥』はッ！」

その傷をなぐさめるために、他人を踏みにする道を選んだことよ!!

私のふるさとをッ! 私の友達をッ…:よくも傷つけたわね!!

その『恥』…私たちが、すすいであげるわッ」

ビシイッ!!

人差し指を、スカー・ティシューに突き付けたフォンテーヌ。

その後ろに、あたしたちも続いた。もう、戦えるよ!

「あなたが、この力で罪を犯したのなら。」

普通の人には、誰にも見えないし聞こえない…:だから!」

「あたしたちが裁くッ」

「裁くのは、私たちプリキュアよ!!」

バアア—ズ——ン

そろって、人差し指を突きつける。

あたしたちはプリキュアだけど!

いつしよに、ジョースターの『星』も知ってるんだよ?

だから承太郎さん、チカラ貸してね？チカラと勇気！  
折れちやダメだかんね？あたし……

## スカー・ティシューはここにある—その7

黙って見てるつもりだったんだけどよおお〜

あたし、ことフー・ファイターズの本体サマは大ケガしてる。

ケツの穴からクシ刺しにされたんだからな…

マジにやばい臓器だけはなんとか避けたが、大腸と小腸、胃と横隔膜。

グツサリ刺し貫かれちゃって、あたしでなんとかふさいでごまかしてる状態だ。

実際、本体サマ、こと鳴滝魁も、このざままで役に立てると思うほどバカじゃあなかつた。

スパークルに投げ転がされた先で、皆の戦いを固唾を吞んで見守ってたってワケだが。

頭から車のフロントガラスに突っ込んだスパークルが、

中でグリルみてーに焼かれんのを見ちまったところで、無言で立った。

当然、あたしを使つてな。

「へい、誰に見られてるかわかんねえぞ。

いいのかよ歩いて」

「F・F、あそこまで届く水鉄砲は作れるか？」

足湯から発射して、消し止める」

「おまえ、質問に質問で……ま、いいか。

栄養ブロック、まとめてぶち込め。それでやれるはずよ」

「了解」

突っ走って二秒足らずで到着した足湯に、

手持ちの栄養ブロックを全部投げ込むと、魁はフー・ファイターズを爆発的に増殖。

巨大な砲を作り始めた……F・F弾の発射口の単純な拡大だ。

凝った最適な構造なんざ考えてるヒマはないからな……

これで水の塊を撃ち出し、叩きつけて車をブツ壊し、一緒に火をも消しちまうつもりか。

ま、考えてることはわかるな……今、こいつはこう考えている。

『今、変身が解いたら死ぬ』ってね。たぶん、それだけ。

それだけのシンプルスすぎる事実で、他に何も考えないようになってる。

「砲身を長くしろ。口径は絞れ。

せいぜい40m先つつつてもだ。弾がデカすぎると、あそこまでは飛ばない……

圧を高めて初速で勝負した方がいい。車さえ壊れれば自力で脱出できるからな。

……そう。目指すのは『砲』よりも『ライフル』だ」

やっぱり…想定外に弱えーっつか。ビビると頭が空回りするっつか。キモが座んねーときのコイツは考えが浅いんだよなあー。

ま、その辺は助けてやってもいいや…あたしは、あんたの先が見たい。

口も手も出しながら、足湯から飛び出した砲座を作ってたら…

オラオラオラオラオラオラオラオラ…

「あ、フォンテーヌが…助けたな」

「……。助かったんならそれでいい」

フテクサレんなよ、文学少年。

まー正直、こーなると思ってた。

つつても、あれで動かないようなあんただったら、

今頃、助ける気無くしちまってただろうね…

「で、どうすんだよ。この『ライフル』…」

「……使う。グレースも言ってたからな。

チリ・ペツパーに勝たせる、ってな」

「具体的な考えは？」

「まず、こいつでスカー・ティシュー本体を撃つ。

当てない。むしろ当てたら『負け』だ。

俺にとつても。あいつらにとつても」

「なら、注意を引くのが目的だな？」

すると、チリ・ペツパーが即座に来るぜ。

おまえが本体を殺せるつてのが、わかるつてことだからな」

「そうしてほしいんだよ。」

チリ・ペツパーさえ引き離せば勝ちだ。

俺を攻撃すること、それ自体が墓穴になる」

ここまで言わせなくても、言いたいことはわかってた。

なんせ、現在進行形で用意してるんだからな。

下水道にまで進出させたフー・ファイターズと魁の体を接続。

電気の塊であるチリ・ペツパーが、触れた瞬間に

エネルギーをまき散らされてしまう『アース』に変わろうとしてる。

ただなあ、おまえ…

「たぶん、即死したらどうするつて聞きたいんだろうけどな。」

俺が、あいつなら…この状況。

無力な仲間である俺を『劇的』に殺して、プリキュアの心を折りに行く。

「数十秒かけて死を見せつけると思うんだ…そしてあいつは、F・Fの本質を知らない」  
「…オーケー。上出来だ。」

あたしたちだけが逃れたところで未来がないしね。ここらで張るぜ。

ただし相談してからだ。示し合わせて動かねーとヤバイ」

魁は間を開けず、あいつらの鼓膜に直接『通信』した。

50m以内だからな。あいつらの改めての宣戦布告もよく聞こえてるぜ。

『こちら鳴滝魁とF・F。今からスカー・ティシューの注意を引く。』

チリ・ペッパーが俺にかまつてる間にケリをつける』

『あなた逃げてなかったの？』

何を言ってるのよ、大ケガしといて！』

『死ななければどうとでも取返しはつく。』

それよりもチリ・ペッパーだろ』

『……できるの？』

『今しかできない。』

お前らが負けたら、どのみち俺もおしまいだ。やらせろよ』

『あッ、タツキー、なんかゴツツイの作って』

『こつち見んな、奇襲すんだよ。じゃ、やるぜ。後は頼む』

『つて、タツキヤバくないの？どーやって逃げんのさ？』

『俺が殺される前に倒せ。こちとら殺されないように罠も張ってる！』

いいか、チリ・ペツパーが俺にかまってる間だぞ！通信終わり！』

一方的に通信を打ち切ると、グレースが早速スカー・ティシューに打ち掛かった。

話を聞いていない：んじやあない。こつちの作戦に全面的に乗った動きだな。

即座に襲ってきたチリ・ペツパーに、フォンテーヌが脇からプニ・シヨットを撃つ。

かわしたチリ・ペツパーが狙ったのは、一人取り残される形になったスパークル：

だがこいつも予想してたな。今度はグレースがプニ・シヨットを撃って阻止したぜ。

こいつはいい。互いへの攻撃を邪魔し合って、膠着状態にしてやがる。

あたしたちに気づくヒマなんか、これでなくなった！

「よし、この風だと右下あたりに弾着されるな：知らないけど」

「知らねーのかよ」

「近くに飛んできやあそれでいい。狙いはずして撃ってやれ」

「おう」

フー・ファイターズは物体だといってもスタンドだ。

作った砲座に乗っかる必要もなければ、人力で動かす必要すらもない。

あたしを通じて『分体』の視界を得た魁は、心で引き金を引く。



プシ ドオツ!!

コーラのビンを開けたみてーな音と一緒に、高速大口径のF・F弾が飛んでいった。その場から全然動いてなかったスカー・ティシューが、至近弾にあおられて尻もちをつく。

ここでウツブセにブツ倒れてくれてりやあ、一気にケリだったのによおくくくだが悪くない。こつちを見たヤツは、あたしたちを脅威だと認識した。

電線を伝ってチリ・ペツパーが来る。ツブすのは当然、砲座!

ドボオ

バチャ ドチア!

第二射の用意も間に合わず、足湯の砲座は蹴りの一撃で粉みじんに飛び散った。

当然、そのすぐそばからはすでに離れてるあたしたちだが…このまま、オメオメと逃がすか?

そいつは甘いわけだ。やつはすでに見ている。魁の顔をな。

そして、それこそがまさに狙いだ。瞬間移動してきたチリ・ペツパーは魁をワシ掴みにし。

「ぎいあああああー……ッッッ!!」

人間の身ではとうてい逆らえない電撃のパワーが流れ込んできた。



（来やがれ。そのまま殺しにかかって来やがれ、クソ野郎！

そのときがあんたの最後だ。

あんたは気づいていない。エレメントチャージしてるグレースに気づいていない）  
変な気を起こしてないか一応心を読んでみたけど、心配はなさそう。

ヤツが、今から魁を殺すまでに必要な作業を終えようと思うのなら！

そのときステデにケリはついてるってことだぜ。

ラビリンともども、コッソリとパワーを練ってるグレースが全てを終わらせる。

「そ、ンな…に！電…気ツ、食、らい！て、エ…か！」

「俺、貧乏だからなああゝツ、ぜひ！恵んでくれよ…電気代！」

知ってるか？インドだと、『恵んでくれ』って、こー言うんだぜ。

バクシーシ！バクシーシ！バクシーシ！お恵みを！お恵みを！バクシーシ！

ホラ、あんたも一緒に！バクシーシ！バクシーシ！お恵みを！バクシーシ！

あんたも恵んでもらおうぜ。売れない動画に視聴者数をよおおーツ」

なんつーサイテーな煽りだ。だが効果は抜群だな…

チリ・ペツパーの目がピグピグしてやがる。

アレはそのまんま本体の目の動きだろうな。

これで激昂してトドメを刺しに来れば、そこで終わりだ。

「欲し、い…ンな、ら。くれてエ、や、るツツ!!」

「そりゃあ、ありがて…ぐぎあああああああああ!!?」

ブオワツ

ドドツ ババババババ バチツ バチツ バツン!

バリツ バリツ! ジュツ ブス

ヤツは、確かにトドメを差しに来た。

だが、その方法が、ちよつとぼかし予想外だった。

電線だ。たぶん持ってた限り全部の電線を、こつちにブン投げてよこしやがった。

こうなつちまえば『アース』もクソもありやしねえ。

どんなに漏電しようが、チリ・ペツパー自身がここにいなけりやあ関係ねえ。

そして、いなくなったヤツが向かった先は…グレース!

まもなくプリキュア・ヒーリング・フラワーを撃とうとしてたグレースは、

頭上から現れたチリ・ペツパーに首を電線で絡めとられ、電柱に磔にされちまった。

次の瞬間にはフォンテーヌの背後に現れ、何発打ったかもわからねえパンチで吹き飛

ばし、

塀をぶち抜いたフォンテーヌは家一軒を完全に破壊!

さらに後ろの家に突っ込んだ瓦礫に埋もれた。

残ったスパークルの前に、ピカピカな輝きを取り戻したチリ・ペツパーがじりじりと迫っていくんだけどよ……そっちにかまつてる場合じゃあなくなつた。フリー・ファイターズで触腕伸ばして近くのガラス片を拾い、

なんとか降りかかつてきた電線みんなを引きちぎれたのはいいんだがな。

問題は、その間に流れた電流で、魁のヤツの心臓が止まつちまつたつてことだな。

今の高圧電流で、体内のフリー・ファイターズの80%が死滅。

このままじゃあ、対処もままならねえ。

「……殺され、んの……待つて、る……みてー、な……態度！」

ヘン、だ……思……た……ら、バ、レバ……レ、だ……ボゲツ!!」

「み、みんなッ!」

残つてんの……あたしだけ?」

「腹アくるぜスパークル！」

オレたちで勝つしかねえ……ッ!」

焼け焦げた『アース』の、下水道への連絡が辛うじて生きてる。

こいつを使って、急ぎ体機能を復旧していくしかねえぞ。

勝てよ、スパークル。このままじゃあ全滅だぞ。

最終ラウンドってどこか…あたしらにとつちや、最悪だな。

## スカー・ティシューはここにある—その8

ちよつと待ツテ、あたしが最後のヒトリだとか聞いてナイ。

こん中だつたら真つ先にヤラれるキャラはあたしな気がすんだけど!?

…ンなコト言つてる場合じゃあないね。戦うつきやないない!

でも正直勝てないよ? まっすぐ向かつてたトコでフォンテーヌみたいにされるだけじゃん。

じゃあ逃げる? ジョースター家伝統の戦法だつて承太郎さんも言つてた!

で、逃げてどーなの? あたしを追つてくるどころか、最悪みんなにトドメ刺されちゃうよ?

それに、時間がたてばたつほど手に負えなくなるのがビョーゲンズでしょ?

しかもそれがチリ・ペツパーだつてことは、イヤツてほどわかつてんだよ。

なら、やつぱしここであたしが倒すしかないつてコトなんだけどさ。

あたしのアタマじゃあ、考えても…勝つ方法ワカンナイ。

グレースは、なんか勝ち方を考えてた。フォンテーヌも、そこにピッタリ合わせられた。

プリキュアじゃあないタツキーまで、遠くからスゴイの一発撃って、あと一歩まで追い込んだ。

なんで、あたしだけダメなの？

「おう、スパークル」

「…えっ？」

手がふるえてたのがわかったんだと思う。

ヒーリング・ステッキから、ニヤトランがあたしを励ましてくれた。

「一人じゃあダメでもよおおー、オレがついてんぜ。忘れんなよ？」

「ニヤトラン……」

「ここまで来たら、アイツが何をしてこようが関係ねえ。

もらった残りの時間だけ、オメーとオレの全力を叩き込んでやるだけだろ？」

すぐにわかった。承太郎さんがDIOを倒したときの話してるんだ。

DIOの最後の時間停止の中で、承太郎さんが考えてたこと……

「…あたし、承太郎さんじゃあないよ。あたし、あんなに強くなれない」

「言つたる？オメーだけじゃあダメでも、そこにオレがいるならよ。」

「いい勝負になんじゃあねえの？」

「やろうぜ！あきらめてるヒマがあんならよ」



「……………うん！」

あきらめたら…どうなの？

あたしは、なんでプリキュアになろうとしたの？

負けたらどうなるなんて、考えんのやめよう。絶対勝つ！

向き直った先のスカー・ティシューは、まだ動いていなかった。

「相、談！は…終わ、り、か？…ザ、コ！」

「…エへへ、待つててくれたんだ。あんがとね。」

ついでに聞くけどさ。ロボットのゲームの動画…投稿してたの、おねーさんだね？」

「……………そ、れが？」

「まだ見たい、ってコメントさ。あつたでしょ。」

「アレ、あたし。見てくれた？」

「イノ、チ…乞い、かア？」

も、う…おまえ、が！配、信、見、る！コト、も…ない。

ここ…で、黒、コ、ゲ！にイ…なってエ…死ぬ」

「そっか。見たんだ。そんだけでもよかった」

もう決着ついてるって、向こうも思ってるみたい。

あたしの話に乗ってくれてる。なら、これもあたしの全力。

オシャベリは好きだし得意！

チヨットでもイイ方向に持つてきたいんだ。

だつて、タツキーは覚えてたじゃん。ビョーゲンズになつてゐる間のこと。なら、このヒトにも届いてるはずじゃん。あたしの声！

「おねーさんさあ、配信でさ、人気者になつてさ。」

そつちから、アイドルになりたかつたりし」

バゴオ！

「ぶぐええツツツ!?!」

顔を思いつきり殴られた。

見えなかつたけど、チリ・ペツパーだね絶対。

プリキュアじゃあなかつたら、たぶん首だけどつか飛んでつちやつてる。

道路に顔がめり込む威力をもらった。

「テ、メー!は…も、う!」

メエエエ、は、もオ、オ!

オ、オーシ、マイ!…お、おお。

オ、シマ、イ、ダ!アア、アーツツツ!?!」

「……な、なんで怒んのさ?」



何をしようとしてるのか、うっすらとわかった。

あたしを電気に変えて、電線に引っ張り込む気だ。

そうだったら、あたしは……

あたしだけじゃあない。ニヤトランは、どうなの？

抵抗したけど、できない。

体がほとんど電気に変わっちゃってる！

ヒーリング・ステツキもツ！

(イ、イヤだツ……)

ジタバタするしかできないし、それすら意味なかったけど。

ふと見た空に、飛び上がる何かが見えた。

…あれは、ちゅちーのハイジャンプ？

って、ことは！

「させないわツ!!」

プリキュアツ、ヒーリング！スト」

………ヘンだった。

気づいたら、地面に転がって変身が解けてるちゅちーを見ていた。

あたしも、いつの間にか解放されてる。

「…な、なによ。これ……なにをされたのよ、私？」

私、何も見えてないわ。いくら『速い』っていつても……」

ちゅちーから少し離れた場所に、チリ・ペツパーがいた。

ちゅちーとの間には、引きちぎれた電線の網。

たぶん、フオンテーヌに向かって投げて防いだんだと思う……けど。

何もかもがいつの間にかすぎて、全然わかんない。

離れてる後のふたり……グレースと、タツキーを見る。

グレースは……自分で電線を引きちぎったみたい。

でも、そこで力尽きちゃったのかな。変身が解けて、のどかっちになってる。

タツキーは、ひっくり返ったまんま……生きてるよね？

生きてても制服が真つ黒コゲじゃん。ヤケドとかヤバそう。

確認は、後。今は……アイツ！

「……ニャトラン。見えた？」

「見えた、つて…スパークルもかよ!?

わ、わかんねえ!一瞬でこーなっちまった!?

あたしも見えなくて、ニヤトランも見えない。ちゅちーも見えてない。  
一瞬で世界がパツと変わって、何が起こったのかゼンゼンわかんない。

「…『世界』?」

「どうしたよ。…『世界』?」

…つて、まさか!?

だとしたら!

だとしたら、今すぐにも倒さなくっちゃあいけないツ!!

あたし、考えちゃった。

チリ・ペツパーが…めっちゃ速くて目で追えないチリ・ペツパーが!

あまりの速さで、DIOの『世界』に入っちゃったんじやあないかって!

承太郎さんのスター・プラチナみたいに!

スカー・ティシュー本体を試してみる。

「…?何、が…?ま、いい。」

始、末…は、変アわ、ら!ない」

どうも、あたしたちと同じみたい。

何が起こったかわかってないのが同じみたい。

でも、だからって。

「ニャトラン」

「今しかねえ。たたみかけて今！倒すぜ！

もし、そんな通りだったなら…今倒せなきやあマジにオシマイだぜ、コイツ！」

「やるよ。なんとしても倒す！」

『自覚』して使われたら無敵になっちゃう！

今ここが、勝ち目がある最後の瞬間ってこと。

ナンデコーなっちゃったの？ナナメ上すぎない？

そんなコト考えてたら、負ける！

「エレメント・チャージツ!!」

「オウよスパークルツ

全力叩きつけるニャーッーッツツツ!!」

スカー・ティシューが見てきた。

チリ・ペツパーが来る。太陽<sup>サン</sup>を撃つ。

あんだけ攻撃されたら、どっから来そうなのかはわかる。

それに賭けて、ただ突っ込むだけ！

「来……る、か。バ、カ……が！」

あと3歩。

みんなとの訓練の手ごたえから考えて、あと3歩！

それだけ距離を詰めたら、今のアイツなら避けられない距離に入る。

でも、そのたった3歩が……チリ・ペツパー相手だと、遠い！

太陽で来そうなトコにあらかじめ撃つても、

シツカリよけてから攻撃してきて、防ぐのがやつと。

2歩進んだら、3歩下げられる。近づけない。

ギユン

バシイッ

「……えッ!?!」

そんなこと思ってたら、左後ろから脚がガクンと落ちた。

ヤバイ、足払いもらった！背中、踏み抜かれる前に飛びの……

ううん、守ってたら負ける！

足払いをもらった倒れるイキオイを利用して、手をついて！

手をバネに、飛んで！空から狙い撃つてやる！

「プリキュアッ、ヒーリングウウ〜」



「言つ、た、ろ。」

オ、シマイ、だアー」

放つことは、できなかつた。

気づけば真上にチリ・ペツパー。

おいしい、あと一瞬だつたんだけどなあ。

逃げ場のない空で、これ以上ないってくらいスキだらけだつたあたしは、

背中に特大の一発をもらつて地面に顔から落つこちた。

落つこちた先で、パンチだとかキックのラッシュが待つてた。

アイツ、もうすっかりチリ・ペツパーの扱いに慣れてる。

殴る蹴る手足を見ることもできない。

ヒーリング・ステッキが蹴り飛ばされて飛んでつた。

あたしも蹴り飛ばされて転がされてく。

あれツ、殴られたのかな？どっちでも同じじゃん。

ヒーリング・ステッキがアイツの後ろに落つこちて、音を立てると一緒に、

あたしはスパークルじゃあなくなつてた。

そーなるかあ。ニヤトランと離れちやつたんだもんね。

納得すると、あたしの立場がハッキリわかつた。

死ぬ。

ヤバイ。

スカー・ティシューは動かない。

チリ・ペツパーだけがにじり寄ってくる。

「いッ……イ、ノチー！ 乞い……を……してエ……み……ろ！」

どー、せ。聞、かア……ねー！ け、ど」

……にひひッ、やった。

オハナシするチャンス、くれたじゃん。

得意だよ、オシヤベリなら……

「……。なんになるの、こんなコトして。

あたし、バカになんかしてないよ？

聞いたでしょ。ちゆちーの言葉……尊敬するわって言ってたじゃん。

のどかつちも、おねーさんを止めたいだけ！

間違ったコトして、取り返しがつかないことになるのがイヤなだけ！

だから、タツキーも！ おねーさんに当てなかつたんだよ、大砲！」

「……………」

思ってること、かたっぱしからシヤべるだけ。

あたしバカだから。心の中に思ってること、それだけしか言えないよ。でもそれだけに、きつと混じりつけなしの100%あたし！

「ほら、味方しかいないじゃん！」

みんな、話を聞こうとしてるじゃん！

そんなヒトたちをキズつけてたら……

バカにしに来たとか！そんなフウに、アタマから決めつけてたら！

おねーさん、ひとりぼっちになっちゃう！

聞いてほしいコト、たくさんあんでしょ？

聞いてほしい歌、タツプリあんでしょ？

だったら、こんなコトやめよ？オシヤベリしよーよー！」

気のせいかな？

黙って聞いてたのは、『スカー・ティシュー』じゃあなくて

『おねーさん』で……『おねーさん』の目が、おびえたみたいに見えた。

でも、次の瞬間にはスカー・ティシューで。

チリ・ペツパーが正面から来た。

プリキュアでもないあたしは、もう防げない。

ドボオ

「…ツ!!がはツツ……!?

…ゴツ……ゴホツ!!……くくくツツツ!?

たぶん殴られた。お腹に何かがめり込んだのだけ感じた。  
うずくまって吐く。吐いてたら、血が混じってた。

「取……り、消、せ。そオ……の、言、葉。」

取、り……消エ、さ……ない!の……なら、殺オ、す」

…取り消せ、つてなに?

『アンタ』に言われて聞く理由なんかない。

あたし、プリキュアだもん。変身がもう解けてたつて変わんないよ!

「……………ゴホツ……イヤ。」

あたしは、おねーさんに言ってるの。

聞いてよ、あたしの言いたいコト。

言つてよ、おねーさんの言いたいコト」

また、殴られた。蹴とばされた?

うずくまってから起こした背中をやられて、

顔を地面に引きずられた。黙んないよ、あたし。

「話してよ、おねーさん!

知ってんでしょ!?

あたしよりも、ズウーッと、さあ!?

言いたいこと言ったつきり、なんにも返ってこなかったら!!

サイツテーにツマンナイじゃん!!」

チリ・ペツパーがバチバチ電気を帯びだした。

もうダメかも、これ…シヤベれる限りはシヤベるけどさ。

最後の最後まで、やることは変わらないかんね。

「も…う、いい。お…終、わア…り…だ!」

「オウ、終わりだぜ。そいつは間違いないよな…

ただし、オメーがだ。スカー・ティシューよおー」

「……ニヤトラン!?!」

そーだよ、あたしに変身解けてるってことは、

ニヤトランもステッキから元に戻ってるってことで!

そのニヤトランは今、スカー・ティシューの右下側からイキナリ出てきた。

「必殺!ニヤトランキー…ツク!!」

右下から飛び出してきて、アゴに向かつて思いつきりキックしてる!

…で、でも!でもさあ…スカー・ティシューのそばにも電線があつてさ。

つまり…チリ・ペツパーが戻って防ぐには、めっちゃ余裕じゃん。ニャトランは受け止められて、あっさり捕まった。

「ニヤ、ニャトランッ!?」

「…クサ、レ、猫!が……ッ

糞便、タレ!ながア…ら、死ね」

「ネコになんか恨みあんのかよ、オメーよお。

ま、いるよな。マナーのなあってねえーヤツ」

なのに、ケツコー余裕でノンキに話してるニャトラン?

なに?どーなってるの?立場ワカツてナイ?

ないない!あたしじゃあーないんだし!

「ま、そのヘンは後でゆっくり話そーぜ」

「クサ、レ…猫!…に。後…はア、ない!」

「わかんねーヤツだな。それはオメーだって言ってるのによおー

オレのキツクは、すでにオメーに直撃してんだぜ」

「……?何、が…直」

ドゴア!!

かなりイイ音がして、一緒に正解がわかった。

頭上からイキオイをつけたペギタンが、

スカー・ティシューの頭に思いつきり蹴りをかまして！

続いて、ニヤトランと逆側に隠れてたラビリンも飛び出して、

今度はアゴをアツパーカットした！

バコオン

本体のダメージはスタンドのダメージ。

ひるんだチリ・ペツパーの手元からニヤトランがあたしの方に来て。

ラビリンは、そのまま：

スカー・ティシューの頭からチョツピリ浮き出したDISCを。

ツマんで引つ張り出して盗んで、すぐに飛んで逃げた！

DISCは『2枚』出てて、片っぼしか持つていけなかつたけど。

もう片っぼも、ペギタンが後追いで同じように持つてつて逃げた。

「…な？直撃してたら？」

チリ・ペツパーがオレをつかんだままで本体が無防備ならよお

しかも完ペキ勝つたと思ひ込んで、注意力散漫つてヤツだぜ」

戻つてきたニヤトランの言葉で、あたしもわかった。

グレーズが言つてた、『スカー・ティシューに勝たせる』つて言葉の意味。

勝ったと思ひ込んだ瞬間が、一番無防備！

これって、承太郎さんたちが何度も何度もやってきた、勝ちの定番じゃん！  
あたしたちはチリ・ペツパーにとても勝てなかった。

全員そろって変身が解けるまで追い詰められた。

けど、変身が解けたから、ラビリン、ペギタン、ニヤトランが自由になつて…

「…だ、から！ナン…だッ、てン、だア…よ。ボゲツ！」

チリ！ペ！パ…で……………あ？……………あ？…」

「使えるわきやねエーだろ。オメーはもうスタンド使いじゃあねーんだからよ」  
んで、DISC知つてんのは、あたしたちだけ。

DISCを取られたらスタンドが使えなくなるって、コイツは知らない。

ビョーゲンズに知られないためにガンバツてんのが、今のあたしたちなんだよ！  
変身する。後はトドメだけ。

「今のオメーは！ただの弱いビョーゲンズってコトだぜ！」

「ン、な…ンなッ、バガ！なア、ア…あ、あだ！じ…はア!？」

あだ、じいイイ、は!!

空、の…鳥！も…あ、だじい！だけ、を！見ぢや、い…ない!!

ごオ、ンな世界、ブツ！壊…す、んだ…よオオ、オオくく」



「……。エレメント・チャージ！」

スカー・ティシューは走って殴りかかってきた。タダの人間よりは強いよね、そりやあ……でも。

プリキュアには、なんにも怖くない。

「あだ、じいイイ、は!!」

あだじ、だア……けが歌ア、うー!ん、ダア!!

<sup>ゼカイ</sup>世界で歌うのはあだじだけエエエエ~~~~ツツツ」

「プリキュアツ!ヒーリング……フラーツシユ!!」

ギユウン……ゴバツ!!

光を集めて、抱きとめる手にする。

伸ばした手は、ヒトの体とエレメントさんをやさしく包んで助け出し……

ううん、残されたビョーゲンズだって、置いてけぼりってワケじゃあない。

浄化されていくのは、悪い心だけを大きくされたヤツなんだもん。

光の中でどんどん小さくなっていく黒い塊は、ウソみたいにやさしい顔になった。

ちよっぴり不安そうだケド……

「聞いて……聞いて、くれ、る……の?」

「聞かせて。あたしが聞きたいんだし」

「……あり、が……と。歌、う……ね」

不安は、すぐなくなつたみたい。

歌いだした黒い塊は、自分自身から光を放つたと思うと…

そのまま煙みたいに消えていった。

歌声はそれでも続いて、消え切つたのはチョット後。

全部見届けたあたしも、いつもの決めゼリフをキメた。

「お大事に」

## スカー・ティシューはここにある—その9

まず、みんなでもた変身してソツコー立ち去るのが先だった。

戦いは、終わってみれば10分くらいだったんだけどさ。

でも、そんだけ時間が経つと、最初の爆音で動けなくなつてた人たちも復活し始めてて：：すぐに逃げないとヤバイ。つて、フォンテーヌが。

「ちよつと！大丈夫なのツ!？」

あなた、死なないでしょうねツ!？」

「大丈夫。元通りになるよ：：明日一日寝てりやあな。

それより、ここを去る方が先だろ。

このままここにいたら取拾つかねえことになるぞ」

「信じるわよ？じゃ、持つわね」

タツキーをかついだフォンテーヌと同じように、あたしもおねーさんを持ち上げた。

ラテを抱えたグレースも一緒になって、みんなで向かった先は採石場。

『夢』でやったことが現実で通用するか、念のための確認するのに

ココを使う予定だったらしーけど、今日はナイシヨ話のためつてコトだね。

一番最初にやるのは、雷のエレメントさんの診察だよ！

みんな変身を解いて、連れてきたエレメントさんに聴診器を当てる。  
代表はのどかつち。

「エレメントさん、お加減いかがですか？

…というか、お住まいは？」

「ええと…東京都練馬区…の、アパートです。

ビョーゲンズにされたその人に、取り込まれちゃって…」

その人って、おねーさんのコトだねドー考えても。

でも東京かあ。ちゅちーがシブイ顔してる。

「遠いわね。プリキュアで全力疾走しても片道二時間は固いわよ」

「いいんです。わたしは雷ですから。

電線に乗って、元の場所まで戻れます」

「なら、いいんだけれど」

そっか。チリ・ペッパーと同じだもんね。電気そのものなんだ。

エレメントさんは、頭をペコリと下げながら、

黄色だかオレンジだかのボトルを差し出してきた…ええつと、雷のボトル？

ボトルって、めっちゃ貴重品って言ってたよね？早くも二本目？

ま、チリ・ペッパーなんてラスボスみたいなヤツと戦わされたんだし、レアドロップくらいはあつてイイかも！

「ありがとうございます。わたしだけじゃあなくなつて、

他のエレメントさんみんなの危機でした。

これでも、お礼が足りないかもしれません。受け取ってください」

「足りないなんて、そんなことないよ。

「こちらこそ、ありがとうございます。役立てますね」

「でもさ、コレ…どーやって使うの？」

「イマイチわつかんない」

「ちよつ、ひなた。失礼じゃないのー！」

ちゆちーにソツコー怒られちゃったけど、

エレメントさんはニコニコ顔で使い方を教えてくれた。

ヒーリング・ステッキにセットしてあるボトルを取り換えることで、

そのボトルに込められた力をプリキユアが使えるんだって。

今回の場合は雷のボトルだから、雷を撃てる、って話みたい。

「雷を撃てる……ものすごい話ね、これは」

「ちゆちー？」

「雷はやバイ。天気を操れるウエザーが一度だつて使わなかった…

思うに、強力すぎて手に余るんだろうな。自分ごと殺しかねないパワーだぜ」  
F・Fまでそー言ってくる…言われてみれば。

竜巻でカエル巻き上げて降らせたりとかしてるけど。

竜巻そのものをぶつけてチュドーン！なんてやってないんだよね、ウエザー。

なんで？……つて、あたしもワカんじやん。今となつてはさ。

無差別でブツ壊すとか、できるけどできるわけない。

「ちようどよく、つてわけじゃあないけど。

チリ・ペツパーのDISCも手に入ったわ……

雷の力に、電気を操るスタンド。適合した人間が持つべきでしょうね」

「あんただつたらいいんだけどね。ちゆ。チリ・ペツパーは適合した？」

聞かれたちゆちー、またシブイ顔をした。

ペギタンから手渡されたDISCを自分で頭に差し込むと、

バネか何かみたいに、ちゆちーとDISCの両方が弾き飛ばされた。

試してたんだ、いつの間に。

「…見ての通り、つてところよ。

この流れならつて思ったんだけど…そう都合よくもなかったわ」

「残念。わたしも思ったんだよ？みんなでスタンド会話できるって」

そのヘンは後で相談ってコトになって、

今回の事件、詳しい事情をエレメントさんに聞こう、ってなったトコで。

おねーさんが、目を覚ました。

「う……あ。あ……た、し」

「目覚めてすぐに悪いんだが。」

今回の事件の顛末、あんたの口から直接聞きたい：

どうしてあんなことをして、あんたは何をしたかった？

あらかじめ言っとく。俺の能力の応用で、ウソはすぐわかる。

おまわりに突き出す気はないけどな。そのぶん正直に答えてくれよ」

黒コゲ制服のタツキーが、ヤケド治療中のせいで

フリー・ファイターズがウジュールウジュールする顔でおねーさんに迫る。

「…ひッ!？」

「タツキー！オドカしてどーすんの！」

…ま、ココはまかせなよ。あたしにさあー」

のどかつちとちゅちーも加わって、おねーさんをなだめてたら。

ちよつとずつ、ちよつとずつ。ポツポツ話し始めてくれた。

：キツオンってヤツで、ホントに大変そうだったけど。  
だいたい、こんな事情だったみたい。

おねーさんは、小さい頃からアイドルが夢だった。

歌うことも大好きだったけど、ソバカスが濃いせいで外見が悪くって、  
ブスとか言われまくってイヤな思いばかりしてきた。

ママとパパは、そんなおねーさんを応援して歌のレッスンに通わせてくれたし、  
アイドルのオーディションにも応募しまくって、やつと書類選考を通った。

でも、通った先で、歌を披露したら：聞いてもらうどころか、バカにされた。

何の間違いで通ったんだとか、こんな顔じゃあ歌なんて意味ないとか言われた。

くやしいとか悲しいとか通り越してボーゼンとして帰ったらしいよ。

あきらめるもんかって、また応募しまくって、そんなに時間経たずにもう一回通ったらしいけど。

審査員の前で、ゼンゼン歌えなかった。ノドが引きつって言葉が出なくなってた。  
て。

んで、こつからが最悪。当時、高校生だったおねーさんだけど：

アイドルのオーディション受けることが、クラスのヤツらにバレた。

元から浮いてたおねーさんは、男子からも女子からもバカにされて、



気がついたら吃音になった。

引越してイジメからは逃れたけど、吃音のせいであたお話するのも大変になって。

高校を卒業して短大も卒業する間近で、ママが亡くなって。

そして、パパがお見合いを押し付け始めた。アイドルはあきらめろって。

パパはパパなりに、おねーさんの幸せを考えてるんだろーけど。

おねーさんには、ずっとガンバツてきた夢を婚活のダシにされたと思えなくて。

ケンカして、同じ家にいるのにクチを聞かなくなつた。

おねーさんは、そんな家から出ていくために就職して。

また一方で、最近流行りの配信で人気者になることで、

アイドルをまだ目指せるって証明しようとした。

ゲームの配信をやつてたのは、中学までの数少ない友達との接点を生かしたらしい。

見てくれる人と一緒に遊びを盛り上げていって、

そんな中でいつか歌を取り戻したかつたんだって。

でも、うまくいかなかった。張り切ってるツモリでも、再生数はゼンゼン伸びない。

どうしてうまくいかないの、って、ウツになってたある日……

突然、怒りが爆発した。

同じように突然現れて、その怒りのままに暴れまわったチリ・ペツパーは、

おねーさんのパパに大ケガを負わせた。

これが二週間前。ナゾの傷害事件ってコトで新聞にも載ったそーだけど、

そこまでタツキーは見つけられなかったね。

パパをキズつけちゃったおねーさんは、さすがにチョット我に返ったらしいけど。

かえって『冷静なまんま怒りが爆発してる』っていうヘンな状態になったせいで、

チリ・ペツパーの性質を探り始めて。

「そして、横須賀で機材を盗み出した…のね？」

「……はい。あ…たし、は、『無敵』！……だつ、た。

多…摩、で。実、験！し…て。あた、し、は…どこ！に…も、動かア、ない…で。

ヒト…キズ、つ…け！ら、れ！るツ……って、わ、かつ、ちや、た」

もうワカツちやつたよ。あたしも！

あの、チリ・ペツパーじゃあない方のDISC：『怒りを爆発させろ』とか書いてあ

んでしょ！

どー見ても、その『ある日』のどっかでツツコまれてんじやん。

みんなもわかってるみたい。のどかつちが、そのさらに先を聞く。

「ビョーゲンズにされたのは、いつ…ですか？」

「……多摩、…の。実ッ…験、のオ…後。」

出、勤…中。に…：…やら。れ、た、の」

「グアイワル…あの、筋肉のビョーゲンズに？」

コクリ、とうなずいたおねーさん。

ちよつと返事すんのも大変みたい。

聞いてたちゆちーの表情が、ドンドン深刻になつてく。

「……まずいわね。ビョーゲンズにスタンドが見えてることはわかっていただけ。

明らかに、興味を持つて探し回っているわ」

「『終わりの日』に…、一歩、近づいちゃまった…と。考えるべきだろうよ」

「『終わりの日』、つて…：…タツキーさあ。レクングッ!？」

シャベローとしたトコにベロ固められた!？」

フー・ファイターズだコレ!？」

「具体的な単語出すとヤベーンだよ平光。

俺たちがスタンドを回収しようとしてんのは何のためか…わかってんだろ」

……あッ。

イツチバン知られちゃあいけないコトじゃん。レクイエム。

知ってる人間がひとりでも増えたらヤバイ。

タツキーはそれがわかってるから、ボカして言っただけなんだ。

そっか、そーだよ。ウツカリ。

「舌、放すぞ」

「……ゴメン。イキナリ中二病でビックリしちった」

「まじに中二病な世界を生きてるんだよ俺たちは。

変身ヒーローで、しかも秘密の超能力戦士だぜ？

大真面目だろ、俺も、お前も」

「ウン……ま、中二なんだし中二病でいーじゃん、あたしたち」

「はいはい、後でな。おねーさん困ってんぞ」

そーだった。

ツライのは承知でだけど、ビョーゲンズにされてる間のことをおねーさんに確認する。

ちゅちーがウマく聞き出してくれたコトによると、こんなコトがあったって。

グアイワルの口ぶりによると、まず、キングビョーゲンからダルイゼンに特別な命令が出てた。

グアイワルは、それが面白くなくって、独自に『不可解な超能力者』を探してたんだっ

てさ。

んで、ダルイゼンよりも先に見つけて、しかも思った以上にスゴイ能力だったから、プリキュアも倒してサイコーのお手柄を持ち帰るつもりになった…みたい。

「ヤバイ…ヤバすぎる。俺たちの手に余る事態になってきたぞ」

「うん。グアイワルは、少なくとも東京まで探しに行ってる。

それをなんとかするなんて…中学生のわたしたちには、無理だよ」

「こうなったら、スタンド使いは引かれあう、っていう法則が頼りだペエ」

「つつつてもよおー、もしかしたら、ココじゃあなくってヨソによ。

もつとゴツソリと集まってる可能性もあるかもだよなああーっ」

「ニヤトランの言う通りでも、どうしようもないラビ。」

ラビリンにラテ様のお世話があるみたいに、のどかにも毎日の暮らしがあるラビ。

「ここから離れるなんて、できないラビ」

「俺たちもそうだが、今マジにヤバイのはおねーさんだぞ」

タツキーの言葉に、みんなが目を向けて。

みんながすぐに気が付いた…：…あたし以外。

「鳴滝くんがそうだったみたいに、お姉さんも完全に覚えてる。

ビョーゲンズだった時の記憶！」

「ビョーゲンズからしてみたら、お姉さんは歩く情報漏洩よ。」

「……生かしておく理由が……ないわね」

「俺たちほどじゃあないけどよ。命を狙われる可能性は十分あり……だ！」

「もつと言うなら……スタンド使いになっていたってことは。」

『あの人』が何かさせようとしてたった証拠でもあるよ。

スタンドがなくなった今、『あの人』がそれに気づいたら……」

のどかつちが言ってるところに、F・Fが割り込んだ。

鼓膜直接通話のナイシヨ話で。

『ミラシヨンも、マックイイーンもラング・ラングラーも。」

ホワイトスネイクには消されちゃあいない……敗北してもな。」

殺す理由なく殺す可能性は低いと思う。」

逆を言えば……理由ひとつあれば十分ってことだけど』

「どうあれ、この人はもう自分で自分を守れない。」

ビョーゲンズもスタンド使いも、ただの人間の身には余るぜ」

おねーさんの方を見ながら、口でそう言ってるタツキーは、

口を閉じた後も、F・Fと同じナイシヨ話モードで後に続けてくる。

『俺たちは、俺たちだけで手いっぱいだと思う。』

…俺は、な?でも、それを決めていいのは俺じゃあないだろ。  
なあ…どうする?』

「守るよ。あたし、守る。当たり前じゃん」

「…立派よ。ひなた。」

でもね…この人が襲われるたび、片道二時間で守りに行けるの?

間に合いつこないわよ……

プリキユアでもどうしようもない、物理的な無理があるのよ」

「ウグツ……」

即答したけど、即ちゆちーにツツコまれた。

ううツ、考えがアサイあたし!

その横で、少し目を閉じて考えてたのどかつちが聞く。

アンマリな話題でアツケにとられてるおねーさんに。

「お姉さん。すこやか市に引越してくる気……ありますか?」

「あ…た、し……が?」

「今、聞いてもらってた通り。このままだと、お姉さんの命が危ないんです。

でも、この町にいるのなら守れます。わたしたちが。

学校とかもあるし、いつでも、つてわけにはいかないかもしれないけど…

それでも、東京にいるよりは、間に合う希望がよっぽどあるんです」

元気づけるみたいに、ハキハキと、でもやさしく誘うのどかつちだけど。

おねーさんは…逆に、目を伏せちゃった。

「……………あ…り、がと。

で…も。も…オ、い……………か、な？

と……………さん、と。た、く…さん、ヒト！…を、キズつ…け、て。

あた、し…の……………あれ、が。あ…た、し」

「あなたのせいじゃあないわッ。違うのよ！

……………違うんです。悪いのは、あなたをそんな風に操った『敵』なのよ。

そんなものよりも…信じるべきは、あなた自身だわ。私はそう思います」

ちゅちゅがスグに押す。トーゼン、あたしも押すよ！

のどかつちも、ウンとうなずいて押すの。

「おねーさん、それでいいの？」

あたしは……………あたしだったら、ヤダよ？

ずっと追っかけてきた、おねーさんの『特別』…

ワケわかんないヤツらのジャマであきらめるなんて、

あたしだったら、ヤダよ!？」



「あきらめるなら……わたしなら、納得したいです。

ここまで来られたんだって、納得してあきらめたい。

……お姉さんは、ここで……納得できるの？」

みんなにグイグイ押されて、目を丸くしちやったおねーさん。

でも、ちよつとして、姿勢を正して、聞き返してきた。

「ひと……つ、だけ。聞か、せ……て？」

……あ……あ、たし。の……う……う、歌。

……き。……聞き、た……い？」

答えはモチロン決まってるじゃん。

みんなそろつてうなずいたよ。

……なんだ。タツキーも、そーしたかったじゃん。

それを見たおねーさんは、やつと。

フワツとした、チヨツピリの笑顔を浮かべた。

「……わ、かった。

その……日、まで……守って？」

一時はどーなるかって思ったけど。

めつちや苦戦して、一歩間違ったらオシマイだったけど。

ガンバツたから、みんな一緒にハツピーエンドじゃん！

…でも実はさ、こつからが長かったんだよね。

主に、ドロボーしてきたスピーカーの問題。

コレはマジどーしよーもない。爆音事件がマジで起こったのは今更変えらんないから、ただ放置する以外の手なんかないってコトに。

それと…ビョーゲンズに取りつかれてたせいだって言っても、

おねーさんの無断欠勤は三日に渡ってて。

持ってたスマホも着信まみれ。コレどーすんの？

「生きるって決めたなら、片付けるしかないッスね」

タツキーが、そうブツキラボーに言い放って、

やっぱりちゆちーに怒られた。

あ、そうそう。土日でいたい見てきたんだけどさ。

ウチの常連さんもみんな無事だったよ。

ケガしちやった子がちよつといたけど…

あたしが一番怖かったコトは、知る限りなかった。

ちなみにあたしも無事。お腹を内出血してたけど、F・Fが治してくれたた。

メデタシ、メデタシ。ホントよかったよ。

## 王と王

プリキュアたちのいないところで、おそるべき出会いが起きていた。

それも、案外すぐそばで。すこやか市は海沿いの、防波堤の前でそれは起こった。今回は、それを追っついていこう。

(半日と持たんな、この体は……まあいい)

すこやか市在住の、数年前に妻に先立たれて親戚付き合ひもなく、偏屈ものゆえにご近所ともうまくやれていない老人がいた。

そんな背景を語る意味も、もはやない。

なぜなら彼は、今さつき死んでしまったからだ。

杖をつきながら、現在進行形で歩き回ってはいるが！

彼はすでに、死んでいる！少なくとも、もはや人格はこの世にない！

動くはずもなくなった体を、それでも動かしているのは……

誰だろう、キングビョーゲン。

彼がすこやか市に来たのは、別にこれが初めてではない。

彼が彼自身のために必要とする作業があつて、そのために割と頻繁に来ている。

このように他者の肉体を乗っ取って動くのは、ここ最近では初めてと言つてよかつたが……

(次の体のアテもある。今日がダメならば明日でも明後日でもよい) さて、そのような異例には理由が当然あるわけだが。

それは……

(人間に未知の能力を与えている『何者か』、その尻尾をつかんでやろう)

配下の三名に命令を出してからいくらかの時間が経ち、

すでにキングビョーゲンは二名の能力者を確保するに至つていた。

うち一人はダルイゼンが。もう一人はグアイワルが独断で。

そして、ダルイゼンの連れてきた一人が『大当たり』だった。

この能力さえあれば、もはやテアティーヌも脅威ではない。

だが、その性質上、ある意味では生殺与奪を能力者にゆだねてしまうことになる。

そのような状態を良しとするわけにはいかない。

現に『奴』は今なお『跳ねっ返り』だ。やはり、そこはデミビョーゲンであり、

すでに人間の体を捨てた後でも元の魂に引きずられている。

ダルイゼンが言うには、能力を使って他の人間をいたぶり殺していたそうだが。

それも納得だ。卑屈な追従を繰り返しながらも、お役に立ちます、と連呼してうるさ

い。

能力の有用性を抜きにしても、これを人間界に解き放つわけにはいかない。ただ、人間どものいらぬ警戒を招くだけで：場合によっては致命的となる。

ビョーゲンズであるがゆえに、ビョーゲンズたる性質からは逃れられない。

目的に感づかれたなら、最悪、対策される。キングビョーゲンの目標は百年単位で遠ざかる。

：はつきり言うなら、『奴』個人には何ひとつ使い道を見いだせない。有害なだけだった。

いらぬゴミは処分したいが、そのゴミには最高の宝物がくっついていて。

どうやって引き剥がせばいいのか？ それを知るためには能力の本質を暴かねばならない。

信用できないなりに『奴』から引き出せた情報もある。

能力は、どうやら何者かに与えられたものであるらしい。

グアイワルが、二人目から聞き出したという話から判断するに、そちらも同様だ。

何者かが、何らかの目的をもって、能力をバラ撒いている。

ならば、その能力者をビョーゲンズの好き勝手に動かしてやればいい。

それも、とてつもなく目立つ方法でだ。

ビョーゲンズ同様、陰に潜んで暗躍する者がそんな事態を知らなければどうなるか？

(少なくとも、原因を探りには来るはずだな……？)

我でもそうする。そうせざるをえまい)

そして、そこを捕らえる。キングビョーゲンはそう考えた。

これは本人か、でなくとも限りなく近い有力者がやって来ざるをえないはずだ。

さもなければ、ミイラ取りがミイラになるのを繰り返す結果になりかねないのだから。

グアイワルに命令を下した。

二人目がデミビョーゲンになる前にやっていたという爆音攻撃。

これを最大限に拡大して町全体を攻撃せよ、と。

また、ビョーゲンズとしての能力は教えず、能力だけで戦うように仕向けろ、と。

これで、おびき出されてきたプリキュアを倒せたならばそれでよし。

話に聞く限りの『電気』の能力ならば、十分に期待できる戦果だろう。

倒した上で、さらに能力を与える者を釣り出せるならば最高と言っていい。

よしんば敵わず敗北したとしても、二人目にはろくな情報を与えていない。

デミビョーゲンが浄化されて元に戻ったら、その記憶は消えず保たれたまま。

そんなことはどうの昔に知っている。であればカスを掴ませておけばよからう。

さらに言えば、能力だけで戦うのならば！

そのやり方は、ビョーゲンズの本質からは、必然かけ離れたものになる。

人間どもの警戒を呼んだとて、対策が見当違いなものになるのは確実。

『電気』から『病原』にたどりつく者など、いるはずがない。

困るのは、能力を与えている何者か、その者だけというわけだ。

(さて、始まるな……おっと、耳をふさいでおかねばな。

大音量など、好き好んで聞きたいものではない)

ほどなくして始まる。

どんなに大きな音だろうと、死んだ肉体にはないも同然。

現時点では実体のないキングビョーゲンといえども、

このひどい音は不快だし、唐突に聞かされれば驚きもするだろうが……それ以上ではない。

何食わぬ顔で音の方角を見て、様子を伺い。

空に出た『別の太陽』がレーザーを撃つて、爆音を終わらせるのを見届けてから歩き出す。

運がよければいるだろう。もともと能力をバラ撒き歩いてる者で、

プリキュアも、この町で能力を授かった一人なのだから。居合わせる可能性はある。

…いや、遠回しなことを言う必要もないだろう。

キングビョーゲンの歩く先は、明確にただ一人の人間だったのだから。

そう、運がよかった。出来過ぎなほどにだ。

「うう……ウツウ……どおして？」

どおして、いつもロクな目にあわないの、私イ」

「……どうしましたかな、お嬢さん」

女々しくメソメソと泣いている『男』に、『老人』は声をかける。

女口調で話してこそいるが、どう見ても男だった。

化粧などすれば、歌舞伎で女形でも張れるだろう中性的な美貌はあり、

その黒髪も、女性らしく見えなくもない豊かなロングのストレートだったが。

若干、華奢といえども。その体格は、隠しようもなく男だ。

…歌舞伎など、キングビョーゲンには知るよしもないことは別として。

「どうも、こうも、ないですウ」

私は仕事に來ただけなのに…

けつこうしよつちゆう來てるのに、一度だつて温泉にもつかれてないのに。

そんな私に限つて、羽目を外そうかなつてタイミングでこんな目に……」

「それは……おいたわしいことだ。



ですが、案外大丈夫そうではないですか？」

「……………」

ほらアア~~~~ツッ!

そんなコト言うあなた、結局、他人事じゃあないですかア~~~~ツ

そりゃあ大丈夫ですよ? 大丈夫ですけど!

お休みを台無しにされたこの気持ち、どこに持ってきやあいいのよオー——」

「悪かった、悪かったですとも。」

ですが、お嬢さん……………ふさいでたじゃあないですか、耳。

音が鳴り出すだ**いぶ**前から」

「……………」

い、いやアア~~~~何のことだか」

男の目つきが変わったことを、キングビョーゲンは見逃さなかった。

緊張が走る。表面上は笑顔でも、一触即発の雰囲気。

実際、ここでキングビョーゲンは仕掛ける気でした。

老人と同じように、男の体に乗っ取る気でした。

本人の口など必要ない。取り込んだ肉体が教えてくれよう。

だが、その空気をぶち壊す行動に、男は出た。



おそらく、こいつは何も知らないかと……ええ。はい。  
では予定通り、『遺体』を探し……あ、いえいえ！

そりゃ私も興味ありますけど、温泉……私はボスあつての……はい  
呆気にとられていた『老人』も、ついに正気に返る。

何が、失礼……電話が、だ。つきあつていられるか。

きさまの方が、よほど不審者ではないか。

無駄に時間を空費させられて腹が立つのもまた、久々の経験だった。

(なんかわからんが……くらえ！)

死んでしまえば謎もろとも消え果てよう。

そう見切つて攻撃を仕掛けたキングビョーゲンだったが。

「……………は？」

気がつけば、あさつての方向を向いていた。

一瞬して気づく。向いているのは真後ろだ。

真後ろを向かされていた。そう、『首だけ』が！

人体の構造上ありえないところにまでねじれた首の、

その中心にある老いた頸椎はバラバラに破断した。

本人には気づきようもないが……ろくろ首じみて、頭と肩が離されていた。

「あ………何？」

こんな有様にされて生きていられる人間など存在しない。とはいえ元々死んだ肉体だ。ただ取り憑いているだけの。

キングビョーゲンには大して意味のあるダメージではなかったが。

だが、続いて脇に現れた、『縞々な』『人型の何か』『繰り出した手刀』が

頭に突き刺さったとき。キングビョーゲンの全てが途切れて、それっきり終わった。もはや彼には知ることなどできないが、

老人の死体の頭から引きずり出されたのは…DISC。

彼が求めてやまなかった能力の正体にして、本質。

実体なき精神体として人間界に降り立っていたばっかりに、

彼はDISCにされてしまったのだ。

「……きさまが、何者であろうと。」

このわたしのそばに近づくことはない。

とくに、正体に近づくことは、決して…」

男の声が変わっていた。否、それだけではない。

華奢な印象を与えていた体格が、威圧感を覚えさせるがっしりとしたものに変わり。

黒一色だった長髪までもが、ピンクがかかった赤に変わった。

顔つきも、とうに日本人離れしていた……いや、違うのだ。人種すらも変わっている。今の彼はコーカソイドだった。

「キング・クリムゾン」

きさまは何が起こったのかもわからず」

「全テヲ刈リ取ラレテ終ワルノダ。

コノ、『ホワイトスネイク』ニヨッテ！」

キングビョーゲンの言うところの『能力者』であれば。

すなわち、スタンド使いであるならば、目を疑う光景がそこにある。

『ふたつのスタンド』！ 『一人の人間』に『ふたつのスタンド』！

デザインがまるで違い、能力もまた違うであろうふたつのスタンドを、彼は持っている！

スタンドというものの法則に真っ向から違反する存在だ。

たとえ、かの空条承太郎であろうとも驚愕をまぬがれないだろう！

「さて、このDISCだが。

わたしやきみの『前例』がある以上……ノンキに頭に差し込むわけにはいかないな。

『墓碑銘』で見た限り、わたしを病死させようとしたようだが……

取り出せたDISCは『ひとつ』。いささか奇妙といったところかな？

普通じゃあない…警戒は、必要と見たが？」

「ソコハ任セテモラオウ。チョウドイイノガ、アソコニイルカラナ」

今の堤防付近には、ほとんど人がいなかったのだが。

わずかながらいたのが、彼と、老人と。

「ひ…ヒツ、人殺…人殺…？」

たまたま通りがかった、不幸なサーファーだった。

爆音にやられてうずくまった拳句、いつの間にか逆方向にねじれた

老人の首とその死体を目撃することとなり…

そして、彼の運命もすでに決まっていたのだ。

ここにプリキュアはいない。ジョースターを受け継ぐものも、また。

「…なるほど？では、わたしは死体を海に放り捨てておく。きみにはあちらを頼もう」

「了解シタ」

「た、助けアバツ!？」

大声を上げて逃げようとしたサーファーは、しかしそのどちらも果たせなかった。

その頭に二枚のDISCが、同時に突き刺さったからだ。

DISCをフリスビーのごとく投げつけたのは、全身を横縞の模様で覆った、

どこか粘ついた印象のある人型のスタンドの方だった。

模様の中には塩基配列がビツシリと書き込まれている……

『鳴滝景継』なるたき かげつぐノ命令ダケヲ聞イテモラオウ。ソレ以外ハ何モデキナイ」

「……………!?!……………ア、ハ?」

「わたしが鳴滝景継だが」

海に行っていた男が戻ってくる。

スタンド……赤い、ワツフル状の模様で全身を包んだ大男……

しかも、その額にはさらに小さな頭がもうひとつある……で、老人を海に投げ捨てた後だった。

近距離パワー型であれば、そんなに骨の折れる仕事ではない。

スタンドによる殺人……指紋など、出るはずもなかった。

「なに……そんな長く苦労はかけない。

少しばかり、きみに興味があるだけだ……

ご足労願おうか。そうだな……あそこの岩場なんかいいだろう。

散歩にはうってつけだと思わないか?」

サーファアの青年は、ついていく以外の『何もできなかった』。

ボチャアアアアン

「なかなか…愉快な話だったな。」

キングビョーゲンに、テアティーヌ…

ビョーゲンズに、プリキュア……か」

「マサシク、愉快ナ話ダ。」

奴ノ話ガ本当デアレバ、『遺体』ノ実在ヲ裏付ケルモノニナルゾ」

「きみを相手に嘘をつける者などいるものか。ホワイトスネイク。

すこやかかの守護聖霊…お父上様の世迷言かと半ば思っていたよ。

だが、それがどうやら本当のことだととなれば」

『代用品』トシテモ当テニナル。」

約東ハ忘レテイナイ。『力』ハ君ガ手ニスルノダ」

「……帝王は、このオレ、ただ一人。」

俄然、やる気が出てきたじゃあないか」

「マズハ、『遺体』ヲ見ツケ出サナケレバナ。」



ソチラニ振り向ケタ方ガイイカモ知レナイ……」

「そうだな……さて、そろそろ涙なみだに譲ろう。」

すつかり日が暮れてしまった……温泉に入る時間など、ないかもしれないな」

彼が立ち去った後の岩場で、

サーファーの青年の背中だけが海にぷかりと浮かび。

日が完全に沈みゆくと共に、沖へ、沖へと流されていった……

後日、発見された彼は、事故死として処理されることになる。

死因は、頭蓋損傷に伴う脳挫傷。

すこやか市海水浴場付近の岩場で転び、そのまま帰らぬ人になったものと推定される

……

（又ウウ……死んだぞで。

感じるぞ……我が死んだのを！）

地平線の彼方まで、汚わいな液体が煮えくり返るビョーゲンキングダムの海原。

それらを見下ろしながら、キングビョーゲンの精神体は不快をあらわにした。人間界にて最期を迎えたそれよりも、はるかに、はるかに巨大で強大なものだ。

当然といえば当然だが、本人の本体が直接出向くほど、彼のフットワークは軽くない。あまつさえ、ヒーリングガーデンでのテアティーンとの交戦により、

浅からぬ傷を負わされている彼なのだ。

自ら何かをする際は、自分を切り分けた分体に行かせ、

用件を終えて帰ってきた分体と一体化して記憶、経験を統合するというのを繰り返している。

分裂、合体は彼の生態であり、日常であり、何ひとつためらう必要のないものだった。だが、その分体が殺されたとなれば、さすがに平気な顔をしていない。

おそるべき何かが起こったのだ。

(派手に戦って敗れた…わけではない。

そもそも、そこまでの力を分体に与えてはおらぬ……

プリキュアに感づかれて始末されたか？

それも無い。そのための力が弱い分体であるし、仮にも我だ。

そのような醜態をさらしたとて、何かの連絡をよこすはず。

だいいち、プリキュアと接触しても何も得をせぬ。避けるのは最優先だろう)

そして、今回、分体を送り込んだ目的に考えを至らせ。

ほぼ間違いないという結論を出した。

(死んだことにすら気づかない『何か』でやられた？)

そのような『能力』を、『能力をバラ撒くもの』が持っていた？

だとすれば…想定以上の脅威になってきたな)

キングビョーゲンは黙考する。

別に、強い何者かが何か計画を進めていようが、そいつらの勝手なのだ。

放置してもいいし、認めてもいい。キングビョーゲンの邪魔にさえならなければ。

だが、まず目的が読めないし、何をやろうとしているのかも不明。

そこをわからなければ、衝突を避けることからして困難だった。

「……接触すべきか。最悪、同盟を結んでもいい」

人間界での栄達を望むような者ならば、どのみち敵対は避けられんな。

そう思いつつ、接触の手段を考え始めた。

目的への障害は、少ない方が良いに決まっているのだ。

だが、さすがの彼も、ここまで予想はできなかった。

『能力をバラ撒くもの』はすでに、一方的にビョーゲンス側の事情を暴いているというこ  
とを。

## 絶対にはバレるな！イツプスの後ろ側で―その1

土曜日の夜の『夢』。カフェ・ドウ・マゴ。

皆で顔を合わせるなり、沢泉は俺に詰め寄った。

いわく、ダメージからちゃんと同復できたのか。元通りに生活できるのか。

今日は『夢』についてきていないF・Fが言うには『進捗良好』。

全身包帯マミレのミイラ男になってるけどな、俺…

そこは納得してくれた沢泉は、さらに質問を重ねた。

だとしても、月曜日からどうするつもりなの？…と。

「制服か？黒コゲの？」

なんとかしてくれたぞ…ニヤトランが」

「……………どういふこと？」

沢泉は一瞬、困った顔で首をかしげると…

目つきが鋭くなって、しかしまた二秒後には目尻が下がってうつむいた。

花寺も、シヨボくれた顔で小さく首を振っている。

「……………いえ……………責められないわね。」

「良くはないわ。でも、私はプリキュアだからそうならずに済んだだけ……」  
「いや。間違っちゃあいない。間違っちゃあいないぞ。お前の予想。」

ただ、ちゃんと金は払った。ドロボウじやあない……ネコババだけど」  
順を追って説明しよう……あの後、チリ・ペツパーのDISCをみんなで確認したんだ。

誰なら適合するのか、つてな……

これだけの強力なスタンドを遊ばせておく手はないんだよ。

当然、俺も試した。花寺も。平光も。全員ダメ。

そこでさらに範囲を広げた。ヒーリングアニマルのみんなに。

結果、唯一適合したのがニャトランだったというわけで。

あいつは帰宅後すぐに使い方の確認に入り、一晩でほとんどが可能になった。

何がって？ 本来の持ち主……音石明が出来ていたこと、あらかただよ。

物質を電気に変えて電線に侵入、移動した先で元に戻すとかな。

被検体はポテチ。平光家からウチへの転送実験だ。

もちろん、実験後はスタツフがおいしくいただいた。

さらに、生き物を生きたまま同じように送りつけることもやった。

……被検体はゴキブリ。承太郎辞典によるとチャバネゴキブリな。

殺そうかと思つたけど巻き込まれた立場も大概忍びないんで外に投げた。  
で、このあたりで次の平光の行動が読めたんで、チリ・ペツパーニャトランに即座に警告した。  
なんでスタンド名にルビ振つてんのかつて？

ニャトランは来られなかったからだよ。『本体は電氣化移動できない』。

「…あ、わかつた」

「もう少し考えて動きなさいね。ひなた」

「……。ハーン」

そう…すなわち。絶対ココに連れてくんじやあねえぞ、だ。

人ンチのコンセントからコンニチワとか、やるだけで信用なくすぞ、と。

言つてよかつた。ヤツはマジにその気だった。考えてくれよ一瞬でイイから！

ま、言えばちやんと聞いてくれるし考えもするヤツなんで、

花寺家とか沢泉家へのアポなし突撃は、こちらが言わずとも自分で気づいてやめた。

とはいえ、出来るつてことだけは確認必須だったからな。俺が志願した。

チリ・ペツパーで電線に引きずり込んでもらつて、公園にある電源のひとつの前で実  
体化。

俺にはなんの異常も起こらず、また自宅に戻してもらつてもそれは同じだった。

「本当に、安全だつていうなら……かなり有利になるわね。私たち」

そう。これなら、プリキュアの行動半径は一気に日本全国に広がることになる。もし海底ケーブルだとかを經由できるとすれば、海外すらも視野に入ってくる。だから確認必須だったのだ。虹村形兆のようにローストされて死ぬ危険も考えられたが、

この実験と、その後が続く練習によつて懸念もキレイに消え去った。

「練習?」

「おーよ、ちゆ。コツからだぜ。」

制服をどーにかしてやったつてのはよおー。

……マジキツかった。もーやりたかねー」

「や…ヤツれてるわね?大丈夫?」

そのまま俺の家にとどまったチリ・ペツパー…

どうやら、本体を電気にして移動させることはできないらしい…に、

F・Fが依頼したのだ。練習がてら制服を盗んでくれよ、と。

町の平和を守つてこんな有様になつたのに、

それで受けた損を全額自腹切つてたら生活がままならない。

スタンドは誰にも見えないし聞こえない。この世界にスピードワゴン財団がない以上、

相談して助けてくれる相手などどこにもおらず、しかも俺は家族から見捨てられてい  
る。

現実として『盗み』以外にとれる手段がない、と。

少し逡巡したチリ・ペツパーが、

しやーねえ、怪盗ニヤトランの手並み見せてやんぜ！

とか言ってくれたところに、割り込んで俺が提案した。

せめて払える金は集めよう。無敵のスピードを誇るチリ・ペツパーなら、

自動販売機の下に落っこちた小銭もあつという間に集められるはず。

軽犯罪にはなるが、忘れられたに等しい金だ。

これで代金を支払えば、盗んでいくより断然罪は軽いだろう。

納得したニヤトラン本人がウチに来るのを待つてから、

俺は地図帳（地理の授業で使う）を広げた。

日本全国津々浦々の駅を片っ端から指さし、

ほぼ確実に存在する自販機の下を総当たりであさり回つてもらつた。

そして日が昇り始めた頃合いに、ようやく目標額に到達。

ウチの近所の服屋から制服を持っていったら、俺が特定される危険ありのため、

ゆめポートの方にある服屋をあたり、俺にほぼ一致するサイズのものをいただいた。



代金はレジに詰めた。で、小銭の大群のままじゃあちよつとしたテロだからな。非常に心苦しうはあつたが…

国内トップクラスに権威と伝統のある神社の賽銭箱をあたって紙幣に両替した。

レジに突っ込んだのはそれからだ。

「それだけのことを忙しく繰り返しまくつたが。

チリ・ペッパーには一度たりともおかしなことは起こらなかった…安全と見ていいと思う。

まあ…なんだ。表向きの損害は、一応存在しないはずだぜ」

「……よく、わかつたわ。

良くはない…けど、最善を尽くしたと思うわ。

神様もきつと許してくれるわね」

「わたしに、許すとか許さないとか言う資格、ないけど。

そつか。誰も傷つけなかつたんだね。鳴滝くん」

……髪をかきあげて、アサツテを見た。

「ホメられたこつちやあねエーんだけだな。

ソコだけは…どこにか……つーか、苦労したのはニヤトランな」

「なんかオゴレよなー、そのウチー！」

「晩メシでいい？来る日、あらかじめ言えよ」

「肉、タツプリくれよな！」

タツプリの肉か。……鶏とか？

ちようどいい。今、ウチの冷凍庫では大量の鶏肉がうなってるし。

卵もイケるだろ。こいつは都度、切らさないようにしてる……

野菜も大丈夫のようだから、同じように買い込んであるニンジンと

冷凍グリーンピースもイケそうだが……玉ネギだけはヤバイ。

と、脱線。こんなトコで考え込むこつちやあねー。

「ニヤトラン、あとで食レポちよーだい」

「平光、お前な……別に楽しかねえーと思うぞ。

おおよっぱなクソガキ料理だぜ、しよせん」

「あら、自己流？」

「いや、まあ……そうかな？一応、本を見てたけど、それも最初のうちだけで……

安売りしてた食い物を『食えりやあいい』で煮たり焼いたりしてるだけだからなあ、基

本」

「十分、スゴイよ。簡単に言ってるけど……わたし、お手伝いしてるだけだもん」

「私も興味あるわね。旅館沢泉の娘として、お料理も学んでいるわ」

「あの…ハードル、上げてくれるなよ? 頼むから…」

花寺の母さんの足元にも及ばないし、旅館のガチ料理人とかと一緒にされた日には「平光に続いて沢泉が食いつくとは思わなかったよ。」

さらに花寺まで食いついて、こつぱずかしい生つちよろい料理論をしばらく説く羽目になった。

……聞き上手なこと。いいかげん話が進まないんで、ここはカツ飛ばす。

せいぜい土鍋でコメ炊いてるのが驚かれたくらいだな、特別なことといったら…

ねえんだよ、炊飯器。

沢泉から、いくつか簡単な調理の改善案を授かったところで打ち切って、

俺が思うところの本題に戻った。

「そんなわけで、だ。練習は必要だろうけどな…今後は、ビョーゲンズが現れたところに

一瞬でプリキュアが到着できるな。ただ」

「ニャトランは、ニャトラン自身を電気に変えて移動できない。

普通に考えると、スパークルだけがついてこれられないよね」

「えー、なんで……あッ!？」

ヤツパリ気づいてなかったな、お前。

そう。音石明がわざわざジョセフを殺しに来た理由を、ここに来てはつきり理解し

た。

物体、生物問わず電気にして、瞬間移動に等しい速度ではるか遠くに運んでしまえる能力なら、

ハーミット・パールで居場所がバレようが、次の瞬間には地平線の彼方に逃げられる。

この条件の音石明に追いつけるスタンドなど、おそらくこの世に存在しない。

DIOですら無理だろう。ハーミット・パール単体で追い詰めることは不可能だ。

本体も電気になって逃げられるっていうのなら、な。

実際にはそうじゃあなかった。実験してはつきりした。

おそらくはチリ・ペツパーの明確な弱点だ。

つまり。平光は電気になって移動できるが、本体であるニャトランだけは無理。

そしてキュアスパークルは、両者のいない場所では成立しない。そういうことだ。

「あたしだけ留守番？あたしだけダッシュでオツカケんの？」

「ビョーゲンズ出たら！めっちゃヒドッ」

「明日のうちに採石場あたりで実験すんのをススメとく。」

プリキュアに変身した状態で、チリ・ペツパーの電氣化が効くのかをな。

いいか、ヒーリング・ステッキからだぞ。

「お前自身から電氣化したら、最悪、途中で変身が解けて感電死だけ」  
「テンションが凍った平光は、サーツと青ざめた。」

「当たり前だ。ごく最近、臨死体験しちまつてるだろうが。」

「当事者だろうが、俺。」

「…いや。いや…悪い。取り消す。完全に取り消す。」

「ヒーリング・ステッキは本体のニャトランだ。」

「最悪、自分自身を丸コゲにする自殺になっちゃう。」

「実験するだけでもあまりにリスクが…」

「大丈夫よ。話を聞く限り、ひなたから電氣化すれば安全ね。」

「それなら、電氣化したひなたを取り残されたニャトランが制御できるもの」

「振り返って気付く。俺は、最初っからヘンなコトを言っていた。」

「沢泉の方が、完全に論理が正しい。」

「……。悪い。沢泉」

「気にしないで。実験には、みんなで行きましょう?」

「魁がいれば、感電で心臓が止まってもF・Fでマッサージできるペエ」

「付け足してきたペギタンに、俺ももうなずいた。」

「各個撃破を回避したいなら、実験そのものが必須なのは正しいしな。」

「明日はあなたが無理でしょうから、来週……って、来週は私が無理ね」

「あつ、大会だっけ。ちゅちゃん」

「ええ」

大会。俺にも、すぐにわかった。

去年は俺もいたんだからな。春の陸上大会だ。

すこ中のホープたる沢泉は、ハイジャンプの一選手として参加するわけだろう。

こうして言われるまで知らなかったし、知りようもなかったがな。

俺が陸上部に近づくことは、わざわざ断るまでもない禁忌だ。

彼女のハイジャンプが、目に入る距離まで近づいてはならない。

実際のところ、一度も見たことないんだが。

「ま……そーだな。武運を祈る」

「ベストを尽くすわ」

「あ、そだ」

気が付けば顔色を戻していた平光が、手のひらをポンと拳で叩いた。

「応援行こーよ、みんなぞ！」

タツキーも。席は離れててもイイからさあー」

俺の首がヤツに向いた。

沢泉も、花寺も。

ヒーリング・アニマルの皆も、ことごとく。

「……えっ、えっ? どつたの?」

戸惑う平光への返事で。

平光を除いた全員の声がハモツた。

「もしかして、知らなかった?」

ここで皆が思い出した。

平光が、例の事件について知りうる理由もキツカケもないことを。

せいぜいが噂話までであって、疑ったとしてもそこまでだということ。

もう、話さないわけにはいかないだろう。

一人だけ知らなければ、知らず知らず地雷を踏みぬきかねないのだから。

「最ツツツ低!!」

責任をもって事情を説明したところ、

ごくまっとうな軽蔑が飛んできた。

こればかりは、被害者の沢泉はもとより、花寺もダメだ。

説明を押し付けられれば、それ自体がセクハラものだ。

「……そういうことがあつたんで。

俺は、すこ中の陸上部には絶対に近づけない。

どのツラ下げて、つてヤツだ」

「ツタリ前でしょ？来んな!!」

同じ席に座つてられる状況じゃあなくなつた俺は、

追い立てられるままに立ち去つて、形兆の霊園を抜け、ヒーリングガーデンまで避難した。

花寺がこつそりメツセージをよこしてきた。

『説得中。合図を出したら戻つてきてね』

こうなつては仕方がない。草むらに寝転がつて、不思議な色の空を見上げる。

…当然の結果だな。花寺と沢泉は『承知』で迎えてくれていたが、あいつは違った。

かといつて、人間関係を放棄するつもりはないぞ。というか、できない。

割れた皿を接着剤でなおすみたいに、破片を丁寧にそろえるしかないだろうな…

しばらくは距離を離そう。向こうも、婦女暴行未遂犯に近づきたくないだろうし。



そんなことを考えていたら、花寺からの続報。

『ひなたちゃんを迎えに行きました。合流して戻ってきて』

ここでこうしているのは、花寺には丸わかりなのな。

ここはDEATH13の世界で、花寺はその本体なんだから当然だ。

それにしても、このパターンの多いこと…また平光だけアツチコツチすんのかヨ  
落ち着きないからなあー。考えるより先に動くのヤツだからなあー

これでこそ、つて気はしないでもない。

起き上がって、物音に注意しながら歩いていると、

そう時間もかからずに、ヤツは見つかつた。

こつちを見るなり、シヨゲかえつた顔をしてきた。

「……ごめん」

「謝る要素ねーけど?」

いかん。こういう言い方をしたら、こいつはもつと気にする。

すぐに言葉を付け足していく。

「お前の怒りは正しいよ。保証する。

婦女暴行未遂になんの遠慮があるんだよ」

「後悔。…してんだよね?」

「……………」  
足が、動かなくなつた直後、な。

クラスのヤツに言われたんだ。

お前を助けたいヤツなんか、この世に一人もいるもんか、つて…

納得したよ。俺が一番。『ああ、そうだよな』つて」

俺もたいがい、余計なことをしゃべっているな。

質問は、後悔してるか…それだけだろ。

なんだこれ。同情でも引きたいのか？

とてつもなくカツコ悪く思った俺が次に足した言葉を。

「少なくとも…その時点でクズだったことに変わりないからな。

いくらでも怒つていいし、憎んでもいい」

「ちゅちゅー、言つてたよ。

怒るのつて、本当にイヤだつて。憎むのつて、めっちゃ疲れるつて。

イヤな自分とイヤな気持ち、ジツと見てなきやいけなくなるつて」

キレイに打ち返された。平光に。

素直に言うつて、その発想はなかった。

怒るのも憎むのも、俺は『権利』だと思つてたからな。

まさか『負担』と言われるとはな。

それを償い、取り除く有効な手段は…たぶん、俺にできることだった。奇しくも、それはすでに取り組み始めていること。

「…：…なら、変わるだけ、か。」

俺は、二度とあの俺に戻らない…：

安いセリフだなあー。しかもくっせえ」

「ま、あたしもアンタに近づかないし。」

こっから先に近づいたら悲鳴上げるかんね！」

およそ2mか。憶えた。

ついてこい、と身振りで示す平光の後ろを歩きだす。

「俺もな、このままでいいとは思ってなくてよ…：

今の嫌われ者の状態をほっとくと、いつか敵スタンドに利用される日が来る。

はつきりいつて弱点なんだよ。こいつは変えるべきだ。F・Fにも言われたよ」

「ん？ イメージアアップしたいってこと？」

「まあ、そうなるな」

唇に指を当てて考え出した平光は、

それほど時間を空けずにウンウンと一人でうなずき、

自信ありげな笑みを浮かべた。

「ウツテツケのおシゴト、あるよ。」

「今はないケド」

「今は？お仕事？」

「たぶんタツキー向け。」

イメーリアップにはピツタリじゃん？

「ま、そんな時になつたら、つてコトで」

こいつに紹介されるお仕事つてのがわからん。

なんかの設営の手伝いとかか？人脈広いらしいからなコイツ…

花寺とか沢泉に、その辺は普段から聞かされてる。

「ま、今はないと言ってるんだ。気にするのはその時にするか。」

しかし、大会か…スタンド使いたとかビョーゲンドとか。

そろそろイイカゲンにしてほしいとこだが…今回は、どうかな？

なんかあると思つて備えておくか。

## 絶対にバレるな! イップスの後ろ側で—その2

「ペギタンにも聞いたけれど。もう大丈夫ね?」

「ああ。体内がまだ少し怪しいけどな。」

「フツーに生活するぶんには問題ないだろ」

「日曜日の夜、『夢』。私たちはいつものように」

「カフェ・ドウ・マゴに集まっているわ。」

「ひなたが、そろそろフインキ変えよーよ、って言ってるから、」

「来週あたりから他のどこかに変えるかもしれないのだけれど。」

「ゴハン中にお邪魔したのはゴメンだったペエ」

「あー、いい。いい。気にすんな」

「ごめんなさいね。もつと時間を選ぶべきだったわ」

「一人暮らしなら、どんなに具合が悪くても家事は自分でやらざるを得ないわ。」

「しかも半身不随なのよ? F・Fが一緒とは言っても、さすがに心配よ。」

「丸一日寝ていれば平気だと言っはいたけれど、」

「金曜夜からほぼ丸々徹夜したって本人から聞かされたら、ね。」

ましてや、って話だわ。

そんな風に気にしてたら、ペギタンが様子を見に行ってくれたのよ。それが六時過ぎだったのは、私としたことが…よね。

「あ……ゴハン中だったんだ、鳴滝くん」

「オムライス食べてたラビ」

「オムライス？」

「…オムライスだよ。別にどーでもいいだろ、そりゃ」

「そっか。そうだね」

口をへの字にしている鳴滝くんに、のどかはやわらかく微笑んだ。

「ラビリンも行ってたのね」

「のどかのお父さんも行ってるラビ、昼に」

「花寺から事前に連絡もらった。

ずっと寝てたのはなんとか隠し通したぞ」

「お父さんが帰ってきてから、ラビリンにも見に行ってもらったの」

「ありがたく思うラビ」

「…ありがたいこって」

「誠意が足りないラビ！…ま、いいラビ」

のどかとラビリン。私と…ほぼ同じやりとりがあったのかしら？

結構長いこと考えこんでたのよね、私。直接、私が見に行くべきか、って。相手の身になって考えてみる、とは言うけれど、

そんなこと、やりたくもないくらいにヒドイ怪我を負わされたんだもの。

結論から言うと、行けなかったのよね。

…今、こうしているぶんにはいいのよ。

私は、鳴滝くんの助けになるつもりではいるもの。

彼なりの事情と苦悩があったことも、結果として知ることになったし……

悪事を許す気はないけれど、善くありたいのなら手を貸せるわ。

その所、裏切られない限りは味方でいられると思うの。

正直、『かわいそう』よりも『許せない』の方がだいぶ大きいんだけどね。

だからこそ逆に心配なのよ。私たちが手を放したのなら、こいつはもうおしまいよ。

その意味で、私たちはこいつの人生を握ってる。はつきり言っただけだよ。重いわ。

私は、それを手放したいの。もちろん、『おしまい』以外の方法でね。

そのためにも、直接の被害を受けた私だからこそ出来ることがあるはず。

その思いにウソはないけど……どれだけ考え込んでも無理だったわ。

室内で、こいつと二人きりになるという状況が、よ。

想像した瞬間に、あの日の恐怖がよみがえるの。絶対に嫌。

そして、現実になった時点で崩れ去るでしょうね。今日までの頑張りが。

私の頑張りじゃあないわ。彼の頑張りよ。

善くあろうとする努力を、他ならぬ私が叩き壊すかもしれない。

そんな風に悩んでるうちに、ベギタンが私に言ってきたのよね。

『魁の様子、見に行ってもいいペエ?』って。カッコ悪いったらなかったわね…

ひなたのこと、軽はずみだとか不用心だとか思ってたけれど。

もしかしたら、私ができないことを無意識に押し付けていたのかも。

…まあ、ひなたの場合は命の恩人だしね。

私やのどかと違って、危害を加えられたり騙されたりとかしてないのよね、唯一。

ひなたから見れば、噂以外に嫌う理由はとくにないのよ…なかったんだけど。

「……」

サツ

「……ムツ……」

チラツとひなたを見た鳴滝くんがサツと椅子を引き、ひなたはムツとしてるけど何も

言わない。

…ええ。ドーユーやり取りがあつたんだか、よくわかるわよ、コレだけで!



ひなた。あなた、この距離から先に近づくな、みたいなこと言ったでしょう?

それを律儀に守られちゃってるのね。こんな喫茶店の4人席でまで!

何なの、この融通のきかない男は……いえ、むしろマシね。

そういう目的じゃあない動きなら、それ以上は望まないわよ。私は。

……ともかく。あの恐怖を改めて思い出したからには。

のどかにせよ、ひなたにせよ。一対一にはさせないように動くわよ、これからは!

これはきつと、鳴滝くんのためにもなるはずだわ。

「ありがたついでだけだな。ちつと、相談したい……いいか?」

「なんか切り出そうとしてたよね。いいよ」

あら、珍しいわね……向こうから頼ってきたわ。

というか、初めてよね。どういう心境の変化かしら?

と、言いたいところだけど。素直に受け取って平気そうね。

以前、本人が言ってたじゃない。

これからは問題を抱えたらまず相談する、つて。

「アツ、もしかして。」

昨日、ひなたに相談したって話かよ?」

「そうだよ」

「あたし手伝わって言ったじゃん」

「…すまん。俺なりに用意してきたこともあってな。」

実行に移す前に相談したいんだよ」

ニヤトランの横でブータレた顔をしてるひなた。

さっきの延長で気分悪くしてるだけっぽいわね。

鳴滝くんは、少しひるんだ様子を見せたけど…いたって普通に應對してる。

「平光には昨日言ったが…学校その他で俺のイメージが悪すぎるのはまずい。

いつ、そこを敵スタンドに攻撃されるかわかったもんじゃあないからな。

少なくとも、無害な隣人、くらいにはなっておきたい」

ホントに意外ね。でも、言ってることは正しいわ。

以前、話題に出たみたいな、人を操る系統のスタンドが敵に現れたなら…

そこに、普段から嫌われ者の彼がいたなら…下手をしたら、集団リンチに持ち込まれるわよ。

私たちですら味方できない状況になりかねないわ。恐れているのは、それなのね？

私自身……もし、私がプリキュアじゃあなくって、彼の事情を知るよしもなかったなら。

『正義感』でそれに加担する未来もあったかもしれない。冗談じゃあないわッ。

「わかったわ。私はどうすればいいかしら?」

「いや、動くのは俺な。俺がやろうとしてることがおかしくないか、事前に聞きたい」  
先をうながしてみると、だいぶ前から行動には移してたらしいことがわかる。

そして、F・Fの差し金があったことも。

「ま、最初に相談されたのは、あたしなんだけどね。

周りの目を変えたいっていうのは、要するに、他人を変えたいっていうことよ。

他人は無理やり変えられない……反発くらうだけ。

『他人を変えなければ自分を变える』、回りまわって近道よ。経験上」

F・Fは続ける。そのために、あえて自分の『逆』をやる、つて。

コーヒー党なら紅茶を飲むようにしてみる。

慎重に動くべきと思うなら大胆に行動してみる。

チリ・ペッパーの時、いやに活発に動き回った理由はそれ?

そういうえば、先週あたりからいきなり紅茶になつてたわね、コーヒーから!

「身の回りで出来そうなのは、そろそろ打ち止めになつてきた:

ここからは、他人への行動を変えようと思うんだ」

「どうする気?」

……相談してくれてよかったわ。心底、そう思う。

『逆』を考えた結果、彼は愚直に今までの『逆』に行き着いた。

つまり、周りの人間に話しかけまくっては、積極的に行き着くことをするっていう。

「不審に思われるに決まってるじゃない、そんなの！」

「やっぱりか」

おそろしい非行の前科がある人間が、接点もないのにいきなり親しく話しかけてきて、

いろんなことを手伝ってくれる……恐怖しかないわね。何を企んでるのよ？

「鳴滝くん。わたしも賛成できない」

「花寺も、か」

真面目な目つきになって、のどかが言うには。

鳴滝くんが回りの誰からも話しかけられない孤立状態にあるのには、

『嫌われている』に加えて、『怖がられている』のがあるからこそで。

今、鳴滝くんが言ったようなことを実行に移したとしたなら、

おそろしく『怖がられている』が消えることになる。

なるほどね。迎合するって態度なら、そうなるわね。

結果、『嫌われている』だけが残ったのならどうなるか。

「……わかったペエ。

のどかは、魁がイジメられるって言ってるペエ?」

「もし、そうなら…挽回が、今よりも難しくなるよ。」

ひなたちゃんの友達グループに守ってもらうくらいしか方法なくなっちゃう」

「…ウーン、ムズイ。チョイ前にみなちーとりなちーに聞いてみたんだケド!

めっちゃ警戒されてるよ、タツキー。あたしの他の友達にもさあー」

議案は全会一致で否決。

ツマンナそーな顔してるけど、受け入れるつもりみたいね。鳴滝くん。

結構、感情が表に出るわよね、あなた。

ま、いいわ。変な意地を張ったりはしなさそうだしね。

のどかの笑顔がそこに続いて、残った意地も溶けたみたい。

「ムズカシイこと考えなくていいと思うな。」

普通のことを普通に、だけど、ガンバツてやろう?」

鳴滝くん、掃除とかはちゃんとやる人だよね?」

「まあ。それなりにいな」

「なら、『逆』をやる必要なんかないよ。」

見てる人は見てると思う。

焦らずに、ひとつずつを大切にしていこう?」

「……。そーだな」

「ま、あんたも日々変わっている……」

そいつを見極めてからでも、遅くはないかもね」

締めに入ったF・Fに、ラテが同意してアンと鳴いた。

話自体はこれでオシマイだったけど、私としても考えさせられるわね。

『変わる』のは賛成だけど、思うに問題は『知らない』ことよ。

現に私も、『知らないまま』なら敵視したままだったでしょうしね。

そこを本人がどうにかしようとするのは逆効果だわ。

いざその時に、彼を敵視する人間が一人でも増えないようにしたいのなら……

(私は、唯一の被害者よね)

陸上部のみんなへの根回し。考えてみましようか。

かなり危険よ。やり方がまずいと、最悪私自身に火がつきかねない。

慎重に動かないとね……

翌日。放課後。

密度の濃い金土日だったせいも、陸上の練習がいやに久しぶりな気がするわね。

これも…というか、これこそが私の本分よ。誰にも邪魔させないわよ。

準備運動を終えて、さっそくバーを設置する。

もちろん、高さはマイベストよ。大会で勝つには、少なくともこの一段上が飛べないとね。

周りを見る。いつもの風景……

同じ陸上部の先輩、同級生に、後輩の視線をいくらか感じるわ。

期待には応えないとね。それだけのことを、私はやってきているつもりだわ。

(……………?)

フェンスの向こうあたりに、カメラを持った不審な影が。

波がかつた髪に、メガネ……ああ、彼。名前知らないケド。

あんまり気分はよくないけど、盗撮の類じゃあないことは知ってるわ。

先輩がたに囲まれてトッチメられた拳句にカメラを没収されて。

中身を確認したところ、マジメに写真撮ってたっていう彼ね。

実際に学内新聞も出してららしいから、あんまり強くも出られない。

誹謗中傷だったらトツチメる理由もあるけれどね……  
ま、いいわ。カッコイイところ見せてあげるわよ。

周りを意識から追いついた瞬間から、そこは私だけの世界。

助走をつけた私は、地を蹴って、勢いよく空へと舞い上がる。

重力を超えるこの一瞬は、私の宝物ね。

でも、なにか違和感があった。空中にいる私への『違和感』…

ガタ… バシン！ …バフツ

「……………えっ？」

マットに到着した私は、落ちていてはならないバーを目撃していた。

どよめきが聞こえる。いけないわね。飛べたものが失敗するなんて。

「ドンマイ」

「気を取り直していくわ」

友達がバーを再セットしてくれた。

そこにまた、私は飛ぶ。空に……

飛んだ空で、私は何を見ていたの？

空にいた私がわからない。

私はまた、落ちたバーを見ていた。



## 絶対にバレるな! イップスの後ろ側で—その3

ちゅちゃんの様子がおかしい。

『夢』でそう思ったから、こっさり様子を見に来てみた。

だって、ひなたちゃんが大会のこと話題に出したらね。

頑張るわね、ってニツコリ笑ってくれはしたけど…

話を、にこやかに打ち切りにかかったように見えたの。

ちよつとの違和感だよ。確信があつたわけじゃあない。

だから、遠くからそつと見てたんだけど。

…どよめきだらけだよ。

ちゅちゃん、一度も成功してない。

近くの友達に、ハードルを下げよう、って何度か言われてるみたいだけど…

首を振って返して、また飛んで、またバーが地面に落ちてる。

これで何回目? 別に数えたりはしてないよ…でも。

「ちゅちゅー、めっちゃ調子悪い」

「ふわッ!」

いつの間にか真後ろにひなたちゃんがいたよ!?  
確信もないことで大事になるのイヤだったから、  
ひとりでもコッソリ見に来てたのになあ。  
考えることは一緒ってこと?…そうなのかも。

「ひなたちゃん?」

「やー、なんかウワサ聞いちゃってさ。」

ちゅちー、スリッパしてるって」

「ス、スリッパ?」

「あ、え? 違った?」

ストップ…は、違うし!

ステップ…:アレ?…:スクープ、スリッパ」

な、鳴滝くん!

…は、いるはずないよ。

ちゅちちゃん!

…は、アッチ!

わたしがツッコむしかない。

「えっと、スランプかな?」

「……………」

「そ、そー、そー! ソレ!

さっすがのどかつち、国語のセンサー!」

ホメられてもなあー。

置いとこう。お話進まなくなっちゃうし。

こういう時間も大好きだけど、今これをやるにはちよつと深刻だもん。

「ウワサになつてるんだ。どういうウワサ?」

「飛ぶの、イキナリうまくいかなくなっちゃった、つて。

何度飛んでもうまくいってないって、みなちーから」

みなちちゃんかあ。

ひなたちゃん経由で、わたしとちゅちちゃんともお友達になれてるけど。

『ひなたちゃん周りの人』で、『ちゅちちゃん周りの人』…

陸上部の人脈とは、ほぼまったく関係ない人なんだよね。

そんなみなちちゃんが、そんなウワサを知っているってことは。

「かなり大きなウワサになっちゃってるんだ…」

「えっ? ……あ、そっか。

めつつちやイヤじゃん。失敗ばっかうワサされるとか」

「すこ中のホープ、だっけ。

ちよつとした有名人なんだよね、ちゅちちゃん。

うまくいかなかったら、みんな心配するのかも」

もともと有名なら、そんなにおかしな話じゃあないよね。

って言っても、ひなたちゃんの言う通りで。

イヤな気分にはかならないよ、そんなの。

これは……ちよつと、様子見なくちゃあいけないかなあ。

「カッコ悪いところ見られちゃったわね」

その日の『夢』で、ちゅちちゃんの方から切り出されるとは思わなかった。

「気づいてたの？」

「声が聞こえたわよ。ちよつとだけどね」

「その、ごめん」

「なんで謝るのよ。応援、うれしいわ。」

次からはもっと堂々来ていいのよ」

こう言われたら、そうするしかないかなあ。

しつかり応援して、ヘンなウワサなんか気にならなくすればいい。

でも、ウワサが耳に入らないに越したことはないから……

って、思ってたなら、ひなたちゃんが切り込んだ。

わたしにできないこと、アツサリやつてのけるんだよ、ひなたちゃん!

「ちゅちゅー、もしかして……さあ。」

あたしを助けてくれたのが原因?」

「ひなた?」

「ホラ、チリ・ペツパーの時!」

あん時が初めてじゃん。

ハイジャンプに大失敗したの!

あたしが知ってる限り……だけどさ」

「どういふこと?」

ちゅちゃんはわかったような顔をしたけど、わたしはわからない。

鳴滝くんもわからないみたい……だから、聞いてみる。

わたしと鳴滝くんが知りようがないタイミングで起こった何か、ってこと?

「チリ・ペツパーがザ・ワールドを使ったの！」

あたしを助けようとしてジャンプしたちゅちーが、

一瞬後には地面にコケてたんだよ？」

「……何、言ってるんだ？」

ザ・ワールド？ 時間止めたって？ チリ・ペツパーが？」

「確かだぜツ、ひなたが言ってるのはよおおーっツ」

なんでそうなる？ って顔に書いてある鳴滝くんの正面に、

ニヤトランが飛び込んでまくし立てた。

「チリ・ペツパーはあの時、オレたちを電線に引きずり込もうとしやがってた！

ちゅはそれを止めよーと攻撃したんだよ。ヒーリング・ストリームでなツ」

「…：そうよ。確かよ」

ちゅちゃんも、ニヤトランに続けて鳴滝くんを見た。

「私に言えることは…：ヒーリング・ストリームを撃ち込もうとした瞬間ツ！

私は地面に転がってた…：ってことだけよ。

何が起きたのか、さっぱりわからなかったわ」

「で…：でも！ 言われてみれば、言う通りだペエ！

空から地面まで、間の時間がスッ飛んでたペエ！

スゴイ速さで攻撃されたっていうより、時間を止められたって方が納得だペエ!」  
「ちよつと、整理させて」

わたしが割り込む。

みんなの前に黒板を出して、チョークで書き出していく。

『前』と、『後』を。『瞬間』で区切る。

「ひなたちゃんから見たら……電線に引きずり込もうとした

チリ・ペツパーが次の瞬間には消えてた。で、いいの?」

「うん」

「で、ちゆちゃんから見たら……」

ひなたちゃんを電線に引きずり込もうとしたチリ・ペツパーを

空から攻撃しようとしたら、次の瞬間には地面に落つこちてた:

変身も、いつの間にか解けてた……で、いい?」

「間違いないわ」

「……ひなたちゃんを掴んでたチリ・ペツパーは。

次の瞬間には、ちゆちゃんから少し離れた場所にいた。

投げつけられたらしい電線が、ちゆちゃんとの間にあつた」

なるほどだね。並べてみるとわかるよ。

ひなたちゃんが、今わたしが考えた通りを言ってきた。

「どー考えても、時間止められてるっしょ？」

チリ・ペツパーだけが動いてるっしょ？

電線もさあーっつ、DIOが投げたナイフとおんなじだよー！」

「言いたいことはわかった。

平光と、沢泉に見えなかった『瞬間』、チリ・ペツパーだけが攻撃してたんだな？

そうとしか思えない状況があるんだな？」

「うん。タツキーは気絶してたんだっけ。のどかつちも」

「事実はそのとして、だー！」

鳴滝くんも、あまり納得してない顔だけど…

事実として受け取ることにしたみたい。

そこへ、F・Fが少し大きな声を出した。

みんな、見る。わたしも。

「なんで、ひなたはトドメを刺されなかった？つてのが、素朴な疑問。

時間を止めてるつてのにあえて放置して、ちゆの方に向かったつてというのが

どうにもチグハグだが…そこはまあ、『入門したて』で説明がつく。

でも、あたしにはそれ以前の疑問があるぜ」



「『入門できた』…『原理』は、何なの？」

引き継ぐみたいに言ったちゆちゃんに、F・Fはうなずいた。

鳴滝くんがチカラいっぱいうなずいてる。

言いたいことはわかった、だっけ。納得はできてないってこと。

……うん、わたしも。

ひなたちゃんが、わたしたちを見てオロオロしてる。

「げ、原理？」

「スタープラチナは…光の速さを超えることで時間を止めているわ。

ザ・ワールドも、たぶんそうなんでしょうね……」

「…わ、わかるし！」

だからあたし、チリ・ペッパー早く倒さなきゃって思ったんだし！

使いこなされちゃったらヤバイ、って」

「平光」

ちよつと遠慮がちに、鳴滝くんがひなたちゃんの言葉をさえぎった。

「『電気は光の速度を超えられるか？』

問題はそこなんだけだよ……お前、わかるか？」

「ウグツ……」

…わかるわけないよ。

わたしもわかんないし、ちゅちゃんにもわからないよ。

F・Fまで首フツちやつてる。

『違うよ』じゃあなくつて、『わかんない』つて意味で！

「俺にもわからん。だから調べる。」

本をながめてる時間なら、いくらでもあるからな俺には」

「えと、丸投げしちやつてイイ？」

「適材適所だ。効率よくやろうぜ」

「テキ……？」

「モチはモチ……あー、まかせろつてわけだ！

お前はお前でなんかやつてる！

沢泉がうまくいってなくて、お前はそいつをなんとかしたいんだろ？

話はそーいうことだよな？」

「……んーじゃ、頼んだー！」

昨日のことで、ちよつと心配してたけど……これなら問題ないかな。

鳴滝くんは、ひなたちゃんを助けたから、ここに居場所が出来た経緯がある。

そのひなたちゃんに嫌がられたら、

また一人で抱えてヘンなコト起こしかねないんだよね。

今だって、なんか距離遠いし。近づかないで、みたいなコト言われたんだね？  
几帳面っていうか意地っ張りさん。

「ありがとう、ひなた。鳴滝くんも」

ちゅちゃんがクスツと笑った。

時間停止の話よりも、ちゅちゃんの不調の話が先だったよね。

「でもね、うまくいかない原因を自分の外に求めちゃあいけないの。」

それは、アスリートとしての敗北よ」

「別に…お前だけの問題じゃあねえーだろ。沢泉。」

仮に平光の言う通りだったら、

ニヤトランが『世界』に入門できるってことになるんだぜ」

「…そうね。じゃ、私からも頼むわね。」

私は、私との戦いに専念するわ。

私のライバルは、私よ」

「つてコトだから！」

あたし、ちゆちーの応援に使うハタ作るよ！」

「ハタ？」

翌日の放課後、ひなたちゃんちに呼ばれるまんまついていったら。

横長のおつきい布が、ひなたちゃん部屋の部屋に置いてあった。

「もしかして、横断幕のこと？」

「あ、ソレソレ！」

ウワサ止めるなんてムリだしさあー。

そんなのフツ飛ばすくらい応援しよーじゃん！」

「…うんツ、賛成！」

正攻法。それしかないよね。

さつそく足りない材料を買い出しに行つて、作り始める。

…あ、そろそろ、わたしのおサイフもアブナイ。

お小遣いまでもうチョット。ガンバろ。

「よっしや、作るぞー！」

「まず、チャコペーパーで下書きしていこう？」

「デザイン、もう決まってる?」

「モチー!」

「ラビリンもお手伝いするラビ!

…でも、何すればいいラビ?」

「んー、アイロンがけとか?」

「それはちよつと怖いよ。他に何か…」

「オレは外回つてくんぜ。んじゃ、後でなー」

ラビリンも張り切ってくれた。

ラテも連れてきてるから、そつちのお世話が優先だけどね。

ニヤトランは外回りだよ。ちよつと前から話してた、ウワサ集めね。

スタンド使いに奇襲されたら、場合によっては全滅しかねないから。

常にアンテナは張っておかないと、ね。

「書く文字は、『空へ!』『限界突破!』…黄色が外で、オレンジが内側」

「ウン、書いてこ書いてこ」

「……………アツ、待って。誤字」

「え?」

「『さんずい』じゃあないの。『いしへん』だよ」

プリキュアだとか、スタンド使いだとか。

そういうのに巻き込まれてないわたしだったら、これも気づいてなかったかも。

そんな風に思わず苦笑しながら、ひなたちゃんとラビリンと、楽しく作業するわたし。うん、生きてるって感じ！もつと伸び伸びしたいなあ

今日の作業は終わりがなつてとところで、ひなたちゃんがおずおずと提案してきた。

「あ…その、さ」

「どうしたラビ？」

「文字のワキにさ、ちよつと残ってる布でさ。星マークつけようよ」

「彩り増やす感じ？いいかも」

「…でさ。一個くらいさ。やってもらおうよ。タツキーに」

後になるほど、言いくそうになるひなたちゃん。

……微妙だね。

「いい…と、思うな。わたしは。」

でも、鳴滝くんが引き受けてくれるかは…ちよつと」

「そ、そつか…ま、頼んでみよつと」

「頼んでみるよ、わたしから。」

一個、星を作ってもらつてね。わたしたちで縫い付けよう？」

ひなたちゃんは、今のままわたしたちだけで作ったら露骨な仲間外れになる、って思ってるみたい。

でもまた一方で、ちゅちゃんにあった出来事がそんな簡単じゃあないこともわかって。

：わたしから行った方がいいね。

ひなたちゃんから話を持っていったら、こじれるかも。  
たぶん、鳴滝くん：断るから。

「できない相談だな」

やっぱりというかなんというか、断られた。

その日の『夢』で、一番最初に鳴滝くんを呼んだ。

呼んで説明したよ。ひなたちゃんのお願ひ。

「そこは越えちゃあならない恥の『線』だ」

「恥の『線』？」

「きたならしいクズ野郎のクズ行動で、永久に出禁ってことだよ。

沢泉は『清算できない』と言った。ならそれが全てで、ケジメがいる……

俺は、アスリートとしての沢泉ちゆの前には足跡ひとつ見せるべきじゃあない。

せいぜい『夢』までだ。それが限度だろ」

無理だね。説得できない。

わたし自身、半分正しいと思うもん。

ううん、やったことを考えると、これだって『ぬるい』のかも。

「ひなたちゃんは……あなたを、仲間外れにしたくないって思ってるよ?」

「……俺は、ケジメをつけないことが裏切りだと思おう」

まあ、十分かな?

仲間にいるために、ケジメをつけるってことだから。

これだったら、ひなたちゃんも納得してくれれると思う。

「わかった。わたし、鳴滝くんを尊重する」

「悪いな……」

「いつか、終わりが来るといいね」

「無理だろ」

二人で無言になっちゃう。



これで終わりかな。いったん、鳴滝くんを返してからみんなを呼ぼう。そう思って、(気分だけだけど) 指パッチンしようとしたら。

『『汚い』のなら』

「えっ?」

『『汚い』のなら、『きれい』にしよう、って…言ったよな。花寺』

「…うん。言ったよ」

「悪あがきは……してみる。結果はわからない、けど」

?……そうしようと、してるんだよね。今。

みんなのイメージを良くしようって話、最近してるけど…それだよな?

「うん。がんばろうね」

ホントにがんばってほしいから。

笑顔を返して、わたしはいつもの『夢』にした。

## 絶対にはれるな！ イツプスの後ろ側で―その4

普通に考えて、俺ほどの悪評を払拭しきることはできるのか？

金、暴力、セックス。ひとつだけでも忌避するに足る悪事のすべてを犯してきたのがこの俺だ。

このうち全部とまではいかないが、かなりの部分が事実としてすこ中に知れ渡っているこの状態から、どう持ち直す？

まあ、『あきらめろ！』だよな、普通なら。俺だつてそう思う。

そこをどうにかするために自分を変えろというのなら、

大きく変えなきゃ、周りも大きく変わらない。力学的にも当然だ。

トチ狂ったくらいのことをやらなきゃあ効果は望めないから、

みんなに相談してから実行に移そうとも思つた。

……知つての通り、止められたけどな。

なるほどな。恐怖がなくなりやナメられる。もつともだ。

だから、時間をかけてでも軟着陸しろ。

花寺の言を、俺はそう受け取つたし、納得もした。

沢泉の言う通りで、不審に思われるに決まってる、つてのも道理だからな。

ま、水ササレたみたいない気分にはなっただけどよ……基本的には従うつもり。

『『汚い』のなら、『きれい』にしよう、つて……言っただよな。花寺』

「……うん。言っただよ」

「悪あがきは……してみる。結果はわからない、けど」

だが、俺は。

今、変えられないがゆえに!

『汚い』から『きれい』を守らざるをえなくなった。

そのためには。

「助けを求めた方がいいんじゃないの?」

まだボヤで済んでるうちに」

「考えなくもなかったけどな。」

花寺は転校したてだ。その意味で、大して俺と変わらない。

耳に入れたところで……バレるリスク以上のものは得られないぜ」

「そして、ひなたは問題外。」

ある意味、このテの問題には一番強そうだけど……つてとこね」

「沢泉を前に、バレずに立ち回れるヤツじゃあない。」

だがよF・F。平光はアテにならなくとも、その財産はアテになるだろ」

「財産……『恩を返させる』のか？」

「俺が持つ取引材料は、あれだけだ」

付け焼刃でも、『きれい』のマネをするしかないんだよ。

話は、昨日の昼までさかのぼる。

沢泉がスランプに陥ってることだけ知らされて、

俺に出来ることといたら『電気は光の速度を超えられるか』の調査だけ。

昼休みを使って、図書室に電気関係の本をあさりに行つて、その最中。

ヘンなヤツがつけてきているのに、今回はF・Fが気づいた。

「ヘイ」

「……ヤツか」

「殺気はない。敵意はある」

「当たってみる」

本の隙間からこつちを覗いていたヤツに向かつて、まっすぐに突き進む。

この足じやあ、死角に回るなんぞできるはずもないからな。

逃げるかとも思ったが、踏みとどまったヤツは、眼鏡の奥から俺をジツとにらんだ。

ジョニー・デップくずれだ。クラスメートの、メーワクがられてる知りたがり。

「何か、用か?」

「……。予定、変更しましょう。」

追跡調査ではなく、インタビューさせてもらいますよッ」

「意気込んでるトコ悪いんだけど、誰だっけお前」

ガクンと肩を落としたヤツは、それでもすぐ気を取り直して肩を張った。

「益子道男ますこみちおですッ!

「すこ中ジャーナル編集長ッ! 兼、記者ッ!」

「ご丁寧にも、どうも。」

「で…そのマスコミが何の用だ? 俺が何か面白いのか?」

「それです。あなたはよくわからないことをしている……」

少し前には工作とか機械の本ばかりを借りて、今日は雷、そして電気。

何をしているんですか? 何を考えている……」

おい。何サラツとプライバシー侵害してんだ。」

貸出履歴を覗かれたのは確定だぞ。

「答えてやる。『俺の勝手』だ。満足したか？」

「ま…満足するわけないでしょう？他にもあるんです！」

机にバンとメモ帳を叩きつけるヤツ。図書室で騒ぐなよ。

だが、メモ帳に書いてある文言に視線を走らせると。

あんまし、笑いごとじゃあすまねえな。これ。

「始業式放課後、公園の噴水破壊事件、下水噴出騒ぎ、ゆめポート……

化け物騒ぎの現場で、ひんばんにあなたが目撃されているッ

もはや、偶然で済ませられないのでは？」

「だから何だ？俺が化け物を呼んで、町を壊して回っているとも？

バカも休み休み言うんだな…お前自身、無理があると思ってるだろ」

「グツ…：動機には！人間性には無理がないと思っっていますよ」

「だとしたらいい度胸だな。ひねり潰されたいのか？」

お前は今、殺されに来ているってことだぞ」

ヤツは顔をこわばらせて言葉に詰まった。

いや、ここまでして俺なんかの行動を追ってきたコイツの苦勞と奮闘には

まったたく頭が下がる思いなんだが。

ガチにストーキングされる日が来るとか思わなかった。

いろいろ通り越して感心すら覚えるんだが……とにかく!

非科学的な非現実として片づけてもらおう。さもなければいつか死ぬぞコイツ。

「当然、俺にそんな不思議パワーはないな。」

そんなものがあれば、俺はすこ中に転校していないし、

この足も……ほら、もちつと役に立つはずだよな。

がんばって調べたんならわかるだろ。マスコミさんよ」

納得するはずだ。俺の経緯と、クソみたいな人格面とを知っているってんならな。

メガビョーゲンを自在に操る能力を、『ぼく』が持つていたなら。

刺してきたあいつは、その場でペシヤンコだな……泥と血の塊。

いや、そのはるか以前に。大兄さまはともかく、小兄さまをブツ殺したかな?

そんなことはしないな。きつと、いたぶって屈服させようとしたはずだぜ。

そんなことを無軌道に繰り返した拳句に、人間社会で暮らせなくなる末路だろうな……

どうでもいい思考実験だが。この半分程度は、簡単に想像つくだろうよ。

「わかりました。そこは納得するしかないようです。」

しかし、これだけは……これは、どうなんですかツ?」

「なんだよ、今度は」

内心、胸をなでおろしていた俺はぞんざいに聞き返した。  
どうしようもない、真の脅威がそこにあるとも知らず。

「すこ中のホープ、沢泉ちゆさんが、急に！」

今まで飛べていたハイジャンプを失敗ばかりするようになった！

原因は…鳴滝魁に、なにかされたからだと！」

血の流れが止まった瞬間を認識した。

そして、次の瞬間には血管が凍てつくように萎縮していくのを感じた。

俺には、ヤツが何を言っているのか…この時は、いまひとつわからなかったが。

取返しのつかない何かが起こっていることだけは、直感的にわかったんだ。

「……。なんだって？」

「答えてください。あなたは…沢泉ちゆさんに。」

下劣な行為を働いたんですか？」

ここで何を言わんとしているのか、理解した。

理解したが、引き換えに思考がちよつとの間、停止した。

その間にも、ヤツは…騒ぎはせず…静かに、まくしたてる。

「もし、それが……事実だつていうのなら。」

…ボクは、ジャーナリスト以前の問題として……



あんたをどうにかしなくちゃあいけないッ」

「……………どこで、そんな話を」

「質問に質問で返してるんじゃないぞッ！」

ボクの町を、けがらわしい行為で汚すっていうのなら！

キズつけるっていうのなら！ボクはおまえを許さないからな！」

目前でヒートアップしていくコイツは、

俺の足元が崩れ去っていかうとする音そのものようだった。

……棒立ちしてるんじゃないぞ、俺！

こいつは、ほぼ決めつけてきてはいるが！

それでも、断定できるだけの材料を集められていないし、

自分で納得できるころまで考えを詰められてない！

こうやって目の前に姿を現してること自体、その証明だろうがッ

今が最後のチャンスだと思え。次はないと。

「答える。答えるが、こいつはヤバイ話だつてのは理解してるな？」

他ならぬ、沢泉をフツ飛ばしちまいかねない『爆弾』だぞ」

視線は敵意のまま、ヤツはうなずいた。

その辺がわかっている動きはしていた。

最低限の信用は、できると見た。

「……『未遂』だ。」

俺が下劣な行為を働こうとしたのは、県中学総体の時だ。一年近く前だぞ？  
しかも、体に触れるよりもはるか前に逃げられてる。

目撃者は、当時大会に出ていたすこ中陸上部のうち何人かと、その顧問だ「  
なんで、あなたは捕まっていなくていいんですか？」

「当時の俺は実家の権力を乱用できた。」

権力を乱用してんのは実家も同じでな。『もみ消し』だ……」

「そんなに前で目撃者が複数なのに、どうして事件が知れ渡ってないんだ？」

「沢泉がフツ飛んじまう『爆弾』だからだよ。おそらく緘口令がしかれてる」

メモ帳の上に平手を置いたまま、ペンを取ろうともせず。

テーブル上の低い位置に視線を這わせながら、

咀嚼するかのようには首を動かしていたヤツは、

やがて、フウ……と小さくも深い息をついた。

「……時系列が合わない。あなたはそう言ってますね？」

そもそも、彼女にダメージを与えた事実がない、と」

「お前の解釈で正しい」

「どのみちシヨツキングな事件があったことに変わりありませんけどねえ。

沢泉さんは、あなたをもう許してるんですか?」

「許してない」

「ウーン……理解に苦しみます。どうして平然と話ができるのか」

おっしやる通りで。

スタンド使いだとかプリキュアのつながりがなかったら、

まともにも口を聞く理由なんざ一個もなかっただろうよ。

視線をいくらかやわらげたヤツは、メモ帳の1ページを破り取ってバラバラに千切り、複数のゴミ箱に分けて捨てた。

「このネタは使えませぬね。廃棄です。」

ここで出た沢泉さんの話は今後絶対に表に出しませんよ。

すこ中ジャーナルの名にかけて」

「そうしてくれ」

「カン違いしないでください。あなたのためになんか配慮しませんよ!」

今回こそ聞かなかったフリをしますけど……

あなたの背中には、いつでも敏腕ジャーナリストの目が光ってること。

お忘れなきよーに!」

立ち去っていくヤツの背中を見送って終わりか。そんなことはない。

ここは確かに乗り切ったが、目前の破滅を回避しただけだ。

ヤバイ事態は始まったばかりで、収拾できなければどうなるか。

当然、俺は呼び止めざるをえないわけだな。

「ウワサの出どころを教えろ。」

「このままじゃあ、沢泉がフツ飛ぶ」

「知ってどうするんですか？」

「…ま、いいでしょう。わかったら教えてください。」

事実無根の噂となると、裏に悪意を感じますからね！

『ウソ、大ゲサ、まぎらわしい』はすこ中ジャーナルの敵です！

……頼むぞ。

お前が俺を見ているってんなら、俺もお前を見ていよう。

裏切ったら、殺す。

しかし……なんてこつたよ。

ついに恐れていたことが起こっちゃったか。

それも、最悪に近い形だ。

ぶっちゃけ、俺はいいんだよ。ふさわしい罰といえばそうなんだから。

だけど、沢泉はない。しかも、よりにもよってハイジャンプかよ。

最悪、不祥事の当事者にされちまうわけだな。

有名人の名声が地に落ちて、ある意味、第二の俺と化す。

俺はいいんだよ。俺の短距離走を穢して台無しにしたのは俺自身なんだから。聖なるもの、輝くもの、キラキラしたものを穢し尽くしてきたのは俺なんだ。

沢泉はちがう。

…クソが。

すでに、待ったもありやあしない。

ウワサを消さなければ。どんな手を使ってでもだ。

そして、絶対にバレてはならない。

こんな醜聞、沢泉の耳に入るだけで大ダメージだぞ。スランプの真つ最中によ…

医学書を調べてきたらしいペギタンに、

ちゆはイップスかもしれないペエ、と泣きつかれたのはその夜のことだった。

失敗がくせづいて、いつまでもうまくやれなくなる病気、か。

このままじゃあ、本当にそうなりかねない。やるしかねえぞ。

「……で、何の用？」

『夢』でF・Fに話していた手段は、これだ。

温和とボーイツシュの二人を呼びつけて、

人目につかないところで話している。

いいかげん名前を覚えるか。りなに、みな…だったな。

向こうからすれば、俺にファーストネームを呼ばれる筋合いもないけどな。

時間はかけられん。

時間をかければ、今度はこいつらが沢泉と同じ目に遭いかねないからな。

「頼みがある。聞いてくれるなら……」

この前の怪物騒ぎ…気絶したお前らを外に避難させた恩な。

あれをチャラにする」

「…恩に着せようってわけ？」

ま、いい。言ってみてよ」

ボーイツシュ…みなが、目に警戒の色を浮かべてきたが、

話を聞いてくれるつもりはあるようだ。まずは良しつてとこか。  
「ウワサの火消しを頼みたい」

ここから先は説明自体がセクハラだが、しないと進まないの  
回りくどくならず、しかも度が過ぎた下品にならないように  
慎重に言葉を選びながら話していった。

あー、されてるよ不快な顔。当たり前だ。

だが、彼女らの物分かりは、意外なまでに良かった。

平光を通じて、沢泉を直接知っているのがデカかったようだ。

「くだらない下品なデマってことね。それを止めろと」

「そんな話がホントなら、沢泉さん、とつくに警察呼んでるでしょ？」

「そこまでされて黙ってる子じゃあないと思う」

「こんな話を聞かせて本当にすまんが。」

社会的に死んでる俺にはどうしようもないんだよ。

弁明も沈黙も、今の俺にはマイナスにしかならん……頼む」

頭を下げる。

花寺の親父さんに言われたことは忘れちゃあないが。

一人前の男だからこそ、下げる頭に価値がある、か。

そんなこと言っても、下げられる頭の持ち合わせがこれしかねーんだよ。

実際、目の前の二人がそこに価値を見出しているのかはかなり怪しいところだったが。

「わかった。引き受けてもいいよ。」

それと、恩はチャラにしなくてもいいから」

わずかに考えるそぶりを見せた彼女らは、

大して悩むでもなく、あっさりとそう答えてきた。

「沢泉さんは、ひなたちゃんの友達だから当然、私達の友達だよ」

「友達助けんのに恩着せてたら、女が廃るでしょ…そんだけ」

「…。いいんだな？」

信念の問題か。

念押しにもノータイムでうなずかれて、

そのまま質問が返ってくる。

「あなたの言うウワサが聞こえてこなければ何もしなただけだし…

それより、ちよつとだけ聞かせてほしいかも」

「そーだよね。聞いたことか。」

あんたは、どうしてウワサを止めたいの？」



うかつなことを言ったらややこしくなる気配はあったが、  
ここで韜晦したりして気を悪くされたらたまらない。

時間的に余裕はないからな。何も偽らず答えた。

「俺の居場所を守るためだよ。」

沢泉がハイジャンプできなくなったら、俺もやばいんだ」

回答を吟味するように、自分の頬を指で叩いていた二人だったが。  
数秒そうして、納得することに決めたようだ。

「ま、納得してもいいか」

「頑張ってみるね。あなたも何か…しない方がよさそうだね」

積極的かどうかはともかく、前向きな回答は受け取れた。

今の俺の人脈で、これ以上できることはあるまい。

あとは、スタンド使いにビョーゲンを警戒しておくだけか。

そう思いながら教室に引き上げた俺は、やがて担任の呼び出しを受けた。

…ウワサってやつは、とても怖かった。

絶対にバレるな！ イツプスの後ろ側で—その5

『…ヘイ、ヘイツ！』

殺気だ！ 殺気だぜ、魁ツ!?!』

呼び出されたのは、あの二人に助けを求めた放課後だ。

クラスメートが去った後、一人残るように言われてたんだが。

その時からきなくさい霧囲気を感じ取っていたらしいF・Fが、

今、室内に入るなり、鼓膜へダイレクトに叫びを伝えてきた。

『敵意はわかるが、殺気、か?』

『殺しの一撃をブチ込む機会をうかがってる。』

そういう目と動きをしてるのよ…方法は知らないがな』

警戒を最大に引き上げた。

身体も自然とそれに従おうとするのを、これもまたF・Fが止める。

『おっと、身構えるなよ…悟られる。』

やつは、ここでは仕掛けない。戦えることに感づかれるな』

足を止めた。観察する。

教室内には、俺を座って待っている『ふたり』。

片方は当然、俺の担任だ：松永まっながつつたっけか。男。確か31歳。

面長気味だが、スツと切れ味のある釣り目と真つすぐ通つた鼻はイケメンといつていい。

そして、F・Fが言うには。今そこから放たれているのは、殺気だ。

俺から見ると、冷たい目だな。熱ではなく冷気を俺に注いでる。

これ自体には慣れつこだがな。度合いがちよつとばかりキツイ。

今まで見てきた中で、似たような視線を俺に向けてきたやつは…いたな。

俺が刺された後、それまで俺と大して関係なかった奴らだ。

そいつらは、俺が失脚してからやってきて、クラスメートや元の取り巻きに混じつて俺を叩きのめしに来た…そのほとんどは連れシヨン感覚だった。

だが中には、ヘンな使命感を持つてるっぽいやつがいて。

そういうやつは、他よりもかなり熱心に俺を痛めつけたし、方法も独創的だったな。

今見ている担任教師の目は、俺が見てきたそいつらに似ている。

根拠はない。言われてみればでしかないんだよ。だが、そう見えるんだ。

もう一人は、みんな…花寺たちのクラスの担任、円山先生だな。

こつちは敵意を感じない。少なくとも、俺に配慮して隠している。

なるほどな。担任の意図がどうあれ。仮にスタンド使いだつたとしても。

ここで俺に仕掛けるのは無理だ。自分の社会生命も道連れになっちまうからな。

仮にDISCを刺されていたとしても、自身が破滅する状況に進んでなろうとはしないはず。

…よほど、ピンポイントな命令が書き込まれてない限り。平光みたいに。

「何をしている。入って、座れ」

「…座りなさい。ここだよ」

刑務所の看守みたいに冷厳として告げてくる担任に、

円山先生の方はどこか戸惑っているような雰囲気がある。

わざわざ立って、向かいの椅子を引いて俺に軽く向けてきた。

グズグズしても話は進まないな。従おう。

座るとほぼ同時に、こちらから切り出す。すでに想像ついてるけどな。なんの用なのか。

今までも敵意みたいな目で見られちゃあいたけどよ。今日いきなり『これ』なんだぜ？

「なんの、御用で？」

「沢泉さんに暴行を加えたそうだな」

!?

目を丸くして、劇的に反応する。

…俺じゃあないぞ。円山先生だ。

何も知らずにここにいるのか…俺と担任を、交互に見ている。

だがすぐに気を取り直すと、目つきを変えて担任の方を向いた。

「松永先生。今それを蒸し返して、どうするおつもりですか?」

「蒸し返してなどいけません。新しい事件ですよ…」

こいつは、おたくのクラスの沢泉さんに、懲りずに狼藉を働いたのです。

…いえ、厳密には嫌疑がかかっているだけですよ?

ですから、事実関係を明らかにしなければね…そういうことです」

ガタン、と席を鳴らしかけた円山先生だったが、

嫌疑と聞いたあたりで動きを止め、ゆっくりと元の姿勢に戻る。

「な、なるほど…しかしですな、松永先生。」

仮に無実だとすれば、あなたはどのように彼に詫びるのです?」

「詫びる必要などない。この男は理解しているべきですよ。」

まっとうに扱われるべき信用など、とうの昔に無くしているのだとね…

僕の使命は、生徒たちの学びと成長を守ることにある。それを脅かすものは放置でき

ない」

「生徒ではないのかね。彼は」

「もちろん、生徒ですよ？」

ですが、我々の手に余るのならば彼にとつても不幸です。

もつと、ふさわしい環境があるべきではありませんか？」

はあ。なるほど。追い出したいと。もつともだ。

ふさわしい環境ね。少年院かな？ 刑務所？

……もつともなんだよ。俺に腹を立てる資格はないし、その気もない。

だが、しかし、だ。

殺気を持つてこれを言つてるとなると……転校先は『あの世』だろうよ。

到底、ハイとは言えないな。まがりなりに戦力なんぞな、俺も。

「で、あれば。まずは私たちにこそ、ふさわしい努力がいるのでは？」

それを言うのは、すべての手段を尽くした後でしょう」

「……道理ですな。ええ。」

そのためにも、受けてもらおう。事情聴取を！」

「事情はわかりました。逃げも隠れもしませんよ」

ウソはつくかもしれねーけどヨ。

お前の都合なんざ知らん。

「さしあたり、まずは嫌疑の具体的な内容から……」

こいつは特に新しいことを言わなかった。

俺が知っているあのウワサ以上のことは、な。

だが、こいつも目撃証言だとかの証拠集めをガンバリやがったらしいな。

俺が沢泉と、ゆめポートで一緒だったことをつかんでやがる。

そりゃあ、あのふたりが追跡してきてたつてことなら。

他の平光関係の誰か複数人に知れ渡っていてもおかしくはない。

現に益子道男は、ゆめポートにいた俺を知ることができたんだぜ。

そんなことはいいい、なんてことをしてくれた。

「待ちなさい。松永先生……あなたは、聞いて回ったのかね？」

彼が、どこかで沢泉さんと一緒にいたか知らないか、とでも」

「そうですが、何か？」

「なんということを。噂をバラまいてるも一緒じゃあないかッ!」

円山先生がたつた今代弁してくれたが。

この野郎のやったことは、例のウワサの信ぴょう性を高める方向にしか機能しない。

例のウワサと、この野郎の行動とを組み合わせるよ。

すこ中のホープが俺に『なにかされた』せいでダメージを負い、ハイジャンプできなくなったのを、教師陣が本腰入れて証拠集めしてるって話になっちゃまう。

この時点で、根も葉もないウワサじゃあ済まなくなつた。

漏れたガソリンの上で、火打石を鳴らしながら踊つてんのと同じだよ。

その結果、炎上するのは俺だけじゃあなく沢泉もなんだが？

ほぼ同じ内容を、円山先生がガナリ立てた。

「あなたほど正義感にあふれた人が、なぜそんなことにも気づかないのですか！」  
「それはこちらのセリフです。なぜ将来有望な生徒を守ろうとしない？」

被害に遭つたところで、正直に訴えられるはずがない。どれほど傷ついたことか…

これを償うのは、僕らの責務です。すなわち、犯人の一刻も早い確保ですよ」

「彼が無実だったら、どう収拾するんだね」

「簡単ですね。諸悪の根源は噂の元ということ……全校生徒の前で詫びてもらいましょー！」

お前が大火事にしたんじゃあねえかクソ野郎。

もう祈るしかなくなつちまつたぞ。沢泉まで燃え広がらないことを、だ。

苦り切った表情になつた円山先生は、話丸ごと打ち切りにかかつた。



「こうなつては……この話をするより前に、火消しするしかありませんな。

松永先生。今すぐ、聞いて回つていた人たちに謝つてきなさい。

その鳴滝くんは、事実無根の疑いをかけた、とね。今日中です」

「……何を? それでは隠ぺいではないですかッ」

「黙らつしやい。きみの言う嫌疑がホントだろうがウソだろうが、

誰が一番傷つくと思つているんだね?

全員に謝り終わつたなら、頭を冷やしなさい。今日のきみは、おかしいぞ……

いつもなら気づいていることに、なぜそこまでして気づかないんです?

さあ行きなさい。謝つてきなさい。話はそれからです」

クソ野郎は非常に不服な顔をしていたが、

円山先生が一步も引かない様子を見ると、しぶしぶながら席を立つて、

教室の外に出て行つた。離れていく様子がわかる。

危機は去つたつてことか? だとしても一時しのぎだろうがな。

あれがただのアブナイ野郎か、スタンド使いかもわからんままだしな。

「スマナイね。結局、先生たちでケンカして終わってしまった」

「……いえ。ありがとうございます」

「で、結局のところどうなんだね。きみの嫌疑はそのままなんだが」

「無実です。たぶん知つてると思いますが、俺を助けてくれているのは三人です…

そんな手出しをした翌日にでも、俺はブタ箱に転校できますよ。

だいいち、どうするってんですか。半身不随で…」

「ふむ。筋は通っているね。」

あとは、三人の…本人以外にそれを確認したいな」

「隠し事ができそうな方に聞いてください」

「隠し事ができる方、だね！」

ハツハツハツハツハツ

思いつきり笑われた。

イヤな気分じゃあないんだが、こんなことしてる場合じゃあない。

『魁。そのまましばらく先公と一緒に続けろ。』

アレがスタンド使いなのはほぼ確定として！

今やりあつたら、よくて一対一だぜ。

誰か呼べ。といつても、この状況…呼べるのはどかだけだな』

『盾にするってか…』

『むぎむぎ死に行くようなマネをしたい？』

『……………なっさけねえ』

これが今の俺の限界らしいな。

誰かを助ける以前に、自分の命もままならないし、そのためにプリキュアを呼びつけるしかないという。

しかも無力な一般人を盾に戦闘回避ときたもんだ。死ねよと言いたい。よし。もう、やると決めた。無駄な消耗はなしだ。

円山先生をここに引き留めている間に、敵スタンドに当たりをつけてやる。

まず、自然死を装って俺を殺せるような能力じゃあない。

できるんだったら…いささか不自然なことにはなるが…とくに俺は死んでる。…うーむ。わからん。材料がいくらなんでも少なすぎるか。この程度だ。

なら、アレに刺さってる命令DISCの内容について…

ピン ポンパン ポォーン…

校内放送だった。

普段だったら気にも留めない環境音で、

俺も半分聞き流していたんだが。

『円山先生、円山先生。お電話が入っています。』

すぐに職員室まで来てください』

「ん…? なんだろう?」

まあ、行くしかないんだがね。

じゃあ、気を付けて帰りなさい」

いやはや、これにはまいった。

俺とF・Fの戦法が瞬時に根本から崩壊しやがった。

「な……………」

『なんだってエエエエエエ』

魁、ついてけッ、可能な限りだ！』

障碍者への配慮ってとこか、立ち上がろうとしたら手伝ってはくれたが。

そっから先、円山先生が立ち止まる理由はどこにもない。

いや、F・Fが作った。俺の右手の手のひらが突然ズバツと切れた。

「うッ!?ど、ドコで切れたんだあー、コレエ〜!?」

だがこれも一歩遅かった。

手のひらを見て心底ビビッた演技をしたその時には、

小走りで行って行く円山先生が教室から消える所だったんだ。

「うッ、うおおおあああ」

うめき声だかわめき声だかわからん声をあげながら、

松葉杖をガツガツ突いて俺は室外へと転び出る。

よし、やった。放課後しばらく経ったとはいえ、  
まったくの無人つてことはない!

ちらほらいるぜ。生徒に教員が。

だが、こいつも当然だな。

そいつらはみんな、そいつらなりの目的があるわけで、

俺の方に注意を向ける理由はないし:

注目させてやる—かと思つたが、そいつはかえつて危ない。

あのクソ野郎に無防備を悟られるきつかけになりかねん。

『こつなつたらやむをえない。』

陸上部が練習やつてんだろ。

近づけ、可能な限りだ……:そこで、みんなを待つ!

うまくいけば、全員と合流できるぜ!』

『おい、F・Fツ、それは』

聞きたくない提案だぞ。

俺は今、なんのために動いているんだ?

今の俺が陸上部に近づいたら、どうなるんだよ。

『もう気にしてる場合じゃあなくなつた!』

今は人目を味方につけるしかないのよ』

「……………」

結論から言うと、俺はF・Fの忠告を無視した。

俺が敵の立場なら、下駄箱で待ち受けて、

下校中の孤立するタイミングを狙うだろう。

なら、そこを通るべきじゃあない。

俺は上履きのまま、体育館への通路から外に出た。

『やれやれだわ、ってやつね。』

なら……裏の雑木林を突っ切れ。

人目がないなら、あたしを使って歩ける。

その先の路上にのどかと呼ぶ』

「F・F。悪いな……陸上部は、無理だ」

『さっさと行け。ムダ話をしてる余裕ない』

やり取りしながらも、俺もF・Fも周囲に注意を払っていた。

クツ野郎の恰好……Yシャツにネクタイ、ズボン……は覚えていたんで、

それっほいやツの視線からは最優先で逃れてここまで来ている。

体育館の裏に来た今、俺から視線が通る範囲には誰もいない。

かといって安心なんかしちやあいないぞ。

俺は、アクトン・ベイビーのDISCを警戒していた。

あの透明になるスタンド能力なら、今の俺を殺すにはうってつけだからな。

ジョースター家の一員になって、SPW財団の保護下にあつた彼女が

ブッチ神父にやられてDISCを取られてる可能性は低いんだけどな。

それでもゼロとは言い切れない：不自然な音を警戒して、歩く。

それがいけなかつたんだな。近くばかりを気にしたのがいけなかつた。

上から降り注いだ何かが、いくつも俺の体を貫通していった。

あれは銃声だ。それを理解するまでが限界だった。

俺の意識は、真つ暗闇の中にストンと落ちていった。

## 絶対にバレるな！イツプスの後ろ側で―その6

魁の背から腹に向かっていくつもトンネルが開通した。

そいつを認識したあたしが最初にやらなきゃならなかったことは、

ヤツに引きずられて気絶するよりも前に、ヒーリングアニマルとして個を確立。

あたし単独がヤツの意識から分離することだった。

これ自体は以前のスカー・ティシュー戦でもやってるんだがな……

今、数えたが……12か所だ。穴の個数は12か所！

うち3か所が致命的な動脈をとらえて、うち2か所が重要な臓器をブチ抜いていつてるな。

衝撃とダメージと出血により、数秒経たずにショック症状に陥った魁の意識はすでにない。

これに引きずられてたら、あたしもおしまいだった。

そして、こいつも終わらせやしない。これがあたしなのよ。今も、昔も。

まず出血を止める。こいつは最優先だが……

(来やがったな)



松永とかいう担任の先公だ。渡り廊下から大股でこっちに来る。

片手には『銃』をぶらさげている……この平和ボケ国家日本でか？

ナンセンスだな……だいいち、あの形状には見覚えがある。承太郎が記憶しているぜ。  
皇帝だ。<sup>エンペラー</sup> D I O に雇われた刺客、ホル・ホースのスタンドだな。

D I O が死んだ後、ちやっかり S P W 財団に雇われてエージェントをやつてたヤツは、

何度か承太郎と共闘もしてるんだが、2008年を最後に突如消息を絶つてる。

その成れの果てが D I S C で、アレつてわけね。

こんな考え事をしてる間にも、傷の中で増殖して血は止めているが……

近寄ってくる担任が、確実なるトドメを刺そうつてんなら……いちかばちかで奇襲するしかない。

だが、はつきり言う。パワーが足りない。

ここでヤツを殺すほどのパワーを出し養分を消耗するというのなら、

魁の生存をあきらめざるを得なくなる。本末転倒つてやつ。……さあ、どう出る？

「……………。死んだな。クズが」

しばらく見ていた担任だが、それだけ吐き捨てるとさらに近寄り、

銃の把手で、仰向けに倒れた魁のサイドキックのポケットをパシパシと叩き……



肉体の記憶を見る。それを通じて、今こいつが見てる景色を見るんだ。

(……走馬灯つてやつよね、これ)

まず見たのは、すこ中ではない学校の風景。

複数人がかりでリンチされ、頭からゴミバケツに突っ込まれてゴミ捨て場に放置された。

足が動かねえから自力で外に出ることもできない。

手首を後ろ手に縛られてるから、あがいてもほとんど意味がない。

ゴミ汁の混じった空気をアツアツ吸いながら、か細く叫ぶだけ。

「出せッ……誰か、出せよおおおお

ブツ殺すぞ……ぼくの家が、黙っちゃあいないぞおお」

近くを何人も通ってる気配だとか音はあるが、誰にも相手されてない。

……ま、『水族館』でも見かけてたわね。こーゆーのは。

ボスの座から転落した不良囚人なんて、こんなものよ。

こいつはそれだけのことをしてたんだ。同情はしないし、本人も望まないだろうね。だから今、こんなものはどうでもいい。必要なのは、さっさと目を覚まさせる方法だ。あつ、場面が変わった。足が元気に動くようになってる。

「いいシューズだ。おまえにはリッパすぎてモツタイない！」

お焚き上げて知ってるか？…捧げるんだつてよ、神様に！

お祈りしてやるよ、ぼくたちがな！」

お人好しそーなポーズを取り押さえて脱がした靴を、ライターであぶってる。

やがて火がついて、勢いよく燃え上がりだしたそれをポーズの目の前に放り出し、ゲタゲタと笑ってる……

「ナンマンダブ、ナンマンダブ、アーメン！つてな。アハハハハハハハハ」

周りの連中は、むしろドン引きしてるけど。少しして、追従するように笑い出した。これが、引き返せない道の始まりつてわけね。周りの連中にとつても。

また、場面が変わる。

「地方トップタイだったそうだな。よろしい…そのまま結果を出し続ける。

支援をしてやるだけの価値を、おまえは見せている…よくやった、魁」

「父さん……はいッ」

「ところで景弼<sup>かげすけ</sup>。お前は何をやっている?」

名に負う価値を証明できないのであれば。この食卓に、お前の席はないと思え。  
 景継<sup>かげつぐ</sup>の足を引っ張ってるんじゃないぞ……」

『やつと……やつと、食卓にぼくの席が。』

あいつを、小兄さまを追い落とせば!

ここは永遠にぼくのもので……今度は、ぼくの番だ』

バカツ広い食卓だなあ……バカじゃあねえーの?

テーブルの一角を王様みてーに一人で占拠してんのが親父かよ。

日本料理にはゼンゼン詳しくないけど、並んだ料理もバカ豪華みたいで。

端っこにちんまり座ったチビ魁は、それを食べられることに喜びを感じてるらしい。

あつちに座ってるのが母親か? 表面上笑ってるけど目が面白くなさそうだぜ……

……あつ、また場面が変わるぞ。どんどん短くなっている?

「と、父さ……助け」

「ン? 景弼か……わしは立食。パーティーに出てくる。

留守は任せていいだろうな?」

「かしこまりました。行ってらっしゃいませ、父上、母上」

「それと、あまり散らかすんじゃないぞ。限度はわきまえておけよ」

「もちろんですよ」

血まみれの幼児を前にしての会話じゃあねえよなあ。あたしがおかしいのか？  
血がしたたるまでボコボコにされたチビ魁を引きずった兄貴が、

タキシードとドレスで着飾った親父と母親に、優雅なアイサツをしてやがる。

……こいつらと家族？うへエ……世の中広いわ。殺人鬼の生い立ちだな、まるで。

また変わる場面。やべエ。

「ヨシ、ヨシ……怖かったね、ゴメンねえ？」

まだ早かったかな、戦隊ヒーローは……大丈夫だよー、ヨシヨシ」

誰だこいつ。

ほとんど赤ん坊同然の魁をあやしてることとは、母親……と思うけど。

どう見ても別人だ。髪質とか、顔の系統が全然違う。釣り目くらいしか共通点ない。

ベビーシッターとか、その辺か？

いや、もういい。これ以上さかのぼったら生まれる前だ。

おそらくは今が最後で、このままだと魁は抱きしめられたまま天国に逝っちゃう。

(そうはさせねえぞ)

あたしは、分離していた意識をヤツとひとつに戻した。あえてだ。

当然、このままヤツが死ねばあたしも引きずられて死ぬってわけだが！



「…ウ…………グ」

「気分はどう？」

「…………。最悪」

体を張った甲斐はあつたな。

魁はあたしと子ども、なんとか息を吹き返した。

だが残念なこと！これでメデタシとはいかないのよね。

「早速で悪いんだけど、気づいてる？」

あんたのスマホが、あの松永とかいう教師に盗られてる！

「……………どこに行った？」

「さあね。今から探すしかない…ただ、わかっていると思うけど。

もう、ヤツを逃がすことはできない。

ぶちのめしてスマホを奪還し、スタンドDISCをも奪う！

ヤツのスタンドは皇<sup>エンペラー</sup>帝だ」



「ツ……どうりで。屋上あたりから撃って弾丸を曲げてきたんだな?」

松葉杖を使って立とうとする魁だったが、

あまりにもダメージを受けすぎだ。すぐに気が遠くなつていく。

流した血の上に尻もちをついても、

歯を食いしばって意識を保ったのはほめてやるぜ。

「こいつは……俺の血かよ」

「可能な限り回収はした。」

残ったのは土に混ざってどうしようもないやつだけだ」

「花寺の血は、どれだけ出てった?」

「わかるわけないだろ。もう、あんたの血に混じりきつてる。」

「区別なんか、つけてられない」

ギリツと歯を鳴らす音がした。

無理やりに意識をハッキリさせて松葉杖をつき、再度立つ。

今度はギリギリうまくやれた。体を傾けて前進する。校内に向かつて。

「重ねに重ねて……よくも、やってくれたもんだな。クソ野郎」

「どうする気? 正面からじゃあ、殺されに行くのも同じよ」

「やるしかねーだろがッ」

「考えてよ、魁。」

フリー・ファイターズは実体化していて一般人にも見えるスタンド！

でも、皇帝エンペラーは見えない…それが、どうゆう意味なのか」

銃を撃つなら、あたしたちにも出来る。

能力で、指先を銃に変えて撃つF・F弾があるんだからな。

でも、決定的な差がそこにあるのよ。

冷静になれば当然、あんたにもわかる。

「……衆人環視の中、見えない銃撃が一方的に襲ってくるってか。

しかもあつちは弾道を自在に変えられる……」

なるほど、こりゃあ勝てない…悪い、忠告くれなきやあ死んでた」

「さらに言う。今のあんたは半死人よ。」

生きているとわかったら、大喜びでトドメを刺されるだけの存在。

もう、ひとりでの挽回は不可能だと思う」

「スマホを取られた俺にどうしろと？」

花寺の番号、覚えてねえぞ」

「陸上部のグラウンドに行け。ちゆが確実にいる！」

歩き出した足……松葉杖が止まった。

心持ちうつむいたヤツの視線が空中をにらんだ。

あたしも必死だ。説得できなきやあ、助けた命がムダになる。

たぶん、あたしも死ぬだろうしね。

「すでに生きる死ぬの問題になつてるのよ。」

ここでちゆを頼つたところで、あいつは絶対にあんたを責めない」

「いいや責めるね。俺が責める。俺を責める」

「……。いいか。あいつのハイジャンプと、おまえの短距離走を」

「わかつてるってんだよ!」

混同するなど言おうとしたのが、有無を言わさない口調で止められた。

「俺の短距離走に重ねて見た、手前勝手な感傷だつてんだろ?」

「だろうよ! わかつてんだよ……」

確かに、悪いウワサひとつで足が動かなくなるわけじゃあない。

まだまだ若いし、高校まで含めれば部活やってられる時間も長いんだ。

いずれ取返しはつくんだろうよ。俺とは違うよな?」

「だったら」

「でも、これだけはどうかやら同じみみください。」

短距離走は、俺が、俺であることを見つけられる場所だったはずなんだよ。

『これが俺なんだ』って。俺は風を切って進む人なんだ、って。

……その先に、俺をむかえてくれる人だっていたのかもしれない。

いや、いたんだよ。今ならわかる。あいつだったんだ。

でも俺は、その場の怒りにまかせてあいつのシューズを焼いた。

俺を刺すほどまでに追い詰めて、結局みんなダメにした」

そこで言葉を切ったヤツは、頭の中のD I S Cにしかないあたしに、改めて向き直るように姿勢を正した。

「F・F。」

そういうことなんだろう、『聖なるもの』を穢すっていうのは。

ましてや沢泉のそれをかよ？

嫌だね。絶対に嫌だ。これだけは俺の意地だ」

「……命を賭けてもか？」

「そうだな。そうなる」

「陸上部のグラウンドには行かないっていうんだな？」

「くどいぜ」

……ハア、テコでも聞かないわね、こりや。

でも、ま……悪くない。面白くなってきた。

この状況で、誰の手も借りないって? 正気じゃあないね。  
絶望的なそいつに、ちよっぴり勇気がわいてきた。

「そこまで言うんなら、あんたに賭けてやる…ただし覚悟しろ!

あたしはあんたの死を許さない。

あんたは陸上部のグラウンドに行かず、プリキユアを呼ばない。

これ以外なら、なんでもできる! なんでもなれる!

その覚悟が、あんたにはあるの?」

「クソを食えと言うなら食うし、ホモ野郎になれというなら、なる!」

「よし。なら、追うぜ。」

まずは、敵の場所を知ること。

そして、今のあたしたちで戦える方法を見つけること!」

「職員室だな。あのクソ野郎がどういうつもりだろうが、

退勤時には必ず現れるし、退勤済みなら自宅で襲うまでだ。

……逃がさねえよ?」

ゼエ、ハア、ゼエ、ハア言いながら、半身不随の半死人の反撃が始まる。

といつても、あんまし悲壮感とかはないね。

徐倫とかエルメエスもそんな感じだったし、あたしだってそうだしね。

さあやるか。あたしたちには『勝ち』あるのみだぜ。

## 絶対にバレるな! イップスの後ろ側で—その7

すこやかか中学の教師、松永邦久まつながくにひさは、ようやく帰途につこうとしていた。いや、帰途ではない。何人かの生徒の自宅に寄らざるをえなくなっている。腐った汚穢で邪悪な鳴滝魁のことはどうでもよい。

体育館裏ですでに生命活動を停止：死んでいるのだから。

だが、円山先生の言っていることが正しいのも確かだ。

輝く未来を約束されたる模範的生徒、沢泉ちゆ。彼女を穢した罪は

ゴミクス一人のヘリウムよりも軽い命ひとつで償えるものでは到底なく、

噂が広まればセカンドレイプとなるだろう。本意ではない。

なので、まだ学内に残っていた何人かに謝罪をして回っていたのだ。

業腹だが……鳴滝魁に、事実無根の疑いをかけていた、謝罪するので忘れろ、と。

それがすべて終わり、校内の駐車場で愛車の取っ手に手をかけようとしたところで

……

ちかくの塀の上から見下ろしてくる『何か』に気づいた。

彼に向かって、何かの突起を向けている『何か』にツ

それが何なのかはさっぱりわからなかったが、本能的に彼は飛びのいた。突起の先端が、あたかも銃口であるかのように見えたからだ。

自分がごく最近身に着けた『見えない銃』、皇帝のことがあつたからか…

彼はその直感を、ごく自然に信じていることができ…そして、それは正しかった。

ドン　ドン　ドン

「うおわアッ!？」

発射された何かの塊を、横つ飛びでギリギリで回避した彼は

すかさず皇帝エンペラーを抜き放ち、撃ち返す。二発!

『何か』はそれをわかつていたようで、飛び退つて別の車の天蓋に乗る。

アスファルトに穿たれた二発分の穴を横目に、松永は考える…

(『見えている』…コイツには、ぼくの皇帝が見えている!)

使命をささずかつた誰かがいたつていうのか? ぼく以外にもツ)

「ならなぜぼくを襲うんだツ」

一週間前。この力を身に着けると同時に湧き上がるようになった、

『法で裁けぬ悪を討て』という心の中の声。

彼はこの声に導かれるまま、すでに一人、手にかけている!

久々に東京都心の実家に戻つた帰り、深夜の電車にて。



妊娠させた女を『下ろさせる』、その女を『お前らにやる』と

電話で放言していたクズ男だった。『オレのオヤジはエライから』心配無用らしい。その場で心の中の声に逆らえなくなった彼は、いくらか離れて皇帝を抜き…

クズ男が電車を降りたところを後ろから狙い撃った。

汚く脳漿をまき散らして倒れ伏すクズ男…

その夜、眠れなかった彼は、やがてひとつの結論に至った。

すなわち、これは『偉大なる啓示』で、自分は使命に選ばれた者なのだ、と。

こうして殺人を正当化し、『次』に備えて銃の訓練すらしていた彼だったが、だからこそ理解できない。同じ力を授かった者がいるというのなら、

同じ正義を共有してはるはずじゃあないのか？

必然、反撃もひるんだものになっていた。

腰の引けた銃撃はあっさりとかわされ、再度銃口が彼に向く。

放たれたうちの一発が彼の肩口をかすめると、ようやく立ち直って腹を決める。

「わからんが…お前は『悪』だな？ 『悪』は撃つ！」

容赦を捨てた彼は、マシンガンのように皇帝を撃ちまくる。

この銃に弾切れはない。試したことはないが…

人間をバラバラにすることすら、難しくはないだろう。

中型犬ほどのサイズである『何か』に当たれば、一撃で碎き散らせるのではないか。『何か』もそれをわかっているようで、飛んでかわす。

……が、最後に放たれた弾丸の一撃が、グイと曲がつてそちらに向かう。

ボツゴオ ……ドチア！ ビチ ビチ

直撃！腹部から頭部らしきところまで貫通して裂け、落つこちて体液を散らす。

やはり生き物ではあつたようだが、こうなつては正体は不明。

そう思つた彼だつたが、今少し観察して、奇妙なことに気づく。

「……なんだ？ 『電源コード』？ ……いや、『ホース』、か？」

ふと感じいた彼は、慌ててそれを破壊しようとするが。

そこから『何か』の素が飛び出してきて、元の形に復旧する方が僅差で先だつた。

「フウウ………フウウ……フオアアアアア……ッ！」

メ……メツガビヨオ……ゲエー……ッ！」

「ば、化け物め………そ、そうか。」

このための皇帝エンペラーなのか？これと、戦うためのツ」

元を絶てば良いのだ。それで勝てる。

そう踏んだ松永教師は、曲がらない銃撃でけん制しつつ、本命の曲がる一撃で

『ホース』を断ち切る………が、これも中の水が飛び散つたと思うと、

わずかな間に再生された。すかさず撃ち返されてくる反撃。

「キリがない……くそッ」

車の影に入ってかわしつつ、攻めあぐねる。

攻撃は通るが、こうもあつという間に再生されては……

だが、こうも考える。

あの『ホース』があるということは、その先にこそ大元はある。

大元を破壊すれば、あの不死身も打ち止めになるのではないか？

よく見ると校舎の中から伸びている……

待て、考えろ。あの怪物は、そもそも一匹なのか？

大元とやらがあるのなら、そこから何匹も発生しているのでは？

そして中には、数こそ少ないがまだ生徒が残っている。

もはや行かざるをえない。『悪を討て』に寄って立つ彼ならば。

さもなくば、自分はただの人殺しだと認めることになるのだから……

皇帝を連射して化け物を退けながら校内に突入。

突入ついでにドアを閉め、見えている限りの『ホース』を皇帝で破壊しつつ進む。

校舎内の壁に弾痕が穿たれまくるが気にしている場合ではなかった。

すぐに背後でドアが破壊され、化け物が見えた。猫が全力疾走するような速度で追っ

てくる。

逃げながら皇帝の乱射。回避行動をとる化け物の背後で、壁とドアが穴だらけになって倒壊していった。

(お、おのれエエ〜〜ツ)

最悪、通りがかつた生徒を巻き込んでしまうぞ！

やたらめつたら撃つわけにはいかないツ

地面か、天井か、壁に向けなくては！貫通したらやばい！)

「フウ〜、メツガビヨオオ〜〜ツ、ゲエ〜〜ン！」

「やかましいぞ、安っぽいエイリアンもどきが！」

銀幕の裏にひっこんでいろ！」

断続的に攻撃が飛んでくるが、思ったよりもずつとかわせる。

弾数に限りがない銃でけん制し続けているのもあるし、

彼は逃げながら、向こうは追いながら攻撃していて狙いづらいのもある。

だが何より、彼自身がようやく戦いに慣れ始めたのか：

予備動作を見てからタイミングをとって、かわすことが可能になっていた。

そして、それでも幾度か皇帝の直撃弾を与えていた彼は、しだいに気づいてきた。

「フ……フウオオオ〜〜、メツガ」

「しめたぞ…再生が遅くなってきた!」

いくらなんでも限度はある、というわけだな?」

彼の方針は変わらない。

複数体が校内を闊歩している可能性が以上は、大元を目指す。その邪魔をされなければされないほど素早くたどりつけるだろう。

だから、化け物の足を破壊する。

ドン ドン

ドギョーン ドヒャ!

二発放った弾丸がクロスするように弾道を変え、

化け物の両足を捉える…片方はあえなく外れた。

だがもう片方は直撃だ。右足の膝から先を吹き飛ばす。

「オオオオオー…ッ、オアオー…ッ!」

「よし…この隙に…」

この少し先には生徒たち用の手洗い場があった。

『ホース』がそこから伸びているのならば、目と鼻の先だ。

全速力で走れば、十秒とかかるまい。それだけに彼は油断した。

化け物の本質がわからないし、わかりようもない彼には酷なことではあったが。



おそろく…致命的な何か、だ!

「うッ…うおおおーッ!?」

ドギヤ ドギヤドギユ

皇帝を乱射。乱射といつても自分の足にかすめるような位置にだ。

こんなおそろしいことをしなければ、この状態からは脱出できない。

何発か自身の足をかすめながらも『ホース』を断ち切り脱出に成功。

こうなれば動きのとろい、足なしの化け物はカモでしかない。

「飛び散れッ」

ドン ドン!

ボツゴオア

「オウ…アウ…ブシュ」

撃ちぬいた化け物は大きな穴を今度こそ再生できず、

泥のようになってから崩れ落ち、チリとなって消えていく。

今度こそ倒せたのか?…いや、残った『ホース』が逃げていく。

間違はなく手洗い場にだ。

そこから先は早かった。

明らかに何か汚染された液体が溜まっているのを見ることになった。

排水溝をせき止められた水飲み場いっぱい、だ。

排水溝から下水にこれらを流したとしよう！

あの化け物が次にどこへ出るのかわかったものじやあない。

松永教師は即座に手洗い場の破壊を決意。

皇帝を連射して溜まった水をそこいら中にぶちまけ、

同時に近くにあつた消火器をも破壊。詰まった粉をばらまいた。

(消火器の成分は、硫酸アンモニウムだった……)

もし、あの化け物の正体が生物で！

この水から繁殖しているというのなら……

水に溶けた硫酸アンモニウムの吸熱反応で、低温にしてやれば！)

効果はテキメンだった。水の中にごめいていた何かがもがくように振動し、

やがて動きを止めて塵になって消えていく。

冷えた水が廊下を結露させ始めたとき、すでに水は無害となっていた。

「やったようだな」

だが、この状況をどうしようか。

さつきまでの戦闘も、校内にいくつか設置された監視カメラに写っているかも……

今回現れた怪物は、最近このすこやか市で噂になっている巨大怪獣の同類なのだら



う。

それがここに現れたとなれば、この破壊も不自然ではないが。

「どうやら、それで通すしかないようだ。今までの戦闘音を聞いているものもいるだろうしな。」

そんなことを考えながら、今はこの場を離れるべく、自分の車に戻ってきた松永教師。この状況では、自宅直帰もやむなし。そう思つて車のドアを開け放ち、着席すると。

「お疲れサン!」

「……はっ。」

後部座席から声が聞こえ、振り向く間もなく背中に衝撃。

一瞬にして気が遠くなつていき、そのまま落ちた。

「一番……マシなシナリオだったな」

「これ以上ないくらいの大成功ね。結果論だけど」

車内でひっくり返つた松永教師を横目に、

駐車場からいくらか距離をとっている松葉杖の少年。

いうまでもなく。一応はこの物語の主人公となっている、鳴滝魁その人だ。その片手には、取り返したばかりのスマホに、DISC二枚。

満身創痍の状態をF・Fで表面上ごまかしつつ、

彼は勝者となつてこの場に立つことができている…何をしたというのか？  
答え合わせを始めよう…：時間は少しさかのぼる。

職員室で、松永教師がまだ校内にいないことを確認できた彼らは、

この駐車場まで言うようにして向かいながら作戦会議をしていた。

見た目は一人の少年だが、これまた言うまでもなく。

今の彼は、ひとつの体につたつの意識。鳴滝魁とF・Fなのだ。

「駐車場ね…なんとなく、考えてることはわかる」

「手っ取り早く『鎧』と『足』を手に入れるならここしかないねえ。」

なにより、ヤツは間違いなく最終的にここへ来るからな…：

校内で、俺のスマホをどうこうするのは考えにくいぜ」

そう。魁は、手段問わず自動車を確保し…：

その破壊力と装甲、速度で銃の破壊力に相對しようと考えた。

一般的な乗用車であっても、拳銃のスタンド、皇帝エンペラーではおいそれと破壊できない。

機敏に動きようもない半身不随の半死人のまま戦うよりは、よつぽど勝ち目があるだろう。

要するに：彼は、車をドロボウした挙句、それを使って教師を轆くと言っているのだが。

問題だらけだが、手段を選んでいられる贅沢はない。

とはいっても、今の状況でそんな事件が明るみに出れば、

それこそ沢泉ちゆに引火、道づれ大爆発!

一緒に平光ひなたと花寺のどかもついてくるかもしれない!

すべてを隠密裏に運ぶことも、また絶対条件だった。

「その辺を考えても、今のあんたが車に乗り込むのは無理。」

そんなマネをして警察が介入すれば、確実にあんたのDNAとかが採られる。

あたしが隠すにも限度があるからね」

「なら、どうする? フー・ファイターズで分体作ってやらせるか?」

「車を運転できるよーな分体だつて? だったらそいつで直接襲った方がいい…」

そいつを何分か保って戦うことも考えると、水もいる……非現実的だな」

ちなみに、車をドロボウすること自体は簡単だ。

フリー・ファイターズで物理キーのカタをとって複製してやればいい。

ふたりとも問題にはしていない……今の彼らに鍵などあつてないようなもの。

電子的なキーでない限りは意に介することもないのだ。

「水か。手洗い場で水タンク作つて詰め込むか？」

まさかホースで引つ張つてくるワケにもなあー」

「まず、手段を相談する前に……考えるか。」

なにがあたしたちの有利なのか。

まず……魁。あんたはヤツに死んだと思われてる。

今こようやつて付け狙われてるだなんて、夢にも思わないでしょうね」

「……ヤツが、最近になつておかしくなつたつていうのならだ。

スタンド使いになつたのは、ごくごく最近！

ホワイトスネイクにD I S Cを差されたとして、スタンドのいろはを知つてんのか？

平光にしても、スカー・ティシューにしてもよ……

D I S Cを突つ込まれたまま、ただ放り出されてるんだぜ」

「そこよ。あいつはスタンドを警戒する気配もなかつたし、

同じような能力者がいるつて考えてないようにも思える……だとすれば」

「そこらへんでペテンをやれるかも……な!」

「…ちよつと待て。あたしで言ったことだが!

分体で直接襲う。悪くないかも」

ここで二人は、手洗い場に分体を配置し、

校内に引きずり込んで戦う発想に至った。

「そうか! ヤツにしてみれば、フー・ファイターズの分体はただの怪物!

繁殖元がいるくらいには思っても、俺にはたどり着きようがない!」

「ましてや、あんたは『死んでる』んだからね。

バレない限りワンサイドゲームよ。安全地帯からの一方的な攻撃つてやつ」

「栄養ブロックは…ストック5。

手洗い場からの有線式でも、犬くらいのやつなら出せるし…

「おあつらえ向きに、ひとつ手洗い場があるぜ。50m以内に!」

「皇帝<sup>エンペラー</sup>で撃たれても、水の供給で即座に再生だけぜ。

そこに来て、これ見よがしに伸びてる水の供給パイプを見たヤツは」

「校内にある元を絶てば倒せる、と思うよな。確かに間違いないやあねえ。

そして、俺らのF・F弾は一発当たれば終わり。肺の空気を追い出して即気絶だな」

「問題は、分体につき合わないで校外にさっさと脱出しちゃう場合だけだね…」

「その場合は……もう、覚悟を決めるぞ。」

こここの車を使ってヤツを追跡し、撥ね飛ばす。

裏手の雑木林だろうと知ったことか。強行する。

どうやってバレないかは、そのとき考える！」

作戦こそ形になったが、それでもなお決め手に欠けている。

このままでは、校内に引きずり込むのが成功したとして、

その後の運命は完全に分体の戦闘結果に依存することになる。

十分な戦闘能力を持ち、手洗い場から『ホース』で水の供給を受ける

分体を作るだけで、栄養ブロックを4つは使ってしまうからだ。1個は予備。

逃がすことは絶対にできない。

逃がせば、スマホを解析される可能性が出てくる。

そして、悪人と決めつけられた人間に、

のどかやひなたが含まれない保証はないのだ。

「分体を倒したとして、そのときヤツがとる行動はどうなる？」

「まずは……怪物を倒したんだ。安心するかもね。」

あたしだったら、その場にはとどまらなない。

銃弾の破壊があつちこつちにある場所になんか、残りたくないな。

誰に何をどう説明するっていうんだ?」

「学校から離れるなら、車に戻ってくるな。」

勝利して、安心して戻ってくる………そこを、奇襲する!

俺がだ。死人が唐突によみがえってやるぜ」

「……いいね。まずかわせない。あたしたちは一発でも当てれば『ケリ』だ」

「じゃあ、作った分体で見張るぜ。駐車場を……」

ヤツが乗る車は、ヤツ自身が案内してくれる」

そして、当初の想定通りに作戦は展開。

分体を完全撃破されるまでに粘られ、手洗い場のフー・ファイターズも

思いもよらなかつた方法で殲滅されてしまったが。

その間、分体から来るダメージのフィードバックに耐えつつも

ガラ空きになった松永教師の車の後部座席に入り込み……

凱旋してきた彼の背中に、チェックメイトを決めたのだった。

分体が死滅したからといって、本体が死滅することはなく。

味わうのはいくぶん軽くなった痛みだけなのは、フー・ファイターズの強みである。

さらに言えば、分体にはメガビョーゲンを装わせた声を出させてもいる!

ただでさえ怪物事件で騒がされているすこやか市なのだ。

出所不明の化け物という点で、分体も同類でしかなく……  
噂になったとしても、数に埋没することだろう。それを狙った。

かくして、彼とF・Fの作戦は完全なる成功裡に終わった。

スマホを奪還し、スタンダードISCと命令DISCをも奪取し。

物的被害はともかく、人的被害はゼロで。

肉体の記憶を見ることで、松永教師に起こったこともほぼ把握した。

これから彼を説得し、彼自身の安全を守らせる仕事は残っており……

今から覚醒させて、それをもこなすつもりでいた。

完璧。完璧そのものだ。ただし。

「……何を、やっているの？あなた」

「ツツツ………!？」

今、目の前に。キュアフォンテーヌが現れなければ、だったが。



## 絶対にバレるな! イツプスの後ろ側で—その8

「どうして私を呼ばなかったの?」

『夢』の中。一通りの事情を説明したところ。

黙って聞いてた沢泉が、そう静かに聞いてきた。

どうしてこうなったか?

結論から言えば、フー・ファイターズの分体にメガビョーゲンを装わせたのがバカだった。

校外にも聞こえていた断続的な破壊音を不審に思った沢泉がこの声を聴いてしま  
い

花寺に連絡するもラテに異常はなく、連絡を終えた頃には破壊音も止んでいたものの  
放置するわけにもいかず。変身して突入を試みたところに俺がいた、というわけだ。

「この足で、お前を呼びに行ってる間にヤツが学校を去る可能性があった。

そうなっちまったら、もう行方なんかわからない…

最悪、花寺か平光が狙われる! そう踏んだんだよ」

あの場で説明せずに済んだのは、F・Fが

『今は説明させるな、時間が惜しい！夢まで待つてくれ』

『こいつの目が覚めた時！あんたと魁が一緒にいたら話がややこしくなる』

と、ややゴリ押し気味に黙らせ、帰らせてくれたからだ。

おかげで、こうやってある程度理論武装の上で説明に臨むことができています。

カバーストーリーは、こう。

クソ野郎は、オレと沢泉の間にあつた出来事を知っていた。

それがD I S Cの命令と噛み合つて、俺を殺すべく動き始めた。

襲撃されて、死んだふりで乗り切つた俺とF・Fはヤツを奇襲し倒した……だ！

嘘じゃあない。すべてじゃあないってだけ。

用意していた答えをすぐさま返すと、沢泉はヤブニラミみたいに俺を見て。

おおよそ四秒後にフウツと息をついた。

「……。私が、あなただったら……」

もつといい方法をその場で用意できたかつて言われると……たぶん、無理ね。

わかつた、信じるわよ」

「おう」

「でもね。はつきり言うわよ……耐えがたいわ！

勝算はあつたにせよ……負けたら死ぬ戦いをあなたがしていた近くで、

私はノンキにハイジャンプの練習をずっとしていたのよ」

「ノンキじゃあないだろ。重要だろ、お前にとつては」

だからこそ俺は意地を張ってた。

だが、俺の指摘を聞かされた沢泉の眼の色が変わった。

瞳孔が開くさまがハッキリと見てとれた。

「人が死んでもやっつてろって言うの?!?!」

今まで聞いた中でも最悪の怒声だった。

腹の中を締め上げられるような感触に思わず目を閉じ歯を食いしばった。

「こんなッ…こんなひどい侮辱は初めてよー」

「そ…そんなこと言っつてないだろがッ」

「言っつてるも同じでしょうッ!?!」

人が死にそうよりも、高く飛ぶ方が大事なの、私は!?!」

「じゃ、じゃあ…どうすりゃあよかったってんだよ、俺は!?!」

ああ、不覚だな。感情で反応しちまった。

落としどころも何もない場所に無防備で突っ込みつつある。

それを明確に感じ取ったのだろう。花寺が動いた。

平光もガタッと音を立てて立っていた。

「待つて！そこまで！」

いったん離れよう？落ち着こう？

…ニヤトラン、鳴滝くんについてあげて！

他のみんなはこつち！」

「お…ガ、ガッテンだ！」

俺の方から離れる。冗談じゃあねえ。

どうにか元通りにならなきゃあと思う一方、

持つていく先のない不満だとか無念が渦巻いてる。

夢から醒めたら泣こう。ここだと花寺に丸わかりだからな。

それでなんとかケリつけよう……

杜王駅、開かずの踏切を越えたあたりで立ち止まると、

後ろからニヤトランが追いついてきた。

近場のベンチに腰掛けると、となりにチヨコンと降り立つ。

何も言つてこない。2分くらい経つ。

F・Fは……来ないな。アツチに行ったのか。説明のためかな？

「おい、ニヤト」

「オウ、落ち着いたか？」

「……落ち着いてるよ。最初っからな」

「ホントかよ? ま、いいや」

目の前に直立して、俺に向き直るニヤトラン。

二足歩行する子ネコも、ずいぶん見慣れたもんだ。

「言いたいコトあんだろ?」

言ってみろよ、このオレに!

陰口でもイイんだぜ、黙っててやつからよ」

「言えるかよ、陰口なんて。」

俺にはここしかないんだよ。

そんな、家に火をつけるみたいなマネ…嫌だよ」

「考えろよ。なんでのかかは、オレをオメーのそばに残らせた?」

言われるままに考える。他に何ができるわけでもないからな。

まず花寺は俺をどうしたかったのか。まあ考えるまでもないだろうよ。

俺がチームにいられなくなることを防ごうとしてる。

言い方は悪くなるが、俺はずっと『信』で縛られて、繋ぎとめられてきたんだ。

スタンドとプリキュアで結ばれた運命共同体だから?

そんな即物的な考え方をするヤツだったら、

俺はとつくにDISCを取られて放逐されてる。

あいつはただ、信念だとか理屈によるものじゃあない…

血のようにめぐってる『あたたかさ』で動いてるんだって、最近思うようになった。

これは何も花寺だけじゃあない。沢泉も、平光も同じなんだろう。

今、目の前にいるコイツもな。

「……。お前は、沢泉から『遠い』。

ラビリンとラテも同じ条件になるが、俺と『近い』のはお前だよな」

「だろ？ちゆに面と向かって言えねー文句も、オレになら言えるってワケよ！

のどかがそーやって氣イ回してんだからよ、遠慮すんじやねえーぜ」

「…だとしても、俺は…嫌だ。

そいつは…みんなが『信じてくれること』にそむく。

そむいた俺に残るものはない」

「そーかよ」

ひとつうなずいたニヤトランは、作つたみたいな笑顔を見せると、

俺の目の前にフワフワと浮かび上がった。

「オメーよ、根性あるよな。

ガマン強くて、つらくても齒ア食いシバツて耐えられるヤツだぜ」

「……………」

「でもよ。今のオメーの顔が、オレにはゼンゼンウレシクねー。」

オメーの友達だと思ってるオレにはよおー」

「なら、どうすればウレシイんだ」

「顔色うかがうのやめろよ」

笑みを消した、真顔のニヤトランが俺を見つめた。

「もしかしたら、オメーはそれでイイのかも知れねー!」

でもよ、なにもできねえなにもしてやれねえ!

オレはダメマツて見てりやあイイのかよ?」

「ニヤトラン…?」

「友達だよな、オレは!」

だったらオレに、なんかさせろよな!」

「もう、十分すぎるほどさせてる。もったいないくらいにな」

「……………じゃあ、考えてくれよ。」

例えば…ひなたが、オメーに内緒で戦って大ケガしたら。

オメーどう思うの?」

言われた通り、マジメに考える。

ここまでマジになって怒ってる以上、そうするしかなかった。でなければ、それこそ『信じてくれること』にそむくんだ。

今の状況で、俺が、あるいは俺だけが知らないままどこかで戦い、取返しがつかないようなケガをする平光。

…なんでそんな非合理的なことを？

と、最初に思ったが、それを言ったら今回の俺だつてまさにそれだ。

正体不明の行動を知らないところで取られ、

もはやどうにもならないようなケガを負ったことだけを知らされる、か。

とうてい愉快じゃあないな。なんとかならなかつたのか、としか言えない。

そして、おそらくはほぼ正確に理解した。ニヤトランが何を言いたかつたのか。

「何もできないまま、ただ見過ごした俺だけが残る、つてか。

せめて関わられていれば、何か変わったかもしれないのに」

「今、そー思ってくれたオメーの気持ち。

みんなからオメーにも向いてんだかな。忘れんじやあねえぞ。

つつーか、ちゆに説教されてたよな、前によ。

オレたちが他人だなんて言わせねえぜ」

それからニヤトランは、改めて俺に不満を吐き出すようにうながしてきた。



俺はニヤトランに従って：顔色をうかがうのをやめた。

ここまで説得されてなお、すべての秘密を吐くわけにはいかない。

少なくとも沢泉の大会が終わるまでは。そこは曲げられない意地だからな。

だから、言える範囲のことだけを言う。

こいつが俺に望んでるのは、屈服じゃあないんだから。

「まあ、その。なんだ。

沢泉のジヤマをしたくないって判断が働いたのは確かだよ。

それだけに、あんな反応をされると：そりゃムカつくし、キズつく」

「ウン、トーゼンだよな」

ウンウンと首を縦に振りながら話を聞いてくれたニヤトランが、

今度は向こう側から見た今回の顛末を話す。

まず、F・Fに退けられた沢泉は、いったん花寺、平光と合流したらしい。

ニヤトランが言うには、シヨックを受けていたそうだ。

飛べなくなったハイジャンプのことで頭がいつぱいになっていたすぐ近くで

戦闘が発生し：何もかも終わった後で駆けつける羽目になったことに。

私は何をやっているのよ、予兆くらいつかめなかったの？

自分のことしか考えてなくって、その結果がこれなの？…と。

今回の敵が隣のクラスの担任だったってことが、沢泉になおさらそう思わせたんדרו  
うよ。

むろん、花寺と平光が即座に反論して止めた。

全部わかつてあらかじめ防ぎに行けるんだったら、

承太郎さんだつてホワイトスネイクに負けなかつたよ、と。

めつちやガンバツてるちゅちーはリツパで、ダメなわけないじゃん、と。

歩きながら話して、いつしか海岸にまで行きついていたみんなは、

それに対する沢泉のぼやきを聞いた。

『私は、あの空にたどりつきたくってハイジャンプを始めたわ。

子供のころ、海で見上げた…吸い込まれそうな青空に……

でも、他の誰かを。知らずに、踏みにじって行くっていうのなら…』

ここまで聞かされりや、イヤでもわかつたよ。

俺があいつに対してした返事は、そんな夢にド口を塗り付けたんだ。

なにが『聖なるもの』を穢させない、だ。正面からやらかしてんじやあねえか。

「ニヤトラン。俺は…バカだったのかな」

「オイオイ、のどかもちゆに言ってるんだろ。」

全部ワカッて動けんなら苦労しねーんだよ。

「テアティーヌ様にだつてできるかわかんねえーぜ」

「どうすりやあよかつたんだ?」

「…そりゃあ。オマーにあつたことがわかんねーとナンともだけだよ。」

「全部話せんの、オレに?」

「できない…悪い」

「ン…イイつてコトよ。話せるようになったら話せよな」

少しして、花寺からメッセージが来た。

前と同じように、脳内に直接、文が書き込まれるみたいだ。

『ちゅちゅんが落ち着きました。』

そつちも落ち着いたら、オーソンに来てください」

何がまずかつたのかはわかつたんだ。もう落ち着いてもいる。

許されるかどうかはわからないが、まずは謝ろう。話はそれからだ。

行きついてみると、沢泉だけがいた。他の誰の影もない。

「んじゃ、オレはここだな。行つてこいよ!」

「おい、ニャトラン」

「一対一で話したいんだつてよ。」

オマーだけじゃあなかつたみてーだな。悪いと思つてんのはよ」

言い捨てるみたいにしてピューンとどこかに飛んで行ってしまったニヤトラン。沢泉は、とつくに俺に気づいてる。こうしてるわけにもいかない。

さすがに気後れするな。おずおず進んでいくと、あっちも歩み寄ってきた。

向かい合う。まず言うことはハッキリしてるんだが……

お互い、様子のがいが合いになった。牽制合戦だ。

なんか言いそうだな、いや、自分から。いやしかし。

そんなのを互いに繰り返して、こんなことしても仕方ないと

場を叩き壊すみたいに頭を下げた。のもまた同時！

「ごめんなさい！」

頭を上げたら、ええッ？ってフウにこつちを見てる沢泉がいた。

たぶん、俺も同じような顔をしてる。どうすんだこれ？

「そ、その。先手どうぞ」

「なによ先手って？……でも、ウン……そうね」

オホン、と咳払いをした沢泉は居住まいを正した。

俺もそうする。咳払いはいらないけどな。

「私は……守ってもらったのよね。」

私のハイジャンプを邪魔しないように戦ってくれてたのに、

さっきの言い草はいくらなんでもひどすぎたわ。

工夫して、戦って、やっと勝ったあなたの身にもならないで…ごめんなさい」

「お前の身にもならないで侮辱同然のことを言ったのは俺だろ。

あんな言い方したら、お前が人を平気で踏みにじるヤツだって言ったのも同じだよな。

…ごめんなさい」

お互いに謝ると、また少し黙ることになった。

言葉を探しているような感じだった。

俺もまたそうして…今言うべきことは、言おうと思った。

「さっき、俺、言ったよな。

重要だろ、お前にとって…は…ってよ」

「…。ええ」

「訂正する。重要なのは、俺にとってだった」

「どういうこと？」

「単純だよ。走れなくなつた未練を、勝手にお前に乗つけてただけ。

自業自得で走れなくなつたくせに、しかもお前にあんなマネを働いたくせにな。

だから飛んでほしかった。

別になんの罪もないお前が、俺みたいになるとかワケわかんねえのは嫌だった。  
……それだけだな」

「……………」

「お前には、俺の感傷に付き合う義理も義務もない。

どのみち、陸上競技者としてのお前の近くに、俺は二度と現れるつもりはないからな。何も気にせず、ただやりたいようにやってくれよ。そいつが俺の望みでもある」  
言うだけ言つて話を打ち切るわけにはいかない。

反応を待つのは義務だよ。少なくとも今はな。

俺のキモくて勝手な心の中を話されて、こいつはどうすればいいんだろうな？

俺自身でもそう思う。だがそれでも言わなきやあならなかった。

さもなければ、『お前にとつては』を取り消すことができないのだから。

俺は、俺の勝手で動いてるんだよ。最初から最後までな。

少し、きよんとしたような顔をして、次に俺をじつと見た沢泉は、

やがて、静かに強い調子で言い切った。

「ならないわ！あなたのようには。

その証を、次の大会で立ててみせるわ」

「……なら、助かる」

「戻りましょう。鳴滝くん。」

スタンドDISCと命令DISCも回収済みなら、話すことはいくらでもあるわ。

戻りましょう。カフェ・ドウ・マゴに」

問題解決とばかりに、速足で俺の前に出ていく沢泉。

おい、俺が松葉杖だってこと忘れてるんじゃないだろうな。

そう言いそうになるくらいの勢いで進んでいったが、

7メートルくらい離れたところで立ち止まり、振り向きもせずに。

「あなたが、どんなつもりで言ったんだとしても。」

あなたの言葉…私は、『応援』と受け取ったわ。

当然、これは…私の、勝手よ!」

それだけ言って、少し速度をゆるめて歩き出した。

話聞いてたのかお前?

陸上競技者としてのお前の近くに、二度と表れないって言ったばかりだろうがよ。

そんな文句を言いたくもなかったが、速くてついていくのが精いっぱい。

アツプアツプしながら松葉杖をつき、結局カフェ・ドウ・マゴまでその調子だった。

事件としては、ここで終わりだ。

沢泉のイップス（？）も、大会で見事にハイジャンプを決めて払拭された。

：残念ながら、大会本番では失敗しちまったらしいがな。

直後に襲ってきたビョーゲンズのせいだ大会そのものが強制解散になり。

プリキュアとして無事ビョーゲンズをヒーリンググッバイさせた後で、

誰もいなくなった競技場で花寺、平光が見守る中、同じハイジャンプに再挑戦し。

そこで、飛び方をまた思い出したそうだ。

なんで伝聞調なのかって？ずっと寝てたんだよ俺は！

沢泉への不名誉きわまる例のウワサと、俺の胴体をブチぬいた大量の弾丸については

どうにか隠しぬきはしたが……デカすぎるダメージはごまかしようもなく。

金曜日を病欠した俺は大会当日である土曜日にも布団でひっくり返っていた。

「今は寝てな。あれだけの不利を跳ね返してその程度のダメージなら上等よ」

そう言って、冷蔵庫の中の食べ物を点滴化して俺に投与してるF・Fを横目に、

スマホへ飛んでくる平光のショートメッセージで大会の実況中継を見ていたわけだ



な。

そして、一緒にニヤトランがいた。正確にはレッド・ホット・チリ・ペッパー。

ご近所を停電にするほどのパワーを引き出せば、

プリキュアに匹敵する近接戦闘力のスタンドだからな。

俺の護衛にはうってつけで、本体は平光のそばのまま、スタンドだけ派遣された。

「ニヤトラン、なんでもいい。スポーツドリンクよろしく」

「オウよ! ……ホイツ!」

ガトン!

「さすがチリ・ペッパーだよなあー! ツ、パシリに最適」

「ビミョーすぎるコト言うのやめてくんね?」

F・Fとこうして話していたヤツもまた、俺の大ダメージを知っている。

護衛としてウチにくるにあたってもう隠せないと判断したし、

秘密をバラすこともないだろう: 俺本人がそう思ったこともあり、

秘密は秘密のまま、ガッツリ面倒を見てもらった。

そうして休み明け。

一番心配だったのが、例のウワサの行方だったけど……

最小限の被害で解決したと言ってよかった。

これについては、ウワサの收拾を頼んだふたりの功績が本気で巨大だ。

俺から頼まれた直後、あのクソ野郎：松永の動きを

たまたま知っただろう彼女らは、その時点でウワサの消去は不可能と判断。

代わりに、カウンターとなるウワサ、というか警告を、

平光人脈を通じて周囲に急ぎ拡散しまくったようだ。いわく……

スランプ中にある沢泉ちゆに対して、こんな下品なウワサを流して

陥れようとしているバカがいる。誰が元かは大体わかってるので、

相手にしないように。教師がすでに動いてる。

そんなヤツの同罪にされてもつまらないだろう……だ。

なお、下品なウワサのもう一人の対象である俺の名は伏せられているのが、

この警告文のさらに巧みなところだった。

そこに対して俺を当てはめるような発想は、

下劣に下劣を重ねてなお余りあるってことだ。

金曜日朝の時点ですで行き渡りきった警告は、

ウワサそのものを上書きし、逆説的に広まりようがなくなった。

もつとも、こうなってしまうと沢泉の耳に入ってもおかしくなかったが…

このレベルの話にまで落ちれば、不愉快な…でオシマイだろう。

しかも現実には、沢泉の耳に入ることにはついになかったのだ…

この事実を、益子道男を通じて知った俺は、廊下で見かけたふたりに軽く頭を下げた。向こうも軽くうなずいて、それでこの件はおしまいだ。俺が頼んだなんて事実はない。

そして益子道男は、この状況を通じてウワサの犯人を突き止めていた。

聞けば驚くほどのこともなかった。動機も十分。

やぎまさまのすけ  
矢間左馬助。この世界での、DEATH 3の最初の本体だ。

弁当に潜ませて侵入させたフリー・ファイターズで肉体の記憶を読んだによると。

先週、退院してきたこいつは再び学校に来て…沢泉に恐怖した。

当然だな。夢の中でやってきた、ヘタすると俺以上にゲスな所業を知られてるんだから。

しかも、無敵のはずのパワーに対し平然とブン殴り飛ばしてきた正体不明の存在だ。

ヤツは、沢泉を取り除かなければ未来がないと思ひ込んだ。

だがどうやって? 自分で直接襲い掛かっても返り討ちは目に見えている。

そうやって考えた末に思いついたのが醜聞だったってわけだな。

名声を地に落とし、学校にいられないようにしてしまおうと。そういう話だ。

思いついたきっかけが俺の存在だっていうのが最悪に腹立たしい。

全国級スプリンターがいじめの反撃で半身不随になり、

誰もが目をそむける存在に落ちぶれた…そんな実例さえなければな。

その辺も含めて……くらわせてやるぜ。然るべき報いを。

放課後。帰宅部のヤツは早々にカバンを持って表に出る。

肉体の記憶を読まないでも…よくわかるな。精神状態がよ。

無い知恵絞ってひねり出した必勝の策が、

どこからもしれぬカウンターで叩き潰され無力化された。

ウワサの出発地点にいたのは、当然ながらコイツ自身で。

すでに周囲から白い目を向けられつつあり、

だのに、一時期スランプで弱っていた沢泉は今や元気を取り戻している。

『今度は、オレの方が何かされる』。根拠のない恐怖におびえて帰路を急いでいるが…

まあ、間違いじゃあないな。俺が半径50m以内についている！



……コロン カラツカラ……

『コノコトヲ周りニ吹聴シテミロ。次ハ顎ヲ抜イテヤルゾ。』

悪サヲシテモ同ジコトダ。同志ハ数多クイル……

ソノ、誰ニ対スル攻撃デアロウト……

次ニアレバ、命ガナイト思ツテモラオウ』

「……ア、アギ。アギ……」

『サラバダ、フフフ……ドコカラデモ見テイルゾ』

……これだけ脅してもなんかやってくるってんなら。

もう命をとるしかねえぞ。懲りてくれよ。頼むから。

俺とあんまり大差ない、ちよつとだけ不幸だったお前さんよ。

ちなみに、化膿とかはしねえぞ。ちゃんと処置したから。

手術費用だけ見たら、マジに得しかしてねーんじやねえかな、こいつ。

## ちゆのお手当て・傷口消毒

「皆さん、ごめんなさい。帰り際に…」

「それも、あんな大変なことがあった後で」

「いいのよ、沢泉さん。」

「それで……去年の『あの事件』の話、だったわね？」

「先生の表情が鋭いわね。無理もないけれど。」

「大会が終わった直後……とはいっても、ビョーゲンズのせいでオジャンになったけれど。」

「陸上部顧問の先生を通じて、『あの事件』を知っている全員をここに集めてもらったわ。」

「現地解散じゃあなくて、学校に一度戻ってから解散だからね。」

「休日の、誰もいない体育館に集まることのできたわ。」

「『あの事件』が何かって……もう言うまでもないでしょう？」

「鳴滝魁が私に対してした、おぞましい行為の未遂事件よ。」

「止めてくれたのは他でもない、目の前の先生なのよ。」

それと、居合わせた先輩のうち何人か。いなかったら、どうなっていたか……  
「はい。結論から言いますけれど……」

私は、本人と話して……『許さない』で決着しました」

予想はしてたけど、みんな、ざわついたわね。

当たり前だわ。逆に私がみんなだつたら。

自分を標的にしてきた性犯罪者と直接話す？おろかな真似よ！

奇妙よね。めぐり合わせでそうなってしまったわ。

「ちよッ……ちよつと待って！何考えてんの？」

一番に突つかかってきたのは、やっぱり、りようこね。

すこ中の陸上部に入ってきて以来、友達でいてくれてる子よ。

今回のスランプだって、ずっと励まして手伝ってくれてるんだもの。

どれだけ世話になってるか、わからないわね。

だからこそ当然の反応よ。それだけ心配してくれているの。

私は、ちゃんとわかるわよ？

「りようこ。ごめん。まずは最後まで話させて」

「でもさー……ごめん。話して」

「ありがとう」



もう待ったなしだわ。

あいつは、あいつ自身の悪評が原因で直接襲われた！

このまま放置して、二度目、三度目が起こったなら！

負けなかつたとしても、私たちが助けに入れたとしても

ダメージが蓄積していつて、いずれ……『死ぬ』わね。

だって、治りもしないうちに新しいケガこさえていつてるじやない、あいつ！

『夢』で理不尽な怒り方しちやつたけど、正直、このイライラを抑えるのは無理よ。

ひどいケガしているのを見せられても、『関係ないから』。

そう思つて平和に過ごせる人間には……なれないわ。絶対。

フー・ファイターズで治る？だからなんなのよ。痛いわ。

それでも、戦わせないわ、つて言えるほど、人手も足りていなければ、情報も足りて

いない。

傍観者に押し込めたところで、やっぱりいつか殺されるだけ。

連絡を密に、一緒に戦うしか生き残る道はないわ。そして、それは私たちも同じよ。

その邪魔になるものは、なんとしても取り除く。それだけね。

「まず……彼が転校してきてから、私はそれとなく監視していました。

どういふことがあつてここに来たにせよ、

あれと同じようなことをさせるわけにはいかない……そう思ったからです」

ごまかすことが何もないくらい本当のことよね。当時はただそれだけ。

いじめの復讐に遭って足が動かなくなつたことを知つたところで、ほぼ敵よ。

ただ孤立している彼を見て、これが悪人の末路か……つて、冷ややかに見ていただけだつたわ。

何かをする様子もなくつて、脅威を感じなくなつた私自身も、やがて興味をなくしていった。

それがまさか、こんなことになるとはね。

「私と同じように思っていた人も、何人かいるかもしれません。

いたとしたら、知っているでしょうけれど。

彼はただ孤立して、何もしなかつたわ。

本人に聞いたわけじゃあないけれど、気力が尽き果てていたみたいね……続けます」

ここからよ。話す機会がない人には、誰も話していなかつたこと。

あえて話す必要がないのなら、それで別によかつたけれど。

もう、それは通らないわ。避けて通ることはできない。

「入学式の週の日曜日。町内で下水の噴出事件があつたけれど。

あの現場に、彼と私は居合わせていたんです……」

彼は被害者として、私は目撃者として」

先生が真顔になった。

すでに、事件そのものは知っているのよ。先生は。

私とのどか、ひなたが下水道に落ちた人を救出したっていう事柄だけは、すぐ病院に行ったとはいえ：何かの感染症が遅れて発症しかねないって、

お母さんが、気づけばすでに連絡していたの。

部活に出るなり、怒られつつも褒められたわ。よく勇気を出したわね、って。

ただ、そこで助けたのが鳴滝魁だとは知らなかった。それが確定した瞬間ね。

：お母さんは知らないはずよね。話していないもの。

私と彼との間にあった事件のこと……どうして、あえて名を伏せたのかしら？

まあ、いいわ。今は重要じゃあないものね。

どのみちカバーストーリーよ。余計なことを考えていたら口を滑らせかねないわ。

「マンホールがはじけ飛んで、下水が噴出したことは知っていると認めますけれど。

彼はその時、下水に落ちてしまったんです。

そしてそのまま、噴出するほどに入り乱れた下水の流れに、上半身の力だけで抗って

いた…

しばらくすれば、それも収まりはしたけれど。彼の足は動きません。

もう、ただ流されてどこかにさらわれるしかなかった……

そこに、私を通りかかったんです。私と、花寺さん。それと平光さんが」

嘘じゃないわね。私たちがいなかったら、鳴滝くんは下水道の奥深く彼方よ。

そしておそらくは、すこやか市の命運ももろともに断たれていたわね。

考えれば考えるほどに薄氷なのよ、ココ！

もし、彼がのどかを信じる意思を見せずにメールを送らなかつたら！

もし、ひなたが体内のフー・ファイターズを恐怖したままに消去していたら！

もし、私の体内にあえて誘い込む戦法を思いつかなかつたら！

どれが欠けても『詰み』だったわ。

もつと言えば、F・Fが目覚めなければ、彼はあの場で死んだわね。

彼に死なれたのなら、倒したDEATH13を回収する手段がないから『夢』の訓練

はできず。

F・Fがないということは、命令DISCの存在に気付くきっかけがない。

何も知らずに行つたゆめポートで、突然ひなたが殺人犯になるわ！

それら諸々を乗り越えたとしても、おそらくスカー・ティシューでトドメよ。

……お、恐ろしいわね……いいえ、それ以前に！

そんな理屈を詰めた話よりも前に！

彼を死なせることで、私たちは確実に『弱くなった』はずよ。

手を伸ばしても助けられなかった後悔が胸に穴をあけて、ふさがらないと思うわ。そんな弱った心で戦う私たちは、絶対に今よりも不利よ。

だからこそ、今ここでも引けないわ……話を続けていく。

「なんで私が、私たちが……って、考えなかったかっていうと、嘘になるわ。

それでも、気づいてしまったから……行くしかなかった。

行かなければ、彼は死ぬんだもの。どう見ても確実にね」

当然、これも嘘じゃあないわ。経緯はともかく。

ビョーゲンズを倒すため、はもちろんだけど、

私たちはみんな、彼を助けに行ったのよ。そこに打算はないわ。

「助けて、って、言われたの？」

「……いいえ。むしろ、とつくにあきらめていたのかも知れないわね。

少なくとも、助けに入られるなんて、思ってもみなかったみたいね」

出まかせも苦し紛れもないからスムーズね。事前準備もあるけれど。

聞いてきたりようこも、ウーンとうなるだけで、すんなり引つ込んだわ。

「みんなで引つ張り上げて助けて、少し落ち着くと、彼の方から言ってきました」

『ごめんなさい。そして、ありがとうございます。』

言うべきことがあまりにも多すぎて言葉が見つからない』  
「それを聞いたから、私も…話す気になったんです。

それから、あの事件についても話して……

私は『その清算はできない』…許さない、と言って。彼もそれに納得しました』  
「なるほどね」

じつと聞いていた先生が、うなずいてから口を開いた。

「円山先生からも聞いているわ。

…最近、彼と…平光さん、たまに花寺さんが、

いくらか会話していることがあるって。

そういう縁から始まっていたのね」

「はい」

「…それで。その話を私達に聞かせて…

沢泉さんは何を望んでいるの？ 私達に」

「彼に対し、『中立』でいることを！」

即答よ。もつとも大切なことをね。

こんな話をしたところで、先生から見た彼に対して、  
信じるかどうか言ってもそこまでの効果は望めないわ。

他のみんなは、先生以上にそうよ。

「味方する必要はありません…『中立』でいいんです」

「どうして?と聞くわ。正直むずかしいもの」

それはそうよね。私だけの問題じゃあないわ。

性犯罪に手を染めかけたヤツについて、いったん忘れろ、と強要しているも同じなのよ。

ただどこかは、唯一の被害者である私の立場を使って押し通るわ。

「……まず、私の立場として。

再起不能になりかねないことをされかけた私ですけれど。

その犯人は、今までの馬鹿な行いの代償を、陸上選手生命で支払うことになったわ。

全国レベルのスプリンターが、動かない足を引きずって生きるのよ。

しかも家族に見放されて、ただ一人で知らない町に放り出されている……

被害者である私としては、もう十分に罰を受けているものと思います。これ以上は望

みません」

「知っているわ。彼が動かない足で、誰の手も借りられない一人暮らしをしていることはね。

でもね沢泉さん。それをあなたが哀れむ必要はあるの?」

私が思うに……あなたの仕事だとは、とても思えないけれど？」

……くくくッ、まッツツたくその通りよ。

でも、それこそが問題なのよ！

カバーストリーだろうと、そうでなかりうと、依然変わりなく！

正面からぶつけていくわ。先生がそれを望んでる！

「……………。彼は、私に謝ったわ。」

今のところ、そういう風に生きていく気になっっているけれど。

私たちが手の平を返せば、いつでもそれをやめるでしょうね。

おそらくは、失望感と一緒に」

「だったら……」

「わからないですか？

『失うものが何もない』

その怖さに今！私たちは触れているんです」

ひなたはともかく、のどかなら私と同じことを感じているはずだわ。

あの時あいつは、嫌われ者の自分が消えて、それでおしまい、って本気で思ってたわ

！

ジョセフさんの言っていたことと照らして、今ならなんとなくわかるわ。



『失う』と感じるものが何もなかったから。

あいつは『意味のある死』に突っ走ろうとした……そうよね？

「私の仕事じゃあない。その通りだって思うわ。」

でも、このまま放り出したなら……あいつ、もう、誰の話も聞く気がなくなるわよ。

その先に起こるのは何？ 自殺しろって祈れとでも？

ええ、人に危害を加えるよりはマシでしょうね。でも……

私には、私たちにはツ！ たまったものじゃあないわツ！

そんなの、殺したも一緒じゃない！」

「それは私達教師が止めるし、私達の責任だわ。」

誰もあなたを責めないわよ」

「責めるわ。私が責める……私を、責めます。」

これは、のどかもひなたも……同じはずです」

『死んでもいいや』。

確か、『未必の故意』っていうはずよ。そういうのをね。

私が、プリキュアになったとき。ペギタンに貸してと言った力は。

苦しむ人に手を差し伸べられる強さ、よ。

それに背くのなら、もう私にプリキュアの資格はないわね。

「……正直、納得できないかなあ」

みんな黙ったけど、りょうこが前に出てきた。

「あえて言うけど、されたことからしてき。

『死ぬ』って願っても全然おかしくないんだよ?」

「それは……そうね」

「ちゆ」

少し困った顔をしていた彼女は、そこから私の顔をのぞきこんできた。

顔を寄せて、真剣な目でね。

「あいつはもう悪いことをしないんだね?」

「ええ。」

今日、お願いしたのは…そこから、転げ落ちさせないためよ」

彼女もまた、私に即答を求めているのがわかったわ。

私の名譽と信用を賭けられるのか。そういうことよ。

賭けるわ。もう、とっくにさんざん悩みぬいた後よ。

それを確認した彼女は、首をかしげて微笑んだ。

「納得できないって言ったけど。」

そーいうのはちゆらしいって、そっちの方だと納得できちゃうんだよね。

…うん、わかった。私は黙って見てることにする」

それから、先生や先輩がた、他のみんなの方も見て。

「そういうことでもいいですかね？先生も、先輩も」

地面を濡らすにわか雨みたいに、みんな、まばらに少しづつうなずいた。

黙って見ている。そういうことでもいい…か。

『中立』っていう最低限の目標は達成できたと見ていいのかしら？

この言い方だと文字通り、どこかから監視されかねないようには感じるけど……

そこは、悪いことをさせないように手綱を握つとくしかないわね。

まあ、実際に更生の意志は見せてるんだし……ハア。

面倒なことになったわ。

## 緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！―その1

「向こうからも連絡来たわね。準備完了よ」

「りよーかい、ちゅちー」

ちゅちーの大会とか、タツキーがカゼひいたりとかで後回しになってたけどさ。

今から始めんだよ。チリ・ペツパーの瞬間移動実験！

ニヤトランだけが移動できないのはわかってるけど、

『キュアスパークル』だったらどーなのかって話！

これがダメだったら、みんなの中であたしだけ瞬間移動おいてほりだあ。

ヤダよ、遠くにビョーゲンズ出て！みんな一瞬で到着する中！

あたしだけめっちゃダツシュして追っつくとか！もう戦い終わってんじゃんへタしたら！

ってワケで！

「溶け合うふたつの光！キュアスパークル！」

「ニャアー！」

プリキュアに変身したあたしを、ヒーリングステッキになってるニヤトランが移動す

んの。

トーゼン、ニヤトランごとな。今いる、ちゅちーんちの近所の公園から、展望台まで。展望台ではタツキーが待ってるよ。人があんまし近寄らないコンセントがあるから、ソコ。

「始めラビー！」

「アンツ！」

ビピー~~~~~

ノリノリのラビリンがホイッスルを吹いて、ラテも一吠えして合図くれたのと一緒に、

ニヤトランがチリ・ペツパーの力を使う。あたしが電気に変わっていく。

「よっしや、ここからはオレも変わるぜ！」

「スタンドを使うには！『できて当然！』って思うことだよ、ニヤトラン！」

「おーよー！」

のどかつちがニヤトランに飛ばしたアドバイス、なんだっけ。

エエーつと…承太郎さんがなんかのノートで見たやつだ。

スタンドを知ってる誰か…あ、そーそー。D I Oが遺した天国行きのノート！

アレに書いてあったヤツ。

思い出してらうちに、ヒーリングステッキも電気に変わる。

コレって、もしかして、もしかしたら！

「変わったわ！あなたたちはみんなエネルギーよ！」

「じゃ、飛ぶぜー!!」

みんなエネルギー。体がないのってフシギなカンジ。

そーいや、タツキー幽霊になってたっけ一回。

こんなカンジだったのかな、アツチで聞いてみよ。

でも幽霊っていえば、タツキー何度も死にそーな目にあってるよーな。

それはあたしもだけどさー。あたしはプリキュアじゃん？

戦ってるとき、体はずっとガンジヨーになるからいいとして…

タダの人間でビョーゲンズとかと戦って、そのたびケガをしてたらさ。

そのうちホントに幽霊になっちゃわない？

「オウ、スパークル！成功だ、成功だぜ！」

「…あッ、展望台？」

「成功だつてよ。聞こえてんのか？」

「あ、タツキー。ユーレイになんないでね？」

「ン？…ア？」

その……順を追って話してくんない?」

「順…順番? チョイ待ち……」

ええと、あたしたちみんなエネルギーで、体がなくなつてえ。

そういうえばタツキーも幽霊で、あたしはプリキュアだからイイけど」

「チョト待て…ちよつと待て。整理させろ」

「…何やってるのよ」

いきなり目の前にいたタツキー。

メモ帳取り出して、松葉杖にヨツカカリながら

なんかカリカリ書いてる横から、ちゅちーが来た。いつの間に。

「あ、そーか、成功したんじゃないん!」

「やったねニヤトラン!」

「成功だつってんじやあねえーか。」

「アツチのみんなも連れてきたぜー」

前やつてもらったときもそーだったけど、

ホント一瞬で到着すんだよねチリ・ペツパー。

「そーいやさタツキー。チリ・ペツパーが時間止めるつて話…

ン? 電気が光になつてエ」

「平光、おまえなあああ〜〜ツ

さっきの話すら！俺はまだ理解できてねえんだが！」

「い、い…」

「まーたやっちった。

あたしの話、次から次にどっか行くって、

ちゆちーとかタツキー以前に、パパとか、お兄とかお姉にも注意されてんのに。

話すのは大好きだから、思ったことそのまんま、気が付いたらついつい。

ちよつとダメろ。

「……。見てもいいかしら」

「ん」

ちゆちーがタツキーのメモを見て、すぐにトンと手を叩いた。

のどかつちもうなずいてる。

『ユウレイになるな』

エネルギー、カラダがない、ユウレイ、プリキュアだからヘイキ……

あーワカツてきたわね」

「どうい…？」

「ひなたちゃん、さっき電気に…エネルギーになってたから。



それで、体がないって思ったんだよ。たぶん」

「…あー、ワカツてきた。ソコで幽霊を連想して！」

以前、幽霊になった俺につながって！」

チリ・ペツパー戦で大ダメージを受けた俺につながったんだな？」

「で、ユウレイになるな。でしよう？」

死なないで、つてことよね。早い話が」

「…：ウ、ウン。そゆコトそゆコト。」

ちゆちー、エラーイ!のどかっちスゴイ！」

スンナリ話がわかっちやった！」

ふたりとも、ここで話聞いてなかったのに！」

すこしキマリワルそーにしてるタツキーが、

ワキを見たまま言ってきた。

「そういうことなら。」

少なくとも、今死ぬ気はサラツサラないね。

安心してくれていい」

「なんで目をソラして言うかなあーツ」

「テレクセーんだろ、察してやろーぜ」

「ウルセーよニヤトラン」

「イツヒヒヒ」

ニヤトランがジャアクな感じで笑ってる。

ウン、良き良き。

ガツコじやあ今もひとりぼっちっぽいタツキーだけどさ。

こーやってニヤトランとジャレてられるんだもん。

「ところでー」

エヘン、オホン、ってワザトらしーセキバライをしたのはちゆちー。

あッ、なんかオコツてくる感じ…なんかマズツた？

「あなたたち、ふたりとも声が大きいわ。」

「ここは『夢』の中じゃあないのよ？」

ニヤトランも。周りに気を付けなさいね？」

「……あ」

しまった。そーだよ。『夢』じゃあないじゃん。

F・F、つてゆーかエートロくないじゃん。

聞かれちゃあマズイ話つてのもあんだよね。

ホンットにメズラシーコトに、いつもはあたしに

怒ったりツツコんだりする側のタツキーも叱られちゃってる。

「…わ、悪かった。マジに悪かった。」

じゃあ、今日のところはここで解散…:は、まだできねえな」

『皇帝』、あるんだよね？」

「これだ。手早く試そうな」

のどかつちに聞かれたタツキーは、一枚のDISCを差し出してきた…:

「また適合しなかったわね、私」

「ボクだったペエ…:よりもよって」

ハイ、今度は『夢』の中! ナイシヨバナシもダイジヨープ!

みんな寝静まつてるし、起きててもここに入ってこられるヤツは誰もいないモンね。

あたしたちのヒミツキチ!

今は、あのDISCを試した結果を相談してるよ。

「実は俺にも適合してる。だけどな…:」

「知つての通り、こいつの生活と戦いは、

ステにあたし抜きじゃあ成立しない……

今更こいつを使う理由は、はつきり言つて、ないね」

「…そうね。F・F。」

あなたなしじゃあ、今後生きていけるかも怪しいわよね」

「タツキー、ヒモ？」

「ウラヤマシーつてんなら代わつてやつてもいいんだぞ」

「……。ゴメン」

いつもみたいに思ったまんまを口に出したら、

タツキーにジト目で返された。

言つてイイこととワルイことがあつたみたい。

タツキーだつて、あたしみたくプリキユアになれるんだつたら。

足がちゃんと動くんだつたら、ヒモやらずにすむんだもん。

「…ア、アレ？」

代わるつてコトはあ…F・Fがあたしに来て。

ニヤトランがタツキーに行つて……タツキー、プリキユア」

「ややこしくなるから黙れよ平光ッ

いや、確かにそこが問題ではあるんだが!

「ニヤトラン、できるの?」

「シー、たとえばだけだよおー、のどか。

オメーもプリキュアにはなれてるワケだけだよ。

オレとオメーでプリキュアになれるかは、また別だと思っせ。

それにオレのパートナーはひなただぜ、ステにな。

とつかえひつかえできるモンかっての!」

「そっか。そうだよね…」

「ラビリンも同じラビ!」

「そーいうわけだからな。机上の空論ですらない…

ムダなコトやってないで本題に戻るぜ」

「ムダって言われんのもカチンとくるよなー。ま、いいや」

でもホントに。なんでプリキュアになれないかなあー、タツキー。

なれたら、何度も死にそーにならずにすむのに。

皇帝<sup>エンペラー</sup>だって、プリキュアだったらほぼ楽勝の相手じゃん。

ひとりだけ人間の生身で戦うしかないの、あたしたちもシンドイ。

こっそりラテに聞いてみる。

「タツキー、プリキュアになれないの？」

「…クウーン」

あ、めつちやムズカシイ顔された。

困るなあ〜、ウーン。

「さっきも言った通りだけどな。

俺が持つてても意味が薄いのを抜きにしてもだ。

戦えるスタンドをお前が持つ意味は大きいと思う」

「……正直、怖いペエ」

「だろうな……」

銃だもんね。

うつむいて悩んでるペギタンの中には、すでにDISCが収まつてる。

どーやって引き金を引くの、つてのは置いといてさ。

思った通りの場所に曲がって飛んでいく銃弾を、ペギタンはいつでも撃てるんだ。

あたしだって知ってんじやん、その気持ち。太陽使<sup>サン</sup>つてるんだから。

しかも、松永センセがタツキーを襲つたばっかし！

DISCのせいで人殺しをマジにやっちゃった松永センセは、

今週になってガツコを休み始めちゃってる。

記憶を読む限りだと、だいぶドクゼンテキだけど、  
そこまで悪いヒトじゃあなかったらしくって……

明らかにD I S Cに人生を狂わされて、

抜き取られた後のこれからも修正はできないってF・Fが言ってた。

あたしだって、みんなに会えてなかったら、そーなってたってことだよ。

そんなの間かされたら、コワくないワケないじゃん。

「ペギタン、ダイジョーブ！」

D I S C入ったりしてないじゃん、あたしみたいに」

「だから怖いペエ」

「……えッ、どゆこと?」

「こんな武器を持つことそのものが怖いペエ。

命令D I S Cが入っていないのなら……これを使って間違えるのはボクだペエ。

間違ったとき、おそろしいことになるペエ」

「……それは……ウン」

出した皇帝<sup>エンペラー</sup>をカフェ・ドウ・マゴのテーブルに置きながら

それを見下ろしてるペギタン。なんでペンギンさんに銃なの?

見かねた、っていうのかな? ニヤトランがはげまそうとしたけど。

「オイオイペギタン。それ言ったらよおー、オレだって」  
「もし、俺が！」

今から一年前の俺が、こいつを持ったんなら！」

タツキーがそれをさえぎってきた。けっこーキツイ感じで。

「ロクなことに使わなかっただろうよ。」

『見えない銃』の超能力っていうんなら……

俺はきつと、面白半分に誰かの手足に穴をあけたと思う。

……穴をあけた先が、脳天だったかもしれない」

「何を……言いたいんだペエ？」

「ペギタン。お前は、その……その力をさ、守ってくれねえかな。」

そういう、自分のやつてることも理解できないバカヤロウどもから……な。

武器を『怖い』っていうお前なら、なおのこと、信じられる……んじやあねーかな。

少なくとも、お前は俺よりうまくやる。そう思う……んだけど」

みんな黙っちゃった。

もう、またそーゆーコト言う。自虐とか面白くないんだよ！

でも、ま……ペギタンのこと、はげますために言ってるんだもんね。

それに免じて許したげる！



ペギタンは、それでもちよつとネバろうとしてたけど。

「これは…魁が苦勞して勝ち取ったものだペエ」

「そうだな。なら、ゆずる代わりに俺の言うことを聞いてくれよ。」

これでお前にもスタンドが見えて、お前自身とみんなの身を守りやすくなるんだ。

手前味噌だけど、いい取引だと思う」

「……ズルイコト言うペエ。断れないペエ」

「F・Fと相談して考えてきたんだよ。嫌がる気してたからな」

最初からいろいろ考えてきてたっほいタツキーに、結局は皇帝エンペラーを渡された。

まだためらってるフウではあったけど、差し出された銃のスタンドを両手(?)で

確かにシツカリ受け取ってた。

「確かに、受け取ったペエ。これを、シツカリ守るペエ」

「よし。さしずめ…これでお前も皇帝ペンギン、つてとこか」

……台無しじゃん。

あたたかい空気が一気に逃げてったんだけど。

あーもう、のどかっち固まっちやっつてんじゃん。

「………………。ああ、言っちゃったペエ」

「……ん?……………アッ!」

タメ息をついたペギタンに、タツキーがちよつと考え込んで…  
のどかつちとほぼ同時に同じトコを向いた。…ちゅちー？

……………あ、ヤバ。

あたしもわかつたその瞬間に、ちゅちーが噴火した。

ポブフウツ!!

思いつきり吹き出して顔がゆがんだ。残念な方向に。

お腹あたりがピクピクふるえるのが肩にのぼってきて、すぐ頭にまで来てた。

ウフフハハハハハフハハハフハフフフフフフ

クツクククツクツ…フウウーッ

ウウ、フウーッ、ククククフフフフハハハフハハフウフフフフクククク

ク

ウグ、クフウーッ、クツクツクアハフハハハハハハ…

「皇帝、ペンギ…皇帝ペンギン、つて！」

ちよつと！そんな……ないわよお！」

ヒツヒツヒツ ハッハッハッハハハハハ、フウ…ツ…

「タツキーさ。わぎとっ？」

「…いや、ただただ俺がバカだった」

「何もかも台無しラビ」

「ほっとくしかないのかな、ちゅちちゃん……しばらく」

このときはまだ、夢にも思ってたんだよね、あたしたち。

このちよつと後で、ビョーゲンズ相手に負けに近い戦いをするようになるなんて。

## 緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！―その2

「でも……どうすればいいかしらね？」

爆笑が収まった後、キマリ悪そーにオホンとせき込んだ沢泉が

一転して深刻な顔で切り出してきたのは、今後の方針だった。

「スタンド使い狩り、つていうF・Fが出してくれた方針は正しいと思うけど。

今の私たち……すべてが『後手』よ。先に回れてないわ」

「先に回る方法がないペエ」

「ビョーゲンズも、悪いスタンド使いも、いつだって攻撃してくる側ラビ。」

ラビリンたちは、いつも出てきてから防ぐしかないラビ……」

そう。俺たちには、敵に先んじる手段がない。

たとえ自分のクラスの担任がスタンド使いになつていようとも、

それをあらかじめ感知できるような仕組みがないのだ。

これでどうやってスタンド使いを狩るといふんだ？

ヒーリングアニマルのみんながウワサ話を集めたりはしてくれているが、

これはどうしても『受け身』だ。他人の話を横から聞くだけなんだから仕方ない。

これだけでは到底、耳が足りないのだ。

「仕組みがいる。スタンド使いの情報を知ることのできる仕組みがな」

「そーは言ってもさ、どーすんの?」

「……。前回のアレ……は、いきなり襲い掛かられちまったんで

どうしようもなかったけどな。普通に考えればウワサ話だろうよ」

他ならぬ俺が実感したんだよ。予兆すら感じ取れなかったらどうなるかってのは。

あのクソ野郎……松永先生が、すでにすつかり殺し慣れてて、殺気を表に出してなかったなら?

F・Fがそれを感じ取ることもできなかつたなら?…俺は今頃、地獄で鬼に茹でられてただろう。

いや、親不孝だから賽の河原ってやつの方かもな?どのみちもう孝行なんかする気ねーけど。

ンな、くだらん観念的な話なんざどうでもいいんだ。役に立つことのみを考える。

「ウワサ話?だったらあ、あたしの出番じゃん!」

「まあ、そうなる。だけどよ平光。

ビョーゲンズとかスタンドとか、俺たちが知ってるのを回りに知られるのはヤバイ。重要なのは、こいつをごまかし切って情報だけを集めることなんだが…できるか?」

「……ウツ、ムムム」

ニヒツと笑つて齒をキラリとさせてるコイツには悪いんだが、冷や水ぶっかけざるを得ないのがツライとこだな。

いや、こんなこと言うけど、それでも俺なんかよりはるかに適任なんだぞ？俺はそれよりずっと以前に門前払いなんだから。

「そうよね。ごまかせない子だもの…」

だからこそ、みんな安心していろんなことを話してくれるんでしようけど。

この際、それは欠点よ」

「伝わっちゃうね。顔から、態度から…いろんなものが」

「たはあくく…ダメじゃんあたし」

テーブルに手をつけて肩を落とす平光。

そこにすぐ声をかけるのはやっぱりニヤトランだ。

今回はペギタンも。

「オイオイひなた、ダメなんかじゃねえーだろ」

「長所と短所は表裏一体。ままならぬもの…だべエ」

あつ、DIO 語録。これはエンヤ婆の手記が出展だな。

承太郎が天国行きのノートと一緒に回収してるんだよ。日記とか。

ただの人間が及びもつかない超越的ド悪党だけど、

遺した言葉には割と含蓄あるんだよな……洗脳されるわけにはいかん。

でも、使えるものは使うってことか。その態度、イイな。ペギタン…タフだぜ。

「なら、この『任務』を一番うまくやれる…『適してる』のは誰だ?」

「シヤクだけだよ、オレたちヒーリングアニマルは一番最初に除外だな…

ヒトと話せねーんだもん、直接」

「あたしも当然その一人だな。ニヤトランたち以上にヤバイかも。あたしの場合」

ニヤトランにF・Fも続く。そりゃ人外じゃあよ。俺以上にムリか……

誰かを隠れ蓑にすればイケるかもだが、誰がそれをやるってんだよ。

できたところで、そんな宴会芸になんの意味がある? ヤヤコシくなるダケ!

「なら、人間のみんなのうち、誰かだペエ」

「別に一人に絞る必要はねーけどな」

「そう、さつきペギタンも言ったが! 長所と短所は表裏一体……」

聞き出したい情報は、タダの噂話か? 秘密にしておきたいバカげた目撃談か?

必要になる能力はこれだけでも違ってくるわね」

「タダの噂話、なら…ひなたが断トツでたくさん集められるわね」

落とした肩のまま、平光の顔と目線が復帰してきた。

沢泉じゃあないが。現金だよなお前。

「で、でもさ。そんなんでビョーゲンズとか！スタンド使いのハナシ集まんのか？」

…ん？何、後ろ向きなこと言い出してんだ…

そういうのは俺にやらせとけ。お前じゃあない。

……というか。俺だな。元気へし折つたの…フォローだ。なんでもいい。

「平光。俺には出来ないんだがな、お前のいう『そんなん』はよ」

「……あつ…ゴメン…」

責めてねえ。俺は責めてねえ！なんでそーなんだよ？

凶太い時はトコトン凶太いお天気頭のくせに、ちよつと揺れるとぐずつくコイツのこ

と、

俺はたまにわからなくなる。それとも、最初つから何もわかつちやあいないのか。

こうなるとメンドくさいんだよ。どう触ればいい？

その辺を俺よりよっぽどわかつてるのは、花寺だった。

「ひなたちゃん。違うよ。鳴滝くんが言いたいのは！」

「人によつて、出来る事が違うのよ！それだけよ。」

私も出来ないわ、ひなた。スタンドと同じよ。

スターフラチナ

星の白金は無敵の近距離パワー型だけど、遠くまでいけないのと同じよ」



「そうだペエ。隠者ハイミット・パープルの紫は弱つちいスタンドだペエ。

でも、どんなものでも探せるし、茨つていう形をしてるだけで工夫して戦えるペエ!」  
 合わせてくれた沢泉とペギタンにうなずいた花寺が、そのまま続ける。

「うん。だからね…みんなで作ろう? 隠者ハイミット・パープルの紫を!」

「エツ…? スタンド、作んの?」

「もちろん作れないよ? でも、力を合わせれば…近いことは、できるんじゃないかな」  
 「ソコに、ひなたの力はゼツタイ必要ラビ!」

「うん…:ええと」

そしてホワイトボードをポンと出し、マジックで断続的に書きなぐっていく。

…:なんというか。こーいうことするキャラに仕立てたのは俺たちだよな。

いや俺だ。間に立たせて調整ばかりさせてきたもんな…:すまん。

ともかく、建設的な地図が目の前に出来上がってきた。

「まず、ひなたが噂とかの情報をたくさん集める。

それを、鳴滝くんが選別するのね」

「スカー・ティシューの事件のとき。

使われてるスタンドがチリ・ペツパーだつて特定したの、ほとんど鳴滝くんだよ。

あのときみたい、細かい違和感を拾ってほしいなーって」

「んで、そこで出てきたヤバソーな話をモット詳しく聞きこむのがよーッ！」  
「みんな知ってて、信頼されてるちゆだペエ！」

「ペギタン。くすぐったいこと言わないで。」

顔が知れてるせいで動けないケースも出てくるわよ」

「その場合はわたしがやるの。わたしはどこを見ても中途半端だから。」

手が足りないところに助けに入ればいいかなって思う」

何が中途半端だよ。

今ここで発表されてるのは、有力な情報を絞り込む仕組み…いわばシステム！

ちと、俺の責任が過大に過ぎる感もあるが……やれっていうなら、やってやるぜ。

元々、図書室で本だの新聞だのずっと当たってたしな。情報源が平光になるだけだな。

「え、エエーッと……どうすればいいの？あたし、コレ」

「お前の周りが出てきた話をひたすら俺に流し込むだけな。」

どことなくだらん話でも、そこから何か見つけ出すのは俺の仕事ってわけ。

材料を集めてくんのは、お前な」

イマイチ飲み込めてなかった平光も、俺のぶつちやけた説明を聞いて、

しだいに目をパアツと輝かせてきた。

「ス……スゴイじゃん、のどかつち！」

これならあたし、役に立ちそーじゃん！」

「ひなたちゃんがいなかったらできないよ」

はにかんだ風に笑ってる花寺だが、マジに言う通りだろうな。

仕入れは全部、平光持ちになるんだからな。これだと。

平光人脈のパワーは俺自身、実感したばかりだぜ。

「いいね。うまくいくのなら、あたし達よりもハイレベルかもね…」

囚人同士のネットワークならエルメエスもそれなりに持ってたけど、

あとはエンポリオと、スピードワゴン財団頼みだったからね。振り返ってみれば…

あんたらはプリキュアで、守るのはみんなだ。

それくらい能力が必要なかもしれない」

F・Fがそう締める。

この、ヒーリングっどプリキュアの集まりが部活だとするなら、

F・Fはさしずめ顧問ってとこかな。戦闘経験が段チだし。

「さしあたって、まず調べるべきは……」

スカー・ティシュー戦、あの正体不明の『時間停止』現象だろうね。

あたし達の中にすら目撃者が二人いるんだ。

似た経験をしてるやつがいてもおかしくない」

そして彼女が持ち出してきたこの話は最重要だった。

現時点で唯一、ホワイトスネイクにつながりそうな手がかりだ。

「…チリ・ペツパーじゃあダメなんだっけ？ タツキー」

「ダメらしいな。電気の速度は約30万km、毎秒！

これは光の速度と同じだ」

「えッ？ 光の速度になってんじゃない、ダメなの？」

「『同じ』であって『超え』ちゃあいない。

電気の速度は光と『同じ』であつても『超え』られない。

スター・プラチナ  
星の白金の世界に入門できないってことだ」

「そ…そっか。ダメかあー」

調べた限り、少なくとも真つ当な物理法則に従うのでは

電気の速度が光を超える手段は無いようだった。

もつとも、俺は物理学者でもなんでもないんだ。

付け焼刃で当たれる範囲にすぎないけどよ。

そうなる、もう結論はひとつしかない。沢泉もそれを言う。

「なら、決まりね。あの現場には、スタンド使いがいた。

しかも、何かの形で時間に干渉する能力の、よ」

「それなんだけど、可能性としてはもうひとつあるかな」

「もうひとつ?」

だが、そこに花寺が出してきた別意見も、それだけに大きな説得力を持った。

この場にいる中で、彼女の頭こそが一番やわらかい。

「数秒間、近くにいる人間全員の意識を失わせる能力…とか。

こんな能力があつたとしたら、見た目の上だと同じことになるかなって」

黙って考え込んでしまう。全員が。

スパークルの目から見て、動いていたのはフォンテーヌとスカー・ティシューだ。それと電線。

仮に時間を止められたのだとしたら、能動的に動けるのはスカー・ティシューのみのはず。

地面に落とされていたフォンテーヌはともかく、時間停止の中で電線を振り回したのなら、

解除されたタイミングで溜まった運動エネルギーが解放され、バチバチ暴れていたはずだ。

実際のところ、それはなかった!

つまり、こうは言えないか。時間は動いていたのだと。

意識をふつ飛ばされて棒立ちになっているスパークルを放って、

同じように意識なくスキだらけになっているフォンテーヌを電線で叩き落し…

「……待て。いや待て。」

それだと、スカー・ティシューだけが意識を持って動いていることになる。

スカー・ティシューにもうひとつスタンドがあつたとしても？」

「それは……ううん」

論理の穴だ、そこは突く。

間違いを放っておいたら敵の正体がますますわからなくなる。

そこへさらに、目をパチクリさせてた平光が突っ込んできた。

「…意識、ないまま動いてたとか？」

「どういうこと、ひなた」

「寝ボケて歩き回るとか、あるじゃん。」

意識ないまんま、するはずだった動きだけしてた…とか？

ないか……ハハ」

正直、ないだろ、と思って聞いてたが。

つじつまは……合うよな！

「いや…それなら、スタンド使いがスカー・ティッシュー本人である必要もない。近くにいたどこかの誰かだっという線とピタリ合うぞ。」

「少なくとも、時間能力者がそうポンポン現れるよりは順当だな」

「でも、だとしたら何をやっていったのかしら?」

「助けに入ってきたわけでもないし、隙をつきに来たわけでもない…」

「何か、他の目的で動いていたスタンド使いが、偶然そのタイミングで能力を?」

「材料がないね。情報を集めるしかない…さっそく明日から動けばいい」

「もともと、それを調べようか、って相談だったしな。」

「しかし、すでに沢泉はそこにつながるかもしれない情報を持っていた。」

「関係あるかはわからないけど、気になる事件ならあったわ」

「事件?あの日にあったの?」

「あの日に二人、行方不明者が出ているわ。」

「お母さんの、旅館業のつながりからたまたま知ったんだけれど…」

「まず、サーファーの男の人…毎年、今ぐらいの時期に大阪から来てた人らしいわね。」

「その人が、サーフボードを抱えてホテルから出かけたつきり、戻っていないわ。」

「警察も、海上救助も動いたけれど、発見できていないままね」

「もう一人は誰ラビ?」

「蘇我さん、っていうおじいさんらしいわ。一人暮らしのおじいさんよ。」

「この町の人らしいけど、私との接点はないわね…ひなた、ある?」

「んー、わかんない。たぶん、知んない」

「同じ日になくなっていくわ。こっちも見つかってない。」

「…ただ、それだけよ。無関係の可能性だって高いわね」

「とはいっても、とっかかりが何一つないよりはずっとマシだよな。」

「不審な行方不明事件か。スタンド使いの仕業だとしたら、」

「被害者かもしれないし、加害者かもしれない。」

「しかし、こことがデリケートだな。」

「興味本位で首突っ込んだと思われたら、平光の信用にキズがつくぞ。」

「沢泉でもおそろく厳しい。なんのためにって言い訳が思いつかねえ」

「そうよねえ。自分を卑下する気はないけど…」

「警察の仕事の前には、私はしよせん、たかが小娘一人なのよね」

「言いたくないけど、生存は絶望的だな…」

「その意味でも、無関係な外野に首突っ込まれて面白いヤツはいないだろうね」

「手詰まりか。」

「みんなそろって頭を抱える中、ニヤトランがチツチツチ、と指(?)を振り始めた。」



「そのヘンはよおろくろオレの出番じゃね？」

正確にはチリ・ペツパーのよ」

「……。警察かよ、ニヤトラン？」

「ご名答だぜ。搜索ソウサクしてるつつーんならよ。

トーゼン、集めたデータが警察署とかにあるよな？

チリ・ペツパーなら取りにいけるぜ。警察に電気が来てねーワケねえーだろ」

名探偵を見る目でニヤトランを見る平光だったが、

そのすぐ隣の沢泉は、脂汗を浮かべるような顔でニヤトランを見ていた。

むろん、不審に思うニヤトランだな。

だが俺も、どっちかというところと沢泉寄りだ。花寺もそうみたいだな……

「な……なんだヨ?ちゆ」

「ニヤトラン。あなたの言う通りだわ……」

でもね、警察という場所は、とても大事な仕事を扱っている場所よ。

貯めている書類とかデータも、とても固く守っているはずなのよ。

うかつな触り方をしたら、大騒動になるわ」

「ん?ま、そーだろーけどよ。

でも、チリ・ペツパーが見えるヤツなんかいねえーし!

いたところで、人目につかない時間とか狙っていけば」  
「そういう問題じゃあねえよ、ニヤトラン。」

確かに気づかれずに盗んでくることは可能だろうよ。

だが、盗まれたことに、向こうはたぶん、あつという間に気づく。

犯人がわからねえだけに、ハチの巣つづいたみてえな騒ぎになるぞ」

「不可能犯罪が一個、増えちゃうね」

「…お、おおう」

花寺がトドメに付け足した一言で、どうやらニヤトランは完全に理解してくれた。

アゴが外れて、ワナワナと冷や汗をかいてる。

「やるとしたら、最終手段よ。」

私たち全員で、しっかりと相談してやりましょう？一蓮托生の覚悟でね」

「わ…わかったぜ。怖えー」

「ボクたちの力は、そーいうモノなんだペエ」

「使い方を間違えたら、簡単に誰かを破滅させちゃう。」

それだけは、忘れないようにしよう？わたしも気を付けるから」

そう花寺が締めくくって、この話はここまでになった。

俺としても、クソ野郎…松永先生の破滅までは望まないんだよな。

ちよいと自分勝手に過ぎた正義感の持ち主でこそあったが、

それを実行に移さないだけの分別はあったんだよ。命令DISCさえなければな。

フリー・ファイターズ分体を通じて、

『お前は悪人に操られていた』、『あの力は、お前に悪事を行わせるために与えられた』

『我々は、その悪人と敵対していて、いつか倒す者だ』

『今日限り、力とそれに連なる出来事は忘れる。ただの悪い夢で、お前は何も悪くない』

言葉を選びながら懇々と説明したんだけどよ。不登校になりつつある…教師がだ。

……次、会ったら。許す、って一言だけ言つとこう。ちよつとはラクになるだろ。

言つとくが、俺に事実無根な疑いをかけたことについてだからな。

銃で撃たれた? なんのハナシ?

「うん。そろそろ、楽しい話題にしよう?」

来週、校外学習あるから」

「そのまた次の週には中間試験よね」

「ち、ちゅちゅ〜〜〜ッ

楽しい話題にしようって言つたじゃん、のどかつちが…」

校外学習と言われてもよ。

俺の置かれてる状況は、何も変わらないんだよな表向き。

たしか、ガラス美術館だったか……  
ごく最近、木工だったらやってるし。

そういう観点から見れば、なんかいい知見は得られるかもな。  
部屋ひとつ分くらいの間を空けて、花寺たちについていこう。  
ちなみに中間試験はすでに備えてる。

こんなくだらねーことで戦いの足を引っ張ってたまるか。

## 緊急お手当て! 同時多発ビョーゲンズ!—その3

やってきました、校外学習。

だからなんだって話ではあるがな……

松葉杖をつきながら、今日も今日とて俺は孤立しているだけだ。

表面上はな。

『じゃあ、俺は…例によってだが…だいたい、30m離れたあたりにいるから』

『うん。別にスタンド会話でお話してもいいよ? チョットくらいなら』

『やめとく。端から見ると、なんか受信してる電波ヤローだしな』

『べつに平気じゃん? いつもムスツとしてダメツてるだけなんだしさ』

『否定はしねーけど。お前それ単なる悪口だぞ?』

『ゴメンゴメン』

ニヒヒとか笑ってるよコイツ、スタンド会話で。

存在を思い出した瞬間、他の誰よりも使いこなしやがって。

あれからしばらくの間、平光は現実の俺が射程内に入ると

花寺も巻き込んでガツガツ話しかけてきてたんだよ。脳内に!

半分はバカでも、もう半分では気を使ってくれているのがわかるんで邪険にもできない。

この前、横断幕に星ひとつ入れさせようとしたのもそれだよな。

形は違うが、ニヤトランと同じだ。

俺のうぬぼれかもしれないけど、まあそー思っとくことにしてる。

もつとも、スカー・テイシュー事件に差し掛かったあたりで沢泉に怒られてな。

それから、業務連絡だけにスタンド会話を使うようになってる。今みたいによ。

聞く限り、花寺に向かってフツに言葉で話しかけながらスタンドでも同時に

話しかけるみたいなのを平光はやらかしてたらしく、後から入った沢泉が見たもの

は、

細切れの言葉で意思疎通ができている謎の怪奇空間だったらしい。直ちに禁止した

沢泉は正しい。

このやりとり、必然的に沢泉だけが蚊帳の外になるってのもあるしな…

早いところ、彼女に適合するスタンドDISCが欲しい。

こんなことが不和の原因になるとかゴメンだぞ。

ま、みんな出来たヤツらだ。そうおかしなことにはならないとも思うがよ。

『決まりには従おうぜ。』

そーだな…三十分おきくらいに、スタンド会話で定時連絡な』

『つつつてもさ。スタンド会話も近寄んなきやダメっしょ?』

『俺から、会話できるギリギリまで近寄る。』

俺の方からなら、みんなの位置がわかるからな』

『ん?…あ、そっか』

お前が一番ワカッてるはずだが、平光。

今までの必要に応じた紆余曲折の末、みんなの体内にフー・ファイターズのコロニーがある。

俺とF・Fからすれば、50mの射程から外れさえしなければ、いつでもそれを動かせるわけで、

当然、場所も常にわかってるっていうわけだ。

この状況は、完全に信頼で成り立っている…なんせ、俺はいつでもあいつらを殺せるんだから。

本当にそんなことをやろうものなら、俺はまた孤立無援の死ぬだけ男に逆戻りするだけだな。

仮に俺が操られるなりなんなりでそうせざるを得なくなっても、

同じく制御権限を持つてるF・Fが止める。

要は、確かに絶対ありえない。そういう面も含めた信頼だろうな。

『まあ、お話はいつでもできるもんね。夢の中で…』

夢なら、ちゅちゃんもいるし』

『そういうことだよな。じゃあ、校外学習だ。真面目に勉強しようぜ』

『カタイねえ〜タツキー。んじゃね』

俺から、その場を後にする。三人から離れねーと。

最後に沢泉が、目配せだけをくれた。

俺たちがスタンド会話をしていることに、気づかないはずもないってことだ。

すでにガラス美術館には来ている。今、入場前の点呼だの注意だのが終わったところ。

歩き始める集団に従いつつ、駐車場のはずれにある木陰に目をやる。

ラビリンにペギタン、ニヤトランがそこにはいるはずだった。

ビョーゲンズ襲撃に備えてついでにきている…

もちろん、ビョーゲンズの出現を検知できるラテがいなければ片手落ちだ。

表面上、花寺の飼い犬でしかないラテはここに来られるはずもないが、

この問題はすでに解決されている。そう、チリ・ペツパーだ。

ラテのすぐそばには現在進行形でニヤトランがチリ・ペツパーを控えさせており、



異変があれば即座にここまで連れてこられる。何ひとつ不都合なし!

ラテにスタンドは見えないってのが不便ではあるけどな。

静電気のパチツとするやつをモールス信号みたいに繰り返して合図するんだとか。

…さて勉強だ。友達もない俺には、まじにそれしかやることないからな。

そして勉強は力だぜ。フー・ファイターズが消火器にやられるとか思ってもみなかったんだよ。

後で知ったが吸熱反応ってやつらしいな。

微生物であるフー・ファイターズは一定の水温がないと生存できない。

それをとっさに思いついて実践してきたあのクソ野…松永先生は、やつぱりちゃんと先生だった…今日は来てるぜ。

まあ、逆を言えば、『知って』さえいれば俺にも似たようなことができるとことだ。

ピンチで知識を使えるかどうかは生死に直結する。そのためには明日は待てない。今始める。

俺にプリキュアの超パワーはない。なら、それに代わるものを身につけなければ。

今日見るのはアートとしてのガラス製品だが、それならそれで学べるものはあるだろうよ。

「先生に呼び出されていたとか？」

とか思ってたらヘンなのにつかまった。

もうテメーに用はねえ、関わんじやあねえーよ益子道男！冗談抜きで死ぬぞ！

つてのが本音ではあるが、こいつの情報提供がなかったら俺たちはどうなっていたか。

そう考えるとうかつに突き放すのもな。

平光人脈は前回だけ使えた借り物だ。

危険にならない範囲で、俺もこいつを確保する必要があるのかも…

「呼び出されていたな。例の件でだ」

「ええ、こつちでつかんでいた情報通りです。

アチコチで聞きまわっていたようですねえ、どうも」

「わかっていると思うが。お前も嗅ぎまわってるんじやあないぞ。

ウワサが、またどこから…」

「わかっていますよ。状況を把握しときたいだけです！

前にも言ったと思いますが、明らかに火消しに動いた人間がいるんですよえーやり口から考えるに、あなたでは無理です…

陸上部関係かとも思いましたが、これもどうやら違う…じゃあ誰が?」

「もう話は解決したし、俺がお前に教えてやれることもないぜ。

おとなしく次のスクープを探すんだな」

「……そうする気ですよ。さしあたっては先生ですね。だから聞いたんです」

なんだよ、今の間は。やっぱり危険か、こいつ。

だが、だからといってどうするっていうんだ。殺すのか?できるわけねーだろ!むしろ逆で、死に行かないように誘導してやらないといけない。

メンドクセーヤローめ!

……ふと右を見たら一面の鏡張りだった。映ってる俺が見返してきていた。

その隣にいるのが、当然ヤツ。溜息をついた俺は、続きをうながすことにした。

「……んで?」

「あなたが先生に呼び出された日が境なんですよ。

先生が…落ち込みきって、学校を休んだりし始めたのは!

そこで何か起こったと考えるのが自然です。

…いえ、駐車場あたりの校舎が何者かに破壊された騒ぎもありましたけど。

その周辺で目撃証言があったところで別に全然不審じやあないんですよねえ」  
まずはよかった。致命的なところを嗅ぎ付けちゃあいない。

F・Fが教えてくれたんだ。監視カメラはきちんとツブしておけてな。  
ウルトラセキユリテイ  
厳正懲罰隔離房に向かうときもやってたもんな。アナスイ追っかけながら。

正体不明のドロドロでダメにされた監視カメラの修理には金がかかっただろうが、  
これで少なくとも一人の善良(?)なオツサンが破滅から救われたぜ。

あの後でスタンドも消したから、何者だろうと俺にはたどり着けん。  
もちろん目の前のコイツもだ。

まあ、いいか。俺にあったことくらいは教えてやれる。

「いいカンだとは言っとく。俺も心当たりはその辺くらいしかない」

「やはり、何かあったと?」

「円山先生が同席しててな。」

アチコチ聞き回ったことについて、かなりこっぴどく怒られてた」

「…先生が? 先生の方が、ですよね?」

「ああ。まずはそっちの火消しが先だつてよ」

眼鏡の縁を指で軽くはさみ持ち上げたヤツは、もう片手にあるメモに手をつける気配がない。

そのまま少し考え込んで、自分で自分の考えに納得したようにうなずいてきた。

「なるほど。そうなるでしょうね、円山先生なら…」

しかし……弱いですねえ、あそこまで意気消沈するには。

どうしたっていうんでしょう?」

「それ以上は知らん、わからん。よそを当たりな」

安心して突き放せるつてもんだ。ここから先はたどり着きようがない。

東京都心の実家を訪ねた帰り、電車で居合わせたクズ野郎が降りたところを見えない銃で殺害。

この事件、電車は止まることなく、犯人たる先生を乗せたまま走り去ってしまったているのだ。

これでどうやって先生と不可解な変死事件に関連づけるところまで持っていけるんだ?」

状況証拠すらそろわねえんだからよ。安全に無視できるぜ。

「ムムム。あなたの言ったセンからさらに調べるのは…」

例のウワサを再燃させかねない暴挙ですね。

手を引くしかありませんか」

「ぜひそうしてくれ。恨みを買いたくないならな」

「ボクはジャーナリストですよ？それも敏！腕！の！」

他人を貶めるスキヤンダル、それもでっち上げに手を出すつもりはありませんよ！」

「そう願いたいね！」

「取材に協力、感謝しますよ。何かあつたらすこ中ジャーナルまで！」

慌ただしく去っていくヤツに、軽く手をふって見送る。

アレは元からコーユーキャラらしいからな。

俺に突撃取材してきたって、周りから見ると『まーたやつてるよ』で済むみたいだ。

そういや、件のすこ中ジャーナルとやら。沢泉が写真つきで載ってたな…

その姿すら見るべきではないんで、すぐに視線から外したから文面はまったく見てな

いが。

お前いつか盗撮と間違われるぞ。いや、もしかして…とうの昔に疑われ済か？

俺が気にすることじゃあないな。忘れる。

『できたんだね、お友達』

ブフツ!?

脳内に響いてきた声に思い切り吹いた。

『ハア？友達？』

『違うの？仲良く話してたみたいだったから』

『盗み聞きとは趣味悪いぞ、花寺』

『聞こえなかったよ?見てただけ…』

気づいてるでしょ?さっきまでわたし、かなり離れてたでしょ?』

花寺がこう言うなら信じるしかないという、な。

気づくも何も、さっきはずっと話に集中してたしな。

わかつてる。責める材料なんざ最初からないし、無益だ。

『離れてたぞ、魁』

『わぎわぎどーもー!』

決まり悪いったらねえ。思わずちよいと舌打ち。

わかつてやってるよなF・F、そのユカイソーな声からして。

『友達じゃあないとしてもね。』

わたし、ちょっと安心しちゃった…

わたしたちと先生以外で初めて見たんだもん。

誰かと話して、気持ちを表に出してるところ』

ムズかゆい上に気恥ずかしい。

花寺の声は暖かいだけになんとも生暖かい。

それだけにかなり耐え難いものがあつた。カンベンしてくれ。

…でも、だ。花寺の言う安心の先にあるのは…

花寺が手を貸す必要のない俺ってことか…それは、悪くない、のかな？  
友達ウンヌンはゼンゼン別のハナシだけどな！

平光がやかましく横入りしてきた。脳内に。

『アイツ知ってるよ。エエーッと、スコルプジャーナル、だっけ？』

『お前、通ってるんのドコ中だヨ』

『…すこ中ジャーナル！すこ中ジャーナルとかゆる雑誌出してるヤツだよね』

『雑誌、って…あ、いや。英単語的には間違いやあない。』

ジャーナルには雑誌って意味もあるにはある…』

『でしょー？チャンと覚えてんだよあたしだって！』

中間だつて怖くない！』

振り返つて視界の隅に見つけたヤツは、エヘンと胸を張っていた。

…あ、やばい。脱線コースだ。脱線させちまったの俺だ。

そしてそれを即座に収拾する花寺。

『で、その、すこ中ジャーナルの人がどうしたの？』

『ン。有名だよ、いろんなトコに突撃取材してるって…』

タツキーも取材された？イキナリ？』



『まあ、そんなとこだな』

『取材?…あんまり、いい考えは浮かんでこないけど』

『今、話し込むのはマズイだろ。夢でな』

今は打ち切らせてもらう。沢泉も混じつてるところで、一度で済ませた方がいい。差し障りのない説明ができる余地は十分にある。慌てる要素はないな。

定時連絡終わり。改めて勉強させてもらおうと、周囲を見回しに入ったところ。

『鳴滝くん、外!街灯が!』

花寺にうながされるまま、窓から外を見る。

そこから見えるすべての街灯がチカチカ光る異常事態が発生していた。

昼飯前の時間帯だ。自然に点灯するはずがない。

とすると、これは。チリ・ペツパーの仕業以外にはない。

別のスタンド使いがやらかしている可能性もあるが、だったらますます合流の必要がある。

花寺たちを女子トイレに走らせ、俺はそのかなり後ろをついていった。

こんな時ですら、ただでは終わらないらしいな。

できれば、楽に済んでくれよ……?!

## 緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！―その4

女子トイレで待っていたら、ラテがすぐに来た。鏡近くのコンセントから。もちろん、ニヤトランの仕業だよ。チリ・ペツパーを使ったの。

打ち合せ通り…トイレには人目が少なく、ほとんど確実にコンセントがあるからね。

一緒に来たラベリンから聴診器を受け取って、すぐに当てる。

『公園でお花さんが泣いてたラテ…』

それと、あっちの方でお水さんが泣いてるラテ』

「なッ……」

「なんてこと。二か所同時？」

「水って…途中の川？ため池とかもあるじゃん！

ラテじゃあないとわかんないよコレ!？」

「公園は…展望台近くの方だね。

ここからじゃあ、相当距離あるよ」

…クチュンッ

ラテが、さらに咳をした。

みんな青ざめる中、聴診器へラテが伝えてくる。

『ガラスさんが泣いてるラテ。すぐ近くラテ』

どう考えてもここだよね。

顔を見合わせるヒマすらなく、破壊音が聞こえてきた。

そこからすぐに悲鳴まで。

鳴滝くんがフー・ファイターズで鼓膜直通通信を入れてきた。

わたしの声も、フー・ファイターズを通して伝わる。

『もう気づいてるだろうけどよ!』

この音、明らかにメガビョーゲンだぜツ?

離れてるとやばい。すぐそっちに行く!』

「まずこれだけ。メガビョーゲンは三体!三体同時だよ!」

離れてる!一体は公園!もう一体はどこかの水場!」

『……とにかくそっち行く!ニャトランも一緒だ』

わたしたちは女子トイレを出たすぐそこで、鳴滝くんと合流する。

いくら非常時でも、女子トイレに入らせるなんてヒドイことはさせられないよ。

社会的に再起不能になっちゃう!

それから、まずはさっさとプリキュアに変身した。

建物の中にメガビョーゲンがいるんじゃないやあ、

いつ壊された壁の下敷きになってもおかしくないもん。

フォンテーヌが口火を切った。時間が惜しい。

「かつてなくヤバイ状態よツ！まず作戦が要るわツ！」

「ビョーゲンは、ほっとけばほっとくほど強くなるんでしょ？」

「だったらまず、ここに出てきたヤツをみんなでタコソーよ！」

「賛成だな。他の二体も同じように、一体ずつ瞬殺したいけどよ……」

「問題は、水辺の一体の場所がよくわかってないってことだよね」

「公園だったらコンセントめっちゃあるよ？」

「……このヤツと公園のヤツをヤツツケてからみんなを探せばいいじゃん」

「……ダメよ。チリ・ペツパーは使えないわ」

普通に考えるなら、スパークルの言う通りなんだけどね。

ダメだよ。フォンテーヌが止めなかったら、わたしが止めてる。鳴滝くんかも。

「えッ、なんで？」

「ビョーゲンズから見れば、チリ・ペツパーを使う能力者はスカー・ティシューなんだぜ。

それがなんで、プリキュアたちに使えるようになってんだ？」

使える事実を知られることがヤバイんだよ、ひ…スパークル」

「え?…えと、えと」

「スタンドを『取り出せる』ことがバレルのよ。」

一番危険なのは、ビョージェンズにスタンドを研究されることでしょうか?

最悪、ダルイゼンだとかグアイワルがスタンドを使い始めてしまうわ。

いえ、本当に最悪の場合だと…『アレ』よ」

「…:…わかった。『アレ』ね…:ウン。ダメじゃん」

最低でもグアイワルは把握しているよ。

チリ・ペツパーが電流に乗って、瞬間移動に等しい速度で移動できるって。

それを今回わたしたちがやったら、ほとんど確実にバレル。

能力を何かの方法で取り出して、わたしたちが使っているんだ、って。

そうだったら、ビョージェンズにも同じことをされる。単純な理屈だよね。

そして、現物を手にして研究を進めた先にあるのが『レクイエム』<sup>アレ</sup>だとしたら…:

一歩だって、そんな方向に進ませるわけにはいかないよ。

「この一体は全員がかりでブチのめす。そこからは二手に分かれるのはどうだ。

水辺で探す組と、公園のヤツを倒す組だ」

「それなら、公園組にプリキュア二人ね。」

水辺組は『探す』っていう間がほとんど確実にささまるもの。

その間に公園組が一体を倒せたら、そのまま合流…理想的な流れよ」

「となると、俺は水辺組だな。スタンドの相性もいい…」

「ええ。それと公園組はラテと一緒にね。」

公園から移動されて、見失ったら目も当てられないわ。

ラテの感覚で確実に追って倒す！これは大前提ね」

「そこから先は、ここのヤツを倒してから考えよう？」

「サンサー！あとは流れで！」

そのまま鳴滝くんは身障者用トイレの個室に陣取った。

ラテとチリ・ペツパーと一緒にいるよ。

もし襲われるような危機が迫ったなら、電線に乗って遠くまで逃げることになる。

全員がかりとは、さつき言っただけだね。

わたしたちプリキュアと同じように戦わせるのは、はっきり言って今は無理だよ。

鳴滝くん本人だって…本人だからこそ、よくわかってきてくれるはず。

スゴイ威力の水鉄砲が撃てるようにはなっただけど、アレも条件が整えばでしかないし。

できれば、何事もないでほしいね…

チリ・ペツパーを使っている間、ニヤトランはどうしても注意力散漫になっちゃうから。

まだ遠隔操作に慣れてないのもあって、スパークルと息を合わせるのが遅れちゃう。プニ・シールドを張るのが間に合わなかったりするんだよね。何度も『夢』で練習してるけど。

体がふたつあるみたいなものだもんね…わたしもわかる。DEATH13もそうだし。

さてと、ここなら探すまでもないよ!

破壊音のする方に、突っ走っていけばいいだけだもん!

ほとんど時間が空くこともなく、トゲばった巨大なうごめく塊を見つけた。

サソリみたいな尻尾つきの…間違いないよ。メガビョージェン!

周りを見ると、もう、かなりの数の作品が壊されちゃってる。

倒せば元通りとはいえ…こんなの、許しておけないよ。

「来たか、プリキュア!」

グアイワル…イヤな顔と名前、覚えちゃったなあ。これで三回目だっけ?

ダルイゼンはひなたちゃんの大怪我からあれつきりだし。

シンドイーネは最近、一回だけ出てきてるけど。

でも、三体のメガビョーゲンということは…イヤでもご対面だね。全員と！

「あのボウズは…いないようだな。助からなかったかあ？」

そりゃあ気の毒だ、バカがやらかしたばかりになあぁー!？」

あつ、死んだと思ってるんだ。好都合。

「いるよ。わたしの心の中に！」

「…エ、ッ!？」

スパークルが口をアングリ開けてコツチ見てきたけど、

一瞬間を空けたフォンテーヌがすぐに合わせてくれた。

「いなくなったりなんかしないのよ！」

仲間ってというのは！」

「……。そ、そーそー！」

ずっと一緒なんだかんねー！」

ギリギリのところであんなにかわかったスパークルもチョーシよく合わせてくれたよ

！

不自然な間がけつこう空いたけど、向こうは…後ろめたさだつて受け取ったみたい。

「そいつは結構。なんなら向こうに行って、本人に確かめてくるんだな。」

断言してやろう…恨んでいるし、呪っている、となあ」





この間にもチリ・ペツパーが動いてたんだよね。逃げ遅れを確認してたの。もう室内の避難は終わってるし、駐車場にみんな集合して、今は点呼してるみたい。つまりはもう、何も遠慮いらぬ。

ひとつ飛びする。わたしは右に。フォンテーヌは左に。

「えッ？あッあ」

「キュアスキャンだぜッ、スパークル！」

「お…オツケー！」

出遅れたスパークルだけど、わたしたちの動きを見てから後ろに跳んだ。

向こうはそれを、弱気な『逃げ』と受け取ったみたいだね。

露骨にスパークルを狙って飛び掛かってきた。

あれだけ堅そうだと、体当たりの一撃でダウンさせられちゃうかもしれない。

でも、宙に浮いちやったね。安定できないよ。

「ハアアッ!!」

ギョオン！ ドコオン

「メッ、メツガアアア?!」

ほら、そこをフォンテーヌの蹴りにすくわれた。

そして、この態勢！





「プリキュアッ!ヒーリンググウウ…フラッシュュ!!」

ギャオオン ボツゴオ

光のエレメントさんだったんだね。

ヒーリングフラッシュュが助け出した先を見て、フォンテースが即座に確保。その後ろで、メガビョージェンは霞みたように消えていった。

「ヒー、リ、ン…グツ、バアイ」

シユパアア…ツ…

「お…お大事に?」

ビョーイン送りにしたの、あたしタチってカンジだケド」

「ビョーインっつーか天国送り?」

ソコは…アレだぜ。気にすんなよスパークル」

「コレばかりはどうしようもないペエ。

せめて苦しめないことしかできないペエ」

「ほつといたらみんなを蝕んで苦しめるラビ。

そんなことさせないのがプリキュアラビ!」

「ま、そーなんだけどき。ウーン」

複雑な顔してるスパークル。

ほぼ何もさせずに倒したから、ある意味イジメみたいな感覚あるけど。そんな余裕をタレてるほど、ヒマじゃあないよね。わたしたち。

少なくとも、今は。

「く、クソッ！」

弱くなるどころではなかったか！

このままでは……」

後じさりしながら、グアイワルも消えた。

……これで終わりなんかじゃあない。まだ三分の一にすぎないッ！

トイレ前に戻って、変身を解くことのないまま、またみんなで円になる。

「ごめんなさいエレメントさん。わたしたち、すぐに行かないと」

「気にしないでください。」

私と同じように苦しんでるエレメントさんがいるなら、お願いします」

エレメントさんだけを帰してから、鳴滝くんがわたしから預かった聴診器をラテに当てる。

さっきのを倒すのにかかった時間は、駆け付ける時間まで含めて三分弱。

だけど、その間に状況が変わってないとも限らないもんね。確認しないと。

「……水辺と公園。汚染を着実に広げてるようだな。」

数は増えてねえ。それだけは安心みたいだ。

悪い、ラテ。ここからはお前につらい思いをさせるかもな」

「アウン……」

抱いてるラテの背中を赤ちゃんみたいにゆすつてから、鳴滝くんはわたしたちに差し出してきた。

「さてと、だが。時間との勝負になるぜ。

俺も俺で、さつさと見つける。

公園組は、瞬殺…頼んだ」

「公園まで、プリキュアの足でも……10分はかかるわね」

「その間も、汚染を広げて強くなられちゃうから。

今みたいには、いかないかも」

「でもさ。やること…変わんないっしょ?」

「おーよ、さつさと片付けちまおーぜ!」

「お手当ては早いのが一番ラビ!」

「それで…誰が、水辺組になるペエ?」

今、話してた通り。悠長に話し合ってる時間なんかないよ。

もう、すぐにも出発しなきゃあいけないんだから。

「そうだね……じゃあ」



## 緊急お手当て!同時多発ビョージェンズ!—その5

「えッ?ン?...どつたの?」

かつぎ上げられた魁が、ガツクンガツクン揺られながら  
スパークルの背中をボンボン叩く。

畑だらけの中を全速力で突っ走ってたスパークルはちよつとして気づくと、  
キキキイーーツと足から煙を上げてアスファルト上に止まった。

コイツも慣れたな。ファイヤーマンズキャリー。

それでも、かつがれてる側はいったん止まってもらわないと  
しゃべることなんかできない。

一度でも経験してみるといい...とんでもなく揺れるのよ。舌を噛む!

年寄りだとムチ打ちになるかも。マジに課題なのよねコレ。

プリキュアみんなの。

「.....よし。ここから出さず、チリ・ペッパーを」

「チリ・ペッパー?川とか溜め池とか、まだ向こうじゃん」

言わないでもわかると思うけど、あたしたちとスパークルは『水辺組』だ...

この組み合わせは、グレースが決めた。

まあ、そうなるだろうね。戦力的にも能力的にも、一番つり合う。魁のヤツは、あたしことフォー・ファイターズを考慮に入れても

プリキュアひとり分と比較するにはちよいとばかり非力すぎるが。ニヤトランのチリ・ペツパーは、電気さえ使えればそこを補える。

さらに、町中の電力を使い果たす勢いで使いまくれば、プリキュア全員をも超えたパワーを出せる。

最後の手段で、やっっちゃあならないことではあるが…

これで、総合的にはトントンだ。

そして、グレースは明らかにこうも考えている。

あたしたち全員で、チリ・ペツパーの有効な使い道を思いつくことをな。

「スパークル。一般人がメガビョーゲンを見たらよ、どうすると思う?」  
「どうするって。逃げるよね、フツ」

「その一般人が車に乗ってたら?」

メガビョーゲンはデカイからな、遠くからも見える」

「車に乗ってんなら、車で逃げる…」

でもさ、渋滞とかしてたら車捨てて逃げる、かも」

「ン?……あツ、言いたいコトわかったぜ。オメーのよおくッ!

チリ・ペッパー使つて、この辺の不自然な渋滞探せつつつてんだよな?」

「ああ。この時間で人里に出たんなら、これでまず見つかると思う。

見つからないんなら、人里じゃあない…

川を上流にさかのぼったどこかだろうよ」

で、あたしもだけど。魁は、かつがれてる間に考えることは考えてた。

チリ・ペッパーが使えるなら、考えることはほぼ同じだな…

あたしは、むしろ野次馬根性でメガビョーゲンに近づくバカを想定したけど。

結局、そーゆーヤツらも生命に危険が迫れば逃げ出すことに変わりない。

車で逃げたんなら、どこかで車が詰まり始める。

そこにメガビョーゲンが近づけば、車を捨てて逃げざるをえない…

同じことつてわけ。

「んじゃよ、まずはどつか高いトコから見下ろさねーとな」

「それならアレだな。山に向かつてる送電線の鉄塔がある」

「オウ、行くぜ!」

「渋滞見つけたらさあ、どーすんの?」

「近くまで寄つて人間がいるか確認だな。」

いたらそいつらの会話を盗み聞きして情報を集める…

いいや。それより前に、渋滞の終点を確かめる方が先だな。

メガビョーゲンが理由じゃあないなら、それでわかるだろ」

チリ・ペツパー万能説だよな…電気さえ通っていけばほぼ瞬間移動できるし、

電気の近くで話をしているヤツがいれば、そこに留まって盗み聞きもできるしね。

だがな……今回ばかりは、そいつがアダになったというしかねえぜ。

それから一分もしないうちに四つの渋滞を見つけて、

うち三つはなんの変哲もない渋滞だった。

もうひとつも、メガビョーゲンとは関係のない、

人間社会で普通に起こりえるヤツだったんだがな。

「……なんてこっただぜ」

「ニヤトラン？何が原因だったの？」

「事故だぜ。デケえトラックがバスに後ろからぶつかったみてーだ！

バスが横倒しになって、トラックがめり込んで…

ヤベエのはよ。トラックがすでに燃えてるってコトだぜ」

「…ッ!？」

スパークルの顔面が凍り付いたみたいになった。

引き継ぐみたいにな、魁が聞いていく。

「トラックの運転手は?」

「まだいたとしたらよ。助からねえ…燃えてんの運転席だぜ」

「バスの中に人はいるか?」

「見えねえ!でもよ、周りに助けようとしてるっぽいヤツらがいる」

「バスに燃え移るかどう…ヘイツ!トラックの積み荷は?」

「わかんねえ!なんか銀色のデケ缶っぽいのがいくつか落っこちてるぜ!」

「ラベルはあるか?なんて書いてあるか見えない?」

「ええとよ…エタノールって書いてある」

「ンなツ…!?!」

魁の口に割り込んでクチを出して正解だったんだか間違いだつたんだか。

トラックの積み荷いっぱいがいそいそだったらよ。大惨事確定じゃあねえーかッ!

「エタノール?えつと…お兄もお姉も、パパもいつも使ってる。

消毒液?だよね…確か」

「知ってるな?『火気厳禁』だ、スパークル」

「めっちゃ…燃える…ツ?!?!」

何がどうなるか理解したスパークルは走り出した。

おいコラ、ドコに行く気だよ？

「おおい！連れてけ！」

行くならチリ・ペツパー使え！」

魁が金切声みたいに叫ぶと、気が付いて戻ってきた。

アブねえ、置いてかれるとこだった：今、孤立するのはヤバイ。

「タツキーここにいてよ！爆発したらヤバイじゃん！」

「ボツチになつてビョーゲンズにつかまる方がヤバイ。」

あと、なんか役に立つかも：考え事は俺に投げろ」

「：：ン！ニャトラン、お願い！」

「行くぜ！」

こうして、チリ・ペツパーがスゴすぎるばかりに、

ビョーゲンズとはなんにも関係ない事故の救助に行くことになつちまつた。

『おかしなことになつたわね。魁』

『助けられた俺に、見捨てろなんて言えねえよ。』

最短でケリをつけるしかないな』

ま、それよね。

脊髓反射で人を助けに行つちやうスパークルじゃあ、

止めたってどうしようもない…

しかも、魁自身がその性格に助けられたとあっちゃやあね。

目的を優先しろ、なんて言っても止められないし、ただ嫌われるだけ。

あたし個人の気持ちとしても、スパークルに賛成だけどね。

徐倫もエルメエスも、同じ立場なら助けに行っただけと思うからな…

ここにウエザーがいればなああゝゝ、集中豪雨で一発鎮火できるのに…無いモノねだりだけど。

「んじゃ、タツキー、ココね!」

「了解。最悪、ここに潜ってしのぐ!」

現場近くの公園の池で、あたしたちは待機になった。

現場から50m以内にこんな場所があったのは幸運と言うしかないか。

もし爆発したらここにも影響あるだろうけど、潜ればたぶんなんとかなる。

『タツキー、ヤバイのはエタノールだよね?』

トラックの積み荷をみんな捨てちゃえば大丈夫だよね?』

「それでいい。人に当たらないように遠くに投げろ。」

以前、俺をボーリング玉にした時みたいにな…

全部終わったならトラックをバスから引きはがすんだ!」

『オレも手伝うぜスパークル！チリ・ペツパーがあんならよおー』

「…あツ。だつたら、スパークルはチリ・ペツパーに積み荷を渡した方がいい。

チリ・ペツパーはそいつを、どつか適当な場所に放り出していけばいいんだ。

トラックのそばにあるよな？電線」

『バケツリレーかよ。そんなら早えーな！』

『オツケー、どんどんやるよ！』

『じゃあよ、さつきまでいた畑の道路に捨ててくぜ。火の気配ねえーし』

「俺ができることはどうやら無い。黙って待つてる」

『うん』

鼓膜直通信は、フリー・ファイターズを使ってやってるからな。

当然、あたしにもよく聞こえてる。

何か燃えてるらしい物音も一緒にな……

魁は、ポケットからラップに包まれた栄養ブロックを取り出し、確認してる。

新たに作っては家に貯め続けてるが、手持ちは5個までになっている。

全部持ち歩いて、なんかの拍子で全滅したら

目も当てられないコトになるしね…水にすぐ溶けるし。

どうやら考えてるな？この栄養ブロックを使って、



トラックに池の水をかけられないか? ってな。

だがそれは悪手だぜ。

これから、いくらか育ってしまったメガビョージェンと戦うことになるからね。

水場があつたところで、フー・ファイターズを急成長させられる場がないんじゃないやあ不利すぎる。

言われなくともそんなことわかつてるから、コイツは不機嫌な顔でダマツてる。

…いや待て。それも今ならよおー、チリ・ペツパーに持つてこさせれば…

とか考えてたら、あつちから連絡が来た。

作業開始から二分経つか経たないかくらいだった。

『タツキー、今、最後の積み荷を捨てたよ!』

「全部か? 中にあつたヤツ全部だな?」

『ウン、全部! 何がダイジョーブな荷物かなんてワカンナイもん!』

「正しい! じゃあ、トラックをバスから離せ!」

『りょーかい! よかつ』

ドツグオオオ z \_\_\_\_\_ ン

冗談じゃあない爆発音が一緒に来るとは思つてなかつた。

いや、警戒はしとくべきだったな。

ガソリントタンクに火が回ったって、別におかしかあない。

鼓膜直通通信で今まさに会話してた魁は瞬時に悶絶！泡を吹きながらブツ倒れた。あたしがすぐさま魁から意識を切り離れたのは、今までの経験から：

イヤな慣れもあつたもんだぜ。

『こちらF・F。無事か、スパークル？』

『F・F。ば、バスが！』

『ニヤトランだぜ。なんとか無事！そつちは？』

『今の爆音で魁が気絶した。命に別状はない！』

耳とか三半規管がやられちまったかもしれねーが、

それはあたしがなんとかする…

それより、バスがどうした？』

『トラックが爆発してよ、バスに完ツペキ燃え移った！』

火に巻かれて手がつけられねえ！』

『た、助けないと。壊して、逃がさ』

『ヤメろ！どこに誰が何人いるのか、わかつてるのか？』

へタすると壊したところにヒトがいて、ツブすハメになるぜ』

『じゃあどうすんのよツツツ！！』

やばいな。スパークルがキレかかっている。

というより、恐怖に押しつぶされそうになっているのか、これは？

…ああ、そういえば。車の中で火あぶりになったばかりだったね。アンタ。

こーゆー時に活躍するはずだったヤツは今さつき気絶した。

なんとかかできるとしたら、あたしってこと。

ま、やってやるか。徐倫たちの仲間だったあたしに賭けて、ね。

『雷のボトルだ。あつたよな?』

『…あるぜ。それで、どうすりゃいい?』

ボトルを使った攻撃も、採石場で一回試してる。

雷のボトルをヒーリングステッキにセットすると、

プニ・シヨットよりだいぶ強い光弾が撃てるんだ。

そして、雷のボトルのそれは当然、雷だった。

『それで雷が撃てる。ニヤトランのスタンドはチリ・ペッパー。』

あとはわかるな?』

『…ムチャだぜ』

ニヤトランも大したヤツで、あたしの言いたいことが一発でわかった。

『どーゆー?』

『スパークル、みんな助けたいかよ？』

『あ、当たり前じゃん！』

『イチかバチかだけだよ、あるぜ、方法！』

オレに賭けてくんねーか？』

『あるんなら、賭ける！』

『よし、ハラあくくつたぜ。オレもよ！』

スパークル、雷のボトルだ！バスに向かって撃つてくれよ！』

『……うん！』

あたしが考えて、ニヤトランに伝わった方法はひとつ。

雷のボトルで雷を撃ち出すと同時にチリ・ペツパーで同化。

直撃したバス全体のフレームを走っていく電撃と一緒に、

中にいる人間に接触し、そいつらも全て同化！

最後に、全員もろともバスの外側に出てきて元の姿に実体化する。

一歩間違ったら、拡散しきった電気エネルギーに溶けて消えちゃうな。

そうになったら、元の通りに実体化したところで、自分の死体が残るだけ。

モノスゴク精密なスタンド制御が要求される、超絶テクのぶっつけ本番。

あたしの言った手前だ。こいつばっかしは見届けないとな…

最悪、あたしが責任をとるために。

魁の体を完全に借りて、燃え盛るトラックの方向に向かう。

松葉杖なんか使わないぜ。ここにいるはずのない人間なんだからな。

使わないことがむしろ偽装になる。遠慮なく走らせてもらう。

そうやって向かった先にたどり着くまで10秒足らず。

見えた先では…もう、ケリがついていた。

「や……やった、助けられた」

「運転手入れて四人。少なくとも助かったぜ…マジで」

燃えていくバスから少し離れた位置に、うずくまった人影が固まつてる。

遅れて通勤したオツサンとか、病院に行った帰りの母子とかかな…

その中に、スパークルが尻もちをついて、へたり込んでいた。

無事が確認できりゃあそれでいい。あたしはすぐ元の場所に戻って、また通信。

『悪いが。今やってたのは寄り道だ……』

探しに戻るぞ!メガビョージェンを!』

『わ…ワカツてるぜ……』

でも、人里にアヤしい渋滞がなかったんならよお〜』

『川の、上の方?だっけ』

『立ちな。すでに5分近くロスしている。』

ゆっくりしているヒマはないぜ』

寝ているあたしの本体様も叩き起こさなきやあな。

やっかいな戦いになりそうだな、こいつは……

## 緊急お手当て!同時多発ビョージェンズ!—その6

『大丈夫かしらね、あの二人…』

『大丈夫、だと思っ…』

ヘんなコトしようとしたら、お互いに止めると思うし。

ニヤトランもいるし：最悪、F・Fが止めてくれるよ』

グレースと一緒に海岸沿いを全力疾走しながらの相談よ。

ペギタンが皇帝エンペラーを使えるようになったおかげで、

プリキュアに変身中はスタンド会話もできるようになったわ。

交わるふたつの流れ、っていうことよ!

それは置いといて、グレースの言う通り、あまり心配はいらないのかしら。

スパークルと鳴滝くん。

どつちも放っておくとヘんな暴走しかねなくはあるんだけど。

『ヘんな』の方向性が違うのよね。その間は安心よ。

目に浮かぶよね。口スツパくして注意されるスパークルも、

ギャンギャン怒られる鳴滝くんも。

比率としては9：1だけど：

それだけに、怒られる側に回るとモノスゴクシヨゲ返るのよね、あいつ。

でも、なんかの間違いで『ヘンな』が一致しちゃったら：

いいえ。キリがないわね。そんな心配するくらいなら、

私たちの役目をさっさと片づけて全速力で向かうだけよ！

「ラテ様、公園からビョーゲンズは動いてないラビ？」

「アウン…」

「厄介かもしれないペエ。」

動かず、ひたすら強くなるのに集中してることだペエ」

そのあたりはもう覚悟の上ね。それを押しても一瞬のうちに倒さなければならぬ。

知っている砂浜が見えたわ。思うに任せないことがあるとき、いつも叫んでる砂浜！

グレースを見てうなずき合うと、方向転換。ここからはまっすぐよ。

そしてすぐに見えた。どうも、また花に取り憑かせたメガビョーゲンみたいね。

かなりの範囲が汚染されているわ。

ラテを下したグレースと飛んだ。最初っから全力よ。

あッ、ダルイゼンがいるわね。かまっているヒマないわ。

向こうも気づいたみたい：遅いわよ！



「オラー!オラー!オラー!」

「ドララアアーツ!」

ギユバ! ドヒヤ!ドヒヤ

拳は届かなくてもね、プニ・シヨットがあるもの。

グレースと左右に分かれて、オラオラのラツシユ並みに連射して打ちのめす。

残念だけど、これも無尽蔵というわけにはいかないのよね。けど!

「フオンテーヌ!ポトルのエネルギーが息切れしちゃうペエ!」

「なら、<sup>エンペラー</sup>皇帝よツ」

「ペエ!受け取るペエ」

メギャン!

ほぼ限りが無い飛び道具を、ちようどよく手に入れることができているわ!

ヒーリングステッキから飛び出してきた拳銃を受け取って、両手で構えてこれも連射よ。

ドギヤ ドギユ ギユン!

…思うに、プリキュアにもっともふさわしくない武器ね。銃っていうのは…

引き金ひとつで命が消える、そのくせ引き金はひどく軽い。おそろしいことだわ。

でも、今の私に選り好みしているヒマはないのよ。



目が開き切らない……誰かいる。誰か増えてる？

「グアイワルじゃん。何しにきたの」

「ダルイゼン、甘く見てる場合じゃあないぞ！

このオレのメガビョーゲンが一瞬で倒された……ノンキにかまえてはおれん」  
「お前が作ったのが弱かったただけじゃあないの？

……まあいいや。そう言うなら、オレもやるよ」

「そうしろ！このままでは立場がないわ！」

見えたわ。聞こえたわ！グアイワル……なんてこと。

ダルイゼンも立ち上がって、こっちに向かってくるわ。

さつき、あっさり倒してしまっただばかりに！

あいつらを本気にさせてしまったと……そういうことなの？

……上等じゃない。むしろ今までそうじゃあなかったことが屈辱よ！

「グレース、メガビョーゲンは任せるわ！

あいつら二人は、私が抑える」

「大丈夫なの？フォンテーヌ」

「あなたよりも私が適任よ。

今の私にはペギタンの皇帝エンペラーがある……

足止めくらいなら、やってみせるわ」

弾切れのない飛び道具を持っているなら、活かすまでよ。

グレースの方が、ある意味ではよっぽど強力な能力ではあるけれど、今この場には向かないわ。私が行くしかない。

グレースが飛んでメガビョーゲンに向かうと、あいつらもそれを遮ろうとする。

そうはいかないわよ。両手で皇帝を構えて、グレースとあいつらの間を撃つ。

三十発くらいまとめて撃つたわ。弾の川よ！

さすがに無視はできなかつたみたいね。こっちに向き直ってきた。

「ぬうう、なんだそれは!？」

「答える義理はないわ」

「へえ、プリキュアの新しい力ってやつ？」

「…まあ、なんでもいいけど。でも、いきなり現れた『それ』…」

「似てるねえ、あの力と…どこで身に着けたの？」

「…ツ!？」

あの力。たぶん、スパークルの太陽サのことよね。

スパークルが、ただのひなただった頃に戦って見ているはずだもの。

それ以外ではないと思いたいけれど、望み薄ね。

すでに何人ものスタンド能力者を探し当てていると見てよさそうだが、  
だとして、その人たちはどうなったの？

スカー・ティシューはその中の一人にすぎなくって、  
浄化されてから彼女は何と言っていた？

「いきなり。その力に目覚めたっていうのなら……」

まあ、お前でもいいや。持ち帰ってみるか」

「やってみなさい。この場でキレイサツパリ除菌されたいというのならね」

決まりね。こいつら人間を誘拐しているわ。誘拐して実験しているのよ！  
恐れていたことが、本人の口から確認できてしまったわね。

倒さなくっちゃあいけないわ。少なくとも、手傷は与えないと。

ダルイゼンとグアイワル、両方ともこっちに来るみたいね。

これはスタンド能力への対応を重視しているということ……

その脅威がある程度認識している反応よ。いよいよまずくなつたわね。

でも逆に今はチャンスよ。グレースが後回しにされるといふことだもの。

わかるはずがないわよね、夢を支配するスタンドだなんて。

あいつらの目からすれば、グレースは唯一の『能力持たず』よ。

「ゆくぞー！言っておくがオレをメガビョージェンごときと一緒にするなよ？」

さて、来るとわかっていれば対応はできるけど。

目的は時間稼ぎ……正面からの殴り合いは利口じゃあないわ。

ダルイゼンが脇から回って仕掛けてくるはず……

皇帝を連射して止められるのは、せいぜい一人。

もう一人には食いつかれてしまう……なら！

「狙うのは、地面！」

ドン

プニ・シヨットを足元に撃つ。

土を巻き上げて出来たくぼみに爪先を差し込み、思い切り蹴り上げる！

「ンなッ!？」

爆裂した土砂はグアイワルに降りかかってくる。

当然だけど、私からも見えにくいわね？

だからもう、やることは決まっているわ。

回り込んでこつちに向かっていたダルイゼンに皇帝を向ける。

カチッ……

ドギユ　ギユ　ドヒャ!

「うッ?！」

100%集中されるとは思っていなかったようね?

明確に驚いた表情を浮かべているわね。

やや広めの射角で十四発。うち一発でも当たれば手傷には十分よ。

巨大な物体の破壊には向かないけど、貫徹力だったら!

「なんか企んでるとは思ってたけど…なるほど?」

でも、そういうことなら…あるんだよね。オレにも」

「ごたくを並べても…ぐッ!」

ゴバアツ!!

避けようがない、そう思っていたのに。

ダルイゼン…あいつも、土をぶちまけてきたッ

それも、私みたいなただの土じやあない!

「ペエーッ、汚染されてるペエーッ!」

ビョージェンズに侵された土だペエーッ」

「プニ・シー…間に合わッ…」

痺気っていうのかしら?

よんだ気たちこめた土を頭からかぶる羽目になった私の全身から、

おそろしい勢いで力が抜けていく。

プリキュアでこうなるのなら、生身の人間はどうなるのよ？…動けない！  
これが、ビョーゲンズの汚染。

ある程度以上進んだら、独壇場になってしまうのね…

その場で崩れ落ちてしまった。ダルイゼンが眼前に迫る。

「はい、つかまえた」

「くっ……」

「このまま力尽きるまで見てるのもいいけど。

そこまでヒマもしてられないね…それッ！」

ビチャアッ！ グジャァ！

「う、ぐッ！……ううッ」

まったく、悪趣味なことをするわね！

3メートルくらい先から、汚染されたドロを投げつけてくるなんて…

このままじゃあ変身が解けるわ。その先は…終わりね。

なんとか脱出しなきゃあいけないわけだけど、

プリキュアの力がなくなりつつある。

「グハハハハッ、いい気味だな。

だが、ダルイゼンにやられたのは気に喰わん。殴らせろ」



「後から来ておいて、何? 役立たず」

「やかましい、こいつはオレが持ち帰る。お前は残ったグレースをやつてろ」  
こいつら、とてつもなく仲が悪いのかしら。

だから共闘しないで、個別に動き回っている?

この隙は、おおいに突くべきだけれど:

ヒーリングステッキから、力が失われ始めた。

「そういうことだ。あきらめてもらおうぞ」

「…そう、ね。無駄なことは、あきらめるしか、ないわ」

私だけの力での脱出はすでにあきらめている。

へへい、とか、なんとも表しがたい声で笑いながら、

グアイワルが私の額を驚掴みにした。

キリキリと締め上げてくる…

変身が解けた瞬間に死ぬんじやあないかしらね、私。

これ以上は耐えきれそうにない……

「あ……あなた、の……」

「ン!?!」

「あなた、の……次、の……セリフ……は!」

あきらめたところで、殴られる!……よ!」

「……。ほう?」

ジョセフさんのようにはいかないわね。ニヤリと笑われるだけだったわよ。でも、大筋はうまくいっている。

「そうだが?そんなにお望みか?」

なら仕方ない。期待に思いつきり応えてやろう!」

思い切り拳を振るわれる。もうダメね…

ただし、あと10秒早かったのなら、だけど!

腕を持ち上げ、首をつかむ。もちろんグアイワルのよ。

「ム……まだ、そんな力が?」

だが、無駄なこととお前が言っただろうが!

この腕をひねり潰……う、ううツ!」

ひねろうとしてきた腕を逆につかみ返し、逆にひねる。

おそらく、全力で殴られれば今の私なら変身解除…

そのまま死ぬかもしれないわ。

向こうもそれをわかっていて、だからこそ全力攻撃はできないわ。

だって、私は貴重なサンプルなんだもの。

勝ったと思っている今、それを台無しにはできない。

そして今この瞬間! 『勝ち』はどこかに吹っ飛んでいくわ!

「バカな、こんな力があるはずがッ」

「よく見なさい。私を縛っていた汚染はどこに行つたの?

私が撃つた弾の先を、一度たりとも気にしなかつたの?」

「……ま、まさかッ?」

感づいたのはダルイゼンの方が先だつたみたいね。

振り向いた先では、すでにキラキラと光が散っている。

「ビ~~~~リン、グッバアアア~~~~イ……」

今まさに、メガビョージェンが消滅していくその瞬間よ。

汚染も、一緒に消えてゆくのみ!

エレメントさんが助かったのは、今から20秒くらい前ね。

「お、お前ッ……」

最初から、狙っていたのはオレじゃあなくッ!」

「そう、メガビョージェンよ。」

あなたにも当たっていれば理想的だつただけだね」

ついでに、こいつらには教える必要のないことだけね。

十四発撃ったどの弾も、メガビョーゲンにはかすりもしない弾道だったけれど、そこは本体のペギタンがどうかしてくれたわ。

うち二発を制御して、メガビョーゲンの両足をちょうど撃ち抜くようにしたのよ。汚染された土をバラまかれた時点で、その細工はすでに終わっていた。

思い切りバランスを崩した隙を、グレースが見逃すはずもないわ。

さらに、キュアスキャンは私が済ませていて、すでにグレースにスタンド会話で伝えてもいる。

メガビョーゲンを倒せたのなら私たちの勝ちで、こいつらの負けよ。最初からそれだけよ。

「き、キツサマ〜！」

どのみちキサマが叩き潰されるのは同じこと…」

「私があなたなら！」

いつまでもそうやってつかんでいないけど？」

「あア?...ぬおおおおッ!?!」

「エレメントチャージ、完了だペエ！」

「喰らいなさい。ゼロ距離ブリキュア・ヒーリング・ストリームを」

ゴバツ ギユウオオン！

気づくのが遅いのよ。もつとも、そうなるように仕組んだのだけれど!

勝ち誇れば勝ち誇るほど落差にやられる。さっきの私みたいだね。

身をもって学んだことを活かさない手はないわ。

逃げるヒマも与えずにパワーを解き放つと、

グアイワルは光に包まれて遠くまで押し流されていった。

「…やれたかしら?」

「今のボクたちじゃあ難しいペエ。

でも、かなりのダメージは受けたはずだペエ」

「フオンテーヌ、大丈夫ツ?」

グレースが目の前に降り立ってくる。

無傷じゃあ済まなかったみたいね。

あちこち擦り切れたみたいになって、消耗が目に見えるわ。

「グアイワルは見えたけど、ダルイゼンは?」

「…いないわね。いったん退いたと見るべきかしら」

「メガビョージェンはあと一体。そこで来ると思った方が良さそうラビ」

「違うペエ」

囚われていた花のエレメントさんに挨拶もそこそこ。

私たちはすぐに発たなくちやあいけないわ。

ラテがいる私たちには、最後のメガビョーゲンの位置が正確に追えるけど。スパークルと鳴滝くんは、すでにたどり着いているのかしら？

これだけ時間も経ってしまった。合流して戦わないと不利ね。

## 緊急お手当て!同時多発ビョーゲンズ!—その7

とりあえず川まで来たよ!

町の中で、メガビョーゲンが原因の渋滞が起こつてなかったってことは、後はもう森とか山にひっそり出たしかありえないってコトで。

「で、どーすんの?」

「ちよつと待つてろ」

タツキーに聞いてみると、手を水面にかざし始めた。

なにかな—ツツて思つて見てると、指から血が出てボタツと落ちた。

「えツ、えツ?何やつてんの?」

「……フー・ファイターズが繁殖できねえ。」

他にもある川から察するに養分量は十分なはずなのによ」

……ちよ、チヨツト考えよ。

タツキーはここでフー・ファイターズを増やせるか調べた。なんで?

「ここに何をしにきたのかつてゆーと、メガビョーゲンを探しに来たんだよね。」

「えと。これでメガビョーゲン探せるってこと?」

「以前、シンドイーネにデミビョーゲンにされたこと、あつたよな？俺」  
「？……うん」

「そのとき、フリー・ファイターズで抵抗しようとはしたんだよ。

でもダメで、フリー・ファイターズはビョーゲンズの汚染に負けた。

って話は、お前も知ってるよな？」

「……………あッ。」

「……でフリー・ファイターズが増えないってコトは……」

「川の上流が汚染されてる。少なくともそいつは確定だ」

「じゃあ、上の方まで行けばさ」

「ほぼ間違いなくいる。川そのものじゃあなくっても、

その近くの何かに由来するメガビョーゲンってことだぜ。

そして」

「そして……」

めっちゃ居心地ワルソーな顔してるタツキー。

なんか悪い予想があるってのはさすがのあたしにもわかる。

「俺がほぼまったく役に立たないことも確定ってことだ。

川の水が全部やられてるんじゃないよあ」



「…戦いようがないじゃん。フリー・ファイターズ」

水が全部ダメじゃあ工夫も何もないよおー。

そのぶんあたしが戦うしかないのかな?

ま、元々プリキュアのあたししかメガビョーゲンとガッツリ戦えないけどさー。

「あツ、川が汚染されてて、川関係のメガビョーゲンだったらさ。」

太陽で川をカラツカラにしちゃえば」

「そいつはナシだぜスパークル!」

エレメントさんの帰る場所なくなっちゃうじゃあねえーかツ!」

「ウグツ…」

イイ思い付きだと思ったけど、一瞬でニヤトランにダメ出しもらっちゃった。

そりゃそつか。おウチがヨゴレたから焼いてキレイにしましょうつてのと一緒だった。

ハア、考えが足んないよね。あたし……

へこんじやったけど、そんなヒマないって感じでF・Fが入ってきた。

『発想は悪くないぜ。』

要は、敵をホームグラウンドから引き離せばいいってことだ』

「F・F?」

『むしろこの場合、考えが足りてねえのはお前になるぜ、魁。どうしてわざわざ、自分の不利な場所に攻めていく？』

人質を取られたわけでもないのにね』

「……有利な戦場を、こつちで決めろってか」

「有利な戦場？ チョット待ってあたしも考える」

川の上の方まで行って何がマズくなるのかな？

ええーッと……

まず、さつき言ってたフリー・ファイターズが使えなくなるコトっしょ。

それと……地味にめっちゃヤバイのがあった。

「川の上に行ったら、チリ・ペツパーも使えないじゃん。

電線なんか、めっちゃ減るに決まってるんだから」

『そう、それも重要だ。そこんとも考えて、どうなれば有利になる？』

「シー、……スタンドが使えればイイよね。

フリー・ファイターズも、チリ・ペツパーも」

『その条件に当てはまる場所だが……』

「俺に言わせる。挽回させろよ」

考えてたあたしを押しつけるみたいにタツキーが来た。

ソコまで喰い気味に来なくなつたつてイイじゃん。

「畑のド真ん中だ……さつき、渋滞を調べ回るために立ち止まったあそこな？」

あそこなら、電線もあつて……水も、スプリングラーを破壊すれば得られる。

スプリングラーの根本にあるのは当然、水道管なんだからな。

地面の下に走つた水道管を汚染しつくすのは、ヤツらにとつても手間のはず……

フー・ファイターズは、まず無力化されない」

『他に、良さそうな場所はある?』

「ない! 周りに民家がないつて条件も外せないんだぜ」

『……グッド。プリキュアの使命と照らしても、あんたの選択は正しい』

「ただし、これはかなり長距離、メガビョージェンを引つ張りまわさなきゃならない……

その間に木やら草花やら動物やらがどれだけ踏みつぶされるかつてのもあるがよ。

俺には、これ以上は……ダメだ」

「エレメントさんから苦情が来たらよおしく、

一緒に謝つてやんぜ、魁よおー!」

「……。期待しとく」

そんなに必死になんなくなつたつて、アンタあたしよりずっと頭イイじゃん。

今言つたのだから、あたしが考え込んだつて思いつきそーにないのにさ。

……なんかヤダな。さつきも、結局あたしワメいてたダケでさ。何も、ろくすっぽ考えらんなかった……これじゃダメなのに。

「オイ、スパークル。どうしたよ？」

「……ん、あ。ニャトラン？」

「元気なさそーだけだよ。」

帰ったらなんかウマイもん食おーぜ！

さつきと終わらせてよ！」

「……そだね。行こー！」

メガビョーゲンここまで引つ張ってくればいいんでしょ？」

「オウ、川の上流まで行って、テキトーに攻撃しながら連れて来んぜ！」

ウン、落ち込んでたらメガビョーゲンに負けちゃいかねないもんね。

あたしの太陽はスゴく遠くからでも攻撃できる。

メガビョーゲンを攻撃して引つ張ってくるなら、プリキュアみんなの中でも

あたしが一番のはずじゃん。さあー活躍するよー！

「さつきグアイワルが逃げたのなら！」

この先にいるのはダルイゼンか、シンドイーネになるな。

どちらにせよ、見つけても刺激するなよ。

戦いに参加されたらそれだけ不利になるからな」

「りよーかい。行つてくんね」

心配してくれてんだよね。ウレシイよ、そのヘンは!

チリ・ペツパーでさつきいた畑に全員で移動してきてからすぐ、フクザツなイヤな気分を飲み込んで、あたしも走り始めた。

川について、上に向かって走っていく。

そのまま見つからないよかずつとマシではあるんだけどさ。

見つかつちやつたんだよね。ほとんど時間たたずに。

見えてきたメガビョージェンは、川を下つてきてるトコだった。

「ヤバイぜスパークル、自分から動いてきてるつてことは!」

「十分強くなって、戦う用意ができちゃった、つてコト?」

あたしたち狙つてんの?」

「わかんねえ!アツチにはオレたちの場所をわかる道具なんか

知つてる限りねえーし!

オレたちじゃあなくて、人里を襲いに行くつもりなのかも…」

「だつたら、やること一緒じゃん。太陽<sup>サツ</sup>」

なんか、ヨロイを着たみたいなよくわかんないメガビョージェンだった。

人間型ってゆー意味ではわかりやすいんだけどさ…

水の近くにある何なのか、正直ゼンゼンピンとこないんだけど。  
太陽<sup>サン</sup>を撃ち込んで逃げるんだつたら今しかないよ。

今、悩んだりクヨクヨしてちゃあダメだよ。撃つ！ただし、当てない！

シュバパツ!! ボツゴオ

「メツ、メツガアア?」

よーしコツチ見た! 気づいた!

オビキ寄せちやうぞー!

「やーーい やアア~~~~~ーい

バアーカ アーホッ

おシーリ ペーンペエーーン」

おシリ向けて両手でパンパン叩いちやう。

必死だよあたし! フザケてなんかかないよ!

めつちや本気でバカにしてキレさせなきゃいけないんだもん!

これでダメなら石投げまくるかんね!

「メツ…メツガアアアアアアア!!」

あ、ヨシ! よかった、怒った!

コッチにめっちゃ突っ走ってくるじゃん!

で、でも思った以上にめっちゃ早い。

電線はあるけど、逃げるのにチリ・ペツパーは使っちゃダメ。

こつから先、チリ・ペツパーの姿を見られちゃダメなんだ。

バレたら、スタンドの取り外しがバレちゃう。

バレたら研究がしやすくなって、レクイエムに近づかれちゃう!

「ニャトラン!」

「オウよ!」

シユバツ バシツ バシ!

プニシヨツトを撃ちながら、ジグザグに飛んで下がっていく。

まっすぐ下がったら体当たりもらっちゃうもん。

それと向こうも飛び道具持つてるっぼい。

なんかしようとしてる気配感じんの!

このままチヨコマカ動いてさ、それをさせないことはなんとかできそう。

有利な場所に引っ張っていくんなら：問題ない!

ジグザグに飛んで、突進をかわして。

それを何度も繰り返してたら、タツキーが見えた。

畑の脇に穴を掘って、水を貯めてたみたい。

そこからまた、スカー・ティシユーと戦ったときに使ったゴツツイ大砲を出してる。

「サスガじゃあねえーかつ、すでに狙ってるみてーだぜスパークル」

「じゃあ、あたしも合わせて行くよー！」

太陽<sup>サン</sup>を使ったら暑さでタツキーの大砲が台無しになっちゃうから、

攻撃に使うのはプニ・シヨットだよ。それも、タダのじゃあない。

雷のボトルをセツトしたとっておきをカマしちゃうツ！

「うりやりや〜ツッ！」

ズバツ バリ！ バリツ

「メガツ!？」

やった、ひるんだツ

これならタツキーも外さないよね？

こんだけ相手が大きいと効き目あるのかって不安はあるけど…

「スパークル！キュア・スキャンしようぜ！」

「あ……キュア・スキャン！」

言われる前にやんなきゃダメじゃんあたし！

ひるんだスキにはなんとか間に合って、見えた。



スタンド会話が届く位置まで飛んで、すぐ伝える。

『お腹、ド真ん中…水のエレメントさん!』

『了解。なら足のアキレス腱だな……狙撃』  
シュートヒム

ブシ! プチユン…

ペットボトルのコーラを開けるみたいな音がしたと思ったら、

大砲から糸みたいなキラメク細い線が伸びて、メガビョーゲンの力カトに当たった。

一瞬だよ、一瞬!

プリキュアの目じゃあなかつたら、当たったこともわかんなかったかも。

あんまり細いもんだから、また『効いたのかな?』って不安になっちゃったけどさ。

「メツメ、メツガアア〜!」

ズオオオン

バランス崩して倒れたトコみると、ゼツタイ効いてるよね!

背中から倒れて、しばらく起き上がれそうにないし!

「今だぜスパークル、トドメだ!」

「ウン!エレメント・チャージ…」

『ヘイ、待て!良く見なッ』

後は流れ作業かかって思いながらチャージを始めたけど、



ビチ、ビチ! ビチ…

めつちやバツチイ何かがスツゴイ噴出した。

間に合ったプニ・シールドにたくさんの何かが飛び散ってくる。

これって…水?

ビョージェンズに汚染された水の、さらに特濃つてやつ!?

そういう、よくわかんない何かが細かく飛び散りながら、

ハリ飛ばされそーな圧力で、めつちやたくさんぶつかってくる!

「スパークル、やべえ、防ぎきれねえ…!」

「…う、わ、わああアアーツ!」

パア アン

プニ・シールドが音を立てて割れた。

今まで防いでいたぶんがまとめてくるみたいに、

あたしの体を地面にぶつ飛ばして、ゴロゴロ転がす。

そこにまた飛び散る何かが落ちてきて、こびりついてくる。

で、そこから…なんか、ヤバイ勢いで力が抜けてくんだけど?

「ニヤ、ニヤトラン。これ」

「ビョージェンズの汚染だぜ…ここまで強くなつてるとはよ。

「一步下がってなかったら全部モロに食らってた…変身解けちまっただろーぜ」  
「や、ヤバかった……」

でも、コレをよけられたんだったら、今度はあたしの番じゃん？

ガンバツて立てば、メガビョーゲンは動けないまんまなんだし」

エレメント・チャージするみたいにヒーリングステッキに力を入れて、

こびりついた水っぽい何かをムリヤリ吹っ飛ばす。

ビョーゲنزの汚染だつてのなら、プリキュアの力で消せるはずじゃん。

そー思つて思いっきりやったら、なんとかいけた。

ニヤトランもニヤツと不敵に笑つてくれて。

「その意気だぜ、スパークル。この戦い、オレたちの勝ち」

「だったら良かったのにな。残念」

でも、次に聞こえたのは思い出したくもない声だった。

……あたしを、死ぬような目にあわせた、アイツ！

心では怒つてるのに、体が勝手にすくんじやうみたいな気分。

「て、テメー、ダルイゼン……」

「久しぶりつてやつ？」

やっとの思いで振り返った先で、アイツは。

タツキーの首を握りしめて、つるし上げてた。

## 緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！―その8

ラテのビョーゲンズ検知で追ってきたわたしたちは、

やっと追いついた畑の中で、首を持ち上げて吊るし上げられている鳴滝くんを見た。吊るしているのは……

「ダルイゼン」

「やっぱり攻撃してきたラビ……！」

すぐ近くにスパークルも見えた。

何か、まき散らすみたいな攻撃を受けた後みたい。

広い範囲にまだらに汚染がある……

その真ん中にいるメガビョーゲンは、足にダメージがあつて

立ち上がれないみたいだけど、それもなおりつつある。

汚染を広げてパワーアップしてるから、立ち直りも早いのかな？

鳴滝くんのそばには不自然な池。掘って水を貯めたんだね。

そこにあるボロボロに崩れた『何か』は……フリー・ファイターズの塊かな。

たぶん、メガビョーゲンを攻撃するために作った武器だと思う。

近寄って攻撃なんかできないからには…ああ、あの大砲だね。

スカー・ティシユーのときに作ったやつ。

状況はわかった…と思うけど。ダルイゼンもこっちに気づいてる。

身動きがとれないね。これじゃあ。

畑っていう戦場がスゴクマズいよ。見晴らしが良すぎるの。

フォンテーヌの方を見る。同じことを思ってるみたいで、むずかしい顔をしてる。

最初は迂回してもらって挟み撃ちするつもりだったんだけどね。

これじゃあほとんど意味がないから中止したの。

でも、ここなら水道があって、電線もある。まわりに家もない…

スパークルと鳴滝くんのふたりで戦うなら、正しい判断ではある。

「遅かったじゃん、グレース」

馴れ馴れしく声をかけてきたのはダルイゼンだよ。

スパークルよりも早く言ってくるあたり、わたしたちを最初から警戒してたね。

当然だよ。鳴滝くんをつかんでるのが何のためかを考えるなら。

「ダルイゼン、その人を放して!」

ダメだとわかっていても乗らざるをえないよ。

通じる素振りを見せないのなら、やるだけ無駄なこと。

そうなれば鳴滝くんは次の瞬間に殺されかねない。

思っちゃうよ。わたしが承太郎さんなら。

<sup>ザ・ワールド</sup>世界が使えたのなら、って。

なまじ記憶を受け継いだばっかりに…かな？

「へえ。でもさ、死んだんじゃなかったっけ。こいつ…

おかしいじゃん？おかしいことをほっとくのも気持ち悪いし」

首をつかんでいないもう片方の手で、鳴滝くんの腕を逆側にひねり始めるダルイゼン。

人の体にはありえない方向に無理やり曲げようとしてる。プリキュア並み…ううん、違う。

吸血鬼か、『柱の男』並みのパワーで。

それをあえて抑えながらやってるんだ。痛みを見せびらかすために…！

うなり声みたいなのを聞かされる。

悲鳴を上げない、って歯を食いしばってるんだ。

鳴滝くんがこんな時まで意地を張ってるのは何のためか？

「やめて…やめてってんでしょオー…ッこのおオー…ッ!!」

スパークルを取り乱させないためだよ。わかるよ。



悲鳴を聞かされたら、助けずにはいられない子なんだもん。

すでに耐えられなくなったスパークルが地面を蹴って突っ込んでいくけど、回復したメガビョージェンが正面に回って、それを叩き落した。

「メツガアビョージェエーン!」

ギユン バゴア!!

「うぐう!」

……速い!

この巨体で、わたしたち並みに動くっていうのなら!

実際のパワーには、何倍の差がついてるっていうの?

もう、正面からは戦えなくなりつつあるのかな?

まだ、頭の悪さに付け込めばなんとかならなくもない。

けど…早く倒さないと、どうしようもなくなる!

「ギョーギ悪いな、スパークル。」

ヒトの話、最後まで聞けよ。ヒトじゃないけど…

メガビョージェン、そいつ捕まえとけ」

「メツガ」

ズドゴオン

メガビョーゲンが地面に落ちたスパークルを踏みつけた。

片腕と顔だけ出てるような状態：捕まえるどころかダメージだよ。

このままだと、そのうち変身が解ける。

変身が解けたらどうなるの？

ただの人間が、家ほどもある怪物に踏みつけられて耐えられるの？

でも止まるしかない。止まらなきゃ鳴滝くんが死ぬ。

そこでスタンド会話が届いた。ペギタンからだ。

『フォンテーヌから伝言だペエ。戦うしかないペエ、グレース』

『戦うって、鳴滝くんはどうするの？』

『あいつ絶対に、ボクたちに死ねっていうのと同じことを言うペエ。』

今立ち止まったら、もう取り返せなくなるペエ。逆に今が最後のチャンスだペエ』

『…納得ラビ。脅迫されてもどーしよーもないラビ』

なら、もう止まらない。止まらずにふたりとも助ける。

そう心に決めたけど、またそこにスタンド会話が割って入った。

ニヤトランだね。

『待てよ。まだ切れるカードがあんぜ』

『もしかして、チリ・ペツパーだペエ？』

『こうなつちまつたら仕方ねえーよ。』

まず魁を電線に引きずり込んでからよ。

町内の電力ゼンブまとめてメガビョージェンに叩きつけてやんぜ。

ソコをみんながかりで浄化すりゃあよおー』

『…毒を食らわば皿まで、だペエ。それしかないと思うペエ』

わたしだって、鳴滝くんを見殺しにする確率なんかゼロにしたいよ。

チリ・ペツパーはバレるけど…他にどうしようもないのなら、そうするべきだね。

でも問題は、ダルイゼンが電線のすぐそばにいないこと。

『もうちよつと電線に近づかせないと、すぐ気づかれちゃうよ?』

『そ、ソコなんだがよ…ど、どーにかしてくれ〜!』

『フォンテーヌからだペエ。話に応じるフリをしておびき寄せるペエ』

「…何? 目配せし合つて。なんか企んでんの?」

そういう態度なら、こーするしかないけど?」

気づかれた。ダルイゼンが、また鳴滝くんの腕に手をかけた。

ネジみたいにグリグリ回す。

パキポキパキポキ。ヘンな音が不規則に聞こえてくる。

…骨が! 鳴滝くんは耐えてる、唇を噛みながら。

耐えちゃってるだけによけい痛々しいよ！どういう痛みなのツ？

すくんだわたしたちを見ながら、

ダルイゼンは勝ち誇ったみたいにアゴをしゃくった。

「わかった？わかったらしいね…」

じゃあ最初に、ヒーリングステッキを投げ捨…」

「アンタ何やってんのよダルイゼン、ヒトのメガビョーゲン指図して」

そこに、さらにシンドイーネまでやってきた。

戦力差的には、もうほとんど絶望だけど…

巻き返す一瞬は、絶対に見逃さないよ。

並行して、スパークルとニヤトラン、ペギタンにスタンド会話で『作戦』を伝える。

一方的に言い立てるみたいになっちゃったけどね。

警戒がかき乱された今こそがむしろチャンスで、

怪しまれる動きを見せるわけにはいかない。

「お前が仕事やらないからでしょ？」

後から来て何言ってるの、シンドイーネ」

「キイイーツ…でも、メガビョーゲンはあたしのよ！

あたしの勝手に持ってたんなら、せめてソイツをよこしなさい！」

「よこす? コイツを?…どうすんの?」

「処分すんのよ、そのゴミを!」

そいつのせいでアタシはキングビョージェンさまの前でハジかかされてんの!

「ハア、バカらし。聞けないね。お前状況わかってる?」

ブン!

突っ込んでいったシンドイーネが、無言で鳴滝くんを分捕ろうとしたみたい。

ダルイゼンは飛びのいてあつさりかわしたけど。

振り回された鳴滝くんは首に指を食い込まされたみたいで、

ヨダレだかゲロだかが口からあふれちゃってる。

「よけんな!」

「避けるに決まってんじゃん。バカなの?」

ブン! ブン ブワツ!!

鳴滝くんをガツクンガツクン振りながら、

シンドイーネの手刀から身をかわすダルイゼン。

もうほとんど遊びだね。それもそうかって思うよ?

向こうからしてみれば、わたしたちはもう詰んでるんだもん。

六歩、五歩、四歩…あともう少し電線に近づけばいい。

でも、そこからが遠い。電線にわざわざ近づく理由もないもんね…

「くたびれるからやめない?」

「ソイツをよこせばやめるわよ!」

「見てわかんない?今、人質にしてるんだよ。」

「コイツが生きてるからプリキユアが動けないの」

「…チツ、わかったわよ。処分は待ってやるわ。」

「ただし…ちよつとくらいウツプン晴らしてもいいでしょ?」

「わかっているなら、好きにすれば?」

もう限界。シンドイーネに引き渡されたら、どうされるかわかんない。

渡す瞬間を狙って飛びかかる?最悪そうなる。そうするしかない。

「おっと。動かないでよグレース。」

動くんなら、一歩ごとに指一本返してやる…引きちぎって、だけど」

「……人でなし」

「ヒトじゃあないし」

勝っている間ならそれでいいんだろうけどね。

いつか後悔するよ。…後悔させる。

そして見ているのはわたしとフォンテーヌだけ。

わたしたちを動かさなければ勝ちだと思ってる。

動けないスパークルなんか、どうでもいいって思ってる。

顔が出て、目で見えていれば十分だっていうのね。

シンドイーネが近寄って、ダルイゼンから受け取ろうとする瞬間が隙だった。

スパークルは、そのど真ん中を狙った。

シユババツ ボゴオ!!

唐突にもうひとつ増えた太陽から降り注ぐレーザー。

ダルイゼンもシンドイーネも、驚きはしたけれど難なく飛びのいてかわす。

やつぱり、太陽<sup>サン</sup>を出してから撃つまでのタイムラグが痛いよね。

相手をまいらせる高熱も、気づかれやすいっていう欠点にしかない。

よく狙おうと太陽を下ろせばますますそうなるし、

そのための時間までかかっちゃう。

「あ、危なッ…よくもやったわねッ」

「そういや、そんなのもあったっけ。」

大ハズレだったけど…で、動きは動きだね。

指一本ひきちぎる…三発撃ってきたから、三本!」

「へッ、やってみろってんだよボケナス。」

できるもんなら、だけどよぉ〜っ

「そう言うなら、サービスでもう一本つけ…ん？」

ニヤトランの煽りを余裕の表情で受け流したダライゼンだけど、

一秒も経たないうちに違和感を自覚したみたい。

そうだよ。スパークルは最初っから直撃なんか狙ってない。

むしろ飛びのかせることそのものが目的だった。

さつきフォンテーヌがやったことと、本質はまったく同じ。

だって飛びのいたその先には、頭上に電線があるんだからね。

そこから伸びてきたチリ・ペツパーが鳴滝くんを回収して、

わたしのすぐそばに放り出してもらい…すぐに拾った。

電気と同化する能力なら、一瞬あれば十分なんだよ。

あの仗助さんすら、何をされたか理解できなかった速さの能力だもん。

鳴滝くんを遠くに置いてくることもできたけど、あえて近くに出す。

それがこの作戦の要！

オヒメサマダッコだけど…チョットカッコ悪いケド我慢してネ

「な、なによ…なにが起こったってゆるのよっ？」

「…何をした。グレース」



「さあね。当ててみたら?」

あなたには見えもしないし、聞こえもしないと思うよ」

「何をしたと聞いてるんだよ、グレースッ」

聞きたいことが山ほどあるだろうけど、こんなやりとりを続ける気なんかない。

すでに頭上に飛び上がってるフォンテーヌが、プニ・シヨットを左手から、

皇帝を右手から連射してダルイゼンとシンドイーネを叩く。

すんでのところで気づかれて後ろに飛ばれちゃったけど、

皇帝はこれで終わりじゃあない。

ダルイゼンは知ってるけど、今のシンドイーネが知ってるはずもないよね。

かわした弾丸のうち一発が地面すれすれを滑って方向転換、

また狙ってきているなんて。

ダルイゼン。あなたは、ホントに自分のことしか考えてないんだね。

ギユウン… バスッ!

「げううッ!!」

「…何当たってんの。あ、そうか。知らないんだっけ」

だからこうやって不利になるし、きつとそれを深く考えることもない。

わたしはそれを利用する。あなたがみんなを苦しめて、友達を傷つけようとする限り

!

この間に、鳴滝くんをその場に置いてチリ・ペツパーに回収してもらったわたしは、ダルイゼンの背後に今、配置されている。気づかれたけどもう遅い。

「な、なんツ…!?!」

ブオ　ズガアアーン

顔面に跳び膝蹴り。今までで一番キレイに入った。

水面を切って飛ぶ石みたいに50mくらい飛んで行つたダルイゼンを後目に、突然の変化にうろたえてるメガビョーゲンに向き直る。

…まだ、浮かれちゃあダメだよ。ここからが大詰め。勝つた気分になるのは早い。

「スパークル、今だよ!」

「グ……う、ウン!」

か、雷のボトル!」

「行つくぜエエエエー……ツ!!」

ズゴワアアアア

シバツ　シババツ…　バチツ　バチ!

スパークルの全身に電気のパワーがみなぎっていく。

まぶしくて見ていられないくらいの勢いで、電撃がほとばしってる。

もう言わなくてもわかるかな。

町中の電力をチリ・ペツパーで集めてきて、雷のボトルに集めてるの。

もともとそういう性質のものを集めるボトルなんだから何もおかしくない。

見てる側のシンドイーネも、こういう反応になる。

「ボ、ボトルが……こんなパワーなんてッ

ズルイわよ、こんなのズルじゃないのよオオーーツ」

チリ・ペツパーを、雷のボトルのパワーみたいにしてごまかす。これがわたしの作戦。

ここまで町の電気を集めてる時点で、数時間の停電は避けられないと思うから

今この場だけのごまかしにしかならないけど……それでも、しばらくはだませる。

「プリキュアツ、ヒーリング……えッと……サンダアア!!」

ゾバ ガオンツ!!

…ゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

微妙に投げやりなスパークルの叫びと一緒に、

雷のボトルからえげつないほどの地面をえぐる閃光が走って…

一瞬遅れて、轟音がわたしたちの耳をつぶした。

鳴滝くん顔、畑に埋めといてよかったよ。

単純に考えて、雷が目の前に落ちるみたいなものだっと思って思ったから……

それよりも今は、きつちりとエレメントさんを助けないと。

「メ、……メ、」

さすがプリキュアで、音はすぐ聞こえるようになった。

メガビョーゲンは、まだ動いてはいるけど、真つ黒コゲ…満身創痍。

このレベルまで育つたメガビョーゲン相手じゃないと、

エレメントさんごと吹き飛ばしちゃうね。

これから、二度とやつちやあいけないう方法だつて思うべきだよね。やつぱり。

「エレメント・チャージ！」

「ヒーリングゲージ、上昇ラビー！」

「プリキュアツ、ヒーリング・フラワーツ!!」

完全に死に体のメガビョーゲんに、桜色の光を突き通した。

すでにニヤトランからエレメントさんの場所は聞いてたの。作戦伝えたときね。

弱り切つた水のエレメントさんが無事に解放されると、

かつてなく巨大で強大だったメガビョーゲンは、

他のやつと同じように、蒸発するみたいに消えていった。

「ヒッリン、グッバア……イ……」

「……お大事に」

見送ると同時に、わたしはその場にへたり込んだ。

一度にビョーゲンズ三体。おそろしい密度の戦いだった。

スカー・テイシユーのときもピンチだって思ったけど、

今回はそれ以上だった。

そしてこの戦い、勝ちか負けかで言ったら……

「戦いには勝った、けど……知られちゃった」

「きつとゴマカせたラビ。今はそー思っとくラビ」

「……うん」

わたしたちの致命傷になりかねない手を使わざるをえなかった。

## 緊急お手当て！同時多発ビョーゲンズ！―その9

戦いは終わった。でも、決して理想的といえる決着ではないわね。

ビョーゲンズの連中がいなくなったことを確認した私は、

へたり込んだグレースをいったん置いて、鳴滝くんを助け起こしに向かう。

顔を畑に押し付けられたまま動かないのなもの。優先するしかないわよ。

グレースも案外ぞんざいに扱うわよね：慣れてきたってことかしら？

道路まで運んでから、背を起こしてまずは呼吸を確認：してるわね。

ということは。

「あなたは気絶せずに済んだみたいね。F・F」

『まあね。慣れた』

F・Fが他の経路を作って呼吸させていた、しかありえないってこと。

グレースも、これを見越して顔を埋めていったのかしら。そうよね。

私たちプリキュアですら目や耳が一時的にダメになる光と大音響だもの。

スタンド以外一般人の彼の目と耳は何かで保護しないと一生ダメになりかねないわ。

半身不随の上に目と耳が不自由になっちゃあ、もう一人暮らしなんか不可能よ。

「鳴滝くんは大丈夫なの?」

『頸椎損傷、だ。』

振り回されてるとき、首の骨を損傷して神経までやられてる』

「…:…:ちよつ」

『あたしがいれば問題ない。』

損傷したてなんだ。フー・ファイターズで元通り修繕できるぜ』

「…:。ならいいけれど」

不幸中の幸いっていうのかしらね?

全身不随とか、どんな顔して伝えればいいのよ。

でも正直、ちよつと我慢の限界になってきたわ。

毎回毎回、戦いになるたびひどい怪我を負わされて…

何度でも言うけど、『痛い』わ。

「タツキー!」

そして…:来たわね。

おそらく、私以上に『痛い』って思ってる子が。

戦いの経緯はわからないわよ?まだ聞いてないんだから。

でも、もうスパークルのことだつてずいぶんわかつてきているわ。

よ。  
ノーテンキでお気楽に見えても、失敗とかしたら妙にネガティブでおびえる子なのよ。

私だって、そのおびえた視線を向けられたことは一回や二回じゃあない。

最初は、私がそんなに怖いのかしら、って悩んだこともあったけれど…

のどかはともかく、鳴滝くんにまで同じような視線を向けるのよ。

それが今回みたいな状況になつたらね……

「大丈夫よ。命に別状はないし、キズも残らないわ。」

どこか動かなくなつたりもしない」

「……………」

ザッ！

パタ パタパタ

駆け寄ってきたスパークルは、私の言葉を確かめるみたいに

アチコチをチヨコチヨコ触つてから…シユンと肩を落とした。

「大丈夫だつて言つ…」

「あたしのせいだ…」

「…。話を聞かせて。ただし、後でね。」

メガビョーゲンをみんな倒したのなら、早く戻らないと」



「うん」

先送りにするしかないのよね。

騒ぎに乗じて授業スツポカしてみたいなものよ、私たち。

復帰してきたグレースと一緒に、解放した水のエレメントさんのところに行くと、

元は川の上流にいたエレメントさんで、送り届けるのにまたちよつと時間がかかった。

上流までは最寄りの電線を使えると思ったけど、チリ・ペッパーの全力攻撃で停電中。当然、電気の往来が止まっているからプリキュアの足で走るしかないわ。

鳴滝くんはグレースが持つてくれた。基本、持ち回りよ。次は私つてこと。

「プリキュアさん、ありがとうございます。」

もうダメだつて思いました」

「到着、遅れてごめんなさい。つらい思いをさせちゃつて…」

「ワタシの他にも助けていたんなら仕方ないです。」

「こうやって助けてもらえたましたし…何かお礼ができたら」

「……。なら、ひとついいでしょうか?」

真剣な表情で少し考え込んだグレースが切り出したのは、

プリキュアに変身できるようなアイテムに心当たりはないかということ。

それがダメなら、『ただの人間』がビョーゲンズと戦えるような、パワーアップの方法を知らないか、っていうこと。

やっぱり同じことを考えるわよね。

戦いは激化する一方で、私の我慢以前に物理的な限界が近づきつつあるわ。

このままじゃあ、鳴滝くんは死ぬ。

そばに置くしかないのに、戦いについていけないんじゃないか。

「プリキュアは……わかりません。」

ヒーリンググアニマルさんが一番詳しいはずですよ？」

「グレースもダメ元で聞いたラビ……ラビリンもわかんないラビ」

「でも、はるか昔にこの地を守ったプリキュアさんがいました。」

お墓はまだ残っていたはずですよ。そこで何かわかるかも」

「……ティアティーン様と一緒に戦ったプリキュアかよ？」

モノスゲー大昔のはずだぜ？」

「そのお墓が、残ってるっていうペエ？」

私にも心当たりがあったわ。

ヒーリングガーデンにある石像よね？

『夢』の中で何度か見ているわ。

なんかあったらいつもそっちに逃げていく鳴滝くんなんか、

私以上にたくさん見ているでしょうね…いえ、いいのよ?逃げて

「たぶん、人間さんが守ってくれています。」

人間の町で調べた方がわかると思えますよ」

「どれくらい前なの?いつ頃の時代なんですか?」

顔をつつ込むしかないわね。

調べるにも材料がないとどうしようもないわ。

「いつ頃…よくわかりません。」

ワタシたちエレメントは、季節のめぐりなんて数えませんが」

「そういうものなのね。じゃあ、人間はどういう家で暮らしていましたか?」

「ウーン…穴を掘った上に、藁の家、だと思えます」

「……。『竪穴式住居』ね。弥生時代…少なくとも、古墳時代以前。」

1500年以上も前ということ?」

だとすると、おそろしく昔ね。

そこまでくると、残るとしても伝説の中よ。

「ワタシには…わかりません」

「そうよね。ごめんなさい。後は私たちでどうにかするわ」

「代わりには、ならないかもしれませんが…

その、気絶してる人間さんをこちらに」

「ん、魁かよ。どーすんだよ?」

「エレメントの力を分け与えてみます。

ビョーゲンズ相手に、少しは戦えるようになるかも」

「やめるペエ!」

かなりウレシイ提案だと思っただけど、

血相を変えたペギタンが止めに入った。

当然ではあるわね。

さっきまで、このエレメントさんはメガビョーゲンに囚われていたのよ?

しかも、あんなにも強大になるまで。

「今そんなコトしたら!」

エレメントさんが消えちやうペエ!」

「…そうなるなら。さすがに遠慮…かな?」

「はい。そうなったらワタシの住んでるところの自然が

蘇らなくなってしまうから。加減はするつもりでした…

でも、そうですね…なら、いませんか?

普段から付き合いのあるエレメントさんは

みんなで顔を見合わせる。

確か、鳴滝くんからすでに聞いてるわ。

まず、栄養ブロックの原材料のヒントをくれた実りのエレメントさん。

あのエレメントさんからは、もう実りのボトルをもらっているわね。

これ以上何かくれとは、ちよつと言えないわ。

それと、例の『垢嘗』事件の舞台になってるドブ川にいる、水のエレメントさんね。

鳴滝くんは栄養ブロックを毎日継続的に作り続けているんだから、

もちろん、ずつと顔を突き合わせているわけね。

いつもではないにせよ、挨拶くらいはしているでしょう。

っていうかもう、都市伝説になってるわよ。『垢嘗』!すこやか市七不思議!

「いるわね。いつも彼が頼み事をしているエレメントさんが。」

あなたと同じ、水のエレメントさんのはずです」

「そのエレメントさんに頼んでみてください。」

プリキュアさんが一緒なら、イヤとは言わないはずですよ」

「ありがとうございます。頼んでみます!」

今とどれくらいの違いが出るのかはわからないけど、

何もしないよりはマシよね。

これからは、出会うエレメントさんに彼の強化を頼んでいくことになるかしら？  
エレメントさんに重ねてお礼を言ってから、私たちはガラス美術館に戻る。

もちろん、プリキュアの足でね。電気が使えないんだからチリ・ペツパーはダメよ。  
戻る直前に、F・Fに頼んで鳴滝くんの傷を治して、全身のドロ汚れも分解してる。  
ちよつと破れてる制服は、彼がメガビョーゲンに攻撃されて気絶した証に使うわ。

さてと、今度は私の番ね。ヨイシヨット

「ど、どこに行つてたんだね。三人…や、四人か！」

ガラス美術館から少し離れたところで変身を解いて、鳴滝くんをフツーにおぶり直す。

ファイヤーマンズキヤリーなんて、慣れてる方がおかしいからね。

急ぎ足で建物へ近づいていくと、血相を変えた円山先生が走ってきた。

すでに駐車場にみんな集合して、このまま帰る準備をしていたみたいね。

見たところ、私たちが最後かしら？

「先生、ごめんなさい。」

彼が、怪物に蹴り飛ばされてしまつて…

三人で持ち上げて、遠くに逃げ続けてたんです」

大丈夫、これで通るわ。F・Fに確認済みよ。

メガビョージェンが出た直後、鳴滝くんが道中の監視カメラを潰して回ったことはね。建物から出ていないのに出ている、なんて矛盾に気づかれる余地はない。

私たちも抜かりなしよ。松葉杖もしっかり持つてる。

「なんてことだ…すぐ病院に連れていかなくては」

「わたしたちも付き添います。目が覚めてもワケがわからないと思うし」

「ウム、そーだな。頼んでもいいかね」

そうなると、円山先生が鳴滝くんを私から引き取って、おんぶを交代した。

まあ、積極的におぶる理由はないわね。当然だけど重いわよ。

途中でタクシーを呼んで、席に押し込んでいる最中にやつと彼が目覚めます。

「ウ……ウグ」

「あ、タツキー」

「あ…メ、メガ!」

目を覚ますなり、背をバツと起こして回りを見始める彼だったけど、

F・Fが止めたんでしようね。すぐごまかしに入った。

「メガ…目がくらむ」

「何を言つとるんだね、キミは!」

意識ははつきりしてるんだらうね？」  
「ブツ！」

我慢できなくて吹いちゃったわ。

何よ、目がくらむって。

唐突にそんなダジャレをカマせるならダイジョーブね！

そこからはのどかがスタンド会話でおおよその説明を済ませてくれて、病院で検査を終えた頃には夕方になっていた。

停電してたせいで必要な器具のいくつかが使えず、時間がかかってたみたい。

ダルイゼンにひねられた腕のダメーじだけはF・Fが意図的に少し残していて、病院の先生にもそこを指摘されただけで終わったらしいわね。

お手当してもらってから、またタクシーに乗って、

すこ中まで帰ってきたわ。そこで解散。

鳴滝くんだけ先に帰ってもらって、

私たちは改めて、ひなたから話を聞くことにする。

「で、何があつたのかしら？ ひなた」

「あえ？ ナンの話？」

「もうッ、戦いが終わった後の話よ。」



あたしのせいだ、って落ち込んでたじゃない」

「あッ……ウん」

ここで蒸し返さなきゃあよかった、とか思うのはひなた初心者よ?

今は忘れてても、どうせどこかで突然ぶり返すのがこの子よ。

気にしてないように見えたとしても、都度処理しないと後が大変なの。

ちなみにこれ、最初に気づいたのはのどかね。ホント、良く見てるわよ…

さておき、ニヤトランも交えてことの経緯をじっくり聞かせてもらったわ。

なんでも……

まず、メガビョーゲンを探してる最中で、無関係の事故を見つけて助けに行った。

考え事は全部投げろと鳴滝くんに言われてそうしたけど、

鼓膜直通通信をつなげっ放しだったばかりに、

トラック爆発の轟音をもろに聞かせて気絶させてしまった。

…なに、二度も気絶してるの? あいつ。でも無理もないわね。

爆竹を耳元で鳴らされたら、私だって気絶しちゃうでしょうし……次。

メガビョーゲンの位置に当たりをつけて、有利な場所…あの畑まで

ひなたが引っ張っていく役目を請け負って、それ自体はうまくいったし、

フー・ファイターズの水圧砲もメガビョーゲンの足をえぐった。

でも、メガビョーゲンの奥の手になんとなく感づいてはいたのに  
鳴滝くん目の前でそれを撃たせてしまい、立て直しがきかない間に  
ダルイゼンが来て鳴滝くんを人質にとってしまった……と。

ひなたの話した方もあって、どうしても話があっちこっちに飛び散っちゃうけど、  
総合すると言いたいことはわかってくる。

考え事は言われた通り丸投げして、完璧にやつてもらえたのに  
ひなたは果たすべき役目を果たせなかった。

プリキュアの力を持っているのなら、

抵抗できない人間にダメージを通してはいけなかった。

……ウ~~~~ンじれつたいわねえ~~~~ツ

「ひなた、それはおかしいわツ」

「えッ、なんで？」

「トラツクの爆発も、メガビョーゲンの切り札も。

カンニングでもしてないと完璧な対処なんか無理だよ、ひなたちゃん」

仮に私なら、予見して完璧に対応できたかしら。

はつきり言うわ。そんな自信ないわよ。

トラツクの爆発は、もしかしたら気づけたかもしれないけれどね。

そんな仮定をしたところで、私とペギタンにチリ・ペツパーはないわ。私かのどかじゃあ、ますますどうしようもなかったわよ。

「でもさ…」

「でも、何よ?」

「承太郎さんだったら、どっちも気づいて防いだって。そう思ったらさ」  
「オイひなた、ムリだぜそれ」

もう、ドコまでも落ちてくわねこの子。一度へコんだら!

でももう一押しよ。今回は理屈で越えられる壁だわ。

私よりも先に、のどかが進み出て笑いかけた。

「じゃあ、ひなたちゃん。承太郎さん風に言うね」

「のどかっち?」

「今回、ひなたちゃんがぶつかったのは、わたしたちみんなの問題なんだよ?

今までだって、守りきれなくて傷つけられること、あったでしょ?

わたしたちみんなが、どうにかしなきゃいけないところまで来てるの。

ひなたちゃん、たまたまそこに居合わせちゃっただけ」

承太郎さん風に、か。

たぶん、億泰さんが吉良吉廣きらよしかろを取り逃がしてしまったときの

フオローを元に考えてるわね、のどか。

明確な悪人が相手でもなければ、誰が悪い、なんて言わないのよね。

「ごめんね、ひなたちゃん。ツライところ押し付けちゃって」

「あ、謝らないでよ、のどかっち」

「わたしもひなたちゃんに落ち込んでほしくないなあ。」

ちゅちゃんも、ニヤトランも。もちろんラビリンもペギタンも、ね？」

「そうラビ！ だいいち、クヨクヨしたってしょーがないラビ」

「元氣出すペエ。一緒に考えるペエ」

「……………。うん」

ちゃんと納得してくれたみたいね、ひなた。これなら大丈夫ね。

『夢』で顔を合わせる頃には、いつものひなたに戻ってると思うわ。

でも、今回の戦い：チリ・ペッパの片鱗を見せてしまったことが致命的よね。

ああするしかなかったし、のどか立案のごまかしも見事なものだけど、

遠からずバレると見るべきだわ。

そこに、人体実験でもなんでもやるビョーゲンズの三人。

今後はますますやっかいになっていくと考えるべきね。

その思いは、家に帰りついてからニュースを見て、ますます強くなったわ。

すこやか市大規模停電。変電設備多数故障。

これは明らかにプリキュアの仕業じゃあない。

ビョージェンズはこれに気付かないほどバカなのかしら？

そして、チリ・ペツパーの全力の一撃は、すこやか市にとつても大ダメージというところ…

私のうち、旅館沢泉からして、冷蔵庫が止まって自家発電機を回す羽目になっているんだもの。

今回の戦い、とても勝ちとは言えないわ。

トンデモないことに気づいちやったよ！

今日は日曜日。建築家である花寺たけしも休みを満喫できる日だ。

むろん、急を要する仕事、外せない仕事というものは社会人の常であり

そう逃げ切れるものでもないのだが：少なくとも、今日この日は例外だった。

それでも自堕落に昼まで寝ているわけにはいかない。

学校のある平日と同じように、早朝にランニングに出ていく娘のどかに申し訳ないからだ。

親は子の鏡。何を学び取っていくかはのどかの自由だが、

親としては良い背中を見せなくてはと、そう思うのだ。

ようやく病床から解放された娘にとって、すべてのものが輝いて見えているはず。

他ならぬ親である自分が、そこに水をさすわけにはいかないだろう。

そんな風に思っているのだが：最近、娘の様子が変なのだ。

ランニングから帰ってきたのどかと一緒に食卓についていると、

目が唐突に鋭くなったのだ。どうもBGM代わりに流しているラジオを聴いているらしい。

であるから、聞き耳を立てるまでもなく、内容は頭に入ってくるが……富士山麓近辺の道路で事故が相次いでいる。

これだけなら、言い方は悪くなるが……ありふれているのかもしれない。

だが、うち三件のおそろべき特異さは……

滅茶苦茶に破壊された車体から、運転手その他の人間が一人残らず姿を消していること。

大けがで出血した痕跡があり、外に這い出した痕跡までも残りながら、だ。

行方不明者は合わせて七人。事件性を認めた警察が動き出している……

「物騒だなあ。お父さんも気を付けるから、のどかも気をつけるんだぞ？」

薄暗い道路なんかを通らないようにね？」

「……え。うん。怖いよね」

話しかければ戻るのだ。いつものほんわかした顔に。

だがそれが、どこか作ったものであることを花寺たけしは感じている……

別にこれが初めてでもない。

わが娘が……まるで、『歴戦の傭兵』か何かみたいなきらつきを発するのは。

目や耳に入ってくる事件に、異様な警戒をあらわにすることがあるのだ。

何をそんなに恐れることがある？

心当たりは……ひとつしかない。あの、鳴滝少年の下水落下事件だ。のどか達に発見されなければ、間違いなく彼は死んでいただろう。

そして、次いで明らかになったであろう、

半身不随の少年が家族に半ば見捨てられて一人暮らしを強いられる状況……

仮に彼が自分の子で、聞いた限りの非行を止められなかったとしたなら、

いったい、どれほどの苦痛を一家にもたらしただろうか？

それを差し引いても、今のネグレクトそのものの仕打ちは異常だと花寺だけは思う。

というよりも、そんな仕打ちを平気でできる家だから、

そんな非行を起こす子に育ったのでは？ 親は子の鏡。彼が学んだものはそれだったのか？

まあ置いておこう。勝手な当て推量で憐れむようなマネは彼に対する侮辱だろうか。

それよりも問題はのどかだ。こんな情報の洪水を浴びせられたわが子はかつて、言っていた。

『お手当てするわたしになりたいの。』

今までずっと、お手当てされるわたしだったから』



いつ、誰がこんな窮地に陥っているのか？

助けを求めている、手が届く人間はいないのか？

そんなフウに思ったところで不思議はないのかもしれない…

ずっと、ずっと無力を噛みしめていただろう娘は、

だからこそ全身全霊で出来ることを探しているのではないか？

だが、ゆえに経験があまりにも不足している。

ずっと身体を動かせなかったがために、動けるようになると加減がわからない。

出来ることと出来ないことがわからず、身体が悲鳴を上げたときにやつとわかる。

ごく最近までそんな状態だったではないか…それと、同じなのでは？

そう思うと、危うい。

娘が、勝ち目のない何かに全力で突っ込んでいったとき、自分は どうする？

わざわざ確認するまでもない。父親なのだから。

…今のところ、娘の行動に、直接的に不審な点はない。

外に行くときには、主に沢泉ちゆ、平光ひなたの二人と行動を共にしている。

問題の渦中にある鳴滝少年と会っているような様子は、ほぼない。

学校でいくらか話しているようだが、背景の危険性から表立った接触を避けているの

は

他ならぬのどか自身の口から確認できているし、そこを疑う気はない。

メールではちよこちよこやり取りしているようなのだが：

にしては、気になる素振りがあつたのだ。

かなり前だが、鳴滝家から生活費の振り込みがあつたことについて直接お礼を言いに来たとき。

ちよど夕食前の頃合いだったので、のどかもその場に立ち会っていたが。

『不自然な目配せ』があつた。互いの目をチラチラと見ていた：

そしてそれは、むしろのどかの方からだつたのだ。

せいぜい二秒程度の間で、その後は、至つて普通のやり取りをしていたのだが：

この程度、別に根拠にも何にもなりはしない。テレパシーをしているわけでもあるまいし。

だが、花寺たけしとしては、何か妙なつながりを感じずにはいられない。

彼の家を幾度となく訪ねているのは、

彼のその後を心配してというのものもあるが：それを確認するためだ。

別に邪険にされることもなく通されて、

沸かしたお湯をガラスコップに入れて出してもらっている。

最近、お茶になった。スーパーで売っているティーパックのほうじ茶だ。

ちよつと申し訳ないのでお金を出した。

そうやって何度か会話するうちに確信している。自分の直観は正しい、と。娘と彼との間には、何かわからないが秘密の連絡手段があつて、

そこでかなり頻繁に話をしている。

そして同時に、娘はそこに後ろめたさはこれといつて感じていないことも。

彼の方は…そこについてどうかは今ひとつわからないが、娘に引け目を感じているようだ。

ここで、もうこれ以上探るのはやめた。

親として介入せざるをえない事態は、少なくとも娘と彼の間にはない。

このことについて、すでに妻とも話をしており…

必要ならば、それとなく軌道修正するように仕向けていこう。そういうことになつて

いる。

こんな話し合いがおそらく、平光家でも持たれているのだろう。

沢泉家は…どうだろうか？今時点では接点がない。

娘が世話になつてゐるのだし、挨拶に行くべきか？

でも、必要もないのに娘の人間関係にしゃしゃり出るのは過干渉っていうやつかも

なあ……

などと思う花寺たけし。平光ひなたも、沢泉ちゆも、共に疑う余地もなくいい子なのである。

まともな家庭というのは、それだけで得難い財産なのだろう。のどかが席を立つた…：食器運びを手伝うつもりらしい。

自分もやるか…：そう思つて後に続くと。

ズデン

のどかが突然尻もちをついた。

幸い食器の類はまだ持つていなかった。

「ど、どうしたんだい?」

「あ……ご、ゴメン。」

チヨット、腰からチカラが抜けちゃつて。

走りすぎちやつたかなあゝゝ、休んでるね?」

(い、今頃気づいちゃつたけど……)

あとちよつとで死んでた、わたし!」

「這う這うの体で自室に引っ込んだのどかは、恐怖と混乱で頭がいっぱいになった。」

今になって気づいたのは良かったのか悪かったのか?

始業式のあの日、鳴滝魁が持ち込んだ爆弾は、そもそも何に使うものだったのか。

ふとした拍子でそこを突き詰めて考えていった結果、顔から血の気が失せる結論に至った。

「ど、どうしたラビ?」

「なんか怖いモノ見たラビ?」

心配したラビリンが近づいてきた。

周りの人目が途切れるタイミングを、彼女はいつも計ってくれている。

その声を聞いたのどかの心音は、急速に落ち着きを取り戻していく。

小さく息をついたのどかは、笑顔を作って応えた。

「ラビリン:うん、ちよつと怖かった。」

順番に話していくね?」

話せば楽になる。

これは病床にいたところからの経験則でわかっている。

苦痛や恐怖、不安そのものが消えるわけではなくても、それを誰かに聞いてもらえるだけで和らいでいくのだ。

さて、順を追おう。

まず、鳴滝魁は学校に爆弾を持ち込んでおり、

それを使ってメガビョーゲンに攻撃を試みたが無駄に終わっている。

それはいい。それはいいのだが、あんな爆弾を持っていたのは何故だ。

ニヤトランが確認したところによると、他人を傷つける目的はなかったらしいが。

でも、それをメガビョーゲンに使った以上、それ自体は目的に沿っているということ。

では、彼はメガビョーゲンが校内に出ることを事前にわかって爆弾を持ち込んだのか

？

そんなことが出来るのだったら、今頃ラテは出ずっぱりにならずに済んでいる。

ならば、つまりあの爆弾は、他の目的に使用するために持ち込まれたのだ。

メガビョーゲン以外の、たぶん有害な何かを粉みじんに吹き飛ばすために。

彼から見て、それは何だ。

彼が、あれだけの破壊力を必要と判断して学校に持ち込んだ理由は？

そこでさらにその前日にさかのぼる。

そこで彼はすでに見ているのだ、メガビョーゲンを。

あれはダルイゼンによつて作られたものだったが、当時の彼にそんなこと知るよしもない。

あそこで彼から見た事實は、化け物に吹っ飛ばされて気絶した後、花寺のどこを見たことのみ。

のどかはそこでどうした？化け物について聞かれて、はぐらかしたのではなかったか。

そして思い出せ。あの当時の彼の行動原理を。何を願つて動いていたのかを。

—意味のある『死』がほしい！

—死ぬことに、俺が信じられる価値がほしい

要は、世の中の役に立つことをして死んでいこうとしていたのである。

ここから判断するに、彼の目的は自爆しての道連れだ。…誰を？

爆弾がなければ倒せないような化け物。その前後にいたのは誰だ。

ひとりしかない。

始業式の日、ひなたが言うにはのどかの周りを探りまわっていたという。

その理由は…ここまで来たなら、わかりきった話だ。

わたしが、メガビョーゲンを操っていると思われていた！

「あ…アイツ、のどかを爆弾でドカーンしようとしてたラビ？」

「うん。ほとんど間違いないよ」

「と……トンデモないヤツラビリー……ツツツ!?」

激怒して足で床をダンダン鳴らすラビリンの顔は、また同時に青ざめてもいた。ラビリンもまたあの爆発を見ている。生身の人間では、良くて真っ黒焦げだろう。自爆テロという単語の恐ろしさを、のどかともども実感する羽目になっている。

「許さんラビ、ブチのめしてやるラビ!」

「ラビリン、ラビリン。ブツソーなコト言わないで?」

もう済んだ話だよ?今の鳴滝くんに、そんなことする理由はもうないんだよ?」

「でも、許せないラビ……ツ!」

「……………ウ、ウン」

正直なところ、ラビリンの言う通りなのである。

もう、やる理由はないというのが明らかだとしても、

だからといってキレイサツパリ許せるかといったら…

水に流すには大きすぎて、わだかまりになるのは確実だと思った。

そんなわだかまりを現在進行形で抱えている、ちゆのことを考えると。

「このまま放っておくのは、できないね」

のどかはスマホを取り出した。



連絡先はひなた。チリ・ペツパーを送ってもらおう符丁を入れ込む…

「その通りだ。間違いない」

採石場に呼び出された魁は、のどかの推測を全面的に認めた。

今ここにいるのは、のどかトラピリン。それと魁（つまりF・Fもいる）だ。

全員をこの場に集めることも一度は考えたが、

全員の前で恥をかかせることにながりがねない。

それをおもんぱかったのどかは人数を最低限に絞った。

そして確認したのだ。自分の推測が事実かを。

「……そっか」

「ついに言われたって感じだな。

言うべきかどうか、俺自身悩みも…

……いや、認める。掘り返すのが怖かった。

あのとき、一緒に謝るべきだったんだ」

「あのとき、一緒に気づいてるべきだったね。わたしも…

だから、こんなふうになりたくないになっちゃった」

苦笑しながら、のどかは続ける。

事実であるならば、ここには決着をつけに来たのだ。

これ以上の荷物に好んでかかずらっている余裕はないのだから。

「鳴滝くん。わたしね…大切だよ。

わたしの命が。生きてるってことが。

わたしの命を奪うなんて、許せない。

わたしの人生をメチャクチャにするなんて、許せない」

「……ああ。

俺は、それをしようとした。

てめえの勝手な都合でだ」

魁は、別に居直っているわけではない。

のどかの目には、振り下ろされる刀の前に

黙って首を差し出ししているように見えた。

(……ウ～～～ン)

これはこれで困るなあッ

カントンに自分を差し出さないでほしい…)

などと思うものの、彼ならこうするだろうな、という予感はおろかじめあった。なので、別に滞ることもなく、のどかは話を進めていく。

これからすることは、花寺のどかとしてやらねばならないことだ。

だからわざわざこんなところにまで呼んだのだ。夢ではなく、現実であるために。  
「だからね。」

されただけのことを、っていうわけにはいかないけど。

気が済むようなお返し、するよ」

「…やってくれ」

「うん」

のどかの頭にあつたのは『ツケの領収書』。

あのとき、ちゆがやったように、多少は甘めだとしても

ふさわしい報復になるような折檻を行い、

罪の意識を引きずらせず決着させること。

そう思つて拳を固めはしたものの、顔面を打ち抜く軌道が定まらない。

ためらつている自分の姿ばかりが浮き彫りになつていく。

「のどか、ふるえてるラビ？」

「……。そうみたい」

目の前の魁は変わらず、目を見開いたまま

これから来る一撃を待っている。無駄な口を利くこともない。

その忠犬ぶりが、今は疎ましい。

拳を握ったり開いたりを繰り返したのどかは、

やがて打撃の態勢を完全に解いた。

殴り方はさんざんやって覚えたのだ。

今や、プリキュアでなくとも出来るくらいには。

それを、魁の目の前で、やめた。

「……花寺？」

「ごめん。できないみたい。

遅すぎたね。やるのが……」

思うに、ちゆが『ツケの領収書』を発行したタイミングが

まさに最後のチャンスだったのだろう。

「俺が言うことじゃあないけどよ。

できれば……ここで、しまいにしてくれる方がうれしい。んだけど」

「鳴滝くんは、ひなたちゃんを殴れる？」

「……………ッ」

「ちゅちゃんを殴れる?」

ニヤトランを殴れる? ペギタンを…

……………わたしには、ムリだなあ。

何かひどいことをされて、そのお返しだとしてもね?」

思っているままを、はつきりと言葉にできた。

それで決着がつくわけではないが、

出来ないことは出来ないというのが、今ののどかの答えだったらしい。

「殴ったら、きつとわたしも痛いよ。」

その痛みを越えられるだけの恨みを、今のわたしは持つてない。

だから、殴れないのなら…それでいいんだと思う」

「わかった…じゃあ、俺は、まず俺がすべきだったことをする。

ごめんなさい。俺は不当に、お前の命を奪おうとした。

謝って済むことじゃあない…でも謝るしかない。ごめんなさい」

「うん、聞いたよ。」

許すつて即答はできないけど。

あなたが謝ってくれたの、わたしはちゃんと聞いたよ。忘れない」

気が進まないことの肩の荷が共に降りた互いだつたが、  
のどかの恐怖と困惑がそれで消えるわけもなかった。

聞いてもらえれば楽になる。

その原則に従つて、のどかは今朝がた家族に向かつてさらした醜態についてまで  
苦情を言い立てて、その前後の精神状態までキツチリと伝え尽くした。

魁がゲンナリ憔悴したのは言うまでもない。

その後によつてきた、ちゆとひなたの前でも説明の中でそのケが再燃。

同じことがまた繰り返された。今度はちゆとひなたの相槌までもが加わつた。

結局のところ、恥をガツツリかかされた魁である。

気が付けば、のどかの気は済んでしまい：無事、復讐は完遂したようだった。

「ハイ、おしまい！仲直りの握手！」

スツキリ

# 枯れることなきブラッド・フラワー—その1

中間試験は無事に終わり、点数も戻ってきた。

すこ中だと、順位は上位30人に限り張り出ししている。

沢泉の名前は、その中であつた。俺はというと、無関係だな。

「よし、終わった終わった！自由だー！」

『夢』の中、カフェ・ドウ・マゴ。

はしゃいでいる平光を、沢泉はあんまり感心した目で見ていない。

花寺は苦笑してるな。ドツチかとゆーと困り気味に。

…やる必要、あるか？憎まれ役。

考えてる間に、沢泉がツツコンだ。

「首の皮一枚だったじゃないの追試まで！」

「このままだと今回良くても次がダメよ？」

「……、今回良かったんだからさあー、イイじゃん」

「良くなーよッ」

誰かの後だと強気になるもんだ。

虎の威を借るなんとやら、つてか。情けない。が、言わねえとヤバイのも確かだろうよ。

「平光、お前な。」

ビョーゲンズが出たとき、追試やってる気かよ？

そーなるぞ、最悪よおー」

「グツ……そんなコトゆータツキーはどーなのさー？」

「問題ないね。二週間以上前から備えてた。」

基本をおさえりや60点はいける……それで追試は回避できるだろ」

「ンムー！」

ふくれツツラでソツポ向いてもダメだかな？

と、そこで首を斜めに傾けたのは花寺だ。こつちを見ている……

「何か？」

「二週間以上、で……60点？」

鳴滝くんなら、もつとできる気がするけど？

わたし、だいたい70点から80点だよ……あッ、69点あった」

聞いてみれば、まあ、もつともだな。

100点を狙うことはできるだろう。



そこに全力を傾けさえすれば。

「宿題とか除いて、一日あたり1時間程度だからな。

いくらでもあるだろ？他にやること…

戦いの邪魔にならない限りは、どうでもいい」

その1時間の範囲では全力でやってんだぞ？

何せ俺は、陸上で調子コキはじめてからは勉強をほぼガン無視したし、

こつちに転校してきてからの3カ月では一応ちゃんと授業を聞いていたもの…

ま、身が入ってたとは到底言えないね。赤点手前だった。

今回はそれらを挽回する必要があったんだ。みんなの邪魔にならないためにな。

「ンあー…ー…ツッ！

イヤミー！このイヤミー…ツッ!!」

ブチキレられても困るぞ平光。

とはいえ、思考が次々ワープするクセは課題ではあるな。

コイツが勉強できないの、絶対そのせいだ。

頭が悪いはずなのに。

「どうでもいいっていうのは賛成できないわね」

今度は沢泉が席から立って、腰に両手を当てて俺を見下ろしてきた。

咎められるようなことは……

「あ、悪い……沢泉の成績を軽んじる気はない。

あくまでも俺にとつての無駄って話であつて」

「それこそが悪いっていうのよ？」

ちよつと前に、消火器なんかにしてやられそうになつたのは誰だつたかしら？」

「それは……それだろ。使える知識とテストの点数じゃあ、目的が根本から違うし……

さつきも言ったが！もつと優先すべきことを、俺たちはたくさん抱えてる」

「でもそれを軽んじるのは間違いよ。あなたにだつて将来があるでしょう？」

「……………」

突拍子もないことを言われたと思つた。将来だつて？

言われてみれば……まあ。生き続ける限り、たどりつく先は、ある。

でもそれを、今、気にしたところで……なんだ？

「……ビョーゲンズを倒して、レクイエムの秘密を守り切る。

今、大切なのはそれだけだろ。違うのか？」

沢泉は、苦り切つたような顔を一瞬した。

それから、押し殺したような息をひとつついて、表情を戻した。

「…………」。私が無神経だつたわね。

ええ、それでいいわ。今はね」

言葉の意味を図りかねた。俺は何か間違ったことを言ったらしい。

左右を見る。平光が、さっきのブーツを引つ込めて神妙な顔をしている。

俺と沢泉の顔を交互に見ているようだった。

花寺は…どこでもない宙を少し見上げていたと思うと、

首をひとつ縦に振ってから、身を乗り出してきた。

「鳴滝くん。ひとつ、見落としてると思わない？」

「ん、いや…何を？」

正解はそこにあるのか？

俺の方からも思わず身を乗り出すと、

少し得意げにした花寺が続ける。

「鳴滝くんが、テストでみんな満点取ってね？」

順位が一番で貼り出されるでしょ？

想像してみても…？どうなるかな？」

「俺が一番であることが知られる。それがど…あ」

わかった。言わんとしていることが。

確かにこれは、俺の目的のひとつにつながるかもしれない。

気を取り直したらしい沢泉が、横から不敵な顔をした。

「一目置かれるわよ、あなた。」

少なくとも、わけのわからない親切と愛想を突然ばらまき出すよりもね」  
ぐうの音も出ない。

重要なのは、これに軽く見られる要素がどこにもないことだ。

妙なやつかみを受ける可能性は、そりゃああるが。

そんなもの、他の何をやっても同じだ。

かつて俺が考えたやり方よりも、ずっとずっと効果的だろう。

イメージが下降する要素は、ない。

「……いや待て。カンニングの疑いをかけられる可能性が高い」

「なら、そうならないように、イメージも一緒に作っていいこう？」

授業中に手を挙げるのなら、誰も文句言わないよ」

「いい考えね。」

それを理由にして突っかかってくるヤツなんていたら、みつともないだけだもの。

大人の対応で流してやればいいわ」

メリット以上のデメリットを、見出せそうにないな。

効果的だ……花寺。お前はいつも、一段と広いところからみんなを捉えるな。

そこに来て俺は、近くしか見えない。近視眼的ってやつか。

これではダメだ。変わらなくては！

みんなのために、役立つために。

「鳴滝くんが見落とすなんて、らしくない失敗だったけど。

でも、次はきつと、スゴイよね？」

「全力は、尽くしてみる…出来る範囲で、だけど」

「簡単にはいかせないわよ？私も聞いたからには、ね？」

私も同じように頑張ってやるわ」

「…お手柔らかに」

「お断りよ」

「高飛車めにふんぞり返ったところで、そんな沢泉を咎められるヤツはいないだろう。

勉強も運動もできて素行の良さもこの上ない、パーフェクト女だからな…

やり取りしている俺自身、全然不快は感じない。

これはむしろ合わせてくれてるだけだからだ。そう思う。

旅館の看板娘か。これもまた、おもてなしってやつを体得してるからこそなのかも

な。

俺に対してそれをしているのは何の因果か。手間をかけさせすぎているな…

「……………」

……ええと。

黙ったままのヤツがいる。

無然としたというか、悲しそうというか。

そんなにイヤだったのか？今の話に首突っ込めなかったのが。

そんな顔する必要、どこにあんだよ。

ムスツと、手元の紅茶をすすってる。

わからんが、原因が俺にあるのは確かっぽい。

何なのかわからんのに謝ったところで神経を逆なでするだけでは…

『夢』だからな。強く思い浮かべて…手元にチョコミントアイスを作った。ダブルな。

そいつを差し出してやる。平光の前に。

「…ん、え、えッ？イキナし何？」

困惑されたよ。

俺はやっぱりわかってないヤツなのか？

でも今更引っ込めてももつと感じ悪いわ。

「何って……」

なんか落ち込み気味に見えたんで。

いらねーなら、引っ込める。引っ込めた方がいいなら」

「……。う、ウウン？いる、いる！」

あんがとね！なら、あたしは……コレ！」

ひつたくるみたいにチョコミントアイスを持って行った平光は、入れ替わりに俺の前に紙コップを差し出してきた。

同じように『夢』の中で、だいぶ前にふるまってもらっている。

平光姉の屋台で出してるっていう、ジュースにグミをトッピングしたやつだった。

……いや、なんで？

「あ、アリガトウよ」

「ウウン」

シヤク、シヤクシヤク……

ズ、ズ　ズー……

食う音と飲む音だけが聞こえる。

ウマイよ？ウマイ……こんなゼータク品、俺にはほぼ縁がないんだし。

だがその場にあるのは、ただただ困惑だけだった。

花寺も沢泉も、怪訝な顔をしているのみだ。

1分近くそれが続いたんだが、打ち砕いてくれたのはニヤトランだった。

「オウオウオウ。」

そんな筋合いねエーんじゃあなかつたのかヨ？ 魁よおー！」

「…、うるせー。お前も食つてろ」

「ニヒヒヒヒ、ありがとよ」

その後、なし崩し的に全員にふるまう羽目になった。

チヨコミントアイスのダブルを。

そんな特別なモンじゃあねえぞ。俺が好きなた味ではあるけど。

思い返すに、コレだつてヒトから強請つたカネで食つてたんだし。

そう思うと、途端にみんなを汚物で汚染したかのようにも感じてしまう…

くだらん話はここまでだ。

何度でも言うが、俺たちは他にいくらでもやるべきコト抱えてるだろーがッ

「確か、ラテだつたよな？」

ラテから何かあるつて話だつたよな？」

「うん。遠くから嫌な何かを感じるつて」

花寺に抱っこされたラテも交えて聞くに。

以前から、何か嫌な感覚を覚えてはいたらしいのだが、

それがここ数日で存在感を大きくしつつあるとのことだ。



場所はまだ特定できていないが、おおよその方向までは花寺が割り出した。

北東だ。すこやか市からすると、神奈川だとか茨城、福島かも知れないがな。

あるいはその先の埼玉だとか茨城、福島かも知れないがな。

「そうなるよ、やることはひとつよね。」

ラテに方向が感じられるっていうのなら」

「またオレの番だぜ。」

「ツツか、チリ・ペツパーの番だぜ正確には」

「出ずっぱりだペエ」

「人間社会じゃあ便利すぎるラビ！」

「ヒーリングガーデンじゃあ役立たずラビーツ」

「頼り切った戦いをしてたら、電気がない時にヒドイことになるから。」

「そこはちゃんと考えないとね…それは置いとこう？やることは…」

「ニヤトランがチリ・ペツパーで遠隔地のポイントにラテを連れまわし、

そこから嫌な感覚の方向を探る。」

それをいくつも繰り返して、それぞれ感知した方向を結んだ先が答えになる。

「相手が移動していない限りはな。今のところ、それはないらしい。」

「ラテの立場は飼いだし、そう簡単に出られないわね」

「アウン…」

「お父さんにお母さんの目を盗んでになるから。ちょっと時間かかるね」

「ならその間にさあー、例の事件解決しよーよ！富士山の行方不明！」

平光がかなり強めに言ってきたのは、ここ数日でみんなの話題になっている事件だ。

富士山麓近郊の道路で、車の事故が相次ぎ、

しかも乗っていた人間が全員行方不明になっているという：

だが警察が出張り始めるなり、忽然と事件の足跡は途絶えた。

同様の事故が、突然起こらなくなってしまったのだ。

普通の交通事故はあるものの、共通点も、不審な点もないらしい。

これらを受けて、すでに俺たちもいったん結論を出している。

「ひなた。私の気持ちもあなたと同じよ？」

でもね、だからこそ、もう一度言うわね。

…相手の正体も、能力もわからないの？

このまま行ったら、ミイラ取りがミイラになってしまおうわ」

「でもさ、七人だよ？」

しかもさ、うち一人は小3の女の子なんだよ？

このままほっといたら、どんどん助からなくなっちゃうじゃん」

「そして、そこで足跡が、事件が途絶えた…

ニヤトランが監視する他には、今ある材料から追っかけるしかねえんだよ。その子がすでにダメだとしたら、俺のせいだ。俺の調査がトロいせいだ。

恨んでも憎んでもいいけどよ、とにかく今行かせるわけにはいかねえよ」

「……そんなアンタより、もつと何もできないあたしなんだけど？」

「わたしたち全員の限界なんだよ、ひなたちゃん。これも前に言ったよ？」

「できること、やっていくしかない……ごめんね」

今、調べがついている範囲では。

被害者の身元はみんなわかっているという。新聞とネット、週刊誌を総当たりした。

それによると、三件の事件のうち、ひとつは営業に向かっていた会社員。名古屋在住。

ひとつは夫婦旅行の帰り。栃木在住。

そしてもうひとつは富士山近所の町へ、家族四人で引越す。元の住まいは千葉。

いずれの世帯同士も関わり合いはない。狙われるような遺恨があるかは不明。

営業の会社員だけは、やや多額の借金ありとかいう情報が週刊誌一個にだけあった。

信憑性は、相当疑わしい。ソースがぼかさずアテにならない。

ここまでの情報を額面通りに受け取るとするなら、

犯人はほぼ一か所に張り込んで、ある意味無差別で攻撃を仕掛けている。

犯行時刻はすべて夜だ。最後の家族襲撃だけは、やや早い20時頃だが。

さて、乗用車をメチャクチャに破壊して、大ケガをさせた中の人間を

天狗の仕業かのように連れ去ってしまう犯人は、いったいどういう利益を求めている

？

わからないのだ。誘拐して人身売買でもするのなら、大ケガさせるのは大馬鹿野郎だ。

犯人のスタンドがクレイジー・ダイヤモンドなら別だがな。考慮に値しねえ。

そこを置いて、外に這い出した形跡を残してみんな姿を消したって側面だけを取り出ししても

エニグマかもしれないし、アクア・ネックレスかもしれない。

リンプ・ビズキットもありえる。もしかしたらジャンピン・ジャック・フラッシュかも。

あるいはスタンドなんか使わずに、手品じみた完全犯罪を達成しているのか？

そもそも犯人は人類か？キャトルミューティレーションと言われても納得できるぞ

？

とにかく、今時点では、わからん、と言うしかないんだよ。

今はただ、追跡調査を続けつつ、現地の電線をチリ・ペツパーにパトロールさせるだ

けだ。

「だから今は、すぐに手をつけられそうだな、ラテの話を優先するよ。鳴滝くんは富士山事件の調査、続けて」  
俺たちのリーダーの決が出た。

## 枯れることなきブラッド・フラワー——その2

「場所は案外すぐわかったわね」

「チリ・ペツパー・サマサマだぜ、ホント…」

なきや、どーしてたんだろーなコレ」

自分の力じゃあないって言いたいのかしらね。

探していた当のニヤトランが他人事みたいに言ってるわ。

もちろん、ラテが言ってた嫌な気配のことよ。

位置の特定のため、ラテがチリ・ペツパーに連れられて移動した回数は5回。

まず、思い切つて遠くまで行つてみるべきだつてことで、

埼玉県と栃木県、それと茨城県の境目あたりに行つたのよ。

ラテが示していた方角で、ある程度遠ければどこでもよかつたんだけど、

日本地図を指さしたひなたの思い付きでね…：ココどんなトコ？つて。

ハート型に作られた遊水地があるのよね。

観光名所みたい…：余裕があれば遊びに行つてもいいかもね。

そこからラテが気配を探ると、真南の方角だった。

で、次に行ったのは遊園地の定番。東京じゃなくて千葉県のアソコよ！  
人目についたらマズイから、その近くの雑木林に出てもらって、  
そこから気配を探ってもらうと、ほぼ真西。

これではぼ特定できて：あととは何度か近場に二回出てもらって、  
最後に出た地点で、ラテがここだと断言したわ。その場所は……

「わたしの、入院してた病院だよ……」

机の上に広げた地図を指さして、のどかもそう断言よ。

：ちなみに。今日はカフェ・ドウ・マゴじゃあないわ。

『夢』とはいえ、喫茶店でこんなマネするのは迷惑行為だもの。

以前、ホワイトボードを出して会議してた時から思ってたのよ、私。

だから、今日は杜王ブランドホテルのスイートルームよ。

杜王町滞在中の承太郎さんがずっと泊ってた場所ね。

一階のフロントが彫刻だとか石像だらけだったわ……

どうでもいい脱線ね。変えようって言ったの間違いだったかしら。

「ホント？ ヤベーじゃん！」

カツ カツ ングググ

身を乗り出してきて驚いてるひなただけど、

ルームサービスでハンバーグ注文したのよこの子。  
モリモリ食べて図太いわねえー。

注意しようかとも思ったけど、ここのところ、情緒不安定気味だものね。  
こーいうのを見ると、むしろ安心するっていうのもあるわ。

私たちもひとくち分けてもらってる。少しこつてり目のデミグラス味。  
鳴滝くんは、自分で一皿注文してサツサと食べ終わったわね…

「…。仕切り直さね？」

「それがいいわね」

その鳴滝くんに言われて、食べ終わって落ち着くまで待つことにしたわ。

正解よ。身が入らないことこの上なかったわね。

はい、食後の紅茶まで入ったところで、再開！

「それじゃ、改めて。」

まず、わたしの考えを言うね？

わたしは、病院の中がどうなってるかある程度知ってるし、

退院してから、まだ一年くらい…

それを考えると、知ってる先生とか看護師さんとか、患者さんもいると思う」

そう前置きしたのどかの言いたいことは、この時点でほぼわかったわ。



病院は、基本的に用のある人間しか入れない場所よ？

町の診療所くらいならともかく、入院患者がいる大病院なんかは特に。

「だからこそ入れない。中を直接調べに行くのは無理。」

『なんでこんなところにいるの？』って話になっちゃう」

「でもさ、のどかつちお世話になったんツしよ？

お礼言いにいくんなら別にオカシくないんじゃない？」

「…いるんだよ？お世話になった先生。蜂須賀先生っていうんだけどね。」

今も手紙でやり取りしてる…会いたっていえば、会ってくれるよ、きつと」

「おツナイス、だつたらさあー」

「だとしてもね？」

ずっと前から都合を聞いて、時間をとつてもらつてね？

病院の外で会うってことになるはず。

わざわざ中で会う理由なんかはないんだよ？」

さらにのどかは重ねて言うわ。

同じように難病で励ましあっていた人たちを口実にするとしても、

その人がいるかどうかを確かめることから始めなきやあいけない。

「えツ？チリ・ペツパー使えばよくない？」

「ひなた、考えてみて。」

知ってるはずのないことを、どうしてのどかが知っているの？

向こうは絶対にそう思うわよ」

「…チリ……あ、ダメじゃん」

「そうするにしても、『誰々に教えてもらいました』 ツツアリアバイ…

つか、事実を作んなきゃダメってことだぜ」

「うん。だからね？その時点でもうダメなの」

頼れるツテは蜂須賀先生だけ。余計に時間がかかって本末転倒。

今、ラテが嫌な予感を覚えているのに、二か月後、三か月後になってどうするの？

正攻法は最初からありえないってことね。

話を最後まで聞いてから、鳴滝くんが腕を組んだ。

「すると、もう中で張り込むしかねえな。」

チリ・ペッパーで、ナースステーションあたりにな」

「パソコンとか電話に潜んで、ジーツと聞き耳立ててるペエ？」

「スパイ大作戦ラビ！」

「スタンドを潜入させるって話なら、F・Fもいけるけどな。論外だろ」

「当然ね。その間、あなた自身の身をどうやって守るのよ」

そうするとして、何を探して聞き耳を立てるのか？

…さしあたり、患者さんしかないでしょうね。

それも、ごく最近に病状が悪化したみたいな。

患者さんがデミビョーゲンにされて、そのまま潜伏している。ありえる話よ。

でも、ラテの感覚からすると、そのずっと前から気配だけはあつたつていう…  
どうなっているのかしらね？

その線でなければ、病院に起こっている怪事件がないか。

ビョーゲンズについて何もかも把握しているとは到底言えないわ。

知らない何かが発生してる可能性だって十分にある。

そのあたりを話し込んで、会議はお開き。

情報収集の成果を待たなくちゃあ、続きは話せないわ。

二日後。『夢』のカフェ・ドウ・マゴよ。

今回は、たくさんの資料を広げる予定もないからね…

…それで、昨日は深夜帯までニヤトランが張り込んで、聞こえてくる話を鳴滝くんが片っ端からノートに書きこんでいたの。タツグを組んでの仕事ってこと。

誰とも同居してない鳴滝くんだからこそ、夜更かしもし放題。

のどかに私、ひなただと、家族に気取られるかもしれないからね…

学校で居眠りしたとしても、そのぶんは教えてあげるわ。

目にクマを作ったニヤトランは、『夢』になってもバテ気味な雰囲気ね。

「ほ、本当に大丈夫なの？ニヤトラン…つらかったら言いなさいね？」

「お、オウよ。ダイジョーブだぜ、現実のオレは寝てんだからよ」

あの音石明も、チリ・ペツパーを使ってこんなことを

一人でずつとやっていたのかしら？

陰険だとか出歯亀野郎だとか、そういう悪印象が先に立つちゃうけど…

狡猾で、とてつもなくマメで用心深いヤツだったのね。

能力がどれほどスゴくたって、それをフル活用すれば

どのみち本人が苦労しなくっちゃあいけないわ。

私たちは今それをまざまざと見せつけられているわね。

で、鳴滝くんの方は。

「それで、何か目ぼしい情報はあったの？」

「……………」

ある。もしかしたらとんでもない厄ネタかも知れねえのが」

顔でなんとなく察してたけれどね。

言うべきかどうか悩んでるような顔よ。

黙っているようなら一回追及するつもりだったけど。

F・Fかニヤトランが止めに入ってきたら引き下がる前提ね。

「ジヨルノ・ジヨバアーナが入院していた。

承太郎が一度、秘密の会合を持ってただろ。

幽霊になったポルナレフと再会した時のやつだ……

同じ顔が病院のベッドでぐったりしてた。

見間違いでなけりやあな」

それでも、理解が追いつかなかったわよ。

追いついてみたら、確かにとんでもないわ。

神父だけじゃあなかったっていうの？

…いいえ、神父だってまだ未確認だわ厳密には！

F・Fと同じように世界を移動してきた人間が、ついに現れたの？

「……。D I Oの息子よ？」

いえ、こういう言い方が良くないのはわかっているわ。

でも、よりによって、じゃない」

「わかっている。マジだったら『天国』につながるかねえ。

『骨』が『緑の赤んぼ』で、あれが元D I Oの一部だとするならだがよ」

「だから、あたしもD I S Cになって、一度向こうに行く気だ」

F・Fの追い打ちのような一言で、場に雷が落ちたようになった。

ニヤトランに鳴滝くん、F・Fの全員が、その人をジョルノとほぼ断定している！

「ちよ……チヨト待って、『天国』？」

ジョルノさんだったら、どーして『天国』がヤバイのさ？」

「ひなたちゃん。

徐倫さんが、ウルトラセキユリテイ厳正懲罰隔離房まで追っていった『骨』、覚えてる？」

「……。エーツと、『赤ちゃん』のもと。

ゾンビ作りのスタンドで『骨』を生き返したら、

卵になって……生まれた、んだよね？」

あッ感心。かなりしつかり覚えてるわ、ひなた！

F・Fの死に直結するエピソードだからかしらね。

「ホワイトスネイクはスポーツ・マックスにこう言ってた。

我が友の一部だ、って。

そして、徐倫さんたちは『赤ちゃん』を奪われた…

そこでF・Fが聞いた神父さんの最後の一言」

『これで君の世界へ共に旅立てるぞッ！D I O ヲッ！』

「…『赤ちゃん』はD I Oの骨から復活した『何か』で、

しかも『天国』への鍵だっていうこと。

血のつながりのあるジョルノさんの骨が、もしも代わりに使えるなら？」

「その。『天国』ってやつまでできるようになっちゃうワケ？」

『レクイエム』だけじゃあなく？」

承太郎さんがめっちゃ怖がってた『天国』？」

「うん。最悪の場合ね」

うなずいたのどかを見たひなたは、ゲンナリした顔でうなだれた。

あ、カップの紅茶飲んだわね。飲んでる場合？…私も飲むわ、コーヒー。

みんな飲んだ。ズズーツとすすったわ。

ラビリンもペギタンもニヤトランもお茶を飲んで、ラテも水をなめてるわ。

みんなして、フウツと息をつく。

そういえば動物つてカフェイン大丈夫なの？

なんてことを気にする程度に落ち着いたら、

今度はF・Fから切り出してきたわね。

「ヤツが本人なのか、あたしが直接乗り込んで

『肉体の記憶』を読み取らなきゃあならない。

でも、そこまでいくのにまたひとつ問題がある！」

「まだ何かあるの？」

「スタンド使いがいんだよ、看護師によおお〜ッ」

「ええッ!？」

後を続けたニヤトランへ驚きの声を上げたのは私じゃあないわ。のどかよ。

明らかに何か起ころうとしているものね。かつて自分のいた病院で。

そしてもう、ジョルノさんなのはほぼ確定なんじゃあないかしら。

『スタンド使いは引かれあう』んだもの。

「ニヤトランがスタンドを見たペエ？」

「オウ。」

『でつかいウサギ』のスタンドだぜ！

ぐったりしてるジョルノっぽいヤツの体を



ペロペロなめてるようだったぜ」

「ウ、ウサギ、ラビ？」

体ナメるつて、何やつてるラビーツ？」

「オレが聞きてーよ。」

でもよ、『殺す』 ツっーんならよ。

はつきし言つていつでも出来んぜ。

ウサギでもよおーツ、ノド食い破つちまえばよ…

相手は動けない病人なんだからよ」

「危害を加えてないつてコト、ラビ？」

「そうらしい裏付けはとれた。状況証拠だけどな」

そこから鳴滝くんが言うには。

病院の看護師や先生がたが噂しているところによると…

最近、院内で、治癒困難な『がん』や『腫瘍』を抱えていた患者が

原因不明のまま回復していく事例が相次いでいる。

それが起こり始めたのは、おおよそ10日ほど前から。

どう扱つていいものか、専門家の人たちは頭を抱えているみたい。

「…ん？どーして悩むの？」

病院で患者さんが治ったんならさあー、ウレシイっしょフツッ。

……あ、チョット待つて。考える。

もし、お兄がおんなじよーなコトに出会っっちゃたら…

ええと、スグルのオシッコから、イキナリ血が出なくなつたとして…

ウーンウーンと頭をヒネるひなたを、みんなで見守る。

考えるつて自分で言い出した時点で、ほとんど正解に勘づいてるでしょうし。

今、ひなたの動物病院に来てる患畜で具体的にイメージしてるみたいね。

答えはすぐに出たわ。

「治ったなんて言えるはずないじゃん！原因ワカないんだから！

マサシじーちゃんにどー説明すんのさッ？めっちゃ怒るよあのヒト！」

「それだよ平光。わけがわからないうちに突然の回復だからよ。

困惑しまくってるのが実際のところみたいでな……

だが俺たちは知ってるよな。一般人には見えないし聞こえない力を」

「プリ……ど、どー考えてもスタンドかあ」

みんな共通の納得が、これで出来たわね。

ひなたも、体験した具体例が入ってくると筋道が立つみたい。

想像だけの頭で考えると思考がアチコチ飛ぶのかしら？

あとは…やっぱり、興味かしらねえ。

少し微笑んでから、のどかがまじめにかかるわ。

「やることは決まったね。むしろ好都合かもしれないよ」

「ええ。どのみちスタンド使いなら、DISCを回収しなきゃいけないわ」  
「それをやるのは、彼女に道案内をさせた後だろうよ。」

スタンドを取り上げると言ったとたん、敵に回られてもおかしくねえ」  
用済みになってから本性を現す…

そう来たか、って言いいたところだけど。

のどかも最初からそう考えていたみたいね。

「……うん。」

だますみたいになっちゃうけど…

今、中で働いてる人が味方につくんだったら、

ラテの嫌な予感もずっと探しやすくなる」

スウ… ハア

小さく深呼吸してから、のどかは方針を決めた。

「事情を言うのに、ビョーゲンズのことには教えなきゃダメ。」

そこで向こうの事情も聞きながら、ちよつとずつ教えていこう。

スタンドを持っていたら狙われる、って。

何より、今までみたいにホワイトスネイクがDISCを入れたんだったら、いつ、ひどいことをさせられるかもわからないんだよ？

ニヤトラン。看護師さんがいつ働いてるか、押さえて？

みんなが集まれて、あつちの負担にもならない時間：考えよう」

今回は、ビョーゲンズにされてないスタンド使いかしら。

聞いた範囲では、傷や病気をなおす能力：敵対はしたくないものね。

## 枯れることなきブラッド・フラワー—その3

あの後、さらに話し合っただけだね。

看護師さんの帰宅時間とかを押さえるんじやあなくって…

チリ・ペッパーで直接、みんなの前に連れてくることにしたの。

直接会って話を聞いたとして、トボけられてのらりくらりかわされたら

時間を無駄にするだけになる、って鳴滝くんが言い出したんだよね。

だから『誘拐』しよう。そう鳴滝くんは言ったの。

そんな物言いするから、ひなたちゃんビックリしちゃったでしょ？

『要は、逃げ場をなくして話を聞かせようってことね』

咳払いをしてから、言い方を直したちゆちゃんに鳴滝くんはうなずいたけど、

相談が終わった後でチョット怒られてたね。

胸を張って必要だって言えるなら、わざわざ悪く言う必要ない。って。

現にわたしたちは納得してるもん。

今の状態はすでに危険で、いっおかしなことになるのかわからない。

強引にでも安全を確保するべきだって、わかるよ？

夜中を待たずにニャトランはシフト表を押しえてくれた。

それによると、今晚も『出』になってたから決めた。決行は今日！

そして今は深夜二時。みんな集まつてる。

どこについて？無人駅だよ！近所に家すらもないトコ！

秘境駅っていうらしいけど：ちなみにこの場所探したのわたしね。

鳴滝くんだけにやらせすぎてるもん、こーいうコト。

学校のジャージ来てる鳴滝くん以外はみんなプリキュアに変身してる。

もちろん、ここに出てくる前に監視カメラは故障させてる：ゴメンナサイ。

「いるんだな、ニャトラン」

「いるぜ、目の前だ！」

「作戦、開始イイー！ツ！」

ノリノリで号令を出すスパークルに、

ヒーリングステッキから歯を食いしばらせたみたいなお顔を見せてるニャトラン。

次の瞬間には、看護服姿の女の人が駅のベンチに横たえられてた。

手はず通りって言うのかな？

悲鳴とか上げられたら大変なことになりかねないし、

連れてきた先のこの場所で逃げ回られたら、こつちもこつちで大変だからね。

チリ・ペツパーで首の後ろに当て身（花京院さんのマネ）を入れて気絶させてからここに連れてきて、意識がない間にDEATH13で事情を説明する。

この人のスタンドがどんなものであろうと、これなら無力化できるの。

自動追跡型だったらマズいけど、そうじゃあないことは確認済みだもん。

「…ヨシー・ウマくいっただぜ……」

でもよおー、ヤダよなあー。何もしてねーヤツ殴るとか。

「こんなん慣れたくねエーよ」

「これつきりにしたいものよね…グレース、お願い」

「うん」

持ってきた懐中電灯をつけて、女の人の顔を照らす。

どういう人なのか、見た目くらいは確認しなきゃと思つたから。

でも、ここでまた驚くことになっちゃった。

わたしが、すでにこの人を知っていた。

ショートでちよつと巻き毛気味のクセツ毛。間違いなかった。

「佐久間さん……」

「エツ、知ってるヒト？もしかして」

「お世話になつた看護師さんだよ。」

一時期、すごく迷惑かけてた……」

シフト表の名前を事前に聞いてれば予想できたのかも。

蜂須賀先生以外がいるのは全然当てにしてなかったのもあって、最初から考えてなかったんだよね。

「じゃあ、話しやすいじゃん！ラッキーだよね？」

「うん、見ず知らずよりは」

「どういう人なの？佐久間さんって」

「聞き上手な人、かな？」

何がイヤだとか、うまくいかないこととか、

いつも聞いてもらってるばかりだったなあ……」

快方に向かいだしてからしばらく経った頃。

自由になってくる体に慣れ始めると、逆に不安が襲ってきたの。

蜂須賀先生の顔を見ていれば、お母さんとお父さんの顔を見ていればわかった。体調が回復してる原因がわからない。

お医者さんのわからないところでもわたしが治っていつてるんだって。

なら逆に、いつ元通りになっていくかもわからない。

でも、そんなこと言っちゃって困らせるだけだよ。



だから言わなかった。わたしは何も言わずにこらえてた。

言わなかったけど、その代わり：スゴく、イヤな子になつてた。

ちよつとしたことですぐに泣いたり、怒つたりしてた。

そして、厄介なことだけ：その頃のわたしは、そんな自分を自覚できなかったの。しばらくして、蜂須賀先生がそれに気づいてくれた。

お父さんもお母さんもいる前で、わたしは先生に謝らせちゃつたんだ。

不安にさせてごめんよ、のどかちゃんの優しさに甘えてごめんよ、って。

優しいなんてとんでもなかったよ。わたしは困らせてるだけだったのに。

先生はもつと言ってくれた。不安や辛さは隠さないで言つてほしいって。

のどかちゃんと一緒にそれと戦うのが、お医者さんの役目なんだって。

そこで大泣きしたのをきつかけに、わたしの情緒不安定は収まっていったけど：

その間、一番迷惑をかけた看護師さんが、この人だ。

「…って、どうしたのスパークル？」

なんかわたし、ヘンなコト言つた？」

「シー、なんか今ののどかちゃんからは想像つかなくて」

「人は成長するってことでしょう？」

それを助けてくれた人なら、なおのこと放っておけないわね。

始めましょうグレース。いつ目を覚ますかわからないわ  
「そう、だよね」

振り返れば、見守られて変わってきたわたしがそこにいて。

それはきつと、これからも変わらないんだと思う。

ううん、もしかしたら根本は何も変わってないのかも、わたし。

鳴滝くんが身構えたまま動いてない。わたしの今やるべきことをしよう。

「じゃあ、始めるね?…DEATH13」

夢の中ならわたしは無敵。怖いものは何もないよ。

それでも、人の心は思うようにできない。

出来たとしても、そんなおぞましいことしたくない。

そんなの、ホワイトスネイクがひなたちゃんにやったことと何が違うの？

力に何の意味もないのなら、頼れるのはわたし自身の説得力だけだね。

『夢』の中に入った。佐久間さんを連れてくる。

場所はヒーリングガーデンにした。ヘンな威圧感与えたくないし。

「……うつ……え?どこ?」

「お久しぶりです。佐久間さん」

バツと体を起こしてキョロキョロしだした佐久間さんの前に出る。

当然、わたし花寺のどかの姿だよ！

DEATH13なんかの姿で出たら、ひっくり返って気絶しちゃうかも！  
キュアグレースの姿で出ても、ゼンゼン知らないヒトで混乱するだけだし。

「えッ…あ、あなた。まさか花寺さんッ!?  
どうしてこんなところに？」

あ、そ、それより！ここはどこなの？

「仕事中よ私？戻らないと…」

「そんなに時間はとらせませんです。」

少し、お話を聞いてくれませんか？」

こーやってワタワタしだすのも予想してよかったかも。

いつもは落ち着いてる人なんだけどね。

ビックリすると取り乱しちゃうの。

いきなり怒ったり泣いたりしてたあの頃のわたしがどれだけ迷惑をかけたか、

この反応だけで思い出しちゃう。

「そうはいかないんだけど？」

病院に戻るの？時間どれくらいで？

私を待つてる人たちがいるの、わかって！」

…だけど、この必死さ。以前にはなかった態度だよ。

ううん、そりゃあ必死さはあったけど。仕事にいつも全力だったけど。方向性が違うのを感じる。

ちよつと、突っ込んでみよう。敵対的にはならないように。

「ウサギさんの治療を、みんな待ってるの？」

「ッ!？」

なんであなたがそれを？ 一体なんなのッ!？

と、いうより…見えるの？ 私のザ・キュアーが…うッ?」

佐久間さんの目が見開かれたままこわばった。

『夢』の中でスタンドは出せない。スタンドを出したまま眠らない限り。

わたしに向かつてスタンドを出そうとして、だけど出来なかったんだね。

だからこそ、面会にここを選んだんだけど。

「ザ・キュアー! ……ええ？」

…出ない? ……どうなって? う…う!」

ここまで取り乱した佐久間さんを見たことがない。

じりじり後じさりしながら、左手、右手とこめかみに当てて首を振ってる。

このまま放っておいたら吐いてしまうんじゃないかってくらい、息が荒い。

これじゃあ話にならない…何より、見てられない。

ゆつくりと歩み寄ったわたしは、そっとその腕を手にとった。

「佐久間さん、落ち着いて？」

「落ち着けるわけッ…」

「『夢』から覚めれば元通りですから。」

佐久間さんが治療の力を使えるように、わたしは『夢』を操れるんです。

少し、わたしの話を聞いてほしくて、佐久間さんを『夢』に呼んだんです」

殺されそうな顔をするまでのことなのかな？

一瞬、敵意混じりの目まで向けてきた佐久間さんだったけど、

精いっぱい気持ちを抑えたんだと思う。

深呼吸みたいに一回、二回息をつくつと、居住まいを正してわたしに向き直った。

「……『夢』。『夢』ね…」

ここに閉じ込められるとか、そんなつもりはないのよね？」

「ありません。」

というより、今寝ている佐久間さんの目が覚めれば、もう『夢』の外ですよ」

「…。信じるわ。花寺さんだもんね。」

あなたはわけもなくひどいことをする子じゃあないもの。

聞くわよ。話があるなら、話してくれない？」  
落ち着いてくれた。かなりツツケンドンだけど。

我慢の限界みたいなどころを抑えて、それでも聞こうとしてくれているんだよね。  
そこを踏まえて話をしないと…

この様子だと、スタンドの回収だなんて話は間違っても出来ない。

たぶんだけど、スタンドを使つて誰かを治療することに、ものすごく必死になつてる。  
そのあたりを把握しないままに手を出せば、完全に敵対しちゃう。

病院の中のことがなければ、最悪、一方的に取り上げてオシマイ…も最後の手段だけ  
ど。

…ううん。絶対にダメ。その痛みを、今のわたしが測り知ることはできない。

わたしは『お手当て』したいの。傷つけて、後は知らないなんて、嫌。

慎重に話していった。スタンドという概念のこと、そのルールのこと。

それを狙つて使い手を悪の怪人に変化させようとしてくるビョーゲンズのこと。

DISCのことは話さなかった。自己嫌悪だけど、どう転ぶかわからないうちに伝えるのは無理。

でも、それこそが。その煮え切らない態度が、補強しちやったのかもしれない。

佐久間さんの勘違いを。

「そう……ありがとう。そういう法則がある力なのね。

私だけじゃあ知りようがなかったわ。

知ってさえいれば身を守る……社会の決まり事と同じね」

「はい」

「そして、この力が突然目覚めた意味。

ずっと考えてきたけれど……

必要で、必要としてくれる人がいて。

その中で目覚めた力なら……やっぱり、これは使命ということ。

あなたがこうして私を助けにきてくれたように、ね」

『そうです』とも『違います』とも言えない。

『そうです』は勘違いを推し進めちゃうし、

『違います』はDISCの存在に片足を突っ込んでんじやう。

確か、前に鳴滝くんを死なせようとしたっていう松永先生も、

いきなり身に着けた能力を使命だって受け取ってたよね？

そんなものなのかな？ 周りに誰もいないと。

『命令』DISCの可能性も考えるべきかも……

「不安そうな顔しないの。」

病院の中にビョーゲンズとかいうヤツの気配があるのよね？  
手伝うわ：探してあげる。

私だって、病院の中にそんなヤツがいるのは見過ごせないのよ？」  
「お願いします。

さつきも言った通り、ラテが：

ラテっていう名前の犬なら彼らを探知できるので。

詳しくは、後から手紙を届けます。仲間のスタンドで」

チリ・ペツパーの能力も正確には教えていない。

ましてや名前を教えるなんて、もっての他。

ビョーゲンズに知れるのも危ないけど、

今も得体が知れないままのホワイトスネイクに知られるのが一番イヤ！

どこまで探られてるのかな、わたしたち。

こつちからではわかりようもないんだけど。

チリ・ペツパーがどんなに強いスタンドでも、

性質を知られて対策しつくされたら、どうしようもない。

スタープラチナでさえ、それでやられちゃってるんだよ？

大切なのは、ビョーゲンズを倒して、わたしたちも佐久間さんも助かること。



そのためには、用心深くいかなくっちゃ。

「じゃあ、解放します。」

必要があつたら、またこうやって呼びますから。

その時はごめんなさい」

「気にしないで。」

あなただつて必要だからやっているでしょう？

私も協力は惜しまない：むしろ、うれしいわ」

佐久間さんの無邪気な顔が、つらい。

わたしより、ずっと大人のはずなのに：どうして？

そんな気分気づかないみたいに、わたしにそつと顔を寄せてきた。

昔、わたしを安心させてくれようとしてたみたいに。

「のどかちゃん。私ね…」

あなたのお世話をしながら、あなたが苦しんでるのをずっと見ていながら。

ただの看護師で、何もできない自分をただ柵に上げて。

蜂須賀先生を恨めしく思うだけだったわ：

私はお医者さんに、なれすらしなかったのにね」

「……。あきらめてないんですよね？」

お医者さんになるって：そう、言ってみましたよね」

「そんなことも、言っていたわね……」

でもね、思うだけなのはもう終わり。私は力を授かったわ。

蜂須賀先生にも出来ないことが、今の私にはできるのよ。

だからまず、ここから始める。

誰も私を疑わないようになるまで、みんなを癒し続けたいの」

「何を、するつもりなの？」

それで佐久間さんは、どうなりたいんですか？」

「お医者さんになるのよ。みんなを助けられるお医者さんにね」

「……………」

この人は、スタンドを使って仕事をするつもりらしい。

ホントにお医者さんになるつもりらしいね。

困った人や、大変な目にあった人のお手当てをするっていうのなら、

わたしたちと同じで：仗助さんとも同じ。

スタンドで仕事をするっていうのなら、トニオさんがそう。

辻彩さんだってそうだったよね。

だから、それ自体はそんなにおかしいっていうほどのこともない。

うまく隠し通して社会に溶け込んでいけさえすればいいんだもん。

じゃあ、この佐久間さんはどうなのかな？

怪我や病気を治すスタンド、ザ・キュアーでお医者さんをやっていけるの？

考えたって、すぐには理屈のある答えは出そうにないけれど。

今、わたしの直感だと！

このひとは無理だ。いずれ破綻する！

## 枯れることなきブラッド・フラワー——その4

あの後、佐久間さんとやらを元の場所に返してから

俺たちもすぐに自室に直で帰宅し、そのまま寝た。

何かのきつかけで不在がバレると死ぬほどメンドくさいことになるからな…

今は当然『夢』の中にいる。すぐにでも会議が必要だった。

「……っというお話をしてただけだ。」

鳴滝くん、どうだった？」

花寺が本人と話している間、俺だって何もしなかったわけじゃあない。

フー・ファイターズを佐久間さんの体内で繁殖、脳まで到達させ。

肉体の記憶を読み取って、スタンド能力への態度を知ろうとした。

…言っておく！とつくにみんなと相談した後で、だ！

時間があるなら、あるいは距離が近いのなら、

こんな究極に近いプライバシー侵害なんかせず、

もっと丁寧な方法をとるべきなんだろうよ。

だが今回は無理だ。今回ばかりは。

チンタラ時間をかけてる間にホワイトスネイクに何かされたら。

あるいはすでに何かされてて、『爆弾』の炸裂が秒読みだとしたら。

そこんとこすぐさま対応するには、俺たちと彼女との距離は遠すぎる。

花寺がいるから、精神的な距離はともかく…物理的にはどうにもならん。

チリ・ペツパーがあると云つてもよ。四六時中見ると？

これ以上の労働を押し付けたらニヤトランが干物になる。マジで。

となると、彼女に起こるだろう異変を俺たち側から察知することは限りなく不可能だ。

ここまでの前提に立つと、ひとつの間違いすらも致命傷になりかねないし、

なら俺たちが主導権を取れている間にすべてケリをつけなければならぬ。

もはや手段は選べない、つてわけだ。

『脳みそをほじくり返されて、あることないことみんな暴かれる。

おぞましいいわね。最悪よ!……でも、やらなければ、危ないのは彼女よ』

『そうするしかないなら、やるラビ。』

時間をかけたら取り返しがつかなくなるっていうのなら…

それだつて大切なお手当てラビ』

『パパもさ。お兄もさ。』

あたしが聞いても、患者のワンちゃんとかネコちゃんのこと、教えてくれないこと、あるよ？ 守秘義務、とかなんとかいうヤツ……みんなに知られたくないケガとか病気だつてあるんだつて……同じじゃん？ あたしたちもさ、きつと……同じよーにやろーよ。ウン、秘密！ あたしたちプリキュアの秘密！』

結果、全員賛成。

というより、俺が言わなければ、おそろく沢泉が言っていただろう。

あと、意外にもつて言うのアレだが……ラビリンが積極的に賛成してくれた。

今ひとつ疎遠だし、過去の経緯を思うに厳しい態度を取られるのも当然なんだが。

今回、その対応を曲げてくれたみたいだ……謝ったからかな？ 花寺爆殺未遂。

まあ、それはいい。考える時間がいくらかでもあることは後回しだ。

紅茶を飲みつつの回想を打ち切つて、花寺の方を向く。

「結論から言うんだ。

彼女が自分から能力を手放そうとする可能性は、今んとこゼロだ」

「それは、のどかに話してくれた事情からかしら？」

花寺より先に反応したのは、沢泉だった。

答えるのは一緒だな。誰に聞かれようが。

「言いたくないが、そいつは一面ってことになる」

「…。一面？二面とか三面あんの？」

平光：「チョット考え込んだじやあねーか。」

アレか。ゲーム機で遊ぶゲームの『面』のこと言ってるくさい。

「…。二面性、つつー言葉あんだろ。それだよ」

「…ニメンセ…あ、わかった…気がする。ゴメン、続けて」

気が抜けたコーラみてーなコトぬかすなよな。

まーわかったんらしいや。

実は危なかった。ゲーム機にほぼまったく興味なく生きてきたから俺。

オホン、と咳払いしたが、ちつとばかしワザとらしかったか。続ける。

「まず、患者を助けたいと思ってるのに嘘はねえ。」

問題は、そいつが手段か目的かっていう事だがよ」

「手段？…お医者さんになるための手段、っていうこと？」

聞き捨てならないとばかりに花寺の目つきが鋭くなった。

そりゃあ、な。世話になった知り合いにケチをつけられりや、花寺なら怒る。

「彼女はそこまで腐っちゃあいないよ、のどか。」

だが純粹にそれだけの気持ちっていうわけでもない…

個人的な事情がどうしても絡んでる」

「F・F。いいよ、俺が話す」

「そお？…ま、うまくね」

俺は、肉体の記憶から引きずり出した『芋づる』を順にたどって話していく。

なぜ、彼女はスタンドで怪我や病気の人々を治しているのか。

そこに、痛みだとか苦しみに寄り添う意識がないわけじゃあない。

いや、むしろ相当大きいと言わなきゃいけない。それはそのまま立派な使命感となっている。

「その使命感の根っこになってるのはお前だよ、花寺」

「わたし？」

彼女は最初っからそうだったわけではなく、

看護師になった当初は、目の前の業務を果たすことと

自分のやる気のなさ…？を周囲の目から隠しごまかすことしか頭になかったようだ。

記憶を見るに、そんな自分を認識してる自分自身をごまかそうとしていたとも取れる。

。

蜂須賀先生？から何度か怒られているな。『他人事の対応をするな』とか。

「それが変わったのが、花寺の面倒を見始めてしばらく経った頃のこと、な」

…間接的に花寺の記憶も覗いちゃってんだよなコレ。



その辺は後で謝って怒ってもらおうとして。

当時の、唐突にキレたり泣き散らかしたりする花寺の担当にされたのが彼女だ。身体的には快方に向かいつつあって危険度が低く、優先順位は低いのだがそれでいて情緒不安定のため、長時間誰かが拘束されざるをえない：

ために、戦力として大して当てにされていけない佐久間さんが当てられた。

無害で、ほとんど怒らないことだけは取柄だったから。

少なくとも当時の彼女はそう受け取っている。

当初はそんな具合で、言われたことだけやつてるスタンスで過ごしていたが、機嫌を損ねた花寺のワガママは対応不可能かつ無茶苦茶で、

ひたすらなだめすかす以外の方法がなかった。

具体的内容をいちいちみんなに説明する気はない。花寺の恥でしかないしな。

やっぱり後でなんか罰をお願いしよう。着替え覗くのと大して変わんねえぞこんなモン。

「アハハ…」

そのワガママって、学校行きたいー、とか、遊園地行きたいー、とか…だよな？

今すぐに連れてつてよ、ていうの…

ナースコール押して、テレビ指さして、海行きたいとか山行きたいとか」

「花寺、お前え……」

「そういう無理ばつかり言つて、聞いてもらえないと、

わたしのことなんかどうでもいいんだら、つて泣いちゃったりして。

ホント、迷惑ばつかりかけたなあー」

てめーで言うのかヨ花寺。

「まあ……わかるわね。

のどかの気持ちもわかるけど、佐久間さんの気持ちもね。

入院患者を観光地に連れていくとか、出来るわけないわ」

「ワガママのどかつちイ、カワイくない？」

あたし、チョット見てみたいかも！」

ま、いいや。本題じゃあねえ。続ける。

さしもの佐久間さんも、度重なるワガママに消耗して

やがてイライラを抑えきれなくなってきた。

だが、本質的な人の良さがそこにあるんだろうな。

彼女が怒りの矛先を向けたのは、花寺じゃあなく蜂須賀先生だった。

花寺を担当するに当たり、治療の経緯を教えてくれたのは彼だ。

そして治療していたのも彼。

つまり、蜂須賀先生の無能にムカつきの原因を求めたわけだ。

だがその怒りも落ち着いてくると、結局のところそれがそのまま自分に来た。

「ここで花寺の聞いた話につながる」

「わたしの、聞いたお話？」

「……お医者さんになるってこと？」

「ピンと来てよ、のどか。」

それ以前に、医者になるのが彼女の夢だったろ」

「…そういうことね」

「どゆコト？」

「正解は…な。」

そもそも医者になれなかった自分の無能をこそ思い出すことになった…だ！」

ここで話がややこしくなる。

彼女は医者になるのが夢とは言ったが、本人に積極的な意思はなかった。

実のところ、小さい頃から『お医者さんになる』と言い続けていたのは彼女の母で、

期待に応えるためにそれを夢に据え置いたにすぎない。

これが私の夢なんだ、と思って勉強してきたものの、医大の受験に失敗。

長きにわたる浪人生活は父親が成人病で体を壊し、会社を早期退職したことで終わ

り。

夢だったらいいものについて指がかかることのないまま、彼女は就職することになる。

学んできたことを少しでも活かせるだろう、看護師にだ。

「え……エツ？」

夢、なんだよね？つか、それママの夢じゃん！」

「わからないわ……どういうことなの？」

「さあね。それが『夢』じゃなきゃあいけないって思ったのかもね。

親も勉強させてたし、本人もマジメにやってる……少なくとも本人はそのつもり」

F・Fの解説に花寺がつばを呑んだ。

「で……蜂須賀先生のやってきた処置とかを改めて知っていくにつけ！

自分の人生はドブに捨ててきたも同じだと、そう思った……らしい」

真偽はどうあれ、自分の努力は見せかけの偽物だったと理解した彼女は打ちひしがれた。

虚脱状態になって一日、無断欠勤をかましたものの……怒られたことで心境を整理でき

た。蜂須賀先生が全力を尽くした患者である花寺にガムシヤラに付き合ってみたのなら、

何か気づきを得られるんじゃないか？ 自分は変わるんじゃないか？  
そうやって、今の花寺が知っている彼女になったのだ。

「へー、感動じゃん！」

目がキラッキラしてる平光。

おい、今の話が前座…というか前提なの、忘れてんじゃないだろうな？  
現在進行形だぞコラ。

「そこまでだったら素敵なお話よね。」

でも…それが、彼女がスタンドを手放せない理由につながっているのかしら？  
ありがたい。沢泉のおかげで場が締まる。

花寺のお世話を続けて、その情緒が安定したに至って、  
彼女は心底ウレシいと思ったようだ。

花寺と別れた後も、これと同じ気持ちを感じたい、と  
仕事で出会う患者に向き合っていたのだが…

頑張れば頑張るほど、どうにもならない思いに囚われることになった。  
ゆるやかに死んでいく患者を、あるいは唐突に死んだ患者を抱える都度、  
自分が医者ではないことの無力が魂に沁みていくようだった。

改めて医者を目指すことを決意したが、それはいついつになるのか？

そんな時だ。

ザ・キュアーの存在に気が付いたのは。

戸惑ったのは最初のうちだけだ。

彼女が狂喜乱舞するのに、時間はかからなかった。

「……」で一問、クイズだけだよ。

そんな彼女に、スタンド周りの事情を説明したとして！

素直に俺たちに渡してくれると思うか？」

「……思えないわね」

「だが回収する。」

これがビョーゲンズの手に移った日には最悪だぞ」

助からないと言われた人間ですら完全に治癒させるスタンドだ。

はつきり言う。手放せるはずがない。

彼女が抱いた無力を真つ向から無力化できる能力だぞ？

そしてある意味、もつと厄介なのが！

この能力そのものが、医者つて職業の端的な機能であることだ。

怪我や病気を治すヒト、イコール医者だつて定義するんならな！

この能力ある限り、彼女は医者だと言えなくもないかもしれん。

東方仗助を指さして医者だって言う並みの暴論だけだよ。

「なんにせよ、長続きは…しないでしょうね。」

知識も、技量も伴わない、スタンドありきのお医者さんなんて。

不自然な治り方をどうやってごまかすのか…私にはわからないわ」

「…わたしにも、わかんない」

目を伏せていた花寺が、声と共に顔を上げた。

「ありがとう、みんな。おかげでちゃんと、心が決まった気がする…」

ザ・キュアーは回収するよ。あの人が、不幸になるから」

悩んだらうよ。

ある意味、恩人の手足をへし折るんだから。

花寺はそれを改めて決断してくれた。

「そうするにしても、方法が問題ね。」

毎晩、いろんな人の治療をしてる以上、

こつそり取り上げたら大惨事になりかねないもの」

沢泉の懸念は俺と同じものだろう。

たとえば、気管を破壊されている人間を治療するために

治した後で邪魔になるからと呼吸器を停止させ…

そこで、ザ・キュアーが使えないことに気が付いたら、どうなる？  
晴れて彼女は殺人犯だ。再起不能！

つまり、使えなくなっただけは絶対に伝えなければならぬ。

「それもそうなんだけど、鳴滝くん。

もう一個だけ聞きたいよ」

「ああ。驚くべきことなんだろうな……」

『彼女に、命令DISCは刺さっていなかった』

同じなんだよ、俺と」

花寺の質問への答えに、全員の息が止まった。

命令DISCがないとなると、ホワイトスネイクの意図がわからない。

そしてそれは、そのまま今の俺の境遇と同じことなのだ。

だが今回に限っては、推理できうる材料がある。

「それとだ。

ザ・キュアーはウサギ型のスタンド。

患部をなめることで人間のダメージを治療する…

ここまでは、いいよな？」

F・F以外の全員がうなずいたのを確認して、続ける。



「そのウサギ型の像レジョンだけどな。

最初に出てきたときは、手の平サイズだったんだぜ」

「…えッ、何ソレ？手ノリ？ラビリン？

めっちゃカワイイ」

…無視だ、無視！

この先を続けければ、マジメになるしかないだろうしよ。

「だが今は、ハスキー犬くらいのサイズになっちまつてる。

このサイズの変わり方。どういう意味か…誰か、わかるか？」

「ン？ン々々、『成長』じゃん？

ハスキーの赤ちゃんとか、めっちゃカワイイよ！

デツカくなくてもカワイイけど！」

「……『成長』だとするぜ？」

成長するスタンドには、何があった？」

ムゲにはしない。

マジメに答えてるからな…コイツなりに。

「すぐ思いつくのは女帝エンプレスかしら。

あの場合は、宿主を殺すための成長だけど……あなたのその言い方。

成長した先がろくでもないものだって、そう言っているの?」  
「可能性だよ。エコーズみたいに能力が変わる場合だってある…

そうなった先が有害なものなら、結果的に悪事を働かされることになるぜ」  
「露伴さんがヒドイ目にあつたっていう、チープ・トリックみたいなの?」  
うなずき返す。沢泉にも、花寺にもだ。

「イイ例を挙げてくれたな。」

チープ・トリックが病院みたいな人だらけの施設で解き放たれたら、  
おそらく数百人単位がわけもわからず死ぬことになるんだからな。

待合室なんか大惨事になるぜ。」

「でもさ、そんなのワカンナイじゃん!」

「そんなコト言ったら何もできないよ?」

「だがよ、だとしたらだ!」

ホワイトスネイクが命令DISCを入れていかなかったことに  
一応の説明がついちまうんだよ」

「十分に…ありえる話ね」

沢泉がそうつぶやいたことで、全会一致でやることが決まった。

病院内でラテの嫌な予感の元を確認次第、

佐久間さんからはスタンドを回収しなければならぬ。

俺たちがする会話では彼女の地雷を避けつつも、

スタンド回収後、それが二度と使えないことだけはしっかりと認識させる必要がある。

これはおそるべき難題で、この『夢』では結論が出ないままだった。

まずは、病院内探索の打ち合わせをするべく、

すでにメモを送り付けて伝えた時刻に、佐久間さんの自宅を訪ねなければならない。

指定の時刻は明日23時。花寺が行くことはなんとか可能だ。

だがそこで、事態をさらにややこしくしかねない要素に乱入されるとはよ。

間が悪かったとしか言いようがない。

## 枯れることなきブラッド・フラワー——その5

お父さんもお母さんも、まだ起きてる心配がして不安だったけど！

約束通りに来たよ、佐久間さんのアパート！

チリ・ペツパーで少し離れた場所に送ってもらってから訪ねる都合で、

今回はちゃんとヨソ行きのカッコに着替えてるよ。イツモの上着にスカートだケド

：

わたしがわたしとして佐久間さんの前に姿を現した以上、

逆にプリキュアの姿をなるべく秘密にしておきたくなつたからね。

最悪。ホントに最悪だけど、スタンドDISCをプリキュアの腕力で

無理やり回収するしかなくなる可能性だつてあるから。

もちろん、避ける気だよ？そのためわたしは来たの！

「んじゃ、しつかり頼むぜ！……オレも電線伝つてコッソリ守るからよ」

「うん。ニヤトランもお願い」

「ラビリンも一緒ラビ。いざって時は変身するラビ！」

「アン！」

ラビリンもいて、ラテもいるけど。

ここから先は怖いよ。すぐ近くとはいえ！

深夜の時間帯に中学生がうろついてるんだもん。

おまわりさんが通りかかったら補導されちゃう。

しかもよその県の中学生在が東京に。事件の二オイしちやつてるよ。

そのためのチリ・ペツパーではあるんだけどね……

幸い、誰もとすれ違わずに済んだし、ここから先もそれは同じ。

でも、ゼータク言っちゃうんだけど。

佐久間さんが困ってなかったら、なおのことよかったなあ。

佐久間さんの部屋は一階の角なんだけど、近くに寄るだけで声が聞こえた。

わたしよりも前に誰かいるの。物陰に寄って、思わず聞き耳。

「待って。待ってよママ。」

あとちよつとでお医者さんになれる……つ、つかめるのよ、何か」

ママ？

お母さんが来てるってこと？

襲撃とかではなさそうかな……

でも、お母さんにスタンドDISCが入ってないとも限らないよね。

このまま聞く。関係なければ謝るだけだよ。

「その言葉も何度目よ。私はちゃんと謝ったでしょう？」

あなたに無理を言いつけた私が悪かったって。

もう、しがみつき続ける必要はないのよ？」

「前にも言ったけど！」

今の私は、なおさら離れたくないの！

やるべきことに出会えたの。やっと始まったのよ」

「わかるわ。あなたはいいい子だものね。」

まだ私たちの期待に答えようとしてくれている……

「やめろと言われて、戸惑うこともあるわよね」

お母さんらしい人の声はやさしいなあ。

やさしい……んだけど。なんかヘンな感じがする。

お話がズレているっていうか、成立してないっていうか。

ううん、まずは聞こう。

すぐに何かされるってわけじゃあないんだもん。

「これでも後悔してるのよ？」

あなたに向かないことを押し付け続けたんだもの。

私たちもやつとわかったの。

だから、つらいだけの場所にいなくて帰っていらつしやい？

おばあちゃんも待っているわ」

「……そうは言っても。

私がお医者さんになった方が、うれしいでしょ？

あれだけ必死だったんだから。違うわけないよね？…ママ」

「いいえ。あなたが苦しんでいる方がよほどつらいわ。

私の間違いがあなたを縛っているのなら…私が、自由にしてあげたいのよ。

昔から言っているでしょう？あの言葉に嘘はないわ」

やさしいなあ。言葉は。

でもやっぱりへんだ。お話ちゃんと聞いてくれてるのかな？このお母さん。

そして佐久間さんは、あきらめたみたいにその後を続けた。

「…私の幸せは」

「そう。ママの幸せよ」

たぶん、ニツコリ笑ってるんだろうなあ、このお母さん。

ここからじゃあ顔も姿も見えないけど、声の感じでそう思う。

だましてるみたいないやな雰囲気はなくて…逆にそれが怖いよ。

「なんか、イヤな感じラビ。」

うまく言えないけど、微妙にムカつくラビ」

「うん…」

もうちよつと聞く。

どのみち、あの人が出ていかない限り、わたしも中に入れないもん。

「私たちの方は、いつでも用意ができているわ。」

今年のお盆はみんなで過ごして…

それからのことは、私たちと考えればいいじゃない。

そのための時間はいくらでもあるわ。そうでしょう？」

「…ママ」

このお母さんの言葉を、佐久間さんが途中でさえぎった。

今までみたいに穏やかじゃあない、ちよつと怖い声で。

「私ね。…私ね？」

「…その声。その雰囲気。」

やっぱり、よくない疲れを貯めてるわね。

このままじゃああなたのためにならないって、

あなた自身が一番よくわかってるはずね？



どうしたの、あやか？ママに言ってみて？

私たちはずっと変わらず、あなたの味方よ」

さらに言葉をかぶせられちゃった佐久間さんは、

怖い声の調子を続けられずに黙っっちゃって。

何秒くらいかな？わからないけど……

かなりたつぷり間を空けてから、結局、泣きそうな声で締め切った。

「……なんでも、ない」

「そう。まあ、ゆっくり整理をつけなさい。

そのためにも早く帰っていらっしやいね。

一番大切なのは、あなたの心身。

よく勉強してきたあなただったら、なおのことわかるはずよ？」

バチッ

近くの電線が意味不明に帯電して音を立てた。

それ以上はとくに何もなく、物陰に潜んだわたしたちに

気づくこともないまま、佐久間さんのお母さんは去っていった。

眼鏡をかけたスリムで上品なおばさんだったけど……

すぐにその場を飛び出したら危ないから、さらに五分くらい待って、

ようやくドア前のチャイムを押しに行く。

行ったんだけど：聞いてしまった。

ドアの内側ですすり泣きしてる声を。

今すぐ追うべきかって、正直思ったよ？あのおばさん。

でも、わたしの中に育った冷静な部分に止められた。

追いかけたところでなんにもならない。

なんとかなるようなら、こんなことになってない。そう思ったの。

まずは予定通り、お話をする事。それが重要。

このまま突っ立ってるわけにもいかないし：

おそるおそる、チャイムのボタンを押し込んだ。

いつ誰が押ししても変わらない音が、すすり泣きをとりあえず止めさせたみたい。

ほとんどすぐに出てくれた。

佐久間さんの方もわかってたよね。わたしが来る頃だって。

「いらっしやい。

どうやら、聞いたみたいね？」

「…（、）（めんなさい）」

「いいのよ。私だって、今日いきなり押しかけられるとは思わなかったのよ。

昔っから、ヒトの都合はおかまいなしなヒトなのよ」

笑ってるけど、涙の後がそのまんまだ。

「むしろちようどよかったのかも。

私の状況、わかってくれた？」

「病院を…やめさせられる。そんな風に聞こえました、けど」

「そう。時間がないわ。

遅くとも七月までに退職させるつもりでしょうね…

すでに色々根回ししてたって、驚かないわ」

確かに運がよかったよ。ある意味。

鳴滝くんがある程度記憶を読んでくれてはいたけど、

限られた時間だと詳しく読むにも限界があるし。

時間がない、っていう最重要な情報を見逃さずに済んだ。

お母さん周りをもっと詳しく追っていけばわかったかもしれないけど…

そんな言い草、後出しジャンケンだよ。

佐久間さんは、心強い笑顔を作っていた。

「大丈夫。あなたの邪魔にはならないわよ。

向こうに根回しがあるなら、私には実績がある。これからのね。

急患の何人かは、私の適切な初期治療で快方に向かうわ。  
運び込まれる間なら手を出せる」

「……………」

素人のわたしだっと思って思うんだけど。

ただの看護師さんに、お医者さんとしての『実績』って言えるみたいな手出し…  
させるわけないッ　フツーの病院なら！

やたら危うくて非現実的な雰囲気を感じたのは、時間がないせいだったんだ！  
振り返れば、最初からわかっていたことだったのかも。

いくら知らなかったからとはいえ、

スタンド使い最大の不用心をこの人はやっちゃってる。

治された人たちの経過を病院側が追って困惑してる以上、

遅かれ早かれ、そういう能力を持つてる誰かがいるって仮説は立つちやうよ？

能力を見せびらかして歩いてるも同然だよ、すでに！

仮にそうならなかったとしても、知られなかったらそもそも『実績』にならない。

どこかで宣伝しなきゃいけないけど…バラすの？スタンド能力を？

「実績で黙らせることができれば、道はできるわ。作ってみせる。」

それだけの道筋があるのなら、私の母にも邪魔はさせない。

だって役目なんだから。ザ・キュアーに選ばれた私の…よ」

…これだけは、はつきり言っておくよ？

佐久間さんは、絶対におバカさんなんかじゃあない。

わたしがきつかけで、誰かを助けたい気持ちを持つてくれたっていうのなら、それはとつてもウレシくて、光栄なんだよ？

一生懸命に向き合ってくれて。困りながら頑張ってくれて。

この人を悪く言われたら、わたしだって怒るんだよ？

気持ちは本物で、目指す意思だって本物なの。わたしがよく知ってる。

なんでも治すスタンド能力をいきなり手に入れたって言っても、

普段だったらもつとうまくやったはずなんだよ。

どうしようもない患者さんをこつそり治すくらいに留めながら、

しつかりとお医者さんへの階段を昇って行ったと思う。

でも、それだけの時間を取り上げる誰かが、たまたま近くに居ちやった。

きつと、本物だからこそあきらめられない。

あきらめられないからこそ。

「私はお医者さんよ。その道が目の前にあるから、引き下がるわけがないの」

まともな判断を、捨てたんだ。

…：花京院さんは、誰とも打ち解けられない学生時代を送ってた。スタンド能力なんていう変なモノをたったひとり持つちゃったせいで、相談なんか誰にもしようがなかったから。

佐久間さんは、それと同じ。お手当てできることも、黙ってるしかないの。そういう意味で、能力の存在がガンになっちゃってる。

そして、孤立無援の人間がどれだけ狂ったことをするかだなんて、鳴滝くんにさんざん思い知らされてるんだよ、わたしたち！

佐久間さんをひとりぼっちにしちゃあいけない。

でも、ザ・キュアアのD I S Cを取り上げるのは他ならないわたしたち。

取り上げたなら、わたしたちはどう考えても敵にしかならないし、何より、この必死なあがきを無理やり止めて、

出来ないようにしちやったら…：その後、この人はどうなるの？

「この子がラテちゃんね。」

この子を病院に入れれば、ビョーゲンズとかいうのの場所がわかるのね？」

「アウン…：…」

「まかせて。思うに…：遊歩道を歩くだけで事足りるわ。」

犬の散歩で十分言い訳できると思うわよ。

明日は土曜日で、昼は非番だからね。一緒にお散歩してくれない？」  
ラテの前にしやがみこむけど、無理に撫でたり触ったりしない佐久間さんは、頼りになるお姉さんをやってくれていたけど。  
安心はできなかつたみたい。ラテも、ラビリンも。

唐突だが、花寺のどかの視点を離れる。

語るべきは翌日の朝。追い詰められた佐久間あやかの受難にある。

結論から言おう。彼女はすでに目をつけられていた。

何者にか？…我々は知っている！

癒しの戦士プリキュアの宿敵たる、むしばむもの！ビョーゲンズの名を！

彼女が今日、花寺のどかと共に探そうとしている『敵』は、

実のところ意外なほどにすぐ近くをうろついていたのだ！

「同じ力の持ち主……」

いると思うだけで、こんなに心強いなんて、ね？」

そうとも知らず、佐久間あやかは鏡の前で舞い上がっている。

DISCというものの存在を知らされなかった彼女にとつて、

スタンド能力は、いわゆるヒーローが授かるパワーという認識だった。

彼女の視点からすれば、ある日突然、何の脈絡もなく備わったものだ。

異常な存在になってしまった自分を、そうやって鼓舞すること

当初は平静を保ったのかもしれないが……たまたま彼女の抱えていた事情と、

能力の方向性が合致してしまったことで、それは半ば事実となった。彼女の中で、

そして、そこへさらにやってきた、かつて自分の転機となった知り合い。

花寺のどかもまた特殊なパワーを持っていて、しかも助けを求めてきたのだ。

佐久間あやかは奮い立っている。おのれのヒーローたる宿命に。

そうやって燃えている間は、失う恐怖を忘れることができたから。

「のどかちゃんの力になれば、病院は安全になる。

そこからは私の役目で、みんなを治す。

実績があるんなら……お母さんだって、認めざるをえないわよ！

私は、正しいことをやるの。誰も止められないんだから」

独り言が増えてきたことに、彼女自身もとうに気づいてはいるが、

止める気はなかった。火に薪をくべ続けるようにだ。



身支度を整えて、彼女はドアを開ける。

のどかに出会い、ラテを受け取って散歩に連れ出すためにだ。

だが、その目的が果たされることはない。

ドアの向こうに現れたそいつが、そうはさせなかった。

「あ、出てきた……ちようどいいじゃん」

「だ……誰？」

少年だった。背丈は低い方だが……不自然ではない。

だが不自然きわまるのは、その肌の色だった。

毒々しい紫だか青だかの色合いは、まるでゾンビを彷彿とさせた。

その頭にはツノがあり、腰から下には尻尾が伸びている……サソリのような。

「お前の能力、使えそうなんだよね。」

見ての通り……ちよつとばかり痛くてさ」

言いながらドアから入ってくる少年の首は、なるほどギプスで覆われていた。

首筋を蹴飛ばされでもしたのか？

確かなのは、そんなことを考えている場合ではないということ！

「な、なんなのツ？」

出ていきなさい、帰んなさいツ！

ケーサツ呼ぶわよッ!!!」

「ま、そーゆーことで…」

少年の手からほとばしる、禍々しい何かを感じ取る。

本能的な危機を感じ取った彼女は逃げようとするが、この先は室内だ。

どこにも逃げ場がないまま、玄関口でつまづいて

尻もちをついた彼女の体内に小さな黒い塊が飛び込み……

「進化しろ。ナノビョーゲン」

怖気をふるう寒さに、意識が塗りつぶされていった。

果たして彼女は、探そうとしていた『敵』の刺客に成り下がる。

ビョーゲنزの幹部格、ダルイゼンの手によって。

## 枯れることなきブラッド・フラワー—その6

のどかっちがヤバイ顔してる。

『夢』で会ってスグにそー思ったよ！

あたしはもースデにニヤトランから聞いている。

ドンヨリしてるってゆうーかキレかかってるってゆうーか。

そんな顔してたからさ。聞くしかないじゃん。

だからってワケじゃないかもだけど、寝つきワルかったよ今日。

「のどかっち。ロクでもないこと、あったんでしょ？」

「うん」

知ってるワケもないちゆちーとタツキー、ペギタンとF・Fに

のどかっちはバツチリ説明してくれた。めっちゃ楽しくなさそーに。

まー、タツキーから聞いてた通りでさ。

佐久間さんの夢は、もともとはママから押し付けられてたやつで、

ガンバツてはみてたけどダメだった、と。

でも、のどかっちと出会えたからホントの夢にすることができて、

そつからまた気合入れて目指してみただけど、

それがどーにかなる前にママが仕事やめさせに来ちやった…んだつて。

ニヤトランが言うにはさ。

ヒトの話、最初つから最後まで聞き流してやがった。

テメーの言いたいコトだけ言つて、子供にはナンも言わせよーとしねー。

いつくらなんでもアンマリじゃあねえーか？

つてコトだけど…のどかっちも似たよーな意見みたい。

聞いてたちちゅちーが、首を横に振った。

「親の稼ぎで、ひたすら浪人生活が続けていた間なら。

仮に今もずっとそうだっていうなら、一方的にやめさせるのも

まだ正当化の余地があるわ」

「だが、そうじゃあない。佐久間あやかは一人暮らした。

勤めた金で家賃を払つて生活してた…実家に依存してねえ」

「…ええ。

なら、そんな指図を受けるいわれは、ない…はずよね？

自立した大人なのよ？」

ちゅちーに答えてたタツキーだけど、

そー聞かれると、めっちゃ決まりワルそーな顔になった。

ちよつとの間ダマツちやって、ちゆちーがケゲンな顔して

何か言いかけたトコで、やつとなんか言えた。

「それだけだよ。心当たり、なくはない」

「なに？」

「あーッ、と。言にくいことなら、いいのよ?」

「いや、いい。俺の二番目の兄き…名前でもいいや。景弼かげすけの話になるけどな」

フツ切ったみたいのスラスラしゃべるタツキー。ちよつとムリしてない?

なんでも、晩ゴハンの時に、コレができてない、アレができてないって責められるん

だつて。

タツキーのパパに……で、こー言われるんだつて。

いつまでもその席があると思うなよ。

「……………どゆこと?」

「私の解釈が正しければだけど。」

…いえ、正直。クチに出すのがはばかられるわね」

「はつきり言うぜ。お前なんか家族じゃあねえ。そう言つてんだよ。」

その程度のことでも出来ないようじゃあな……つてよ」

ゴト ビチア!

アイステイーのグラス、落つことしちった。

「ま、待つてよ。家族じゃあない、とか。

ン、ンじゃあさ。あたしとか、ドーなんの? あたしだったら」

「なんだそりゃ」

「あ、あたしつてさ。ダメじゃん?

お兄もお姉もリッパでカッコよく仕事やつてるけど!

半分も…: チョットのマネもできてないんだよ、あたし?」

気がドーテンする、つてゆうのかな?

正直、あたし自身何を言ってるかわかんなかった。

ただ、めっちゃ怖い。

「あたしが、そんな中にいたらさ。

ポイじゃん! ドー考えてもツ」

「…あー、わかった。何言ってるのか」

タツキーがコツチの手元に雑巾を投げてきた。

パツと受け取る。ついつい。タダの反射で。

「言つとく。お前のそいつは無意味な想像だぞ。

オカシイの、俺んちは！お前んち正常！わかった？

お前の父さん、そんなコト言う？言わねーだろ絶対」

「ゆるワケないじゃん」

「じゃーソレでオシマイだな。

そんな、世にも奇妙なウチの話として聞いとときやあいんだよ」

ウン、落ち着いたけどさ。おかげサマで。

でもなんかタツキー機嫌悪い。なんでそんなツツケndonなのさ？

またナンかやつちったの？あたし。

ちゆちーの目がギラツとした。

「ひなたを脅かしてんじやあないわよ。

飲みなさい、手元のお茶！」

「お、オウ」

グイイ〜グイ〜… キュツ

タツキーが一気飲みやつてる間に、

あたしもこぼしたお茶を拭いとく。もらった雑巾で。

吹き終わった雑巾は、のどかつちが下げてくれた。

ウエイトレス？看板娘？…カフエ・ドウ・マゴの？

めっちゃカワイイ。通っちゃうよあたし。

「落ち着いたわね？じゃあ…」

要するに。家族の地位を人質にとつて操つてる、つて言いたいのかしら」  
「それで間違いない。」

俺が走れるようになって認められたのも、そいつの裏返しなんだからな」

「走れなかつたら家族じゃあなかつたの？頭痛いわ…」

「魁。今いるここは違うペエ」

「……ン。わかつてる」

そつか。そだよね。

サイテーだもんね、タツキーの家族。

あたしは。パパもお兄もお姉も大好きなんだから、

そんなあたしにいらぬコト言われてムカついたのかなあー。

…反省。イマイチワカンないケド。

席に戻つてきたのどかつちが、横から入つてきた。

「鳴滝さんの言いたいこと、わかつた気がする。」

佐久間さんもお母さんに、その…操られてたの？」

「状況からそうじゃあないか、つて思うだけな。」



父さんに責められた景弼も、言う通りにするしかできなかつたようだし」  
「だとしたら、めっちゃやなママじゃん。」

反抗期でグレたりしないの？」

あたしも横からツッコむ。

マンガとかドラマの定番じゃん。よくあんじゃん。

いつとくけどかなりマジメだよ、あたし！

自分で一人暮らしてきてたんならリッパにオトナだし！

ウルセエ！ってゆーの、あると思うよ？

あたしだってあるもん。ゲームのイトコで呼ばれまくって、

ウルサーイってなっっちゃうコト！その後だいたいデコピンもらうケドき、パパに！

「ひなたよおー」

「ニヤトラン？」

「やなコト言うけどよ。」

グれるなんて出来ねー、ってよ。

わかってっつから、そーゆーコトやってくんじゃあねえーの？

いや、どーかと思うんだケドよ。悪意あるって決めツケんのもよ」

……だよね。

タツキーのお兄がそれじゃん。話聞く限り。

ちゅちーが切ない顔でため息をついた。

「家族の『つながり』を人質に取る。

想像もつかないわね。途方もない話だわ、それが本当なら」

「俺にはそう見える。ってただけだぞ？」

とはいえ、佐久間あやかは実際に退職を押し付けられつつあって…

それを恐れて破滅的なマネに手を出しているのも確かだろうよ」

「…あのね？」

それなら、それで…：…まだ、救いがあるの、かな、って」

結論っぽくタツキーが言ったけど、

そこにオズオズ手を挙げるみたいに出てくるのどかつち。

「救い？ナンデ？どゆこと？」

「悪意しかない家族だったら…：…最悪、逃げていいよ。

それで説得しても、むしろ正しいと思う。

鳴滝くんだって今、それみたいなものだよね？」

「…まあ。スネをカジッてる現実は変わんねーけど」

鼻をスンって鳴らしたタツキーに、ちゅちーがまた眉をひそめたけど

今回は何も言わないことにしてみたみたい。

あたしがケツコー言われてる、話の腰を折る、つてヤツになるから？  
「わたし、見てて思ったの。」

あのお母さんは、確かに佐久間さんを愛してるよ？

本人はすつごく真面目なんだと思う……だから、逆に厄介」

「のどかつちさあー。それ……もつとワケわかんないけど。」

愛してんならどーして苦しめんのさ。話聞いてあげないとかオカシーじゃん」

「そうかしら。子供の将来のためと思って塾通いさせる。スポーツを無理やりやらせる。」

周りを見ればよくあることでしょ？

私も知ってるわよ。親に陸上部を強制されてイヤな思いだけをさせられた人」

「う……言われてみれば、あるあるじゃん」

心底イヤイヤ塾に行ってる友達、あたしにもいるし！

そーゆーあたしだって、パパとかお兄にムリヤリ勉強教えられたコトあるし！

ウン、楽しくない！苦しむ……けど。

パパもお兄も、あたしを守るためにやってくれてて、

もしもほつとかれたらヒドイことになってたって、ちゃんと考えるよ？

タドタドしくなったけど、言葉にしてみんなにそー聞いてみたら。

「それは、ひなたも、お父さんもお兄さんもみんな大好きだからと思うラビ。」

大好きなら聞こうと思うラビ。わかろうと思うラビ」

答えてくれたラビリンの脇から、ホントにめずらしく、F・Fが入ってきた。

隣のテーブルから、あたしたちのテーブルに。

いつも横から見てることが多いんだよね。何か言うのもそこから。

「なにかをするのが誰のためなのか。重要なのはそいつだろうね。」

言葉が上っ面だけかどうかは行動でわかるものだと思う。

あなたの家族は『愛』を証明し続けているはず。だからあなたにも伝わっている」

「あ、愛?…エへ。なんか……テレる」

思わず人差し指同士を合わせてツンツンやっちった。

ウン、わかってる。愛されてるよね、あたし!

その横でタツキーが、握ったままだったアイスティーのグラスをトンと置いた。

「話が途中だったな……すると、なんだ。」

佐久間あやかが母親の言葉に納得できていないのなら、母親のそいつは…

てめえが『愛』だと信じてるだけの、上っ面だけの言葉、か?」

「それは、考えられる限りの最悪に近いと思うの。」

だから、見極めないと。あのお母さんにある、佐久間さんを幸せにしたいって気持ちの本気を」

「見極めて…納得させる方法を探すしかないのね。

病院の調査が済んだら、DISCだけは回収しなきゃいけないものね」  
めっちゃフクザツな話になっちゃった。気づいてみれば。

今までだったら、ほぼ災難の元になるだけだから取り上げるだけで済んだDISCだけどさ。

今回は、向こうがそれで何かやろうとして、あたしたちが納得させてあげられなけりゃあ

チカラずくで持つてくしかない…ヤバイよね。

ー、あたしに何ができるんだろ？

とりあえず、明日は明日で、今日みたいなのどかつちだけで佐久間さんに会うことは決定。

佐久間さんに病院の中へラテを連れて行ってもらって、散歩を装って中を調べるんだって。

で、それをニヤトランがチリ・ペッパードコツソリ追っかけんの。  
のどかつちもチョコチョコ電話を入れてお話するみたい。

どーやってDISCをもらうかは…先送りだねえー。

そんなコトを思ってたんだけどさ。フラグ？お約束？

のどかつちから電話が飛んできて、あたしたち全員向かうことになった。

待ち合わせ先にいつまでも佐久間さんが来なくて、

ヘンだと思つてニヤトランに病院を見てもらったら……ビョーゲンズがいたつて。たぶんデミビョーゲンにされちつてる佐久間さんと、そのすぐ近くにダルイゼン。ヤベーツてコトで、全員集合。

今は話しながら、またニヤトランにチリ・ペツパーを送ってもらつてんの。

「いた？佐久間さん」

「…ヤベエーぜ、こいつは！」

ザ・キュアーがヒトを襲つてるクセーぞ？」

「ヒトを襲う？どうやってよ？治療のスタンドなんでしょう？」

報告くれたニヤトランにはワルいけど、あたしもワケわかんない。

ちゅちーがツツコンでくれたんで、そのまま聞く。ウソつくわけもないし！

「…クレイジー・ダイヤモンドみたいに、スタンドで殴っているの？」

「イノシシくらいにデカくなってるんだけどよおー。」

ヒト見つけたら、組み付いて咬んでるっポイよなあー。

でもケガはしてねえ。咬まれたヤツがグツタリしてるだけでよー

「グツタリ？キズはないのに？」

「ダメージはビョーゲンズの汚染込みみてーだけだよ。」

これ以上わからねえ。正体不明の攻撃だぜ！

みんなでアツチ行けど、このままじゃあヒトが襲われまくっちゃうー！

正体不明のヤバさはあるけど、ダメツて見てたらプリキュアじゃあない！

みんな変身して、電線から病院に突っ込んでいく。

今回はタツキーも一緒！病院が広すぎるから、外で待たせたりするとヤバイらしいよ。

病院のトイレに出てきてみんなで飛び出す（タツキーは今回あたし持ち）と、

すぐ近くで逃げてくる人たちの塊とすれ違った。

不審人物が侵入とか、そーゆーアナウンスが流れてる。避難させてるみたい……

で、そこからちよつと走つたら…すぐに、いた。

佐久間さんみたい。あたしは寝顔しか見てないけどさ。

ただやつぱし、肌の色がヘン。ビョーゲンズ色！

あ、そのすぐ隣にもう一人。やつぱし見たくもない顔、ダルイゼン！

あたしたちの顔を見るなり、ノンキに声かけてきた。

「早すぎるじゃん。どうやってすぐ来られたの？」

「その人に何をしたの？」

グレースは何も答えないで、こつちの聞きたいコトだけブツケた。

コイツラこそ付き合う筋合いねえーし！

「何をしたの、って…力を分けてやったんだけど？」

「しらじらしいわねッ」

フォンテーヌが前に出て構えた。

こーなつたら話してる時間も惜しいかんね。

早く助けてあげなきや。

でも、ザ・キュアーの能力。ワケわかんない攻撃。

そんだけには気にしとかなないとヤバイ。

「ま、いいや。来るんなら、来れば？」



グレースが下がって、あたしとフォンテーヌが前でヒーリング・ステッキを構える。タツキーはグレースのすぐ後ろで守られることになってるよ。場のノリで入れ替わるだろーけど。

『気づいてると思うが、ダルイゼン…』

前にグレースが与えたはずのダメージが治ってる。

おそらく、そのためのザ・キュアーだろうよ』

『なんとかして引き離さなきゃあダメだべエ。

フォンテーヌも気づいてるべエ』

スタンド会話があたしにも聞こえた。

そーいや治ってるじゃん、ダルイゼンの首！

グレースに思いつき蹴り飛ばされたトコ！

ザ・キュアーが近くにいままじやあ、攻撃してもすぐ治っちゃうってコト？だよね。

離れさせなきゃあ、戦いにならないかも！

とか考えてたら、一言もシャベツてなかった佐久間さんが、やつとなんか言った。

「さつきから…なんなの？こいつら」

「プリキュア。ビョーゲンズの敵だね。

何度も邪魔されてる。オレもね」

「そう。なら私の敵ね」

「手伝ってやる。さっさと済ませなよ。ブラッド・フラワー」

「かしこまったわ。ダルイゼン」

スタンドが出てくる！直接見んのは初めてだけど…

ウサギだ…めっちゃデカイ。ホントにイノシシくらいある！

聞いてた話と違うのがヒトツ。めっちゃ顔コワイ。悪魔とか何かみたいなの？

グルルルルルル!!!

鳴き声もヤバイ。戦闘態勢！

戦うのはイイけど、デミビョーゲンだし。

体は生身の人間だから、その意味でも殴っちゃあダメだし。

とにかく攻撃がナゾだらけ…：防御できるのかな？

「フォンテーヌ、スタンドに近寄られないよーにしよう？」

「私もそうしたいけど、こんな狭いところで…：どうやって戦おうかしら」

病院の廊下はプリキュアが戦うには狭スギ！

なんとかして外に出なきゃあダメッぽくない？コレ？

## 枯れることなきブラッド・フラワー—その7

佐久間さんがビョーゲンズにされるだなんて。

こんなことを避けるために話を急いできたのに……

なんて嘆いてるヒマ、わたしたちにはないんだよね。

佐久間さんを助けるのは100%の絶対！

そして、他に誰かが死んだり、取返しのないケガをさせないことも絶対！

今、その邪魔になるのは、脅威になるのは何？

「鳴滝くん」

「おう」

振り向いた先の鳴滝くん、顔がスゴイことになってる。

顔全体の毛穴からフリー・ファイターズを噴き出させて、

乾いてもしばらく問題ない爪みたいな形質に変質させたいけど。

監視カメラを今回潰す時間がなかったから、顔を変える必要があったんだ。

戦いが終わるまで持つかな、なんて心配も後だよ。

今は生きるか死ぬかなんだから。わたしたちも含めて。

鳴滝くんにも、ラテをしつかり守ってもらおうよ。

「倒れてる人がザ・キュアーに何をされたか。暴けるかな？」

「すでにやつてる。が、ビョーゲンズの汚染に邪魔されて解析が進まねえ」

うん。聞こえてたもんね。それっぽい音。

たぶん、すでに二人にF・F弾を撃ち込んで、体内で増殖しようとしたんだと思う。

でもビョーゲンズの汚染にフー・ファイターズが勝てなくて、

すぐに死滅しちゃったんだね……

「だがよ、状況証拠から推測は少しできる！

こいつら入院患者じゃあねえ。面会人だ……そもそもが病人じゃあないんだ。

なのに、片方は全身ケイレン。片方は肌を真っ黄色にしてゲロを吐き続けている」

「症状が違うの？」

「なにか病気をうつされた！そう考えるのが自然だろうよ」

「ツ……、なんで、そんな」

ザ・キュアーはお手当ての能力なんだよ？

もう治る見込みのない人たちまでも、その能力で助けてきたのに……

これじゃあ、あべこべだよ。

デミビョーゲンにされたせいで、こんなことになっちゃったの？

ダーティ・ウォーターの時のフリー・ファイターズが、  
それ自体汚染物質に成り下がっちゃってたみたいに？

『ヘイツ、グレース！窓だ！』

F・Fのスタンド会話。言われるままに目を向けて、反射的に防ぐ。  
バ グシャア!!

窓を突き破って衝撃が来る。ダルイゼン！

鋭い蹴り。防げはしたけど、腕が上がって上半身がのけぞったッ

立ち直る間も与えてもらえず、喉をつかまれる。

「遊ばせておくとでも思った？グレース」

「グ……なんで、こんなことを！」

「お前のせいだけど、グレース？」

グ ググ ゴゴ バキ！ パキツ…

思いきり、首をしめてくるッ……

そのまま壁に押し込んで、壁に体がめり込んでく。

「お前にやられた首が痛かったからさ。」

治すのに便利な能力を使っただけ。

全部お前のせいじゃん？」

やられっぱなしじゃ、ない。

意識が飛ぶ前に、プニ・シールドを至近距離……

ドボオ!! ガグシヤア

「が……はッ!？」

読まれてた……膝蹴り、みぞおちにッ

壁から引き戻されて、わたしのみぞおちを、膝に……

めり込んでた壁と一緒に崩れ落ちたけど、首がつかまれたまま。

また、わたしを浮かせてきた。何度も膝を繰り返す気だ。

「あーあ、痛そう……」

でも、オレだって耐えたんだからさ。

見習ってくんない？オレを」

グギギギ グキツ! グググ……

喉仏に指を食い込ませて、もう一度、落とそうとしてくる。

吐きそうだけど呼吸自体ができない。

ヒーリング・ステッキだけは放せない。放した時点で負け。反撃を……

「……チッ」

ダルイゼンが舌打ちしたと思ったら振り回された。

理由は次に来た衝撃でわかった。

ボ ドゴオ!

……プニ・シヨットだ。たぶん、フォンテーヌ。

わたしが盾にされた。ダルイゼンはノーダメージ。

「グ、グレースッ」

「どうしたの、もつと撃つたらう？次は当たるかも」

そんなことを言いながら、大腿で進んだ。

さっきまでの位置関係を覚えてるわたしは、一瞬で遠くなりかけてた意識を戻した。

これだけは！これだけは止めなきや！

ヒーリング・ステッキを強く握ってラビリンに意思を伝える。伝わって！

「ラビー」

ド グオオン

地面に向けたままのプニ・シヨット!

意表をつかれたダルイゼンは姿勢を崩した……けど。

「……脅かすなよ。思うように蹴れなかった」

完全には止められなかったみたい。

重たい塊が、蹴とばされる音が確かに聞こえてた。

「なんてことするのッ……人をッ！」

立ち上がれもしない病人をッ、石ころみたいに！」

「勝手にキレてたら？」

やっぱりだ。ダルイゼンは『飛び道具』でフォンテーヌを封じたんだ。

たまたま近くに倒れてた、ケイレンの症状の人を蹴り飛ばした。

思うように蹴れていたら、たぶん……『砕け散って』た。

肉とか骨がバラバラになって、ビョーゲンズの汚染もろともフォンテーヌを襲ってた。

完全にはうまくいかなかったけど、フォンテーヌを足止めするには十分で！

足止めしてこの後、何をするかって言ったら！

「よいしょ……」

ドゴ ドブウツ バシ！

「……ッグ」

また盾にされた。これはF・F弾。

鳴滝くんを潰しに行くに決まってる。

すぐく育ったメガビョーゲンにダメージを与える攻撃力を、

鳴滝くんは前回の戦いで証明しちゃってる。



DISCの秘密がバレてなくても、警戒しないはずがないの！

一人だけプリキュアじゃあない生身の人間。

一発殴られるだけで下手したら即死しちゃう！

一緒にいるラテだって、ただじゃあ済まないよツ

ドブ バチイツ ドボオ

「ひどいことするね。プリキュアを撃つなんて」

絶え間なくF・F弾が飛んでくるけど、

全部、わたしを盾に防いで、ダルイゼンが走り出した。

今度こそ全力で蹴り飛ばす気だ。

足が動かない鳴滝くんに、それを逃れる方法はない。

ううん。F・Fで足との連絡を回復すれば歩けるし、

すでにそれも終わってるだろうけど！身体能力差で意味がない！

どうにかしないとツ……

……バチツ

「……………、!?」

飛びそうな意識をつなぎとめると、天井に違和感があった。

しっかりと目をこらしてみたら、光の弾が降ってきた。

バチ ボゴオオ！

「グウウウツ!!」

ズバババババババババ シュゴオオオオーツ

ダルイゼンの悲鳴が聞こえたと思つたら、ギユンとどこかに引き込まれて。目を開けたら、スパークルがすぐそばにいた。

思い出すように出てくる、こらえきれない咳！

「ゲ……ゲホツ、ケホツ!?!…ゲエエツ……」

「だいじよぶ? グレース!」

背中をさすつてくれるスパークルだけど、

すぐにも立たなきやあいけない。ダルイゼンはどうなったの？

さつきまでわたしがいた場所に目をやると、

うずくまったダルイゼンがヨロヨロと身を起すところだった。

全身からブスブス煙が上がつてる。

「グ……また、見えない攻撃、か。」

「どうやら、スパークルの仕業らしいね」

「……。今からやられるあなたには関係ない」

『雷のボトルでよおー、チリ・ペツパーのヤバイ電撃をブチ込んでやったぜ!』

さすがにコイツも無傷で済んじやあいねエーよ!」

ニヤトランがスタンド会話で説明してくれた。

たぶん、ボトルのシヨットを二発撃つたんだと思う。

一発目は普通に撃つて、衝撃でわたしを手放させ、スパークルがつかむ。

それからチリ・ペツパーの集めた電力を込めた二発目でダルイゼンを体内から焦がす。

一発目からやつたら、わたしも黒コゲになつちやうからね。

でも、にも関わらずダルイゼンは。

わたしの方を見て、余裕そうな顔をしていたんだ。

「ま………ここまでやればいいか。

フオンテーヌはすでに倒した」

「……………え?」

「ハアアア? ナニ言つちやつてんの?」

やられそーになつてんのはアンタで」

ドザツ

スパークルの言葉をさえぎるみたいに、わりと近くで誰かが倒れる音がした。

みんな、そつちを見る。くやしいけど、言う通りだった。

フォンテーヌが……ううん、変身が解けたちゅちゅちゃんが倒れてる。

倒れて、よだれを吐きながらぐったりしてる。顔色がどんどん青くなっていく。

「なっ……何が、どうなって」

「せいぜい頑張れば？」

そいつを助けるために、無駄な努力をね……」

窓から飛び出してダルイゼンが消える。

けれど追っかけることなんかできないッ

ちゅちゅんは一体どうなったの？

そのすぐ先に、答えがあった。というより、これ以外にない。

わたしたち全員、ダルイゼンにかかりつきりになれば、どうなる？

一番近くにいたフォンテーヌが、背後をつかれちゃったんだ。

グウルルルルルルルルルル！

勝利の雄たけびみたいに、首を上げてうなる巨大なウサギ。

ザ・キュアーが正体のわからない力で、ちゅちゅんを病気にした！

「……クソがッ、わかったぞ！ヤツのやってることが！

フォンテーヌの体内のフー・ファイターズで、今F・Fが見てる！」

「鳴滝くん？」

「フォンテーヌは『心不全』だ！

『心筋梗塞』で心筋が壊死しちまったせいで、まともに血がめぐらねえ！」

「どーゆーことッ!？」

「佐久…あいつが治してんだよ、ザ・キュアーでッ！『心不全』をッ！

フォンテーヌはその『逆』をやられた！『移された』！」

「……ッ!？」

「『ケガや病気の移植』それがヤツの能力だ！そうとしか考えられないッ」

ということは。

佐久間さんは、ずっとザ・キュアーで死ぬような病気を治療してきてるんだから。

ザ・キュアーに攻撃されたら、わたしたちは『死病』を移される。

能力での攻撃だからプリキュアの防御力なんか関係ない！問答無用でやられる！

そして、すでにちゅちゃんはそれでやられた。

「『心不全』？」

死ぬまであとどれくらいなの？治せるのッ!？」

「フー・ファイターズで心筋を代行する。

筋組織の再生はすでに俺自身の左腕修復でやってる。

F・Fもいる。長期的にもなんとかなるはずだ…

とりあえずの復活にはおそらく3分あればいい。  
今倒れたばかりだからよ……それまで頼む」

「……ありがとう。まかせて」

よかつた。どうしようもない絶望だけは避けられたし、  
フォンテーヌも3分で復帰してくる。鳴滝さんとF・Fなら大丈夫。

ダルイゼンがもういないなら、ここはもう互角以上になつてる。

まず、ニャトランがさつきみたいに天井の蛍光灯配線を伝つていつて、  
ちゅちゅんを鳴滝くんのところに置いた。

そこから間を置かずにはわたしとスパークルでプニ・シヨットを撃ち込む。  
接触すること自体がマズイなら、こうするまでだよ！

スタンドのダメージは本体のダメージ。遠距離から叩きのめして  
本体が気絶すれば、あとはDISCを回収するだけなんだから。

光弾を一発受けることに転げ飛ばされるウサギの姿。  
絶対に止めないよ。これ以上罪を重ねさせないために。

あの先に佐久間さんがいるはずだけど、一本道だからか姿が見えない。  
大きなウサギに覆われちゃってるからね……

「うッ………た、叩かないでよ……ハッ!？」

「よし、意識が戻った。起きられるか？」

…グレース、スパークル、そこからさらに一気に押し込め！

案内を見たが、その先は東館ロビーだ。

広場に入れば、のろまのデカウサギを相手にする必要はない！

俺も後から追おうよ」

「ウン、りよーかい！」

スパークルがスゴくご機嫌に返事して、プニ・シヨットの勢いを強めた。

2分くらいでちゅちゃんが回復したんだもんね。

しかも、ここから先が広場だっていうなら、そのまま本体を狙えばいいよ。

ザ・キュアーのパワーとスピードそのものは、戦いには全然向かないレベルなんだし。

それに、ロビーっていうことは普段から人がたくさんいるはずの場所だよ。

その意味でも放置できない。わたしも負けずにプニ・シヨットで押し込んでいく。

…でも、気のせいかな？

なんだか、どんどんザ・キュアーが大きくなっていくような。

それがかなり不気味だけど、だからこそここで押し切るしかないって判断した。

本体が落ちれば終わりなのは、ほぼ全てのスタンドに言えることなんだから。

ロビーの入り口に隙間が空いたのを見計らって、

わたしとスパークルはシヨットを中止。ふたり同時にあえて突っ込む。

「プニ・シールドツ！」

ギョオン ……メシヤア！

プニ・シールドを張りながらだつたら、直接触られずに押し込める。

そう読んだ通りで、これはすぐ後ろにいただろう佐久間さん……違うね。

デミビョーゲンにされているのなら、さつきダルイゼンが言っていた名前がある。

確か、ブラッド・フラワー。彼女に対しても奇襲になつたはず。

この名前も、まもなく用無しだよ。

「……あら。お友達を諦めたみたいね」

「フォンテーヌなら助かったよ。わたしの友達はすごいもの。」

佐久間さんになつて、きつと負けないよ」

「へえ。まあ、なんでもいいけれど。」

さあ、なんの病気がいいかしら？

悪性リンパ腫？胃ガン？なんでもそろつているわ」

「佐久間さんは、そんなことのためになんか頑張っていない。」

助けたい思いに嘘なんかないのに……

それを台無しにするあなたを、わたし、許さない」



「あつ、そう。」

だったら、もらったものから返しましょうね」

何かされる。予感したんで跳ぼうとしたけど、遅かった。

ザ・キュアーの目が妖しく光ったと思ったら……

数十発の桃と黄の光弾が一気にわたしたちに向かつて飛んできた！

「プニ・シ」

「ラビツ……」

防御も間に合わず、わたしたちは元来た道へもみくちやに吹っ飛ばされた。

地面に何度もバウンドしながら変身が解けて、すぐに何かに受け止められた。

「大丈夫？グレース」

「……う、う……なんとか。ありがとうフォンテーヌ」

すでに再変身を終わっていたフォンテーヌがいたから助かったけど……

えっと、スパークルは？たぶん変身解けてるよね？

後ろを見てみると、いた。

「イ、イ、イツ……タ、タツキー、だいじよぶ？……い、痛いー」

立ち上がりながら頭を押さえてるひなたちゃんもすぐ痛そうだけど、

何もしゃべらずウンウンうなずいてる鳴滝くんの方がどちらかというマズそう。

膝足立ちで、膝がカクカクふるえてるもん。

F・Fがスタンド会話でダルそうに言ってきた。

『受け止めの失敗してアゴに頭突きもらっただけ……』

問題ないからさっさと変身しな。

ほら、ひなたもコブにならないようにしてやるよ。急げ』

ザ・キュアアがスタンドとしては弱くって、ホントによかった。

こつちに追ってきて、さっきみたいに一本道に追いやられる前に

わたしたちの方が先にロビーに入れたんだからね。

ブラッド・フラワーもその辺の判断は早くって、

わたしたちに二分される前にザ・キュアアを自分の近くに戻してる。

……ホントによかった。ダルイゼンを先に追い払えてて。

いたままだったら、変身が解けた瞬間に割り込まれてやられてた。

慢心は危ない。それをまた実体験で学ばされたって感じ。

「アレツ？ザ・キュアアさ、小さくなってない？」

スパークルに言われて見てみると、さっきの通路に詰まりそうな大きさから、

ここで初めに見たときくらいのサイズに戻ってる。

「なんとなく読めたわね」

さつきまでの戦いを後ろで見てたフオンテーヌも気づいた。

そう言われて、わたしもピンときた。

「受けたダメージをそのまま返してる。」

攻撃で受けたダメージなら、攻撃の形でダメージを返すのよ」

ザ・キュアーが飛ばしてきたさつきの攻撃は、どう見てもプニ・ショットだった。

それも、わたしとスパークルが撃ちまくった数と同じくらいだけの。

あと、あまり見えなかったけど、バリアみたいなのも出てた。

あれはわたしたちに届かなかつただけのプニ・シールドじゃあないかな？

同じように考えたらしいスパークルの顔が引きつった。

「えッ、んじやあさあ〜」

「どんだけ攻撃しても、みんなあたしたちに戻ってきちやうワケ？」

「そんなんどーやって倒すの？」

「心配ないわよ。」

見ていた限り、攻撃をキレイキツチリ反射しているわけではないようだったわ。

受けた分を、まとめて適当に撃ちだしただけじゃあないかしら」

「そうだペエ。あんなにたくさんのプニ・ショットにまとめてみんな当たっちゃったら、

変身が解けた後にまでダメージが来たと思うペエ」

「なら……」

「今までの戦法で十分に勝機あり、よ！」

要するに、ザ・キュアーは単なる動く障害物で、相手にするだけ無駄。

プニ・シヨットでどかしてやって、反射攻撃をしかけてくるより前に

本体であるブラッド・フラワーからスタンドDISCを奪ってしまえばいい。

やることは何も変わらないってことだよ。

「相談は終わりかしら？ 甘く見られたものね……」

この距離なら、さすがにカバーも間に合うわよ？

あなたたちの未来は変わらない。無残な病死、それだけだわ」

「ううん、変わるよ。あなたが変わる。」

こんな力に縛られなくていいように、変わるの」

「寝言は病床で言いなさい、プリキュアアア」

最終ラウンド。

みんなで取り囲むように跳んだ。

だけどそこに、場違いな人が現れた。

「う……え？ 化け物！

化け物、なのに……えっ？」

すでに避難済みで、誰もいないと思っていたロビーに。

端っここのソファアの影から、『上品なおばさん』が現れたの。

今までずっと気絶でもしていたの？そこで……

でも、そんなことよりもずっと重要なのは。

「危ないわッ、すぐに避難……」

「あやか？……あやか、なの？」

いえ、そんなはず……」

そのひとは、佐久間あやかの母親そのひとだったこと。

ブラッド・フラワーの動きがピタリと止まって、そっちに向き直る。

わたしたちとの戦い以上に、そっちが優先だっていうの？

なら、チャンスかもしれない。

鳴滝くんは、ひなたちゃんの前で一瞬だけ正気に返ったんだから。

思いやる気持ち伝わるのなら、ビョーゲンズの呪縛だって超えられる。

たった一回だけど、それは証明されてるんだから。

「やはり、いたのね……」

どうせ、根回しで動き回っていたんでしょ？

佐久間あやかを退職させるために、勝手なことを言い回って」

「な、何を？ どうして、そんなこと」

「どうせあんたを殺すことには変わりない。」

だから今だけ言つてやるわ。佐久間あやかとしての最後の言葉を…

あんたにケリをつけて、きつちり人間をやめるためにねえ」

「最後？…あなた、一体」

あまりのことに圧倒されている佐久間さんのお母さん。

動けなくなつているところに、ブラッド・フラワーは

ほとんど一方的に吐き捨てていく。

「あんたは、私の花は枯れないつて言ったけど。」

私の花は最初から死んでいたわ」

「なんで、あなたがそん…」

「何が花よ、才能よ。」

あんたの勝手で押し付けられる花なんかいらさないわ。

私の好きな色だつて、あんたは一度も聞いてない」

恨みだった。底冷えするみたいな。

鳴滝くんと同じ…：ううん、それ以上かもしれない。

ずっとずっと溜め続けてきたものを、ぶちまけているのかももしれない。

「あんたは、私の未来が楽しみだって言ったけど。」

私の時間は最初から止まったままだったわ」

「そんなの、あやかしか知ら」

「ねえ、あんたにわかるの？」

他人事の人生を歩む気持ちが……

人にそれを指さされて、私がどれだけみじめになったか」

お母さんの顔が青ざめていく。

佐久間さん本人しか知りようのないことを言われてるんだよね。

でも、これはまずいような気がする。

邪魔をした方がいいっていう予感が止められない。

でも、その逆も止められないの。

このお母さんには期待できないって思う一方で、

避けられない道なんだ、っていう風にも思うの。

「あんたは、お天道様は私を見捨てないって言ったけど。」

私に太陽なんか、最初からなかったわ」

「…やめなさい」

「ハアーツ！そおーよねえーーツ！」





「あやかはいい子なの！」

私たちの言うことをよく聞いてくれるいい子なのよオオーッ！

私たちのためになんだってしてくれるいい子ッ！！

私たちをわかってくれる子ッ！！

それを、あんたみたいなの！あんたなんかみたいなの……」

ついに、言っではいけないことを言ってしまった。

「あんたなんか、私の娘じゃあないッ！！」

ウサギが、爆発したみたいに膨れ上がった。

## 枯れることなきブラッド・フラワー——その8

BAOOOOHHHAAAAAAA!!!  
ブオ ゴゴ!! ゴオオン

「アハハハハー——」

ギイー——ハツハツハハハハー——」

一瞬でロビーの半分ほどを埋め尽くしたザ・キュアーは同時に得体のしれない衝撃波を出し始めた。

わたしたちはプニ・シールドで防ぎながら立ち止まるのが精いっぱい。

そのザ・キュアーの頭の上で、ブラッド・フラワーが笑ってる。

ものすごい表情で目をむきながら、笑ってる。

「ありがとう、ありがとうママアアア——」

おかげで、心おきなく……人間をやめられるわアア——」

彼女が言ってる先にいるお母さんは、フォンテーヌがかばってるけど……

ああ、へたり込んでオシッコ漏らしてる。

無理もないよね。こんな台風みたいなのに目の前で敵意向けられたら。

でも……なんてことしてくれちゃったの？

『佐久間さん』は最後にちよつとでも話をしようって気になってたのに、

そこに、あんな酷くて悲しい言葉をぶつけられたら。

『どうすんのコレ？近づけないじゃん』

スタンド会話でスパークルが相談してきた。

ひっきりなしに垂れ流されてる衝撃波で、わたしたちは釘付けにされちゃってる状態。

防いでるだけじゃあジリ貧になるのはわかりきってて、

それを聞いてきてるんだよね。

『フォンテーヌから伝言だペエ。』

みんなで一緒に必殺技をぶつけるペエ』

ペギタンの声も来る。

必殺技っていうのは、わたしで言うとなら

プリキュア・ヒーリング・フラワーのことね。

みんなチョットずつ名前が違ってるんで

『殺し』じゃあないのはわかりつつそう呼んでるの。

うん、やっぱりそうなるよね。

これを突破するには、そのくらいしか勝ち筋が見えない。もうひとつだけ、心当たりがなくてはならないけど。

『スパークル、確認だけど。』

太陽で攻撃できるの？』

『ムリ！太陽が建物にぶつかっちゃう！最悪、火事！』

やっぱりダメ。単純な攻撃力だったらわたしたちの中で最強なんだけどね。こういう狭い場所での戦いだと、そもそも太陽そのものが出せない。

出したらそれだけで大勢の人が死にかねない。強いつていうのは、ただそれだけで危険なの。

そこで、後ろでかばってる鳴滝くんもスタンド会話に参加してくる。

『だがよ、この攻撃はなんなんだ？』

『…うん。わたしたちだけに効いてる。』

テレビとかソファアは全然壊れたりしてないね』

言いたいことがわかったんで、わたしから言ってしまう。

たぶん、フォンテーヌも同じことを言おうとしてる。

『直感だけど、正体がわかったときには遅い気がする。』

今！決めてしまおう！みんなでザ・キュアを押しつけて、本体を叩く！』

チリ・ペツパーで本体を誘拐して目の前まで連れて来られれば

そこを浄化してオシマイなんだけど……ここが東館ロビーでさえなければ。

ここだけ建物が新しいのもあって、天井が高いの。蛍光灯とかが近くにない！

壁際とかに寄せればイケるかもだけど、ザ・キュアーが動かないとダメ。

つまり、何をどう頑張ってもザ・キュアーを押し附けないと本体に届かない。

あの攻撃の正体は何だろうと、やることは変わらないし変わらない。

ただ、わたしたちの全力でザ・キュアーを動かす以外、なんにもないの！

『それがいいラビ。カワイソーで見られてられないラビ』

ラビリンもそう言ってくれる。

ちよつと泣きそうな声だった。

あつちやあいけないことだよね。

お母さんに見捨てられて、人間をやめちやうだなんて。

こんなひどいこと、ないよ。このまま終わらせたりしない。

『ウン、りよーかいッ！』

『手早く頼む。俺が出来んのはラテをかばうだけ』

『ごめん、耐えて！』

「アウン！」

鳴滝くんが頭を抱えてうずくまる。

お腹の下に守られたラテが、励ますみたいに吠えてくれた。

やると決めたのなら、時間との勝負だよ！

佐久間さんのお母さんだつて、同じように守れなくなるんだし。

一步踏み出す。みんなの声がそろろう。

「エレメント・チャージ！」

ヒーリングゲージの上昇。

みなぎってくるパワーで、衝撃波をいなす。

こんな無理やりなやり方、長くは続かない。

それをわかって、みんなやつてる。今出せる全部をぶつけるよ！

プリキュア・ヒーリング……

「フラワーーーーッ！」

「ストリーームッ！」

「フラーーツシユ！」

シバッ！ ギュオオオオオオオム

桃色と青色と黄色。

みんな同時にザ・キュアーにぶつかっていく。

普通のメガビョーゲンだったら、もう倒せてるような威力だけど。

これはただ、敵の盾を押しつけるための一手でしかない。

これでのけぞらせないと、何も始まらないの！

「はぁアアあぁッ!!」

ぶつかつた光の後ろからさらに力を込めて、押す。

何を言ってるかわかんないかもだけど、とにかくそう。

放つた光を出し続けての力押し。

「ラビーツ！」

「ペエエーツ！」

「んニャローーツ！」

ラビリンも、ペギタンも、ニャトランも必死に押しつけてる。

わたしたちとヒーリングアニマルのみんなでプリキュアなんだから。

みんなの頑張りで、なんとしても押し切るッ

両足を開いて、カカトで踏ん張って。

正眼つて言つたっけ？ 剣道みたいにヒーリングステッキを構えて、

下手をすれば自分自身が吹っ飛ばんじやいやいそんな圧力に耐える。

これならいけるんじやあないか。そう思つたよ？

こんな威力の攻撃は、今まで全部を振り返つてもしたことがないもん。チリ・ペツパーの町中の電力を集めたヤツは例外ね……

プリキュアとして、ここまで力を振り絞つたのは、たぶん初めて。だからいける。押し切れる。

そう思つちやつたこと、それ自体が心のゆるみだつたのかなあ？

GOOOOAAAAAAAAA!!

ゴオ バア！

「うぐう!？」

「がッ!？」

「痛ッ…!!」

バシ！ ズドオ

少しの間止まつた衝撃波が、わたしたちに殺到してきた。

バランスを崩されたわたしたち。ぶつけていた光も止まってしまう。

「う、ウソ。効いてない?」

「なんてことッ、動きすらもしないなんて」

そして見えちやつたよ。さっきいた場所から一步も動いてないザ・キュアーを。

上に乗つかつてるブラッド・フラワーも、





ブラッド・フラワーの声と一緒に飛んできたそれは、到底耐えきれぬものじゃあなかった。

桃色と青色と黄色の光が、らせんを描いて殺到してくる。

瞬間で、みんなのプニ・シールドがパンと音を立てて割れた。

そこから先を見てなんていられない。

ミキサーに放り込まれた果物の気持ちがちよつとだけわかった。

威力がズタボロにわたしたちを刻む。

ビョーゲンズを貫いて、エレメントさんだけを救うためのパワーなんだけど、

その威力だけを增幅してぶつけると、こんなおぞましいことになるんだ。

どういふつもりであつても、さつき、わたしたちがしたのは、それだつたんだ。

ドシヤア

変身が解けた。

もみくちやにされてる中で変身が解けなかったのは幸運でしかない。

もしそうなら、今頃バラバラの死体になっていたかも……

全身が痛いけど無視して立つ。今のわたしにはプリキュアの防御力すらない。

すぐに変身し直さないと、ただ殺されるのを待つだけになっちゃう。

「ド畜生ッ！」

ダダッ!

ドン ドン! ドバア

横を鳴滝くんが走っていった。

F・F弾を横走りしながら撃ち込んでる。

変身するまでの時間を稼ごうとしてくれて、それはなんとか間に合った。

ヒーリング・ステッキがみんな手元にあるままだったから、

30秒くらいで元通りにはなれた。

ブラッド・フラワーが鳴滝くんに目を向けただけの時間があれば、

結果的に十分だった。

でも、みんなダメージが隠せない。

力を出し切ったところにあんな目にあわされて、

そこからすぐに再変身じゃあ……ガソリンが空っぽの車に近い。

それに、ブラッド・フラワーも別に下手を打ったわけじゃあなくて……

すでに影響なんかないから、見逃していただけだったのかも。

だって、それからすぐに。

衝撃波が、また始まった。今度は防御できない。

みんな、まいつちやてたし、態勢をとれなかったっていうのもあるけど……

一番の理由は、ブラッド・フラワーが狙っているのは…明らかに、お母さんだった。贈り物をあげるわアアア、

喜んで受け取つてよママアアア……ッハッハッハハハハ!

わたしたち四人、一斉に、佐久間さんのお母さんの前に割り込んだ。

押し寄せてくるものが、わたしたちみんなを打ちのめす。

体に浸透してくる。たとえるなら巨大な音。おなかと頭の中で跳ね回ってる。

「うぐうううううッ!!」

「がはッ!!」

「ウアアアアアああッ」

「ぐええええ…ッ」

プリキュアのみんなだけは肩を組みあつてなんとか耐えた。

お尻で後じさりしてる佐久間さんのお母さんと、

仰向けにひっくり返つた鳴滝くんを、なんとかして守らなくっちゃいけない。

でも、それ以上の何もできない。もろにくらつたまま身動きが取れない。

「わ……わかつてきたわ、この攻撃がなんなのか」

「フォンテーヌも?」

「最初っからさあ……わかつてたことじゃん?」

ザ・キュアーが受けた攻撃丸ごと返してくるなんて……

でも、そんなのワカンなくたってさあー、イヤでもわかるよコレ」

フォンテーヌとスパークルの、衝撃に揺さぶられて揺れる顔から涙がこぼれる。

それがゆがんで見えるのは、わたしも同じだからかな。

「だってさあ。ツライ……悲しい。痛い」

スパークルが口に出した言葉に、わたしも心に浮かぶものがあつて。

同じように口に出せば、疑いがはつきりと確信に変わった。

『痛いほどの悲しみ』

この攻撃は、悲しみからくる痛み！」

「焦がされる！内側からッ」

フォンテーヌの悲鳴と一緒に、おなかと頭に「反響するものが具体的になっていく。

声が聞こえるし、見えもする。一番目立つのは、やっぱりこの声。

『あんたなんか、私の娘じゃあないッ!!』

これだけでも打ちのめされるくらい痛いんだけど、ホントの辛さはその奥なの。

衝撃から景色が伝わってくる。音も、言葉も。

小さな視点が、女の人を見上げてる……テーブルにはケーキがある。

『あやか、お誕生日おめでとう』

ケーキに手を付け始める前に、女の人が目の前にグッと迫ってきた。手にはキレイにラッピングされた袋を持つてる。

『ほら、プレゼントよ。開けてみて』

小さな視点の手が動く。受け取って、開ける。

ワクワクもドキドキもしてない。

そこに何かがあるのか、開ける前からだいたいわかっていたから。

『参考書とドリル』。誕生日のプレゼントは今年もそれ。

『そろそろ中学受験を意識しなくっちゃあね？』

お医者様になるんだもの。ママね、少しでも力になりたくって』

『プレゼントもいいが、ケーキ食べよう。』

パパはもう待ちきれなくてなあー』

『コラ、ただし！アンタのお祝いじゃあないのよ。』

まったく、いつつも…見なさい、あやかが行儀のよさを。

アンタもちよつとは見習うといいんだけど?』

『そりゃあねえぜ。母ちゃん』

アツハハハハハハ…

みんな笑っているけれど、わたしだけが知っている。

わたしは、友達が用意してくれた誕生日パーティーを断つてここにいるんだって。

そつちに行つたら。今日のこの場に穴をあけたら…ママが、悲しむから。

一度だけ、プレゼントを嫌がったことがあるのを思い出す。

そのときの、みんなの顔を思い出す。

わたしのせいで、悲しませたくない。

翌日、友達がくれた誕生日プレゼントのビーズアクセを見た。

わたしの好きな、紫色をあしらった手作りのブレスレット。

ふと、涙が出てきた。

その意味を、わたしはまだ理解できなかった…

次に見えたのは、クラスメートの男の子。

お互いに顔を知ってる程度だった間柄の彼は、

バレンタインデーになぜか唐突にわたしにチョコをくれて。

シヤチホコばった顔でアベコベなことをしてきた彼に何か返してあげたくて。思い出し笑いをしながらキャンディーを自作していたら……

『ありがとうね、あやか。』

私たちのために、ここまで気合を入れてくれるなんて』

『いやー、パパとママの結婚記念日を覚えててくれるとはなあ』

全部、食べられた。ホワイトデー前日の夜に。

『でもね、あやか。』

あなたには、もつともつと大切なことがたくさんあるわよね？

ママもパパも、あなたの邪魔にはなりたくないの』

『おー、そーだな。』

あやかの夢が叶えば、それが最高のプレゼントになるなあ』

『来年は高校受験よ。ママ、あなたのためにね、この……』

そして好意で差し出してくる、学習塾の特別コース。

それが『夢』をかなえるのにどんなにスバらしいかを寝る前まで語られて。

結局、他の何かで埋め合わせることもできず、無視した形になり……

彼とはそれきり、疎遠になった。

思えば、このあたりからかもしれない。



わたしの『夢』に身が入らなくなったのは。

次に見えたのは、封筒の中の白い紙。不合格通知。

休日の昼間にそれを受け取ったわたしは、

数日前から今か今かと待ち受けて家からも出ようとしないママに、

長時間の時間稼ぎの末に手渡さざるをえなかった。

『……何を間違えたのかしら、あやか』

目がスツと座ったママは、その場でわたしに過去問を全部持って来させた。

今までのノートも、勉強に使った参考書も全部。食卓の足がきしんだ。

『ダメじゃあないの。あやか。』

一度間違ったところでまた間違っちゃあ。

ダメじゃあないの。あやか。

似たような問題を落とすしちやあ。

ダメじゃあないの。あやか。

この設問は、前年度の……』

うすうす感づいてきていた。

身が入らなくても、真面目にやっているからこそ。

このひと、なんにもわかってない。

それを、どうしてこうもわかったフリができるの？

わたしを頑張らせている横で、ママはなんにも変わらない。

でも、お医者様になれば、きつと変わる。そのために、わたしは。

……後になって気づいたけれど、わたしはここで完全に折れていた。自分で信じられもしないものに、ただすがりついているだけだった。

ああ、それでも。それでもわたしは。

わたしはこのひとに哀しんでほしく、ない。

小さい頃のことを、ずっと覚えてるから。

お医者さんになりたいって言って、すごく喜んでくれたときの顔を、わたしはいつまでも捨てられない。

「グレースッ、気をしっかり持つラビ！」

「……あッ!？」

ラビリンに呼びかけられて引き戻される。

衝撃が伝える景色に、心を持っていかれかかってたみたい。左右を見る。歯を食いしぼるフォンテーヌがいた。

ボタボタと涙をこぼすスパークルがいた。

見たものは同じみたい……

ううん、ザ・キュアーは正確に反射して返すわけじゃない。

『これ』がただまき散らされているだけだっていうのなら、

少しずつ違うものを見ているかも。

それは、わたしたちの後ろにいる鳴滝くんと、

ラテに……『ママ』も同じってこと。

鳴滝くんがちよっとひどいなあ、

突っつかれたダンゴ虫みたいに丸まっちゃってて、

ラテがそこに巻き取られちゃってる。守るって意味ならいいかもだケド

問題は、『ママ』の方……

「ギャアア!!」

うああ、ヒイ!?!」

ドガ バシッ ガン ガンガンッ ゴガッゴガ!

床を両手で叩きながらのたうち回って、頭までガンガンぶつけてる。

「あの反応。確定ね」

「うん」

わたしたちと同じ衝撃に、同じものを見せられてる。確実に。

どんな苦しい思いをさせられたかを無差別に投げつけられてるわたしたちだけど、

あつちは本人だよ。犯人、っていう意味での本人。

避けようも、ごまかしようもなく見せつけられてるんだよ。

自分のやってきたことは何だったのかって。すごく、おそろしいことだと思う。

止むことのない衝撃の中で、わたしたちに気づいたみたい。

ふと目が合うなり、身をよじりながら聞いてきた。

「あ、アナタたちイ…」

『正義のヒーロー』お。ツ!?よねえ?」

「…そのつもり、ですけど」

うなずいたけど、警戒しつつになった。

この人からは、ろくでもない雰囲気しかしてなくって。

承太郎さんの記憶で、けっこうよく見る人たちと同じ目をしているの。

自分のことしか考えられない、あさましいひとの目と。

追い詰められた人間なら、多かれ少なかれ誰にでもあることなのは忘れちゃあいけない。

それでも。

「な、なら。なら、アツ！」

殺しなさいッ あのバケモノを！

ヒトのオオ思い出をオオツブ！

キレエイな思い出をオオ汚すッ、

掘りイ返してエエドロオぶっかけてエエくるウ：

あのヴあゲモノおおをオオ、

殺ベエ、ころびゆなザイイイーッ！！」

こんな物言いを受け入れる筋合いは、ない。

このひとは、さらに罪を重ねた。

「あやアアがガああこオンなゴドツ!？」

クオンなゴド考えるワアゲがアアアないイ！

がッ、ウギイ!？」

あやがアアアのジイイあばゼエエはア、

あだジイイの、じばツ!？あぜなアのよオオ!？」

「ごオオオンなのあやガじゃあアなびいいい！」

「バアゲモノおおお、この、ヴァげエエ」

「黙りなさい!!」

わたしが何か言うよりも先にフォンテーヌがキレた。

片手で無理やり……たぶん、残る力を振り絞って

プニ・シールドを張りながら、後ろを振り向く。

わたしとスパークルも同じことをやっている間にも、言葉は止まない。

「あのひとが化け物だっていうのなら、あなたは何よう？」

『人でなし』じゃないツ!!

都合が悪ければ、消えてしまえとでも言うの!?!」

「グッ……グおの!?!」

「アンダにイ、アンダにイイ何がわガアるツでエのよ、小娘!!」

「母親の苦労オが、気持オぢがツ、小娘ゴムズメにイイわかるかアアア」

「ふざけんな」

今度は、スパークルがキレた。

というよりも、とつくにキレていたのかも。

大声を出しているフォンテーヌよりも、ずっと怖い。

「謝れ。あやかさんに」

「…なによ、アレはただのバケモ」

「あやかさんに謝れよ、ばか!!!」

そして、怖さがそのまま大声になった。

脅しつけてるわけでもなんでもない。

スパークルは泣いている。泣きながらとんでもなく激怒してる。

今まで見たことがないくらいなの、むき出しの怒りだった。

鳴滝くんがポルナレフさんに負けて『死んだ』ときもこのくらい怒ったかもだけど、

あの時の冷たい怒りとは、ちがう。

「アンタ、ママなんでしょ？あやかさんのツ

聞こえないの？あやかさん、泣いてんじゃん!!

それなのに、なんでアンタはツ……そんなツ、ヒドイことばかりいい……ツ!!

ママって……ママ、って……そんなんじゃあ、ないよおおおお」

怒鳴りながら、最後の方は言葉になってなかった。

泣き崩れるみたいに膝が抜けて、その場にくず折れた。

わたしは、なんとなく思い出した。

そういえばひなたちゃんのお母さん、見たこともないし、聞いたこともない……





この攻撃を止める方法を探すしかないぜ……俺には、わからんツ!

お手上げだクソがッ!

『だけどね、最後の手段として検討せざるをえないね。

このまま死ぬまで追い詰められれば、全てが終わる……

もうまもなく、あたしたちはそれをやるしかないなる』

鳴滝くんだってやりたくないし、F・Fだってやりたくないなんかないんだ。

でも、このままでわたしたちプリキュアはオシマイで、

オシマイになったらビョーゲンズも、ホワイトスネイクも止める人間がいなくなる。

打って出るしかないんだ。選択の余地がなくなる前に。

でも、どうやって?

何も考えずに押し切ろうとしたさつきが、あのぞまだったんだよ?

力を無駄に消耗しちゃうだけに終わっちゃった……だから、考えなくちゃ。

ザ・キュアアを押しかけて、弱い本体に浄化をしかけようとしたのは間違いじゃあな

かった。

でも、もう今のわたしたちにそれを実行できるだけの余力はない。

だから、鳴滝くんという通り、弱点を突き通すだけが現実的な勝ち筋になるけど。

その弱点は、何?

……ダメだよ、わたしだけで考えちゃあ！

プリキュアはわたしじゃあない。わたしたちなんだよ？

「……………あッ」

「どうしたラビッ？」

「さつき…スパークルが、言ってたこと。」

あやかさんが、泣いてる。って」

「いッ…言った、ケド！どーすんの？」

スパークルの言葉が、パズルのピースだった。

それを当てはめて考えてみれば、出てきた答えはあまりにも当たり前。

どうして、こんなことに気づかなかったの？

「ザ・キュアーの能力が、吸収したダメージを回りにまき散らすことで。」

今の『これ』が、お母さんの言葉で受けたダメージだっていうのなら……

やっぱり、佐久間さんは泣いてるんだ。今、こうやって」

「言ってることはわかるけど、どういふことラビ？」

「泣いてる人を殴って、涙を止められると思うの？」

むしろ、悲しみが増していくだけ！痛みが積み重なるだけ！」

「……………グレース、あなた、まさか！」

フォンテーヌが、最初に感づいてくれたね。

無茶だつて言われたら言い返せないし、その通りなんだけど。プリキユアであつて、スタンド使いでもあるわたしたちには、きつと、これが答えなの。

「なら、その『逆』をやる！」

ザ・キュアーがダメージをわたしたちに返してくるつていうことは！

わたしたちが、悲しみと痛みを受け止めてあげられるつていうこと！」

「ツ……はつきり言う！」

お前の言つてゐることは寝言だぞ、グレース！

今でさえ耐えきれないこんなものを、あえて全部受け入れるのかよツ」

「耐えるだけじゃあ、ダメだよ。だから」

わたしが、立つ。一緒に、スパークルも立った。

立つて、巨大なうなりを上げ続けるザ・キュアーに向かって腕を広げてる。

「あやかさーん！めっちゃスゴいじゃん！」

何年も何年もずーつとガンバリ続けて、弱音も吐かないなんて。

でもさ、そんなの耐えらんないよ。あたしだったらムリ！

だからさあー、思いつきり吐いちゃえ！暴れちゃえ！

あたしたちが、みーんな聞いたげるからさ！」

さらされるだけで死にたくなる衝撃を受け止めながら、  
スパークルは、ちよつと遅れて隣に立ったわたしに微笑んだ。  
だから大好きなんだよ。

「こーいうコトだよね、グレース？」

「……うん！心が痛いのなら、お手当てするの！」

「わかつたラビ！」

痛いの痛いの、飛んでけー、ラビー！」

「なるほどね。悲しみからくる痛みなら、悲しみを減らす。理屈も通ってるわ。

でも、それ以上に……私たちが、プリキュアであるのならッ！」

フォンテーヌも、じりじりと前進しながらわたしたちに並んだ。

もう、残された力はほとんどない。でも、勇気はさつき以上だよ。

三人並んで、ボロボロの名乗り。

「地球をお手当て、ヒーリングっどプリキュア！」

「……。心を破壊したら！みんな死病に冒してやるわ……肉も、骨も！

腐れた血に蝕まれて脳まで溶ける、プリキュアども！」

ザ・キュアの瞳が光る。黒い衝撃が積み重なって襲ってくる。

まるでドラゴンが吐く炎みたいに……

でも、それがいいの！それがわたしたちの狙いなんだから！

攻撃しない。避けもしない。プニ・シールドも使わない。

全部受ける。受け止めてあげる。

ただし、心は飲み込まれないように、必死で叫ぶよ。

衝撃を通じて浮かんでくる光景の中に、お手当てを届けるの。

「ホントはドールハウスが欲しかったラビ？」

なら、今からでも怒っていいラビ！

話を聞かないヤツが悪いラビーツ」

「ケンカをして悩んでるのに、どうでもいいなんてヒドイペエ。

でも、誰も頼らないで仲直りできたなんてエライペエ。スゴイペエ」

「塾が変わったせいで古い友達もいなくなっちゃったのかよ、ひでエーよなあ。

そんな中でよく耐えたなあー、コレ。オメー、すげえよ。胸張っていいんだぜ？

モンク言うヤツあハツ倒してやんぜ、オレがよ！」

「……私なら、とつくの昔に折れてしまっているわね。

勝手な理想を押し付けてくる人たちに縛られて。

そんな中で、あなたは自分の理想を見つけられた。強いわね、本当に」

倒れそうな自分を奮い立たせて、みんなそれぞれの言葉を重ねることに、衝撃がひとつずつ消えていく。衝撃の圧力が、少しずつ減っていく。

たまたに失敗して、威力を増してやることもあるけど、

それでも言葉を尽くすとウソみたいに消えていくやつもあつて。

ふと後ろに意識が向くと、鳴滝くんの声が聞こえた。

「どこ行くんだ？」

「に、逃げるのよ……当たり前でしょう？」

一般市民に何ができるっていうのよ、ヒーローの仕事よお」

「逃げるか。ま……俺に止める資格はねえーけど。」

でも、一個だけ忠告しとく……聞けよクソがッ！」

ドドン！

無視して逃げようとした背中にF・F弾を撃ち込んだみたい。

ドサツ、て倒れた音が聞こえた。

「思うに、あんたは……わかってしまったから怖いんだ。」

あんなものを見せられて、何をしたのか理解しちまったからこそ逃げたいんだろ」

「何よ、この小僧ッ……知ったフウなクチを」

「知ってんだよ。だから言ってる……」

なあ、だがよ。今ここから逃げられはすると思うぜ？

だが断言する。知ったことからは逃げられない。

そいつは、たぶんいつまでもあんたの背中を追ってくるぞ。

だって、あんたはバカじゃあないんだから…もう」

「アウン…ガウツ」

ラテが怒った声を出してる。

佐久間さんのお母さんが、観念したみたいに調子を落とした。

「……。私に、どうしろっていうのよ？」

「そーだな、ひとまず……あいつらのマネでもしてみたら？」

今が瀬戸際ってやつだと思う。慎重にやってくれよ」

「……………わからない。わからないわ。どうすればいいの？」

後ろばかり気にしているわけにはいかない。

業を煮やしたっていうのかな？

ブラッド・フラワーが号令みたいに手を振るうと、

ザ・キュアーがズシンと前進してきた。

「予定変更。そんなに病死したいなら今やってやるわ」

「グツ……………姿勢を変えないで前進してくる。」

スキがないわねっ……」

衝撃だけなら、今はなんとか耐えていけているけど。

接近されて組み付かれたら、死病を移されてそこで終わりになっちゃう。

じりじり下がっていくしかないけど、追い詰める先も工夫されてる。

通路側じゃあなくなつて、ロビーのカウンターに向かわされてる。

逃げ場がなくなれば、接触される。

どうしよう……かなり切羽詰まつて悩んだとき。

後ろから誰か、来た。鳴滝くんじゃあない。衝撃が一瞬、やんだ。

「ハア？なによ……今、殺されたいわけ？」

忌々しそうに唾を吐いたブラッド・フラワーが見下ろしているのは……

佐久間さんのお母さん。わたしたちを追い越して、前にじりじりと出ていく。

フォンテーヌが驚いて、一瞬止めようとしたけど……結局は見送って、見守る。

「あやか。私はね……田舎生まれで、都会に出てきた子だったのよ」

「……。ハア？」

「流行もオシヤレも、なんにもわかつてなくて、

よくクラスの子にバカにされたわ。田舎者、芋女、つて……

勉強も、バカにしてくる子たちの方がよっぽど出来て、逃げ場がなかった。



私は、そんな思いをあなたに味わわせたくなかったの」

ズドゴオン

無言のまま、ザ・キュアーが前足を振り下ろした。

構えていたフォンテーヌが跳んで、ギリギリのところまで助ける。その腕の中で、佐久間さんのお母さんは続けた。

「だから、あなたが偉くなるために、なんでもしようと思ったわ。

3歳の頃、あなたがお医者様になりたいって言ってくれたとき、涙が出るくらいに嬉しかった……

あなたのために頑張るって気持ちが高かったわ。

でも、それは……ただの押し付けだったの？

……そう、言っていたわよね。さつき」

「私があんたに期待するのはひとつ。押し付けた花とともに死ね」

「そう……そうなのね」

ブラッド・フラワーの答えに何か見出したお母さんは、フォンテーヌの手を振り払って、また前に行った。

「私は、あなたを……殺されたも同然の扱いにしてきたのね。

なら……あなたが、私を殺しても」

「バカじゃあないのツ!？」

ズズン

また振り下ろされたザ・キュアーの前足から、さつきと同じようにフォンテーヌが助け出す。

思い切りどやしつけながら。

「娘さんを母親殺しにするつもりなのツ、あなた！」

そんな人生は真つ暗闇よ！それでもいいっていうのツ」

「だ、だって…もう、出来ることは…これくらいしか」

「あるよ！たくさんあるじゃん！」

スパークルが、フォンテーヌの前に立ちながら、

ヒーリング・ステツキをザ・キュアーに向けた。

「あやかさんは、これから元に戻るの。」

悪い心だけを大きくされた、カワイソーな姿から戻るんだよ。

それからお話すりゃあいいっしょ！」

「……!!」

佐久間さんのお母さんは、打たれたみたいに目を見開いた。

それから、いそいそとフォンテーヌの手から離れて、

今度は前に出ることなく後ろに下がった。

「みなさん」

「はい」

みんなそろっての返事になった。

そこから先に続く言葉も、すでにわかった。

「助けてください。」

私の娘を、どうか助けてください……

こんなこと、今更言う資格はないのですが。どうか

わたしたちの返事も、当然、決まり切ってる。

「助けますー！」

「アウーン！」

しつかりそろったみんなの声に、ラテも合わせた。

あつ、鳴滝くんも前に出てきた。

カツコつかないもんね後ろに下がってちやあ。

うん、いいよ。一緒に戦おう？

「あんたら……なんにも解決してないのがわかってないのオ？」

あんたらに、私のザ・キュアーを止める術はなイイイイイ!!」

また、衝撃の嵐が始まった。

スパークルとフォンテーヌがそれぞれ脇に跳ぶ。

鳴滝くんも、結局また後ろに下がった……

衝撃をもちに受けるのはわたしだけ。みんな、わかってくれてる。

これを受けるのがわたしだけということとは、

言葉を届けるのも、今はわたしだけ！

「佐久間さん。ありがとう、わたしを見守ってくれて。

わたしのわがままに、いつも寄り添ってくれて。

あなたがいてくれたから、わたしは不安に勝つまで耐えられたんだよ？

お母さんもお父さんもない、心細い夜を越えられたんだよ？」

「うるさい……黙れ」

「あの日の弱かった、守られてたわたしは、今、強くなれたわたしのの。

だから……佐久間さんが弱っているのなら、わたしに守らせて？

あなたがしてくれたお手当てを、わたしもしたいの。

あなたがしてくれたみたいに」

「黙れと言ってるのよオオオ！」

ザ・キュアーの前足をかわず。

動きが読みやすい。ブラッド・フラワーの目に『何か』が混じってる！

「大切な憧れだから、守りたいの！」

あなたも、わたしも、みんなも！」

わたしのヒーリング・ステッキが光り出した。

やろうとしてこうなったわけじゃあないけど、高まる力は不自然じゃあない。

思うまま、あるがままにステッキを掲げる。

セツトされていた花のボトルが、別の何かに変わっている。

「……これは？」

「わからないラビ。でも……エレメントさんが力を貸してくれたラビ！」

「エレメントさん？」

「デミビョーゲンの中に取り込まれてるエレメントさんラビ。」

一瞬、締め付けがゆるんださつき、力を送ってきてくれたラビ」

「……うん！」

見れば、フォンテーヌも、スパークルも、

ヒーリング・ステッキに同じボトルをつけていた。

羽ばたくような翼を持った、不思議なボトルを。

そしてつと不思議なのは、誰に何かを言われなくとも、

これからするべきことがパツと理解できたことだった。  
示し合わせたみたいに、三人、まとまって立つ。

「トリプルハート・チャージ！」

ただの力なら、攻撃ならザ・キュアーには効かない。

今までと同じようにまとめて取り込まれて、跳ね返されるだけ。

でも、今から放つこれは違う。

これは攻撃なんかじゃあない。本質が根本的に違ってるの。

「届けッ！」

「癒しのー！」

「パワーッ！」

シユバアアアアア

ギイイイイ……ン

ボトルを手の平で軽く叩き、ステツキをみんなで天に向ける。

きらびやかな光があたりを取り巻いたと思うと、

このボトルに込められた大自然の力があたり一面に具現化していく。

たとえるなら、超巨大な森のスタンド！

でもこれは、スタンドでもなんでもない、純然とした癒しのエネルギー！

星をむしばむものを取り去る、言ってしまえば『治療』そのもの。

みんな一緒に杖を一点に向ける。狙うのは、ザ・キュアー。

「プリキュア・ヒーリング……オアシスッ!!」

ドキュオオオオ

わたしの桃色、フオンテーヌの青色、スパークルの黄色。

三つの光が渦巻いて、ザ・キュアーを撃ち抜く。

撃ち抜かれても穴なんか開かない。

ビョーゲンズの影響下にある、ただのスタンドだから!

その影響が、癒しのエネルギーによって浄化されていく。

ビョーゲンズの汚染源と化していた、ザ・キュアーの中の『病原』までも。

恐竜みたいなサイズになっていたザ・キュアーは、

それから10秒も経たずに、手乗りウサギと化してしまった。

「あ……れ。なに、こ……れ」

そして、スタンドが浄化されたということは、本体が浄化されるということ。

飛びのいてかわわしていたブラッド・フラワーはその場ですとんと崩れ落ち、

プスプスと黒いもやが散っていく。

サソリみたいな黒い尻尾が抜け落ちて砂になり、頭のツノにもヒビが入った。

「く、クソ……せめて、アンタからは、奪ッ」

うつろな目がとらえ続けていたのは、佐久間さんのお母さんだったけれど……掲げた腕から何かを放つよりも先に、お母さんの方から駆け寄ってきて。

少しシワのある手で、正面からギュッと抱きしめられて、止まった。

「ごめんなさい……」

ひどいことをして、ごめんなさい。

何ひとつ、聞いてあげないで、ごめんなさい……

あなたの幸せは、あなただけのものよ」

ブラッド・フラワールの顔が、ふにやつ、とゆがんだと思うと。

目からスツと涙がこぼれて。

「いままさら。いままさらッ……ふあああ……ッ」

小さな嗚咽を漏らして、光になって消えていった。

後に残ったのは、どうやら無事な佐久間さんと、草のエレメントさんだけ。

「お大事に」

わたしたちは、ちゃんと見送った。

光の粒が、すべて消えきるまで。



## 枯れることなきブラッド・フラワー—その9

戦いを終えたわたしたちがまず最初にやったのは、現場からの離脱だったよ。警察が踏み込んでくる直前の間一髪で決着をつけられたみたい。

佐久間さんも、佐久間さんのお母さんも、

あの場に残したらとんでもなく面倒なことになるよ。

鳴滝くんがさつき撃ち込んだF・F弾を繁殖させて、

肺を圧迫して佐久間さんのお母さんに気絶してもらってから、

チリ・ペッパーでかなり離れた公園に出た。

あつ、変身は解いてないよ。解けないよ。佐久間さんたちがいる限り。

それと重要なこととして：DISCは、すでに回収を終えている。

「管制室つつたつつけ？」

監視カメラ取り仕切ってる部屋の電気系、丸ごとブツ壊したからよ。

顔バレも声バレもねえーと思うぜ」

「ありがとう、ニヤトラン。

でも、被害総額はいくらになるのかしら……

最後の手段つてことだけは、忘れないようにしないとね」

一番怖いこと……わたしたちの顔バレは、ニヤトランが直前で潰してくれていたの。ダルイゼンとにらみ合ってる間に、もう手段を選ぶ暇がないって判断して、病院の中を監視する仕組み、全部もろとも吹き飛ばすっていう方法だけ……場所は、あらかじめ鳴滝さんと調べておいてくれてたみたい。

「苦労ついでだよ。」

今のうちにラテを病院の屋上とかに入れて、

嫌な予感の元を探せねーかな」

その鳴滝くんが、悪いけど……って感じでニヤトランに提案する。

「警察の目は東館ロビーだけに集まってる上に、

監視システムもみんな死んでる。

しかもダルイゼンとの戦いでかなり派手な破壊音が鳴ってるぜ……

可能である限りの人間は避難しちまってるはずだ」

「スキをつくなら今、つてコトかよ。納得だぜ。」

んじゃあ、ラテ様チョット失礼。屋上から探すぜ」

「アウン！」

元気に吠えたラテが電気になってコンセントに引き込まれていく。

本来の目的だけど、ラテとニヤトランに頼り切りになるしかなさそう。

こっちはこっちでやることがあるんだもん。

まず最初に、一緒に来てもらったエレメントさんにお話しを聞かないと。

今回はプリキュアのままでから、いつもの聴診器はいらない。

「エレメントさん、お加減いかがですか？」

「ありがとうございます。プリキュアさん。ワタシは大丈夫です。

あやかさんのことも助けてくれて、ありがとうございますよ」

草のエレメントさんだけど、佐久間さんのことを知ってるの？

そういえば、スカー・ティシューのときの雷のエレメントさんもそうだったっけ。

あの場合、住んでる家が同じだったはず。

素直に聞いてみたら、とくに返事を渋る理由もなかったみたい。

「あやかさんのテーブルヤシさんに宿らせてもらってます。

この土地に引越してくる前からお世話してもらっていたんですよ」

「へー、あやかさんちの子だったんだ」

「はい。だから知っています。

あの人はずれだけつらくても、ワタシたちへの水やりを忘れませんでした。

自分が乾いて飢えていても、誰かに水をあげられる人なんです」

うん。わたしも知ってる佐久間さんだよ。

わたしに会って変わったんじゃあなく、元からそれが本質なの。

「聞いてもいい？ さっきのボトルは……」

おずおずと手を挙げてから聞くフォンテーヌ。

確認はしないとね。正体がわからないままはちよつと。

「ミラクルボトルですね。」

それが皆さんの手元に現れたということは、

皆さんにそれを使う資格があるということですよ」

「あなたがくれたんじゃあ、ないの？」

「ワタシは、やつとのことです皆さんに力を送っただけなんです。

ほんのわずかでも力になれたらって……」

それが、そのボトルの形になったんです。ワタシもわかりません」

「そう……」

困惑気味に引き下がったフォンテーヌに、

ヒーリング・ステッキから顔を出したペギタンが笑いかけた。

「これは、プリキュアの新たな力だべエ。」

苦しめられているエレメントさんやヒトを助けられる、

癒し『だけ』のパワーだペエ。それだけは確かだペエ」

「そーだな。ザ・キュアーに吸収されなかったということは！

あれは『攻撃』じゃあない……むしろ『回復』のみの性質なんだろうよ」

「つまりい、どゆこと？」

首がナナメに傾いたまんまのスパークル。

とくに気にすることもなく鳴滝くんは答えていく。

「俺の予想が正しければ、だぞ？」

あれは対ビョーゲンズの『特效薬』だ。

他の何も傷つけず、ビョーゲンズだけが吹き飛ぶッ

そういう性質の技だと、俺は思うね。思うだけ」

「そっかあ……ン？ってえーことはあー。」

キュアスキャンしないいきなしブツパしても勝てちゃうってコト？」

「ブツパ……あゝ予想が正しければ、な？予想が正しければ！

検証すん……オホン、確かめんのはお前らなの、OK？

確かめねえでやらかしたら死ぬほど後悔するぜ」

「ウツ……そりゃあ、そっかあゝ」

「オイオイやってこーじやん？」

「そーしろ」

必要なこと、みんな言ってくれてウレシイな。

不安がる必要もないけど、わかんないまんまじや使えないし。

特効薬っていうなら、効果だとか安全もキチンと確かめないとね。

そう思つて、わたしからも言うよ。

「しばらくは、ビョーゲンズが出たら使つていこう？」

今まで通りにキュアスキャンしながら、効き目で確かめていこうよ」

「それしかないでしょうね。治療つて言うべきかしらね…」

ビョーゲンズにしてみれば迷惑だろうけど。

今日ほどヒドイ目に遭わされれば、そんなこと考える気もなくなるよ。

あのDIOも、人間を投げつけて飛び道具扱いにしたり、

警察の人の手足を力づくで動かして銃を撃たせた後、

ゴミみたいに殺して捨てたりしてた。

今日、わたしや巻き込まれた人たちがされたことは、それと同じなの。

あんな、人の痛みをわかる気もない仕打ちを許すわけにはいかない……！

そんな風に拳を握つてただけ。

別の事情で、同じ思いを抱いている人が、もう一人いた。

「あ、あやか」

「触らないで。近寄らないで」

聞こえてきた声にみんなで振り向くと、

佐久間さんのお母さんが尻もちをついていた。

どう見ても、佐久間さんが突き飛ばした後だよね。

「どうして。さつきは…」

「……ママ。私ね……私。」

はつきり言うね。もう、都合よく思い込まれないように」

スウ、ハア……

呼吸を落ち着かせて間を置いた佐久間さんは、

腹を決めた感じで目つきを鋭くして、一息に言った。

「こんなことでッ　こんな三文芝居でッ！」

終わったとしても思ってるの？　あなたが私にやってきたことがッ

あなたはそう思いたいでしょうねえ。

あなたはいつでも『いいことしかない』。悪者はいつでも私！

ねえ満足？　私のためにドロをかぶったつもりになつて。立派よねえッ？

いいことをした自分に酔ってるだけなのよ、あんたはッ！」

手加減のない怒声が、途中から揺れ始めた。

肩をふるわせ、憎しみにゆがんだ瞳がうるんでいく。

「あなたの独りよがりにつ……これ以上、私を差し出すのは嫌！

私の幸せが私のものなら、あなたは私の不幸なの！

失せてツ、目の前から！今すぐに！二度と関わらないで!!」

涙を流しながら怒りをぶつける佐久間さんに、

お母さんは何か言おうとすがりつくみたいなの仕事を見せたけど、

その脇から鳴滝くんが助け起こして、遠くまで引きずっていく。

「今は無理だろ。あんたが何を思っているかが……」

たぶん、だけど……あんたも苦しめ。

それで、やっと話ができる……俺はそう思う。わかんねーけど」

聞こえた範囲だと、そんなことを言っていた。

……うん。わたしたちよりは適任かな。

わかんないんだもん。気持ちだ。

これもきつと、『傲慢』なんだよね。無自覚の『傲慢』……

わたしだって、どこで悪いことしてるかわかんないのに。

「あやかさん、どーして」



スパークルが呆然としてる。

フォンテーヌは、黙って首を左右に振ってた。

「……ごめんさい。正義の味方のみんなには悪いけど。

わたしの感情に正面から付き合ってくれたみんなに、恩を仇で返すけど。

そこまで全部考えても、私には無理。許せない」

佐久間さんは謝りながら、まだ泣いてるけど。

これ以上、ここに居続けるのも限界だった。

鳴滝くんが戻ってきたところで、チリ・ペツパーに一度戻ってきてもらって、

わたしたちみんなが落ち着いて話せる個室に移動することにしたの。

「ま、俺の部屋しかないよな……ソレだと」

バタバタと布団を片付けながら、脇のパイプ机周りにわたしたちを座らせて

鳴滝くんはけっこう不満そうにぼやいてる。

同居してる人が誰もいないっていうのは、秘密の話をするにはいいから。

佐久間さんが落ち着いてたら、前も使った採石場とかに行っただけだと思っただけ。

なんとなくキッチンを見てみる。

フォンテーヌはヤカンに水を入れてコンロで温めるところ。

ガラスコップは二個、出しっぱなし。

ごはん茶碗とかお皿とか、小さな食器置きにみんな乗つかつてる……あれが土鍋。ごはん土鍋で炊いてるって言つてたつけ。

でも炊飯器はある……コンセント差してないね。すごく古いみたい。壊れてる？

あッ、そのすぐ近くに料理本。ええーつと……

『ぶたのしつぽ亭監修・かんたん洋食入門編』？

「ほうじ茶があるって、前、言つてたわね。どこ？」

「歯ブラシのところに収納棚あるだろ。その上から二段目」

「これね。急須は……見当たらないわね」

「ない。俺一人の生活には不要だからな」

「そうかしら。じゃあガラスコップ、佐久間さんに使うわね」

「悪い、頼む」

なんかスングク妙な光景。

プリキユア姿のまま、こなれた手つきでお茶入れてるとか……

中身は旅館の看板娘さんだけど。

少しぐずつてる佐久間さんの前に、香ばしいにおいのほうじ茶がそつと置かれた。

手にとつて、見下ろしてる。少しでも、癒しに……なるかな？

確か、わたしのお父さんをおもてなしするために買ったティーパックだったし。

「そーいや、タツキーさ。その顔、二元に戻さない？…キモい」

「今回の件が片付いてからな。」

戻るのに一時間くらいかかるぜ。顔の皮膚を直接やったから…

それと。キモいは余計だ、言われねーでもワカツてるってんだよ」

「変身すんなら、もつとカツコよくさあ〜」

スパークル、案外早く落ち着いた？

…そうじゃあないね。単にその場で顔がコロコロ変わるだけだよ。

傷ついたり、悲しんだりしてるのは無かったことにならないの。

そういう性格だつてこと、忘れないようにしなきや。

鳴滝くんがいろんな作業を済ませて座ったあたりで、佐久間さんもやつと落ち着く。

フォンテーヌが入れてくれたお茶にようやく口をつけて、フウツと息を吐いてる。

「…おいしいわ」

「光栄です」

目を赤くしたまま、フォンテーヌへとやわらかく笑った佐久間さんは、

姿勢を正してわたしたちに向き直ってきた。

感づいてるみたい。わたしたちが何を言おうとしてるのか。

「ザ・キュアーは…もう、使えないのね」

「気づいていたんですか？」

「察しはつくわよ。ビョーゲンズに操られて、あんな騒ぎを起こして……  
こうなつて、よくわかるわ。」

あなたたちプリキュアが、なぜ私のもとに現れたのか。

私に、あれをさせないためだった。そうでしょう？」

うなずくしかできないかつたわたしを見て、

どこかあきらめたみたいな顔で脇に目をやる佐久間さん。

「お笑い種ね。私は、私の勝手な都合で苦しむ患者さんを利用した。」

いいことをした自分に酔っていた？……ハッ！私のことじゃない。

これだけで。これだけで私は、あの人を非難する資格なんてないわ。

その挙句に、私は、私が勝手に育ててた復讐心を、

無関係な人たちに……」

一言、一言、言葉をつなげていくたびに、

佐久間さんはどんどん暗いところに沈み込んでいく。

そんなこと、言つてほしくない。

わたしが我慢できなくなるより前に、ラビリンが止めた。

「そこまでラビ！」

「……ラビリン、ちゃん？」

「余計なコトばかりするママがイヤで、

逃げ出したかったことの何がおかしいラビ？

ズーツとそんなコトばかりで、イライラムカムカして！

そんなの、みんなアイツのせいラビ！

そんな気持ちを膨らませてデミビョーゲンにしたのはビョーゲンズラビ！

悪かったのは、ヒトを利用しただけで：

それだって、助かったヒトがいるラビ！

全部自分のせいなんてオカシイラビ！

間違えちゃあダメラビーツ！」

目をぱちくりさせてる佐久間さん。

わたしだって、言いたいこと、あるよ。

「佐久間さん」

「……」

「わたし、言ったよ。大切な憧れだから、って。

そんな人が、みんな自分が悪いんだ、なんて言って泣いてたら……

わたし、どうしていいのかわかんない、です。だから」

悲しくなっただけど、泣いたりはしないよ。

昔、泣いたり怒ったりしてたわたしに向き合ってくれた人たちは、みんな明るく、マジメに、力強く向き合ってくれたから。昔もらったそれを、誰かに分けてあげる時が今なら。

「…情けないところ、見せちゃったわね」

もともと、その強さを持っていた人なら、思い出してくれる。

わたしがそう思っていた通りだったね。

佐久間さんの目から、さっきまでのあきらめが薄くなる。

「簡単に整理はつかないわ。」

頼っていた力もなくなっちゃった。

でも、元に戻っただけよ。

ホントに大切なものを忘れずに済んだのなら、まあなんとかするわよ。

私、カツコイイ大人なんだもの。あなたのお手本になつてあげるわ。のどかちゃん  
ラビリンと向き合つて互いにならずくと、  
わたし一人だけ変身を解いて佐久間さんに向き合つた。

「……はい！お願いします！」

それから、いくらかの必要な話し合いの後、佐久間さんを元の家に戻した。

このまま同じ家、同じ職場だとビョーゲンズにまた狙われかねない。

向こうからすれば、スタンドの付け外しが出来るなんてまだ知らないはずだし。だから、できるだけその両方を変えるようにだけ言ったの。

佐久間さんが言うには、お母さんが変な根回しをしに来たことを逆手にとつて、職場を異動させてもらえればなんとかなるつて。

その後で新居の住所と電話番号を教えてくれることになった。

お母さんを完全に悪者にしちゃうけど、そのくらいは呑んでもらう、だつて。

「あたしのママさあー。あたしがめっちゃチツチャい頃に死んじゃってんだよね」だから、かな。思うところがたくさんあったみたい。

ひなたちゃんも、世間話みたいにお母さんの話を始めた。

「写真はいつでも見られんだけどさ、思い出とか全然ないの。」

…きつとき、パパも、お兄もお姉も。

ママがしてくれることを、ママのぶんまであたしにしてくれてんだって思う。だからさあー、ママ、とか、お母さん、つてのに、『憧れ』つてゆるかさ。きつと、こーなんだろーな…つてのが、あんの」

みんな、誰も口をはさまないで、聞く。

ラテもすでに戻つてきていて、パイプ机の下に寝そべってる。

「のどかつちとかさ、ちゅちーのウチは、そーだったよ？」

そりゃ、ウチとは全然違うけど…そっか、そーだよね、つて思えたの。

そんだけに…ちよっち、キツイ。キツかった。今回…」

まあ、ロフトに登つて寝つ転がってるんだけどね、ひなたちゃん。人の家で。

鳴滝くんは少し嫌な顔をしたけど、突っ込まないことにしてみたみたい。

本人はマジメなんだよね、これでも。今回、ホントにキツそうだし。

「ママがひどいやツで、ずつとそれを怖がつてなきやあいけなかったとか。

プリキュアの力でさあー、それもパーツと解決だつて思ったら。

全然逆で、あやかさん、ママ追っ払っつた…」

これじゃあさあ〜あたたしたちがケンカさせに来たみたいじゃん？

デミビョーゲンは、悪い心だけを大きくされてて、

あたしたちはそれを癒したんじゃないやあなかつたの？」



『ああ、間違いないな』

ずっとみんなに聞かせるだけだったひなたちゃんに、

初めて答えたのはF・Fだった。

『ブラッド・フラワーは浄化された。』

浄化されて、佐久間あやかやかの膨らまされた悪い心も一部が救われた……

おそらく、母親だとか家族への病んだ執着心あたりがな』

「…なに言ってるの？」

『あの母親に取りつかれる必要がなくなったってこと。』

一方的に利用される関係に、やっとプチ切れることができたのよ。

そこは誇っていいと思う』

「そんなことのために、みんなガンバツたの？ヤダよお」

『復讐とは自分の運命への決着をつけるためにある』

ちよつと泣きそうな声で抗議してきたひなたちゃんに

かぶせるように、F・Fが聞き覚えのある言葉を言う。

確かそれ、エルメエスさんの……

『あの親子は、あの復讐でやつと始まったんだらうね。』

いい関係を作るには、これから苦勞しなきやあいけない。

とくに母親の方がな……違うと思う？』

「……。わかんない」

『そお？実はあたしもなんだけど……』

親もクソもないプランクトンだからね』

おちやらけたみたいに言うF・Fに、

ひなたちゃんか非難がましい視線を向ける。

……夢じゃあないから実体がない。見られるのは鳴滝くんだけ。

鳴滝くんはただ顔をしかめてる。

『ただし、プツチ神父はクソ野郎だ。』

あいつはあたしを生み出しはしたが！

利用するために作って、駒になることだけを教え！

しまい都合が悪くなれば殺しに来た。説得すらもなし。

強いて言うんなら、この魁の両親の同類かもね……

あたしを『育てて』くれたのは徐倫たちで！

徐倫もエルメエスも、エンポリオも家族を愛してた。

そういうおすそ分けでたくさんを知ったあたしなんだ。

親子の情がまったくわからないわけじゃあないと思ってる』

「じめん…」

『謝るなよ。知ったフウなクチを聞いてんのは確かだ』

しんみりした空気になって、みんな静かになっちゃった。

でも、嫌な感じじゃあない。

ひなたちゃんもF・Fも、お互いを責めてるわけじゃあないんだもん。

そういえば、家族なんかいるはずもない生まれなんだよねF・F。

DISCの番人として神父さんに作られて、そこで何年間も侵入者を殺し続けて。

徐倫さんに負けて、外の世界に連れ出されるまでは、

全てが無機質な繰り返し。振り返ればなんにも覚えていない日々。

『生きてるって感じ』を理解できたのは、徐倫さんと出会えたからなんだよね？

その気持ち、無視できるはずなんて、ないよ。

「結局、私たちがお手当てできたのは、氷山のたった一角。ということよね」

「新しい力でピンチをパアーツとひっくり返せても、力はただの力だペエ。」

傷ついたキモチには、カじゃあなんにもできないペエ」

『というより。誰かの一生は、ほんのチョビツと関わっただけの他人に

どうこうできるほど安くないってことだろうね。

課題を抱えられるのは、そいつ自身だけだ』

「わたしたちにできるのは、せいぜい見える傷のお手当でだけ。治ろうとするのは自分の力：そういうことなのかな」

「どんなお手当てだつてよおー」。

助かるつもりがねえーヤツには通じねエーだろーからよ」

「助かりたい、つて気持ちにさせてあげることでも大事ラビ？

だとしたら、佐久間さんのお手当てはうまくいったラビ」

「ひとまずだ。『予後』を見たら？

これで全部オシマイじゃあないんだしな」

「…そだね。まだ『続き』があるし！

ツラソーなら、手伝つてあげてもいいじゃん！」

「アン、アンツ！」

ふと言い出したちゆちゃんに、みんなが言いたいことを続けた。

学んだことは多かつたのかな？それを活かしていけるの？

まだわからないけど…：今回の事件は時間の無駄なんかじゃあない。

ラテの嫌な予感の前にあつた邪魔ものでしかなかつたこの事件は、

戦いを通じてわたしたちに新しい力をくれた。

もし、ちよつとでも何かしらをぞんざいに扱つていたら、この結果は無かつたの。

ザ・キュアアのDISCを無理やり取り上げるのを嫌がったのは、結果論だけど…正解だったね。

こうやって、自分の信じられる道の先で、みんなといられたらいいなあ。

それから、鳴滝くんの顔がやつと元に戻った頃まで。

その間、確認してたのは…ザ・キュアアが誰に適応するのかと、能力の再確認。これも一応、みんなで試して…適応したのは、ラビリンだけ。

DISCを誰に回すのか悩む必要なのはいいけど、

戦わせないラテを除けば、ちゅちゅちゃんだけがスタンド使いじゃあない状態。

そろそろ、複雑な顔が深刻になり始めてるんだよね……

「アセツてどーにかなるモンじゃあないラビ。」

ラビリンは運がよかつただけラビーツ」

「ええ、そうね。ありがとうラビリン」

やさしい笑顔で答えてくれてるけど、いい加減なんとかしてあげたい。

スタンド使いは引かれあう。佐久間さんだつて、ジョルノさんに引かれたのかも。そう思えば、次のスタンド使いが現れるのもきつと遠い話じゃあなくつて。戦わない出会いができたらいいなあ。

そうやってDISCを回収したとして、ちゅちゃんに適合するとは限らないんだけど。

「能力の復習だが。」

ザ・キュアーは、『基本的には』治療のスタンドだ。

相手が生き物である限り、どんなケガや病気も、スタンドがなめることで治せる」ザ・キュアーについて、鳴滝くんがまた説明してくれる。

最初から最後までを自分で体験した佐久間さんが、すっかり話してくれたの。もう、あんなことを繰り返させないために、つて。

こつちからはあえて言わなかったけど、

スタンド能力をわたしたちが回収したんだつて、なんだか確信を持ってたつぽいんだよね。怖いなあ。大人つて。

「だが、治したキズやケガは、

ザ・キュアーの中にある種のエネルギーとして蓄えられる。

治すたび、次第にスタンドの像が大きくなっていくのがそれだ。

こいつは、能力を使わず時間を置くことで、少しずつどこかに発散されて消え、スタンド像も元の大きさに戻っていく。これだったら害はない」

話はここから。佐久間さんは間と運が悪すぎた。

ううん、そういう人の元にこそ、スタンド能力は現れるのかも。

能力を持っていたことが悪い方向につながった例なんて、いくらでもあるの。

D I Oの部下で、アヴドウルさんとイギーを死なせたヴァニラ・アイスは、

あまりにも強くて危険すぎる能力のせいで何人も人を死なせて、

故郷に居場所を失った。

ンドウールさんも同じ。気味悪がられて、殺されようとしたから殺し返して。

死への恐怖なんかまったくくない性格に育って……

友達と出会えて、幸せになれるスタンド使いは運がいいだけなのかも。

その意味でも、わたしたちの戦いは無駄なんかじゃあないよね。

「ヤバイのは、ひたすら能力を使いまくって、

スタンド像がデカくなるに任せた場合だ。

ある一点を超えた瞬間、ザ・キュアーは暴走する。

暴走したザ・キュアーは、本体以外の誰彼かまわず危害を加える。

今までに貯めこんだケガや病気を、今までとはあべこべに『移す』ようになる。

この暴走状態の間、ザ・キュアーに対するあらゆる攻撃は吸収されて、『ダメージ』として逆に貯めこまれる。

遠からず、そっくりそのまま返されるってことだ」

「ラビリンたちは、ゼツタイにそーなったらダメラビ」

うなずいた鳴滝くんは、暴走が終わる説明で締めくくった。

「貯めこんだエネルギーをすべて放出し終わると、暴走は終わって元に戻る。

あれだけ厄介だった暴走状態だが、俺たちには何ひとつメリツトがない。

何がなんでも避けるべきだろうよ」

「するってーと。ケガを治せるつつつてもよ。

考えなしに使ったら、イザって時に頼れねーコトになるんだよな？」

「ああ。他にどうしようもない場合に限った方がいい」

質問して、返事を聞いたニヤトランが、ちゆちゃんの方を見た。

みんな忘れてないよ。ほら、ひなたちゃんもビクツと思いついたし。

心不全にされたちゆちゃんが、どうやって今も無事に生きてるのかって話ね。

『ちゆの心筋は今、フー・ファイターズが代行してるからな。』

このまま、魁から50m以上離れたらその場で死ぬね』

F・Fからそう言われたちゆちゃんの顔がグニツとゆがんだ。



面と向かって言われたくないよねーこんなコト!

……でね?

ここが、始まりだったんだ。

必要ではあるけれど、それでもちよつとしたやり取りだったのが。

「それを治すのに、ザ・キュアーを使うの?」

「使わなくても問題ない。」

俺の左手を元に戻すときに使った方法論が、そのまま使えそうなんぞな。

規模的に、たぶん二時間もあればやれる」

「あなたが?」

「……いや。渡すよ、DISCを」

『ハイッ! ハイハイッ!』

ちゅちゃんも、鳴滝くんもおびえたみたいな目を一瞬した。

DISCを頭から取り出そうとしたところで、F・Fが鋭い声で止める。

『これからもケガをするたび、DISCをヒトによこすつもりか?』

その間にてめえが死ぬぜ、魁』

「…とはいうけどよ」

『ちゅも納得しろ。』

あたしはこいつのスタンドとして、  
本体を危険にさらすやり方は容認できない』

「……………。ええ」

そして、ここが分岐点だったの。

わたしが口をはさんで止められる最後のチャンス。

そんなこと、この時のわたしには全然わからなくて、

むしろF・Fの言い分の方に納得しちゃってたの。

「あつ、もしかして、ちゅちゅ怖い？」

歯医者とか行きたくないタイプ？あたしもだケド」

「そうじゃあないわ、けれどね」

「だいじょーぶ！経験者だよあたし。

痛くもカユくもないかね。タツキーにまかしちゃってオツケー！

それでもオツカナイってーんならあー。……むぎゅ〜ツ」

「ちよ、ちよつとツ」

妙に鋭いときもあるひなたちゃんだけど、

この時はリラックスしきってたせいかな、そういう勘が働かなかったみたい。

ちゅちゃんを安心させてあげようと、左腕にギユツと抱き着いたの。

それを見ていたわたしも、

(ひなたちゃん、ちゅちゃんの事情を忘れちゃってる？)

忘れてないよね。今ピンと来てないだけで……

後で、ちよつと言つてあげようつと)

なんて思うだけで、手招きしてきたひなたちゃんに応えて

わたしも、ちゅちゃんの右腕に抱き着くなんてことをしちやつてた。

人肌の暖かさつて、それだけで安心するものがあるし、

わたしとちゅちゃんだったら女の子同士でマズイこともないから。

でも、わたしは思い出すべきだったの。

鳴滝くんが前にいて、ちゅちゃんがわたしたちに両腕をとられてる。

この構図が、いったい何を意味するのか。

「…なるべく、早く済みます。こらえてくれ」

観念した鳴滝くんの一言も、ある意味とどめになつちやつたのかも。

逃げ場のない状況で、鳴滝くんになにかをされる。

腕がふるえて、呼吸が不規則になつてきたちゅちゃんを感じ取つて、

やつと、わたしは『ん?』つて思つたの。

これは、やめさせた方がいいんじゃないかって。

……遅すぎた。

バアアン！ ドザッ

聞こえた音は、それだけ。

わたしも、何が起きたのかがすぐにはわからなかった。

ひなたちゃんも同じ。そろって突き飛ばされちゃったから。

わたしはパイプ机を倒しながら床に転がって、

ひなたちゃんは壁に背中をぶつけてた。

首だけを起こすと、立ち上がったまま茫然としてるちゅちゅちゃんがいて。

その視線の先を追うよりも先に。

「ふッ、う、うぶ……うぶうううううううううう」

うめき声が聞こえたの。男の子の声。鳴滝くん。

あわてて背中を起こしてそっちを見たら、

横たわった鳴滝くんが、上半身だけで振り返りながら体をよじつてた。

ちゅちゅちゃんを見る。普段着のロングスカートが、膝のあたりで不自然にまくれてる。

茫然としてるちゅちゅちゃん。

その、見ている先で、鳴滝くんはケイレンしながら胃の中身を吐き出し始めた。

「ウベッ、ゲ……ウボエエエエエエッ……グブッ！」

「……。た…タツキー？タツキーッ!!」

時間が止まったみたいになってたひなたちゃんがあわてて駆け寄ったけど、酸っぱい臭いを吐き散らかしてる鳴滝くんは、何かを気にする余裕もないまますぐに突っ伏して、動かなくなつた。

そして、すぐにちゆちゃんも。

「う……こ、こんなコッ……あ、う。はぐ」

その場に倒れて、顔色をどんどん土気色に変えていく。

やっと、状況を理解した。

ちゆちゃんは、わたしたちを突き飛ばしながら、思い切り鳴滝くんを蹴つた。

鳴滝くんは、蹴られた痛みで気絶して、スタンドのF・Fも当然、一緒に気絶した。

フー・ファイターズが停止したちゆちゃんは、心不全でたつた今倒れた。

「か、魁イイーッ」

なんでだよ、なんでこんなコト」

「魁からF・Fを取り出すペエーッ！」

すぐに心臓を動かさないと、ちゆが……ちゆがッ」

「取り出しても気絶したままだったらどうするラビッ

ザ・キュアーを使うラビ、待ったなしラビ！」

誰も死ななくて済んだ。

この場でよかったことといえ、ただそれだけ。

なんとか収拾したみんなの顔にあったのは、後悔の色だけだった。

# ごめんよ。ペギタン

沢泉ちゆが家に帰り着いた頃合いは、およそ午後の五時直前。

友達と遊んできたにしては妙な時間帯の帰りに、ちゆの母などは少々首をかしげたが、

話を早々に打ち切つて自室に向かったちゆを、また別の聞きなれた声が引き留めた。

「あれっ、姉ちゃん？早いね」

「とうじっ？」

彼女の弟、とうじである。すでに10歳になつていて、

人前に出してもある程度の礼儀作法を期待できるようになつたと

みなされていた彼は、ちゆに代わつて休日に旅館のお手伝いをしていることがある。

そのおかげもあつて、ちゆは今日の朝から動くことができていた。

「ちよつとね。友達の方に用事が出来ちやつたのよ」

「…そうなの？ならいいんだけど。なんか元気がないんじゃないか」

「そんなことはないわ！元氣、とつても元氣よ。遊んできたんだもの」

その場でくるんと回つてみせたちゆだったが、

そのハイテンションなふるまいは、とうじにかえつて不審を抱かせたようで、かなり怪訝な顔をされることになる。

ハツとしたちゆは、笑顔でごまかしにかかった。

「でも、そうね。ちよつと疲れちゃった。

今日のごことはお願ひしてもいいかしら？」

「いいけど……もとから今日はぼくの番だし」

「ありがとう。じゃあ、部屋で休んでるから」

足早にドンドンと床を踏み鳴らして自室に飛び込んでいくちゆ。

目を丸くしているとうじは置いてけぼりだった。

入口の襖をびしやりと閉じたちゆは、30秒ほど作り笑顔を維持した後……

自分のやってしまったことを反芻し、その場でうなだれた。

「ちゆ。今は……休むペエ」

バッグの中から現れたペギタンが、脇からそつと声をかける。

帰り道中、ずつと無言だった彼女と会話しようにも糸口がつかめず、

今ようやく何か言えたというのが実情である。

ペギタンも知っているのだ。彼女の事情を。

鳴滝魁が、彼女によくない……いたずらを働こうとした過去を。



のどかと、ラビリン、ニヤトランと共に聞いているのだ。

知識で知るところによると、それは場合によつてはこれ以上ない尊厳の破壊を意味し、

命を奪うに等しい結果を生むことすらあるという……

物理的なダメージとしても脅威だ。

それが乱暴に行われたならば、しばしば臓器を傷つけるのだから。

また同時に、これは人間界に来てからはつきりとわかったことだが。

この年齢で、しかるべき結果になつたらおしまいだ。

人間にも社会的な死というものがあつて、陥る先はそれだ。家族の四分五裂すらありうる。

彼女の場合は、完全に加害者側のみの非であるから、

むしろ守られ憐れまれるのかもしれないが。だからマシだともいうのか？

精神的、物理的、社会的。どれをとつても致死量にたやすく至る最悪の暴力に晒されたとあれば、

ちゆが加えた一撃もまた無理もないことだと、今となつては考えているペギタンである。

弱り切つた以降の魁のみを知るペギタンでは、その真の苦痛を知りえないのだ。

……今日、この瞬間を見届けたのはペギタンただ一人。

左右をのどかとひなたに固められる中、惑乱したちゆが繰り出したのは、押し出すような蹴り。

ペギタンの知るところではないが、それはケンカキックと呼ばれたり、ヤクザキックと呼ばれたりもする。

どこを狙ったわけでもなく、ただ恐怖の元を遠ざけたい一心で繰り出された先が突き刺さったのは、

因果応報とでも言うべきか……男の、男たる所以の部分。

包み隠さず言おう。『金的』だ。

少なくとも人間の男にとって、体外に露出した臓器であるも同然の部分を全力で蹴り飛ばされれば、破滅的な痛みにもだえ、そのあまりショック死する者もいるという。

それをもつてすら、釣り合うとは言い切れないところに魁の罪深さはある。

(なんでそんなことをしたんだペエ)

今更どうしようもないことをわかりつつ、ペギタンは内心ごちた。

家庭環境から悪事に導かれていったと言ったところで、被害者にとつてそれがなんだというのか。

ちゆも当然同じだ。いっそ、完全な敵として再会したのだつたら復讐で整理をつけられたのかも知れない。

だが実際にはどうだろう。さまざま巡り合いを経て、

鳴滝魁はプリキュアの味方となった。

この関係が続く限り、もはや悪事も行うまい。

今に限って言えば、それがかえって質が悪い。

ある程度納得したとはいっても、ちゆは拳を振り上げて下ろすのではなく、

手をつながざるをえなくなったのだ。プリキュアとして、それ以前に沢泉ちゆとして。

過去を悔いて、たどたどしくも更生の道を歩もうとする人間を蹴り飛ばすなど、できない。

ペギタンにも断言できた。ちゆは絶対に、そのような人間ではないのだ。

それをやってしまった。彼女の誇り高さに真つ向から反することを。

今日、ちゆは初めてひなたに敵意を向けられた。

心不全から復活した直後、倒れたままの魁に慌てて駆け寄ろうとしたところに

一瞬だけ向けられた非難と憤怒の視線に射すくめられたちゆの表情は、

ただ『怯え』の一色、それのみ。

それを見たひなたも少し考えてから弱り果てた顔に変わり……皆、ごまかすように魁の看護に移った。

患部のお手当てについては、ほぼ全員が真っ青になって『……無理』と言い、ただ一人、悲愴な顔で手を伸ばしかけたちゆは、のどかに背後から全力で羽交い絞めにされている。

ちゆとしては、なんとしても償いらしきことをして少しでも楽になりたかったのだらうが、

そんなことをすれば、関係が修復不能なレベルでこじれるのは  
普段のちゆならすぐにわかったはずだった。

その後、魁の目が覚めるまでは見てやって、F・Fに引き継ぐ形で全員その場を逃げ出し……

公園で無意味な時間を過ごしてから解散し、今に至っていた。

それらを、今のちゆもまた、わかっている。

わかっているからこそ、奮起しようとしている様子がペギタンにも理解できた。

それでもなお、体がついてこないのだろう。

「……ふぎまな、ものよね」

ちゆは、ひとつ、深く息をついた。

「私は、いつでも正しくあろうとしているつもりよ。」

お母さんにもお父さんにも、この町にだってそう育ててもらったつもり」

「ペエ……ちゆ」

「それが、一皮剥がればこのざまよ。正しくない私。」

私は、なんてひどい人間なの？……そんな事実には打ちのめされて。

しょうがないじゃない、あんな目に遭わされた私は悪くない。

…そんな正当化で自分を塗り固めようとしている私が、さらにもっとみじめよ。

そんなものを必要とする私なんか、見たくないし大嫌いよ」

「ちゆ。そんな風に自分を責めるのは」

「あいつも」

ペギタンの言葉が食い気味に止められる。

言いたいのだ、ちゆは。言いながら、心を整理したいのだ。

察したペギタンは、そのまま身振りだけでただ先をうながす。

「あいつも、ずっと味わってきたのかしら。こんな気持ちを……」

こんな気持ちの中で、ずっとと戦わされてきたのかしらね」

「わからないペエ。簡単にわかるなんて言えないペエ」

その場を取り繕う程度の言葉は、時と場合によつては『毒』であり『侮辱』

わかるよ、などという場当たりの追従は、その人の苦悩を軽んじる行為。ペギタンはそう感じた。感じたままに、わからないと返した。

ただ、それでも思い出せるものがあれば、届けられる言葉もある。

「ちゆ。ヒーリング・ガーデンをビョージェンズに攻められた時……」

ボクたちは、穴ボコに隠れたまま、何もできずにおびえているだけだったペエ」

「……ペギタン、それは」

「情けなくて、みじめだったペエ。

でも、弱いから、子供だから仕方ないペエ。テアティーヌ様が助けしてくれるペエ。

そんな風に思ってたら、ラピリンが泣き出したんだペエ」

恐怖に負けて、その場で感情を駄々流しにさせてしまったのかと

ペギタンも、ニヤトランも思ってしまったが、そんなこととはまず違った。

「戦いたい、今すぐにも追い払ってやりたい。

なのに何もできない自分がイヤでたまらない、って……」

ボクが他の誰かに丸投げしてる横で、ラピリンは悔し泣きをしてたんだペエ。

……ボクは。ボクは思い知ったんだペエ。

ボクは、どれだけみつともないヤツなんだって！」

これからも忘れることはないだろう。

さんざん泣いた三匹は、あの時に誓ったのだ。

ビョーゲンズの手から、ヒーリング・ガーデンを守り抜くと。

「ボクは、ボクがそんなだったから……」

大好きな誰かが、無力さだとか情けなさに苦しんでたら。

……力になれたら。いいな……って、思うペエ。

ボクは、ちゆの力になれるペエ？」

有無を言わさぬ様子に聞き入っていたちゆは、

しばらくペギタンの顔にじつと見入ると、

憔悴した表情はそのままだったが、やがて明確に動いた。

「ペギタン。私のこと……助けてくれる？」

「もちろんだペエ」

ちゆは立ち上がり、自らの学習机に向き直ると

ノートから一枚空白のページを切り取り、

シャープペンをとって何か書き始めた。

「……何を書いているペエ？」

「このままじゃあ、まともに顔も合わせられないの。

『夢』でもろくに会話できないかもしれない……」

時間が解決するのは、待てないわ。

これを放置するだけで、死ぬ原因になりかねないのが今の私たちよ」  
順序を追って話をしていない。

今のちゆが平静を欠いているのは、この一事だけでも明らかだったが、  
それでも捨て鉢ではない行動を起こそうとしているのは見て取れる。

「鳴滝くんとはお互いに変な因縁を抱えているわよね。」

今、私はこうやって沈み込んでるけれど……変に律儀なあいつは私以上のはずよ。  
今日の事件に妙な意味を見出して、何をしでかすかわからない。

まずは、そうなる前に止めるわ。何より、謝らないと。悪いのは私よ。

私は、言うべきことも言わずに逃げてきた……謝りもせずに、解決も何もないわ  
そうやって、ちゆは素早く簡潔に手紙を書き終え、ペギタンに託す。

時間をかければかけるほど、こじれかねないという直感が彼女にそうさせた。  
そんな彼女の聡明さは、ほどなく証明されることになる。



一方、やはりと言うべきか！

鳴滝魁は変な意地を張っていた。

三人に寝かしつけられた布団の上で痛みにあえぎながら、

しかしF・Fのお手当てを頑なに拒否しているのだった。

むろんのこと、治療を行うのは魁の血中のフー・ファイターズなので

絵的にヤバイという問題は一切発生しない。

『バカを言っているんじゃない……』

ダメージを放置しておくことに、なんの意味があるっていうの？』

「あの沢泉が、……これだけのことをしたんなら。」

こうでもしなきゃあ収まらない復讐なんだろ……？

だったらこれは、あいつの『権利』で、受け入れなければならぬ『罰』だ。

治すことは『ナメてる』ってことだ。『バカにする』ってことだ……グ」

『権利って……もつとマシな権利を主張させない？そこは。』

ヒドすぎるだろ。ポコチン蹴り飛ばす権利って、何』

魁の言葉から導き出された、あまりにもひどい言葉面に呆れ返りながらも

F・Fは説得を続ける。言っちゃあ悪いが、構ってられない。

いつ新たなビョーゲンズやスタンド使いが現れるかもわからないというのに、

こんな不利益しか存在しないこだわりを受け入れるつもりはないのだ。だから卑劣な論調も使う。侮辱スレスレのやつを。

そうでもなければ、この分からず屋はいつまでたつても意地を張る。

『言っておく！今のあんたのやり方は…汚い』

「グ……なんだって？」

『あれは明らかに事故よ。あんたが肩を貸された時と同じで…』

あの瞬間になるまでわからなかった症状が、たまたまあのタイミングで出ただけ』

魁の動きがピタリと止まった。

ここですでに気づいたのだ。寄って立つ根拠が崩れ去ったことに。

それでも意地つ張り野郎なのは、彼の性質でありカルマなのだろう。

頑張り続けるように彼は育った。良くも悪くも。

「その原因を……グ、作ったのが俺なら、そいつは因果って」

だが、苦しい顔の苦しい言葉は続かなかった。

F・Fにさえぎられて、上から言葉を被せられてしまったから。

『そこにあんたは手前勝手な意味と願望を見ている！』

復讐であつてほしいのは、魁。あんただけよ』

よく考えなくてもわかるに決まっているのだ。

あの三人と相棒たちが、今更そんなやり方を望むのかと。

『仏教だと、罰つてのは罪を許すためにあるんだろ？』

地獄落ちした連中は、悪魔どもにアブられたり煮られたりして、罪を償う……知らねーけど

あんたは、今の痛みを勝手にそれだと思おうとしている。

あたしがちゆなら、冗談じゃあない。

なんで勝手にチャラにされるんだよ。単なる事故で！

そーやってマゾをやりたいのなら、せめてちゆに許可とつてきな』

言つてやった。言つてやった。

半分以上はマジメな説得だったが、頑迷とも言うべきレベルのクソ石頭にムカつきまくっていたのも事実で、F・Fはまるでヒーローが決め台詞をキメた時のような爽快感に浸った。

皆が帰つてからずっと説得させられたことを考えれば、このくらいは許されていいだろう。

が、それを聞いていた肝心の魁は、最後で思いつきり微妙な表情に変わった。

「……いや。それ……もつとヒドいから」

そんな許可を取り付けに来られる方は災難でしかない。

なんともいえない気の毒な表情のちゆを幻視した魁はただ、行つてたまるか、と思うのみである。

『わかつたら治療する。サツサと！』

あれは単なる事故、単なる不幸ッ

復讐でも罰でもなんでもない、そこ間違うなよ。

だいたい時間が経ちすぎた。大丈夫かな……』

誰にも任せられなかつたお手当てだが、F・Fなら問題ない。

なにしろ性別すらもない。分裂して増える、ただのプランクトン。今はそれが救いだった。

それでもなければ魁は、やはり断固として拒否を続けただろうから。

やれやれね、とばかりに取り掛かるF・F。

肉体がリラックスしていないと治療もやりにくい。

『そーいや。まだ残り香あるね。あいつらの』

F・Fとしては、多少なりとも安心させたいだけだった。

ろくでなしの巢を追放された落ちこぼれにとつては、

今や『夢』の中こそが『家』で、そこにいるみんなが『家族』だった。

魁本人は、そんな気持ちを向けること自体を『壮絶に気色悪い』と認識しており、

F・Fもなんとなくそれを察してはいるが……

目を背ける必要があるという程度には、それは実体を伴っているのだ。

傷ついても、そんな自分を守ってくれる人たちのおい。温度。

そんな安らぎを、F・Fだって良く知っているのだ。

「残り香……」

魁も言われるがまま、嗅覚で周りを気にしてみると。

やはりというか、一番目立っているにおいはミント系……

ひなたが使っているのだろうコロンの香りだった。

なんだかんだ、助け起こしてもらったり、それこそ肩を貸された事件だとかで

においてを認識する機会は幾度となくあった彼である。

のどかは花寺家ですていたにおい……他人の家に踏み込んだ時感じる特有のそれ……に、

石鹸の香りが混じったようなそれであるし、

ちゆは、わずかな汗止めのおい。陸上部としてはもちろんであるし、

旅館の従業員としても自己主張の強い香りを漂わせないためなのだろう。

なので、このふたりのにおいは今時点で魁には気づくことができず、

明確なおいづけの物質を使用しているひなたのにおいだけを感じることになる。

ましてや彼女は、こともあろうに許可もとらずロフトに上って寝転がっていた……

においがやたら残るのも当然の成り行きだ。

(『夢』のノリでやってたなアイツゼツタイ)

やや憤慨しつつも、初めて出会った頃とにおいが違うことに気づく。

公園で、メガビョーゲンに襲撃された魁を助けにきた時。

あの時は、柑橘系のさわやかなヤツをつけていたと思うが……すぐにピンとくる。

そうか、ニャトランか、と。猫は柑橘類のにおいを嫌うらしい。

ひなたにとつてはいいにおいでも、ニャトランにとつては耐え難い悪臭になるならば。

らしいな。魁はそう思った。やりとりが目に浮かぶようだった。

「……グ、痛ッ……うおおッ!」

唐突な痛みに中断させられる。

今の自分は怪我人だったことを再認識して、

今までさんざん渋ったことも棚に上げて、早く治らねーかな、などと

無責任に考えたところで、心の中身が風のように止まった。

どこが痛いつて？

どうして突然こうなった？

答えが出てから、数秒間は風のままだった。台風の目だったのかもしれない……

ほどなく彼は、無言でF・FのDISCを取り外し、その場に投げ捨てた。痛みも気にならずに松葉杖をとり立ち上がると、

昨日もオムライスを作っていたキッチンから包丁を取り出す。

危害は、除かねばならない。

もつと早くにそうするべきだった。

ペギタンがそこに間に合ったのは滑り込みの奇跡でしかなかった。

もし、あと少しちゆが手紙の文面に悩んでいたなら。

もし、ペギタンが少しでも回り道をしたのなら。

取返しつかない結果だけが、そこにあったはずだった。

手紙を片手に飛んできたペギタンは、まず窓越しに人影を認めたのだ。

なにしろ大事件の直後なので、一瞬警戒して曇りガラスを凝視すると、

その背格好はすでに見慣れた人間のそれで、ここにおいて当然の人間のそれ。

窓のすぐそばはキッチンだ。幾度となく入れてもらっているペギタンも知っている。

(……う？……料理するペエ？)

何か取り出している様子を見て取り、アパートの柱の陰から観察する。

照り返しを見た。その長さから察するに、おそらくは刃物。包丁。

そして、それを手に取った人影は何をするでもなく背を向けて、奥へ引つ込んでいこうとする。

キッチンから刃物だけを取り出して立ち去る。

この時点で不穏しか感じなくなつたペギタンは、スタンド会話で呼びかける。

『魁、ボクだペエ。返事してほしいペエ』

2秒間。たつたそれだけ返事がなかつたを以てペギタンは即断した。

もし違つたら、などと問うている時間はないことを自覚した。

『F・FのDISCを取り外している!』

『F・Fの見えないところで何かやろうとしている!』

『刃物を使って何かしようとしている!』

命に係わる後悔はすぐそこだ。その恐怖がかえつてペギタンの背中を押した!

曇りガラスは鋼線入りだ。体当たりで歯が立つかどうか。

見て取つたペギタンは、空中に浮いたまま皇帝エンペラーを取り出し、全身で抱え込み。

「……ペエッ!!」



バ ドギユ!

撃鉄を引いて、銃弾を撃ち放った。

30 m以上が飛距離になってしまうとガラス瓶を破壊できるかも怪しくなるが、わずか1 m。この距離ならば十分だ。

パキ! ガシヤア

銃弾のサイズに見合わないトンネルを形成してガラスが砕け割れると、

反動で飛んでいくにまかせた皇帝を放って、

そこからペギタンは突入していく。どうせ手元から落ちた皇帝は未発現状態に戻るだけ。

ある意味、勝手に手元に戻ってくるだけでも言える。問題ない。

中に入れば奥が見える。奥には、地べたに座り込んだ魁がいて……

何やら、包丁を下半身に向けていることが見てとれた!

様子に気が付いた魁と目が合うよりも先に、ペギタンはまたしても皇帝を抜き、射撃

!

ドギユ

…パシイ!

曲がりくねる弾丸は包丁の刃を粉みじんに弾き散らし、壁にぶち当たるより前に消え

去った。

ペギタン自身、思ってもみない集中力だった。

跳弾で魁を傷つけかねないことまで計算に入った一射になっていた。

驚いている場合ではない。魁が手元を見ているスキに。

「ペエエー……ッ！」

ギャン！ ドゴオ

魁の顔面に思い切り体当たり。

のけぞってぶっ倒れる魁の頭を抑え込んだペギタンは、いつになく鋭く聞いた。

「何をしてるペエ!?!」

もはや、なんやかやと言い逃れできる状況ではなかった。

魁自身が一番それをわかっているのだろう。

少しの間をおいて、ぼそぼそと話し始めたのは、聞くに堪えない言葉だった。

「お。俺が……俺が、男だから。

俺が男だと、み、みんな……傷つくだろ？

だからよ」

ペギタンは、血の気がひいていく自身を意識した。

こんな言葉を、今のちゆに聞かせたらどうなってしまうのか？

そして同時に、魁が何をやろうとしていたのかを明確に理解した。

「そんなコトして、何になるペエツ」

「なるんだよ。最初からこうするべきだったんだ。

こんなものがあるから、俺は間違っている。最初の、最初っから……!」

どけよペギタン。間違いは正さなきゃあ」

上半身だけで這つていこうとする魁を押し止めながら、ふとペギタンは思い出す。

あれはダーティ・ウォーターの言葉だった。

『俺が女じゃなかったから邪魔者扱いした母さんも……』

だとしたら、なんとということだ。大昔から仕込まれた毒ではないか。

それが巡り巡つてこんな時に爆発する。いったい何の権利があつて？

ともあれ、間違いを正すのはペギタンの方だ。

「間違っちゃったのは魁だペエ。男だからじゃあないペエー!」

ここに来る前のちゆを見ていれば、こんな責任転嫁を許すわけにもいかないし、

さっきの予想が正しいのなら、これこそが彼を蝕む猛毒になりかねない。

なので正面からぶつた斬った。迷いなく。

魁が返したのは逆ギレだった。

「なら間違いは俺なんだろ？」

「お前が間違いを終わらせてくれよッ、皇帝で！」

ワシ掴みされたペギタンは、魁の顔面真正面に持つてこられた。

もう片手で魁は、自分の額ド真ん中をツンツンと指さす。

「……だ、よく狙え！一発で終わる……」

終わらなきゃあ、俺は沢泉を傷つけるんだぞ？

想像してみろ、俺があいつをなぶりものにするサマをよ。

想像しろよ、平光と、花寺を、オモチャみてえにいたぶるサマを。

イヤなら撃て。終わらせるんだよ、お前が！みんなを守れ！守れよ！」

言葉が先に進むほどに、ヒステリックさを増していった。

目がくらむほどの憎悪の火炎は、魁にまさしく何も見せていなかった。

敵を討ちたい一心だった。それ以外は些末事てきだった。

だから、魁は気づいていなかった。

「……い。いやだ……いやだペエツ……」

自分がペギタンに、どれほどむごたらしい真似を強いているのかを。

目を八の字に寄せるペギタンを見るに至って、ようやくわずかに違和感を覚え。

「いやだペエ、魁を撃つなんて……いやだペエツ……」

うわああああああん……

大粒の涙が床にこぼれていくさまを見て、魁の頭は一気に冷えていった。俺は一体、何をやっているんだ？

いつも気にかけてくれていたこいつに、俺は一体、何をやった？

俺は、どれほどのバカを繰り返せば気が済むんだ？

大切な友達を手ひどく傷つけたことを、魁はきつく理解させられた！

耐えがたくなつて、松葉杖を手にとる……

逃げるのか？自分が傷つけた友達を置いて！

だとしたら、みんな、誰もが。

(丸っきりの、バカになつちまう)

あきらめたように、魁はとつた松葉杖を放り出す。

そして、ペギタンに全身で向き直った。

知っているではないか。当たり前にならなければならないことを。

「ごめん、ペギタン」

手を伸ばし、触れる。

泣き続けながらも、ペギタンは拒まなかった。

手元に引き寄せて、ぎゅつと抱きしめた。

大切さが離れていくのが怖かった。

「ごめんよ。ペギタン」

なんと愚かなことだ。

自分で傷つけておきながら、ペギタンの泣き声を自分のもののように感じている。

もらい涙とでも言うべきか。魁は、ペギタンの涙を泣いてしまいたいと思った。

自分がやらかしたことを、せめてそれだけでも軽くしたいと。

その思いにおそるおそる従ってみると、流れてくるのは自分の涙。

他人の涙を泣くことなんかできなくて、それでも涙は嘘じゃあない。

そうか。

友達が悲しいと、俺も悲しいんだ。

友達を傷つけて、俺も傷ついたんだ。

そこに理屈は存在しなかった。

ふわふわした、形のない、だがはつきりとした真実がそこにあった。

それから落ち着くまでに一時間少しを要した。

F・Fだけはすぐに戻した魁である。

ある程度、頭が冷えればわかりきったことだ。

よりにもよってこのタイミングで、

自発的に去勢したことがみんなにバレればどうなるか？

ちゆにとつて、永久のトラウマと化すだろう。

彼女の性格からして、どう考えても自分のせいだと結論するはずと理解する魁。

治りきらず、大なり小なりの後遺症が残ったとしても、やはり同じこと。

そうさせないためにも、きつちり元通りにすることは絶対条件だった。

『ま…無事ならいい！』

とくに何もないだろ、あたしから言うことは！』

やろうとしたこと、あったこと、洗いざらい魁に吐かせてから、

ぶつきらぼうにそれだけ言い捨てたF・Fは、黙って治療に専念している。

「何しに来たのか、忘れるところだったペエ」

ペギタンが、出し抜けに折りたたまれた紙を差し出してくる。

それはもう大変な迷惑をかけた自覚のある魁はうやうやしくそれを受け取ると、

机上に広げて内容を読み取り……さらにへこむことになった。

『手紙を必ず最後まで読んで、ペギタンに返事を渡してください。』

まず今日のことは、完全に私が悪かったです。

あなたに害意がないことはわかりきっているのに、

状況があの日に似ていただけで、反射的にやりすぎの危害を加えた私の非です。

謝るのは簡単ですが、あなたが私にやったことと同じように、

言葉だけで清算できるものではないと私は考えています。

私からできる最大限として、以下を約束する用意があります。

・私は、県総体での事件を、今回の事件で清算したものととして扱います

・私は、県総体での事件を、今後二度と持ち出しません

この条件を呑んでもらえる場合はその旨を、

でなければ代わりに条件を返事に書いて送ってください。

また、今日中に条件が折り合わなかった場合でも、

私とあなたの問題でみんなを困らせるわけにはいきません。

どうか、顔を合わせて話することを許してください。

その時には、改めてお詫びを申し上げます。

……以上

自分が自身の苦悩だけにこだわっているそばで、

ちゆはチーム全員のことを考えて、



復讐すべき恨みをむしろ進んで棄てようとしていたのか。

それに比べて、自分のみつともなさはどうだ！

だいいち、こんなことを書きながら、

彼女が県総体の事件を持ち出してきたことなどあつたか？

ない！ないのだ！一度たりとも！

魁は、深く、深く息を落とした。自己嫌悪の穴に埋まってしまいそうだった。

「……ペエ？またヘンな気起こしてないペエ？」

「起こさない。起こさねえよ……返事書くからちよつと待つてくれ。」

あつ、もう晩飯の時間。沢泉にメールだけ先に送つとかなないとヤバイよな」

「魁、今日のごとは」

「わかっている。言えるワケねえって……悪い、ペギタン」

「わかってくれば、いいペエ」

まだ涙つばい目のままで、笑顔を向けてくれるペギタン。

これを裏切らないためにも、魁はいよいよ自分に向き合わねばならないと思う。

自分を消すことも、男である事実をやめることもできないのなら。

危害を加える自分が怖ければ、一日も早くそれを変えなければならぬ。

周りを変えたければ自分を変える。

F・Fにそう教わり、みんなにも相談してきたここ一か月と少しだったが……むしろ、自分を変えることそのものが目的になりそうだ。

変わらなければ。

キツチンの割れた窓ガラス。

その先にいつしか灯っていた星の光を見て、魁はそう心に決めるのだった。

「『これ』を、誰かに向けてあげられる人になる、か……」

変わるのはいい。そう変われるのなら、きつと己が無価値に悩まずに済む。

だが、だとしても過去が消えうせるわけもない。

誰かを傷つけた分だけ自分も傷つくというのなら、

俺はどれほどの人々を傷つけてきたのか？

それらの傷は、今あるだけで全てではあるまい。

おそるべきものを見る覚悟は、むしろこれからこそ必要なのでは？

向き直って壁を見た魁は、覚えた予感に震える思いがした。

「どうしたペエ？何か、怖いペエ？」

「なんでもない。ありがとう、ペギタン」

……なお、この夜の間、魁とちゆとの手紙のやり取りは3往復したが、

結局条件が折り合わず、話し合いは以降も継続になったことを追記しておこう。

『不幸な事故だったので、謝罪は不要です。条件など必要ありません』

『それでは釣り合いが取れません。せめてここまでは譲歩してください』

『では、謝罪の言葉のみ受け取ります。条件は不要です』

『そう言ってはくれませんが、不公平は遺恨を生みます。この条件であれば……  
ちゆには笑いごとではない。』

そのあたりを察せられないのが今の魁の限界だった。

「姉ちゃん、独り言……らしくないな。」

なるたき……誰?…知らないけど……

姉ちゃんを、あんなにも困らせるようなヤツなら。

ぼくが、守らなきゃ。姉ちゃんを」

真夜中、旅館『沢泉』。

洗面所の鏡に向き合っている少年は、

手持ちのプラスチックコップが割れ砕けるのをじつと見つめ。

次の瞬間、コップが元通りになるのを見届けていた。

まるで、ビデオの逆再生のように。

「とうじ、起きてたのか。早く寝なさい」

「父ちゃん。はい」

ハートの鎧。筋骨隆々の巨体。背中のパイプ。

その像を見ることができる人間は、今ここに誰もいなかった。

## 目覚めて、黄金の風! ジョルノの見る夢—その1

今晚は、みんなへの『夢』は無しなの。

正直、最悪のタイミングなんだけどね。

ちゅちゃんは……まだいいの。よくないけど。

今日のこと、すぐくまいっちゃってるから、放っておきたくないよ？

でも、ちゅちゃんには家族がいる。

家に帰れば、また別の居場所があつて、そっちに気を使うっていう意味だつてある。

だから、すぐにどうこうなることはないと思うの。ペギタンもいるんなら、なおさらね。

危ないのは鳴滝くんだよ。どうしてちゅちゃんがあんなことをしちやつたのか？

どう考えても原因は去年の県総体なんだもん。

あなたは私を傷つけた悪人なのよ、つて、痛みをもつて思い知らされたも同じ。

気絶から覚めて、何があつたのかを一通り思い出した鳴滝くんは、

口では『仕方ない、気にすんな』つて言いながら弱り果てちやつてて。

それを見たちゅちゃんが怯えちゃうし、ひなたちゃんが一瞬だけ責めるみたいな視線

を向けたから

もつと縮こまっちゃうし。あんなちゅちゃん見たの初めて。

それから、みんな逃げるみたいに出て行って、

ほとんどそのまま解散したけど……これは、間違いだとは思わないよ。

あのまま鳴滝くんの家に行たら、ふとしたことでケンカになりかねなかったと思う。

ちゅちゃんは、ちゅちゃん自身にしか深さのわからない『恨み』を持っているのに、

ひなたちゃんにとって、鳴滝くんは『恩人』でしかないの。

理屈でわかっていても、感情が衝突したら大変なことになっちゃう。

どっちかが完全にやつつけられるか、『キレて』收拾つかなくなるか。

それよりももつと高い確率で、ちゅちゃんが折れて謝るとは思うけど……

オチがこの中のどれになろうと、わたしたちの間に深い深い傷を作ることになるの。

プリキュア解散、空中分解ッ そんなことになったら、わたしたちは終わり！

ここは『良かった』って思わないと。一歩下がった位置にいられるわたしが三人目

だったことを。

ちゅちゃんと鳴滝くんの間にあつたことは、ちよつとやそつとでどうこうできる問題

じゃあない。

佐久間さんとお母さんのこともそうだったけど、

他人がしてあげられることって、すごく限られてる。

へたしたら一生かけてもダメかもだし……腰を据えていかなきゃあ、だよ。

だから今日は、ニヤトランに鳴滝くんのところへ行ってもらって、まかせることにしたの。

F・Fもいるけど、DISCを取り出して無理やり黙らせるって出来ちゃうんだよね。そんなこと、普段の鳴滝くんならしないけど。

心が弱っていると何するかわからないから。前科がね…

ここまでできて、やっと最初の話に戻るよ。なんで今晚は『夢』無しなのか。一言で言うと、ジョルノさんに接触するため。

今回の佐久間さんの事件の直後、病院全体がスキだらけになったところをチリ・ペツパーで調べて

ジョルノさんの置かれてる状況がわかった……これが、運命っていうのかな？

『わたしと同じ症状』。ジョルノさんは、わたしと同じ原因不明の衰弱に侵され続けているの。

そして、ラテが感じていた嫌な予感、まさにジョルノさんから出てきていたんだよ。担当していた先生まで、わたしと同じ。蜂須賀先生！

当然なのかも。わたしと同じ原因不明なんだから、

同じものをわたしで経験した蜂須賀先生が担当になるのも……  
重要なのは、ラテが感じ取ったということ。

ジヨルノさんの症状がビョーゲンズのせいだとしたのなら。つまり、わたしも？  
謎が解ける時が来たみたい。

わたし個人としても放っておけないし、なによりジヨルノさんの容態が危ういの。  
今日のことと絶対安静の治療室から一度ベッドごと避難させられたジヨルノさんは  
症状が一気に悪化しちゃってる。先送りしたら死にかねない。

…ホント、滑り込みセーフだね。ラテの予感を調べるのが何日かでも遅れてたら、  
ブラッド・フラワーがダルイゼンと一緒に病院を汚染して、たぶんジヨルノさんは死  
んでた。

そのまま、ラテの感じた『嫌な予感』も解き放たれちゃったんじゃないかなあ。  
そこはまだ解決してないし、解決するためにここにいるんだけど。

「ココならヒトは来ねーと思うぜ、グレース。  
射程距離はヘーキかよ？」

雑木林の中の鉄塔まで送ってくれたチリ・ペツパー。

つまり、ニャトランがわたしに確認してくる。

本体は鳴滝くんのところにいるけど、スタンドは電気が届けばどこにでも行けるから



ね。

中。ニヤトラン経由で鳴滝くんとも伝言ゲームで話せるけど、これから行くのは『夢』の

起きたまま『夢』に入れるのは、DEATH13の本体であるわたしと、キユアグレースとして一体になっているラビリンだけなんだよね。

「平気だよ、ニヤトラン。」

「ここからなら、十分病院まで届くから」

「じゃ、早速やろーぜ。」

ジョルノは昏睡<sup>コーマ</sup>状態：常に寝てるも同じだもんな」

「うん。だから、DEATH13ならお話できる。」

「そうやって、ビョーゲンズと関わった経緯とかがわかれば…」

「今日この場で浄化しちまうってこったぜ！」

状況証拠的にはもう確定だ、って、ちゅちゃんも鳴滝くんも言ってたけど。

お手当ては慎重じゃなきゃあいけない。

ダーティ・ウオーターを鳴滝くんの体から追い出した時にやったみたいに

浄化の力を直接体に送り込めばいいとは思うけど、それにすら耐えられない可能性  
だつてある。

最悪、みんなを連れてきてヒーリング・オアシスだね。

「始めるね……『DEATH13』」

口で言うのは合図だよ。DEATH13は、現実世界ではまともに見えない影だから。

そのまま、すでに知っているジオルノさんの治療室に送り込む。

今日、別室に移動させられてるけど、それもチリ・ペツパーで調べた後だよ。

いつものカフェ・ドゥ・マゴにジオルノさんを招待。

わたしの対面に座らせた状態で出したんだけど……

「ね、寝てるラビ？……『夢』の中で？」

動かないの。出した瞬間から、机の上に突っ伏しちやった。

ただごとじゃあない。わたしはすぐに場所を杜王ブランドホテルに変えて、

ジオルノさんをベッドの上に移した。

「…スゴイラビ。こうしてみると…ホントに、DIOラビ」

「似てるよね。似てる、けど……顔つきが違う」

親子だっというだけあって、そっくりではあるんだよ？

でも、DIOとは違う。明らかに。

『妖しい色気をたたえた美しさ』の上に、邪悪さと冷酷さで

顔の彫りを彩っていたD I Oは、正直、顔も見たくないような悪のカリスマ!

見てしまったら、声を聞いてしまったら…『惹かれてしまいそう』それが怖いのだ。

今のわたしじゃあ…今のちゅちゃんに、ひなたちゃんじゃあ…

神様みたいな『安心』に身をゆだねてしまふんじゃあないかって。

鳴滝くんもダメだと思う。全員まとめて役者が違う。今のわたしだと。

なんとか逆らえそうなのはF・Fくらいだと思ふな。

比べて、ジョルノさんにそれはないんだよね。

…すぐく、カツコいい。キレイ……なのはそのままだけど、

顔から、そんな神様じみたものは感じないの。

D I Oが神様だとしたら、ジョルノさんは王子様……みたいな。『高貴』っていうのか

な?

でも、それよりわたしが目で見て感じたのは、弱り果ててること。

ちようど今日、ちゅちゃんと鳴滝くんがなつたみたいな、

取り返せない失敗をしちやつた時の顔。

それを何度も重ねて固まっちゃつたみたいな雰囲気を感じるの。

「ラベリン」

「ラベリン」

「ここに居るのは、ジョルノさんの魂だよね？」

魂は、この世界なら普通の人間と同じように動き回れるはずだけど、それもしない。その元気さえもないんだとしたら」

「…心が、死にかけてるラビ？」

助けが間に合わなかったエレメントさんみたいに」

やっぱり、ラビリンもそう思うよね。

想像を超えてまじいことになってるみたい。

『夢』の中なら話せると思ったのに。

そうやってお手当ての方法を決めようと思っていたのに。

すでに、話すらできないところにまで容態が悪化しちゃってる。

「ど、どうするラビ？」

これじゃあなんにもできないラビーツ」

考えなくっちゃ。このまま何もせずには帰ったら、たぶんジョルノさんは死ぬ。

わたしの病気の秘密も、それつきりわからなくなる気がする！

ここは『夢』の世界で、わたしが許す限りは誰でも『夢』を操れる。

なら……ジョルノさんに『夢』を手渡したなら？

「できるかな……やるしか、ない」

「何をするつもりラビ、グレース?」

『夢』の中に魂があるのなら、眠っている魂が見ている夢も『夢』

それを、DEATH13で全部拾って実体化できれば」

「魂が見ている『夢』の中で話せるっていうラビ?」

「できて当然だよ、ラビリン。わたしにはできる!」

ジョルノさんの魂を押し広げるように。

あるいは、逆にわたしたちを小さく縮めて魂の中に押し込めていくように。

DEATH13で世界を操り、ジョルノさんに合わせて、なじませていく。

絶対にできるの。できるから、ジョルノさんも『夢』で意思表示できるの。

賭けでもなんでもない。できて当然ッ

世界が一瞬真つ暗になるけど、欠片ほどの不安も持つちゃあダメ。

わたしたちの行き先はジョルノさんの見ている『夢』。

わたしは助かったんだよ? この人が助からないなんて、おかしい。

余計なことは考えず、強くそう願ひ続けて、正直もう一時間くらいは経つたと思つたよ。

『夢』の外のニヤトラン経由で鳴滝くんに聞いてみたら4分だった。

「んなコト聞いてくるってことは…イケたんだな?」

「ジョルノの夢に入れたってコトかよ？」

「…。うん」

「たぶん行けたと思う。」

「というか、そうじゃないと困るの。」

「できれば根拠だとか確証が欲しいよね。」

「今、『夢』の中で見ているのは…日本じゃあないどこかの町。」

「使われてる文字はアルファベットだけど、並びが英語っぽくない。」

「なら、魁の意見だけだよおー。オレも賛成のやつ。」

「プリキュア全員呼ぶぜ。すでにヤベーコトになつてんじゃねーか」

「うん、お願い」

「本当だったら今晩は、動くのはわたしだけにしたかったけど。」

「ジョルノさんの命が危険で、もしかしたらわたしだってそうかもしれない。」

「この状況でゼータク言ってる場合じゃあ、ちよつとないよ。」

「あ、なら鳴滝くんもコツチね。これは絶対」

「おーよ、かしこまりーだぜ」

「絶対に一人にはさせないよ。少なくとも今日いっぱいは、一人にしたらマズイ！」

「それと、割り振りも考えないと。ここに来てもらうつてことは、『夢』に加勢してもら

うこと。

つまり、来てもらって早々、ここで寝なきやダメなんだよね……

き、気が進まないなあ……でも、これしかない。

「ニヤトラン。ちゅちやんはもう寝てる?」

「チョト待て……寝てるぜ。ペギタンもな」

「ちゅちやんを寝かせたまま連れてこられる? ペギタンも」

「ムズイゼツ? まー、やってはみるけどよおー」

寝かせたまま連れてきたちゅちやんとペギタンを、そのまま『夢』に引き込むの。

起こして、また寝てもらおうんじやあ時間がかかりすぎるから。

やりたくないんだよホントに? 今日、あんなことがあつた直後で、

鳴滝くんがいるすぐそばに、パジャマで寝てるちゅちやん連れてくるとか。

ひなたちゃんだったら着ぐるみモコモコパジャマで寝てるから見られてもまだマシ

だし、

鳴滝くんをヘンに疑う理由もないから、やるならひなたちゃんの方がいい。(後で謝

るとして)

でもダメ。『夢』の中でキュアスパークルになるには、ニヤトランも寝なくちゃあいけないの。

わたしはここに……こんな雑木林奥の鉄塔に、チリ・ペッパーで連れてきてもらつてる。ニヤトランが寝ちやつたら、人がたくさん来たりしたときに逃げられなくなる！

プリキュアを頼りたい時点で、ひなたちゃんは外の監視に当たつてもらうしかないの。

そうだね……鳴滝くんにも寝てもらおうと。

同じ『夢』にいるんなら、ちゆちゃんに対して何もできないことの証明だし。

「ニヤトラン、ちゆちゃんの前に！」

病院からストレッチャーをふたつ、ここに持つてこられる？」

「ストレッチャー……なんだそりゃ？」

「患者さんに乗せて運ぶ、動かせるベッドのこと！」

「あ、わかった。アレな……ヨシ、あつたぜ」

病院暮らしが長いと、こーゆー器具の名前も覚えるんだよねー

そんなことは置いといて、持つてきてもらったストレッチャーの上に

まず鳴滝くんを載せて、そのまますぐ気絶してもらつた。

フー・ファイターズがあるから自分で気絶できるのsgoy

続いて、ちゆちゃんとベギタンを次のストレッチャーに寝かせた。

こんなところに引っ張り出すから、せめてベッド代わりを……つて気持ちももちろんあ



るけど、

草まみれの地べたに放り出したりなんかしたら、それこそすぐに起きちやうつていうのが理由。

最後にひなたちゃん：キュアスパークルに来てもらった。

いったん、別の離れた場所に出て変身してもらったんだよね。

：ほら、変身の時、光るから。スツゴク。ここでやったらちゅちやん起きちやうの。

「グレースさあー。ナニ？このシユール？なシチュ」

「しーッ、起きちやうから」

言わないでほしいかな。

わかってるよ、モノスツゴク変な光景になってるの！

深夜、雑木林の鉄塔のふもとで、ふたつのストレッチャーの上に寝かされてる男の子と女の子に、

そのすぐそばにいるフリフリ服の変身ヒーローふたりだもん。わけがわからないよ。ウン。

『じゃあ、スパークル。わたしは夢の中に集中するから。』

スパークルは周りを見張っておいてね』

『ん、りよーかい！』

スタンド会話でそう伝えてから、『夢』に意識を戻す。

現実と『夢』、ふたつの世界に同時にふたつの体があるみたいなものだから、両方で別々の動きをするのは結構しんどいの。これでもかなり慣れたけど。

「えっ？グレース、今日は『夢』無しだった」

「沢泉。事情が変わってる」

「…あ、鳴滝。くん」

「手短に言う。いつもの『夢』じゃあない。」

ここはジョルノ・ジョバアーナの夢の中で、安全だとは限らない。

変身しろ……すぐにだ」

少しの間、立ち尽くしたちゆちゃんだったけど、

いろんな疑問だとか言いたいことは呑み込んで、まずはすぐに変身してくれた。

これはこれ、つていう感じですぐに気分を切り替えてやれるの、

わたしとスパークルにはない強さだよ。鳴滝くんもなんだかんだ引きずるっぽい

し…

「グレース、これは」

「鳴滝くんが話してくれた通りだよ。」

わたしも今来たばかりだけど……

「どういうことになってるか、想像つかないの」

「何をすればいいかしら?」

「ジョルノさんを探せばいいの?」

「まずは、それだよね。」

『夢』の中でも、自分は自分のはずだから」

『私は、蝶になった夢を見た』

「……。えっ?」

わたしとフォンテーヌの間に、突然、ヘンなことを言ってきた鳴滝くんに、わたしたちはそろって首を斜めに向けちゃった。

「そんな詩を書いたヤツがいる……」

低学年の頃、図書館でそんなのを見かけたんだがよ。

姿形だけで探しても、そいつが正解とは限らねえかもな」

「じゃあ、どうするペエ?」

「俺にもわからねえー、けど……ここから先は全部『夢』なんだろう?

ジョルノのな。シナリオを作ってるのはジョルノ本人だろうよ。

意識的だろうと、無意識だろうとよ」

……うん。結構重要かも。

闇雲に姿だけを探して見つけたとしても、それは偽物かもしれない。

でも、偽物を置いた誰かは常にそこにおいて、わたしたちを見ている。そういうこと。

「その中に、わたしたちは……いる。」

それを忘れないようにして、探そう？」

「動かないと始まらないラビーツ」

そこにラビリンが、一番大切なことを言ってくれた。

備えられるだけは備えたつもり。なら、この先に『軽はずみ』はない。

なら、後は探すだけ。見つけ出して、ジオルノさんと……話す。

みんなで進むことにした。この町が、ジオルノさんの育ったネアポリスだとするな

ら。

まずは学校を探す。ネアポリス中・高等学校中等部。

康一さんが会いに行つた時、ここでジオルノさんが暮らしていたっていうのは覚えて

るの。

過去がほとんどわからないから、馴染み深そうな場所を探っていくしかない。

商店街に出る。建物の古さまでオシャレな町……なんだけど、

その中に微妙な『汚さ』が紛れてる。バッチいんじやあなくって。

近づきたくない、例えるなら……ビョーゲンズみたいな何か、物陰に潜んでいるみた

いな……

思い出す。承太郎さんが、康一さんから聞いていた話を。

ジョルノさんは、町にはびこる麻薬を根絶するため、あえてギャングになった。

タクシーを装った荷物ドロボーだとかスリだとかの常習犯っていうのは置いとくよこの際!

ギャング団『パツシヨーネ』のリーダーに上り詰めて、麻薬をほとんど撲滅したのはホントだし。

わたしたちくらいの歳の子が、麻薬を買って破滅していく町だったらしいの。ここは。

そんな中で、ジョルノさんは育ったんだよね……

そこを『夢』に見るのなら、それなりの意味があるはず。

フォンテーヌが先頭に立って、注意深く見まわしてる。

人通りが普通にあつて、そんな中でプリキュア姿だから悪目立ちしちゃつてて、

道行く人がみんなコツチ見ていくけど気にしてるヒマない。夢だしドーセ!

中には、いかにもワルっぽい人も混じってる……殴るよ、来るなら! 夢だし

「グレース、ひとつ……いいか?」

「なあに?」

「松葉杖なしじゃあ歩けねえ。『夢』なのによ…

夢の主導権が完全にジヨルノ持ちっぽいぞ。そっちは？」

耳打ちするみたいに小声で話してきた鳴滝くんは左手を向けて、

手元に紅茶のカップを出してみるわたし……出たね紅茶。

又ワラエリアだよ！ウチで飲んでるやつ。お父さんが好きなの。わたしも好き。

手渡すと、鳴滝くんは片方の松葉杖にうまく体重をかけながら、ググーツと飲み干した。

「…プハツ。さすがにDEATH13本体は平気か」

「何やってるのよ、こんな時に」

「『夢』の主導権の話だな。今、俺にコーヒーは出せない」

「でも、わたしには出せるの。…はい、どうぞ」

横からツツコンできたフォンテーヌも、

カップを受け取ると上品にツツツツとすすった。

「……フウ。そういうこと…」

出せないわね。砂糖も、ミルクも」

意味ありげにもう片手を広げて指先をワキワキさせてるフォンテーヌの手の中には、

今は種も仕掛けもないみたいで、現実と同じ。なんにも出てこない。

「ごめんね。欲しかった?」

「あ、違うわ。いいのよ、今は無糖の気分だもの……」

最悪の場合、DEATH13で逃げることはできるってことね」

「そのへんは、ホントに最後の手段だよ。」

わたしの勘が正しければね?」

このまま何もせずに帰ったら、ジョルノさんは死ぬの」

「……なら、今は忘れるべきね」

「うん」

ひとまず、フォンテーヌが紅茶を飲み切っちゃうまで待つことにして、

しばらく町を眺めてのんびりしようと思ったの。

そうやって警戒をゆるめたときに限って事件は起こるんだよね。

なんとなく立ち寄ったドネルケバブ屋さんが敵スタンド使いだったりするの。

今回も、そういうやつ。

すぐ近くのレストランから、ドアを破って小さな男の子が転げて倒れた。

「えッ、と……とうじょ?」

鳴滝くんにカップをグイと押し付けてフォンテーヌが走った。

駆け寄って男の子を助け起こすんだけど、背中に手をかけたあたりでまたハツとした

みたい。

うん、似てる。見間違えても仕方ないくらいに、髪型がほとんどそのまんま。坊ちゃん刈りつていうんだよね？とうじくんの髪型と同じ。

ネアポリスだったら、ここはイタリアなのに、金髪じゃあなくて黒髪だし……今、顔が見えた。確定だよ。悪い意味で、お人形さんみたいな顔をしてるの。

とうじくんはもつと元気だもん。

「ち、違うわね……で、でも！」

お姉ちゃんのちゅちゅちゃんだったら当然、わたしよりも早くに他人と気づいたけど。

だとしても！

小さな子供がお店の外に蹴り出されたなんてヒドイことがあったのは変わらないよね。

フォンテーヌがにらんだ先、レストランの入り口にいたのは……

一人の、お巡りさんだった。目つきのスゴクキツイ、お巡りさん。



## 目覚めて、黄金の風! ジョルノの見る夢—その2

反射的に出てはいったものの、とうじじやあないことはすぐにわかったわね。

ないわ、モミアゲの伸ばしてる部分! 私にもあるアレ!

それ以前に、においも、触れた感触も、ちよつとした反射の動きも全然違ったわ。だからといって、やることは変わらないわよ?

小さな子供が暴力を振るわれて黙っているようなら、プリキュアの資格なしよね。とはいえ、相手は警察官……夢の中ダケド

短く刈り揃えた銀髪の、男の警察官よ。

目つきが悪くて、顔つきも険しい。まるで冷たいカミソリよ。

背の高さもすごいわね。承太郎さんくらいあるんじやあないかしら。

「この子が一体、何をしたっていうのかしら?」

努めて、声を落として聞いてみる。

まずは向こうの言い分を知らないで、打つべき手も見えないわ。

最悪こつちが悪者にされて、この子を助けるどころじやあなくなつちやうかも…

そんな風に考えてる間にも時間は経つんだけど……反応しないわね?

男の子の方から私の方に、ゆっくり視線を移しただけよ。

「聞こえているの？あなた、警察でしよう？なんでこんなことッ」

「…いつ…って…、…シは、ねえ」

「え？」

語気を強めて問いただしてみたら、何かを言っている。

しゃべっているのはわかるのよ？

けれど、どうもよく聞こえないわ。

音と音が重なったり、消しあったりしているみたいに！

仕方ないから耳を凝らしたけど、やっと聞き取れたのは。

「そいつ…っていい、シは、ねえ……せろ」

言葉だけだと苦しいわ。警察官の後ろで開いたままになってるドアの奥を見る。

何人かいるわね？食事をとっているわ…ピザね。マルガリータピザかしら。

食べている人は、ほとんど『影』だわ。

例えでもなんでもないの。『影』が食べているのよ、ピザをッ

女の子が一人いるわ。体格からそうだと思うだけけど。

その隣の男の人？たぶんバンダナをしている…が、キノコが乗ったピザを食べてて、

そのまた隣は、ボウズ頭？の男がイチゴケーキを……いえ、何かかぶってるみたい？

わからないわ。形しか…真つ黒が立体を作ってるだけなんだから。黒いだけの人型なんだから。

もつと目をこらして見ようとしたけど、気づかれたのかしら？

その『影』たちはザツと立ち上がると、そろって奥に行ってしまったわね。

「……………い……………めを……………てえ……………か」

目を離していたら、警察官の方から声をかけてきたわ。

やつぱりほとんど聞き取れないけれど、この口調は、いかめしい威圧よ。

ろくな人ではないのかもしれないわね。

おばあちゃんの頃、すこやか市にもいたらしいのよ。ヤクザのワイロを握った汚職警

官……………

そう思った瞬間、聞こえた言葉が繋がったわ。

『そいつの食っていいメシはねえ』

……………カツとなったわね。

ただ、抑えたわ。私は旅館の娘。商売人の娘よ！

小さな男の子とはいえ、ねだられたからってお金もなしにご飯は出せない。道理だ

わ。

仮に、あまりにしつこく居座られていたのなら、手荒く追い出すのも、理解はする。

「グレース、お金を！」

「うん」

グレースが懐から取り出してくれた万札の束……ここまでやらなくていいわよ……を、警察官の前に差し出して、今度は私から頼んでみるわ。

状況が呑み込めてないみたいなの、この子に代わって、ね。

「お金なら払うわ！ 私たちがね……日本円だけど、食べ放題には充分のはずよ」

「……………」

「どうかしら？」

話を聞いているんだかいんだか。

警察官の男は、しばらく私の差し出した札束を見やつてきたけど……

スチャ！

次の瞬間、脇から銃を抜いてきたわ。なにそれ。

さすがにこんな反応されると、ひどい誤解があつたのかと思つて

なだめようといったん手を下げようとした、またさらに次の瞬間。

バスツ!!

シバツ バチイ！

…フワアアア…ツ

衝撃が来た。万札の束に穴が開いたのが見えた。

手元からすつ飛ばされて宙に浮いたそれは、空中でさらに別の何かに打ち砕かれて！  
紙吹雪になって飛び散ってしまったわ。

「な、銃？ いえ、スタン」

「フォンテーヌ、今は引き下がるペエ！」

「ペギタン!？」

「何もわからないまま戦うわけにはいかないペエ！」

「…その通りね」

戦闘態勢に入るなりペギタンにたしなめられた私は、

かばっていた男の子を持ち上げると、飛び去ってその場から逃げ…

「跳んじゃダメ、フォンテーヌッ」

「狙い撃ちになっちゃう！」

「そうよ、相手は銃…よね、たぶん！」

さえぎるものが何もない空中に行ったら、撃ち落されてしまいかねない。

どうもよくないわ。冷静さを欠いている…

ネガティブな自己批判なんかしてるヒマもなく、

地を滑るようにして逃げるグレースのすぐ後を追う。

グレースも当然、鳴滝くんをおぶってるわね。

警察官の男は銃を抜いて立ち尽くしたまま、追撃してくることはなかったわ。

「ハアアッ どうなることかと思っただらビ」

「……私のやり方がまずかったのかしら？」

「イキナリ銃抜く相手にどうするってんだよ。誰だろーがムリムリ」

少し離れた岸まで逃げ切つてから、グレースと地べたに座り込む。

鳴滝くんだけはベンチだけど：気を遣わせてしまっているわね。

その辺、気になりはするけれどね。

夜に手紙のやり取りをしたのも、これ以上ギクシヤクした関係にならないためよ。

私がヘンに気にしたら、それこそ苦労が無になるわ。

「そうね。そうよね。ありがとう」

それだけ返すと、少しだけ、みんな沈黙した。

そんなことしてる場合でもないから、すぐに私が口を開いたけど。

「で、結局あれはスタンド攻撃だったのかしら？」

「たぶん、そう。銃弾が空中で行ったり来たりしてたと思う」

「夢の中ではあるけどな。」

俺たちなんかより、ずっと戦歴の長いスタンド使いの夢だからよ……

スタンドと考える方が自然だろうよ」

グレースも鳴滝君も、あれがスタンドの仕業だつていうのに異存ないみたい。でも、すると…グレースの言うとおりなのなら!

「『皇帝』? ホル・ホースはジョルノさんにも腕前売り込んでたつていうの?」

自在に弾道が変わる銃のスタンドなんて、イコールで『皇帝』じゃない!

と思つたけど、グレースはためらいがちに首を横に振つた。

「ううん。似たようなスタンド、もうひとつあるよ。」

マンハッタン・トランスファー」

あ。いたわね。そういえば。

決して印象が薄いわけでもないのに。

というか、承太郎さんが心を抜き取られた事件の、思いつきり当事者よ?

犯人の一人だつていうのに、もうッ

「ライフル弾の軌道を変える狙撃衛星だよな。」

アレもホワイトスネイクの幻だつた気はするが…幻を作るにもデイトールは必要だ。

現実で襲つてきたときも銃を使つてたし、能力自体は本物と見るべきかもな」

「しかも本体ジョンガリ・AはDIOの狂信者!」

「ジオルノ・ジョバアーナにつきまとった時期があつてもおかしくないね」  
鳴滝君もウンウンうなずいて、

F・Fも上手な相槌を入れてるからチョット肩身が狭いわ…

(F・Fは鳴滝君のクチの中からシャベツてるわよ)

シヨボンとしていたんでしょね。私。

それを察したらしいグレースが、かばうみたいに言ってくれたわ。

「もちろん、ホル・ホースさんの線が消えたわけじゃあないよ？」

似たようなスタンドならいるよ、っていうだけ……

さっきのもの、わたしたちが知らないスタンドかも」

「銃声はひとつだった。撃つたのはあのポリ公じゃあないね」

「俺にや何がなんだかだった。わかったのは、空中で金属叩いたみたいな音がしただけ」

「フツツの人間に銃弾見るのは厳しいと思うペエ」

「ラビリンも、グレースと一緒にやなかったら全然見えないと思うラビ！」

おかげさま、ね。少し落ち着けたかしら。

「ここ」でようやく思い至ったのよ。つまり……

「みんな、ひとまずはその辺にしない？」

「その辺に、って…敵スタンドの話だぞ？…ん？敵？…あつ」



「そうだね。後にしよっか」

鳴滝君は反論しかけて止まって、グレースはゆったりと笑顔を見せた。

そう。ペギタンが私を止めた意味がここにあるわ。

敵と決まったわけじゃあないのよね。あの警察官。

何もわからない今の状況だと、むしろ私達の方が敵対行為を働いた可能性すらある。

そしてそれより前に、もつと気にするべきことがあるのよ。私達がプリキュアであるのならね。

つまりねえ。

「ホッポラカシで話し込んでじゃってごめんなさいね。大丈夫だったかしら?」

店から蹴りだされた男の子を放置して、話が進むわけじゃないじゃない。

何ひとつ事情を聴かないで、何ができるっていうのよ。

状況についてこれていないのか、ボケーツとしたままになってた彼に、

私は今やつと、まともな声をかけた。

「別、に……大丈夫、だけど」

そのまま放っておかれると思っていたのかもしれないわね。

話しかけられると思わなかった、みたいな態度でぼそぼそと答えているわ。

「蹴り飛ばされたのよ? 痛かったでしょう」

「それは、まあ」

…他人事みたいな反応ね？蹴られたのはあなたよ？

少し考えてみたけど、単純に、私たちに何も期待してないのかもね。

存在を無視して回りで長いこと勝手に話し込んでいれば、それはそう、よ。

この子から私たちに話しかけるスキも、なかったのかもしれないわ。

つ、つくづく悪いことをしたわね。私たち。

「…あの。すみません。急いでます…：：：ありがとうございます」

って、ちよつと待ってよ。話を切り上げて行こうとしないで！

ペコリと頭を下げた男の子は、よそよそしくスタスタと走りだしちゃって、

慌てて呼び止めようとしたところに、鳴滝君が鋭い声で先んじた。

「どこに行くのか言えよ。『ありがとう』が口先だけじゃあねえんならよ…：」

何やってるのよ。そんな小さな子を脅かしてどうするのよ？

なんて考えが先に立ったけど…：いえ、反応を見るぶんには悪くないわね。結果論だけ

ど。

一瞬、足を止めたあの子がこつちを見た目つきに…：何か、後ろめたい気配があつた

わね！

決まりよ。私は立ちふさがることにしたわ。

すぐにまた走り去ろうとする男の子の眼前に、私はひとつ飛びして着地した。

「悪いけれど、私も聞きたいわね。」

もし、あなたが危ないところに行くのなら!

助けた私がバカみただもの」

「……どいてよ。関係ない人には……つまらない話です」

「かもしれないわね。ダメ元でいいから、お姉さんに話してみない?」

仮にも、お客様のの中の小さな子を何度もおもてなししてきた私よ。

しゃがんで視線を合わせて、安心させようとするんだけど。

うつむいたこの子から感じるわずかな雰囲気は、不快感、拒否反応……ね。

ペギタンもヒーリングステッキから、そつとささやいてくるわ。

「フォンテーヌ、言いたくないことかもしれないペエ」

「そうは言うけど……傷つけられに行くのを、みすみす見逃せないわよ」

私自身も、そうは言うけど、よ。

状況証拠しかないのよね。私の言ってること。

これで付きまとうのにはちよつと無理があるの。見方変えればアヤシイオトナ!

早い話、私も、鳴滝君も、ペギタンも、グレースも、ラビリンも……

この子が、またあの警察官のところに戻ってひどい目に遭わされるのを危険視してい

るわ。

それは間違いないはずよね。

「話したくないなら、話さなくてもいいよ」

かける言葉に迷っていたら、グレースが一步前に出た。

「わたしたちは、あなたが殴られたり蹴られたりするのがイヤなだけ。

だから、一緒についていくの、許してくれないかな？」

理屈つけるのをあきらめて、素直な言葉で押し切ることにしたみたいね。

結局、私達みんなそれなんだから、正しいと言えばそうなんだけれど。

でも、残念ね。あの男の子はうさんくさそうな顔しかしていない。

「……迷惑です。それじゃ」

それだけ言って今度こそ走り去ってしまったわね。

路地裏に飛び込んでいってしまった：土地勘のない私達に、追いつくのは無理ね。

「だ、ダメかぁー。…ツライなぁー」

「ンもー、どーするラビィ？」

苦笑してるグレースに、ラビィンが割と強めに咎めてる。

本人の口から、ついに何も聞けないままだものね。

一見、グレースはあんまり悲観はしてないように見えるけど…

私の代わりみたいにな、ペギタンが聞いてくれた。

「どうするペエ……なんにもわかんないまんまだペエ?」

「こうなったら、スタンド使いは引かれ合う、に頼るしかないよね」

「ディーユーコトラビ?」

何が言いたいのか、私にはわかったわ。

本人に聞けないなら、向こうに聞くしかないってことでしょう?

鳴滝君もそれがわかったんでしょね。

ただ、賛成はできないみたいで、呼び止めるみたいにグレースに聞いている。

「おい……無策で行くのか?」

スタンド使いが何人いて、何をしてくるのかもわからないのか?」

「だから、ディーユーコトラビ?」

「グレースは、さっきの警察官と、奥にいた影人間どもに事情を聴く、って言ってるんだ。

俺としては賛成がむずかしい……が、現実問題、それしかできねえよな?」

ヒーリングステッキから飛び出してるラビリンの顔がこわばるのが見えたわね。

今の物言いで、ラビリンにもわかったみたいね?

そう、私達には。

「時間がないもん。わたしたちに、というか、ジョルノさんに」

「時間かけてたら死んじやうペエ。でもそれだけに失敗できないペエ。

起きてるみんなの意見は聞いているペエ？」

「今聞いたよ。ラテが一番急いでる」

「焦らなきゃマズイ、つてことね」

「いよいよ、一分一秒が惜しくなってきたわ。」

病院に乗り込んでジヨルノさんにヒーリング・オアシスをかける強硬手段は、

やるなら今が最後のチャンスな気がする、けど。

どっちにしても博打でしかないわね。やるも、やらないも。

迷いがジヨルノさんを殺すわ。

「行きましょう、早く！」

「ここがジヨルノさんの夢であるなら、スタンド使いが無意味な幻とはどのみち思えな

いわ」

「あのガキもだ。スタンド使いと絡んだ以上、何かある……」

ジヨルノの精神に強く焼き付いた誰かだつていうのなら、あいつがカギになる。

見失ったり、キズつけたりしたのなら、たぶん俺たちは失敗する！」

「そしてスタンド使いが引かれ合うならッ

行先は……さっきのレストランしかないよ！」

あの、一瞬だけした後ろめたい目も含めて！」  
私達は、さっきのレストランまで突っ走ってたどりつくのよ。  
あの子よりもずっと先にね。

## 目覚めて、黄金の風！ジヨルノの見る夢―その3

当たり前だが、店まで戻るのに1分もかからなかった。  
むろん、こっちが圧倒的に先だ。

プリキュアの全力疾走が子供の足に負けるわけもなし。

だが、これも当然なんだが…問題はここからだ。

「いるわね。さっきの警官…まだ」

さっき俺たちに対応した警官が店の入口に仁王立ちして、

戻ってきた俺たちを現在進行系でガン見してやがる…圧スゲエ

とはいえ、これはかなりマシな部類！

グレースがそれをすぐ口に出してくれた。

「好都合だよな。むしろ、どこかに行かれちゃった方が頭抱えるかな…」

「やることはひとつラビ。話を聞くラビ」

「でも、話を聞いてくれるペエ？」

やるしかないけど…誰から話すペエ？」

そして俺はその言葉を待ってた。



ペギタンに便乗して、フォンテーヌの背から降りる俺。

…正確には、下ろしてくれ、って背を軽く叩くんだがな。シマらねえこの場合、半身不随でなくてもおぶられてただろうけどよ。

丁寧を下ろしてくれながら、フォンテーヌがいぶかしげに問うてくる。

「ん？ あなたが行くつていうの？」

『敵』じゃあなくつて『中立』なら。

俺が行つても大丈夫だろうよ…

さっきの感じを見る限り、店に入らない限りは安全と見た」

「…賛成しにくいわね。」

逃げられないじゃあないの。あなたの足じゃ」

「そこは平気。あたしが保証する。」

こいつの足が動くのならスプリンターだつてこと、

あんたは知ってるはず…夢の中なら人目もクソもないしね。

ここはグレースの創造物じゃあないってだけで、

夢の中に変わりはないんだからな…スタンドで走れるわけね」

俺の口の中に伝声管を作ってるF・Fの助け船。

そういうや、夢の中だ。俺もそこを今から説明しようとしたのに…

松葉杖がいらないってことに今の今まで気づかなかつた。わりかしアホだな俺。というか、視野が狭くなってるくさい。

猛省は後だ。制限時間つきの課題があるんならな。

「F・Fじゃねえーけど。」

ここなら、俺の悪名もさすがに関係ないだろ：

俺から話すデメリツトは何もない。

もし怒らせたときは、まあ：ケツ持ち頼む」

フォンテーヌは、かなり複雑で、微妙に不快そうな顔をしたものの。

背から下ろした俺を見るなり、すぐに表情を平静に戻した。

「細かく話を詰めてる時間も惜しいわね。

なら行つてちょうだい。まかせるわ」

「しつかりやるラビ。ケガしても治してやるラビ」

ラビリンの激励もついてくる。ありがたいね。

誰の反対もない。さて、ちつとは役に立つぜ。

これ以上、厄ダネに甘んじてたまるかよ。

正面だ。正面からまっすぐ行く。

俺は敵対行為を絶対に働かない。たとえ銃口をコッチ向けられようとツ

目的は突破じゃあない。立ち止まることから始まるはずなんだ。

銃の照準が俺の額をポイントして止まり、それより前に俺も足を止めている。

両手を上に掲げて、全面降伏のポーズだった。

「戦う気はない。いくらか聞きたいことがあるだけだ」

俺の声を聞いた警官は、銃口を俺から外さないまま沈黙を保つ。

時間がないんだよ。急かすしかない。

「さっきのガキだ。アイツがここに戻ってくるまでにッ

俺たちがわかっておくべきことがあるはず!

きつと、あんたたちが知っているんだろ?

ジョルノ・ジョバアーナにまつわる誰かさんたちなら!」

目つきが一瞬で厳しくなった。

凍りついたカミソリみてえによ…例えるならそうなつちまう。

引き金が絞られるのが見えたと思った。

それなら俺の額に穴が開くはずだが、

次の瞬間に見ていたものはプニ・シールドだった。桃色の。

やたらグラついてる変なプニ・シールド…

「次、攻撃してきたのなら!」

わたしたちはあなたたちの敵になります」

ヒーリングステッキを拾ったグレースが、俺を背後に置いて警告していた。

どうやら、ステッキを俺の前の地面にブン投げて、

そこを起点にプニ・シールドを出したらしいな…

目エ回しちまつてんじやあねーかラビリン

「わたしたちはジョルノさんを助けるためにここにいますの。」

病院で今にも死んじやいそうなジョルノさんを助けるためにッ

それはきつと、わたしの謎を解くことにもつながるの!」

予想外。『花寺』が自分の都合を持ち出した。

とは思ったが、完全な善意と言い張るよりは信用できるか。

そもそも、その善意を好ましく思うとも限らないからな……

…フォンテーヌは、戦闘態勢だけを整えているみたいだ。

「だから、絶対に助かってもらうの!」

今、ここで!あなたたちが手を貸してくれないっていうのならッ

あなたたちを敵と決めつけて倒します!

時間がないから必死なんです。

十秒以内に返事がないなら、あなたたちは敵だよ!

建物ごとふっ飛ばす!」

いやいや待て、待て。マジギレしてんのかよ?

ムチャクチャすぎるぞ、グレース!

冷静な計算ずくの行動じゃあない、どう見てもだ。

くっそ、どのみち俺がしくじったせいだろ。撃たれちまったせいだ!

出しやばって、まかさされて、なんてぎまだ。

こうなったら制圧だ。F・F弾で全員マヒさせて情報を吐かせる。

…と、言いたい。効くのか? あの影どもに…

グレースが声高にカウントダウンを始めたところで、

店のドアが内側から開いた。

「…バ……な」

影の男が出てきた。おかつば頭のように見える、長身の男だ。

だが、何かを言っているのはわかる…のに、途切れ途切れで聞き取れない。

さつき、フォンテーヌがやり取りしてたときと同じだ。

グレースもカウントダウンこそやめたものの、かなり難しい顔になっている。

覚悟の上だったとはいえ、な。

「待った。あたしには聞こえるみたいだ…」

「フリー・ファイターズを通してあたしの聴覚を共有するよ」  
そこにF・Fがこう言ってくれたのは、

渡りに船ではあったが戸惑いが先に立つ。

だがそれを気にしている時間がないのはわかりきってる。

グレースがやはり最も早く聞き返した。

「…すみません。もう一度」

「シャバ僧だな、と言ったんだ…銃に対するその反応でわかる。

威嚇射撃に飛び上がってキレ散らかすんだからな。

スタンド使いで、戦い慣れてはいるが…

ヤクザじゃあない。カタギだ」

「返事になっていないわ…ッ」

煙に巻かれているヒマはない。

フォンテーヌが皇帝エンペラーを構えて突きつけると、

男は姿勢を改めて向き直ってきた。

「ジョルノの命を助けたいというのなら、俺たちも同じと言っておこう。

入ってくるといい…全面的に協力するよ」

黒一色だから、表情とかがまったくわからずやりづらい。

「信用できるかは未だ灰色だ：警官は、表に残るようだしよ。」

先に入ろうとした俺は、グレースにそつと手で制されてしまった。

さらにフォンテーヌの後ろに回ってから中に踏み込もうとすると、

銃らしき何かを持つ男に、それを足元に向けられた。

「待て！ オメーは入んな、入口でジツとしてろ」

「どうしてラビーツ？」

グレースのステッキについているラビリンにちとビビったようだが、

そいつは淀みなく理路整然と答えてきた。

…その。迷信だけだよ。

「オメーを入れたら『3人』入るだろ。」

そこにもう一人来る予定なら『4人』になっちまう。

『4』は最悪だ。最悪の数なんだ」

「…げ、ゲン担ぎペエゝツ？」

脱力するペギタンに、その近くに座っていた女がため息で続ける。

「こゝも真つ黒だと歳格好も定かじゃあないな。」

「スットロイ事言わないで。」

入ってきたらその時点でオシマイじゃない、どつちみち」

「二度手間、三度手間の方がよっぽど最悪だろうがッ

入ってきてくださいよ。こいつは無視していいです」

銃の男の向かいに座ってる、スーツ姿？の男に入室を促されたのでサツと入る。

言葉こそ丁寧だけど、なんか威圧感がな…

と、けっこう聞き捨てならない情報が転がされてきたぞ、今。

グレースが直球で突っ込む。

「ジヨルノさんが死ぬ条件が、ここに…あるの？」

「ふたつある」

勿体ぶる気はないようだ。おかつぱの男が即答する。

「ひとつは、この『世界』の食べ物を口にする事。」

この条件は、君たちも適用範囲だ！

水一滴、氷一粒たりとも喉の奥に入れるなよ。

当然、ここの外でもダメだ」

背筋が凍るようなことを言われた。

俺もグレースもフォンテーヌも、それぞれ飲み物を飲んじまった後だが？

グレースは、さして動揺するでもなくこの場で紅茶を出してみせた。

DEATH13由来のやつな。



「これは例外だよな? わたしのスタンドで出したやつ…

だってわたし死んでないもん。夢の外で」

「…『夢』のスタンドか。だから、こんなところに入って来られたのか…

それなら大丈夫だ。だが、たった今からやめておけ。

この『夢』が騙しにこないとも限らなくなっている」

グレースも異論があるはずないだろう。

出した紅茶を消滅させると、テーブルに並んでいる

ピザやパスタ、ケーキの類に少しおびえる視線を向けた。

そしておもむろに指パツチンすると、それら全てが消え失せた。

「あーッ! 何しやがんだ! イチゴケーキ残しといたのに!」

「スタンドが別の『夢』に通じるか確認したんでしよう?」

クチに押し込まれても抵抗できるように…

あんたみたいにお気楽じゃあないみたいですよ」

「はい。死にたくないのです。ごめんなさい」

ギヤアギヤア騒ぐ銃の男にペコリと詫びたグレースは、

しかし先程よりもさらに表情を引き締めて、おかつぱの男に向き直った。

もう、次に聞くことはわかる。フォンテーヌもだ。

わからないやつは誰もいないだろう。

「あなたたちは、『死んでいる』…の？」

「ああ、『死んでいる』。

この『夢』の中にしかいられない、幽霊ですらない残りカスだな。

ジヨルノの『思ひ出』にへばりついて、

やっと存在している残りカス…：そんなところだ」

…なんだよ、それは。

ここは『夢』であって『死後』の世界でもある？

とつさに俺は聞いた。

「あんた達に何が…」

ドバアン バキア！

大きな丸テーブルが真つ二つになった。

スーツ姿？の男の作業らしい。

音にビビッて振り向いたただけだから、よくわからん。

「どうでもいいことを聞いてるんじゃないぞ。

時間がないと言ったのはお前らだろうが、このクソボケ!!」

ひるんだ。あまりの態度の豹変に心臓が止まりそうだった。

あー、なんかわかった。さっきおかつぱがヤクザだのカタギだの言ってたわけが。こいつらヤクザか。俺みたいなハンパモノの非行少年じゃあない……

「なら聞くわ。」

それは…あなたが『死んでいる』ことは。

ジョルノさんがここに入ったらオシマイなことに関係あるのかしら?」

フォンテーヌがかばうように割って入った。

畜生、邪魔にしかなくてねえ。

見るんじやあなく観ること。聞くんじやあなく聴くこと。

承太郎もそう言っていた。

それが足りないなら、足りさせるまでだろ。

…聞くべきことがひとつ浮かぶ。ド直球だ。

「悪い、俺からも。」

さつきここに入ろうとして追い出されたガキ。

あいつが…: ジョルノ・ジョバァーナなのか?」

スーツ姿? の男が自分の席にドカツと座るのと同時に、

おかつぱの男が視線を俺たちに戻した…: そういう雰囲気な。

「その質問は、両方とも『S:i』<sup>はい</sup>だ。」

条件のふたつめが、そこにある」

全員がうなずき、沈黙で続きを促す。

「俺達は、ジョルノの古い仲間だ。」

今となつては全員、あいつの前を去ってしまったが…

ジョルノもそれを知っているし、認めてもいる。

だから顔を見せることはできない」

「……見たら、『死ぬ』…ペエ？」

おそるおそる聞いたペギタンに、男がうなずく。

「今ここで、あいつが見知った俺達の顔を見たのなら。」

ほぼ間違いなく、自分の『死』を自覚する。

そうなればおしまいだ…

そしてそれこそが、この『夢』の狙いなのだろうな」

「狙い……つまりビョーゲンズの狙いラビ？」

「というか、『夢』はジョルノに何やらせてるラビ？」

ラビリンも聞く。

状況証拠的に、これはビョーゲンズの仕業でしかないだろうよ。

ホワイトスネイクの可能性はゼロだ。

この世界で『天国』の素材になりそうな貴重な存在を、身元不明者のまま一般の病院に放り出しておく意味がない。

ましてや、このまま死んだら、知らない間に火葬されても仕方ないんだぞ？  
DISCでどうにかする？ 病院のソフトに入ってる不特定多数をか？

だったら、さらってしまおう方がよほど安全確実だ。

そもそも、佐久間さんの一件で調査したとき、不審な人物は他にいなかった。  
なら動機だ。ビョーゲンズはジョルノをどうしたい？

デミビョーゲンにするなら、とつくにしてるだろ。

「ビョーゲンズというのが何かは知らない。

だが、何をやらせているかはわかる。少しはな。

おそらく、ジョルノが子供の頃、世話になった誰かだ。

その誰かに、何か食べ物を持っていかせようとしている…

今までの調べで、そこまではわかってる」

「調べていうけど、どーやってラビ？」

顔を見られたら死なせちゃうなら、危なくて出歩けないラビーツ」

「ジョルノが知らない頃の姿を、うまく使えるやつがふたりいる。

パツと見て誰だか判別できないくらいに違う姿をな……

外の警官と、もう一人だ。今、警官がジヨルノを追っている。

もう一人が交代で入り口を守っているはずだ」

「だからケーサツは真つ黒じゃなかったラビ？」

「ああ」

ラビリンの質問に、矢継ぎ早に答えてくれていたおかつぱ男。

だが：そんな簡単に真つ黒になったり、姿を変えたりとか出来るもんなのか？

カメレオンじゃあねえーんだからヨ。

思うだけな。これもおそらく、聞いた瞬間にキレられる。あのスーツ？に。

今は、そういうもんだ、と思って話を進めるしかなさそうだ。

「嫌なことを、ひとつ、聞きたいんだが」

「言ってみてくれ。必要なことなんだろう？」

おかつぱ頭も、それとなく牽制してきてるな：もちろん、重要だから聞くんだよ。

「だったらそのふたりで、ジヨルノ・ジヨバーナを拘束しておくことはできないのか？

ここに入ってくることも、世話になったとかいう誰かのところに行くのも、

それで両方とも防ぐことはできると思うんだが」

「目のつけどころはいい。それしかなくなれば俺たちもそうするだろう。

最後の悪あがきの時間稼ぎとして、になるがな」

「何も解決しない、どころか、その先に『死』しかなくなるっていうことか?」  
「俺たちは『夢』の中にしかいられない、と、さつき言っただろう?」

俺たちもまた『夢』の登場人物でしかなく、筋書きを超えた関与はできない。

加えて言うなら、俺たちの影響を強くするということは、つまり『死』の影響を強くすること!

俺たちがジョルノに働きかければかけるほど、どんどん『死』が近づくといいわけだ」  
「ようやく、話が見えてきたわ……」

フォンテーヌが、恐る恐るといった感じで、推測を口に出して確認し始めた。

「あなたたちには、時間稼ぎしか出来ることがないのね。」

時間稼ぎをしている間に、現実でジョルノさんの容体が好転……

目を覚ましてこの『夢』が消えるのを、ひたすら待っている。違うかしら」  
「正解、だ。そして風向きはすでに変わっている。」

『死』と『夢』の外側にいる君たちがここに来たのだからな」

つまりだ。現実世界のジョルノが回復すれば、

この『夢』は消え、何もかも問題なくなる。そういうことだな。

結果論で言えば慎重になりすぎた。

ジョルノにいきなりヒーリング・オアシスが最適解だったんだ。

そう考えた直後にその結論をぶちまけて捨てた。  
わかるかよ、そんなもの。

「グレース。そうと決まれば、ジョルノをチリ・ペッパーでさらって浄化するしかない。  
そのための準備はしてきていたはずだよな？」

「佐久間さんのザ・キュアーが通じてなかったのは、

きつとビョーゲンズに取りつかれてたからだペエ！

なら、浄化した直後にザ・キュアーを使えばどうにかなるはずだペエ！」

俺とペギタンとで、現実世界のスパークルと話せるグレースにそう持ち掛けたが、  
渋い顔で歯を食いしばっているようなグレースは、沈痛に答えた。

「たった今、確認したよ。ニャトランに……もう、それはできない。

ジョルノさんが集中治療室に運び込まれちゃってる、今さつき！

付きっ切りの延命処置が必要な段階に！今、入っちゃってる！」

「……くっ……っ、次だ。次の手は？」

奮い立たせるために言ったつもりなんだが。

なんだよ、次の手は？って。なんだよその疑問形。

なんか役に立つこと言ってみろよ、俺ッ

考えろ。考えるんだ。俺だけじゃあない、みんな考えている……



沈黙をいち早く破ったのはペギタンだった。

『夢』がビョーゲンズの仕業なら、つまり…ビョーゲンズはここにいるペエ」

「つ…ここで見つけて、倒せる、って言いたいよね。ペギタン？」

『夢』でのダメージを、現実にと与えられるわたしもここにいるね。

見つけ出しさえすれば、わたしたちなら戦えるよ」

この『夢』の舞台を動かしているのはジョルノじゃあなく、ビョーゲンズだというなら。

『夢』でのダメージを現実化できるDEATH13がここにあるなら。

確かに、手が届きさえすれば倒せる。

「問題は、どうやってヤツを引っ張り出すかだ。

ジョルノを死なせることで、ヤツは何をどうしようとしている？」

その思惑を外せば、ヤツは出てくるんじゃないのか？」

「少なくとも、デミビョーゲンにすることじゃあないペエ。

やるんなら、もうとつくの昔にやってるペエ。

だったら、狙いは…そうじゃあない、何かだペエ。

そのために、ジョルノさんを死なせようと…」

「妙な話だな」

俺たちの相談を、おかつぱの男が一声入れて止めさせた。  
全員の視線が、そちらに集中する。

「聞いている限り、ジョルノは間もなく死ぬんだな？」

とくに何もせずとも、放っておくだけで……

なのに、そのビョーゲンズとやらは、わざわざ『夢』にまで手を突っ込んで  
ジョルノに『死』の条件を満たさせようとしている……

そうでなければ手に入らない何かがあるのだとすれば」

「……ビョーゲンズも、追いつめられてるってことになるペエ？」

あとちよつとで、『死』の条件を満たさずジョルノさんが死んじゃうペエ」

そうだ。確かに変だった。変だと思うべきだった。

物理的に殺すんなら、それこそ楽々のはずだろうが。

それを『夢』の中まで入ってきて、まわりくどい『死』を強いるのなら。

ヤツの欲する何かは、そうしなければ手に入らないということ。

そこへさらに、F・Fも口を突っ込んできた。

「記憶DISCを『魂』と同じだとすればだがよおーーツ

『魂』が抜けても、肉体は延命処置し続けられれば死なねえってことはわかってる……」

唐突で脈絡ないようにも思えるが、こんなタイミングで無意味な雑談をするはずな

い。

これが核心だとF・Fは言いたくないはずじゃあないのか。

「あたしには、ジョルノの肉体を『空き家』にしようとしてるように見えるね。

ジョルノという家主を追い出して、ためーの家にしようとしているように」

「…の、乗っ取り、ラビ?」

おぞましいにも程がある推理だな。

浄化すれば元に戻ることは一応できるデミビョーゲンならまだしも。

魂を殺して追い出し、肉体を丸ごと乗っ取るつもり、だと?

全員、圧倒されて押し黙る中。グレースが、うわごとのようにぼやいた。

「……。わ、わたし……も?」

「グレース? どうかしたかしら?」

「わたしも、そうなったの? ……もしかしたら、そうなっていたの?」

…花寺の、謎の奇病か!

子供時代を台無しにしたっていう、例の奇病が『これ』だったっていうのか?

ドガッ

スーツ? 男が、自分の座ってた椅子を蹴り転がした。

ピクンとなったグレースは、一瞬だけそつちを向くと…自分の頬をパンパンと叩い

た。

話の脱線をこうも警告してくるあたり、やっぱりジヨルノの仲間、と言うべきかな。

おかつぱの男が、何事もなかったように話を戻す。

「ヤツの狙いがそれなら、間違いなくプランを変更するだろう。」

『空き家』が消えてなくなる直前ならな……

「ここまで時間が押していれば、ヤツの行先はすでに決まっている」

「ジヨルノさんのところに、直接行く。だよね」

「なら……後を追っている『警官』から、そろそろ連絡が来るはずだ」

「連絡？ デンワでもモツてるラビ？」

ドバアン！

トボケた口調でラビリンが聞いた直後、入り口から何かが高速で入ってきた。

入口のドアをブツ壊して入ってきたのは、警官だ。キモイ高速で後ずさりしてくる！

「な、何よこれッ どういう一発芸？」

あつけにとられたフォンテーヌをよそに、

警官のベルトにはさまった紙片を発見したおかつぱ男はそれを手に取る。

それから十秒も経たずに、警官は店内から去っていった。

やはりキモイ高速で。しかも来たときと全然変わらない動きだったのは気のせいか

?

「す…スタンドだペエ? よくわからないけど、手紙を持ってきたんだペエ?」

「そうだ。この連絡方法をとってきた時点で緊急のな…」

「どうやら、さっきの読みは正しいようだ」

「何が書いてあるラビ?」

紙片を開いた男は、すぐさま歩き出した。

『海岸線沿いのアイスクリーム屋』だ。

ジョルノはそこで、ヤクザの男と接触している…

もはや、ここを守る意味はないと見た!

全員で行く! ついてきてくれ…君たちがカギになるんだろ?

近くまで着いたら合図する。そこからは先行してもらおう

そしてレストランの外に出るなり、男はしゃがみ込み、地面に指をつける。

その背中に、銃の男、スーツ? 男、ロングスカート? の女…

それと、外で見張りをしていたらしい、バンダナ? の男が掴まると。

おかつぱ男の指先から、金具のようなものが現れ…

そこから地面を切り裂くようにして、

とんでもない速度で地面すれすれをカッ飛び始めた!

「どういう能力だよ？全然わからねえ！」

「気のせいじゃないや、地面にガスガスぶつかってないか？」

「どうやってノーダメージなんだ？」

「鳴滝くん、こつち！」

「ちよつ、急がないと見失うわよッ」

「メチャクチャな速さだペエーッ！」

「グレースに、かなりぞんざいに担ぎ上げられた俺は、

彼女の背中にガツクンガツクンとアゴをぶつける羽目になった。

「訓練済みだけだな。これも！さんざん！」

「代わってほしいヤツがいるなら、すぐにでも代わってやるよ！」